千葉東南部ニュータウン　12

——南二重堀遺跡——

1983

住宅・都市整備公団
財団法人　千葉県文化財センター

千葉東南部ニュータウン　12

——南二重堀遺跡——

1 9 8 3

住 宅 ・ 都 市 整 備 公 団
財団法人　千葉県文化財センター

1．航空写真

2．69号住居址出土水鳥形土製品

序　　文

千葉市の南部を流れる村田川流域には，その恵まれた自然環境等により先土器時代から歴史時代に至る数多くの遺跡が残されており，この地が東京湾沿いの古代文化の一中心であったことを物語っています。

近年首都圏の人口増加は著しく，それに対応して大規模な宅地造成事業が各地で実施されております。本県においても，住宅・都市整備公団（前日本住宅公団）がこの地域に約600ヘクタールに及ぶ千葉東南部地区土地区画整理事業を計画しました。

このため，千葉県教育委員会では昭和46年度に事業地内の埋蔵文化財の所在について分布調査を実施したところ多数の遺跡が確認され，これらの遺跡の取扱いについて，住宅・都市整備公団をはじめ関係諸機関と協議を重ねてまいりました。

その結果，できるだけ公園，緑地に取込んで現状保存をはかる一方，現状保存が困難な遺跡については，やむを得ず事前の発掘調査を十分におこない，記録保存の措置を講ずることで協議が整い，当初，昭和49年度には㈶千葉県都市公社文化財調査事務所が，次いで昭和50年度からは当センターが調査機関の指名を受け，調査を実施してきたところです。

昭和54・55年度に実施した南二重堀遺跡の調査では，先土器時代から古墳時代にかけての遺構および遺物が多数発見されました。特に，古墳時代前期の集落跡の存在と水鳥形土製品，鉄鋌の貴重な遺物の出土は，当地域における原始・古代文化を解明するうえで重要な資料を提供したと言えましょう。

このたび，整理作業も終了し「南二重堀遺跡」としてその調査結果を報告する運びとなりました。すでに千葉東南部ニュータウン関係の報告も本書で第12集となりましたが，学術的な資料としてはもとより，文化財の保護・普及のために広く一般の方々に活用されることを望んでやみません。

終りに，住宅・都市整備公団の御協力と千葉県教育庁文化課，千葉市教育委員会の御指導，助言にお礼を申し上げるとともに，極寒酷暑のなかで調査に協力された調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和58年3月

財団法人　千葉県文化財センター　　理事長　今井　正

例　　言

1．本書は，住宅・都市整備公団（前日本住宅公団）首都圏都市開発本部による千葉市東南部地区におけるニュータウン建設計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本書に所収された遺跡は，昭和54･55年度に調査された千葉市生実町2857－1番地・他に所在する南二重堀遺跡である。

3．発掘調査及び整理作業は，住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部の依頼により，千葉県教育庁文化課の要請に基づき，財団法人千葉県文化財センターが実施した。

発掘　調査部長　白石竹雄　　部長補佐　山田友治（54．4．1～55．3．31）
班長　栗本佳弘（54．4．1～55．3．31）　山田常雄
調査研究員　郷田良一　　伊藤智樹

整理　調査部長　白石竹雄　　部長補佐　中山吉秀（55．4．1～56．3．31）
班長　山田常雄
調査研究員　伊藤智樹

4．本書の編集は，調査部長白石竹雄，部長補佐天野努のもとに，古内茂，伊藤智樹がこれにあたった。

5．本書の執筆は別記のとおりである。

6．発掘調査から本書の刊行に至るまで，住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部，千葉県教育庁文化課の関係者各位をはじめとして，多くの方々から御指導・助言をいただいた。

7．本書に使用した図面の方位は座標北とした。

8．本書の第1図については，国土地理院発行の1：25,000地形図･蘇我（千葉15号－2）を使用した。

目　　次

序　文
例　言
第1章　序　　説……1
　第1節　遺跡の位置と環境……田形　孝一……1
　第2節　調査の概要……伊藤　智樹……4
第2章　発見された遺構・遺物……6
　第1節　先土器時代……古内　　茂……6
　第2節　縄文時代……伊藤　智樹……11
　第3節　古墳時代……古内・伊藤……52
　第4節　歴史時代……伊藤　智樹……147
第3章　古　　墳……167
　古墳の調査……伊藤・栗田……167
第4章　南二重堀遺跡に係わる問題について……220
　第1節　南二重堀遺跡出土の土師器について……古内　　茂……220
　第2節　古墳群の性格について……栗田　則久……229
　第3節　水鳥形土製品とその出土例について……伊藤　智樹……232
終章　結　　語……古内　　茂……239
英文解説……柳　　晃……240

挿 図 目 次

第 1 図　周辺地形図 …… 2
第 2 図　周辺現況図 …… 3
第 3 図　土層柱状図 …… 6
第 4 図　第1（左）・第2（右）ユニット石器分布図…… 7
第 5 図　第3（上）・第4（中）・第5（下）ユニット石器分布図 …… 8
第 6 図　第1（1，2）・第2（3～6）・第3（7～13）ユニット出土石器実測図 …… 9
第 7 図　第4（14～16）・第5（17～23）ユニット出土石器実測図……10
第 8 図　11号住居址実測図 ……12
第 9 図　13号住居址・同炉址実測図 ……14
第10図　18号住居址実測図 ……16
第11図　47号住居址実測図 ……17
第12図　48号住居址実測図 ……18
第13図　70号住居址実測図 ……19
第14図　87号住居址・同炉址実測図 ……21
第15図　88号住居址・同炉址実測図 ……22
第16図　59号址・85号址・86号址実測図 ……24
第17図　81号址・82号址・84号址実測図 ……25
第18図　住居址出土土器実測図（1） ……27
第19図　住居址・土坑出土土器実測図（2） ……28
第20図　住居址出土土器実測図（3） ……29
第21図　縄文式土器拓影図（1） ……31
第22図　縄文式土器拓影図（2） ……32
第23図　縄文式土器拓影図（3） ……33
第24図　縄文式土器拓影図（4） ……34
第25図　縄文式土器拓影図（5） ……35
第26図　縄文式土器拓影図（6） ……36
第27図　縄文式土器拓影図（7） ……37
第28図　縄文式土器拓影図（8） ……38
第29図　縄文式土器拓影図（9） ……39
第30図　縄文式土器拓影図（10） ……40
第31図　縄文式土器拓影図（11） ……41

第32図　縄文式土器拓影図（12）……42
第33図　石器実測図（1）……45
第34図　石器実測図（2）……46
第35図　石器実測図（3）……47
第36図　石器実測図（4）……48
第37図　土製品実測図（1）……49
第38図　土製品実測図（2）……50
第39図　土製品・石製品実測図……51
第40図　1号住居址実測図……53
第41図　2号住居址実測図……54
第42図　4号住居址実測図……56
第43図　10号住居址実測図……58
第44図　12—A号住居址実測図……59
第45図　12—B号住居址実測図……61
第46図　15号住居址実測図……62
第47図　16号住居址実測図……64
第48図　19号住居址実測図……66
第49図　20号住居址実測図……68
第50図　22号住居址実測図……70
第51図　23号住居址実測図……72
第52図　24号住居址実測図……73
第53図　25号住居址実測図……76
第54図　26号住居址実測図……77
第55図　27号住居址実測図……78
第56図　28号住居址実測図……79
第57図　30号住居址実測図……81
第58図　31号住居址実測図……83
第59図　33号住居址実測図……84
第60図　35号住居址実測図……86
第61図　36号住居址実測図……87
第62図　37号住居址実測図……88
第63図　39号住居址実測図……90
第64図　42号住居址実測図……90

第65図　43号住居址実測図 ……91
第66図　44号住居址実測図 ……92
第67図　45（左）・46（右）号住居址実測図……95
第68図　49号住居址実測図 ……96
第69図　50号住居址実測図 ……98
第70図　51号住居址実測図 ……100
第71図　54号住居址実測図 ……101
第72図　55号住居址実測図 ……102
第73図　58号住居址実測図 ……103
第74図　60号住居址実測図 ……105
第75図　61号住居址実測図 ……107
第76図　62号住居址実測図 ……108
第77図　63号住居址実測図 ……109
第78図　64号住居址実測図 ……111
第79図　65号住居址実測図 ……112
第80図　66号住居址実測図 ……114
第81図　67号住居址実測図 ……115
第82図　68号住居址実測図 ……115
第83図　69号住居址実測図 ……117
第84図　71号住居址実測図 ……119
第85図　83号住居址実測図 ……119
第86図　住居址出土土器実測図（1） ……121
第87図　住居址出土土器実測図（2） ……122
第88図　住居址出土土器実測図（3） ……123
第89図　住居址出土土器実測図（4） ……124
第90図　住居址出土土器実測図（5） ……125
第91図　住居址出土土器実測図（6） ……126
第92図　住居址出土土器実測図（7） ……127
第93図　住居址出土土器実測図（8） ……128
第94図　住居址出土土器実測図（9） ……129
第95図　住居址出土土器実測図（10） ……130
第96図　住居址出土土器実測図（11） ……131
第97図　住居址出土土器実測図（12） ……132

第98図　住居址出土土器実測図（13）……133
第99図　住居址出土土器実測図（14）……134
第100図　住居址出土土器実測図（15）……135
第101図　住居址出土土器実測図（16）……136
第102図　住居址出土土器実測図（17）……137
第103図　住居址出土土器実測図（18）……138
第104図　住居址出土土器実測図（19）……139
第105図　住居址出土土器実測図（20）……140
第106図　住居址出土土器実測図（21）……141
第107図　住居址出土遺物実測図……142
第108図　出土土器拓影図……143
第109図　72（上）・73（中）・74（下）号址実測図……145
第110図　72・73・74号址出土遺物実測図……146
第111図　21号住居址実測図……148
第112図　21号住居址出土土器実測図……149
第113図　3号址実測図……150
第114図　17号址実測図……151
第115図　29号址実測図……152
第116図　32号址実測図……153
第117図　34号址実測図……154
第118図　38号址実測図……156
第119図　40号址実測図……157
第120図　41号址実測図……159
第121図　57号址実測図……160
第122図　76号址実測図……161
第123図　38・40・41号址出土遺物実測図……162
第124図　77（上）・89（下）号址実測図……163
第125図　52・53（A）・53（B）号址実測図……164
第126図　5・6・7・56・75号址実測図……166
第127図　1号墳墳丘実測図……168
第128図　1・2号墳墳丘断面図……169
第129図　1号墳周溝実測図……171
第130図　1号墳第1主体部実測図……172

第131図　1号墳第2主体部実測図 ……174
第132図　1号墳第3主体部実測図 ……177
第133図　1号墳主体部出土遺物実測図（1） ……179
第134図　1号墳主体部出土遺物実測図（2） ……180
第135図　2号墳墳丘・周溝実測図 ……182
第136図　2号墳第1主体部実測図 ……183
第137図　2号墳第1主体部遺物出土状況図 ……184
第138図　2号墳第2主体部実測図 ……186
第139図　2号墳第1主体部出土遺物実測図 ……188
第140図　3号墳周溝実測図 ……189
第141図　3号墳第1主体部実測図 ……191
第142図　3号墳第1主体部遺物出土状況図 ……192
第143図　3号墳第1主体部前周溝遺物出土状況図 ……194
第144図　3号墳第1主体部・周溝出土遺物実測図 ……195
第145図　3号墳周溝出土須恵器実測図 ……197
第146図　4号墳周溝実測図 ……198
第147図　4号墳第1主体部実測図 ……200
第148図　4号墳第2主体部実測図 ……203
第149図　4号墳第3主体部実測図 ……205
第150図　4号墳主体部出土遺物実測図（1） ……206
第151図　4号墳主体部出土遺物実測図（2） ……207
第152図　5号墳周溝実測図 ……208
第153図　6号墳周溝実測図 ……210
第154図　7号墳周溝実測図 ……211
第155図　7号墳第1主体部実測図 ……213
第156図　7号墳第1主体部遺物出土状況図 ……214
第157図　7号墳第1主体部出土遺物実測図 ……215
第158図　8号墳周溝実測図 ……217
第159図　墳丘出土遺物実測図（1） ……218
第160図　墳丘出土遺物実測図（2） ……219
第161図　土師器変遷図 ……227
第162図　集落変遷図 ……228

図　版　目　次

巻頭図版１　航空写真

巻頭図版２　69号住居址出土水鳥形土製品

図版１　航空写真

図版２　航空写真

図版３　航空写真

図版４　１．遺跡近景

２．遺跡近景

３．遺跡近景

図版５　１．第２ユニット石器出土状況

２．13号住居址全景

３．17号址・18号住居址全景

図版６　１．47号住居址全景

２．48号住居址全景

３．70号住居址全景

図版７　１．87号住居址全景

２．88号住居址全景

３．87号住居址埋設土器出土状況（左）

４．88号住居址埋設土器出土状況（右）

図版８　１．59号址全景

２．81号址全景

３．81号址遺物出土状況

図版９　１．82号址・84号址（左）全景

２．86号址全景

３．86号址土層断面

図版10　１．１号住居址全景

２．２号住居址全景

３．４号住居址全景

図版11　１．10号住居址・11号住居址（上）全景

２．12号住居址全景

３．12－Ａ号住居址全景

図版12　１．15号住居址遺物出土状況

２．16号住居址遺物出土状況

３．15号住居址遺物出土状況（左）

４．16号住居址遺物出土状況（右）

図版13　１．19号住居址全景

２．19号住居址遺物出土状況

３．20号住居址遺物出土状況

図版14　１．22号住居址・23号住居址（下）全景

２．22号住居址全景

３．22号住居址遺物出土状況（左）

４．23号住居址遺物出土状況（右）

図版15　１．24号住居址・25号住居址（上）全景

２．26号住居址全景

３．24号住居址鉄鋌出土状況

４．26号住居址遺物出土状況

図版16　１．27号住居址・29号址（外）全景

２．28号住居址全景

３．28号住居址遺物出土状況

図版17　１．30号住居址全景

２．31号住居址全景

３．33号住居址全景

図版18　１．35号住居址全景

２．37号住居址全景

３．35号住居址遺物出土状況（左）

４．37号住居址遺物出土状況（右）

図版19　１．39号住居址全景

２．43号住居址全景

3．44号住居址全景
図版20　1．45号住居址・46号住居址（上）全景
2．45号住居址遺物出土状況
3．49号住居址全景
図版21　1．50号住居址全景
2．50号住居址遺物出土状況
3．51号住居址全景
図版22　1．54号住居址全景
2．55号住居址全景
3．58号住居址全景
図版23　1．60号住居址全景
2．62号住居址全景
3．63号住居址全景
図版24　1．64号住居址全景
2．64号住居址遺物出土状況
3．65号住居址全景
図版25　1．66号住居址全景
2．66号住居址遺物出土状況
3．68号住居址全景
図版26　1．69号住居址全景
2．69号住居址遺物出土状況
3．69号住居址遺物出土状況
図版27　1．71号住居址全景
2．83号住居址全景
3．83号住居址遺物出土状況
図版28　1．21号住居址全景
2．72号址全景
3．74号址全景
図版29　1．38号址全景
2．40号址全景
3．41号址全景
図版30　1．1号墳墳丘断面（B～B′）
2．1号墳全景
3．1号墳第1主体部全景
図版31　1．1号墳第2主体部確認状況
2．1号墳第2主体部遺物出土状況
3．1号墳第2主体部全景
図版32　1．1号墳第3主体部遺物出土状況
2．1号墳第3主体部遺物出土状況
3．1号墳第3主体部全景
図版33　1．2号墳調査前全景
2．2号墳墳丘断面（B～B′）
3．2号墳周溝状況
図版34　1．2号墳第1主体部裏込め状況
2．2号墳第1主体部石棺全景
3．2号墳第1主体部土坑全景
図版35　1．3号墳第1主体部確認状況
2．3号墳第1主体部全景
3．3号墳第1主体部前周溝内遺物出土状況
図版36　1．4号墳周溝状況
2．4号墳第1主体部全景
3．4号墳第1主体部遺物出土状況
図版37　1．4号墳第2主体部全景（左）
2．4号墳第3主体部全景（右）
3．6号墳全景
4．6号墳墳丘断面
図版38　1．7号墳全景
2．7号墳第1主体部確認状況
3．7号墳周溝状況
図版39　1．7号墳第1主体部全景
2．7号墳第1主体部羨道部状況
3．8号墳全景
図版40　住居址・土坑出土遺物（13・18・24・69・87・88号住居址，81・82号址）

図版41　住居址出土土器（2・4・12—A号住居址）
図版42　住居址出土土器（15・16・19号住居址）
図版43　住居址出土土器（19号住居址）
図版44　住居址出土土器（20号住居址）
図版45　住居址出土土器（22・23・24・33号住居址）
図版46　住居址出土土器（26・28号住居址）
図版47　住居址出土土器（20・28・30・31号住居址）
図版48　住居址出土土器（33・35・36号住居址）
図版49　住居址出土土器（45・49号住居址）
図版50　住居址出土土器（37・44・45住居址）
図版51　住居址出土土器（50・51・60・62・64号住居址）
図版52　住居址出土土器（58・60・64・66・69・83号住居址）
図版53　古墳出土土器（2・3・4・6号墳）
図版54　1号墳第1主体部出土遺物(上)，第2主体部出土遺物（下）
図版55　1号墳第3主体部出土遺物
図版56　2号墳第1主体部出土遺物
図版57　3号墳第1主体部出土遺物
図版58　3号墳周溝内出土遺物(上)，4号墳第2・第3主体部出土遺物（下）
図版59　4号墳第1主体部出土遺物
図版60　4号墳第1主体部出土遺物(上)，7号墳第1主体部出土遺物（下）
図版61　7号墳第1主体部出土遺物
図版62　1号墳主体部出土直刀(左)，3号墳第1主体部出土直刀（右）
図版63　4号墳主体部出土直刀(左)，7号墳第1主体部出土直刀（右）

表　目　次

表1　鉄鋌の分析測定表……75
表2　鳥形製品出土遺跡一覧表……234
表3　南二重堀遺跡検出遺構一覧表……236

付図　南二重堀遺跡全測図

第1章　序　　説

第1節　遺跡の位置と環境

南二重堀遺跡は千葉市生実町2857－1番地・他に所在する。

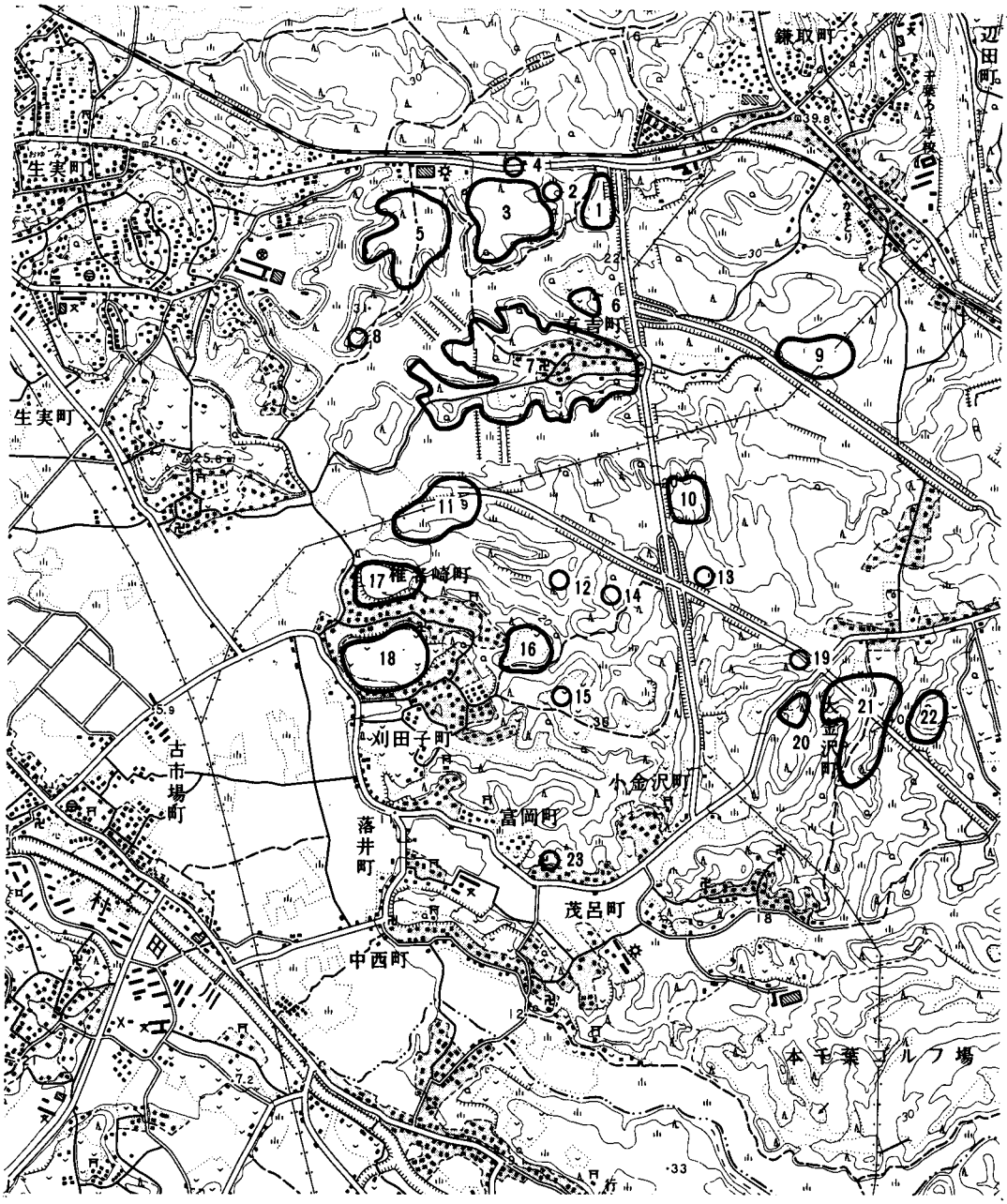
千葉市と市原市との境界を東京湾へと流れ込む村田川は，標高30m前後の洪積台地であるいわゆる下総台地に樹支状に入り組み，台地は複雑な地形を呈している。

遺跡はこの村田川によって開析された支谷の一つである通称赤塚支谷の奥部北側に張り出した舌状台地上に位置している。第2図で見るように，この舌状台地の西側には北東方向に向かって侵入する小支谷があり，東側には北西方向に向かって侵入する小支谷がある。この二つの小支谷に挟まれ，台地の基部が先端部に対してやや狭まる独立した舌状台地を形成している。台地はその基部から先端部にかけて狭長な平坦面を築き，平坦面から縁辺部にかけて緩やかに傾斜し，縁辺部からは比較的急傾斜で低地に臨んでいる。特に張り出した舌状台地の先端部ではそれが顕著である。台地の標高は，平坦面の基部で約36m，先端部で約35mとほぼ同じ高さで，台地の平坦面と低地との比高差は約21mを測る。遺跡はこの舌状台地の平坦面から縁辺部にかけてほぼ全面に占地している。

第1図で見るように村田川によって開析された下総台地上には多くの遺跡が存在している。先土器時代の遺跡はムコアラク遺跡，六通金山遺跡で比較的まとまって遺物を検出している他，本遺跡の南東約1kmに位置する馬ノ口遺跡，あるいはバクチ穴遺跡でも確認されている。縄文時代の遺跡は有吉貝塚，木戸作貝塚，六通貝塚，小金沢貝塚，大膳野貝塚等，後期を中心とした貝塚の他，ムコアラク遺跡，六通金山遺跡等多数存在している。古墳時代初頭の集落は東南部地区では本遺跡が初めての検出例である。しかし村田川流域の市原市側には該期の遺跡も比較的多く調査，確認されており，今後東南部地区でも調査の進捗に伴い遺跡数は増加するものと思われる。

古墳時代の遺跡は従来から後期の古墳群を中心にして数多く知られているが，前・中期の遺跡については，現在のところ東南部地区では，本遺跡の他に前述した馬ノ口遺跡で住居址が比較的まとまって確認されているのと，本遺跡と関連して注目される上赤塚1号墳が調査されているのみである。しかし周辺には本遺跡の西方約2kmに七廻塚古墳，大覚寺山古墳など該期に比定される古墳が調査，確認されており，調査の進捗に伴い遺跡数は増加するものと予想される。古墳時代後期の遺跡は，前述したように生浜古墳群・高沢古墳群・上赤塚古墳群・馬ノ口古墳群・椎名崎古墳群・小金沢古墳群・ムコアラク遺跡・六通金山遺跡等，後期古墳が多数存在している。

このうち本遺跡に最も近く位置し，従来兼塚古墳群と総称されてきた古墳群中のうち，東南部地区内で調査・確認されたものに生浜古墳群と高沢古墳群が存在する。生浜古墳群は本遺跡の西側に小支谷を挟んで6基の古墳が調査された。このうち主体部が確認された2基については7世紀末頃の構築であり，他の4基もほぼ同一時期のものであると推定されている。生浜古墳群と同

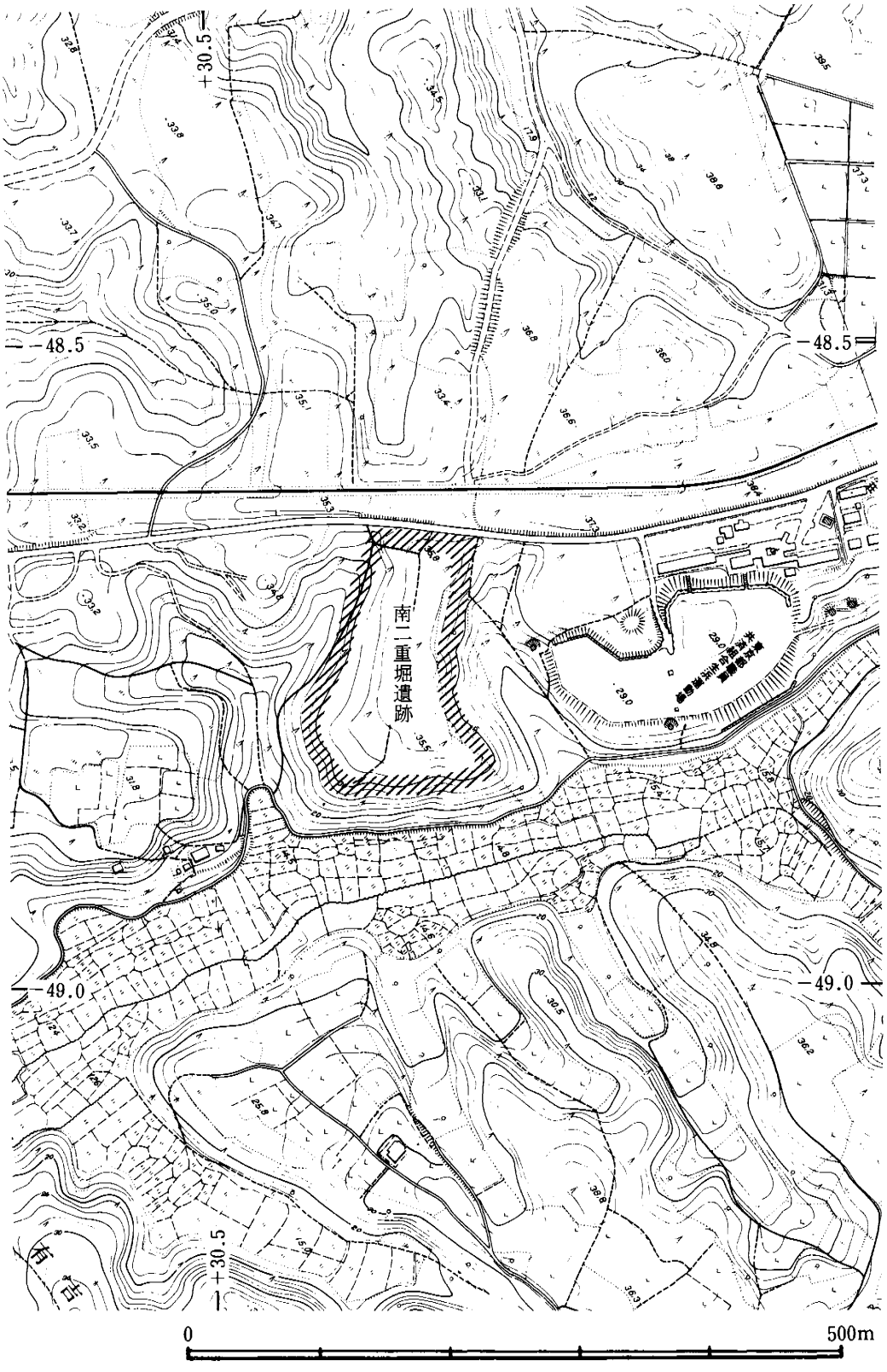


500m 0 500 1000 1500

1:25,000 **蘇　我**

1. 南二重堀遺跡　2. 生浜古墳群　3. 高沢遺跡　4. 高沢古墳群　5. 有吉遺跡　6. 有吉南遺跡　7. 有吉城址　8. 上赤塚1号墳　9. 馬ノ口遺跡　10. 木戸作遺跡　11. 椎名崎遺跡　12. 人形塚古墳　13. 椎名崎古墳群A支群　14. 椎名崎古墳群B支群　15. 椎名崎古墳群C支群　16. 今台遺跡　17. 伯父名台遺跡　18. 刈田子台遺跡　19. 小金沢古墳群　20. 御塚台遺跡　21. ムコアラク遺跡　22. 六通金山遺跡　23. 富岡古墳群

第1図　周辺地形図



第2図　周辺現況図

一台地上の北側に位置する高沢古墳群も数基の古墳が確認されており，本遺跡での調査例と共にその関連性が考えられる。椎名崎古墳群は，前方後円墳を含みA，B，Cの3支群によって構成されており，後期古墳としては比較的規模の大きいものとして知られている。また該期の集落址としては，本遺跡の西側で小支谷を挟んだ同一台地上に位置している高沢遺跡，更に小支谷を一つ挟んで位置する有吉遺跡，又赤塚支谷を挟んで本遺跡と対峙する有吉南遺跡で比較的まとまって検出している。これらの集落址と古墳群間にも有機的な関連が充分に考えられ注目されるところである。

歴史時代の遺跡は東南部地区の調査が進むにつれて有吉遺跡，椎名崎遺跡，高沢遺跡等の大規模な集落址が調査，確認されており，今後もその遺跡数は増加していくものと予想される。

第2節　調査の概要

南二重堀遺跡の発掘調査は，昭和54年10月25日～昭和55年6月28日まで8ケ月間にわたって実施された。調査対象は，総面積12,000㎡と古墳2基であった。

調査は，公共座標を基準として遺跡全体に40×40mの大グリッドを設定し，さらに20×20mのグリッドに調査区を区分して行なうことにした。そして，大グリッドを北西から1～16区と呼称した。検出された遺構については，調査の順序に従って001号址から遺構番号を付し，遺物については0001から4桁の遺物番号を付し記録することにした。調査前の現地踏査の結果濃密な遺構の分布が予想されたため，遺跡全面にわたって表土を除去し遺構の検出，調査を行なった。表土の除去は，遺跡の北側から南側へ順次進めていった。原則として可能なかぎり人力による排土を行ない，これと併行して特殊なバケットを装着したバックホーを導入して作業の能率化を図った。重機の導入については，遺構，遺物に細心の注意を払い，精通したオペレーターと調査補助員をこれに当たらせた。

表土の除去と併行してまず1号墳，2号墳の墳丘測量を実施し，測量終了後ただちに墳丘の排土，調査に移った。古墳の調査は，墳丘頂部を中心として南一北，東一西に2本の土層観察用のセクションベルトを設け，古墳を4区分して封土を平面的に除去しながら主体部を検出する方法を採用した。

住居址の調査は，遺構の中央を通るように十字のセクションベルトを設定して掘り下げを行ない，良好な土層状態にある方を断面図として記録した。遺物は，明らかに覆土中と考えられるものについては，上層，下層に区分して取り上げ，床面直上，若しくはそれに近い状態のもの，覆土中でも形のはっきりとわかるものについては，出土地点，出土レベルを記録した。土坑，方形周溝遺構等の調査もこれに準じた。

表土除去の進行に伴い，北側の3区を中心として住居址，土坑，方形周溝遺構が検出されていった。また，当初予想もしなかった3～5号墳が新たに検出された。これは，工事用道路建設のた

めの現場詰所，資材，重機置場として利用された際，墳丘を削平されたものであることが後日確認された。12月中には1号墳，2号墳の調査も周溝の確認と主体部の検出を終了したため，この時点で3号墳外3区の遺構の調査と1号墳主体部の調査及び南側9～16区の表土除去を併行して行なうことにした。南側9～16区の表土除去は1月下旬には終了し，遺跡の全容を把握できるようになった。この結果，10・11区に住居址が集中していることが判明した。また台地先端で新たに6～8号墳が検出されていった。6号墳については極くわずかに墳丘らしい高まりが認められたため，セクションベルトを設定し平面的に封土の除去，調査を実施した結果，周溝が検出され古墳であることが確認された。この間，1号墳の調査と併行して10・11区の住居址，方形周溝遺構の調査を行なっていった。2月下旬には，古墳は1・4・6・8号墳の調査をすべて終了し，2号墳，7号墳の主体部の調査に移った。また，古墳の調査と併行して行なっていた9～16区の遺構の調査もほぼ終了したため，1・2号墳の墳丘下より検出された住居址，土坑の調査に移った。これと併行して上層で確認された遺構の調査が最終段階に入ったため，遺跡西側傾斜面に6か所の2×4mの先土器調査のための小グリッドを設定し，試掘を行なった。古墳を含めた遺構の調査は，3月中旬には2号墳第1主体部の石棺内部の調査を残してほぼ終了したため，この時点で航空写真の撮影を実施した。この後，2号墳石棺内部の調査と新たに検出された土坑等の調査を行ない，上層でのすべての遺構の調査を3月中に終了した。

先土器時代の調査は，その後4月～6月にかけて実施した。一部はすでに2月上旬の時点で試掘を終えていたが，改めて遺跡全体に面積の10%の割合で2×4mのグリッドを設定し，グリッドごとに武蔵野ローム層上面まで試掘を行ない，遺物，遺構が検出された時点で拡張・掘り下げを行なう方法を採った。この結果，4地点の遺物集中箇所が検出された。遺物は各グリッドごとに出土位置，出土レベルを記録した。6月27日にはすべてのグリッドの調査を終り，翌28日に現場を撤収し調査の全日程を終了した。

第2章　発見された遺構・遺物

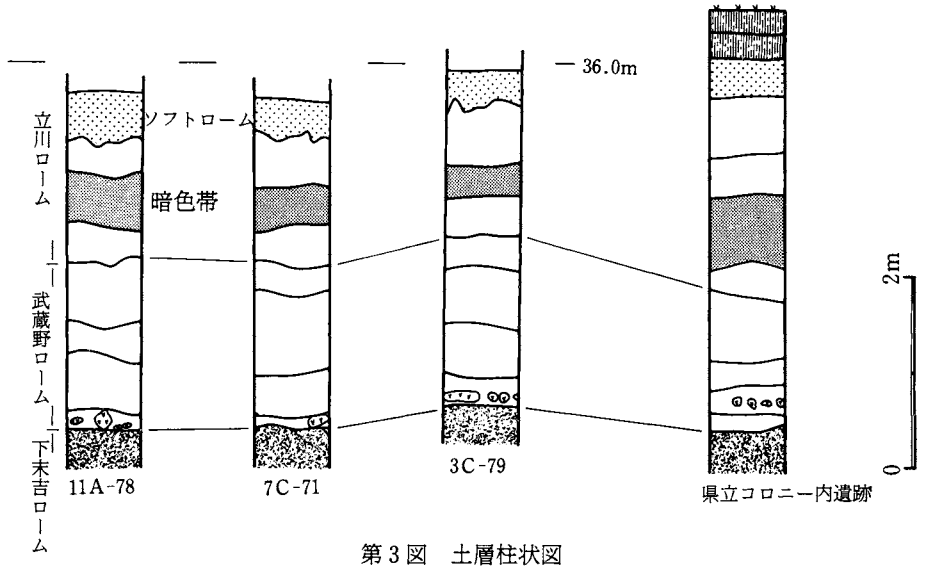
第1節　先土器時代

先土器時代の調査は，縄文時代以降のいわゆる上面遺構の調査が終了した後に実施したため，全面を確認するには至っていない。付図に図示したように，台地中央から南側の先端部に至るまで2×4mの試掘を行なった。その結果，第3区を中心に5か所で石器が確認された。いづれも小規模の集中で，成品は少ない。遺跡の全面積の割合から考えれば，試掘の占める面積も少なく，一部に未掘区も残っており，すべての先土器集中地点を網羅したとは言いがたいと思われる。しかし石器は，量的には少ないものの時代を特徴づけるものも含まれており，一応の成果をあげたものと見てよいであろう。次にこれらの遺物を，土層とともに説明を加えておく。

1．土　層（第3図）

土層については，本遺跡でもっとも層序の鮮明な3地点を図示した。標高は約35.5m前後を保ち，ソフトローム以下，ハードローム，暗色帯，褐色ロームへと移行し，武蔵野ロームに至る。遺物の出土したハードロームとソフトロームの関連では，台地の先端部にあたる3C—79グリッドを見てもわかるように，かなりしっかりしたハードロームが50～60cmの厚味を有して堆積するが，反面11A—78グリッドではその割合は逆転する。これは斜面にかかっていることも考慮しなければならないが，本遺跡の場合，2区から3区にかけての層序が最も良好なものであった。

また，最近注目されている火山ガラス含有層（姶良丹沢パミス）の有無については，鉱物分析の結果※，ハードローム層下部にその存在を確認した。試料採取地点は，3A—71グリッド，11C



第3図　土層柱状図

※　昭和56年パリノサーヴェイ株式会社による

—75グリッドの2地点であり，ともにほぼ同一層から検出されている。これは，調査時における肉眼識別では確認できなかったため，層序区分の基準とはなり得なかった。

2．出土遺物

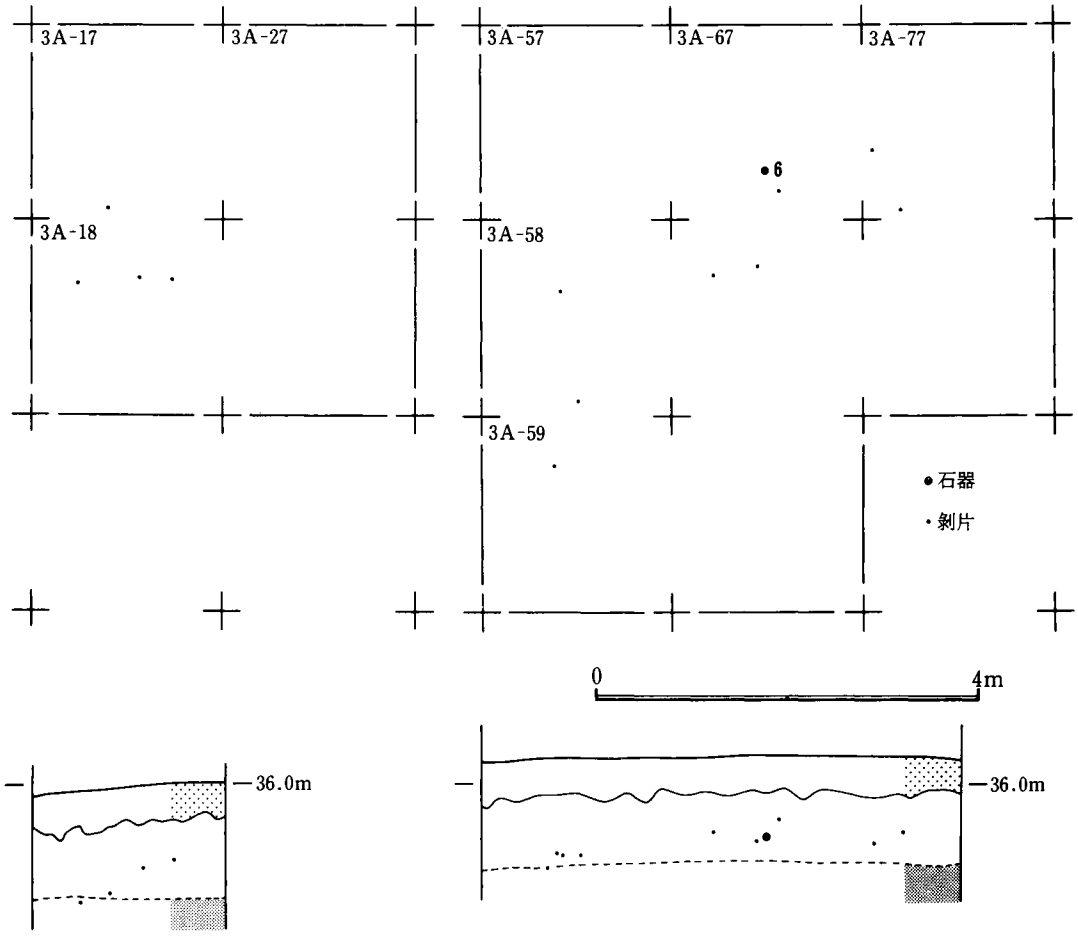
第1ユニット（第4図）（第6図1，2，4）

3A—17・18グリッドから剥片が4点出土した。出土層位には差があるものの，第2ユニットとの接合関係を考えれば，ハードローム下部が出土層位と考えてよいであろう。使用石材はすべてチャートであった。

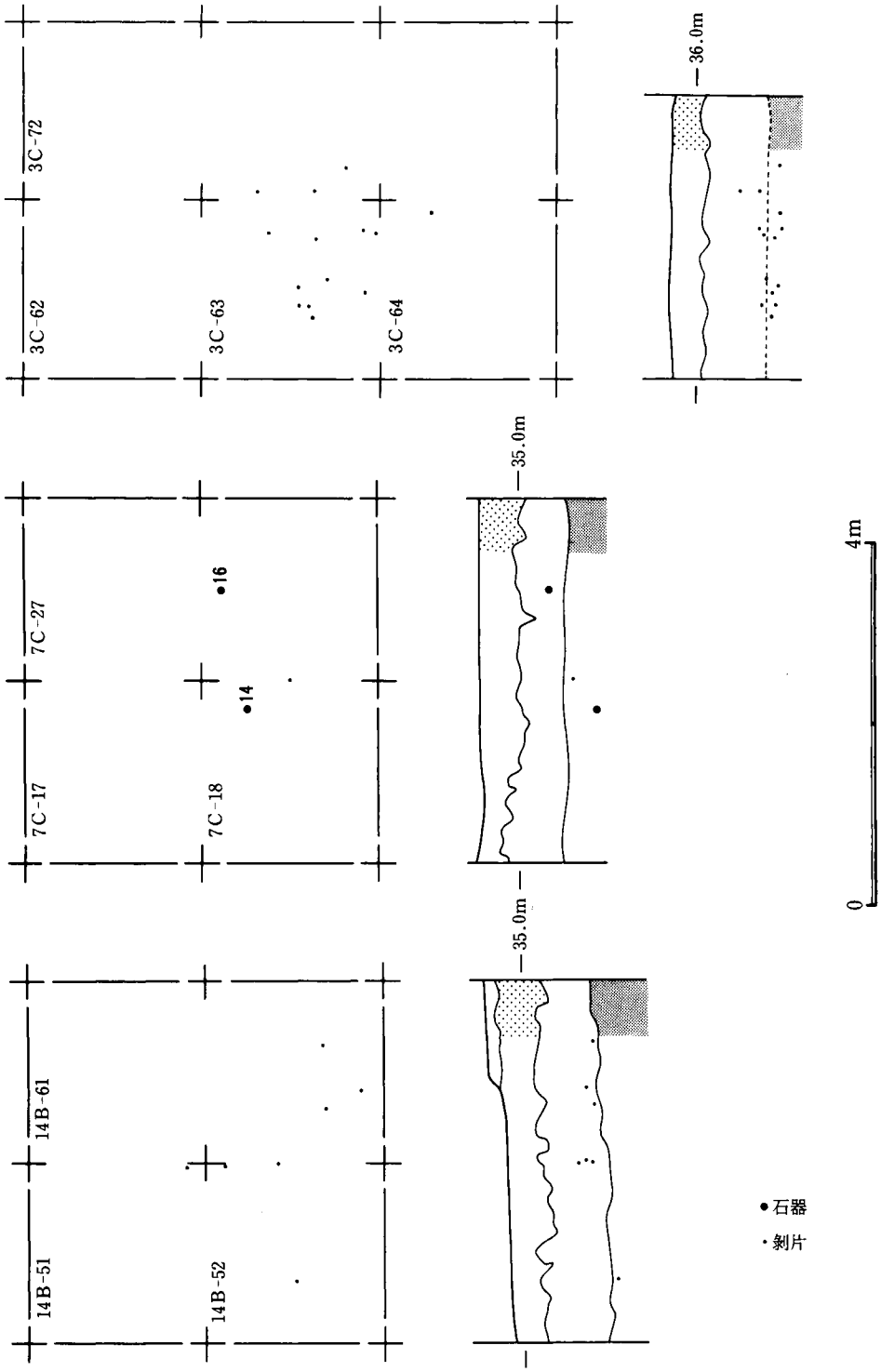
第2ユニット（第4図）（第6図3～6）

3A—57グリッドを中心に計10点が検出された。出土層位はハードローム中～下部となっている。石材は安山岩5点，チャート2点，頁岩2点，砂岩1点となる。大半が剥片であったが，石器と考えられるものも1点存在した。ユニットとしては小さいながらも広範に散布していた。

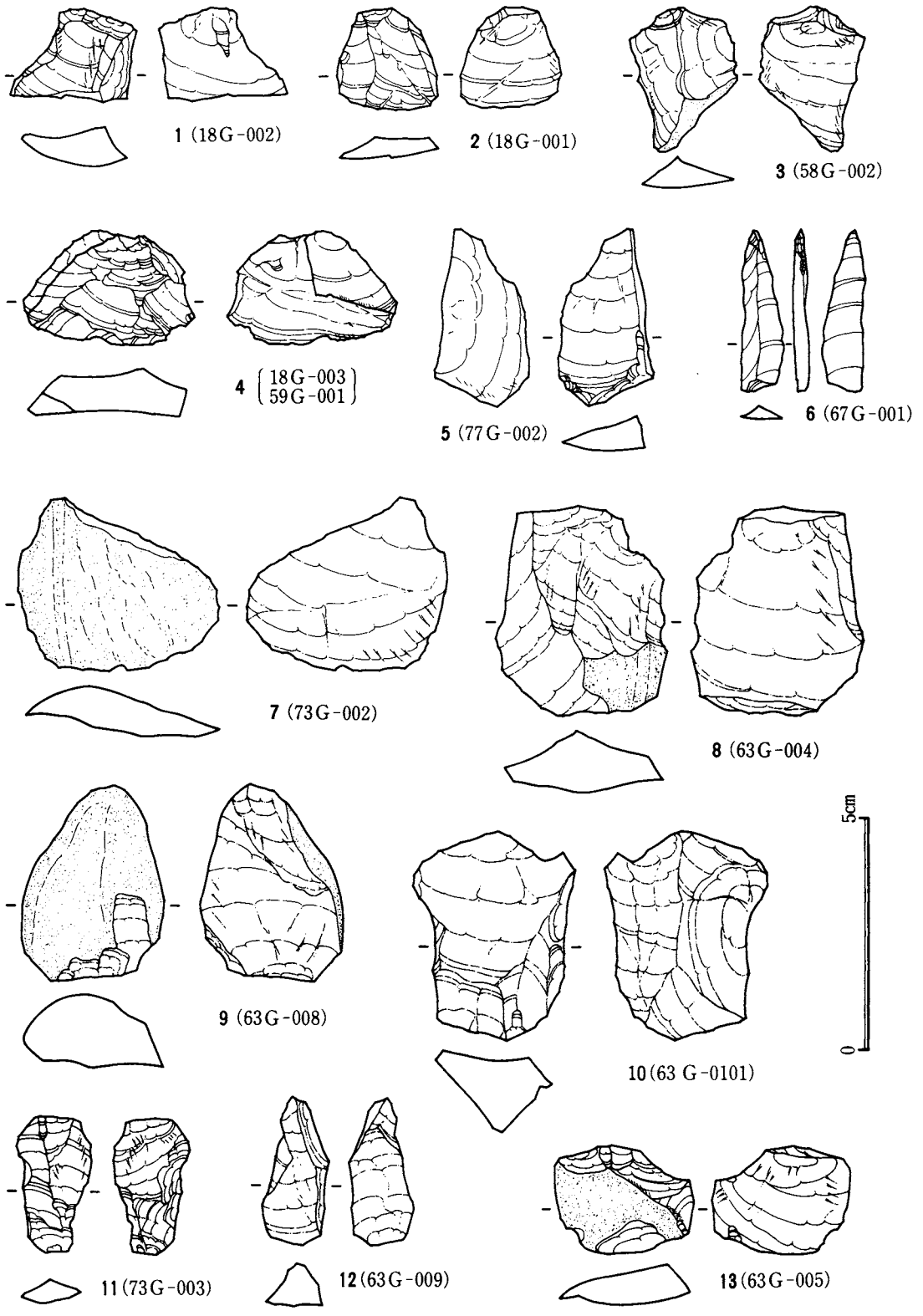
6は頁岩製のナイフ形石器となる。基部は欠損し，先端部の右側に刃潰し加工を施している。



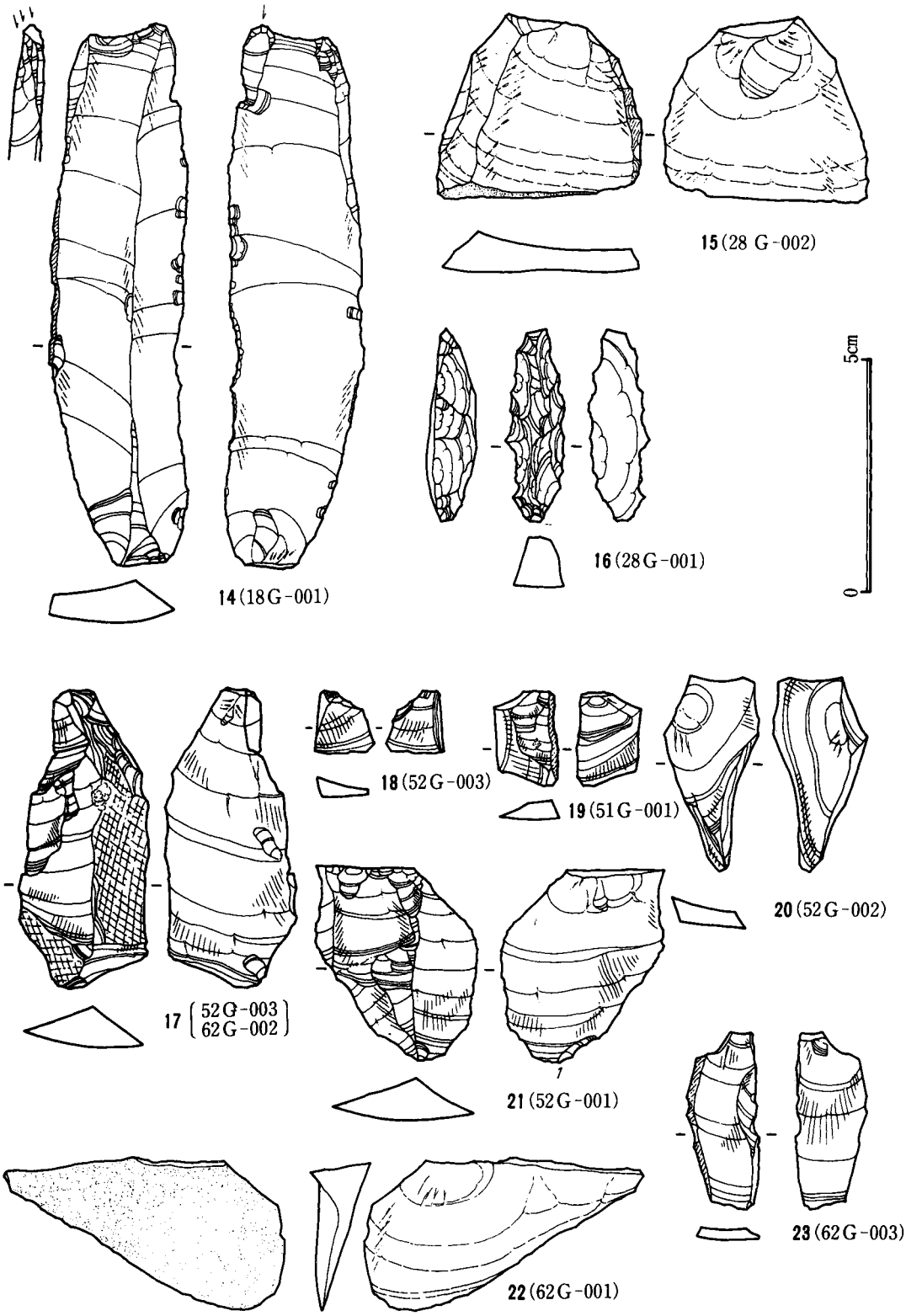
第4図　第1(左)・第2(右)ユニット石器分布図



第5図　第3(上)・第4(中)・第5(下)・ユニット石器分布図



第6図　第1(1，2)・第2(3～6)・第3(7～13) ユニット出土石器実測図



第7図　第4 (14～16)・第5 (17～23)ユニット出土石器実測図

第3ユニット（第5図）（第6図7～13）

3C－63グリッドを中心に，径約2mの範囲に14点が出土した。出土層位はハードローム下部から暗色帯上面にわたっており，層序から考えれば最も古い時期となろうが，第4ユニットでの彫器の出土層位を考えれば，それほど古い時期に属するとは思われない。本ユニットでは成品としての石器はなく，9，10のように残核と思われるものも若干ある。他はすべて剥片となり，14点の使用石材の内わけは，砂岩7点，安山岩4点，頁岩2点，チャート1点である。

第4ユニット（第5図）（第7図14～16）

本ユニットは，7C－18・27において3点が検出されただけである。出土層位は暗色帯にまで至っているが，石器から判断するとより新しい時期の所産と考えられる。

14は頁岩製の彫器で，先端部左右に4回以上ファシットが認められる。また，主剥離面にも小さな調整痕が認められるところから他の用途にも供されたらしい。素材には石刃状の縦長剥片を使い，剥離面も一定方向からきれいに剥離されている。15は粘板岩製で十分石器の素材となり得る剥片で，わずかに自然面を残す。打面は残存しており，横広に約70°の角度をもってきれいに剥離された剥片である。16は背高のある尖頭状石器で，石材は頁岩。おそらく横長の剥片を利用したものであろうが，整形する際に打面等は削除されている。また，この種の石器の特徴として，粗雑な加工が目立つが，16も例外ではない。周囲は大きな剥離によって形状を整えている。

第5ユニット（第5図）（第8図17～23）

合計7点の剥片で構成されているが，前述のユニットとは石材において大きな差が認められる。ここでの内わけは，黒曜石6点，安山岩1点となり，黒曜石の石質は良好である。17は接合したもので，十分に石器の素材となり得る大形剥片である。21は下端部にファシット状の剥離を有するが判然としない。22は唯一の安山岩による剥片であり，母岩はかなり大きかったものと思われる。23は石刃状の剥片であるが，何ら加工は認められない。

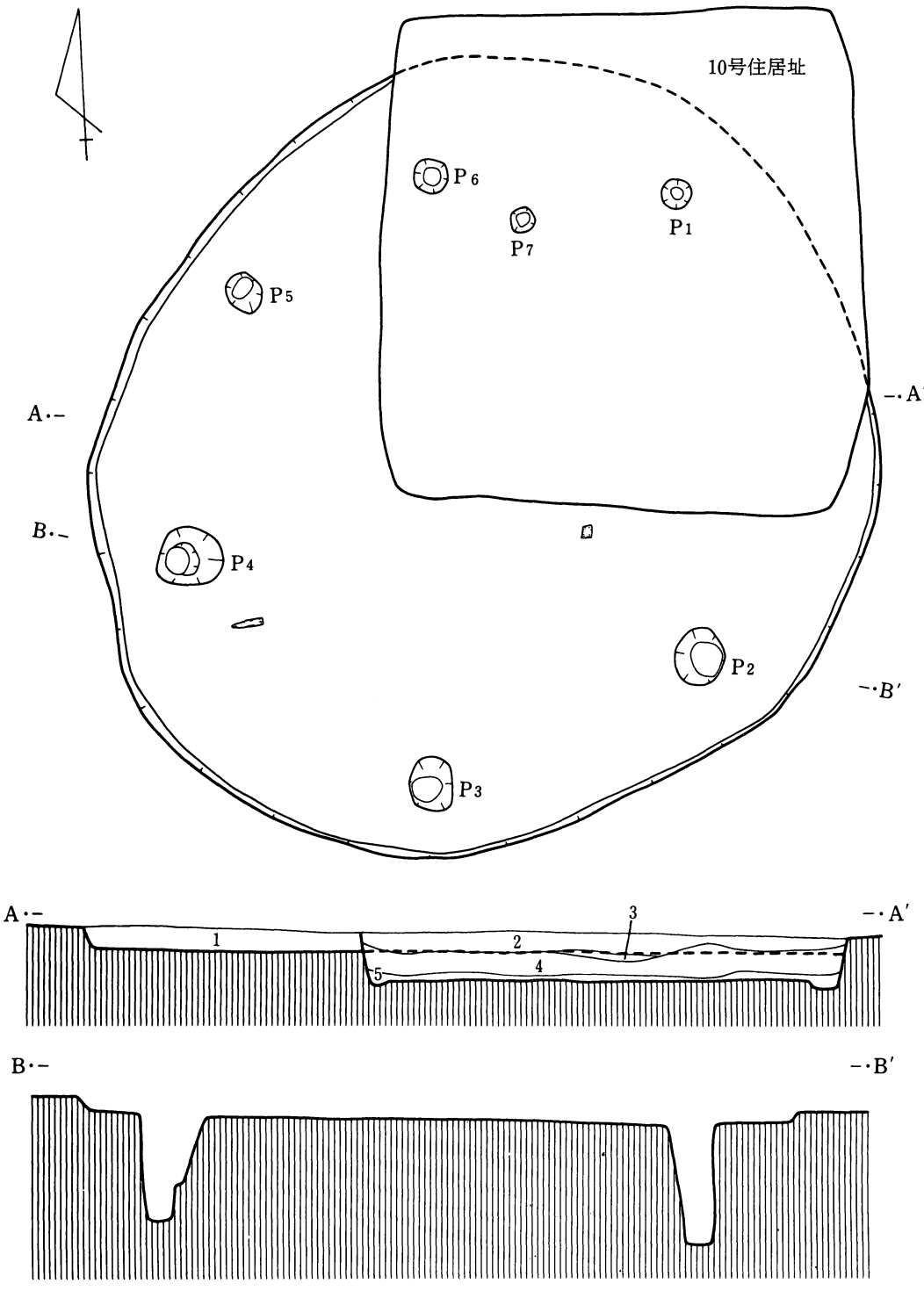
第2節　縄文時代

縄文時代の遺物は晩期を除いて各期の遺物が認められた。土器では撚糸文系の稲荷台式土器と中期の加曽利E式の土器が主体となる。石器は磨製，打製の石斧等が多数出土したが，中期に伴うものが多いようである。遺構は台地中央部に散漫に位置しており，住居址と土坑で構成されていた。

1．住居址

11号住居址（第8図）（第32図1・2・4）

10号住居址と重複しており，全体の約¼程を欠く。平面プランは，残存部分からほぼ円形を呈すものと考えられる。規模は6.9×7.0mを測る。床面はソフトローム層に構築され，全体に軟弱である。壁は北東側を欠いており，残りの部分も立ち上がりがわずかに確認された程度である。壁高は，7～21cmを測る。炉址は残存していなかった。ピットは7か所より検出された。このう



1. 褐色土　(焼土粒,炭化粒混入)
2. 黒褐色土(ローム粒混入)
3. 黒色土　(ローム粒混入)
4. 黒褐色土(多量のローム粒混入)
5. 褐色土　(炭化粒,焼土粒混入)

0　2m

第8図　11号住居址実測図

ち，P 1，P 6，P 7 は 10 号住居址の床面から検出されたが，本址のピットとの覆土の違いによって，本址に伴うものと判断した。それぞれ壁に沿って配されており，径 23～61 cm を測る。深さはP 2～P 5 が 79～91 cm を測る。覆土は 1 層のみで褐色土が主体を占める。

遺物は僅かである。住居のほぼ中央，10 号住居址の南壁に接して深鉢形土器破片が出土している。

遺物　本址から出土した遺物は，縄文式土器の破片が約30片と礫片が若干検出された。他に図示はできなかったものの土師器の大形壺の破片が若干出土した。縄文式土器は中期の阿玉台式から加曽利E式期の破片が多かったため，住居址の時期もおそらくこの頃となろう。

第 32 図 1・2・4 の 3 点を採拓したが，いずれも加曽利E II式に比定されるものである。口縁部片には簡略化した渦巻文が認められ，胴部には沈線を施す。縄文は不鮮明であるが，3 片ともＬＲとなろう。

13 号住居址（第 9 図）（第 18 図 1・2）（第 36 図 65）

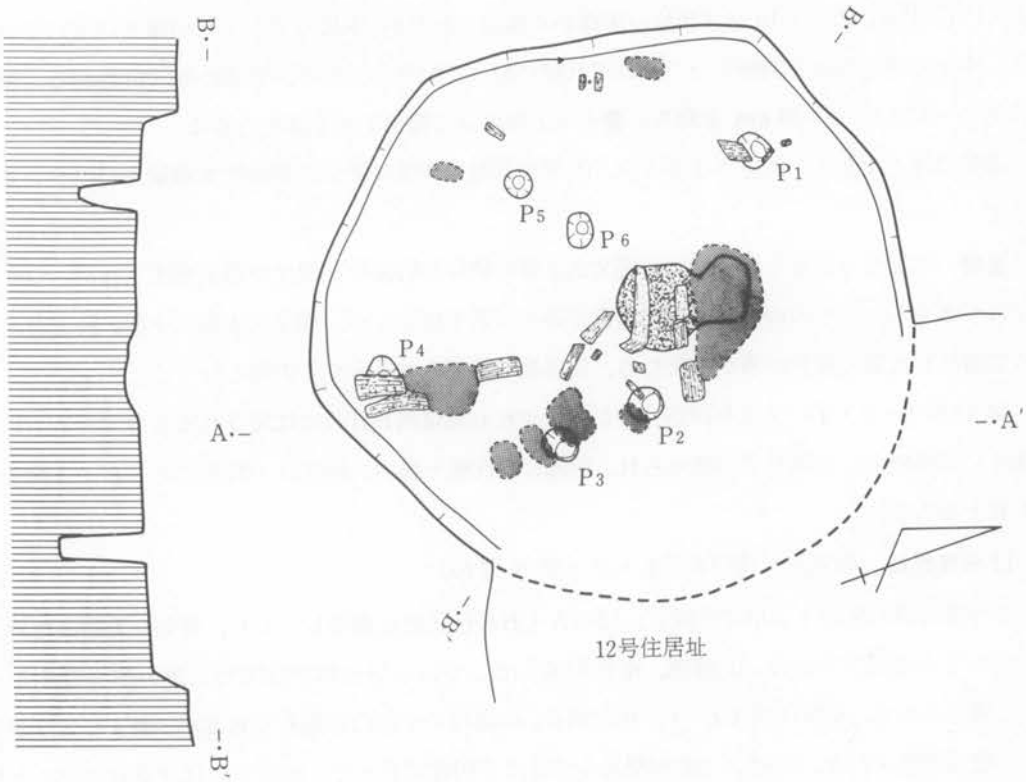
4 号墳周溝の南約 4.5 mに位置し，12—A・B号住居址と重複しており，東側を重複のため欠いている。平面プランは，北西側，南側が張り出しているが全体では円形に近い形を呈するものと考えられる。規模は径 4.6×4.7 mを測る。床面はやや凹凸が認められるが，堅くしまりがある。壁は東壁を欠き，北壁の一部が攪乱を受けて不明確であった。床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は 26～28 cm を測る。炉はほぼ中央に位置する。平面形は歪んだ「双円形」を呈し，長径 110 cm，短径は南側で 68 cm，北側で 56 cm を測る。掘り込みは 2 段になっており，深さは 10～22 cm を測る。南側の部分には土器片および石が円形に埋設されており，一種の埋甕炉の形態をとっている。ピットは 6 か所より検出された。径 23～32 cm，深さ 25～67 cm を測る。位置，規模ともに一定していないが，柱穴として考えたい。覆土は 4 層に区分された。暗褐色土，褐色土が主体を占めており，流れ込みによる堆積状態を示している。

遺物の出土量は少なかった。炉址内及び西壁寄りの床面上から出土している。いずれも深鉢形土器である。

遺物　本址から出土した遺物は土器と石器で，土器については 2 個体が図示できた。他に約 30 片ほどの縄文式土器が出土しており，時期的には図示した一括土器と同様の加曽利E II式が多い。

1 はかなり大形品となろうが胴部以下を欠く。炉址に埋設されていたため器面は脆くなっている。文様は波状口縁の直下に渦巻文が付され，胴部の太い沈線間には磨消が認められる。渦巻文自体はだいぶ簡略化されたものである。縄文はＬＲ。2 も 1 と同様な文様構成をもつ。渦巻文は 5 か所に配置されている。磨消の間隔は狭くなり，計 17 帯の縄文帯が縦方向に配置される。縄文はＲＬ。色調は淡褐色ないし暗褐色を呈す。

石器は 65 の石鏃 1 点を図示しただけにとどまった。先端と左脚部を欠損するが，大形石鏃であったろう。他にも石皿の小破片や礫片の出土が認められた。



第9図 13号住居址・同炉址実測図

18号住居址（第18図3）（第36図66）

本址は1号墳の南側に位置する。16号住居址，17号址と重複関係にある。新旧関係は，遺構確認時の精査および土層断面の観察により，本址が他の遺構より古いことが判明した。平面プランは，不整ではあるがほぼ円形を呈する。規模は6.9×7.2ｍを測る。床面は炉周辺が堅く，その他は軟質である。全体に凹凸が認められた。壁は，16号住居址と重複する北東側部分が欠失している。壁高は西壁で28 cm，東壁で14 cmを測る。壁溝が検出されている。東壁側でははっきりとした溝状になっておらず，径10 cm前後の小ピットや長さ5～7 cm程の溝状の掘り方が壁に沿って連続している。炉址は中央付近で2か所検出されている。西側の炉は楕円形を呈し，径 107×123 cmを測る。床面からすり鉢状に大きく掘り込まれており，深さ28 cmを測る。焼土が10 cm前後堆積しており，底面は良く焼けた痕が残っている。東側の炉は西側に比べ小形である。ほぼ円形を呈し，径 75 cm を測る。皿状に掘り込まれており，深さ 10 cm を測る。炭化粒，焼土が全体に堆積していたが，底面には火を受けた痕跡があまり認められていない。あるいは西側の炉の「灰棄場」として利用されたのかもしれない。ピットは壁寄りに10か所より検出された。それぞれ壁に沿って掘り込まれており，柱穴と考えて良いだろう。径24～37 cmを測る。深さは，P3，P5，P9が32～36 cmを測りその他は60～90 cmを測る。覆土は4層に区分された。褐色土が主体を占めており，全体に炭化粒，焼土粒を多量に含んでいた。

出土遺物は覆土中で多く，床面上で出土した遺物は，土器4点と石斧の欠損品1点と少ない。この他，炉の周辺を中心として炭化材が検出されているが，本址が廃棄された原因を火災によるものと考えるにはやや難があるようである。

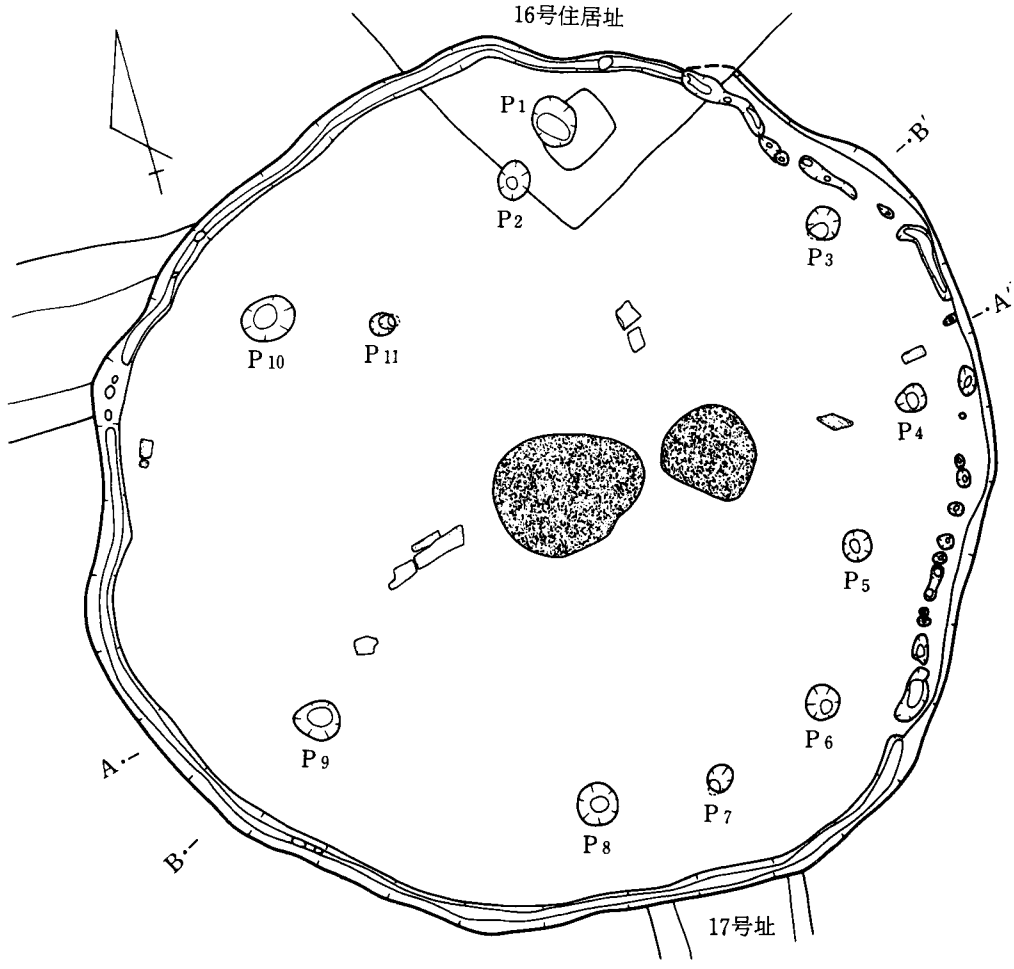
遺物　本址は縄文中期の住居址であり，100片余の土器片と石鏃，石皿，磨石，礫等の小破片も若干出土している。

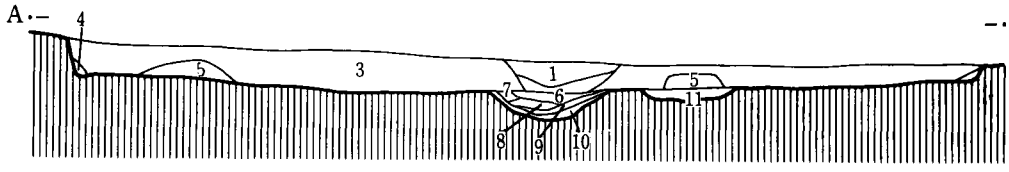
3は図示できた唯一の土器で，浅鉢となろう。口縁部は内湾し，その直下に太い沈線が巡る。口縁が約¼遺存しているにすぎないが，内外面ともによく研磨され焼成も良好である。器面は褐色，内面は黒色となる。

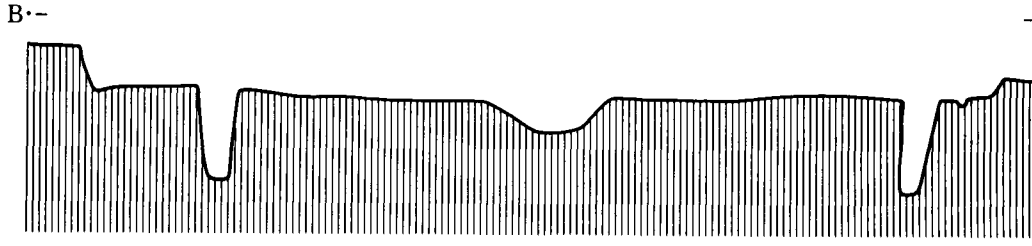
66は石鏃で，石材には黒曜石を使用している。先端の一部は欠損するものの周囲は入念に調整している。

47号住居址（第11図）（第18図4～6）

本址は，1号墳から北西約5ｍ，12号住居址から南約3ｍの距離に位置する。平面プランは長方形を呈する。規模は2.9×3.8ｍを測り，他の住居址よりやや小形である。長軸方位はN－7°－Eを指す。床面は，ソフトローム面で平坦で硬さはやや軟質である。壁は床面よりほぼ垂直に立ち上がり，遺存は良好であった。壁高は北壁で49 cm，南壁で44 cmを測る。壁溝，炉址ともに検出されなかった。ピットは4か所より検出された。P1，P2は住居中央で長軸線上に位置し，柱穴とみて間違いないであろう。径32～38 cm，深さ61～62 cmを測る。P3は径28



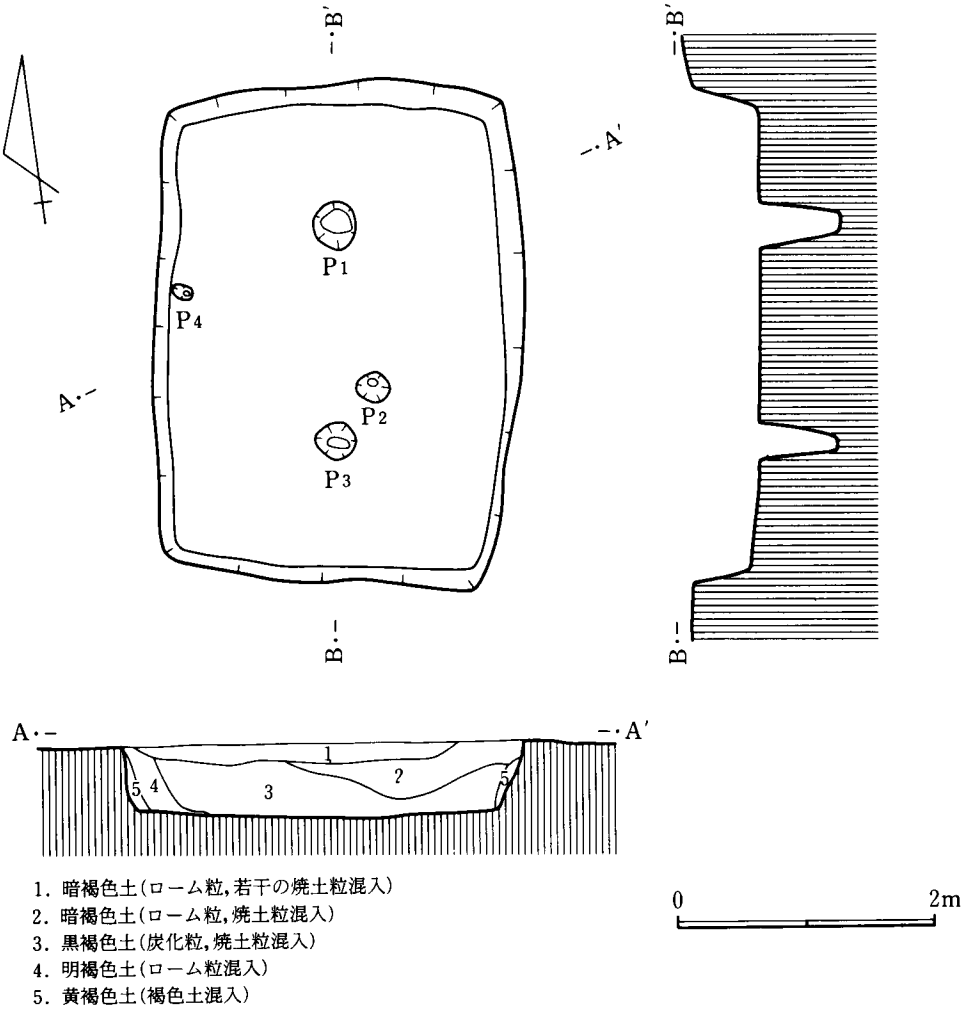




1. 黒褐色土(ローム粒,炭化粒混入)
2. 褐色土　(ローム粒混入)
3. 褐色土　(焼土粒,炭化粒混入)
4. 黄褐色土(ロームブロック混入)
5. 褐色土　(多量の炭化粒混入)
6. 黒褐色土(焼土粒,炭化粒混入)
7. 黄褐色土(焼土混入)
8. 黒褐色土(炭化粒混入)
9. 焼土
10. 被熱ロームブロック
11. 黄褐色土(炭化粒混入)

0　2m

第10図　18号住居址実測図



第11図　47号住居址実測図

cm，深さ 19 cm，P 4 は径 18 cm，深さ 43 cm を測る。いずれも規模および位置がP 1，P 2 に比べ一定性を欠く点で，柱穴と考えるには疑問の残るところである。覆土は 5 層に区分された。暗褐色土，黒褐色土が主体を占め，流れ込みによる堆積状態を示している。

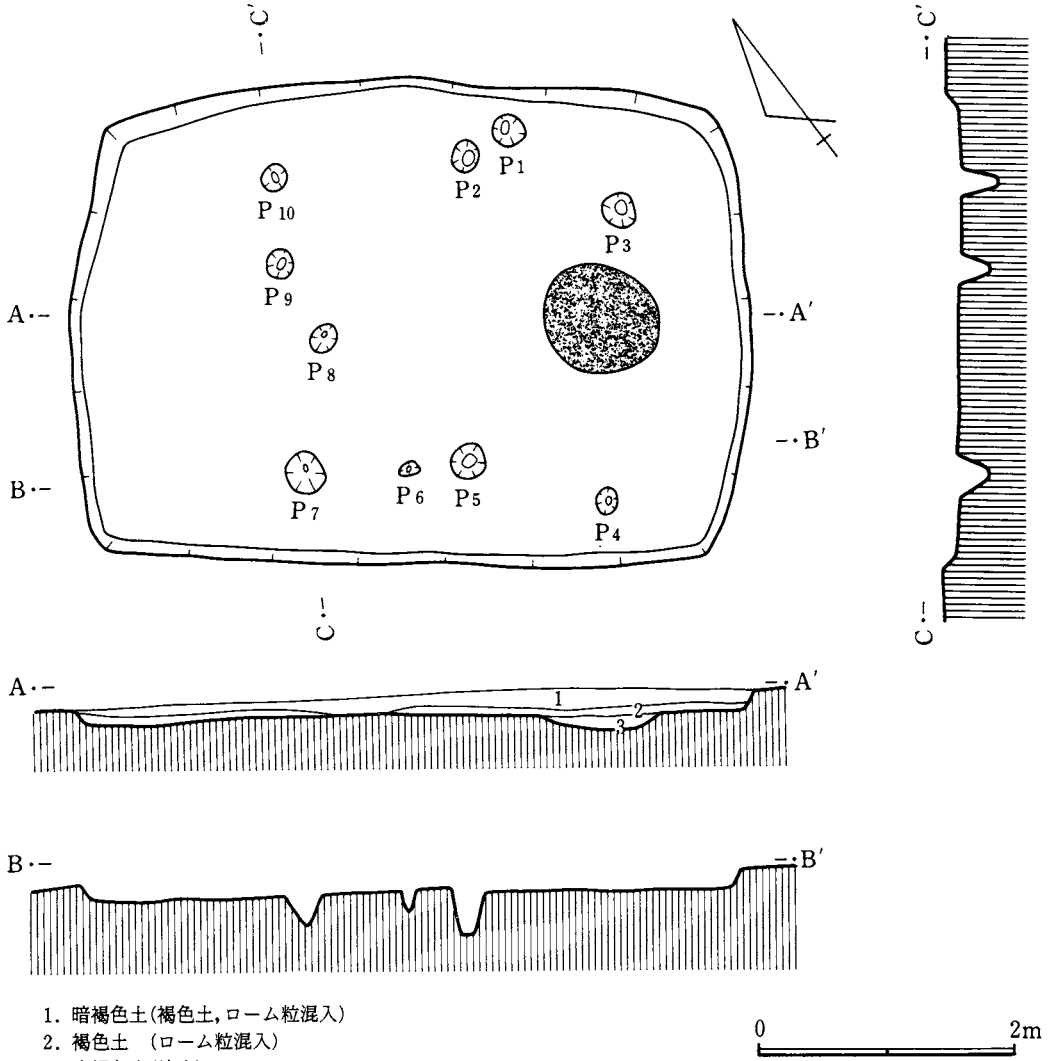
遺物はほとんどが覆土 2 層から出土している。貝類，石，土器片が混在しており，投棄されたような状況である。

遺物　本址の遺物は，土師器も若干混入するもののほとんど縄文式土器となる。その数は 200 片ほどとなり，その主なものを図示した。

4 ～ 6 は縄文時代中期，加曽利E式期となろう。特に 4 は大形片で，口縁部に粘土紐を巡らしている。器面には文様がなく，ヘラ状工具で簡単な整形を施す。色調は暗褐色，胎土には砂粒を多く混入する。

48号住居址（第12図）

本址は4号墳周溝の南西側に位置する。周溝との距離は約2mである。平面プランは長方形を呈するが，北および北西壁がやや歪んでいる。規模は3.8×5.3mを測る。主軸方位はN—48°—Wを指す。床面は全体に軟らかで，数か所に攪乱による浅い窪みが認められる。壁は，確認面からの掘り込みが浅く，かつ攪乱を受けているため遺存状態はあまり良くない。壁高は10～13cmである。壁溝はない。炉は中央より南東側で壁寄りに位置する。径82×95cmを測り，楕円形を呈している。深さ14cm程掘り込んでおり，焼土がよくつまっていた。ピットは10か所より検出されている。このうちP4，P9が深さ12～19cmと他に比べ浅いため，柱穴とするにはやや難があるかもしれない。その他は位置が中央寄りにまとまってはいるが，柱穴として考えたい。覆



第12図　48号住居址実測図

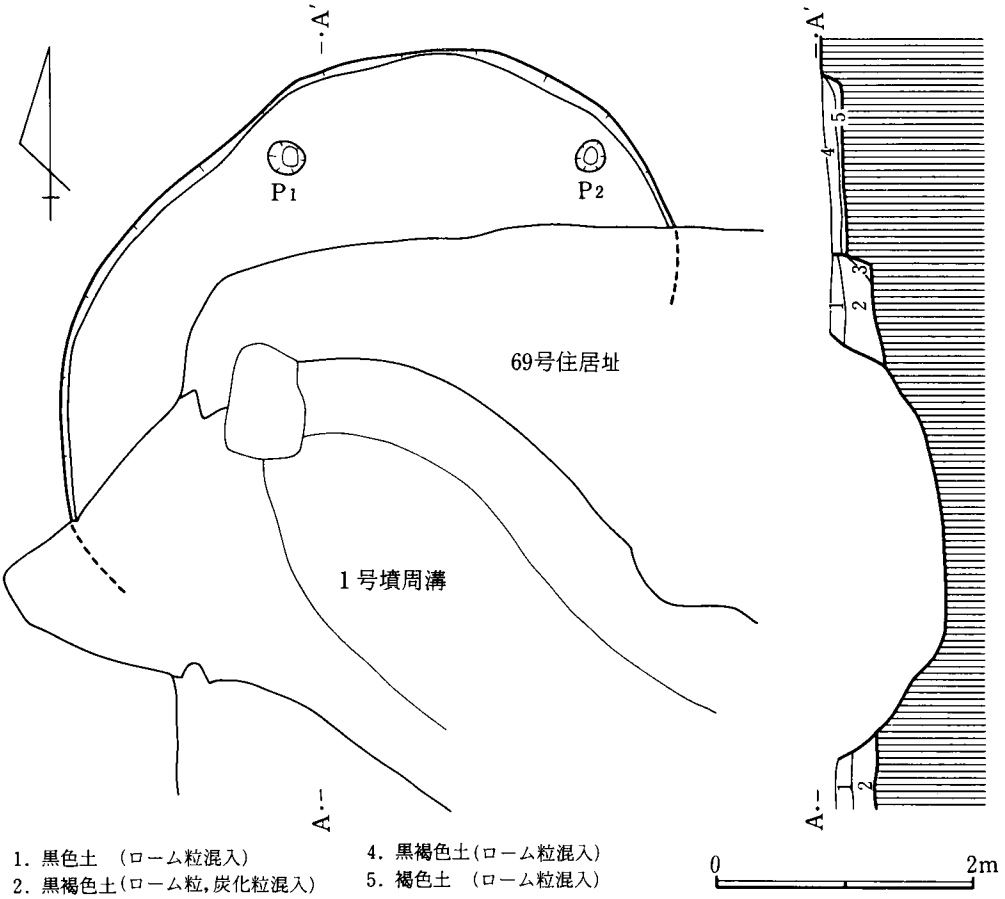
土は，掘り込みが浅いために堆積状態を明確に知ることはできなかったが，2層に区分された。

遺物は少ない。西壁と東壁際に，床面より 3 cm 程上面で深鉢形土器の破片が出土している。両方とも，流れ込んだ状態であった。

遺物　本址から出土した遺物はすべて破片で，約 50 片ほどある。これらの土器には胎土に繊維を含むものが多く，文様等から縄文前期の黒浜式と思われる。おそらく住居址も黒浜期となろう。第 2 群 3 類としたものが，本址あるいはその周辺から出土した土器で，すべて黒浜期に比定される。後述するが，胎土には繊維を含むところから黒浜式でも古い段階のものとなろう。

70 号住居址（第 13 図）

1 号墳墳丘下より検出された。東側から南側の約⅔程を 69 号住居址および 1 号墳周溝に破壊されている。平面プランは，残存している部分から推定してほぼ楕円形を呈するものと思われる。規模は長軸が約 5.3 m，短軸が約 3.8 m になると思われる。床面は中央寄りが堅く，壁寄りは全体に軟質であった。壁は立ち上がり部分がわずかに遺存していた。壁高は 11～16 cm を測る。壁



1. 黒色土　（ローム粒混入）
2. 黒褐色土（ローム粒，炭化粒混入）
3. 茶褐色土（ローム粒混入）
4. 黒褐色土（ローム粒混入）
5. 褐色土　（ローム粒混入）

第13図　70号住居址実測図

溝はない。炉址はおそらく破壊された部分に掘り込まれていたものと考えられる。残存部分でピットが2か所検出された。いずれも壁に沿っており，柱穴と考えてよいだろう。径 25～30 cm，深さ 24～32 cm を測り，規模的には差がない。覆土は2層に区分された。黒褐色土，褐色土が主体を占める。

遺物　土器片だけで，全て覆土上層の出土である。時期は縄文中期が主体であったが，小破片のためとりたてて図示はしなかった。

87 号住居址（第 14 図）（第 19 図 9）（第 39 図 104）

本址は7号墳周溝の東側に位置している 60 号住居址と西側で重複しており，本址のほうが古いことは明らかである。60 号住居址同様上面をかなり削平されており，遺存は良くない。平面プランはやや不整ではあるが，ほぼ円形を呈する。規模は 4.1×4.6 mを測る。床面は全体に軟質である。壁は，上面を削平されているため立ち上がりがわずかに確認された程度である。壁高は 9 cm を測る。壁溝はない。炉はほぼ中央に位置する。全体の約¼を 60 号住居址との重複のため欠いている。長径 102 cm を測り，楕円形を呈するものと思われる。炉中央よりやや北側に深鉢形土器が埋設されていた。底面は平らである。深さ 20 cm を測る。ピットは5か所より検出された。主柱穴はＰ1～Ｐ4であろう。径 25～31 cm，深さ 18～43 cm を測る。東南側壁寄りに位置するＰ5は，不整な形に掘り込まれている。底面には若干凹凸が認められる。覆土中より撚糸文系の土器片が3点出土しており，本址から出土した他の土器片と様相を異にしている。あるいは，このピットは本址に伴うものではないかもしれない。径 51×89 cm，深さ 27 cm を測る。覆土は暗褐色土を主体とする単一層である。

遺物は土器片，石器片がある。出土状態も覆土が中心となり，一括品では炉内より深鉢形土器が出土している。またＰ5の脇から軽石製浮子が2つに分かれて出土した。

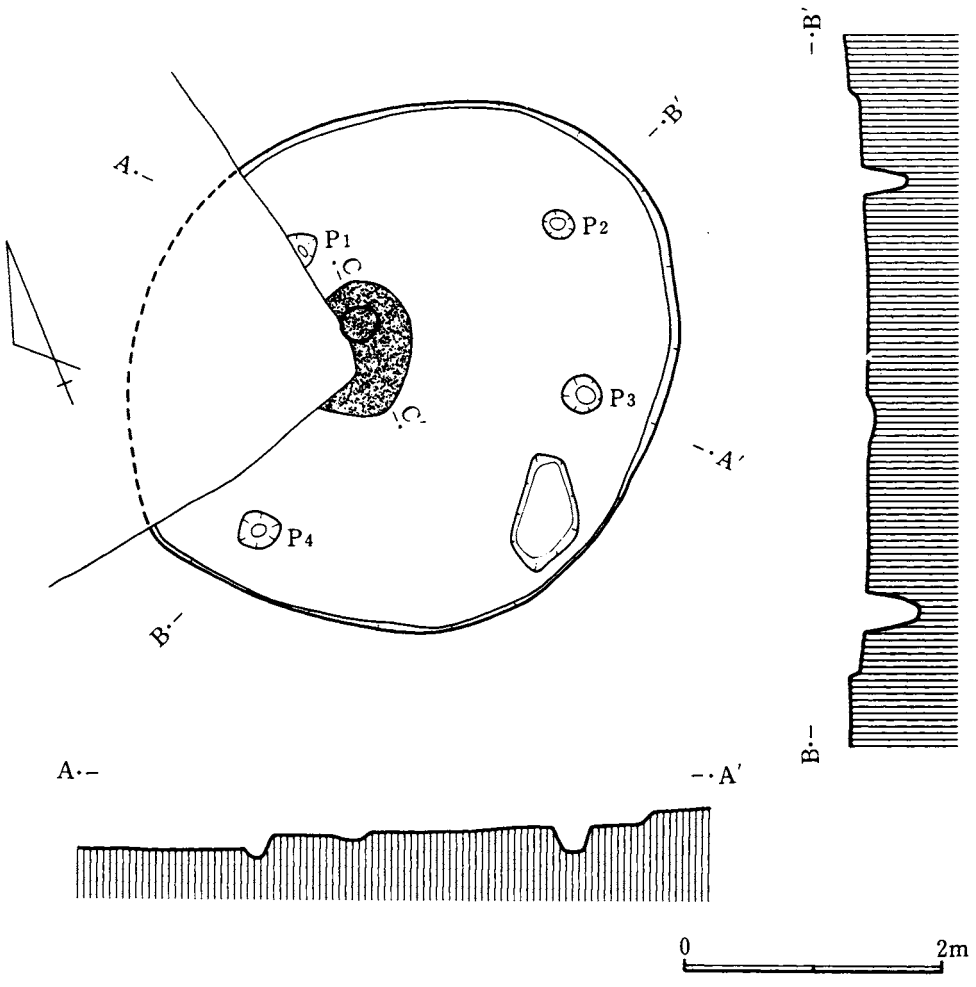
遺物　本址の遺物は図示した2点の他に，約 200 点の土器片と 30 余点の礫片が出土した。

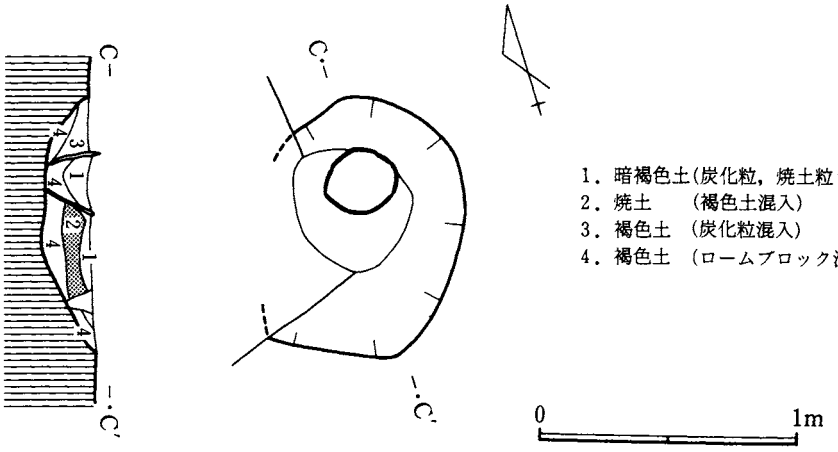
9 は炉址に埋設されていた土器で底部を欠損する。地文は節の粗い LR の縄文で，口縁部にまで及ぶ。口縁直下には2条の沈線が巡り，胴部には3本単位の沈線が交互に2単位づつ配されている。色調は，火を受けているためか赤褐色を呈し，口縁内外面では脆さが目立つ。

他に石器が1点ある。104は軽石で上部が穿孔され，一部欠損する。孔の径は約 1 cmで，きれいに貫通している。浮子と考えてよいであろう。

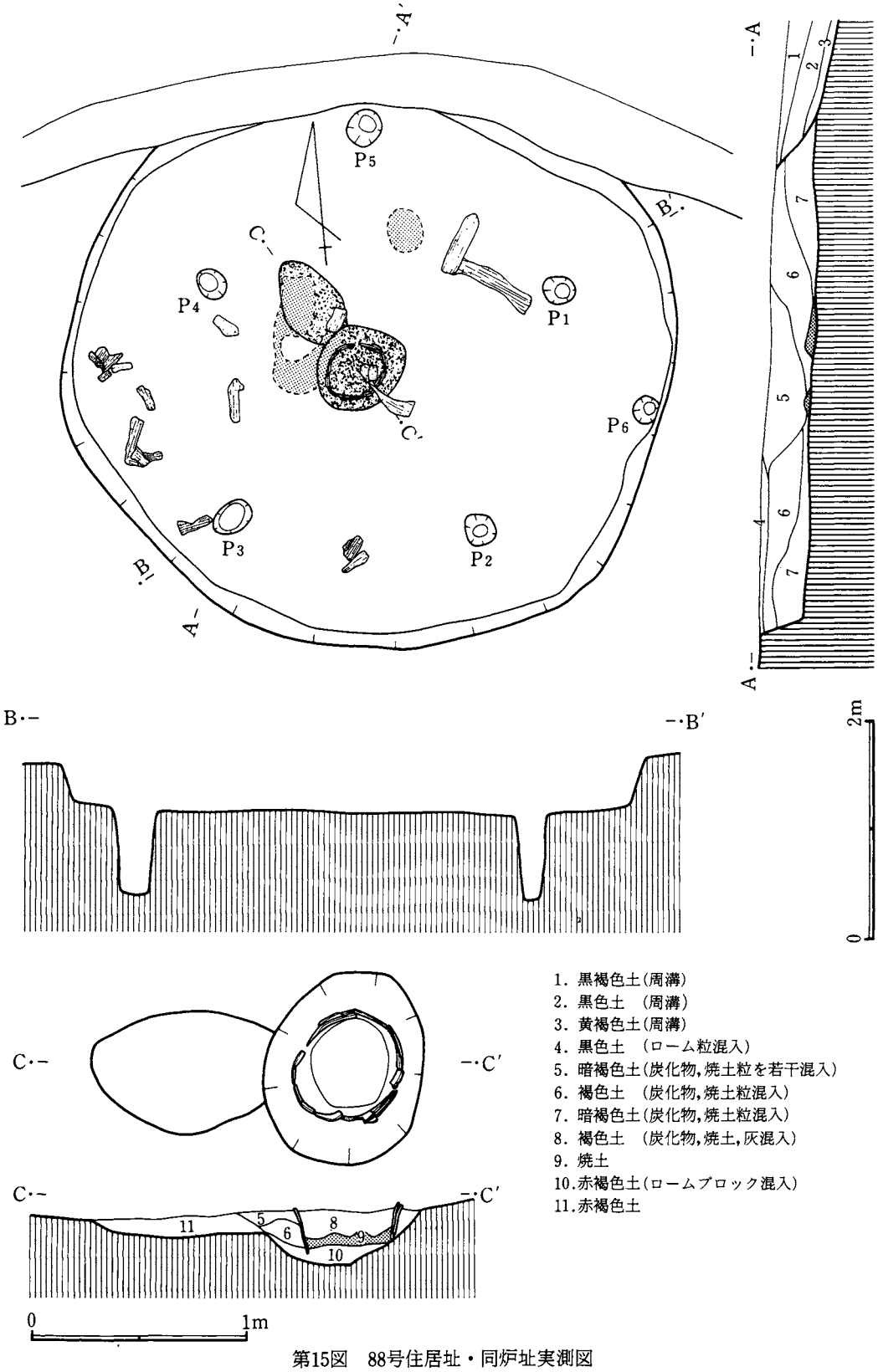
88 号住居址（第 15 図）（第 19・20 図 10・11）

本址は遺跡の南西側，6号墳墳丘の下より検出された。周溝によって北側の一部を破壊されている。平面プランはほぼ円形を呈する。規模は 5.2×5.5 mを測る。床面は，炉の周辺からピットの内側で堅緻であり，壁際では軟質である。壁は，北側が重複のため失われている。他の壁は床面よりほぼ垂直に立ち上がっており，遺存が良い。壁高は南壁で 62 cm，西，東壁では 14～43 cm を測る。壁溝はない。炉はほぼ中央に位置する。ほぼ円形を呈する掘り方に，楕円形の浅い張り





第14図　87号住居址・同炉址実測図



1. 黒褐色土(周溝)
2. 黒色土　(周溝)
3. 黄褐色土(周溝)
4. 黒色土　(ローム粒混入)
5. 暗褐色土(炭化物,焼土粒を若干混入)
6. 褐色土　(炭化物,焼土粒混入)
7. 暗褐色土(炭化物,焼土粒混入)
8. 褐色土　(炭化物,焼土,灰混入)
9. 焼土
10. 赤褐色土(ロームブロック混入)
11. 赤褐色土

第15図　88号住居址・同炉址実測図

出し部を付設した形をとっている。円形の方は径 79×87 cm，深さ 25 cm を測り，深鉢形土器の破片を円形に埋設している。楕円形の張り出し部は径 56×84 cm，深さ 9 cm を測る。張り出し部の底面は，円形の部分に比べ火熱による損傷が少ない。また覆土も粗い焼土粒が主体であるため，この部分は灰などの掻き出しに利用されたのではないだろうか。ピットは 6 か所より検出された。P 6 が壁際に偏しているが，ほぼ壁に沿って配されており，主柱穴と考えてよいだろう。径 24～40 cm，深さ 52～99 cm を測る。覆土は 4 層に区分された。暗褐色土，明褐色土が主体であり，流れ込みによる堆積状態を示している。下層には炭化物，焼土粒が多量に混入している。

遺物は住居の遺存がよいわりには少ない。北側の P 5 脇から浅鉢形土器が押し潰された状態で出土している。出土レベルは床面よりやや上であるが，本址に伴うものと考えたい。

遺物　本址の遺物は，縄文時代の遺構としては多く，図示できた土器も 2 点存在した。

11 は大形の深鉢となり，胴部が中心に遺存する。渦巻文を付した口縁部文様帯も一部が認められる。胴部の文様は縦方向の 2 本 1 組の太い沈線によって 10 単位区画され，その間は磨消が入る。縄文は複節の RL で，節は粗い。色調は褐色ないし赤褐色となる。10 は無文で，形態としては浅鉢に近い。一部が欠損するもののほぼ完形と言えよう。器面はヘラ状工具で若干研磨され，きれいに仕上げている。色調は淡褐色ないし暗褐色となる。

2．土　　坑

59 号址（第 16 図）

2 号墳周溝の南西側外周端に位置する。周溝によって北東側の上面を破壊されている。平面形は円形を呈する。規模は 1.8×1.9 m を測る。底面はほぼ平坦である。北壁寄りと南壁寄りの 2 か所からピットが検出されている。規模に大きな差をもつが，両者とも本址に伴うものであろう。径 18～69 cm，深さ 24～53 cm を測る。覆土は 3 層に区分された。

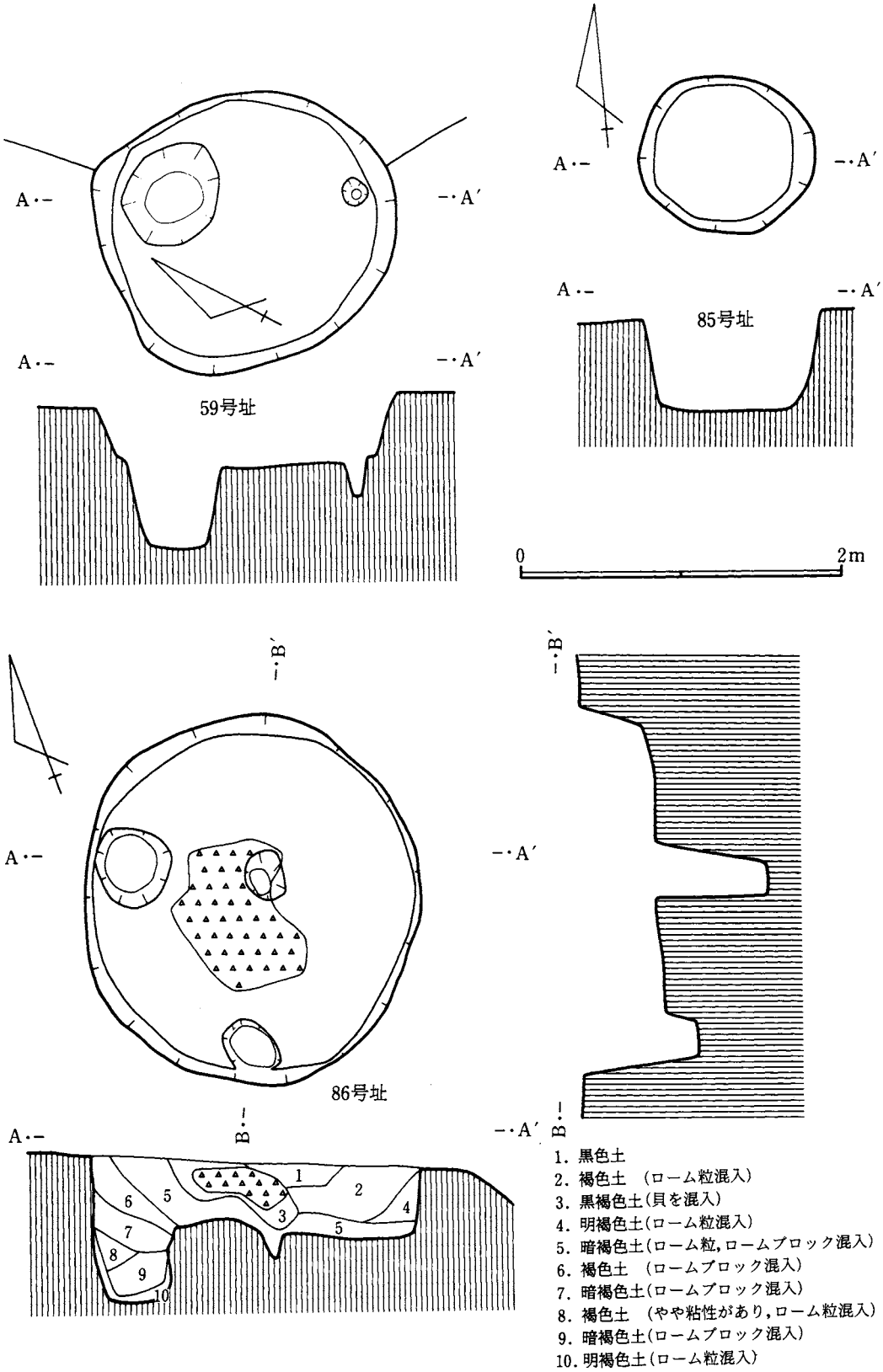
遺物は数点の縄文式土器が出土しただけであった。

81 号址（第 17 図）（第 19 図 7）

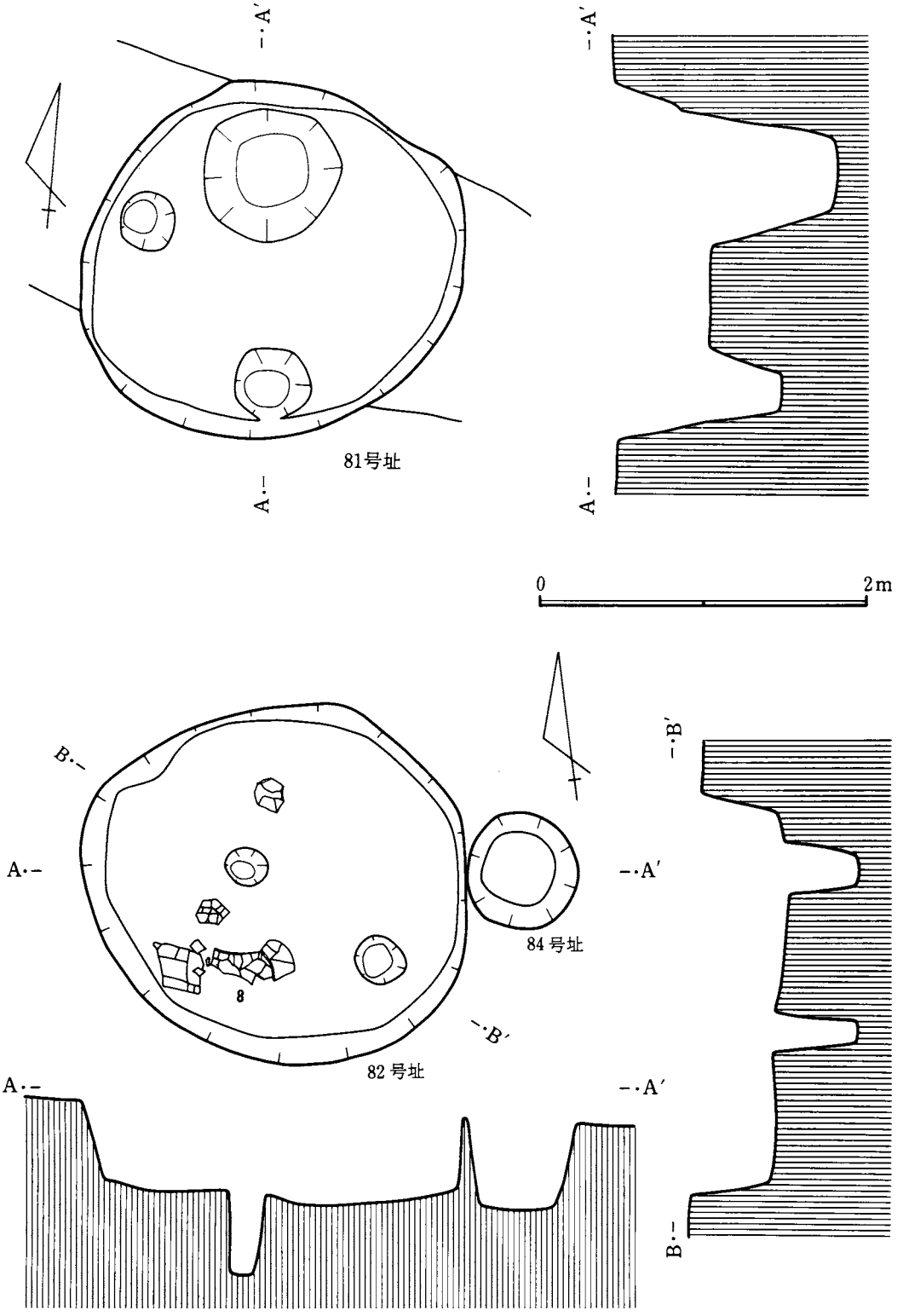
1 号墳墳丘下より検出された土坑である。82 号址の南 1.3 m に位置する。1 号墳第 3 主体部によって上面を破壊されている。平面形は円形を呈する。規模は 2.1×2.5 m を測る。底面はほぼ平坦である。壁の立ち上がりは垂直に近い。深さ 38 cm を測る。北西寄りで 1 か所，東南寄りで 1 か所のピットが検出されている。径 33～84 cm，深さ 37～75 cm を測る。覆土はピット内を含めて 3 層に区分された。上層から暗褐色土，褐色土，黄褐色土の堆積順である。

遺物は，東壁より深鉢形土器が 1 点出土している。破片で潰された状態であった。他には若干の土器片が出土したにすぎない。

遺物　7 は口縁部が欠損し，渦巻文の 1 端がかろうじて遺存する。縄文は単節の LR で縦方向に回転させ，太い沈線によって区画されている。沈線間の縄文は磨消し，これにより文様は 8 単位で構成されることとなる。色調は褐色ないし暗褐色となる。時期は加曽利 E II 式となろう。



第16図　59号址・85号址・86号址実測図



第17図　81号址・82号址・84号址実測図

82 号址（第 17 図）（第 19 図 8）

1 号墳の周溝内側に位置する。墳丘下のソフトローム層で検出された。平面形はほぼ円形を呈する。規模は 2.2×2.4 mを測る。底面はピット周囲で起伏が認められる。壁はほぼ垂直に立ち上がり，深さ 47～49 cm を測る。底面中央寄りと東南側の 2 か所でピットが検出された。径 26～31 cm，深さ 44～52 cm を測る。覆土は 2 層からなり，暗褐色土，黄褐色土が主体である。流れ込みによる堆積状態を示している。

遺物　本址の遺物は図示した深鉢と約 50 片の土器片である。これらの土器片には土師器も混入しており，一括品も検出されている。一括品は，中央より南西壁にかけて底面に密着して，押し潰されたような状態であった。

図示した深鉢は，かなりの器高を示す。口縁部文様帯は失われ，以下 81 号址出土土器と類似する文様構成を示す。沈線による区画は 12 単位と多い。縄文は単節の RL を縦方向に回転させる。色調は暗褐色ないし黒褐色となる。

84 号址（第 17 図）

82 号址の東に接して検出された。平面形は円形を呈する。規模は径 72 cm，深さ 40 cm を測る。底面は平坦で堅くしまっている。覆土は 2 層に区分された。暗褐色土，黄褐色土である。

遺物は，7 点の土器しか出土せず，図示できるようなものは存在しなかった。

85 号址（第 16 図）

6 号周溝の北東側に位置する。平面形は円形を呈する。規模は径 1.0×1.1 mを測る。　底面はほぼ平坦で軟質である。壁の立ち上がりは垂直に近く，深さ 59 cm を測る。覆土は暗褐色土の単層であった。ローム粒子を混入している。

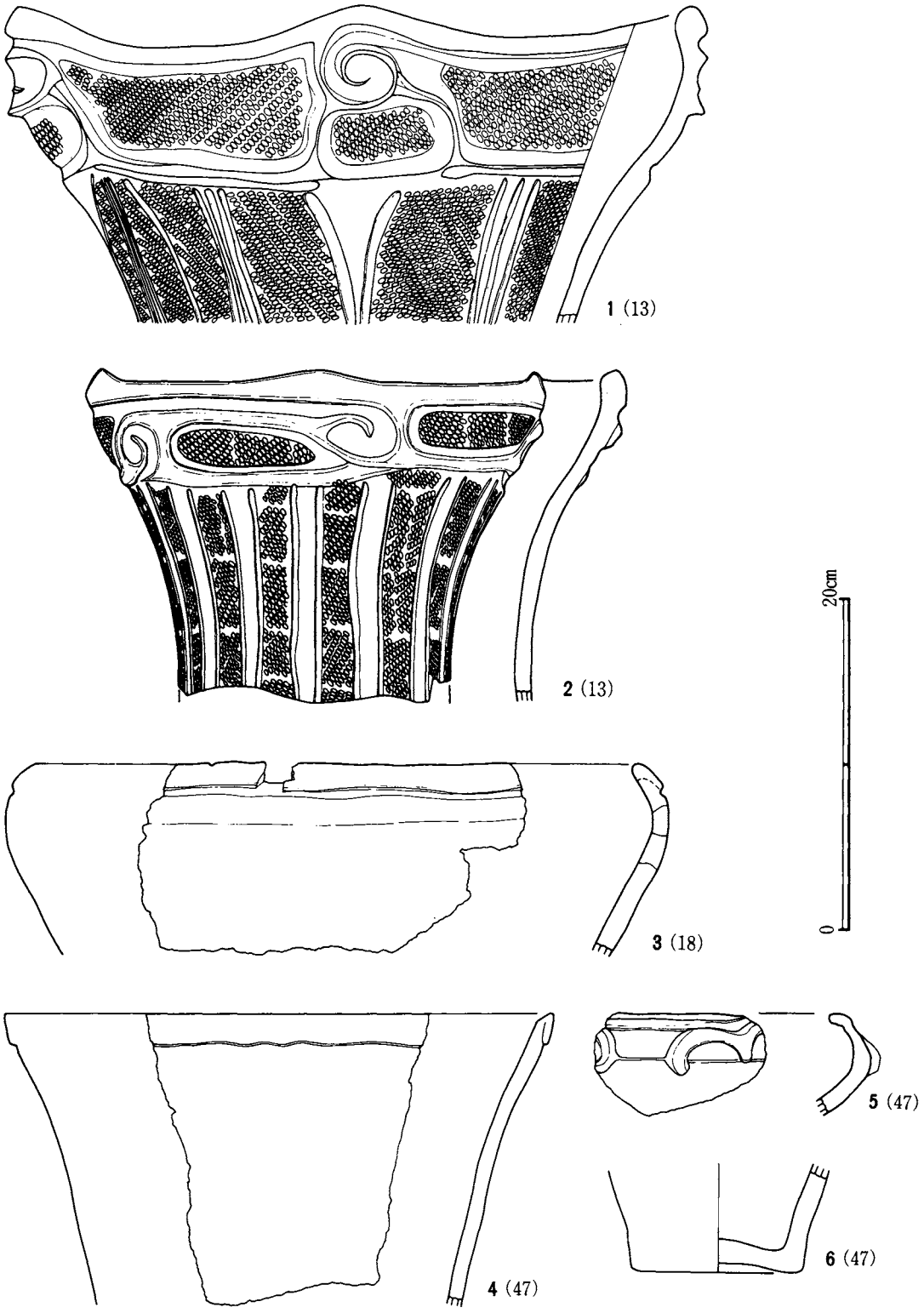
86 号址（第 16 図）

遺跡のほぼ中央に位置する。1 号墳周溝の西溝南端で重複している。遺構検出面はソフトローム層をわずかに下がった面であり，本址のほうが古いことは明らかである。平面形は円形を呈する。規模は 2.1×2.3 mを測る。底面はやや起伏が認められ，壁は垂直に立ち上がる。深さ 34～43 cm を測る。壁際に 2 か所，中央に 1 か所のピットが検出されている。径 30～50 m，深さ 22～51 cm を測る。覆土はピット内を含めて 10 層に区分された。黒褐色土，褐色土，明褐色土，暗褐色土が主体である。このうち第 3 層明褐色土中にはイボキサゴを多量に含む貝ブロックが混入しており，土坑の埋没過程で廃棄されたような出土状況であった。

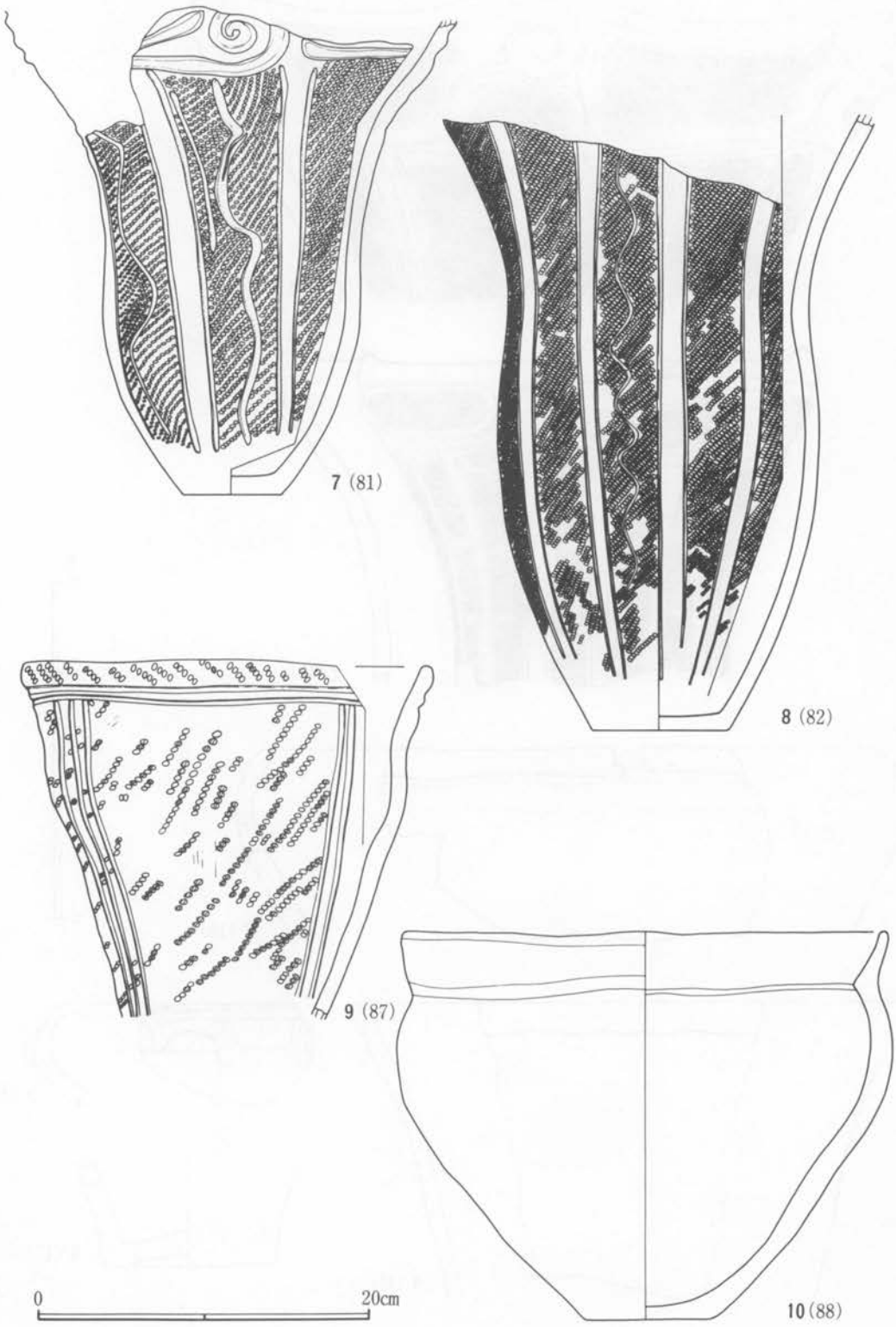
遺物　本址の遺物は合計で 32 点と少ない。すべて縄文時代中期の加曽利Ｅ式であり，底部も 2 点含まれていたが，図示はしなかった。

3．土　　器

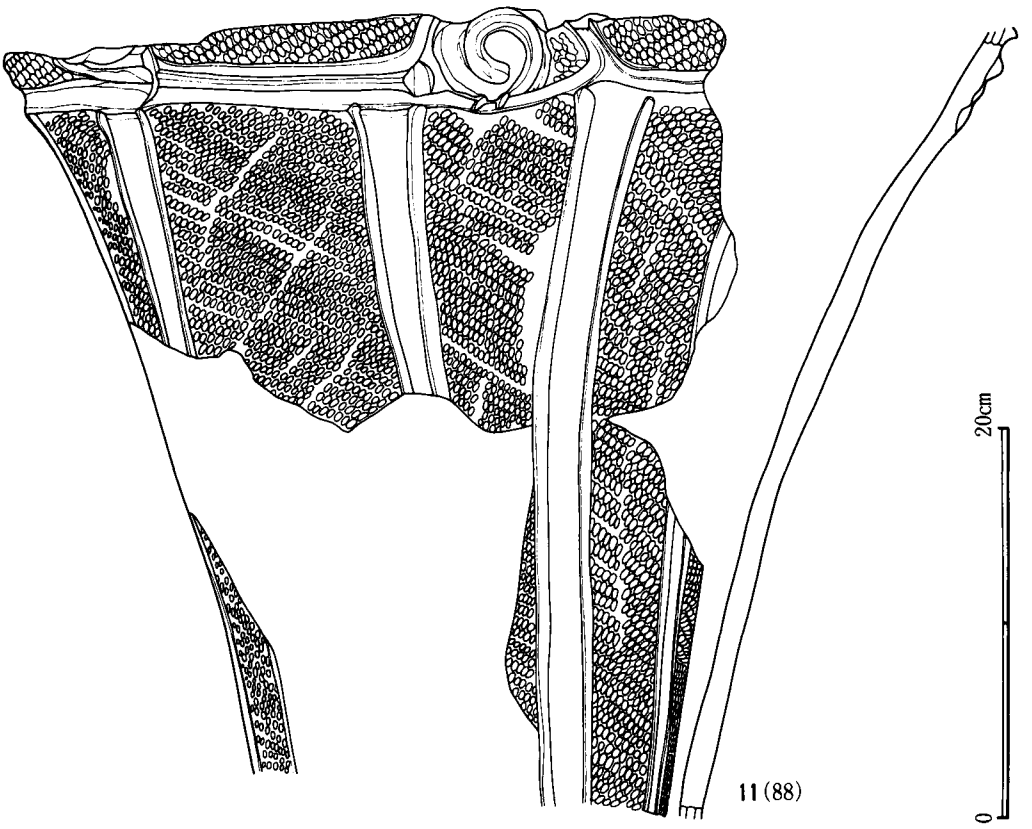
本遺跡から出土した縄文式土器は，草創期後半の撚糸文系土器，早期後半の条痕文系土器，前期前半の繊維土器，同後半の浮島系土器，中期の加曽利Ｅ式土器とその前後となり，後期の堀之



第18図　住居址出土土器実測図（1）



第19図　住居址・土坑出土土器実測図（2）



第20図　住居址出土土器実測図（3）

内期の土器も若干認められたが小破片のため省略した。中でも主体を占めるものは撚糸文系土器と遺構を伴う加曽利E式期のものであった。

第1群土器（第21～24図）

撚糸文系土器を一括する。これらを文様別に細分すると3つのタイプに分類できる。

第1－a類　撚糸あるいは縄文が器面に縦方向に施文される。1－25と2－8の2点はLRの縄文を使用しているが，他はすべて撚糸文となる。撚糸の間隔は，1－1や3－27，29では密となり，他は比較的広い。この点を重視すれば，大半が稲荷台式土器と考えてよいであろう。底部もすべて尖底で撚糸が認められる。ただ，4－31だけは無文となるが，この中に含めてもよいであろう。

第1－b類　いわゆる無文土器を本類（3－22～25）とした。4点と少ないが，口唇部の作りなどには第1－a類との差は認められない。胎土についても同様である。稲荷台式の中に含めてもよいであろう。

第2類　1片だけ出土した。2－41であり，口唇部は，その直下にやや凹みをもたせるような作

りをする。文様は押型文の系統として把えることができよう。「ハ」の字状の押圧が縦方向に2条だけ認められる。1点だけの検出で，その様相について具体的に述べることはできないが，最近各地で草創期終末での新しい要素をもつ土器群が検出されており，その点では注目できよう。型式的には稲荷台式に近い土器として把えてよいであろう。

第2群土器（第25，26図）

本群は早期後半から前期に位置づけられる土器群を一括した。

第1－a類　いわゆる茅山式土器を第1類とし文様によりa，bと種別した。1－a類は5－1～7の7点だけを採拓したにとどまったが，他にも小破片が若干出土している。これらは，すべて器内外面が条痕で覆われており，胎土には繊維を含む。

第1－b類　これも1－a類と時間的な差はないであろう。6－1～7がこれにあたる。ただ，文様構成において器面に貝殻腹縁を押圧しているところが特徴と言えよう。この貝殻腹縁は，1，3，4では内面にも認められる。1－a類とともに茅山上層式に比定されよう。

第2類　6－8，10の2点だけである。6－8には，口縁直下に縄文の末端の変化，いわゆるループ文が3条認められ，その下段にはループ文が山形に表現されている。6－10は複節の縄文が編んだように施される。いわゆる組紐と呼ばれるもので，いづれも関山式の特徴と言えよう。

第3－a類　5－8～19がこれにあたる。大半は2本1組の縄文が一定の間隔を保ちつつ，斜方向にあるいは横方向に施文される。2本1組の縄文の撚りは異なる場合が多い。しかし，15，18では同一の撚りを示す。

第3－b類　5－20，21の2点にとどまる。沈線あるいは半截竹管による刺突文が横にめぐる。

第3－c類　6－9，11～20までの縄文だけを施した土器で，11，20にみられるように羽状縄文を形成することもある。使用される縄文は，節が大きく，間隔も粗い。

以上が第3類土器としたものであるが，胎土には繊維を含む。黒浜式でも古く位置づけられる土器群である。

第4類　6－21～23で3点と少ない。21は口縁部で，口唇直下と有段部に半截竹管による連続刺突文が施され，器厚もある。22，23はいわゆる三角文で飾られており，浮島III式の典型的なものである。

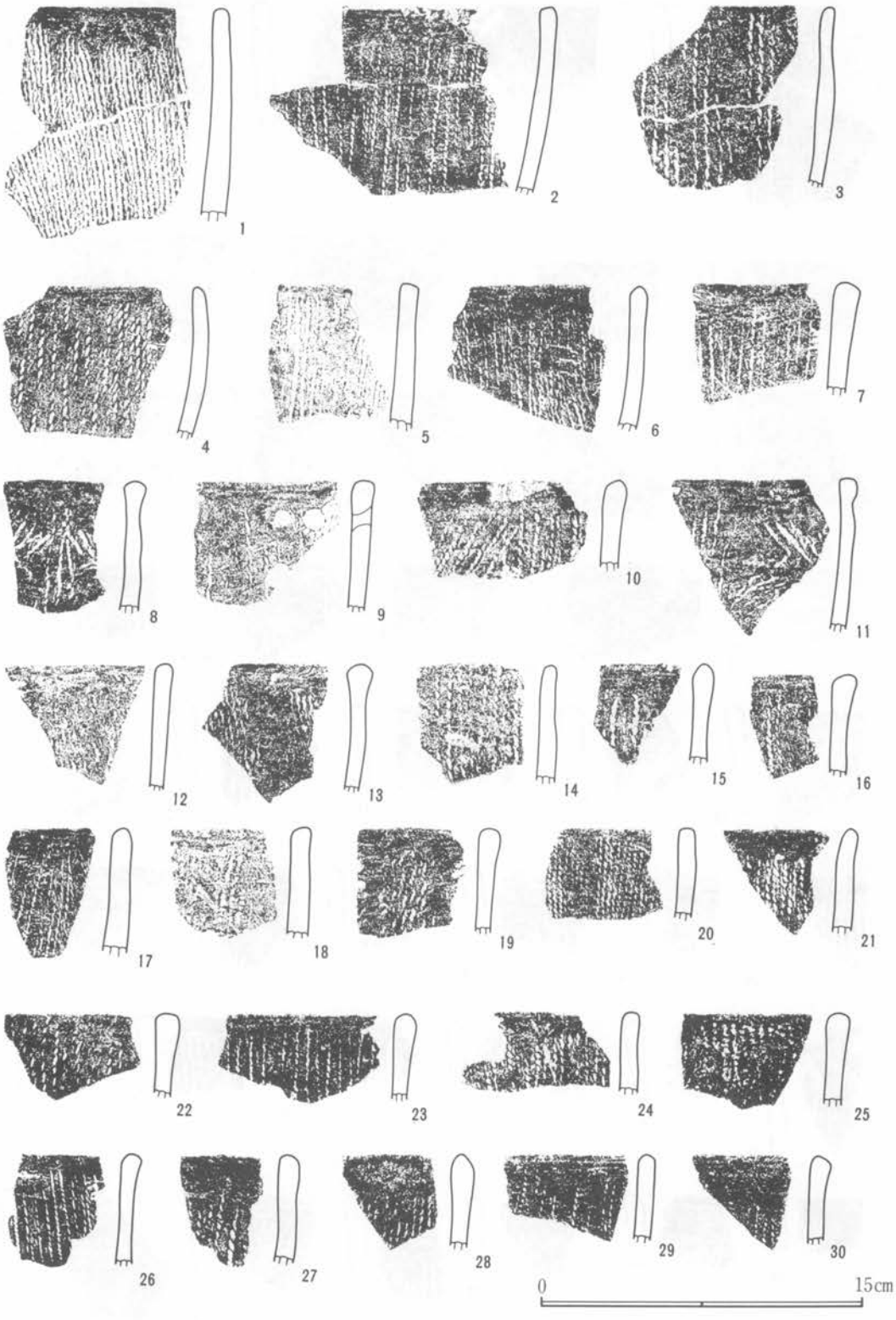
第3群土器（第27～31図）

縄文時代中期に位置づけられる土器群を第3群とした。

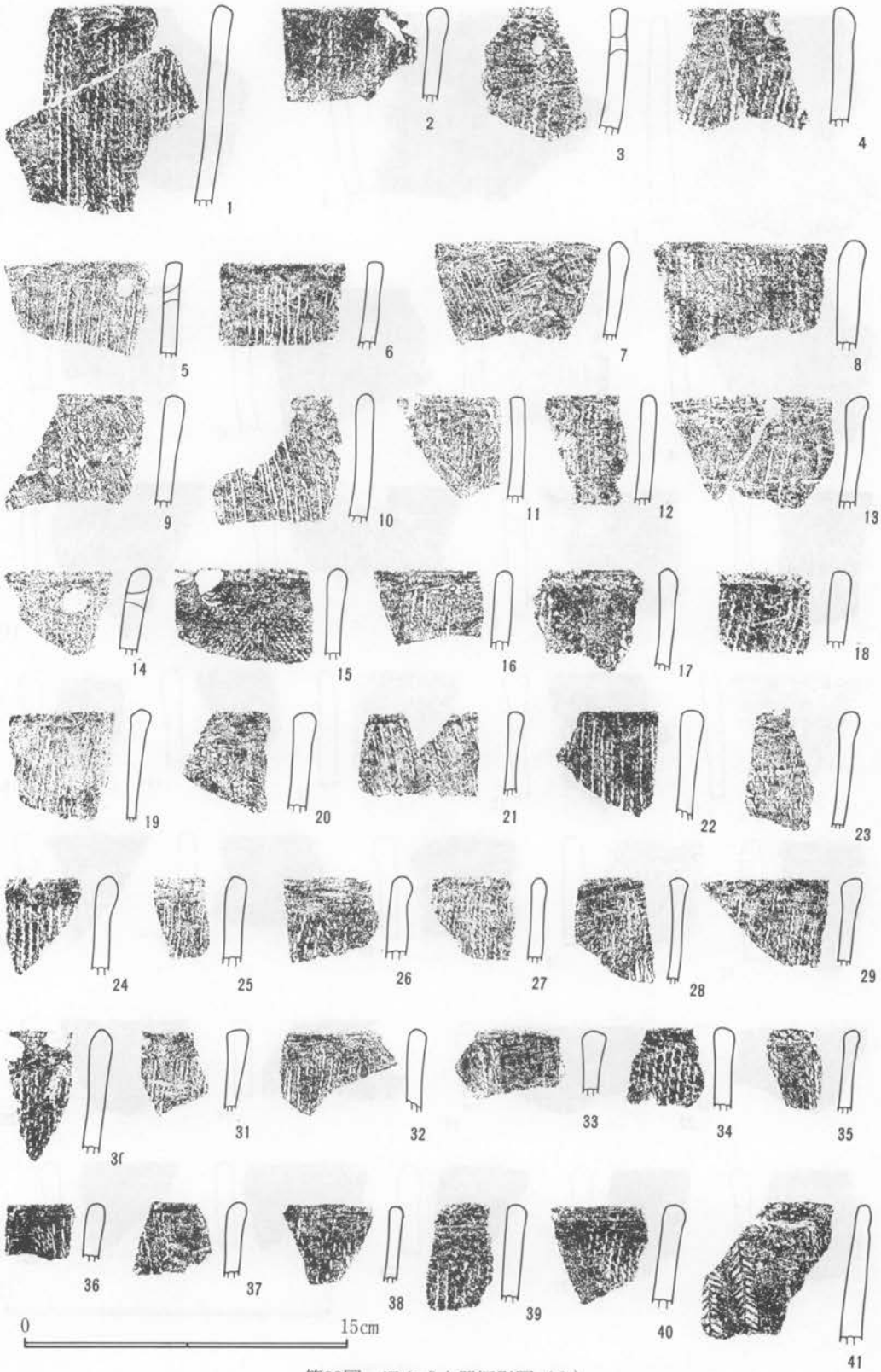
第1類　爪形文を主体とした文様構成で，半截竹管による押圧，連続爪形文等も認められる。これらの文様は，勝坂式期の特徴であり，7－1～13では少なからず表現されている。

また，7－9，10，11，14などは加曽利E式期の初源的様相を併せもつものである。

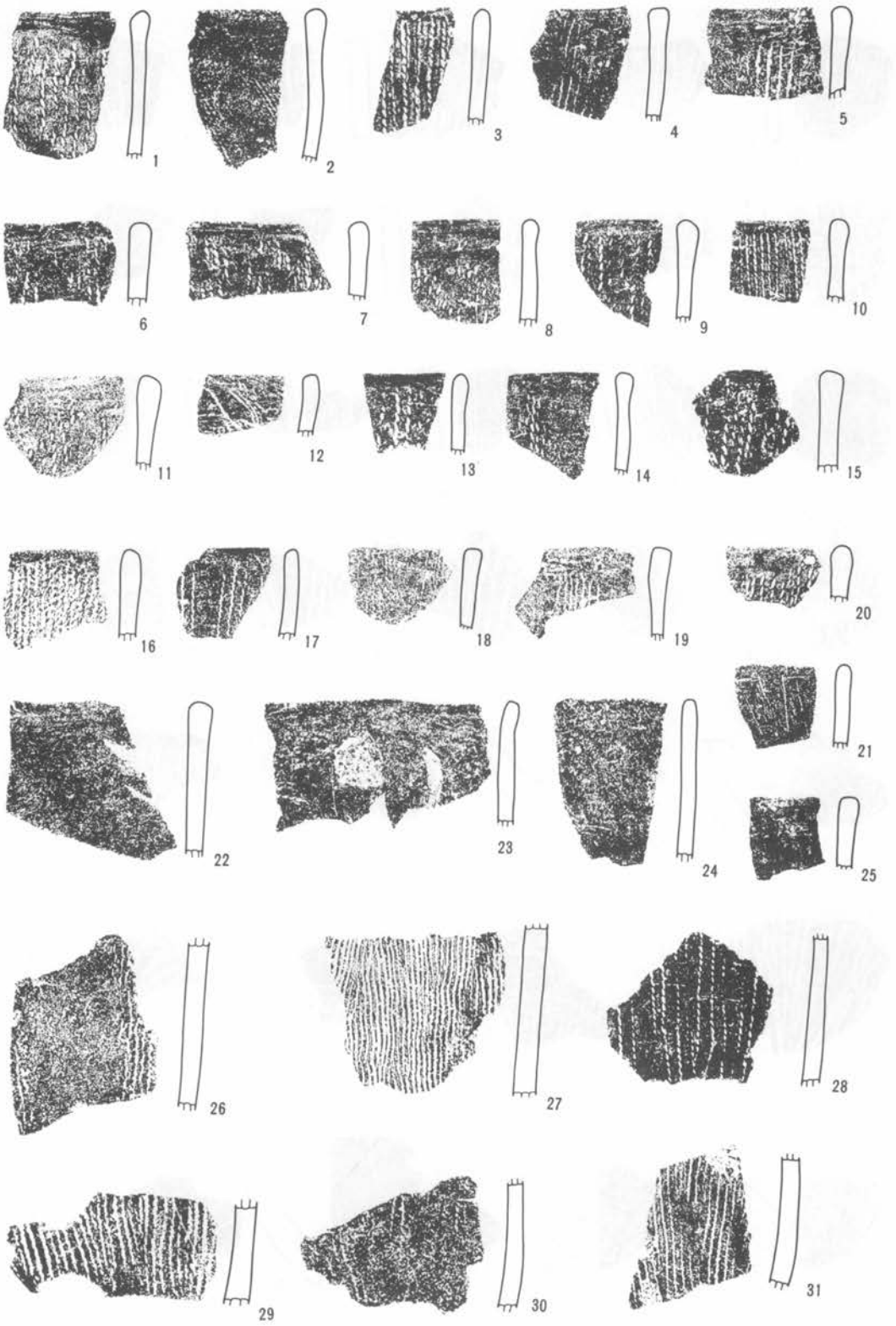
第2類　爪形文，沈線，隆帯等を有する土器を本類とした。いわゆる阿玉台式土器であり，7－17～19，8－1～13，9－1～11，13がこれにあたる。採拓は口縁部を中心に行なった。これ



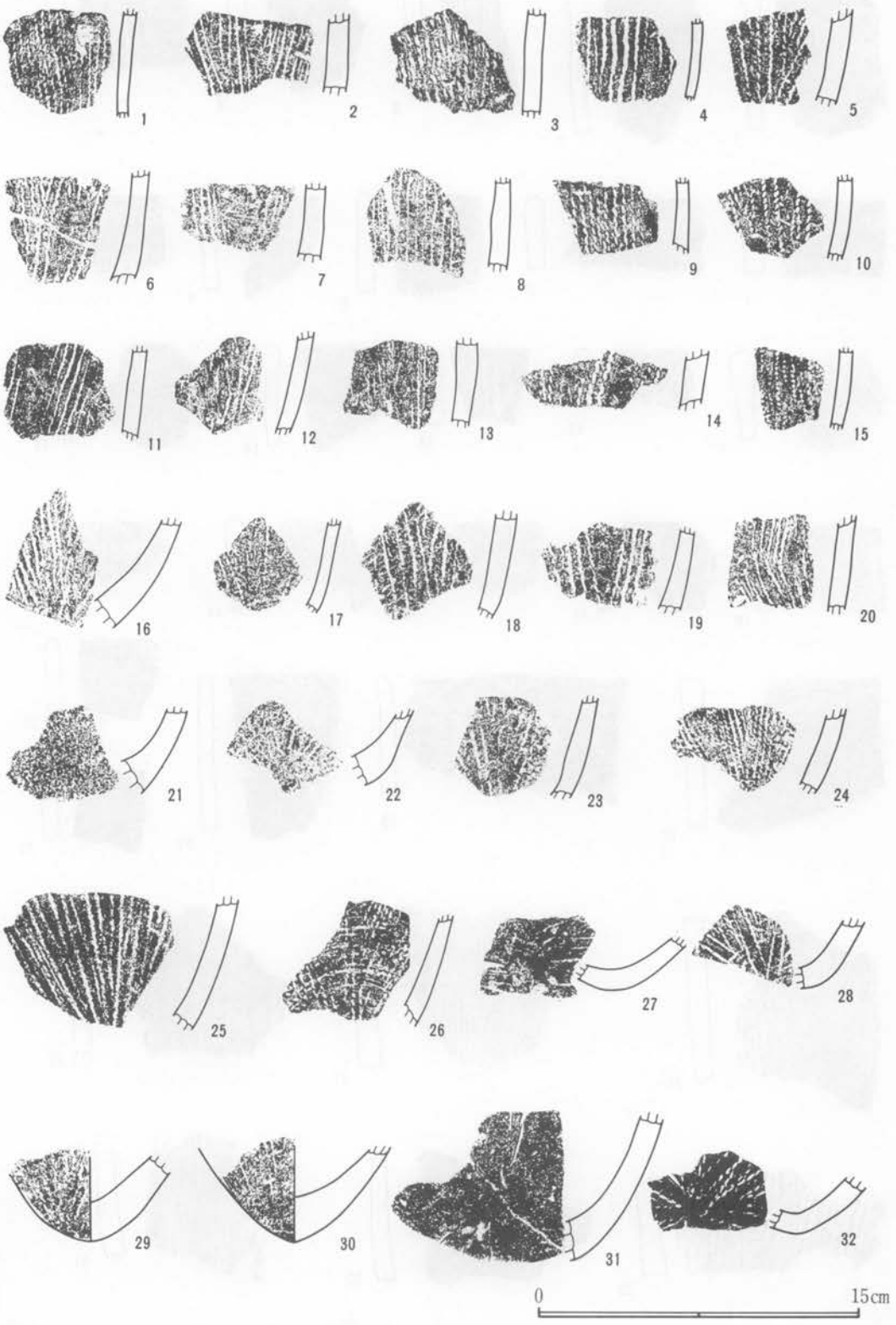
第21図　縄文式土器拓影図（1）



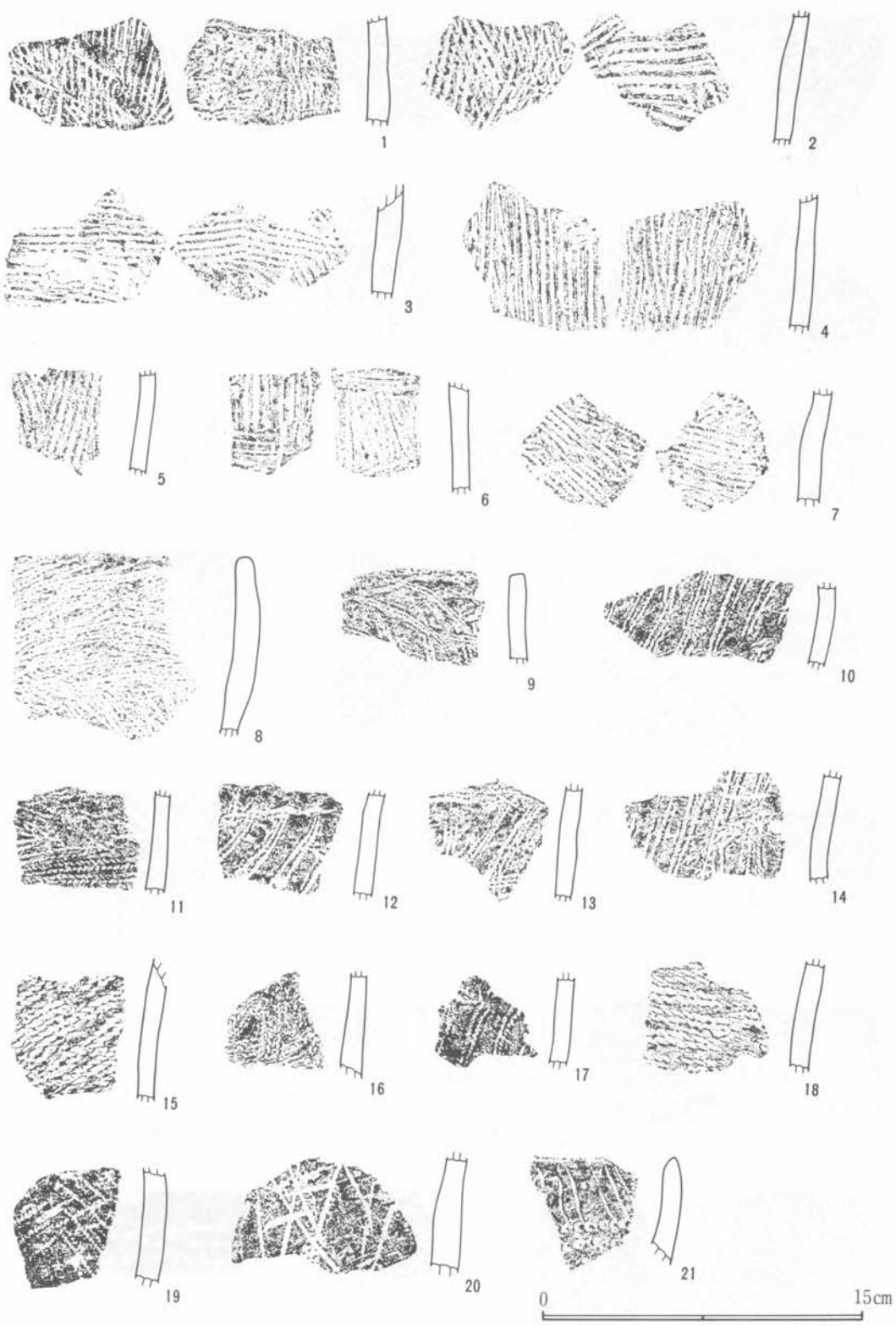
第22図　縄文式土器拓影図（２）



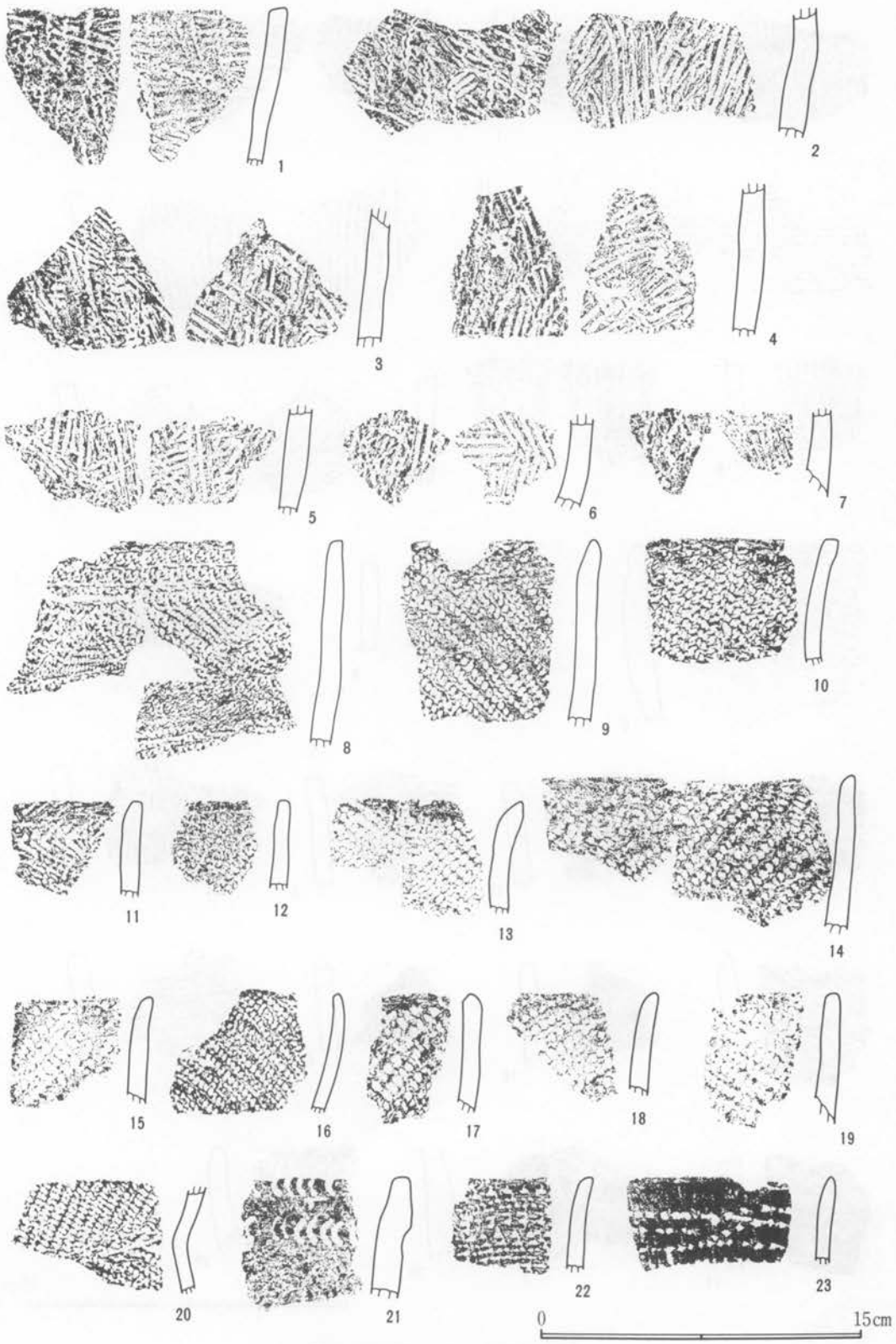
第23図　縄文式土器拓影図（３）



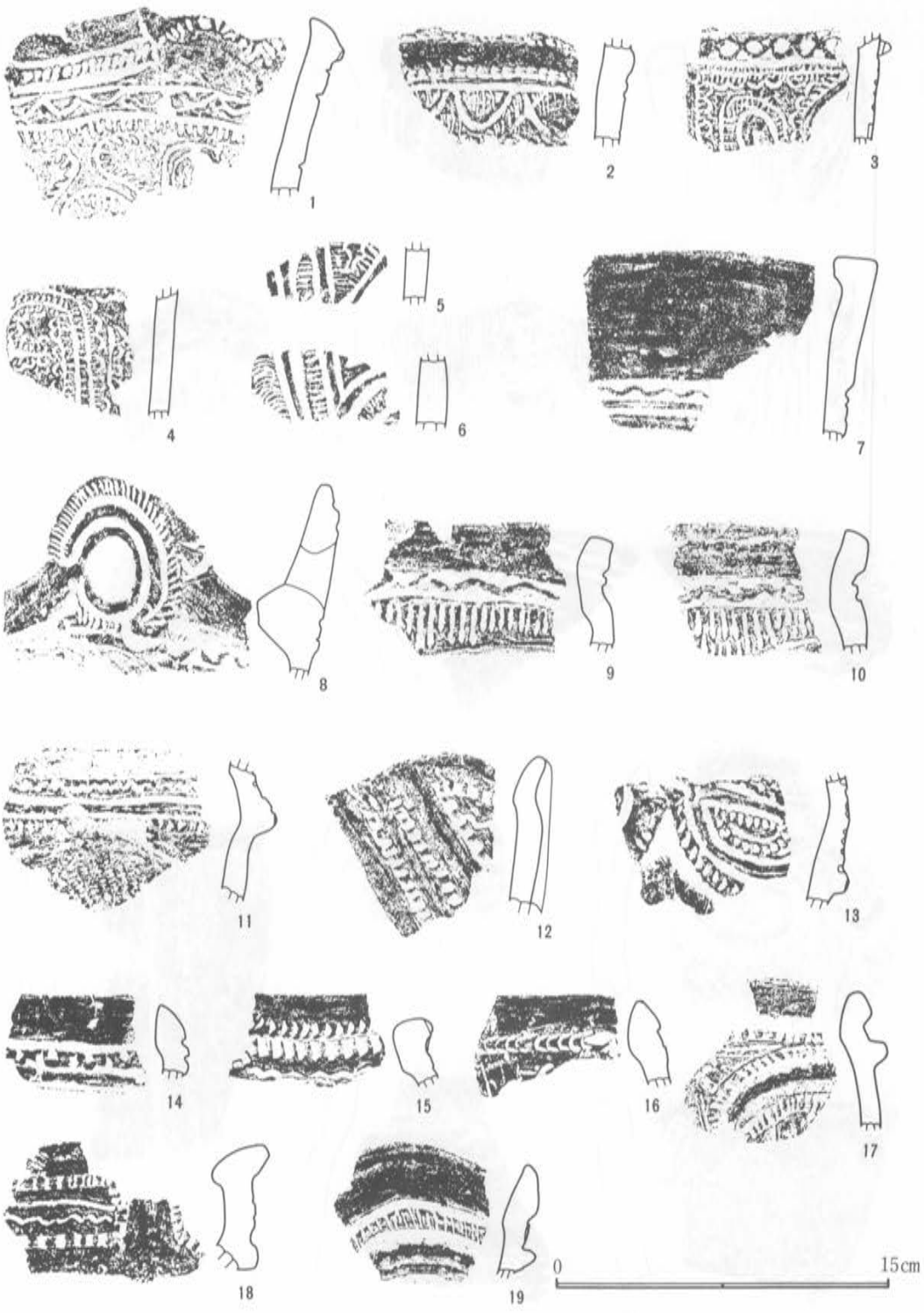
第24図　縄文式土器拓影図（4）



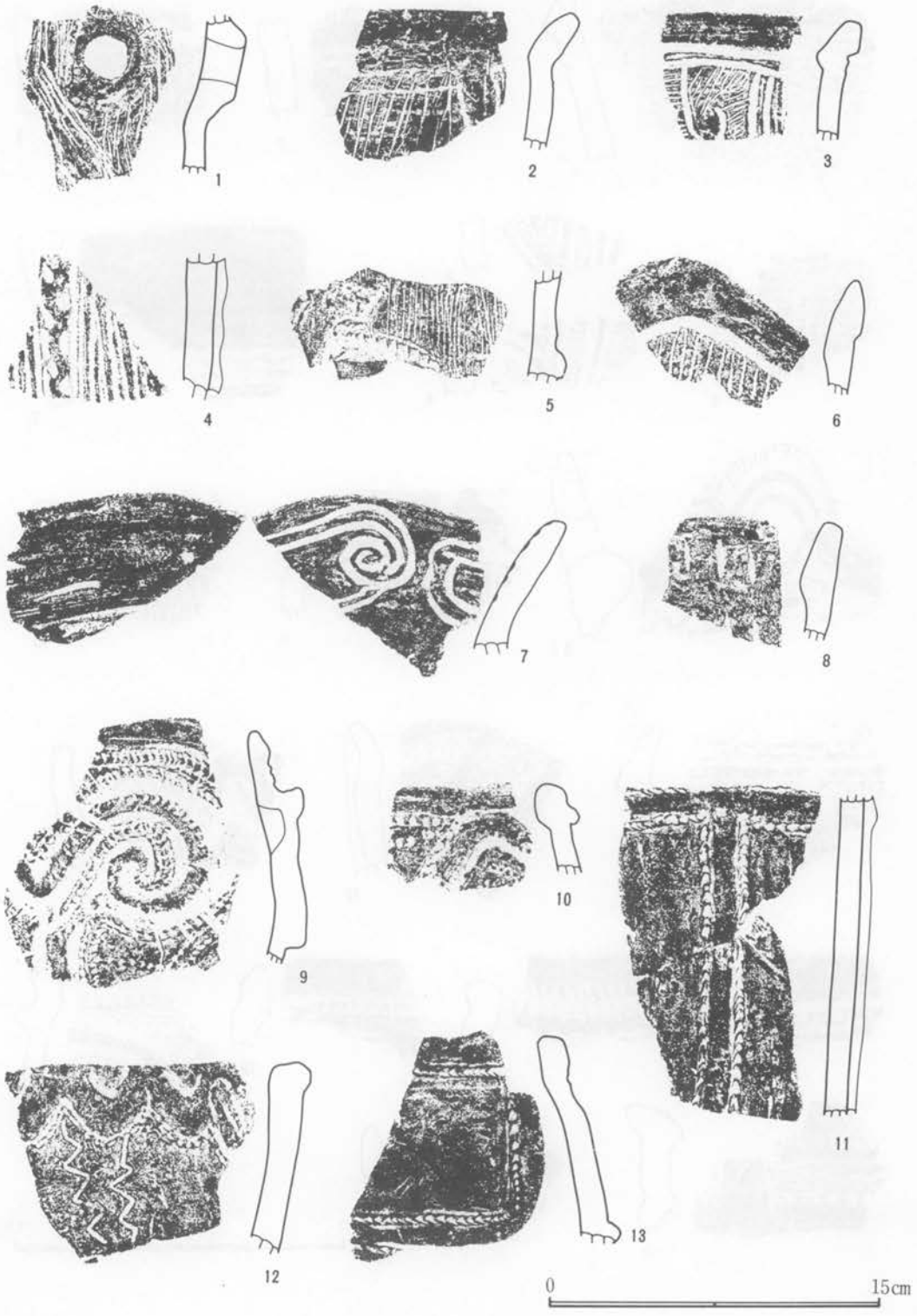
第25図　縄文式土器拓影図（５）



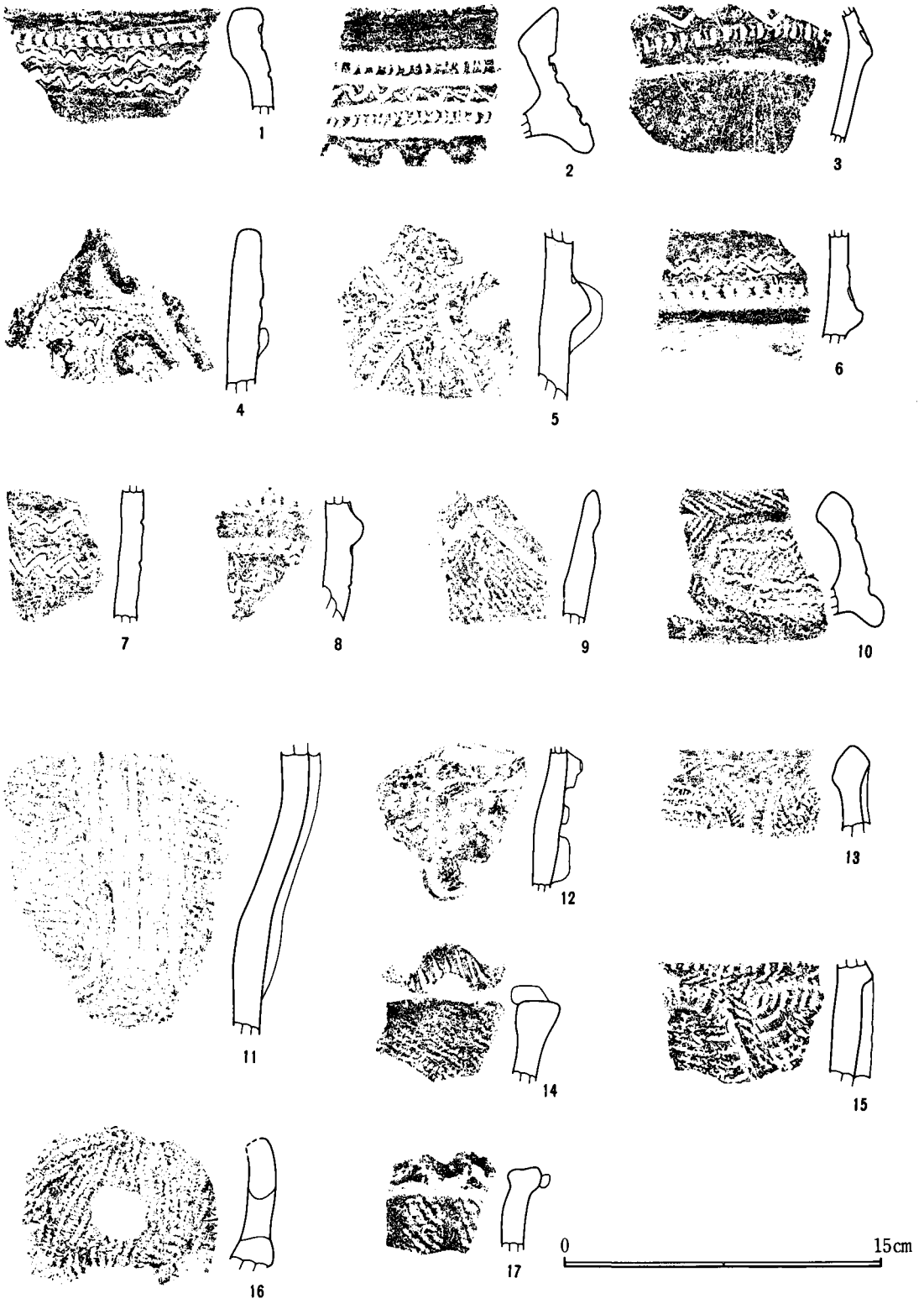
第26図　縄文式土器拓影図（6）



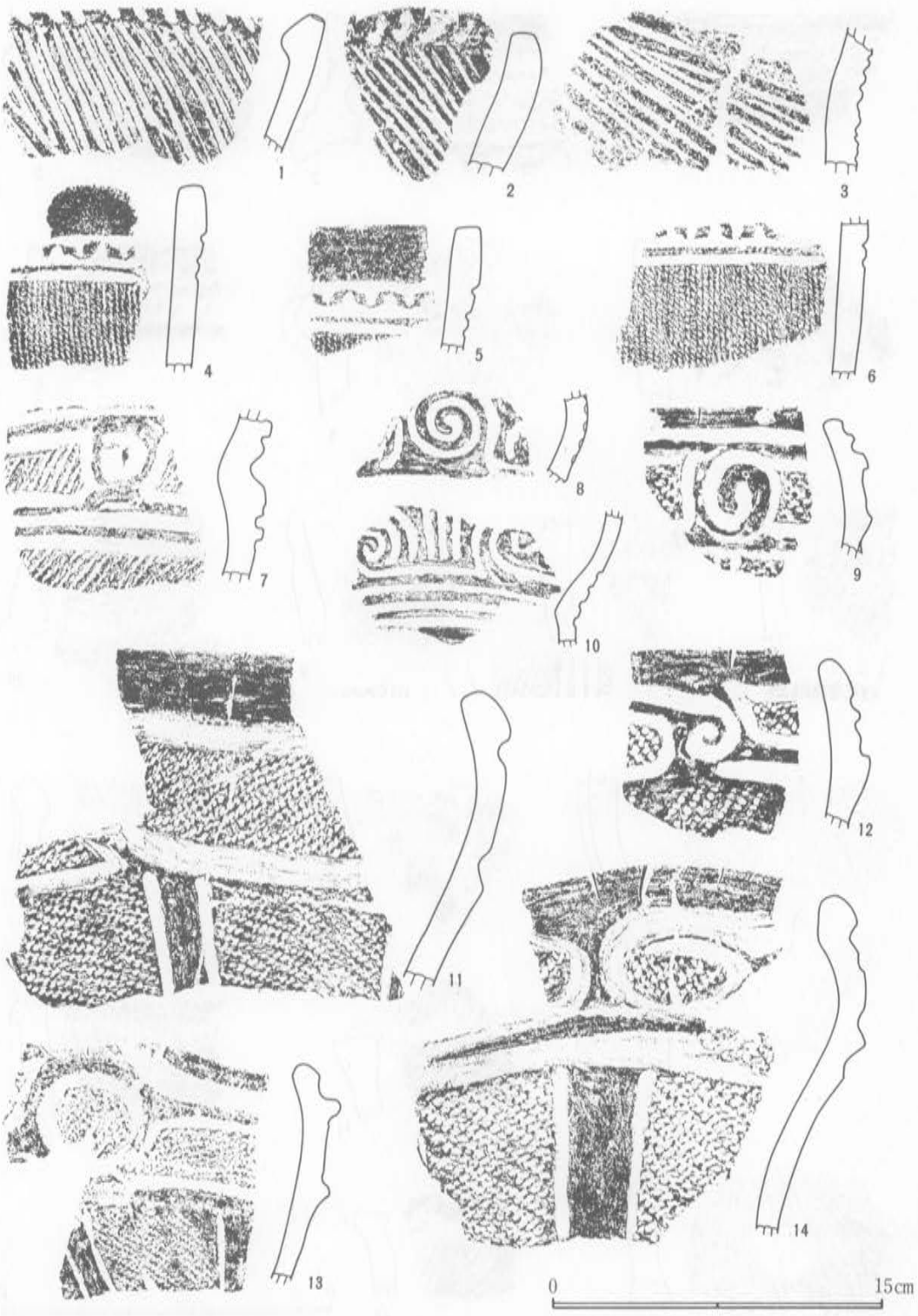
第27図　縄文式土器拓影図（７）



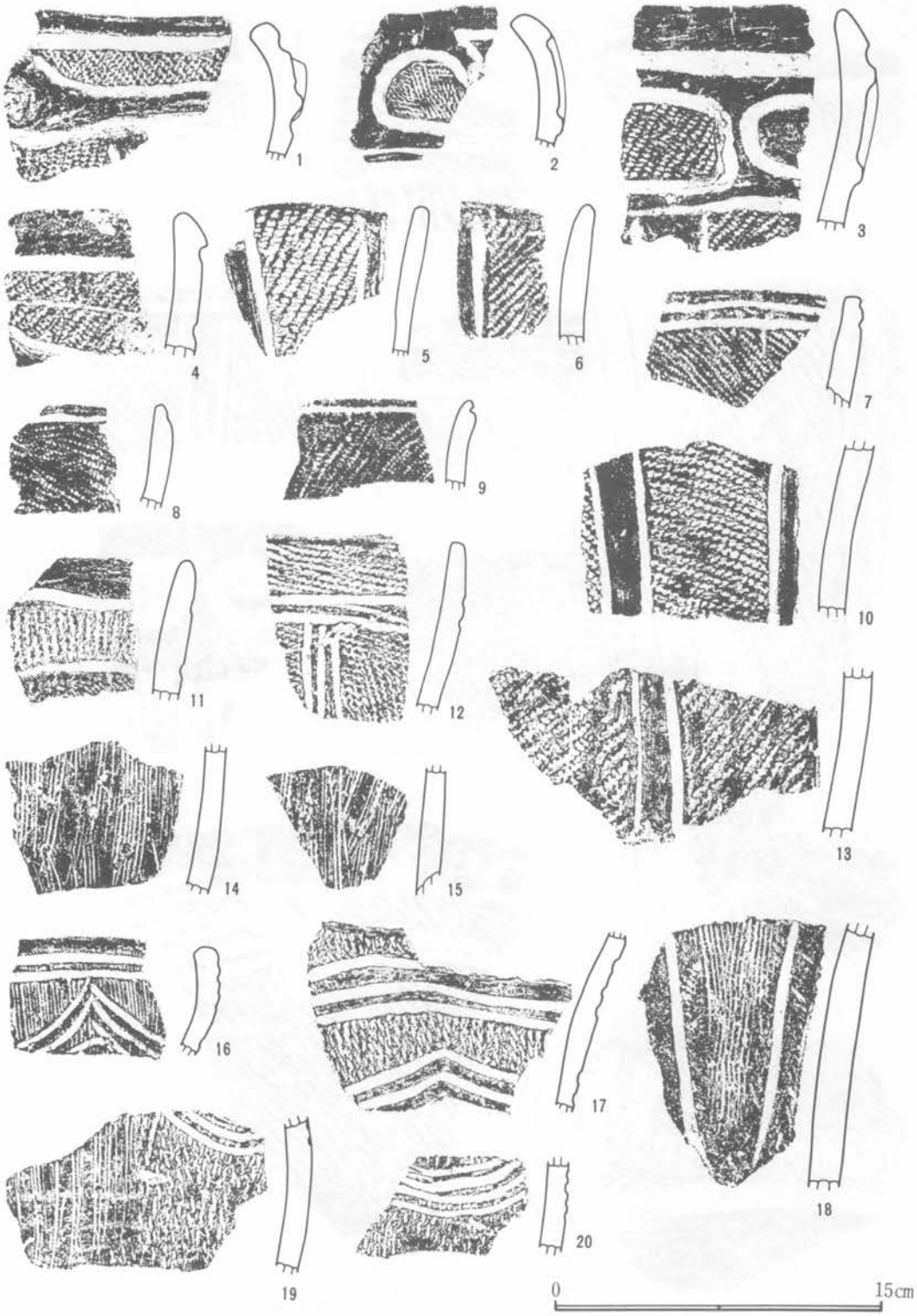
第28図　縄文式土器拓影図（8）



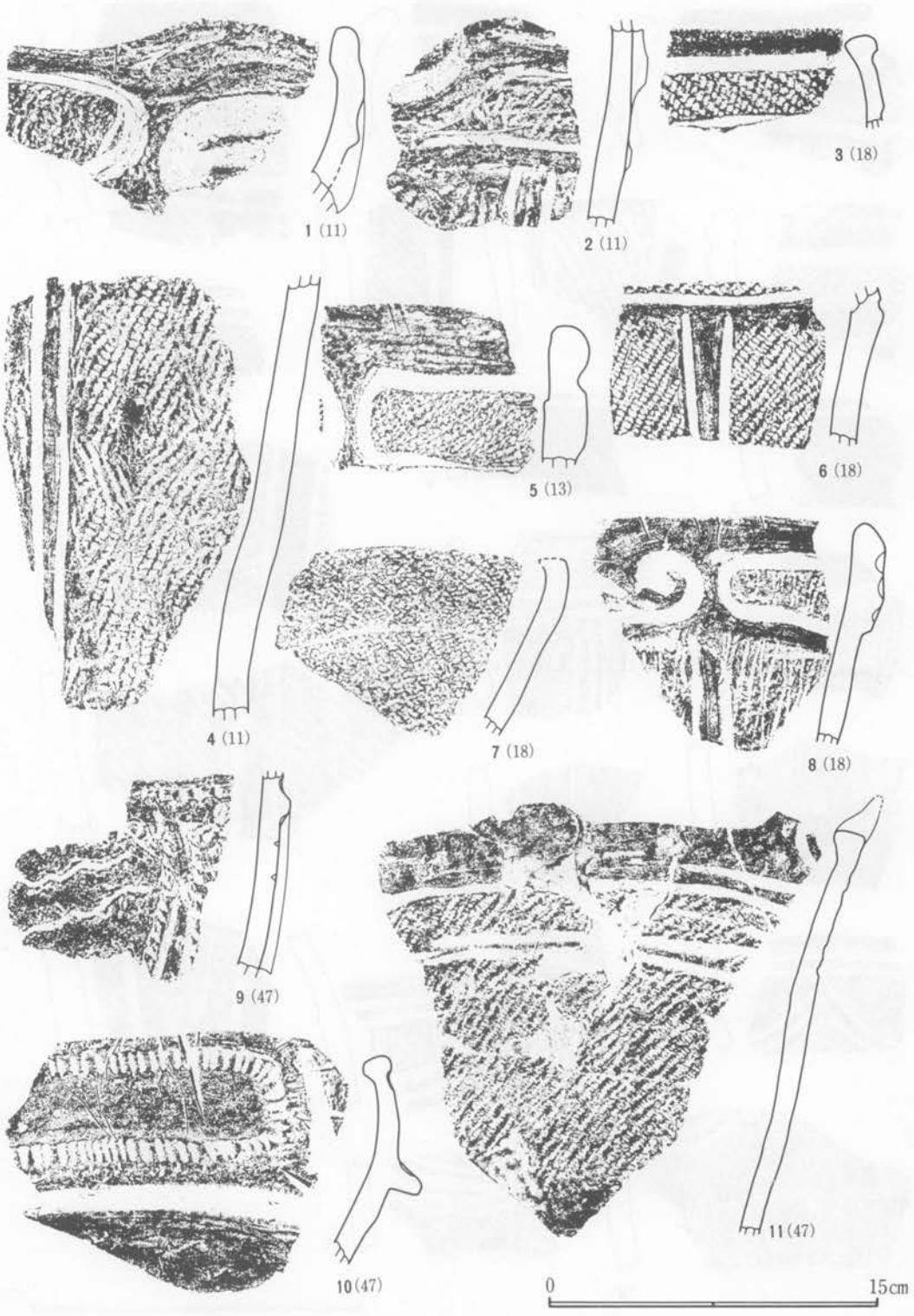
第29図　縄文式土器拓影図（９）



第30図　縄文式土器拓影図（10）



第31図　縄文式土器拓影図（11）



第32図　縄文式土器拓影図（12）

らの中でも文様，口縁の製作等で時間的な差は認められるものの概して新しい要素が含まれている。ただ，8－1，4あるいは9－14，16，17は，次の加曽利E式期にも認められるため本類とすることには疑問も残る。8－1，9－14では胎土に雲母が含まれており，一応第2類とした。ここで，新しいタイプのものとして，地文に縄文を有する土器もあり（9－9～11，13，15），さらに細別したほうがより適切かとも思われたが，量的にも少なく一括してしまった。

第3－a類　第3類は文様，時間差によって三～四分できる。ここでは，量的にも少ないため三分するにとどめた。まず，3－a類は加曽利EI式に比定できるものであり，10－1～10，12となる。さらに，10－1～6はI式の中でも古く位置づけられ，10－7，12では渦巻文が次第に簡略化され，新しいタイプへと移行する様相が窺われる。

第3－b類　第3類の主体を占める土器で，渦巻文は完全に消滅し，沈線間の磨消が一般化する。10－11，13，14はよくその特徴が表現され，11－1～4では枠状へと変化する。11－5～13は沈線と磨消の組合せとなり，11－11，12では撚糸も使用される。14，15は便宜的にここに含めた。

第3－c類　いわゆる連弧文を有する土器で，11－16，17，19，20がこれにあたる。3本1組の太い沈線で表現され，口縁部にも複数の沈線が認められる。地文は条線と撚糸とが使用されており，11－18はおそらくこの種の胴下半部であろう。

他に第32図では，縄文中期の住居址から出土した大形片を一括して図示した。12－9，10は阿玉台式土器で，他は加曽利EII式が主体となる。

4．石器（第33～36図）

縄文時代の石器は，前項で触れた住居址，土坑の遺構以外でも各区においても若干検出された。さらに，縄文時代以降の遺構からも出土しており，これらも含めて一括して本項で説明しておきたい。ここで図示した石器は合計74点となり，縄文時代に伴うと考えられた石器のすべてを網羅した。しかし，小破片でわずかに遺存している程度のものは除外した。数量的には10点を越えることはない。

これら74点の石器の器種の内わけは，磨製石斧27点，打製石斧11点，礫器2点，磨石13点，敲石4点，石皿5点，石鏃8点，スクレイパー2点，不定形2点となる。ここで器種別にみると，石斧類が卓越し，その反面狩猟具として使用する石鏃の数量が少ない。しかも漁労具としての土錘も比較的多いことを考えると，本遺跡での縄文人の生活は狩猟以外の生業に重点が置かれていたことも考えられる。

磨製石斧　1～24，26，28，31が磨製石斧である。刃部を中心に研磨しており，形状あるいは石材により研磨の度合は若干異なる。大半は欠損品であるが，特に6の刃部は研磨が著しく，表面は光沢を帯びる。15は頭部しか遺存していないが，典型的な乳棒状石斧となろう。14もそれに近い。4は表面の風化が著しく，研磨の有無は即断し難い。しかし，下端部右側にわずかに滑らかな面が遺存していたため磨製とした。使用された石材をみると砂岩（3，5，8，11～13，16，

18～20，24，26，28），次いで安山岩あるいは玄武岩の類（1，2，4，7，10，17，21，31）となり，緑泥片岩，緑色片岩（6，14，15，22，23）は5点と少ない。9は花崗岩である。

打製石斧　25，27，29，30，32～38が打製石斧となる。磨製石斧と比較してその量は少ない。27は大形礫の凸部を利用して石斧としたものであり，粗雑な作りではあるが大形品となる。他は比較的小形品となっている。使用石材は，ここでも砂岩（29，30，34，35，37，38）が多く，他に安山岩（25，32，36）花崗岩（27），泥岩（33）などがある。

礫器　2点存在し，39は安山岩製で打製石斧の可能性もある。周囲に若干加工を施している。40は砂岩製で，3～4回の剝離で刃部を作出しているが，鋭い刃部とは言えない。

磨石　41～53が磨石の類である。形状をみると，きれいな円形を呈するものは少なく，楕円形を呈するものが多い。完形品は6点あり，それらを観察すると，中央がやや凹んでいたり，打痕を有する。石材は，ここでも砂岩が多く，次いで安山岩となり，この2種で8割程度を占める。

敲石　54～57の4点を敲石とした。54は安山岩で，上部に顕著な打痕が認められる。55は上端から側縁にかけて使用痕が残る。55，56ともに砂岩。57は上下両端に明確な打痕を残す。

不定形石器　58は，表面にだけ小さな剝離痕が認められ，裏面は自然面そのままとなっている。あまり類例のない石器で，呼称に苦慮する。また，この石器は45号住居址に伴う古墳時代の所産となる可能性が強く，図示の都合で本項に入れたことを付記しておく。石材は砂岩。59は両側面に著しい使用痕を認めることができる。上下両端にも若干使用痕があるところから敲石の類に入るかもしれない。石材は粗粒砂岩である。

石皿　計5点が出土した。すべて欠損品であり，62が大形品でかろうじて形状を把握できる程度となる。石材は60，63，64が安山岩，61,62が砂岩となっている。

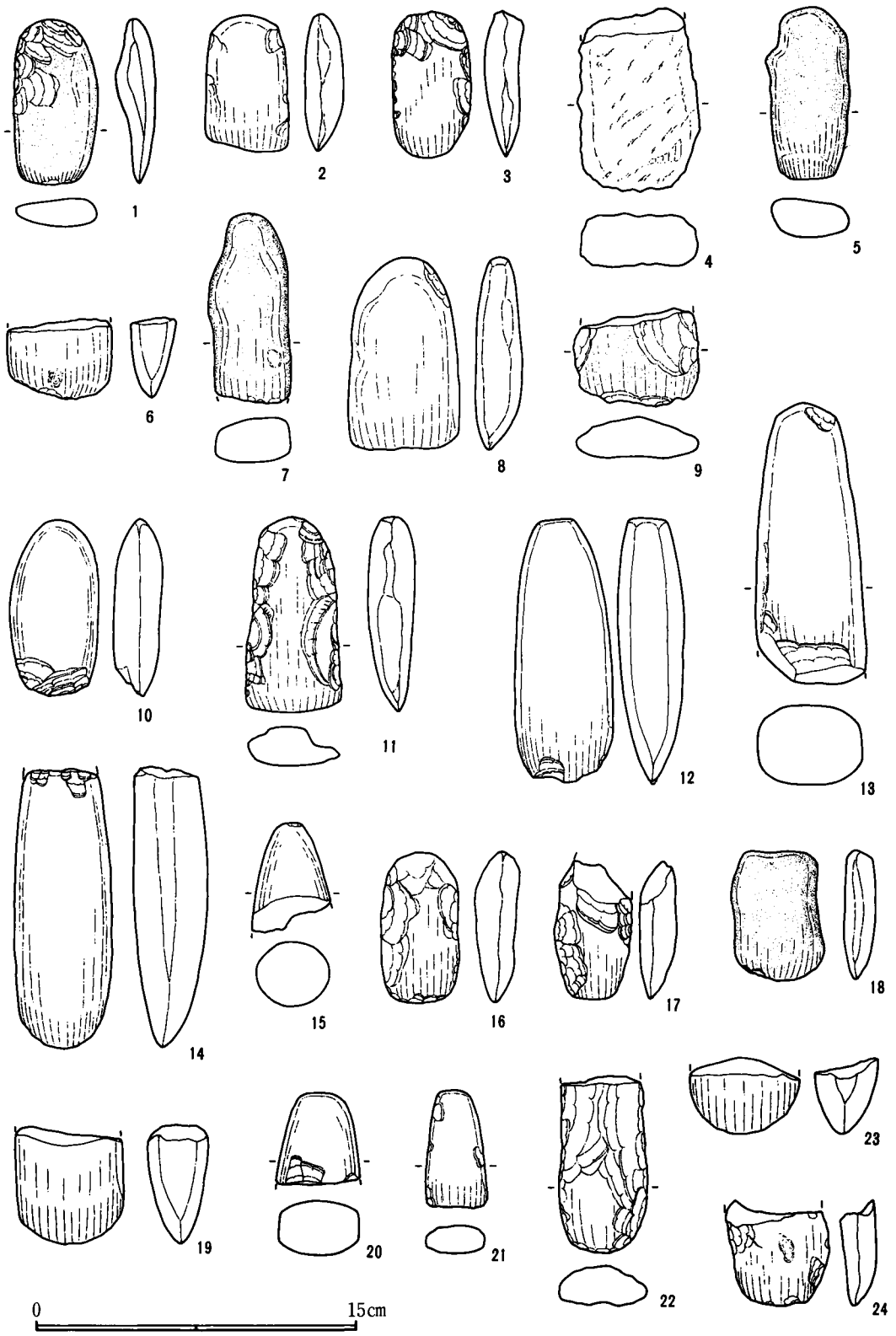
石鏃　65～72が石鏃で，縄文時代の遺構から出土したものは，65，66の2点だけである。70，72はきれいな剝離で仕上げられているが，71は未成品かもしれない。石材はチャート（65,68,69,72）と黒曜石（66,67,71）の他に凝灰岩（70）製も1点存在した。

スクレイパー　横形と縦形のスクレイパーが1点づつ出土した。73はチャート製で，周囲を丹念に加工して仕上げている。表面中央には，一次剝離の際にできた稜線を残す。つまみ部の加工もしっかりとした完形品である。74は黒曜石製で，作りは概して粗雑となる。刃部も小さな剝離で簡単に作出し，つまみ部も同様な作り方を示す。

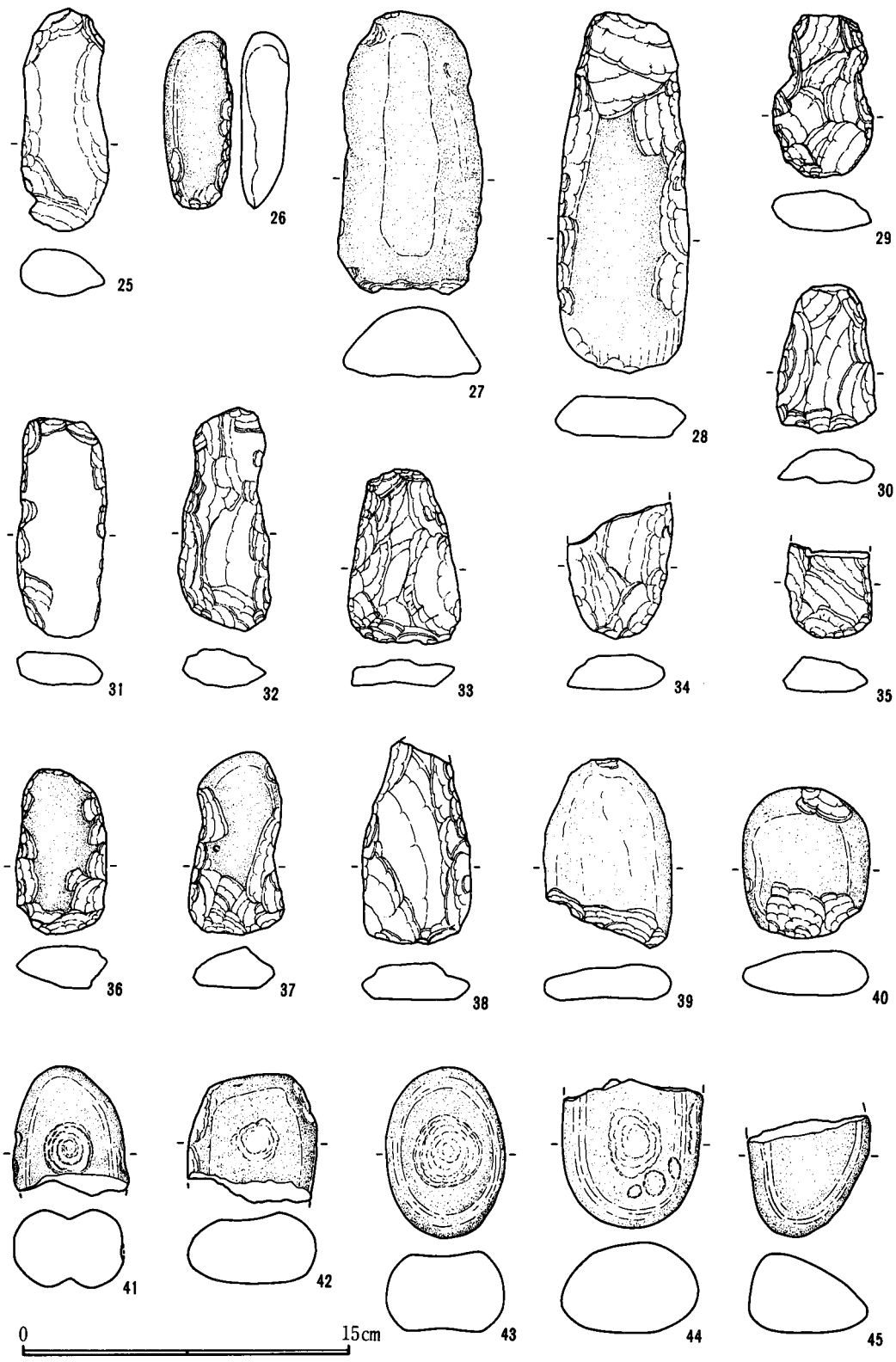
5．土製品・石製品（第37～39図）

土器，石器以外の遺物として，土器片利用の土錘と軽石製品が出土している。土錘は縄文中期の土器片，しかも加曽利E式期のものが主体となる。

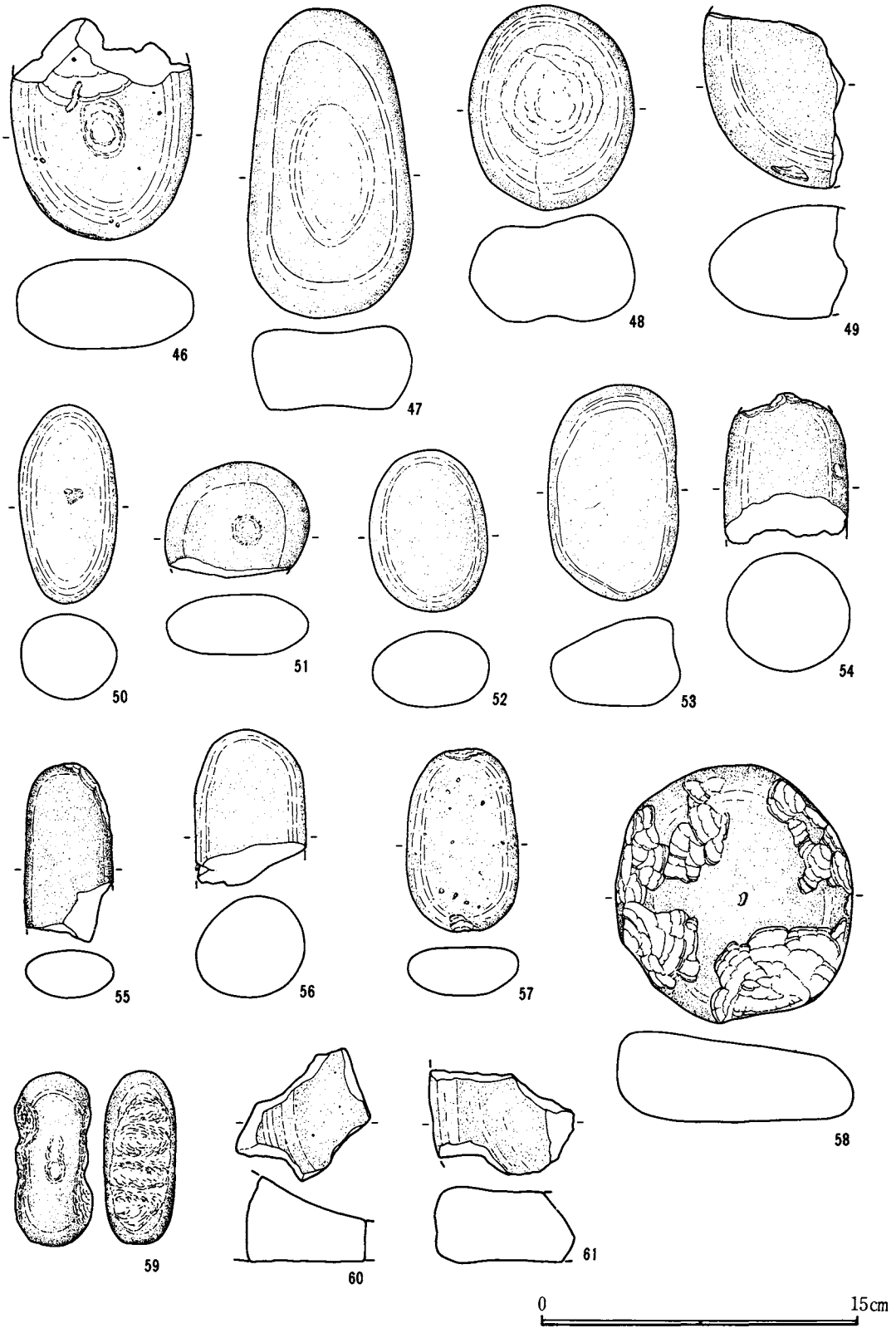
土錘　1は内外面に条痕を有し，胎土に繊維を含む。茅山期の土器である。2，3は胎土に繊維を含むようであるが，はっきりしない。4，5は表面に連続爪形文を残す。勝坂式土器となろう。6～21は竹管状工具による爪形文あるいは縄文の他に，胎土には雲母が混入されている。阿玉台



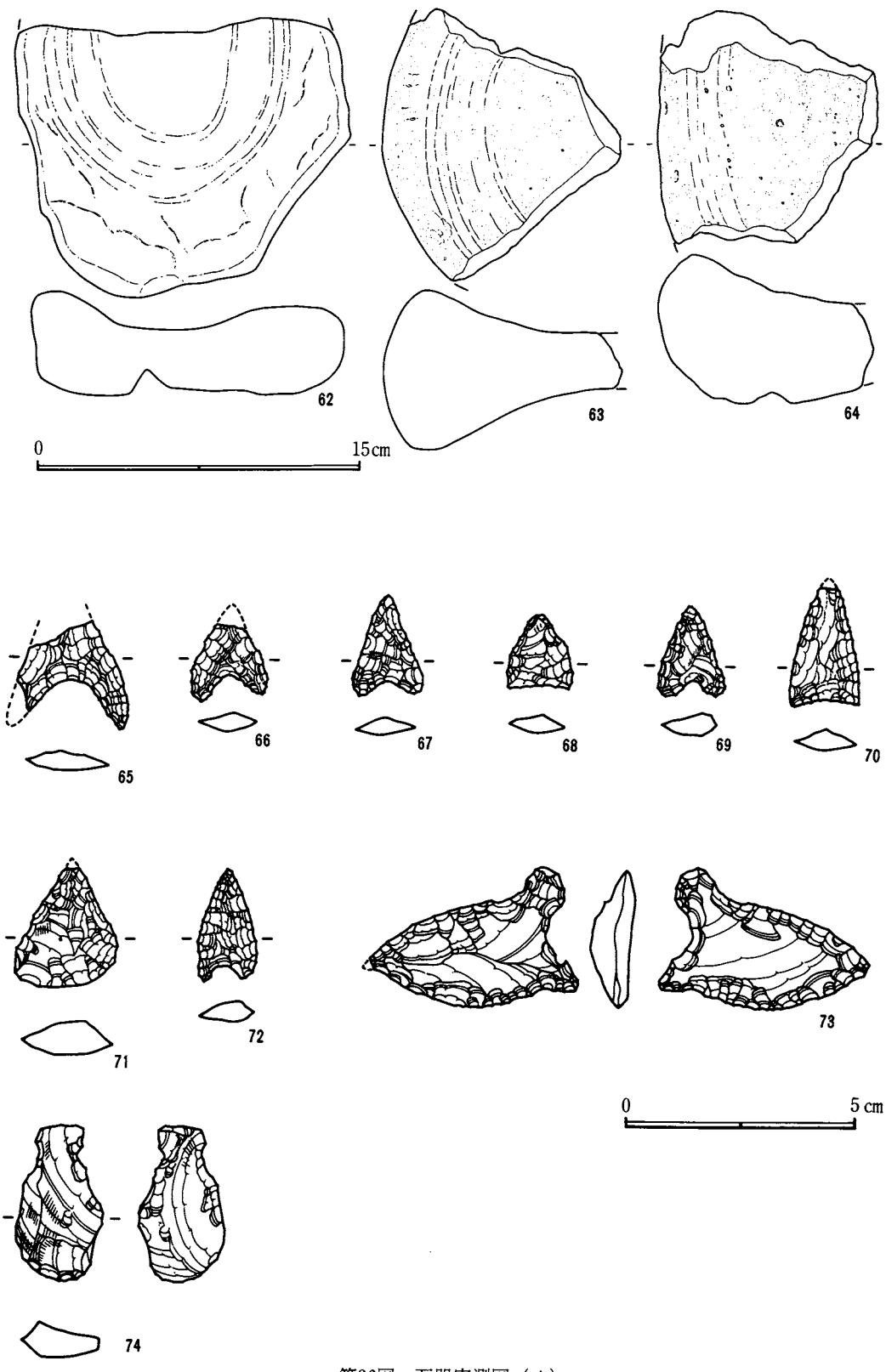
第33図　石器実測図（1）



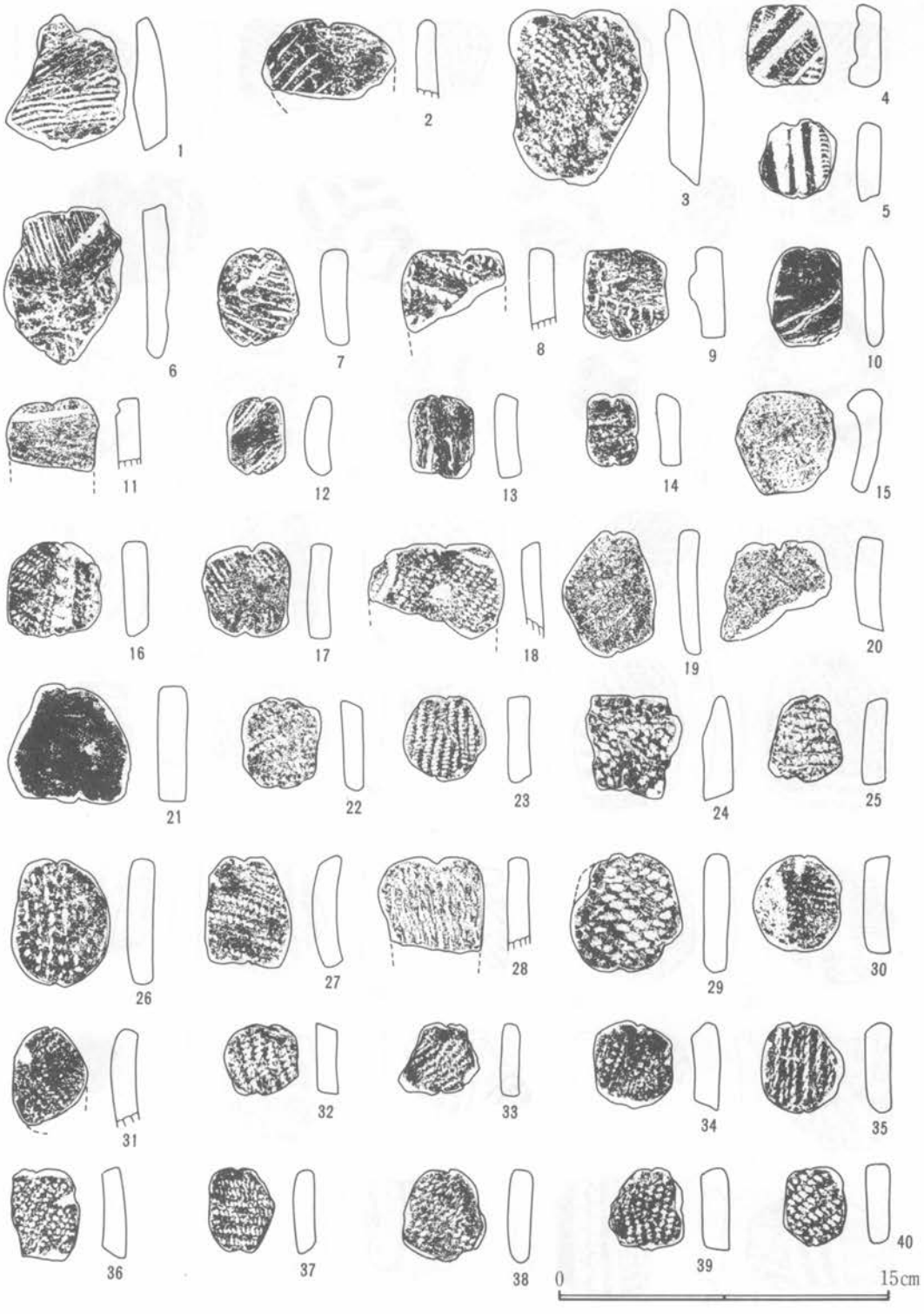
第34図　石器実測図（２）



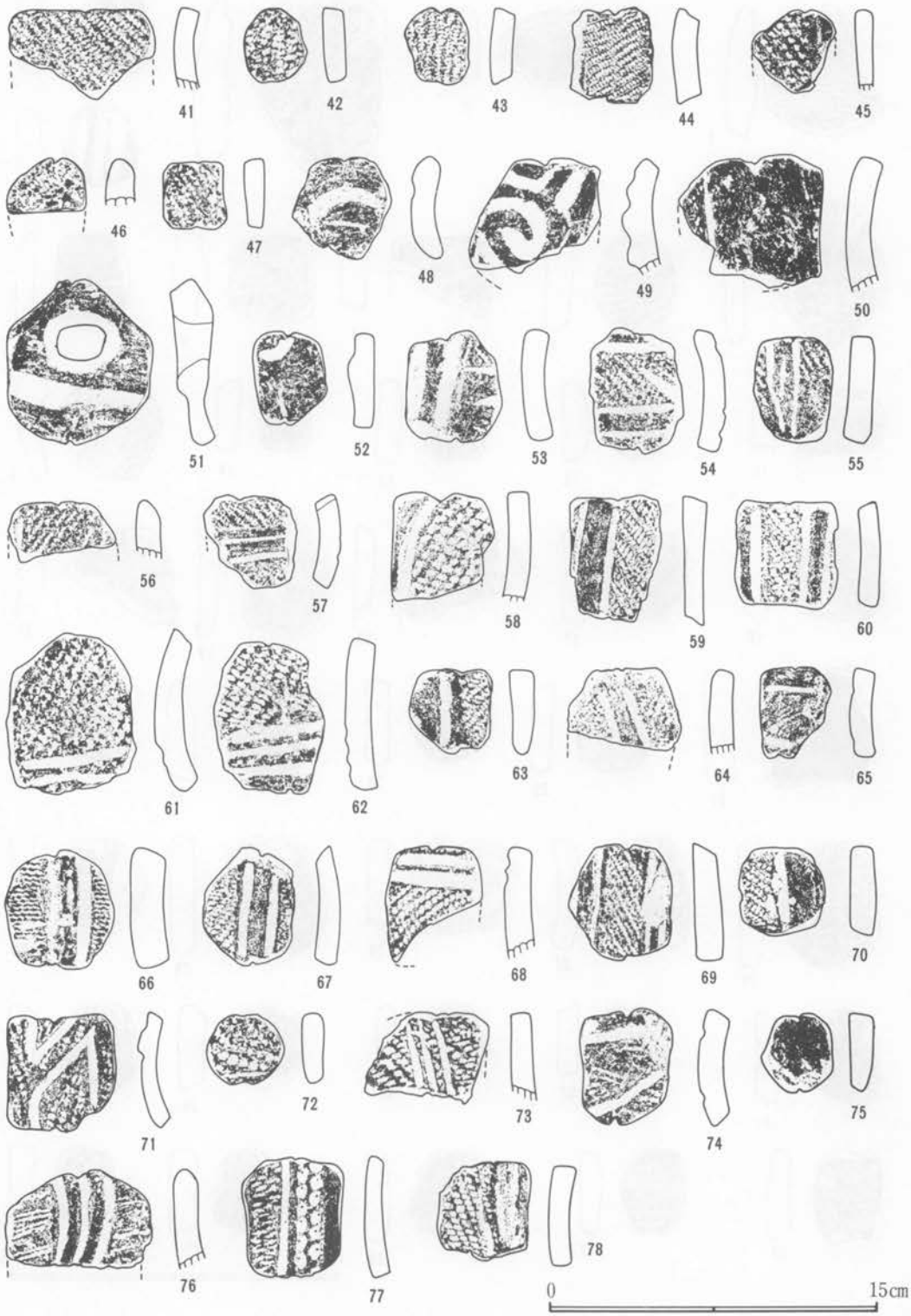
第35図　石器実測図（3）



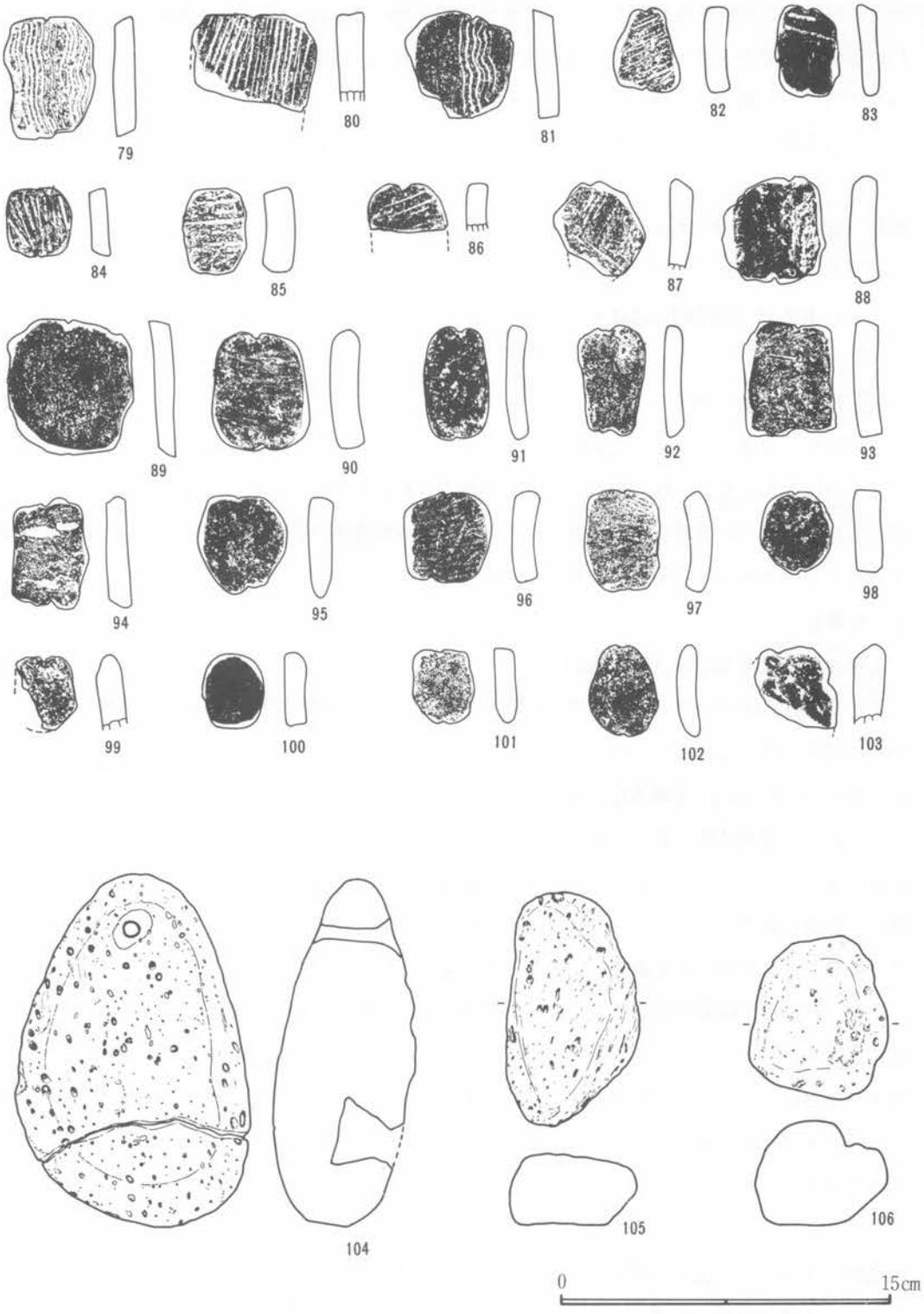
第36図　石器実測図（４）



第37図　土製品実測図（1）



第38図　土製品実測図（2）



第39図　土製品・石製品実測図

式土器の利用であろう。22～103はおそらく加曽利E式となろうが，文様の磨耗している小片等もあり，判然としないものもある。22～47までは縄文だけのもの。48～53は渦巻文の一部，つまり口縁部周辺のものを並べた。54～78は複数の沈線を有し，その間を磨消としているもの。77では棒状工具による刺突が2例あり，加曽利E期でも新しいタイプである。79～87は数条の櫛歯状工具による条線をもつ。88～103は胴下半部から底部に至る部分を利用したものが多く，無文となる。

軽石　104は87号住居址から出土。上部に穿孔が認められる。一部欠損するが大形品となる。105は縄文前期と思われる48号住居址から出土した。これといった加工は施されていない。106は11区からの出土で，時期的にははっきりしない。

第3節　古墳時代

古墳時代の遺構としては，住居址，土坑墓がある。中でも土坑墓は3基と少なく遺物にも見るべきものはなかった。一方，住居址は47軒が検出され，そこから出土した遺物には周辺遺跡では認められないほどの重要なものもあった。この時期が本遺跡の主要構成部分となっており，当地区では少ない古墳時代初頭と言う貴重な資料となり得た。

1．住居址

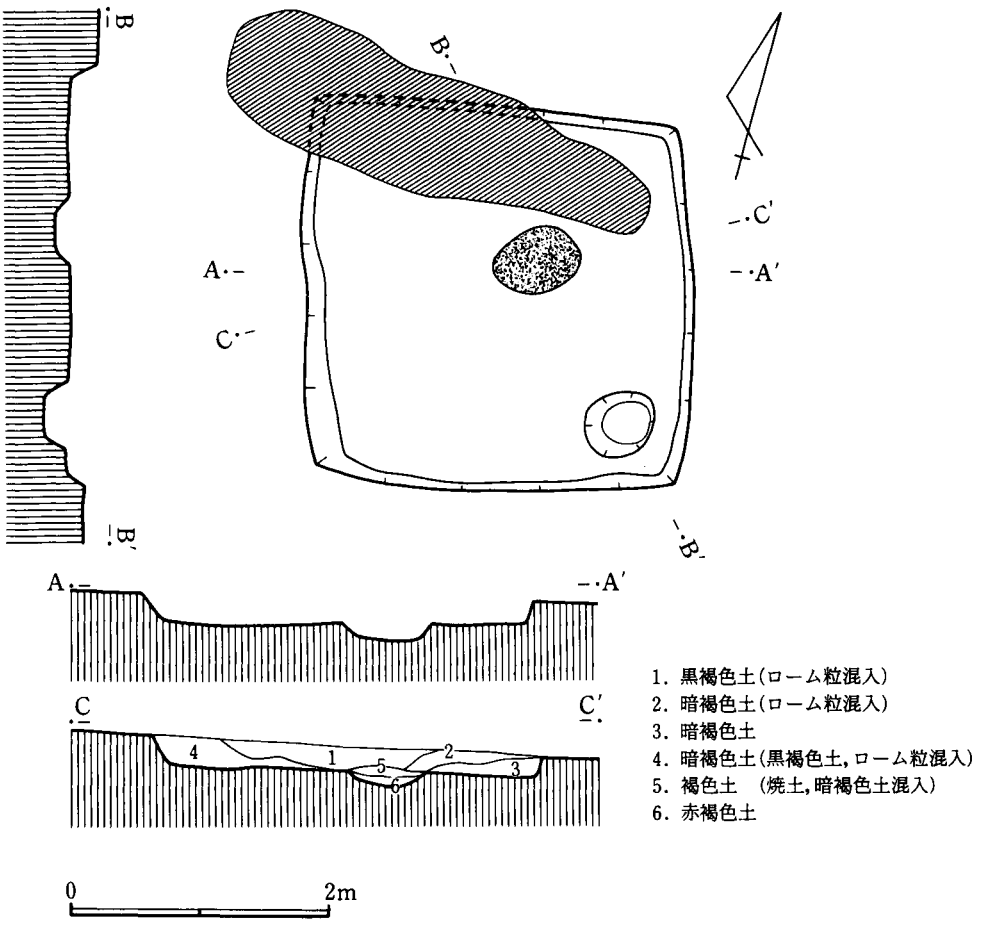
1号住居址（第40図）（第86図1）

本址は調査区住居址群の中で北端に位置する。第5号墳周溝から南へ約4mの距離にある。北西側に攪乱を受けている。平面プランは，方形を呈するが西壁がやや外側にゆがんでいる。規模は3.0×3.1mを測る。主軸方位はN－15°－Wを指す。床面は堅くほぼ平坦であるが所々に攪乱を受けており，遺存状態はあまりよくない。壁は南西隅でやや斜めに立ち上がる他，床面よりほぼ垂直に立ち上がる。壁高は全体的に高くなく，14 cm～21 cmを測り東～北壁が西～南壁に比べ低い。壁溝は確認されなかった。炉は住居中央より北側に位置する。床面を13 cm程皿状に掘り込んでおり，底面は平らである。焼土はあまり検出されなかった。ピットは床面の遺存状態がよくなかったため，確認が困難であったが南東隅で1か所検出された。径は51×53 cmを測り，円形を呈する。掘り込みは床面から16 cm程で底面は平らである。主柱穴かどうか疑問がのこる。覆土は4層に区分された。黒褐色土，暗褐色土が主体を占め，流れ込みによる堆積状態を示している。第5層は炉の堆積土であろう。

遺物は僅かである。すべて土師器破片で覆土中に散在していた。実測し得たのは高坏形土器1点である。

遺物　本址から出土した遺物は土器に限られた。甕，壺，高坏等の破片が数十片と少ない。図示できた土器は高坏の坏部が一点だけとなる。

図示した高坏は，覆土中から出土した土器片3点が接合したもので坏部が約⅓ほど遺存してい



第40図　1号住居址実測図

るにすぎない。内外面はきれいに赤彩が認められ，仕上げは良好である。脚部での破損は，粘土紐の接合痕に沿って円形に剝れている。

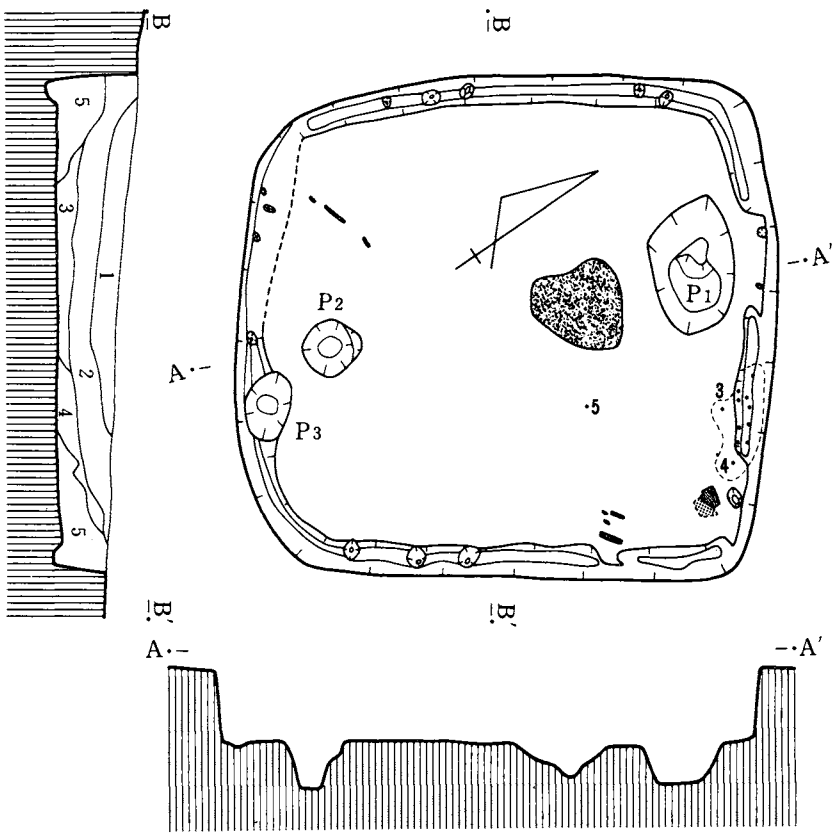
2号住居址（第41図）（第86図2～4）

本址は1号住居址の南東約4mに位置する。平面プランは隅丸方形を呈し，北，南壁がやや外側に張りをもつ。規模は3.9×4.3mを測る。主軸方位はN－30.5°－Eを指す。床面は堅く平坦であるが，北東隅寄りに攪乱による浅い落ち込みがみられる。また，南西側と東側に部分的に焼土，炭化材が残っていた。壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁高は36～66cmを測り西隅で最も高く，東隅で最も低い。壁溝は南壁と北壁の一部ではっきりした掘り込みがみられないが，その他は全周する。床面からの深さは5cm前後を測る。壁溝中あるいは壁に接して小ピットが検出されたが規模は一定していない。炉は中央よりやや北側に位置する。床面をすり鉢状に掘り込んでおり，底面が窪んでいる。径70×72cm，深さ24cmを測る。底面より10cm前後の厚さでよく焼けたロームブロックがつまり，その上に焼土の堆積がみとめられた。ピットは3か所より検出された。

P 1 は最も大きい。径 66×106 cm の楕円形で深さ 30 cm を測る。床面からすり鉢状に掘り込まれており，底面および壁に凹凸がある。覆土中にロームブロックが多量に含まれていた。P 2 は径 40×42 cm，深さ 33 cm を測る。底面から中位まで方形に掘り込まれており段を有する。P 3 は壁に接して掘り込まれている。径 36×54 cm，深さ 20 cm を測る。このうち P 1 は掘り込みの状態から本址には伴わないものと考えられる。覆土は 6 層に区分された。黒褐色土，暗褐色土が主体を占め，流れ込みによる堆積状態を示している。

遺物は，炉の東側，特に東壁際にまとまって出土した。甕形土器が 2 点であるが，横位で部分的に破片が散在していた。

遺物　本址から出土した遺物は，土器だけで量的にも少ない。図示した 3 点以外には数点の小破片だけとなる。一括土器はいずれも甕形土器で，3，4 は床面に接して検出されたところから本址に伴うと考えてよい。



1. 黒褐色土(褐色土混入)
2. 暗褐色土(ローム粒,褐色土混入)
3. 褐色土　(ロームブロック混入)
4. 褐色土　(ローム粒混入)
5. 褐色土　(ローム粒,黒褐色土混入)

第41図　2 号住居址実測図

2は底部片で，2枚以上の木葉痕が認められ，仕上げの段階で軽くヘラ削りを施したようである。3は1と同様底部と口縁部を欠損するが，口縁は約⅔が失われている。口縁から頸部にかけて2cmほどの間隔で指頭による押圧痕が認められ，胴部はほぼ球形に近く，横方向にきれいなヘラ整形が施される。4は底部と口縁の一部が欠損している。器面の整形は，ヘラにより施されているものの，その方向は様々となる。仕上げも概して粗雑でいかにも実用品らしい。また，底部の周辺にはスス状炭化物の付着も認められる。器形についてみると，最大径は中央よりもやや下位にあり，頸部がゆるやかに外反するところが特徴といえよう。胎土には小石が多く含まれ，色調は赤褐色を呈す。

4号住居址（第42図）（第86図5～7）

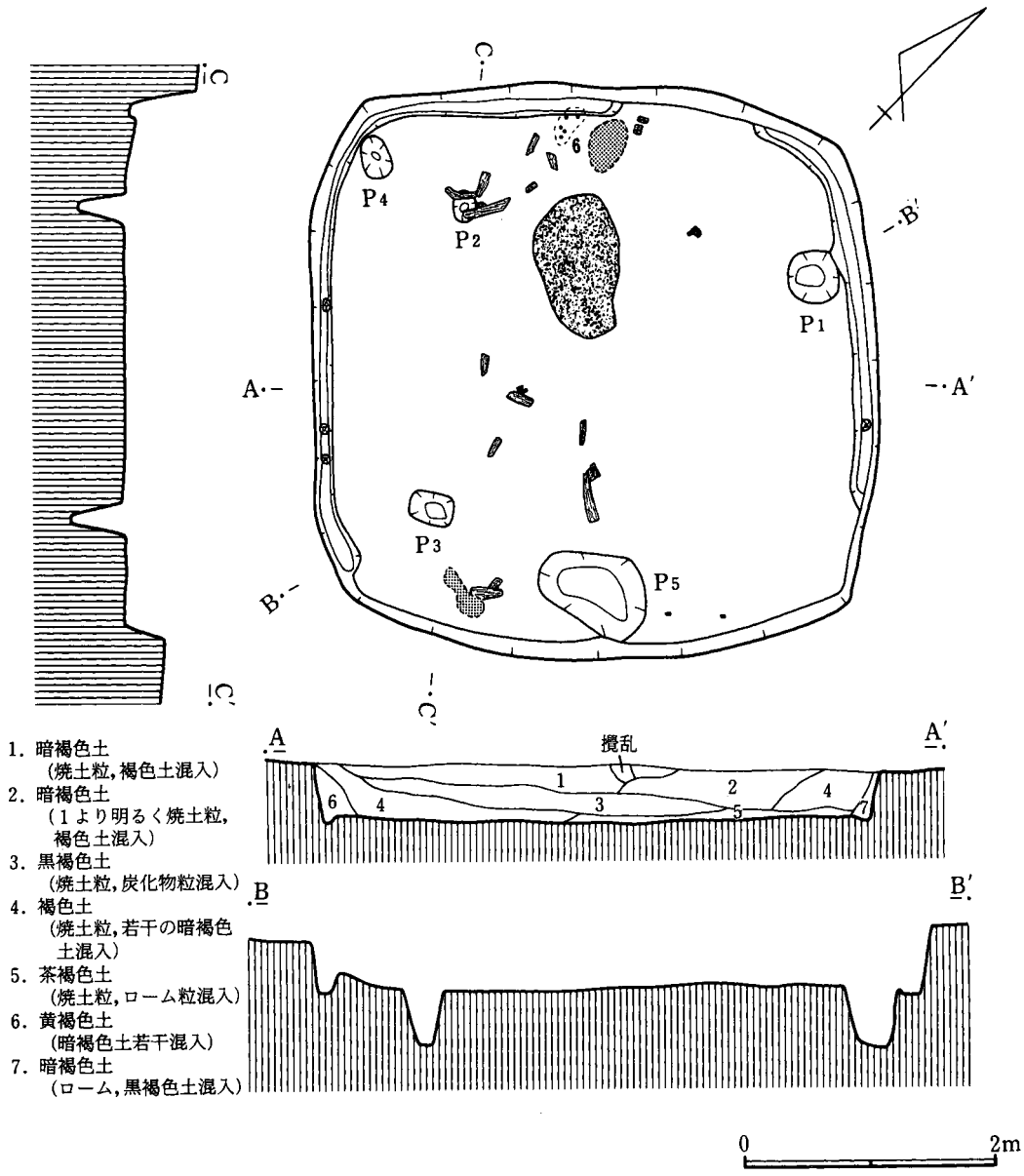
本址は台地東南側縁辺で，2号住居址から南へ約8mの距離に位置する。平面プランは各辺がやや張る隅丸方形を呈する。規模は4.5×4.5mを測る。主軸方位はN—46.5°—Wを指す。床面は，数か所に根によると思われる攪乱を受けているが全体的に堅くしまりがあり平坦である。床面上には部分的に焼土，炭化物が残存し，また床面も火を受けた形跡が認められた。壁は床面よりほぼ垂直に立ち上がり，全体的にしっかりしている。壁高は北壁で46cm，南壁で32cmを測る。壁溝は南隅から西壁下にかけて確認された。断面は「U」字形を呈し，幅10～15cm，深さ6～14cmを測る。壁溝中には浅い窪みが所々に認められたが規模は一定していない。炉は住居中央よりやや北西寄りに位置し，中央部を深く掘り込んでいる。長径111cm，短径64cm，深さ22cmを測る。底面より10cm前後によく焼けたロームブロックがつまっており，焼土はその上に堆積していた。ピットは5か所より検出されている。P1は径41cm，深さ33cmを測る。深くしっかりしており，覆土下層からこぶし大の石が平らな面を上にして出土している。P2～P4は径26～36cm，深さ24～29cmを測り，ほぼ同規模である。P5は径54×93cm，深さ30cmを測る。断面はすり鉢状を呈し，底面，壁面に凹凸が認められる。このうちP1～4が柱穴と考えられる。P5は出入口部に付属する施設であろうか。覆土は7層に区分された。暗褐色土，黒褐色土，褐色土が主体を占め，周辺からの流れ込みによる堆積状態を示している。下層の床面付近では焼土粒，炭化粒の混入が多い。

遺物は少ない。炉の北側より，壺形土器2点が破片で出土している。また，P5のやや西側より手捏土器が出土している。床面上の焼土，炭化材の状況から，本住居址は火災に遇ったものと考えられる。

遺物　本址では，壺2個体，甕2個体の他手捏土器と十数片の土器片が出土し，小礫も覆土中から若干出土したが石器と言えるものはない。図示した土器は各1点であり，完形品はない。

5は甕で，底部を欠損し約⅓の遺存となる。口唇部には棒状工具による刻目が施され，その直下には5～6条の輪積痕が整形されずに残る。器内外面は入念な整形が認められるが，胎土が粗悪なため器面の剝離が著しい。色調は黒褐色ないし暗褐色を呈す。6は胴下半部を欠損する壺で

あり，遺存は約½となろう。口縁部は，その端部がわずかながら欠損しており，だいぶ磨耗しているところからかなり長期間使用していたものであろう。頸部はゆるやかに外反し，胴部はほぼ球形を呈していたものと思われる。器面はよく調整されているが，内面は剝離が著しい。色調は赤褐色を呈するが，赤彩は認められない。7は手捏土器で約½が遺存する。口縁も失なわれている。器面には2～3条の輪積痕が明瞭に表われており，内面では指頭あるいはヘラにより輪積痕を整形する。胎土には小石が混入され，色調は褐色を呈す。



第42図　4号住居址実測図

10号住居址（第43図）（第86図8・9）

本址は1号墳の北に位置し，12—A号住居址から東へ約11mの距離にある。11号住居址と重複関係にある。平面プランは方形を呈し，規模は4.3×4.6mを測る。主軸方位はN—96°—Eを指す。床面は全体に堅緻であり，特に炉の西側周辺が著しい。壁は重複している西～南壁にかけてもはっきりと立ち上がりが確認され，全体に遺存は良好であった。壁高は，北壁51cm，南壁40cmを測る。南壁を除いて壁溝が巡る。幅10～24cm，深さ3～10cmを測る。炉址は東壁寄りに位置し，径58×113cmの楕円形を呈し，深さ10cmの皿状に掘り込まれる。焼土はわずかであるが，炭化粒が多く良く焼けていた。ピットは5か所より検出された。P1～P4が主柱穴である。径28～34cm，深さ47～70cmを測る。いずれもしっかりと掘り込んであった。P5は貯蔵穴である。ほぼ円形を呈する。径53×60cmを測る。壁，底面ともしっかりしており，底面は平らである。深さ48cmを測る。覆土は4層に区分された。黒褐色土が主体を占める。床面付近では，焼土，炭化材が多量に堆積している。

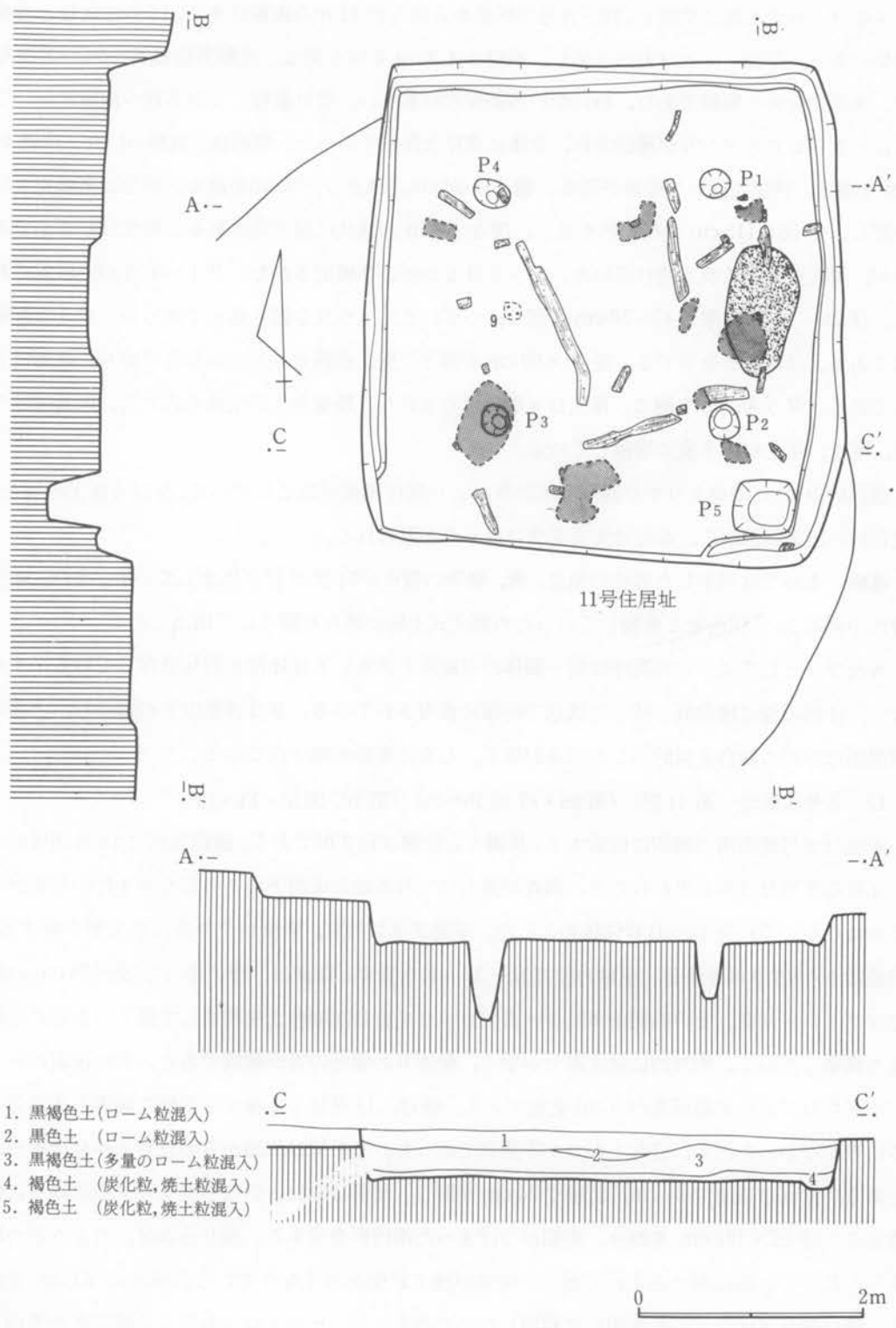
遺物は少ない。中央よりやや西側の床面直上より高坏脚部が出土している。なお床面上の焼土，炭化材の出土状況から，本址は火災を受けたものと思われる。

遺物　本址では図示した高坏の他に，壺，甕等の破片が約20片ほど出土している。また，縄文時代中期の11号住居址と重複しているため縄文式土器の破片も混入して出土した。

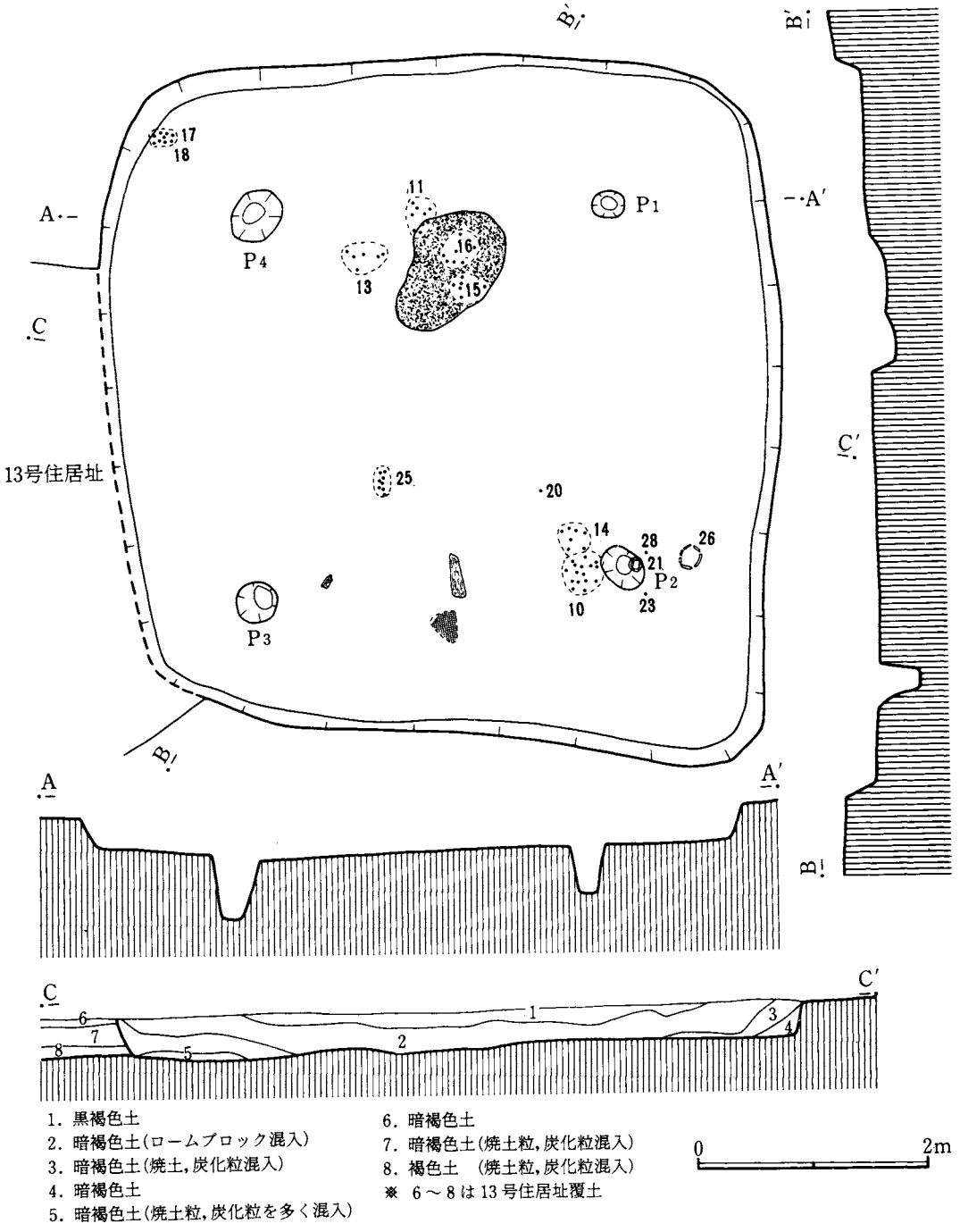
8及び9として図示した高坏は同一個体の可能性もある。8は坏部が約⅙遺存しているにすぎない。坏部の稜は接合痕を残した状態で明確に表現されている。9は脚部以下が遺存し，上端の破損部は坏部の接合を目的とした凹みが残る。ともに赤彩が施されている。

12—A号住居址（第44図）（第86・87図10～29）（第107図5・13～15）

本址は4号墳周溝の南側に位置する。周溝との距離は約2mである。確認当初は13号住居址との2軒の重複だけかと思われたが，調査が進むにつれ本址の床面下にさらにもう1軒の存在が明らかになり，これを12—B号住居址とした。平面プランは東，南壁がやや歪んだ方形を呈する。規模は5.9×5.9mを測る。主軸方位はN—3°—Eを指す。床面は，壁に沿って58～79cmの幅でソフトローム面，その内側全体にロームブロックを含む暗褐色土を利用して堅くつき固めた貼床を構築している。相対的に貼床部分が堅く，壁寄りの部分の方が軟質である。また床面のレベルが平均しておらず高低差が5cm前後である。壁は，13号址と重複する西側で両者の床面の高さに差がなかったため，立ち上がりが不明確であった。その他は床面からの立ち上がりは緩やかである。壁高は南壁で34cm，北壁で24cmを測る。壁溝はない。炉は中央よりやや北寄りに位置する。径82×122cmを測り，南側がつぼまった楕円形を呈する。掘り込みは，ちょうどつぼまった部分で2段に掘り込まれており，南側が浅く北側が深くなっている。深さは23cmを測る。浅い部分は灰などのかき出しに利用したのであろうか。ピットは4か所より検出されている。住居の四隅にほぼ等間隔で配されており，柱穴と考えられる。径30～42cm，深さ24～62cmを



第43図　10号住居址実測図



第44図　12－A号住居址実測図

測る。覆土は5層に区分された。黒褐色土，暗褐色土が主体を占め，流れ込みによる堆積状態を示している。

遺物は床面上より多量に出土している。出土位置を大別すると，P2周辺，炉址上面，北西隅

にまとまっている。甕形土器，小形壺形土器等は，破片で押し潰された状態であった。

遺物　本址は後述する12—B号住居址と重複し，かつ時期的にも新しいためほとんどの遺物は本址に帰属すると考えられた。だが，覆土中から出土した土器については，古い時期(12—B号)のものが若干混入しているものと思われる。遺物の出土量は豊富で壺，甕，坏，高坏，器台，鉄製品，土製品となり，資料的にも興味をそそるものである。

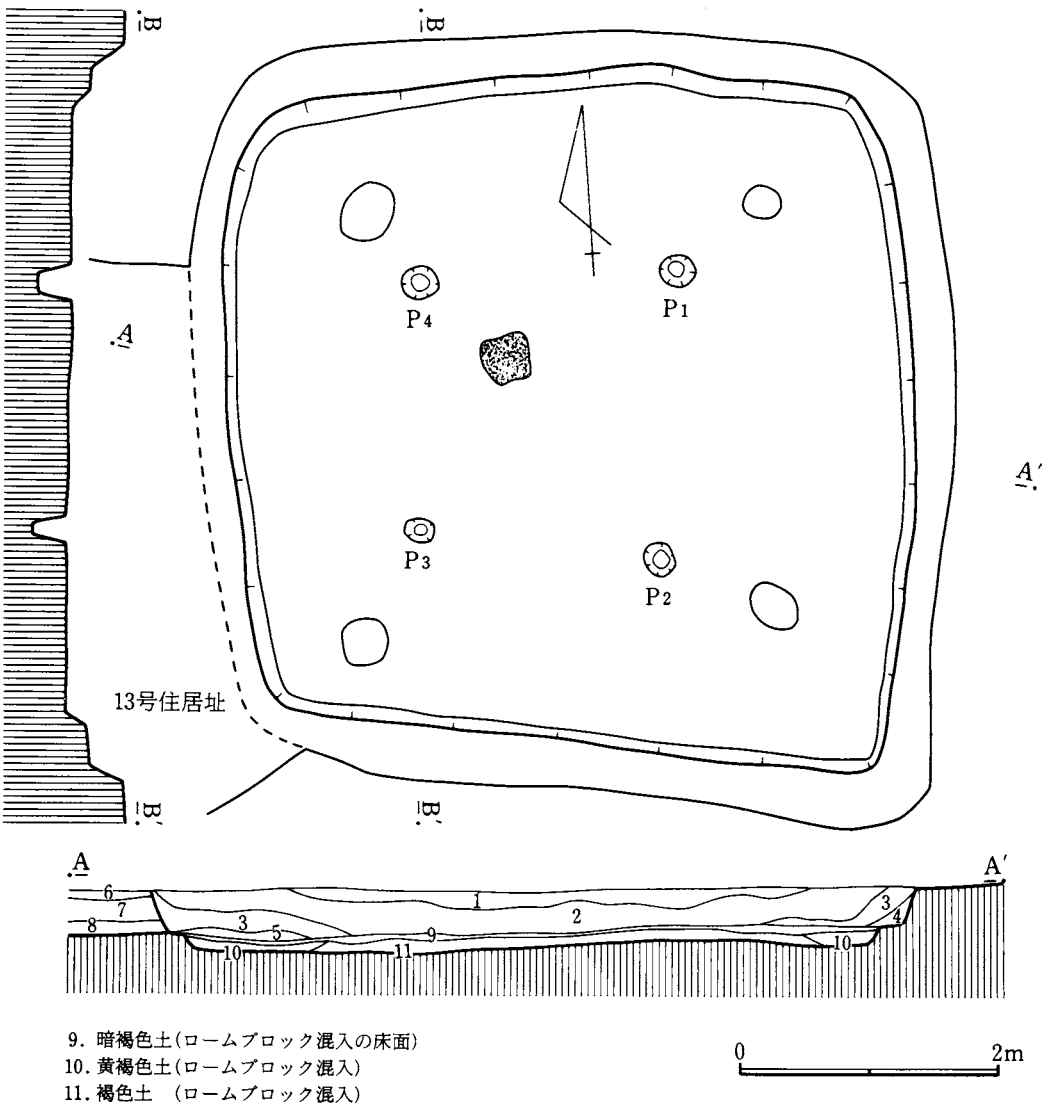
10～14は甕で，頸部には輪積痕が残っている。10は口縁部に欠損が認められるが，他は底部に至るまでよく残っており，最大径は胴下半部に位置する。また，口唇部の刻目と頸部の5～6条の輪積痕は，弥生期の特徴であり他の土器群よりも古い様相をもつものとして把えられる。器面は黒褐色を呈し，スス状炭化物の付着が著しい。14の遺存も良好で，器面は軽くヘラ整形を施す。11は口唇部の作りに特徴があり，沈線をめぐらせたような感を呈す。11，13ともに遺存は約½となる。12は口縁から胴部にかけて約⅓ほどの遺存で口縁部内外面に簡単な刷毛整形を施す。11～14の色調は淡褐色ないし褐色を呈し，スス等の付着は認められない。15～18は小形品で，甕と壺に分類できる。18は口縁と底部を欠損するが，壺としてもよいであろう。16の器形は甕に近く，赤彩も鮮明に残る。15～17の色調は褐色ないし赤褐色で18は暗褐色を呈す。19，20，22は底部で，22では若干赤彩が遺存しており，壺となろう。22は埦の類で，底部の作り方は10の小形壺に類似する。赤彩は内外面に僅かに残る程度であり，色調は褐色を呈す。23，27，28は手捏土器であり，23の器面は比較的整形されている。いずれも褐色ないし暗褐色を呈す。25，26は高坏で，同一個体の可能性もある。ともに赤彩は鮮やかに残る。24も高坏で脚部に穿孔が2個だけ確認される。29は器台で脚部だけが遺存する。孔は小さく4個穿たれており，24，29ともに赤褐色を呈す。

他に鉄製品としての鎌の破片と土製品として土錘，土玉が3点検出された。土玉はいづれも形が異なり，24は約⅓の遺存となる。

12—B号住居址（第45図）

12—A号住居址の貼床の下から検出された住居址である。平面プランはA号住居址と同じような方形を呈する。規模は5.1×5.3ｍを測る。主軸方位はN—3°—Eを指し，A号住居址とまったく同じである。床面は堅くしまりがあり，ほぼ平坦である。壁は全体にわずかに確認された。A号址床面からの深さは14～16 cmを測る。壁溝はない。炉は中央からやや北西に位置している。35×38 cmの歪んだ方形を呈し，掘り込みは浅く深さは7 cmを測る。ピットは4か所より検出されている。壁から中央寄りであるが，四隅に配されており柱穴と考えてよいだろう。径24～28 cm，深さ19～24 cmを測る。覆土は3層に区分されたが，9層貼床部と10・11層はA号住居址を構築する際に充塡されたものであろう。遺物は少なくすべて土器細片である。

なお，12号住居址はプラン，柱穴の配置などから，同一居住者による住居の拡張，建て換えが行なわれた結果によるものと考えたい。

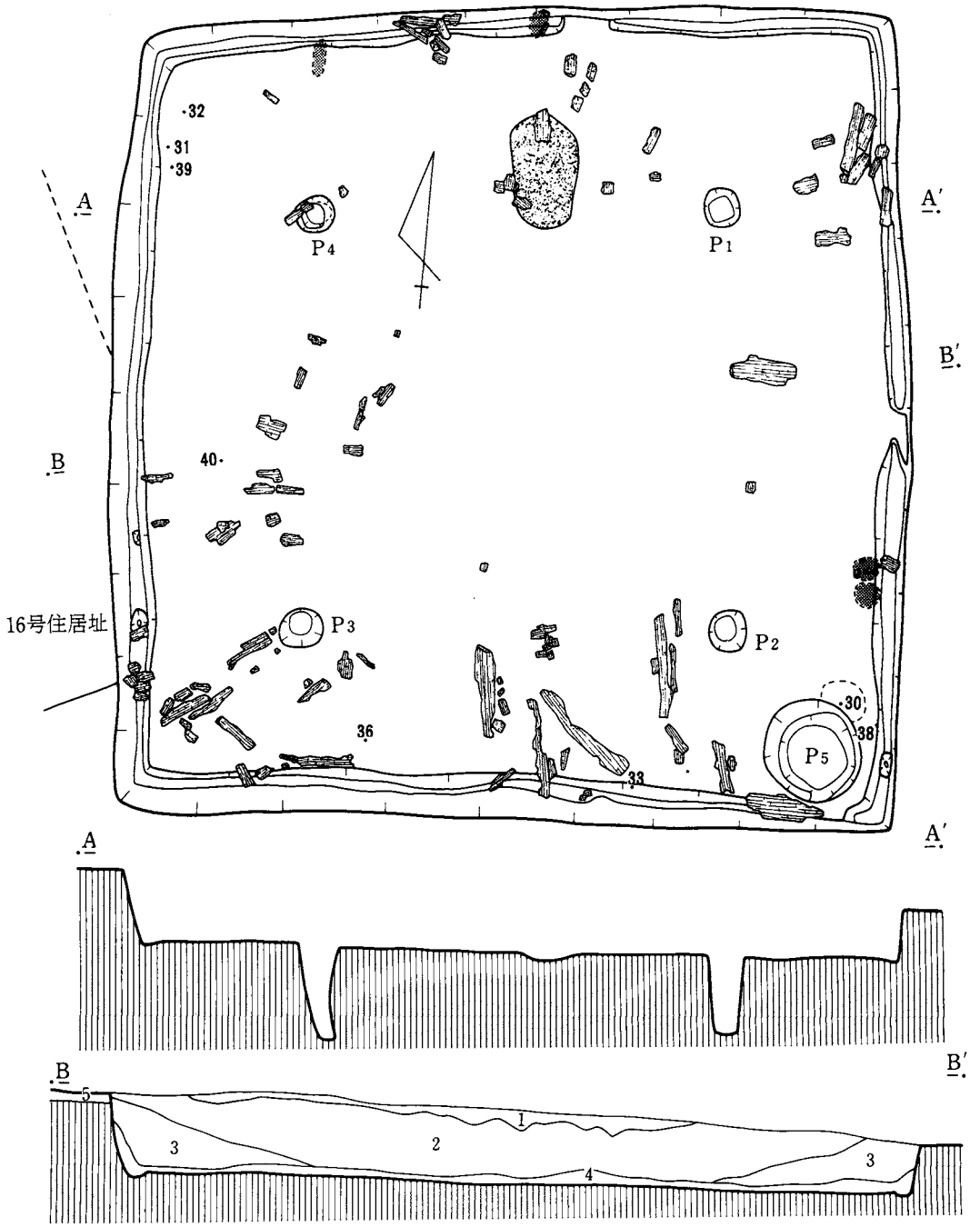


第45図 12－B号住居址実測図

遺物 確実に本址に伴う遺物として図示できるものは出土しなかった。床面に接し若干小破片が検出されたにとどまった。

15号住居址（第46図）（第87図30～40）

本址は1号墳南側に位置し，16号住居址と重複関係にある。両址の新旧関係は，確認時の精査および土層面の検討により，本址のほうが新しく16号住居址のほうが古いことが確認されている。平面プランは整った方形を呈する。規模は6.9×6.9mを測る。主軸方位はN－5°—Wを指す。床面は全体に堅くしまりがある。特に柱穴より内側と炉北側，P5周辺が堅緻である。壁の状態は良く床面よりほぼ垂直に立ち上がる。壁高は東壁で41～43 cm，他の壁は51～60 cm を測る。



1. 褐色土　(焼土粒混入)
2. 黒褐色土(ローム粒混入)
3. 黒褐色土(ローム粒多量に混入)
4. 黄褐色土(ローム粒,ロームブロック,炭化粒混入)
5. 暗褐色土(焼土粒,炭化粒混入,16号住居址覆土)

第46図　15号住居址実測図

壁溝は，北壁，東壁，南壁の一部でそれぞれわずかに欠けてはいるがほぼ全周している。幅 10～20 cm，深さ 3～15 cm を測る。部分的に幅，深さにへだたりが認められる。炉は中央より北壁寄りに位置する。やや肩の張る長楕円形を呈する。径 54×95 cm を測る。床面を皿状に掘り込み，底面にはそれ程凹凸はない。深さ 10 cm を測る。ピットは 5 か所より検出された。柱穴は四隅にほぼ等間隔に配されたＰ 1～Ｐ 4 であろう。Ｐ 4 はやや斜めに掘り込まれている。径 33～37 cm，深さ 65～81 cm を測る。東南隅に位置するＰ 5 は貯蔵穴かと考えられる。平面形は円形を呈し，径 87×89 cm を測る。ピットの上方に 1 段の稜を設け，掘り方に角度をもたせている。底面は平らでよくしまっている。深さ 50 cm を測る。覆土は 4 層に区分された。黒褐色土が主体を占め，流れ込みによる堆積状態を示している。

出土遺物は比較的多い。中央部より壁際に近い場所でそれぞれ出土している。Ｐ 5 付近では甕が押し潰された状態で出土し，その近くで坏 2 個体が出土している。また，中央より各壁寄りに焼土，炭化材が検出されている。炭化材は，壁に対して縦あるいは横向きに倒れた状態のものや，1 部ピット内にくいこんだ状態のものがある。これらの状況から，本址は火災により焼失したものと考えられる。

遺物　本址からの出土遺物は多量で，図示した 11 点の土器の他に約 200 片の小破片を検出した。

30～32 は甕となる。30，32 の口縁は「く」の字状に外反し，頸部に刷毛目を残す。30 は完形品で刷毛整形後にヘラ削りにより再び整形している。また，スス状炭化物の付着も著しく，器面は暗褐色ないし黒褐色となる。32 は口縁部，31 は口縁の約⅓を遺存し，ともに褐色を呈す。33，34，38～40 は坏で，いづれも赤彩を施している。40 は完形品。他は½～⅓の遺存となる。40 は口縁内部に明確な稜を有し，底部にも径 2.5 cm の凹みを作る。35～37 は高坏であり，完形品は存在しない。36 の脚部は細く，上部の破損面には坏部との接合部がはっきりと残る。37 は異形の高坏となろう。惜むらくは坏部が，¼ほどしか遺存せず，内側の口縁も破損し失われている。3 点はいづれも赤彩が施され，特に 37 では鮮明に認められる。

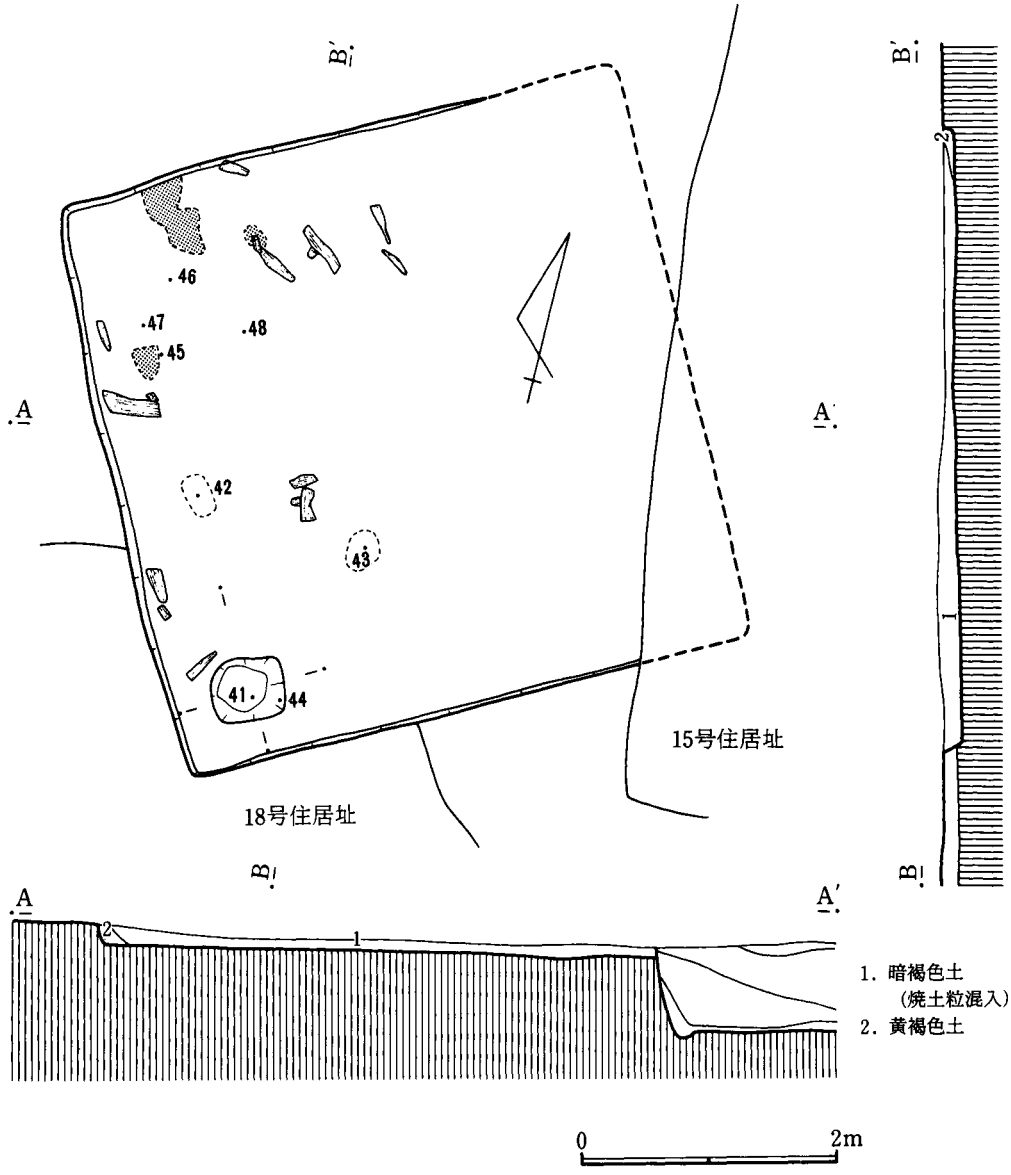
16 号住居址（第 47 図）（第 88 図 41～48）

1 号墳の南側に位置する。東側で 15 号住居址と，西側で 18 号住居址とそれぞれ重複関係にある。新旧関係は，確認面での精査および土層断面の検討により 18 号→ 16 号→ 15 号となる。確認時の遺存状態は東隅を 15 号住居址によって破壊されており，また北東隅はすでに削平されてプランが不明確であった。平面プランは方形を呈すると考えられる。規模は南北 4.5 m を測り，東西は 4.5 m前後になるであろう。床面は全体に軟弱である。壁は，西壁，北壁，南壁で立ち上がりがわずかに検出された。壁高は 8～14 cm を測る。壁溝はない。炉址は，住居の西側を中心に精査したが検出されなかった。

ピットは南隅に 1 か所検出された。平面形はやや不整な方形を呈する。長軸 58 cm，短軸 48 cm

を測る。底面はわずかではあるが2段に掘り込まれており，深さ 35 cm を測る。底面より約 10 cm 程上で甕が2個体，1つは破片で1個体，1つはほぼ正立した状態で出土している。このピットは貯蔵穴と考えられる。覆土は2層に区分されたが，暗褐色土が主体を占めている。

遺物は，中央より西壁寄りで出土している。このうち西隅から出土した高坏，坩はいずれも欠損品で，床面から 10～15 cm 程上で出土している。また，中央よりやや南西側で甕形土器が床面より 2～3 cm 上で出土している。



第47図　16号住居址実測図

遺物　本址は縄文期の住居址と重複しているため，図示した8点の他に縄文式土器，土師器等の破片を多量に出土した。

41は完形の甕で，器面全体が刷毛目によって覆われており，胴部は球形に近い。一部にスス状炭化物の付着も認められ，色調は暗褐色ないし黒褐色を呈す。43は胴下半部以下を欠損する。器面は風化しザラザラとした感を呈し，胴部の刷毛目痕はほとんど消滅している。42，44は器形的には甕となろう。だが，44の器面には赤彩が認められ，いづれもスス状炭化物が付着し黒褐色ないし赤褐色となる。44は完形で，42は約⅓が欠損する。45は小形の坩である。口縁部が欠損し，復原されるまでには至っていない。器面は簡単なヘラ整形後，ていねいな調整を施している。色調は暗褐色を呈す。46～48は高坏の脚部で，47，48には赤彩が認められる。46の胎土も赤褐色を呈し，刷毛目痕も認められる。

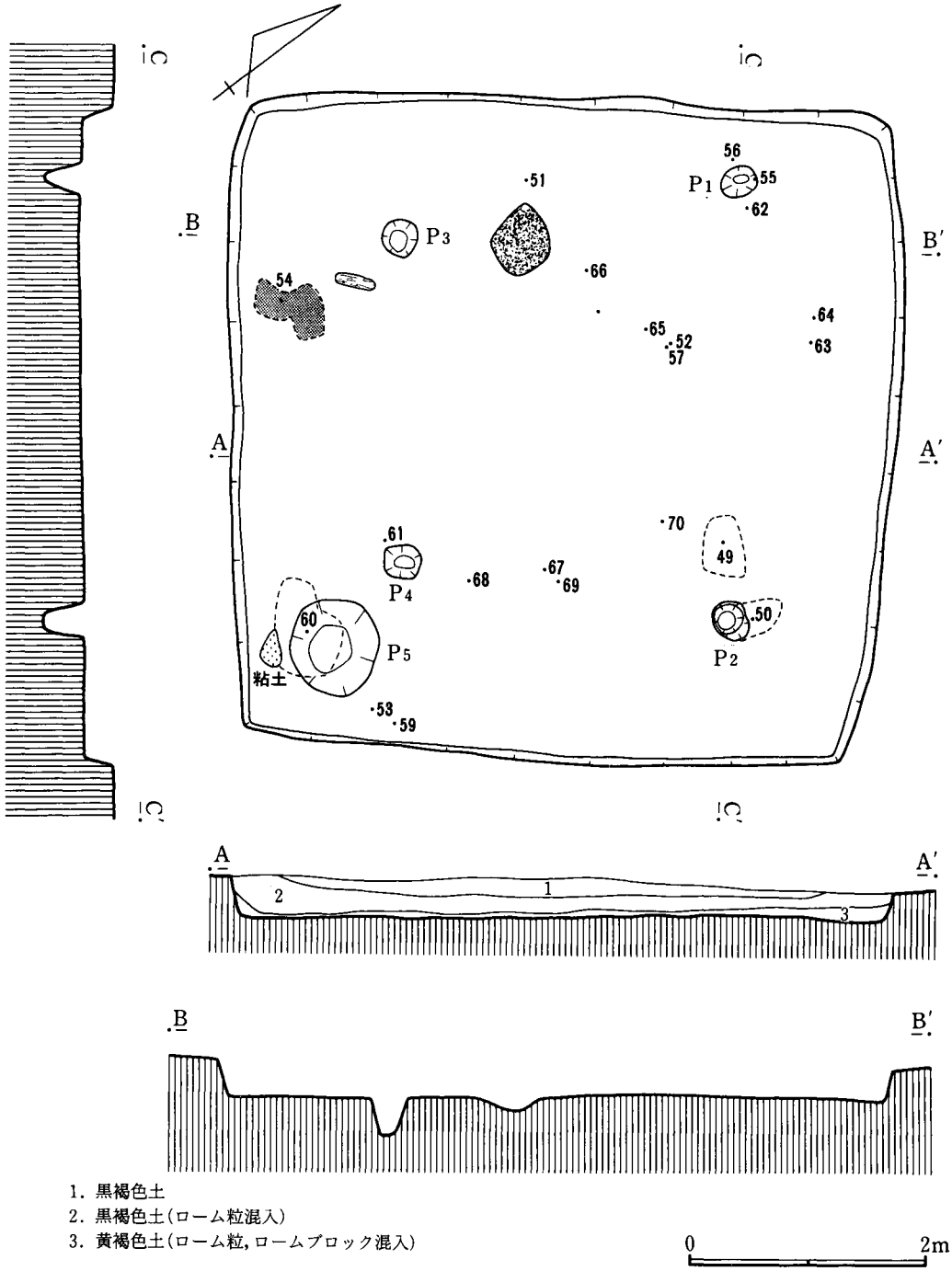
19号住居址（第48図）（第88～90図 49～81）

本址は2号墳の東南側で，23号住居址から東約10 mの距離に位置する。平面プランは，北東側がやや歪んでいるがほぼ方形を呈する。規模は，5.6×5.6 mを測る。主軸方位はN—54°—Wを指す。床面は全体に軟弱である。壁は東側でほぼ垂直に立ち上がり，西側でやや傾きをもつ。壁高は25～32 cmを測る。壁溝はない。炉は中央より北西壁寄りに位置する。方形に近い楕円形を呈する。径50×60 cmを測る。床面をすり鉢状に掘り込んでおり，深さ9 cmを測る。ピットは5か所より検出された。P 1～P 4は住居四隅にほぼ等間隔で配されており，主柱穴である。径30～35 cm，深さ29～32 cmを測る。P 5は南隅に位置する。円形に大きくしっかりと掘り込まれており，床面はほぼ平らである。径 77×81 cm，深さ 19 cmを測る。貯蔵穴と考えてよいだろう。覆土は3層に区分された。黒褐色土，黄褐色土が主体を占める。流れ込みによる堆積状態を示す。

遺物は，完形品を含む土器が多く出土している。このうち北隅と南隅の群は床面および2～4 cm上で出土しており，完形の甕，坩，高坏がある。また，炉から東側とP 2を中心としてP 3までの範囲で出土した群は，いずれも床面より 10～30 cm 上で出土している。坏の完形品を含めて，高坏，甕が主である。この結果，北および南隅の群は本址に伴うものであり，その他は出土状況から本址の埋没過程で投棄されたものと考えられる。

遺物　本址から出土した遺物は多量で，器種もバラエティーに富む。壺，甕，坩，坏，高坏，手捏土器と図示可能な土器も33点を数えた。遺物をよく観察すると，69の坏などは鬼高期に属するものであり，後の廃棄品も若干含まれている。ここでは，同一住居址出土ということで一括して図示した。

49，50，55は甕として分類されようが，50の場合，胴部は球形を呈し器面も入念に仕上げ壺的な要素も含まれよう。55は典型的な甕であり，胴下半部の接合痕がよく残っている。また，火を受けた痕跡も著しい。50，55ともに完形に近く，色調も褐色ないし赤褐色を呈す。49は底部を欠



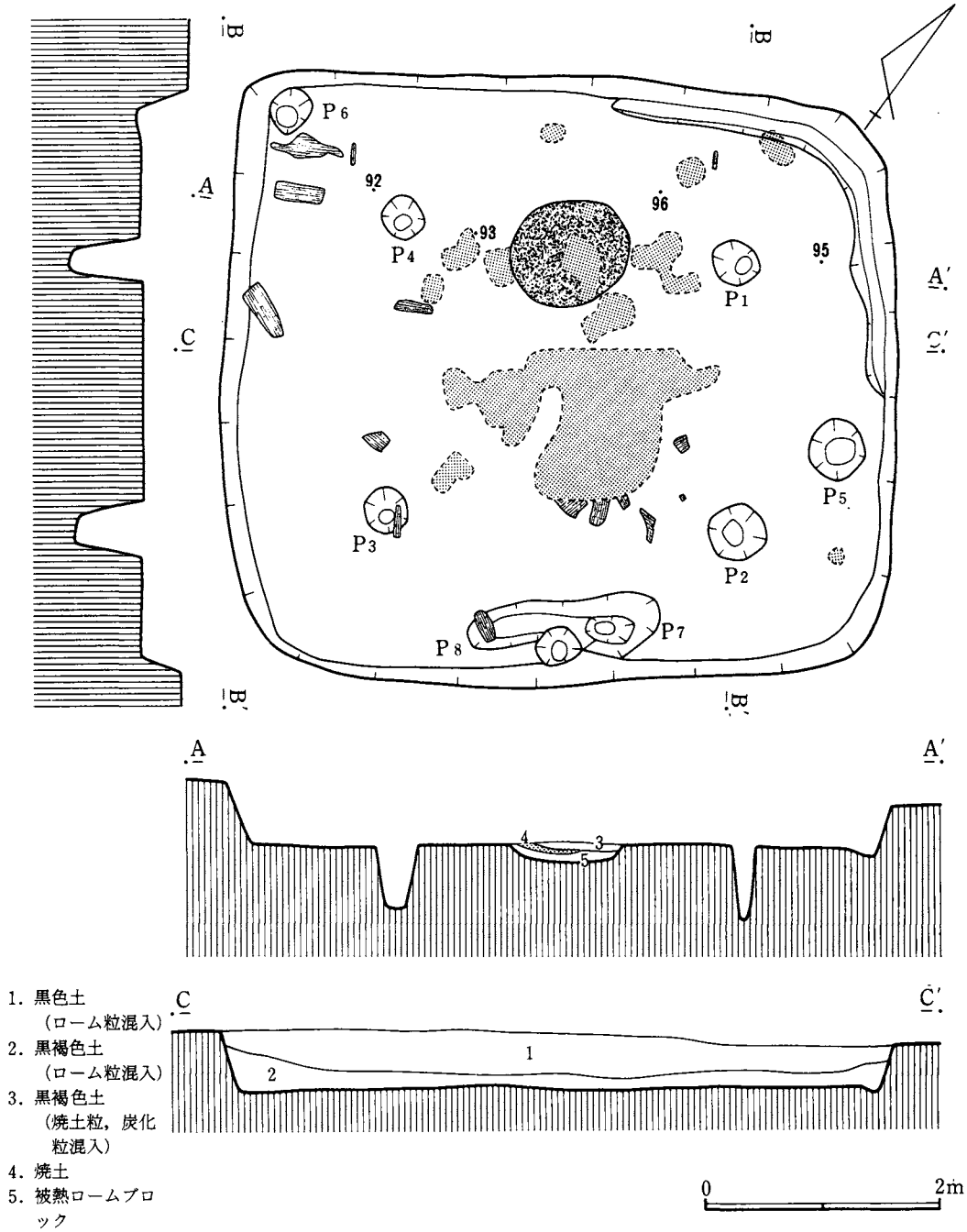
1. 黒褐色土
2. 黒褐色土(ローム粒混入)
3. 黄褐色土(ローム粒, ロームブロック混入)

第48図　19号住居址実測図

損するだけで，器形的には55に類似する。頸部には刷毛目痕がよく残り，内面にも及ぶ。色調は，赤褐色ないし黒褐色となる。58は鉢形土器となろう。製作時には甕を意識したものであろうか。途中で放棄したものと考えられる。口縁部の歪みも整形されていない。器面には若干スス状炭化物が付着し，他は赤褐色を呈している。55，56，57は小形の壺となる。57は赤彩が施されているものの，器面の剝離が激しく胴下半部から底部ではわずかの赤彩が認められるにすぎない。56は複合口縁となっている珍しい例である。器面はていねいなヘラ削りで仕上げ，胎土には若干小石が含まれる。56，57とも完形品で赤褐色を呈す。52は胴部から底部にかけて約½が遺存するにすぎない。器面はヘラ削りによりきれいに仕上げられているが，頸部の内面では輪積痕がそのまま残る。色調は淡褐色。51，53，54は手捏土器の類となる。一応簡単な整形は施されており，51，53は約¾が遺存し，54は完形品。色調はいづれも赤褐色ないし暗赤褐色を呈す。59～62は坩で，59は小形品となる。器形についてみると，60，62は口縁部の稜線を明確に表現し，胴部最大径もやや下位に置く。59，61は完形品で赤彩も鮮明である。62は口縁から胴部にかけて約⅓欠損する。60は口縁部だけの遺存となる。63～69は坏の類であり，68は約⅓の遺存にとどまる。他は完形か，それに近い。ここでは63のタイプの坏は計4点あり，いづれも赤彩がきれいに残っている。67，69には赤彩は施されず淡褐色ないし暗褐色を呈する。高坏は豊富に出土した。完形か，もしくはそれに近いものも4点あり，他の住居址より卓越する。すべて赤彩によって飾られており，遺存もよい。80は脚部が細く，坏部での接合部では整形が行き届いていない。また，器高も低く，坏部の⅓と裾部を欠損する。他に口縁部を欠損する小形土器70が出土している。手捏土器とは異なり，整形後の調整も顕著である。色調は淡褐色。鬼高期の混入品もあり，時期決定は困難に思われた。

20号住居址（第49図）（第90～92図 82～107）

本址は台地の南側，17号址の北側に接して位置する。平面プランは隅丸方形を呈する。規模は5.1×5.7 mを測る。主軸方位はN－36°－Wを指す。床面は全体に堅くしまりがあり，炉の周辺が特に堅緻である。各壁ともしっかりしており，床面からの立ち上がりはやや傾斜をもっている。壁高は西壁で57 cm，東壁で35 cmを測る。北壁隅に部分的に壁溝が検出された。幅20～25 cm，深さ3～5 cmを測る。炉は中央より北西寄りに位置する。楕円形を呈し，径88×104 cmを測る。床面から皿状に掘り込まれており，深さ15 cmを測る。底面は良く焼けており，5 cm程の厚さで焼土が堆積していた。ピットは8か所より検出された。このうち中央寄りにほぼ等間隔で配されたP 1～P 4が主柱穴と考えられる。東壁際に位置するP 5は貯蔵穴であろう。東南壁中央に接して位置するP 7，P 8は，壁に平行する細長い掘り込みに伴うものと考えられる。炉に対置していることから，出入口部に付設された可能性が考えられる。西隅に位置するP 6は柱穴とは離れているが，柱穴として補助的な役割をもつものであろう。P 1～P 4は径36～50 cm，深さ52～63 cmを測る。P 5は径50 cm，深さ31 cmを測る。P 6～P 8は径30～34 cm，深さ23



第49図　20号住居址実測図

～49 cm を測る。覆土は2層に区分された。黒色土，黒褐色土が主体を占める。流れ込みによる堆積状態を示している。また1層中に遺物が多く出土している。

出土遺物の量は比較的多く，ほとんどが覆土上層から出土した。床面上で出土したものは，図示した遺物のうち約半数である。床面上で出土した遺物は炉の周辺でまとまって出土している。

炉上面では，胴部を欠失した壺がふせられた状態で出土している。

遺物　本址も19号住居址同様豊富な出土量を示す。特に壺については興味のある資料を提供したと言えよう。器種でも壺，甕，埦，高坏，器台とバラエティーに富む。土器は図示した25点以外にも約平箱一杯分の土器片が出土した。

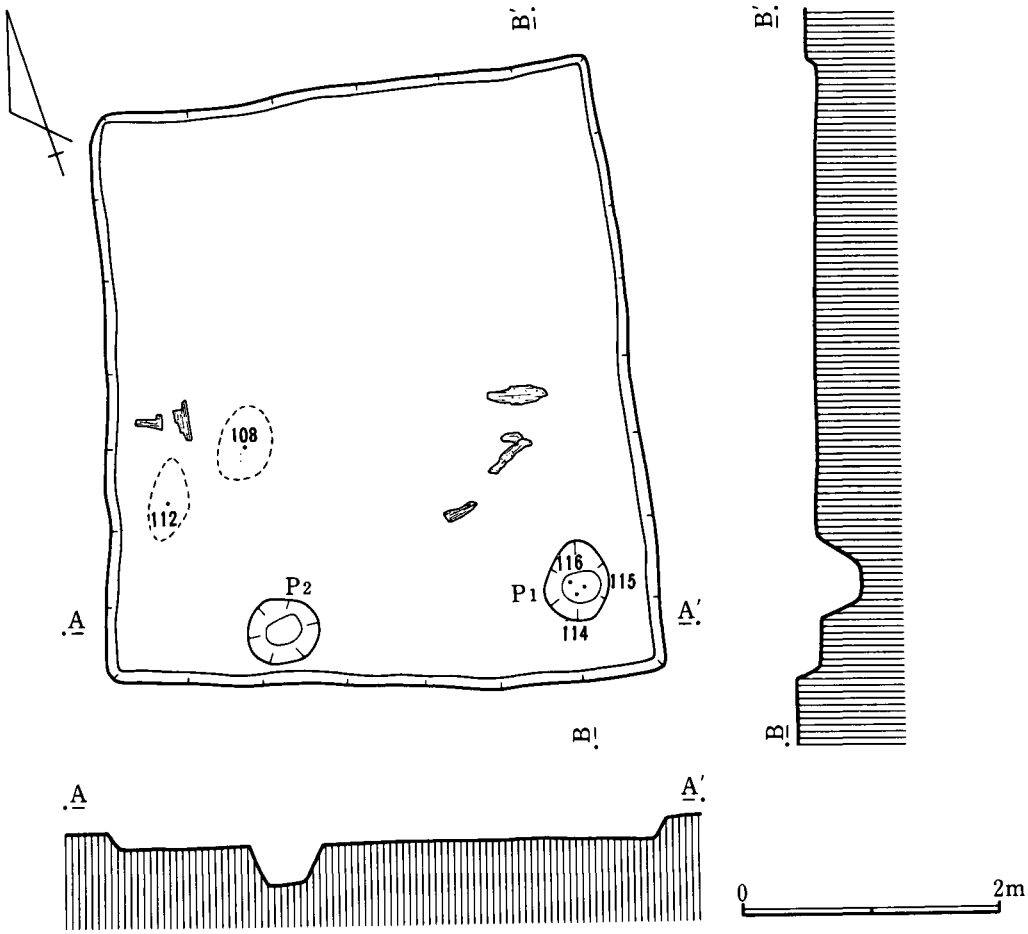
82～85は壺であり，85は約¼ほど欠損するが復原は可能となった。口縁端部には縄文を擬したと思われる連続押圧文が巡る。この工具は器面を整形した刷毛状工具と一致する。84は口縁の径から推定するとかなり大形の壺となろう。器内外面は風化により剝離が著しい。細縄文が肩部に若干認められるが，口縁から頸部にかけての遺存であるためその詳細についての把握はできない。胎土には小石，石英粒を多量に含み，色調は淡褐色を呈する。82は，口縁部が約½遺存するにすぎない。器面には若干調整痕が認められる。83も複合口縁となるが，簡単な整形が施される。頸部以下は刷毛目痕で覆われよう。胎土には小石の混入が目立つ。82，83はともに淡褐色ないし暗褐色を呈す。88も口縁だけの遺存で，「く」の字状に大きく開くところが特徴といえよう。色調は淡褐色。86は広口壺となる。器内外面には赤彩がよく残っている。器面は刷毛整形後よく調整され，肩部では刷毛目痕を消すほどとなる。遺存は，口縁から肩部にかけて約¼と少ない。胎土には小石の混入が著しい。89～91，93～99は甕である。底部が欠損する場合が多く，中には台付甕もあるかもしれない。93のような小形品と対照的な94のような胴部径が30 cm以上の場合もある。遺存は91，96がほぼ完形となり，他はそれぞれ図示した部分が残っているにすぎない。刷毛整形についてみると，89がより鮮明に刷毛目痕を残す。色調は褐色ないし暗褐色となり，90にはスス状炭化物が付着している。92は甑であり，量的にも少なく貴重な資料となろう。底部の穿孔は焼成前のもので，径1 cm弱の孔が無雑作に穿たれている。頸部には輪積痕が整形されずにそのままの状態で残っており，粘土紐の貼付部を観察すると逆時計廻りにそれが置かれている。器面はヘラ削りにより整形され，色調は淡褐色を呈し部分的に黒褐色に変色する。100は小形品であり胴部だけの遺存で器形ははっきりしない。胴部の作りから坩で口縁と胴部が一部欠損する。赤彩はよく残り，底部にまで及ぶ。101は埦で，約¾が遺存する。刷毛整形後，ヘラによる調整が施され，色調は淡褐色。103～106は高坏で，104，105の坏部の製作に特徴が認められる。104は完形で坏部内面に籾痕が付着している。105は坏部が約⅓遺存する。ここでの高坏はすべて整形時に刷毛状工具を使用しており，106などは接合面にも明確な刷毛目痕が残されている。102は器台で器受部を½ほど欠損するが復原は可能となった。脚部には4孔が粗雑に穿たれており，裾の破損部には籾痕が認められる。色調は淡暗褐色となる。

22号住居址（第50図）（第92・93図108～118）（第107図16）

本址は2号墳周溝外側から南へ約6 mの距離に位置する。東壁側は23号住居址に近接している。平面プランは北側がややつぼまった方形を呈する。規模は4.1×4.6 mを測る。長軸方位はN—12.5°—Eを指す。床面は部分的に中央付近が硬くしまりがあるが，壁寄りは全体に軟質であっ

た。各壁とも立ち上がりははっきりと確認できた。壁高は東南隅で 16 cm，北壁で 11 cm を測る。壁溝はない。炉址は床面を綿密に精査したが検出されなかった。床面上に焼けた痕跡が認められた。ピットは 2 か所より検出された。P 1 は径 51×62 cm，深さ 34 cm を測る。底面は平らで壁もしっかりと掘り込まれている。覆土中より甕口縁部破片，底部破片，高坏の脚が出土している。位置，掘り方などから貯蔵穴と考えられる。P 2 は径 50×56 cm，深さ 32 cm を測る。規模や掘り方はP 1 によく似ており，本址に伴うものとすれば一応貯蔵穴に類するものと考えておきたい。覆土は暗褐色土を主体としており，分層はできなかった。

遺物は西壁寄りとP 1 周辺にまとまって出土している。西壁側では壺形土器，坩形土器，高坏形土器が押し潰された状態で出土，P 1 周辺では高坏形土器が横倒しになった状態で出土している。



第50図　22号住居址実測図

遺物　本址から出土した遺物は，図示した13点の他に約50片の土器がある。器種には壺，甕，坩，高坏がある。

108は胴部が球形を呈した壺で，口縁は複合となる。底部だけを欠損するが器形を窺うには十分である。器面はヘラによりきれいに整形されている。色調は淡褐色。4は口縁部と胴の一部を欠損し，底部は残っている。全面によく赤彩が行き届き，まだよく遺存する。111も壺の口縁となろう。図示した⅓が遺存するにすぎない。109，113～115は甕及びその底部となる。109の口縁は⅔を欠損する。113は口縁から胴上半部の遺存で，ともに刷毛整形を施す。色調は褐色ないし暗褐色となる。112は坩で口縁の上端をわずかに欠損する。器面には赤彩がよく残り，一部スス状炭化物も付着する。116～118は高坏で，117はほぼ完形品といえる。いづれも赤彩が認められる。

16は土玉で，ほぼ中央に口径 7～8 mm の孔が穿たれている。

23号住居址（第51図）（第93図 119～124）（第107図6）

本址は2号墳の南に位置し，22号住居址が西壁で近接している。平面プランは南北に長軸をもつ長方形を呈する。規模は 5.5×6.2 mを測る。主軸方位はN－18°－Eを指す。床面は全体に軟弱である。北，東，南壁の各壁は床面よりほぼ垂直に立ち上がり，西壁はわずかに傾斜している。壁溝はない。炉は中央より北壁寄りに位置する。径 41×42 cm のほぼ円形を呈する。底面は比較的平らに掘り込まれており，深さ 7 cm を測る。ピットは南東隅に1か所検出された。平面形は径 46×56 cm を測る。ほぼ楕円形を呈し，底面は平らで掘り方も整っている。深さ 22 cm を測る。貯蔵穴と考えられる。住居址の規模から主柱穴の存在も当然と考えられるが，床面および壁外も精査したにもかかわらず検出できなかった。覆土は暗褐色土層1層のみであった。

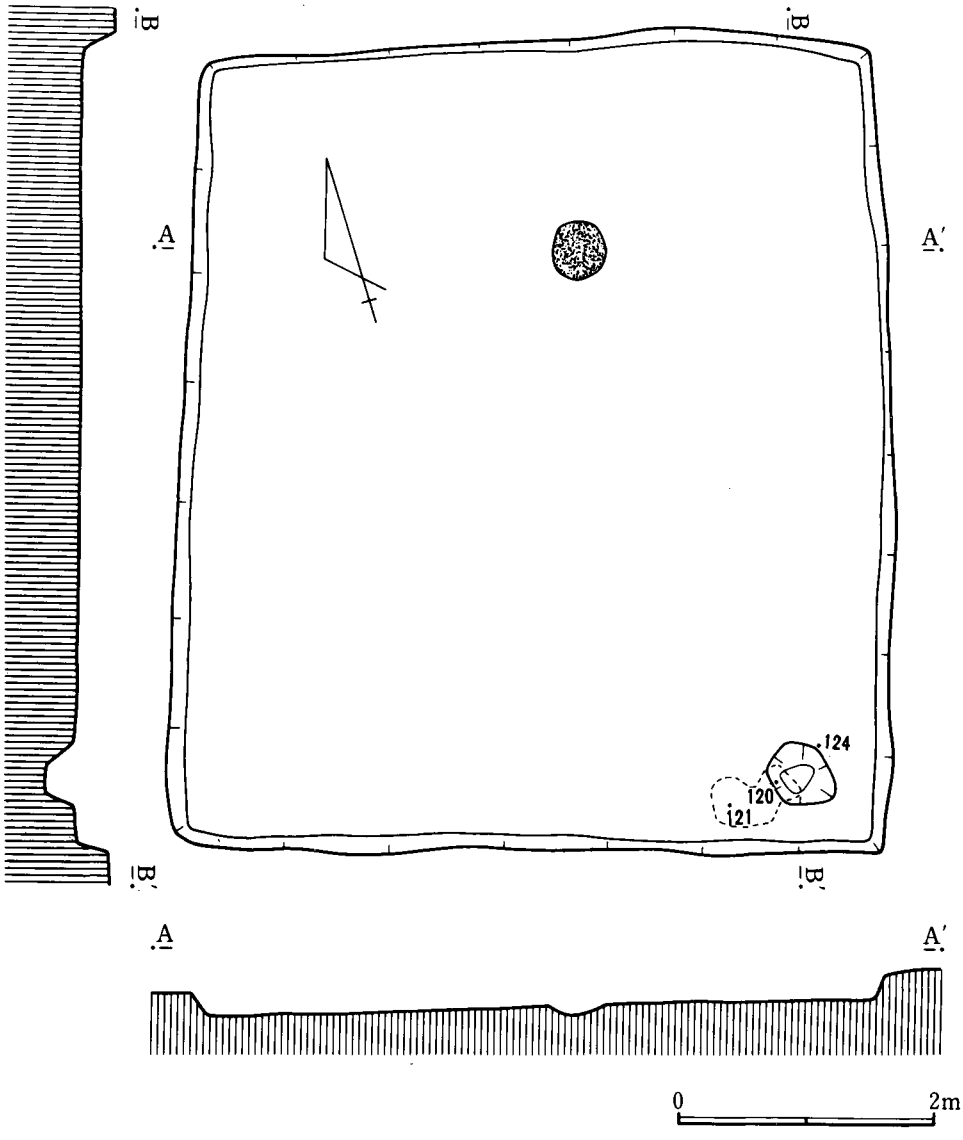
出土遺物には甕形土器，埦形土器等があり，ピット周辺にまとまって出土した。また鉄製鎌は南西隅寄りの床面直上で出土している。

遺物　本址での出土遺物は図示した以外にも土器片が約200片ほどある。器種は壺，甕，坩，高坏，手捏土器と一応揃っている。また，鉄製品として鎌の出土も注目できよう。

119は壺として分類できよう。口縁部には接合痕を残す。褐色ないし暗褐色を呈する。120，123は甕で，ともに刷毛目痕がよく残る。120は口縁の⅓を欠損するが，他には遺存する。123は底部を欠損する。121は坩の口縁で，赤彩は内面のほうがよく遺存している。122は高坏の坏部で，脚部はその接合部から抜けるような形で失われている。坏部の稜はかなり簡略化され，整形されていない部分についてのみ残っている。赤彩は内外面ともに施されるが，遺存はよくない。124は小形の完形品であり，丸底に近い。整形は指頭によるものと思われるが，内面ではかなりていねいな整形となる。色調は褐色。6は鉄製の鎌で基部が 5 cm ほど遺存する。

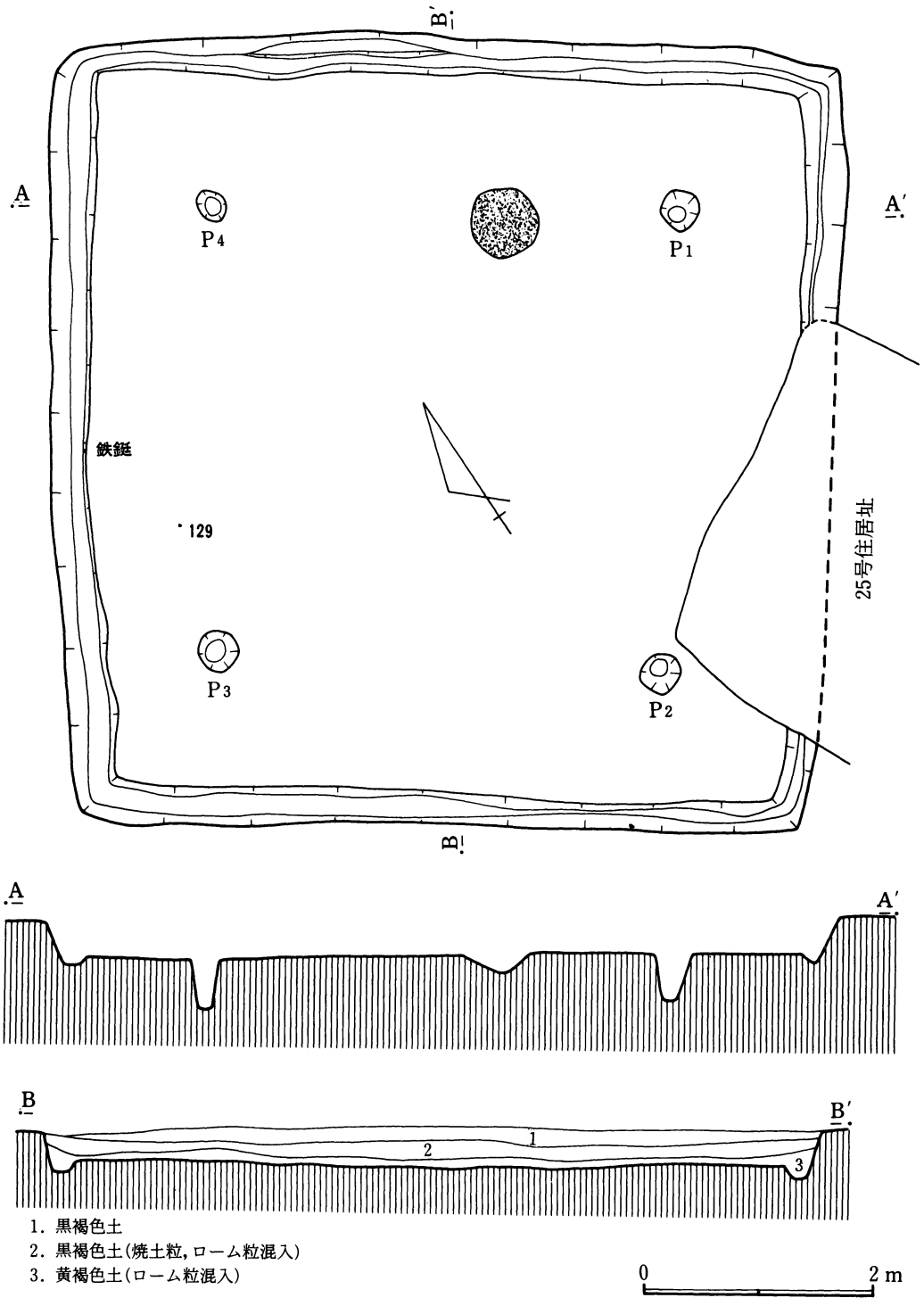
24号住居址（第52図）（第94図 125～133）（第107図2）

本址は調査区南側，23号住居址から南へ約2 mの距離に位置する。25号住居址と東南側で重複関係にある。新旧関係は，遺構検出時の精査および土層断面の検討により 24号→ 25号となる。



第51図　23号住居址実測図

平面プランは方形を呈する。規模は 6.8×6.9 mを測る。主軸方位はN－35°－Eを指す。床面は炉の周囲が堅く，その他は軟質である。壁は東南側の一部を 25 号住居址によって破壊されている。立ち上がりはやや傾斜をもつ。壁高は北壁で 26 cm，南壁で 30 cm を測る。壁溝は一部破壊されているが，全周すると考えられる。幅 15～25 cm，深さ 4～10 cm を測る。北壁の一部では，溝と壁との間に 10 cm 程間隔が認められる。炉は中央より北東寄りに位置する。平面形は円形を呈し径 61 cm を測る。床面をすり鉢状に掘り込んでおり深さ 17 cm を測る。ピットは 4 か所より検出された。四隅にほぼ等間隔に配置されており主柱穴と考えられる。径 29～35 cm，深さ 37～71 cm を測る。覆土は 3 層に区分された。黒褐色土，黄褐色土が主体を占め，流れ込みによる堆積状



第52図　24号住居址実測図

態を示している。

出土遺物は量的には少ないが，甕形土器，坩，高坏等の土師器類と，鉄鋌と考えられる鉄製品一枚が出土している。土師器類の多くは覆土上層からの出土である。炉のやや北側で高坏が，P4の北側で坩が出土している。鉄鋌は，出土例のほとんどが古墳からのものであり，きわめて注目されるべき遺物である。出土位置は北西壁のほぼ中央，壁溝の端である。床面から5～9 cm程上面で，やや斜めにした状態で出土している。出土レベルが床面からやや上であるものの，前記の坩，高坏と同様本址に伴うものと判断した。

遺物　本址から出土した遺物は図示した10点の他に土器片が100点以上ある。一括土器は甕，坩，高坏の3器種である。一方，鉄製品として鉄鋌が出土した。全国的にも珍しい例で，しかも住居址出土という点に注目したい。これについてはすでに資料紹介（伊藤　1983）で詳しく述べているのでここでは触れないでおく。

125～127は甕で，完形品は存在しない。126は図示の約⅓，他は図示した部分について遺存する。いづれも器面はヘラ削りにより整形され，褐色ないし赤褐色を呈す。128，129は坩となろう。128は¾ほどが遺存し，器面の剝離が著しく赤彩の有無は判別できなかった。129は底部だけの遺存となるが，比較的大形品となろう。赤彩はよく残っている。130～133は高坏であり，完形品はない。130は坏部の⅔と裾部を欠損する。また内面の剝離が著しく，赤彩はごく一部にしか見られない。131は坏部だけが遺存し，132，133は坏部の½ほどの遺存でしかない。

2は鉄鋌で，一部が欠損する。しかし，形態は十分窺える。2 mmほどの鍛鉄で成分分析の結果は表1のとおりである。

25号住居址（第53図）（第94図134～137）

32号址の西南に位置し，24号住居址と西北側で重複している。新旧関係は，本址のほうが新しいことが土層断面の検討によって確認されている。平面プランは北，西壁がやや歪んだ方形を呈する。規模は3.2×3.3 mを測る。床面は堅くしっかりとしているが，若干の凹凸がある。壁は東，南壁はしっかりとしているが，西，北壁は24号住居址と重複しているため立ち上がりの部分がわずかに確認されたにすぎない。壁高は東壁で35 cm，南壁で27 cmを測る。壁溝は南西壁中央から東壁中央付近までの部分で検出されている。北壁側に向かうに従って次第に不明瞭となっており，本来全周していたものかどうかは疑問が残るところである。幅8～21 cm，深さ2～5 cmを測る。炉址およびピットは，床面を念入りに精査したにもかかわらず検出されなかった。住居址の規模からすると壁外のピットの存在も考えられるが，これも検出されなかった。覆土は3層に区分されたが，黒褐色土，黄褐色土が主体を占めている。緩やかな自然堆積を思わせる堆積状態である。

遺物はきわめて少ない。全て土器片であり，この内「S」字状口縁をもつ台付甕形土器の口縁部および底部破片が出土しているが，出土層位は第1層中であり本址に伴うものではないと考え

表1　鉄鋌の分析測定表※

測定条件　加速電圧　20 KV
試験電流　0.02 μA
ビーム径　20μφ

計算方法	A（測定した強度比）		B（Aの値を100に比例配分）			C（Aの値を酸化物に仮定）	
測定位置							
測定元素	(1)	(2)	(1)	(2)	測定元素(酸化物)	(1)	(2)
Fe	68.670	57.324	98.912	97.431	Fe_2O_3	98.212	81.985
Ti	0.016	0.004	0.022	0.006	TiO_2	0.026	0.006
V	0.007	Trace	0.010	Trace	V_2O_3	0.010	Trace
Cr	0.003	Trace	0.005	Trace	Cr_2O_3	0.005	Trace
Mn	0.002	Trace	0.003	Trace	MnO	0.003	Trace
Co	0.003	Trace	0.004	Trace	CoO	0.004	Trace
Ni	0.010	Trace	0.014	Trace	NiO	0.013	Trace
Cu	0.022	Trace	0.032	Trace	CuO	0.028	Trace
Zn	Trace	Trace	Trace	Trace	ZnO	Trace	Trace
Pb	Trace	Trace	Trace	Trace	PbO	Trace	Trace
Si	0.584	1.469	0.841	2.412	SiO_2	1.250	3.038
P	0.007	Trace	0.010	Trace	P_2O_5	0.015	Trace
Mo	Trace	Trace	Trace	Trace	MoO	Trace	Trace
S	0.022	0.006	0.031	0.010	S	0.022	0.006
Sn	Trace	Trace	Trace	Trace	SnO	Trace	Trace
Ca	0.006	0.007	0.009	0.012	CaO	0.009	0.010
Al	0.044	0.063	0.063	0.106	Al_2O_3	0.082	0.118
Mg	0.010	0.008	0.015	0.014	MgO	0.017	0.014
B	Trace	Trace	Trace	Trace	B_2O_3	Trace	Trace
O	強	(1)より強					

計算方法について

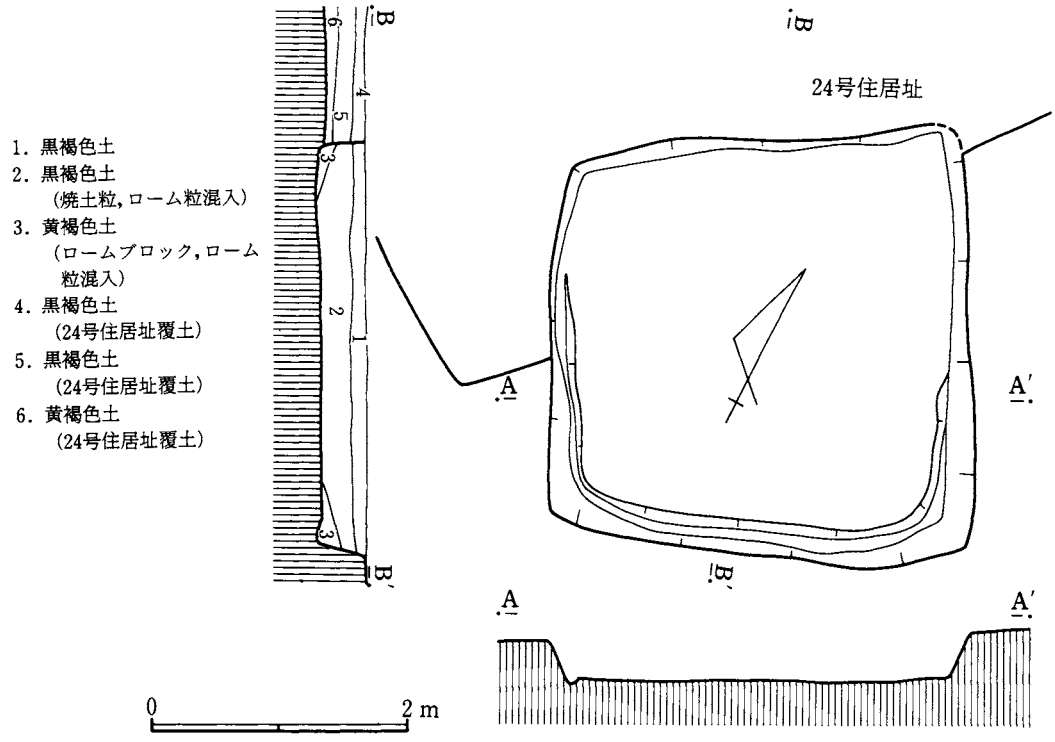
A．測定元素の強度と標準試料（100%のメタル）強度の比に物理的な補正係数（同時に含まれている他の元素濃度によって決まるもの）を集算したもの。

B．Aの測定結果を全体が100%になるように比例配分したもの。

C．Aの測定結果を酸化物に仮定して酸素量を計算で加えたもので，酸化物の形態は表に記入している形に仮定している。

Cの分析は，試料表面にCのコーティングを行ったために，分析不可能となりました。

※川崎製鉄株式会社技術研究所による。なお，鉄鋌については『たたら研究』25（伊藤 1983）で触れている。



第53図　25号住居址実測図

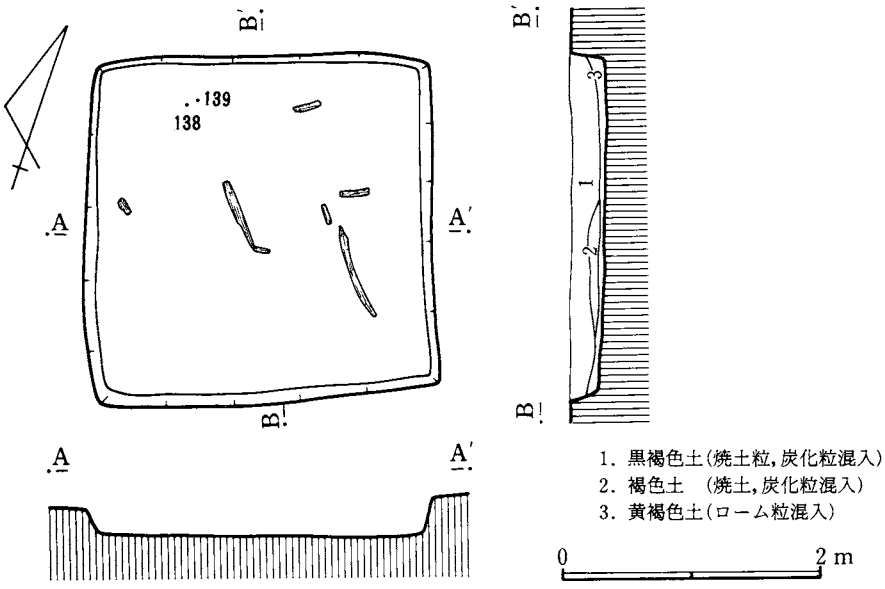
られる。

遺物　本址からの出土遺物はそれほど多くない。器種として甕，高坏等であったが図示は3点にとどめた。

134，135は小形の壺あるいは坩となろう。134は胴部以上が約⅓，135は底部だけの遺存となる。134の器面は粗いヘラ削りにより整形される。135の底部の器厚は小形のわりには厚い。色調は褐色ないし淡褐色となる。136，137は同一個体で，いわゆる「S」字状口縁の台付甕である。小破片が計6点出土したにとどまったが貴重な資料となろう。色調は暗褐色を呈し，胎土には小石，砂粒を混入する。

26号住居址（第54図）（第94図138～140）

本址は34号址の東約4mに位置する。平面プランは方形を呈する。規模は2.6×2.7mを測る。他の住居址に比べ小形である。床面は全体に軟質でやや凹凸が認められる。壁は上面を削平されていたものの，遺存が良好である。壁高は東壁で27cm，西壁で19cmを測る。壁溝はない。炉およびピットは床面を精査したが検出されなかった。特にピットについては，壁外のものも考慮したが検出されていない。覆土は，3層に区分された。黒褐色土，褐色土，黄褐色土から成り，流れ込みによる堆積状態を示している。



第54図　26号住居址実測図

出土遺物はきわめて少なく，北壁寄りで小形坩が2点並んで出土している。また，床面上には炭化材，焼土ブロックが検出されているが，出土状況が分散的であり，かつ床面より10cm程浮いた状態であるため，本址の廃絶を火災に求めるのは難しいかと考えられる。

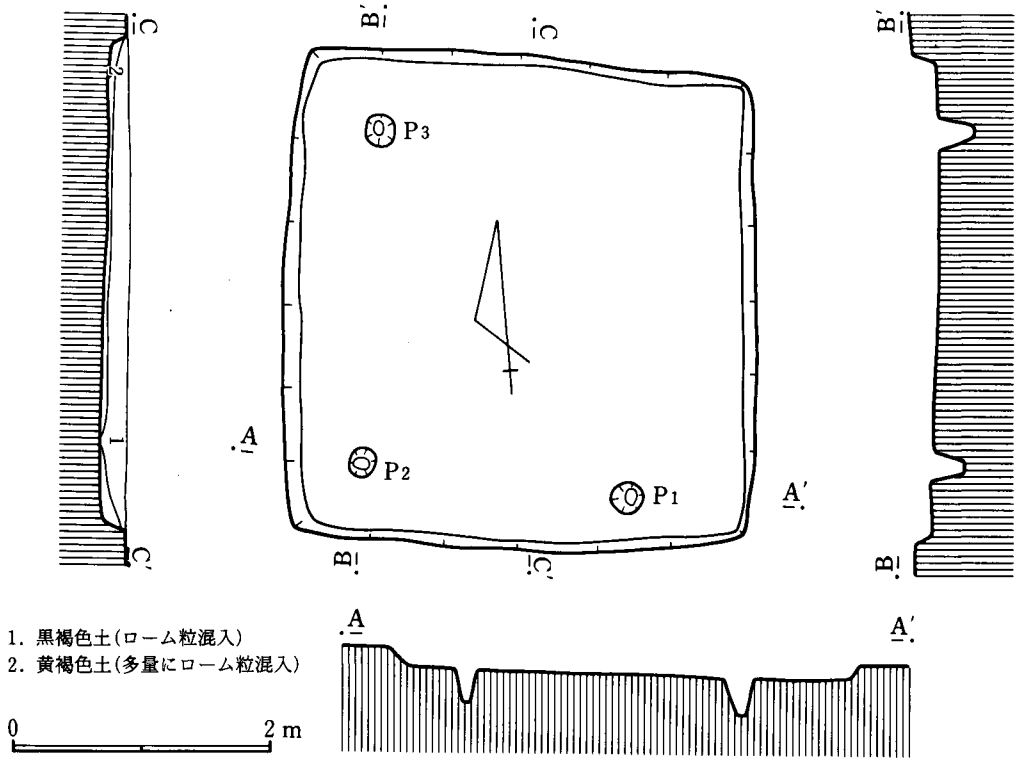
遺物　本址からの出土遺物は少量である。図示した3点の他には甕などの破片が約30片ほどしかない。

3点とも坩である。138，139は完形品で内外ともきれいに赤彩が施されている。器面の調整も入念に行なわれているが，138には若干刷毛整形の痕跡も残る。140の器面は刷毛整形の後，ヘラ削りにより再度整形を施している。また，内面は黒色を呈しヘラ磨きによる調整が著しい。139，140の底部はやや凹むところが特徴となろう。

27号住居址（第55図）（第94図141）

本址は29号址の内側に位置する。平面プランは方形を呈する。規模は3.7×3.8mを測る。長軸方位はN－6°－Eを指す。床面は全体に軟質である。各壁とも明確に検出できたが，西壁はやや傾斜が緩やかである。壁高は北壁で18cm，南壁で6cmを測る。壁溝はない。炉ははっきりとした痕跡が残っていなかった。ピットは3か所より検出された。それぞれ住居の隅に位置しており，柱穴と考えてよいだろう。ただ間隔から考えると，北東隅にもう1か所あるのが当然のことと思われるが，この位置からは検出されなかった。ピットの径は22～27cm，深さは25～29cmを測る。覆土は2層に区分された。黒褐色土，黄褐色土が主体を占めている。

遺物は少なく覆土中から土師器破片が分散的に出土している。



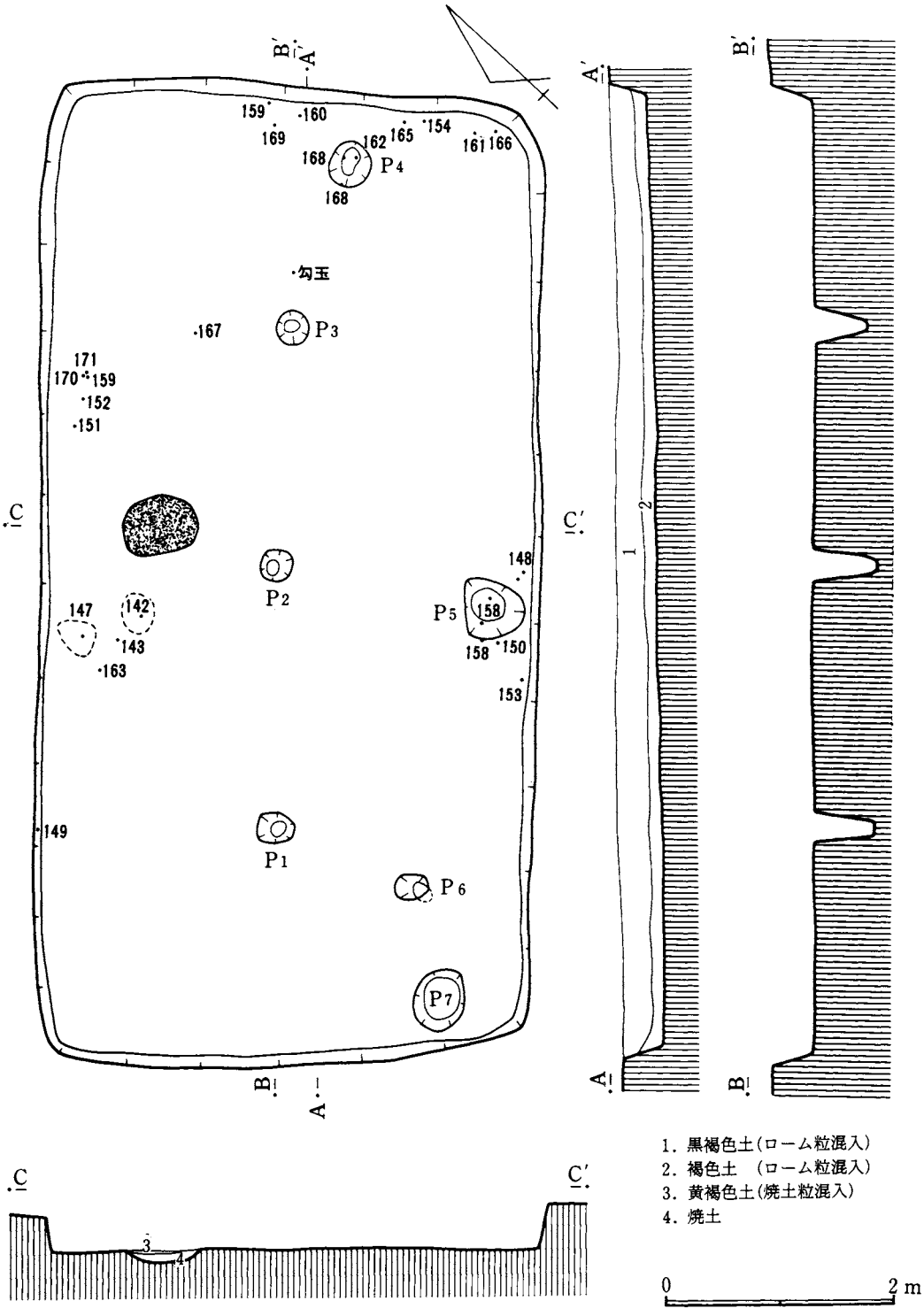
第55図　27号住居址実測図

遺物　本址でも遺物は少なかった。図示できた土器は1点で他に土器片が20片ほど出土している。

141は高坏の裾部で，図示した⅓が遺存するにすぎない。器形から推定すると器台とも考えられる。穿孔は痕跡を含めて3孔が認められた。その配置から考えると4孔となる。色調は淡褐色で，赤彩は認められない。

28号住居址（第56図）（第95・96図142～171）（第107図8）

遺跡南側の住居址群の中のほぼ中央に位置している。確認当初は2～3軒が重複していることが想定されたが，調査が進むにつれ1軒の住居址であることが判明した。平面プランは北東～南西方向に細長い長方形を呈する。規模は長軸8.5 m，短軸4.4 mを測る。長軸方向はN－45°－Wを指す。床面は炉の周囲および住居中央部が堅く，壁に沿った部分は軟質であった。各壁とも遺存状態はよい。壁高は31～34 cmを測る。壁溝はない。炉は中央よりやや北西壁寄りに位置している。平面形は楕円形を呈する。径50×66 cmを測る。床面を皿状に掘り込んでおり，掘り込みの深さは9 cm前後である。ピットは7か所より検出された。中央に長軸方向に並ぶP 1～P 3は主柱穴であろう。各ピットの間隔は1.8～2.0 mである。径30～32 cm，深さ46～55 cmを測る。北東壁寄りと南西壁寄りに位置するP 4，P 6は径29～40 cm，深さ28～33 cmを測る。P



第56図　28号住居址実測図

6は斜めに掘り込まれている。本址の構造を推定すると，当然P1～P3の主柱穴だけでは上屋は支えきれないだろう。P4，P6はそのための補助的な柱穴と考えたい。P5は東南壁のほぼ中央，炉の対面に位置する。径52×54 cm，深さ29 cmを測る。底面は中心部がわずかにくぼんでいる。ピットおよび周辺から8点ほどの土器が出土していることから貯蔵穴と考えたい。P7は径46×56 cm，深さ30 cmを測る。底面はP5に比べると丸底である。この周囲から遺物の出土はみなかったが，壁際に位置することや，P5と同様の規模を有することから貯蔵穴として利用されたものと考えておきたい。覆土は3層に区分された。黒褐色土層，褐色土層，黄褐色土層から成り，流れ込みによる自然堆積と考えられる。なお，黄褐色土層は長軸側の土層断面では観察されなかったが，短軸側特に南西側で認められた。

出土遺物は完形品を含め量が多い。またそのほとんどが床面上で出土しており，本址に伴う遺物が多いことを物語っている。遺物は，大半が住居の北半分にまとまって出土している。炉の西側では甕形土器，小形土器，北側では埦，高坏，計3点が床面に並列して，P3よりやや東で石製模造品が床面からやや浮いて，P4から東壁隅にかけて小形壺，坏，手捏土器が倒れたり，正立した状態で出土している。P5上面およびその周囲では，甕形土器，高坏，手捏土器等が出土している。甕形土器などの大形品に比べ，坏，埦，手捏土器などを多く出土している点や，住居址の構造等から，本址は他の住居址に比べて性格を異にするようである。

遺物　本址は多量の遺物を出土し，図示した遺物だけで31点に及ぶ。また，土器片も約500点と多い。ところで，本址の遺物は他の住居址の遺物と比較すると大きな差異が認められる。5点の甕を除いて実用品となる土器は少ない。住居址の形態も異っているところから，本址の遺物は集落の共有物と考えることが妥当であろう。

142～146は甕であり，142，145はほぼ完形となる。器面はすべてヘラ削りで整形されており，色調は142，143が褐色ないし黒褐色となり，他は赤褐色を呈する。147～150は小形の壺，甕となろう。148は約⅓が遺存し他は完形となる。これらは小形品としてはきれいな仕上げで，150には赤彩も施されている。また，147～149も胎土が赤褐色で赤彩の効果を与えている。151～156は坏，埦の類となろう。152～154はやや小形ではあるが，ていねいな仕上げとなる。152は褐色を呈する。156は口縁の一部を欠損する。赤彩は口縁の横ナデ部と内面にきれいに施されている。157は高坏で坏部だけが遺存する。外面の稜は緩やかなものとなる。158～171は手捏土器となる。158～161は高坏を模倣したものであろうが，器形は少しづつ異なる。158，161は坏部の一部，160は裾部を欠損する。また，161の脚部には2孔が穿たれており，焼成前の孔である。色調は161が暗褐色で，他は赤褐色に近い。162～166は壺，甕を意識したものであろう。166は口縁部が欠損する。他は完形かあるいはそれに近い。色調は褐色ないし暗褐色となる。167～171では，167，168，170の口縁が一部欠損する。他は完形品ではあるが，169の作りはもっとも粗雑となる。器面ではヘラ痕が爪跡状に残り，口縁部に沿って指紋が巡る。内面では輪積痕が整形されずに4～5

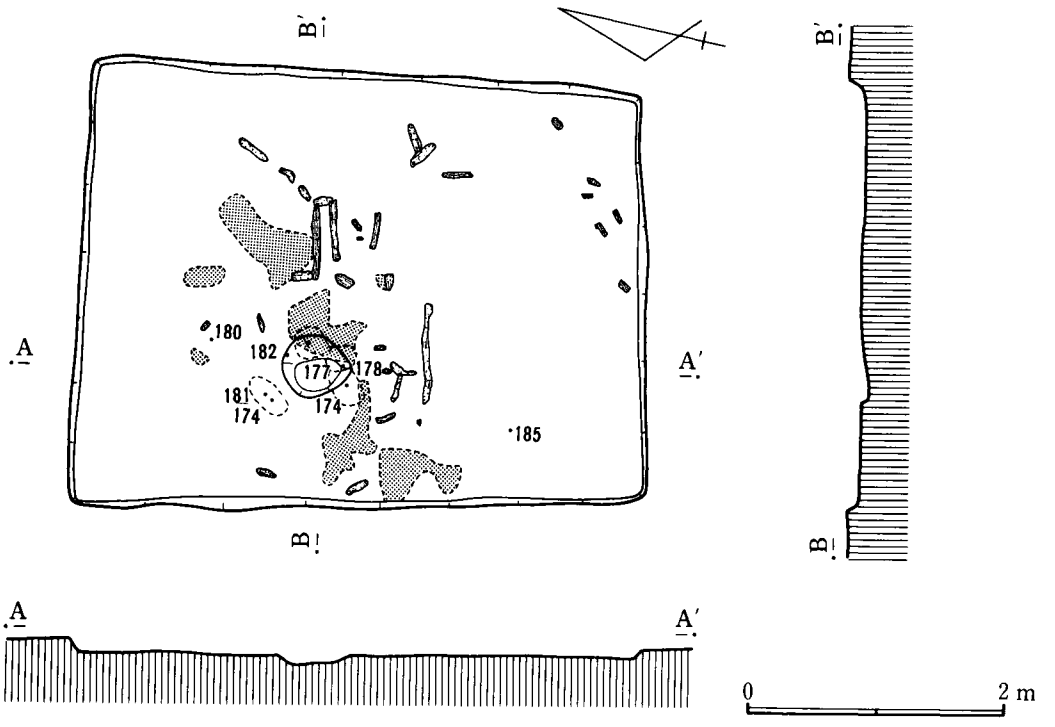
条残る。これらの色調は褐色ないし赤褐色となる。

土器以外の遺物として滑石製の勾玉が1点ある。5～6 mm の板状の滑石を素材にしており，孔は両面から穿っている。

30号住居址（第57図）（第96・97図172～185）

本址は31号住居址と近接しており，21号住居址から南東約2 mの距離に位置する。上面を掘削用重機によって削平されており，遺存状態は悪い。平面プランは長方形を呈する。南側がややつぼまっている。規模は3.3×4.5 mを測る。長軸方位はN－13°－Eを指す。床面は堅い面が部分的に検出された程度で全体に軟質である。壁は上面を削平されたため，わずかに立ち上がりの部分を確認するにとどまった。壁高は 6～10 cm を測る。壁溝はない。炉は検出されていない。当初，床面上に堆積した焼土塊の下から検出された浅いピットを炉として考えた。しかしピット内の覆土には焼土がまったく認められず，かつ底面も火を受けた痕跡をとどめていないことから，このピットが炉として判断するには難しいとの結論に達した。また，このピットは柱穴にも考えられない。径 47×54 cm，深さ 7 cm を測る。覆土は褐色土を主体としており，特に区分できなかった。

遺物は，土師器の甕形土器，鉢，坩が出土している。甕形土器は中央よりやや西側のピット周辺に破片となってまとまって出土している。いずれも床面より 7 cm 程上であるが本址に伴うも



第57図　30号住居址実測図

のと判断した。なお，住居中央付近にまとまって炭化材，焼土塊が検出されている。本址が火災により廃絶されたことを示唆するものであろう。

遺物　本址での遺物は豊富で壺，甕，坩，坏等が図示できた。他に100片以上の土器片が検出されている。特に甕は一括土器が6点と多く，他に大形破片も存在する。

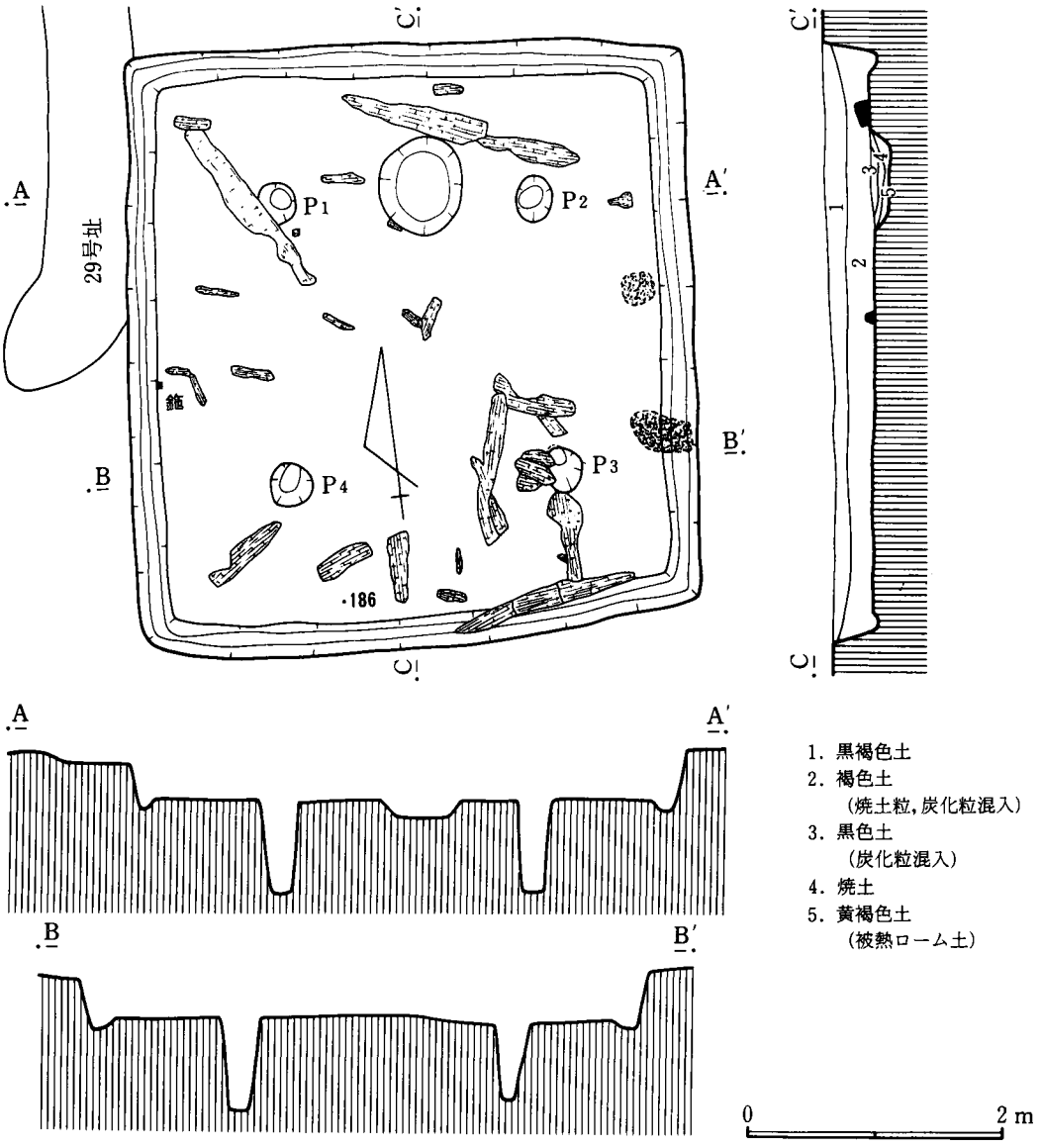
172～174は壺である。172は口縁部のみ遺存し，内外面ともに刷毛整形が著しい。173は細い頸部が「く」の字状に外反し，その周辺は微細な刷毛状工具で整形される。遺存は頸部から胴部にかけて約½ほどとなり，詳細について触れることはできない。色調は赤褐色ないし暗褐色となる。174は胴下半部以下を欠損する。器面は風化が著しく，刷毛目痕がかろうじて確認できる。色調は淡褐色ないし暗褐色となる。175～181は甕で，175，180を除いて器面には刷毛目痕が全面に認められる。とりわけ176の器面は目の粗い刷毛状工具を使用している。遺存は177，178が約⅔，他は図示の½ないし⅓の遺存となる。色調は黒褐色ないし暗褐色を呈す。182は埦となろう。完形品で器面はヘラにより整形されており若干刷毛目も残る。色調は褐色ないし暗褐色を呈す。184は蓋か坏であろう。約⅔が遺存する。内面は赤彩の痕跡らしき部分もあるがはっきりしない。全体として器厚は薄く，作りは粗雑となる。色調は暗褐色を呈す。183，185は坩である。185は口縁部が欠損し，赤彩はよく残っている。183は口縁が遺存するだけであり，やや小形となろう。

31号住居址（第58図）（第98図186）（第107図4）

本址は27号住居址の南東に位置しており，29号址と北西壁で重複している。確認面での精査および土層断面の観察を通じて新旧関係を把握することに努めたが，明確な判断はくだせなかった。また両者の出土遺物の比較も試みたが，比較にたえる遺物が出土していないため不可能であった。平面プランは方形を呈する。南壁がやや張りをもつ。規模は4.5×4.8ｍを測る。主軸方位はＮ－4°－Ｅを指す。床面は中央付近で堅緻であり，壁寄りの部分は軟質である。壁は全体に遺存が良く，立ち上がりもしっかりとしている。壁高は28～42 cmを測る。壁溝が全周する。幅16～22 cm，深さ5～8 cmを測る。炉は中央より北壁寄りに位置する。柱穴間のほぼ中央である。径70×75 cmの円形を呈する。底面は平らに掘り込まれており，非常に良く焼けた痕跡をとどめている。焼土が5 cm程の厚さで堆積している。深さは14 cmを測る。ピットは4か所より検出された。ほぼ等間隔で配置され，掘り方もしっかりとしている。柱穴と考えられる。径34～37 cm，深57～72 cmを測る。覆土は2層に区分された。黒褐色土，褐色土が主体を占める。第2層中には焼土粒，炭化粒が多量に含まれていた。

出土遺物は少ない。埦および鉢が，埦は南壁寄り，鉢は西壁寄りでそれぞれ床面直上で出土している。また，各ピット付近から壁際にかけて焼土塊，炭化材が多く検出されている。おそらく本住居址は火災によって廃絶されたものであろう。

遺物　本址からの出土遺物で図示できたものは2点にとどまった。他に土器片も50～60片とそれほど多くない。



第58図　31号住居址実測図

186は埦となろう。内外面に赤彩が施されるほぼ完形品である。器面は若干剝離している。体部は半球状を呈し，口縁端部が外反するのが特徴と言えよう。

4は鉄製の鉇である。先端部は少し欠損するが形状を窺うには十分と言えよう。また木質部も遺存しているところから保存状態も良好である。

33号住居址（第59図）（第98図187～192）

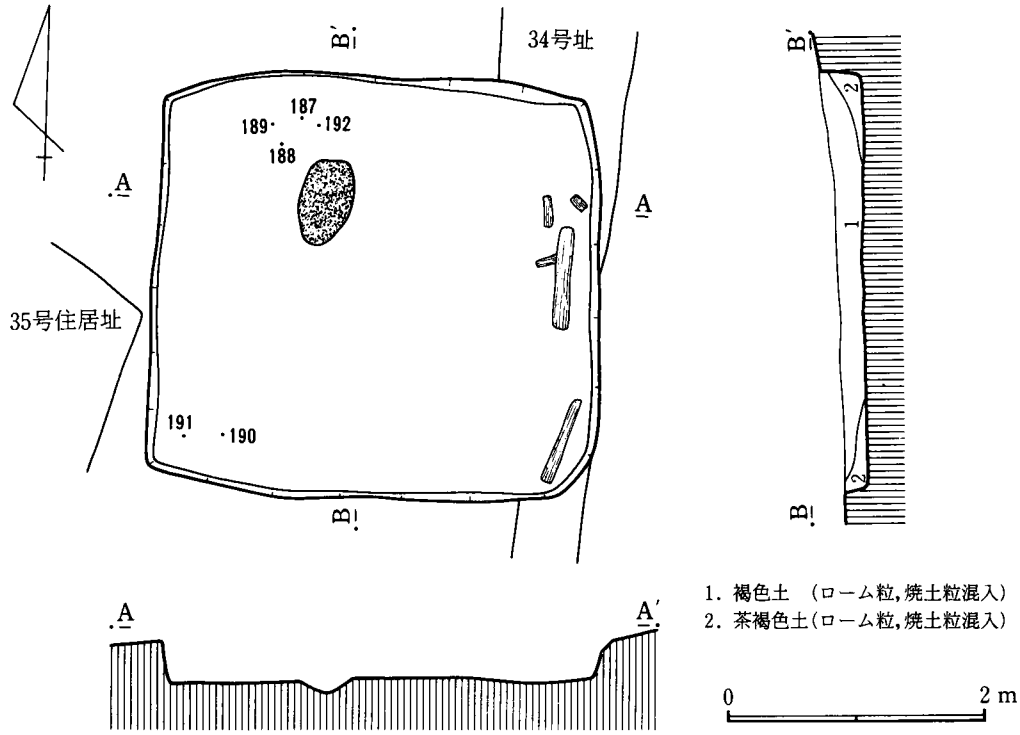
本址は西壁で35号住居址に接している。また東側で34号址と重複している。新旧関係は，遺構確認面の精査および土層断面の観察により，本址のほうが新しいことが確認された。平面プラ

ンは東南隅がやや丸みをもつがほぼ方形を呈する。規模は3.2×3.5 mを測る。主軸方位はN－0°を指す。床面は全体に軟質である。各壁とも遺存が良く，床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は北壁で31 cm，南壁で14 cm を測る。壁溝はない。炉は中央よりやや北西に位置する。径40～67 cm の楕円形を呈する。底面は火熱によりはがれやすくなっている。深さ12 cm を測る。ピットはくまなく精査したが検出されなかった。覆土は2層に区分された。褐色土，茶褐色土が主体を占めている。流れ込みによる堆積状態を示している。

遺物は量的に多くない。炉の北側で壺形土器2点，無頸壺形土器，鉢形土器が出土，住居址の南西隅で底部穿孔の無頸壺形土器，台付甕形土器が出土している。いずれも横位あるいは正立した状況で出土している。レベル的には床面上，もしくは床面より5 cm 程上での出土であり，本址に伴う遺物として考えたい。また，東壁際では炭化材が検出されているが，出土レベルは遺構確認面よりわずかに下であり，流れ込みによるものと思われる。

遺物　本址での遺物は，そのほとんどが一括品として出土し図示した6点以外には，縄文式土器と土師器の小破片が10点ほど検出されたにすぎない。

187は壺で，頸部から肩部にかけてのみ遺存している。頸部の破損面は磨耗が著しいところから破損してもしばらくは使用していたものであろう。色調は赤褐色を呈す。190は台付甕で，台付部と口縁の約⅔を欠損する。口唇部に刻目とその直下に輪積痕を残す。器面はヘラにより整形され，



第59図　33号住居址実測図

スス状炭化物も付着している。188は小形の甕で，底部はきれいに破損しており，他は遺存する。胎土には小石が目立つ。色調は褐色を呈す。191，192は底部の穿孔から甑となろう。この2点は同様な作りであり，口縁部にその特徴が窺える。192は底部だけを欠損し，191は½ほどの遺存となる。色調はいづれも褐色を呈す。189は小形の埦となろう。口縁部の一部が欠損する。また，口縁直下には輪積が整形されずにそのまま残る。色調は淡褐色ないし暗褐色となる。

以上が本址出土の土器であるが，192の甑と188の小形甕はいづれも底部がきれいに破損しており，破損部は発見されなかった。割れ口から考えると多分に意識して底部を破砕したような感を呈することを付記しておく。

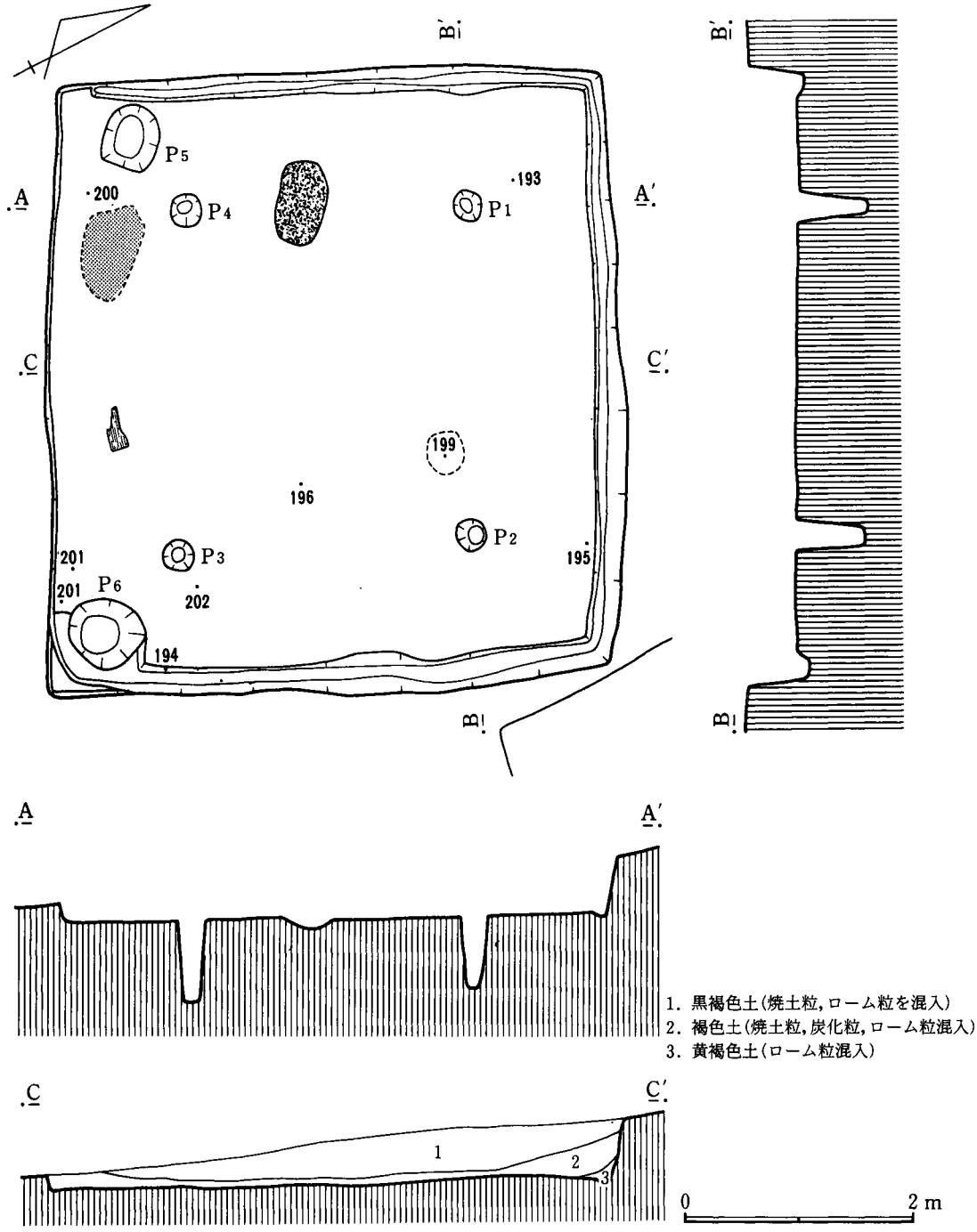
35号住居址（第60図）（第98・99図193～203）

本址は北東側で33号住居址に，南西側で7号墳周溝に近接している。北側から南側に向って上面を削平されており，壁の遺存高にかなりの差が生じている。平面プランは比較的整った方形を呈する。規模は5.0×5.4 mを測る。主軸方向位はN－60°－Wを指す。床面は中央付近で堅緻であり，壁寄りでは軟質である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁高は最も遺存の良い北壁で52 cmを測る。南壁では16 cmを測る。南隅のピットの所から東壁，北壁，西壁にかけて壁溝が巡る。南隅では壁よりもやや内側に掘り込まれている。幅10～22 cm，深さ3～8 cmを測る。炉は中央より西寄りの柱穴間に位置する。径43×74 cmの長楕円形を呈する。深さ9 cmを測る。底面は火熱のため脆くなっている。ピットは6か所より検出された。このうち，中央より外側にほぼ等間隔で配されているP 1～P 4が柱穴と考えられる。径24～28 cm，深さ60～70 cmを測る。南隅に位置するP 5と，西隅に位置するP 6は貯蔵穴であろう。P 5は径60×69 cm，深さ52 cmを測る。P 6は径51×61 cm，深さ35 cmを測る。両方ともピット内からの出土遺物はない。覆土は3層に区分された。

遺物は床面上より10個体の土師器が出土した。中でもP 5付近にまとまっており，壺形土器，埦形土器，高坏形土器2点が出土した。P 6の南側で高坏形土器，P 2の西側で坏形土器，東壁際で坩形土器が出土した。住居中央より壁際に出土する傾向にある。

遺物　本址からの出土遺物は比較的豊富で，図示できた11点も壺，甕，小形壺，坩，坏，高坏とバラエティーに富む。これら以外では約100片ほどの土器片がある。

194は壺となろう。胴下半部は欠損するが，ほぼ球形を呈すものと考えられる。口縁には粘土紐の貼付があり，整形されずにそのまま巡る。器面はヘラ削りの後，軽くヘラナデにより仕上げている。色調は赤褐色を呈す。193は甕で底部周辺が遺存するだけである。器面はヘラ削りにより整形されているが，概して粗雑で一部に輪積の痕跡も残る。またスス状炭化物の付着も認められ，色調は黒褐色ないし暗褐色となる。195～198は壺，坩の類である。196は底部が欠損するものの，他では欠損部は少なく器形を窺うには十分となる。197の器面は剝離が著しく，胴下半部ではその痕跡をわずかにとどめるだけとなる。また，口縁の有段部内面には若干輪積痕を残す。198は口縁



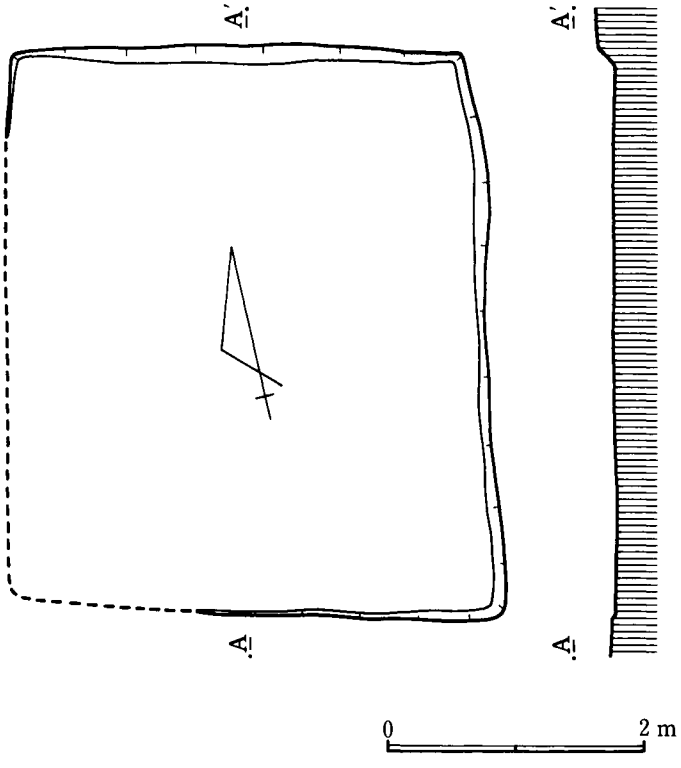
第60図　35号住居址実測図

部に特徴があり，垂直に近い立ち上がりを示す。これらの色調はほぼ赤褐色となる。199は坏で，約½の遺存となる。器内外面の赤彩は鮮明である。200～203は高坏で，200，201は完形に近い。203は坏部が約⅓の遺存となる。坏部にはいずれも稜が認められるが，緩やかな表現をとる。200は脚部に1孔だけが穿たれている珍しい例である。しかも，焼成前の穿孔で，他の高坏と比較すると小規模な孔である。これらの高坏はすべて赤彩が施される。

36号住居址（第61図）（第99図204～210）

本址は7号墳周溝内側で，51号住居址の東約2mに位置する。上面を掘削用重機によって削平されたため遺存が悪く，西側はプランが不明確であった。平面プランは東壁がやや不整であるが，方形を呈するものと思われる。規模は南北長4.4mを測る。東西長は3.8m程になろう。長軸方位はN－9°－Eを指す。床面は全体にしまりがなく，軟質である。壁は南西側から西側にかけて削平されている。他の部分も立ち上がりがわずかに確認されたにすぎない。壁高は北壁で16cm，南壁で12cmを測る。壁溝はない。炉址およびピットは，床面を丹念に精査したにもかかわらず検出されなかった。覆土は暗褐色土が主体を占めており，1層だけである。

遺物はほとんど覆土上面から出土している。主に東南隅付近にまとまっていた。床面から多少上ではあるが，本址に伴うものであろう。



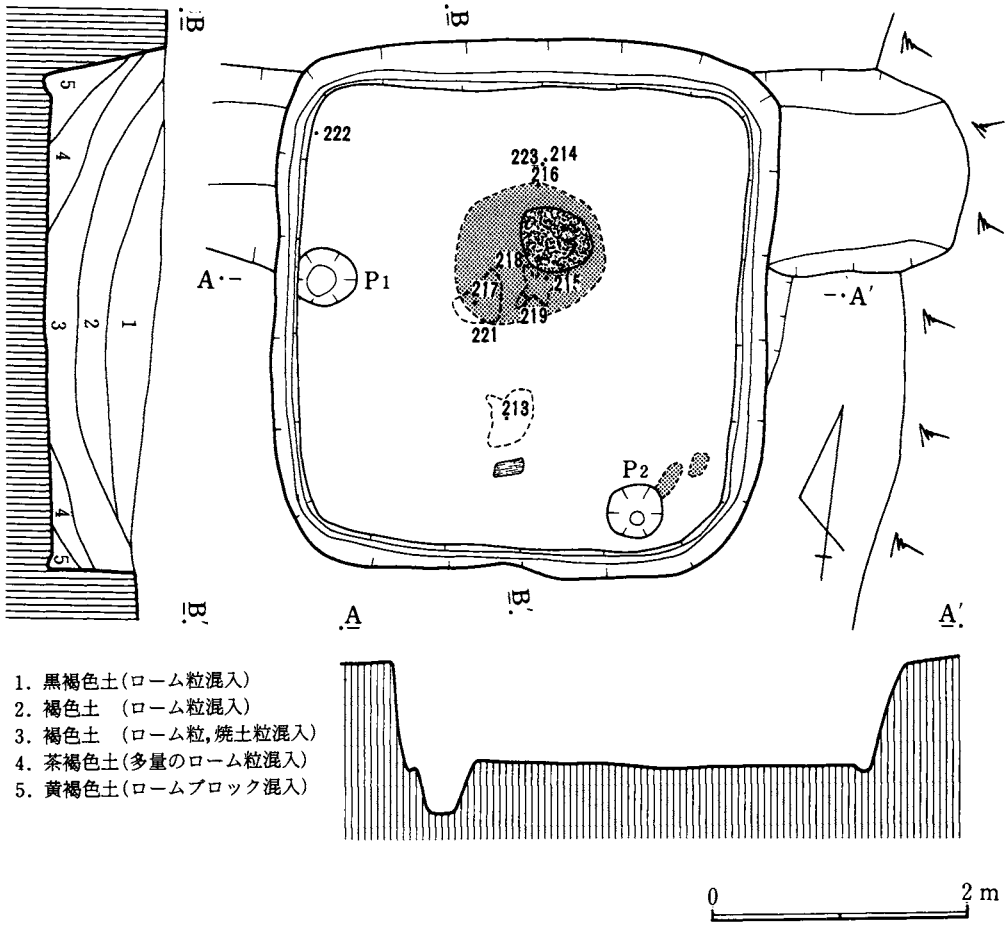
第61図　36号住居址実測図

遺物　本址では図示した7点の他に甕の大形片が出土している。また，土器片も縄文式土器，土師器などが100片をこえる。

204は壺としたほうがよいであろう。胴部以下も欠損する。口縁部はゆるやかな「く」の字状を呈し，内外面には刷毛目痕が残る。胴部の整形はヘラ状工具を使用しており，滑らかな仕上げとなる。色調は赤褐色ないし暗褐色を呈す。205は坏となろうが，底部はやや上底となる。約⅓の遺存であり，特に口縁部ではわずかな遺存を示すにすぎない。赤彩は，それらしき部分は残っているがはっきりしない。胎土には砂粒を多く含む。色調は赤褐色ないし黒褐色となる。206は小形土器で口縁部を欠損する。器面はヘラ削りにより整形され，底部の中心部が丸く凹む。色調は黒褐色となる。207～210は高坏である。坏部と脚部とであるが異個体となる。208の内外面にはよく赤彩が残り，209では器面の剝離，風化が著しく赤彩の有無の判別はできない。

37号住居址（第62図）（第99・100図211～222）

本址は遺跡の南東端に位置する。52号址と重複している。新旧関係は，遺構確認面の精査およ



第62図　37号住居址実測図

び土層断面の検討により，本址のほうが溝状遺構より新しいことが確認された。平面プランは隅丸方形を呈する。規模は3.9×4.1 mを測る。主軸方位はN－9°—Wを指す。床面は全体に堅くしまりがある。壁は全体に遺存が良く，床面より垂直に立ち上がる。壁高は北壁で77 cm，南壁で70 cmを測る。壁に沿って溝が全周する。幅10～18 cm，深さ3～7 cmを測る。炉は中央よりやや北寄りに位置する。径48×59 cmの楕円形を呈する。底面は若干凹凸がみられる。深さは9 cmを測る。ピットは2か所より検出された。両方とも壁際に偏っている。径42～44 cm，深さ40～41 cmを測る。主柱穴となろう。覆土は5層に区分された。黒褐色土，褐色土，茶褐色土，黄褐色土から成り，すべて流れ込みによる堆積状態を示している。

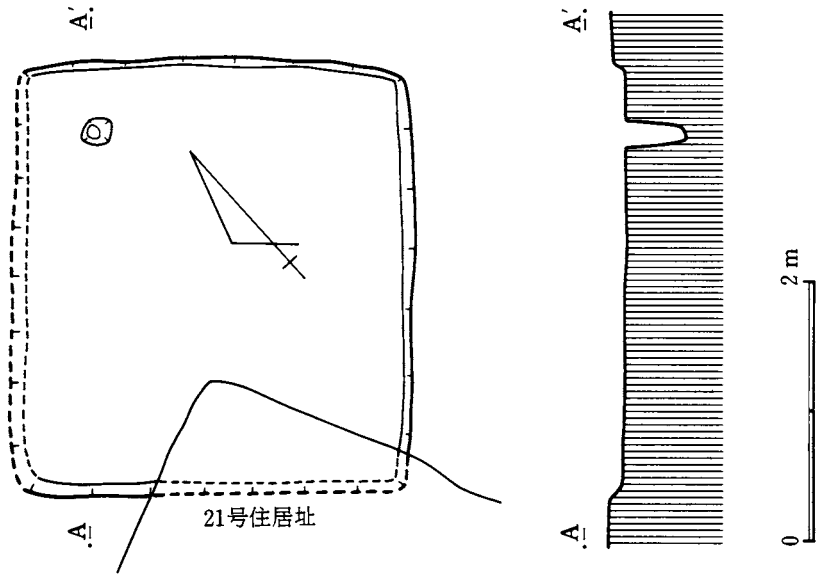
遺物は比較的多く出土し，その出土状況から2群に区別できるようである。すなわち，炉の北側および壁際から出土している遺物と，炉の南側，住居の中央にまとまって出土した遺物である。前者はすべて床面に密着して出土しており，壺形土器頸部，台付甕形土器，甕形土器底部，高坏形土器脚部がある。後者はすべて3層中に含まれ，床面より4～9 cm程上でしかも破片で散在していた。甕形土器，鉢形土器，高坏形土器がある。この結果，前者を本址に伴う遺物とし，後者は本住居址廃絶後他から廃棄された遺物と考えたい。

遺物　本址では豊富な出土遺物があり，図示できた土器は12点に及ぶ。他にも約150片ほどの土器が検出できた。

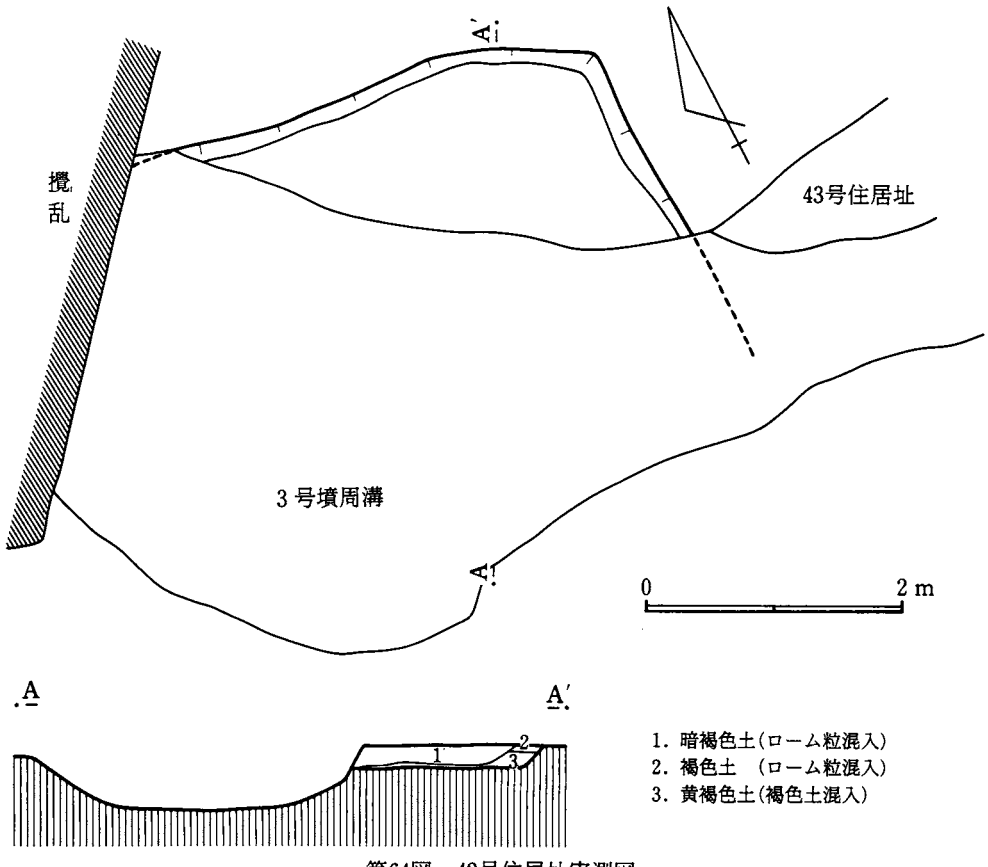
211は壺の頸部で，肩部には細縄文が認められる。そしてこの縄文帯を区画するような形で半截竹管により，縦方向に3～4条の押引文が加えられる。また，縄文は2～3 cmの原体を使用しており，異なった原体による羽状縄文の効果も見逃せない。色調は褐色ないし赤褐色となる。212も壺の底部となろう。器面にはわずかに赤彩が遺存する。底部の作りから推定するとかなり大形品となる。213～218は甕となろう。本址での甕は様々なタイプが存在する。完形品に近いものとしては217がある。他はすべて欠損品で，218の底部を除いて½～⅔の遺存となる。色調は，輪積痕を残す216が赤褐色で，他は暗褐色，黒褐色となる。219は椀，遺存は底部までには至っていない。器面には若干刷毛目が残る。220～222は高坏で211は欠損部もあるがほぼ完形品となり，赤彩もよく残っている。222は脚部だけの遺存で，器形はそれほど大きくはないであろう。

39号住居址（第63図）

本址は南西側で21号住居址と重複している。確認時の精査により本址のほうが21号住居址より古いことが確認されている。また，調査前の重機等により上面をかなり削平されていた。このため，北西壁もはっきりと確認できなかった。平面プランは方形を呈するものと考えられる。規模は南北長3.4 mを測る。床面は全体に軟質である。壁は立ち上がりがわずかに確認できたにすぎない。遺存のよい部分で壁高11～14 cmを測る。壁溝はない。炉址も検出されなかった。ピットは1か所より検出された。径22 cm，深さ47 cmを測る。柱穴とみてまちがいないだろう。覆土は暗褐色土1層のみである。



第63図　39号住居址実測図



第64図　42号住居址実測図

出土遺物はきわめて少ない。全て土器細片で覆土中に散在していた。図示し得るものはない。

遺物　本址では遺物は少なく，図示できるような土器も検出されなかった。本址に伴う土器としては甕の胴部大形片が出土したにとどまった。他には縄文式土器が30片ほど出土している。

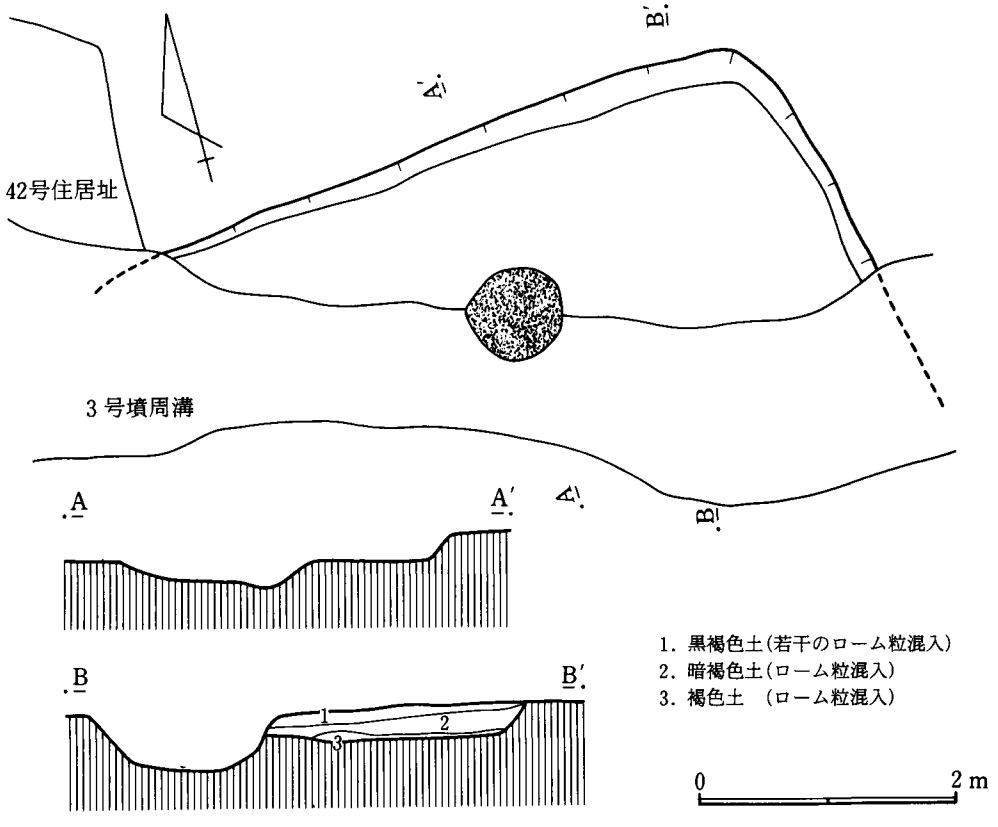
42号住居址（第64図）

本址は調査区北側に位置している。3号墳周溝および43号住居址と重複しており，遺存状態は悪い。新旧関係は，3号墳周溝に切られていることから3号墳より古いものであるが，43号住居址との関係は確認できなかった。平面プランは確認された部分から方形を呈すると考えられる。規模は不明である。床面は軟弱であり，壁は高さ15cm程度しか残存していない。立ち上がりは緩やかである。炉，柱穴，壁溝は確認できなかった。覆土は3層に区分された。暗褐色土，黄褐色土が主体を占める。

遺物　本址では遺物の出土は皆無であった。

43号住居址（第65図）（第100図223）

本址は，42号住居址同様3号墳周溝によって切られており，プランの一部だけ確認されたのみである。平面プランは，確認された部分から方形を呈するものと考えられる。規模は不明である。



第65図　43号住居址実測図

主軸方位はN—17°—Wを指すものと考えられる。床面は全体的に軟質である。壁は緩やかに立ち上がり，壁高は25 cm前後を測る。壁溝はない。炉は北壁寄りで検出された，約½を周溝によって切られている。断面は皿状で深さは残存部で20 cmを測る。径は75 cm前後であろう。柱穴は確認できなかった。覆土は3層に区分された。黒褐色土，暗褐色土が主体を占める。

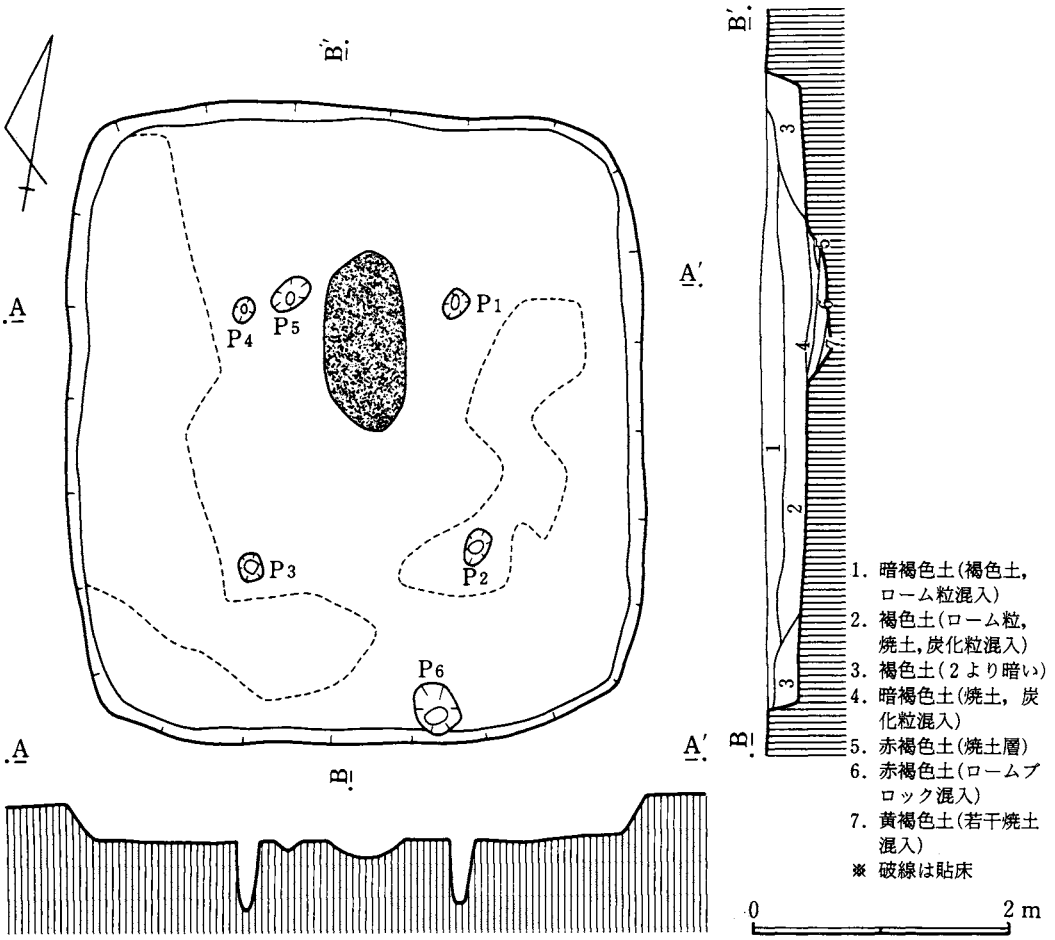
遺物は炉の西側，北壁際よりミニチュア土器1点が出土している。

遺物　本址でも遺物は，図示した1点の他に土器片が数点と少ない。

223はミニチュア品となろう。一部が欠損する。口縁には意識的に輪積痕を残す。色調は褐色ないし暗褐色となる。

44号住居址（第66図）（第100図224～230）

本址は4号墳周溝の内側で，50号住居址の南西約9 mに位置する。遺構確認面はソフトローム層上面である。平面プランは南壁がわずかに張る隅丸方形を呈する。規模は4.5×4.8 mを測る。主軸方位はN—12°—Wを指す。床面はほぼ平坦であるが，西壁付近および炉と東壁の間の部分が



第66図　44号住居址実測図

やや軟質である以外は硬くしまりがある。壁は全体的に遺存状態が良好であり，床面よりやや傾斜をもって立ち上がる。壁高は27～30 cmと同じ高さである。壁溝はない。炉は中央よりやや北側に位置する。床面を皿状に掘り込んだもので，径 60×140 cm の長楕円形を呈し，深さ 20 cm を測る。上面に 5～10 cm の厚さで焼土，炭化粒の堆積が認められた。ピットは6か所より検出された。このうち炉をはさんで住居対角線上に位置するP1～4が主柱穴と考えられる。径20～30 cm，深さ 49～72 cm を測る。P 5は南壁に接して掘り込まれており，径 40 cm，深さ 15 cm を測る。P 6は炉とP 1の間に位置し，径30 cm，深さ36 cmを測る。位置および規模から主柱穴の補助的な役割を持つものかと考えられる。なおP 5は位置から，出入口部に付設した機能をもっていたものかもしれない。覆土は3層に区分される。暗褐色土，褐色土が主体を占め，流れ込みによる堆積状態を示している。

遺物はさほど多くない。中央より壁際に偏って出土している。小形鉢形土器は東壁の中央で炭化材に埋もれて出土している。東南壁側では手捏土器，西南壁側で高坏形土器が出土している。壺形土器は西側の覆土下層で出土している。なお床面，ことに北，西壁付近では炭化材および焼土が多量に残っており，炭化材は住居の中央に向いて倒れているものが多かった。これらの状況から判断して，本址は火災に遇ったものと考えられる。

遺物　本址では遺物量は少なく，図示した7点の他は20点ほどの土器片だけとなる。

224は壺で，口縁の⅔が遺存する。器面は軽くヘラで整形され，文様等は認められない。口径から推定すると比較的大きな壺となろう。色調は褐色を呈す。228は高坏の坏が⅗ほど遺存したもので，内面はヘラ磨きによりよく調整されている。色調は褐色ないし暗褐色を呈す。227は器台の器受部となろう。器受部の孔は認められない。仕上げも粗雑で，輪積の整形もなされていない。230は脚部が⅓ほど遺存し，色調は赤褐色。胎土も227と類似しており，227，230は同一個体の可能性が強い。229は高坏の脚部となろう。遺存は約¾で部分的に赤彩が認められる。225は埦としたほうがよいであろう。ほぼ完形品で，器面の仕上げは悪く粗いヘラ削りだけでその後の調整は施されていない。色調は褐色ないし黒褐色。226は手捏土器で口縁で大きく広がる。胎土には砂粒，小石等を混入し，焼成もよくない。内面では輪積痕も数条残る。色調は暗褐色を呈す。

45号住居址（第67図）（第100～102図 231～250）（第35図 58）

本址は4号墳周溝の内側で，44号住居址の東約5 mに位置する。46号住居址と重複関係にある。遺構確認面はすでにゴミ投棄のためにかなり削平，攪乱を受けており，遺存状況はきわめて悪い。このため，わずかに残っていた覆土断面と遺構状況，遺物の出土状況などから新旧関係を判断した。その結果，幸いなことに土層断面において46号住居址の上に貼床を施して本址を築いていることが確認され，また，この貼床の平面的な広がりも断面と一致したため，46号住居址より本址のほうが新しいことが判明した。平面プランは，遺物の広がり，床面の状況から推定して南北に長い長方形を呈するものと考えられる。規模は短辺3.3 m，長辺4.4 m前後となろう。主

軸方位はN－20°－Eを指すものと考えられる。床面は住居南側の46号住居址と重複していない部分で遺存状態が比較的良好であった。貼床の部分は褐色土をつき固めてつくられていたが，攪乱により部分的にしか確認できなかった。壁は南壁と東，西壁の一部で確認されたが，西壁で10 cm，東壁で5 cmと浅く遺存は悪い。壁溝はない。炉は確認範囲のほぼ中央，住居址全体からすると西寄りに位置する。径 64×81 cm，深さ 10 cm を測る。底面は良く焼けていた。ピットは，炉の南側で2か所，貼床部分で1か所検出された。位置から考えて主柱穴とみて良いであろう。径 26～27 cm，深さP 1－56 cm，P 2－16 cm，P 3－36 cm を測る。覆土は削平されていたため 10 cm 前後しか残っていなかった。暗褐色土が主体で，焼土，炭化粒を多く含んでいる。遺物は，上面を削平されていたにもかかわらず多量に出土している。特に炉の東南側と北側貼床部に集中している。甕など大型のものはほとんど潰されていたが，坏，鉢などは完形のままのものが多く，遺存はよい方である。

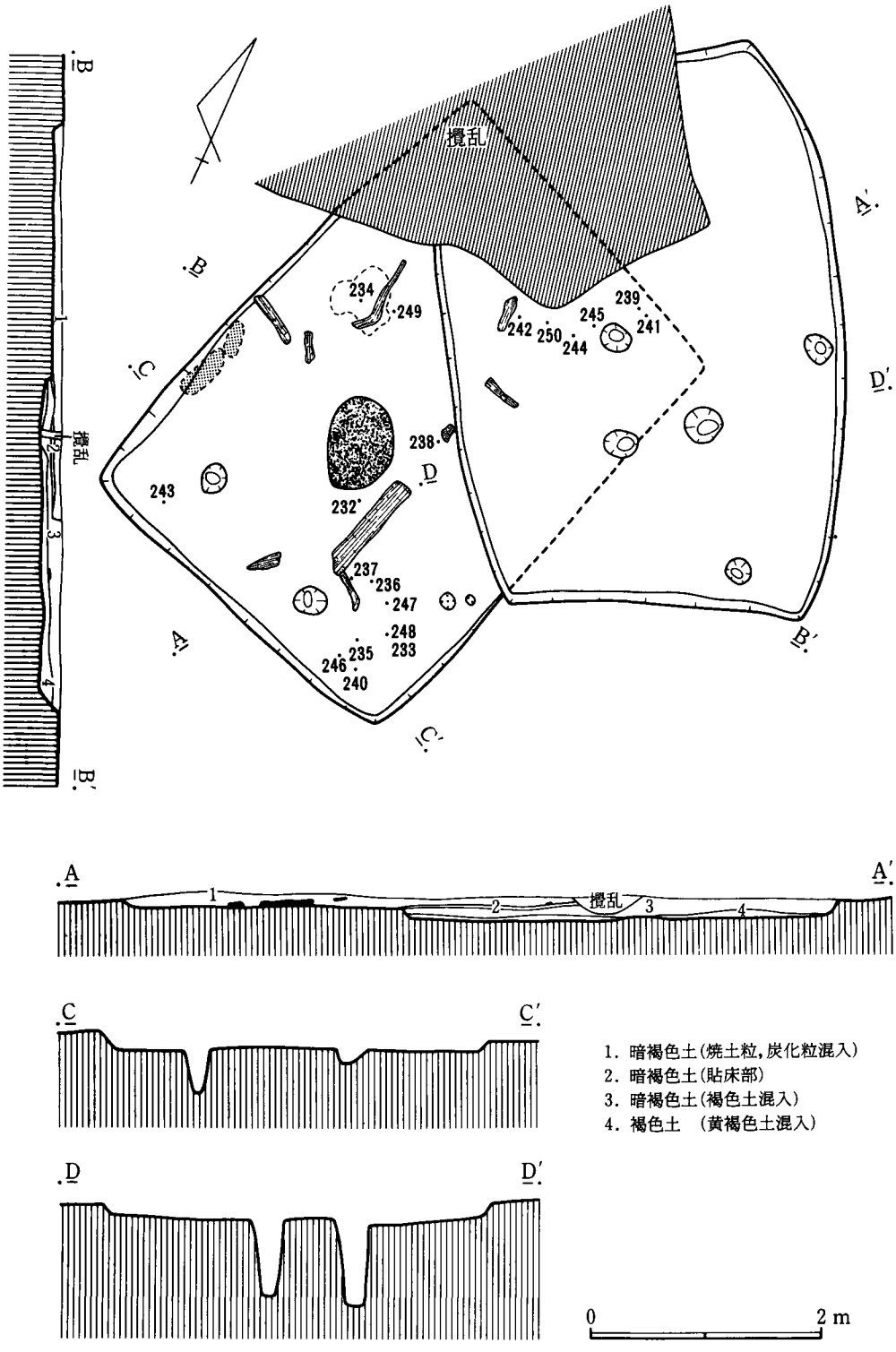
遺物　本址から出土した遺物は豊富で，図示できた土器は20点を数える。特に甕，坏が多い反面高坏については検出できなかった。

233は壺となろう。口縁部から胴部にかけて一部欠損する。器面はヘラナデによりきれいに整形されており，口縁から頸部にスス状炭化物の付着も認められる。色調は赤褐色を呈し，一部黒褐色となる。231，232，234～236は甕で，236を除いたすべてが完形もしくはそれに近い。231，235では刷毛整形の痕跡が認められるが全面に及ぶものではない。また，236は口縁部をきれいに欠損し，破損部の磨滅も著しいところから無頸壺のような形で再利用していたものと考えられる。色調はいづれも赤褐色ないし褐色を呈す。237，239は小形の壺で，ともに赤彩で飾られる。238は小形壺の底部を穿孔し，甑としている。器面の一部には赤彩らしき痕跡を残す。240～250は埦，坏の類となるが，そのほとんどに赤彩が施されていたものと思われる。器面に赤彩が認められないとした242，249，250では風化が著しく器面の遺存が非常に悪い。また，246，248では底部周辺の仕上げが粗雑となっている。

58は縄文期の混入品とも考えられる。石材は安山岩で，周囲はよく整形されている。

46号住居址（第67図）（第107図9）

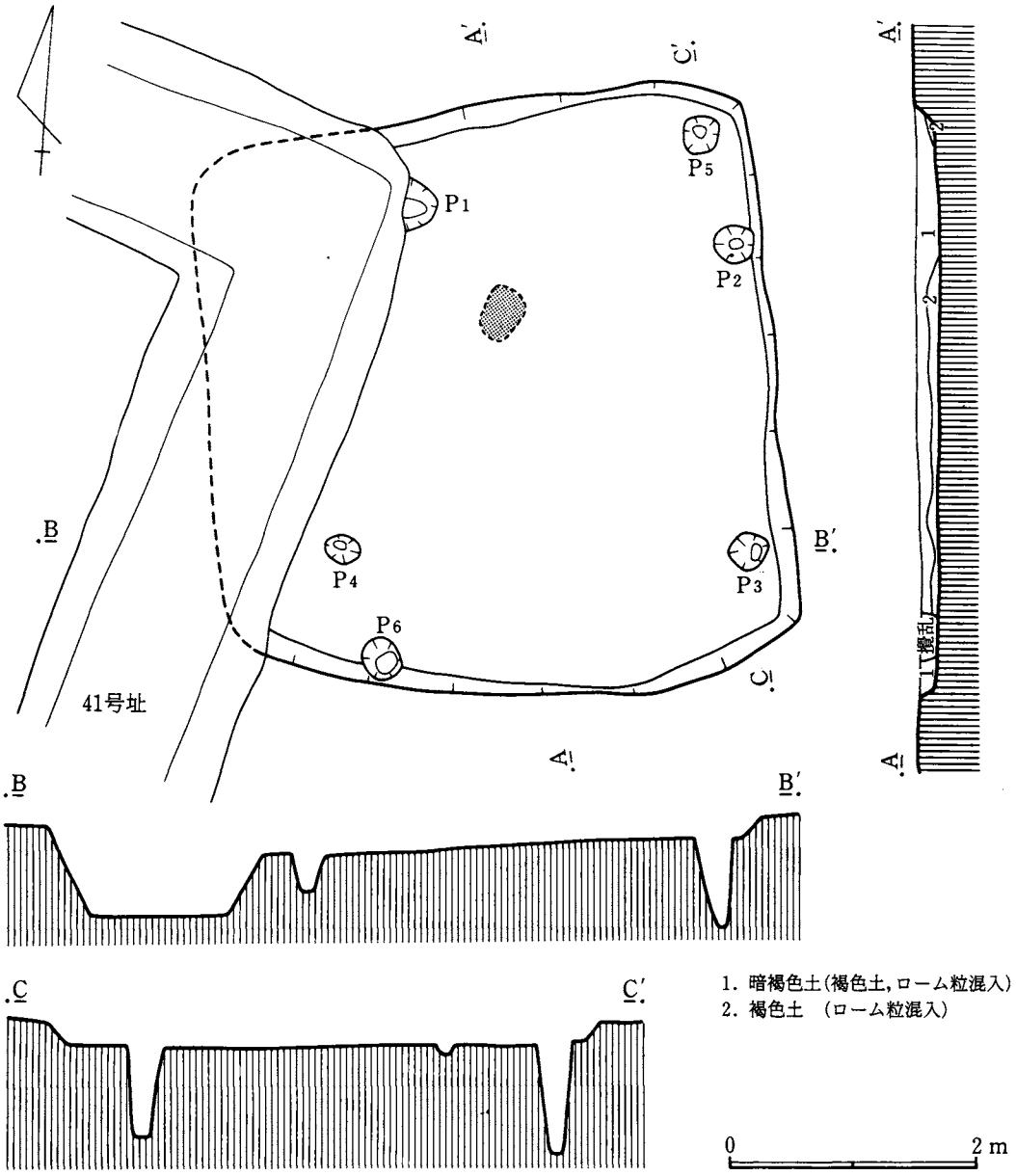
45号住居址と重複しており，上面がかなり削平，攪乱を受けていた。このため西北側のプランは不明である。本址の覆土に45号住居址の貼床が存在していたことから，新旧関係は45号住居址より古いことが明らかである。平面プランは西北－南東に長い長方形を呈すると考えられるが，南東壁は外に張り出しており，不整な形を呈している。規模は3.5×5.0 mを測る。床面はほぼ平坦であるが全体的に軟質であった。壁の遺存状態はあまり良くなく，床面からの立ち上がりがわずかに確認されたのみである。壁高は東側で 13～15 cm，西側で 8 cm を測る。壁溝および炉は検出されなかった。ピットは4か所より検出された。規模が一定しておらず，位置も偏っている。中央付近の2つ並ぶピットは径30 cm，深さ66～72 cmを測り，他の壁寄りのものとは異なり深



第67図　45(左)・46(右) 号住居址実測図

くしっかりしている。覆土は2層に区分され，暗褐色土が主体を占める。遺物は少ない。石製紡錘車が1点出土しているが，出土レベルや位置から考えて，45号住居址の遺物が削平された際移動したものと考えられる。また，土器底部がＰ1の南側，床面よりやや上で出土しているが，本址に伴うものとは断定し難い。

遺物　本址からは縄文式土器の底部と甕の大形片及び紡錘車と，その数は少ない。説明を加えるまでもないが，紡錘車は滑石製で一部を欠損する。



第68図　49号住居址実測図

49号住居址（第68図）（第102図251・252）（第107図17）

本址は4号墳の南約8mに位置しており，41号址との重複のため西側を欠いている。平面プランは南壁が歪んでいるが方形を呈するものと考えられる。規模は南北4.72mを測る。東西は4.6m前後になるであろう。主軸方位はN—11°—Wを指す。床面は全体に堅く，若干凹凸が認められた。壁は確認面からの掘り込みが浅いため立ち上がりがわずかに残っていたにすぎない。壁高は北壁で19cm，南壁で16cmを測る。壁溝はない。炉は明確には検出できなかったが，中央より北寄りに径40cmの範囲で良く焼けた部分が存在していた。位置からみて炉の痕跡を残しているものと考えられる。ピットは6か所より検出された。P1～P4は，不整な配置を示すが柱穴と考えられる。径30～41cm，深さ30～88cmを測る。P5は壁際に位置する。底面より土器片が2点出土しており，本址に伴うものと考えられる。径33cm，深さ26cmを測る。P6は，P5同様壁際にあるが柱穴かどうか判然としない。覆土は2層に区分された。暗褐色土，褐色土が主体を占める。

遺物は土器片がほとんどで床面上に分散しているが，中央から東壁寄りおよび南東隅に偏って出土している。

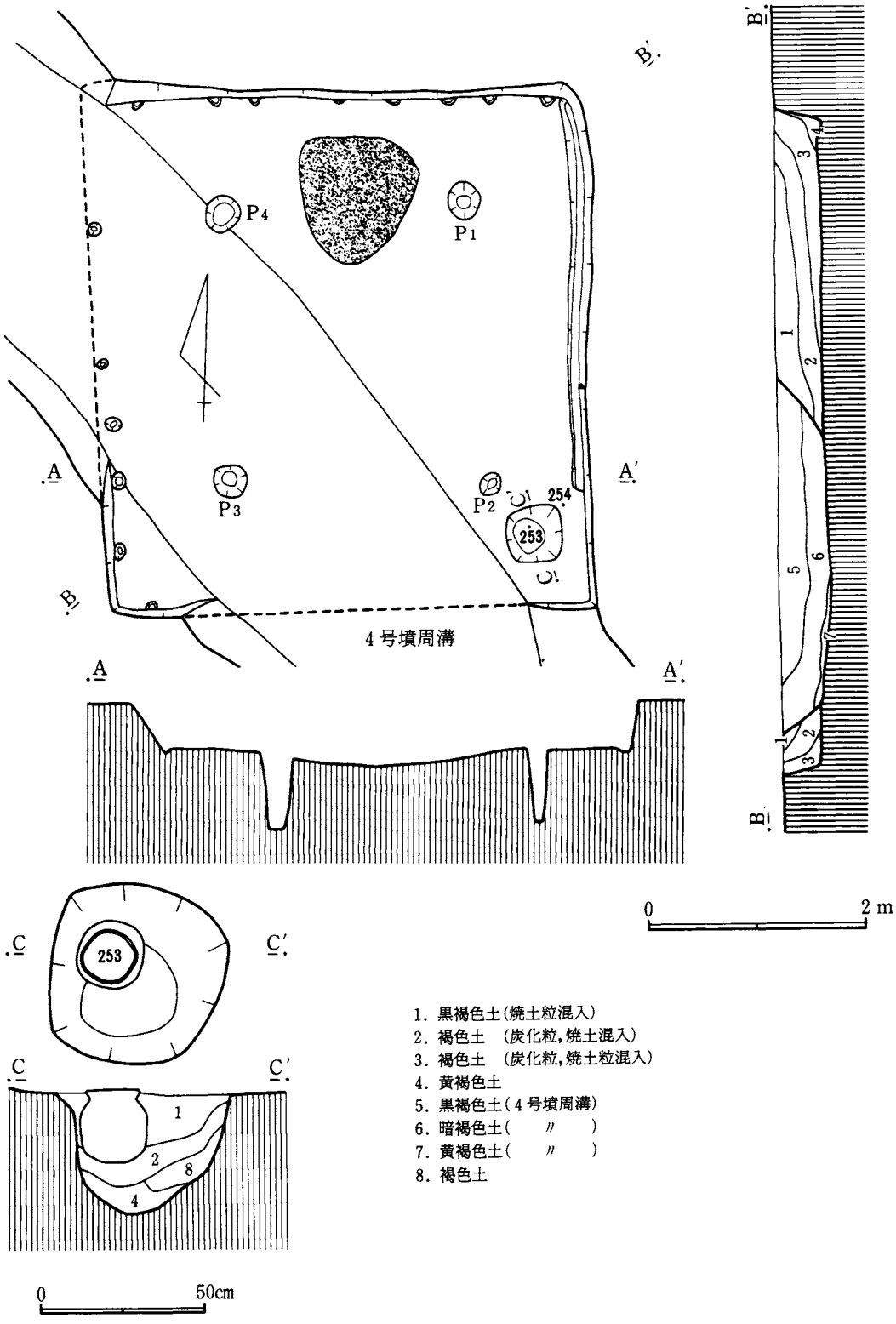
遺物　本址から出土した遺物は，図示した3点の他縄文式土器，土師器など約100点となる。

ともに壺で，251は胴下半分を欠損する。器内外面はきれいに赤彩が施される。口縁は約½の遺存となるが，4本1組の粘土紐が4単位に認められる。また，肩部以下には5～6本1組の櫛描文が整然と施文されている。252の器形は，その形状からかなり大形となる。胴部が約½の遺存となり，文様は若干遺存部に残る。本土器の山形文は櫛状工具によらず，むしろ沈線に近い。赤彩は認められないが，器面はよく調整されている。色調は褐色を呈す。

17は円筒形の土錘であり，完形品となる。

50号住居址（第69図）（第102図253・254）（第107図18）

4号墳周溝の北東側に位置する。西壁と南壁は周溝と重複している。平面プランはよく整った方形を呈している。規模は4.4×4.5mと若干南北に長くなっている。主軸方位はN—3°—Wを指す。床面は周溝部分が掘り込まれている以外平坦で堅くしまりがある。壁は床面より垂直に立ち上がり，しっかりとしている。壁高は南隅から東，北壁にかけて40～44cm，南西隅で38cmを測る。壁溝は東壁下だけで検出された。幅12～14cm，深さ3～6cmを測る。壁溝以外に径5～14cm，深さ5～8cm程の小ピットが北～西隅の壁に接して検出されている。あるいは溝に類する機能を有していたものかもしれない。炉は中央より北に偏して位置する。径111×115cmの角の丸い三角形に大きく掘り込まれている。深さは13cmを測り，底面の凹凸は少ない。焼土の堆積は3cm前後であったが，よく焼けていた。ピットは5か所より検出されている。このうち，対角線上にほぼ等間隔で配されたP1～P4が主柱穴である。径23～35cm，深さ63～75cmを測る。P5は貯蔵穴であろう。東南隅で検出されており，53×54cmの方形を呈する。深さは35cm



第69図　50号住居址実測図

を測る。ピット内より甕形土器が正立した状態で出土しており，口縁部とピット周辺の床面とがほぼ同レベルであった。覆土は4層に区分された。黒褐色土，褐色土が主体を占め，流れ込みによる堆積状態を示している。

遺物は比較的少ない。P5内より甕形土器が出土し，P5の東脇より坏形土器が正位の状態で出土している。また東壁中央の壁溝上面より石器が出土している。

遺物　本址の遺物は比較的少なく，図示した3点と約50片の縄文式土器，土師器となっている。

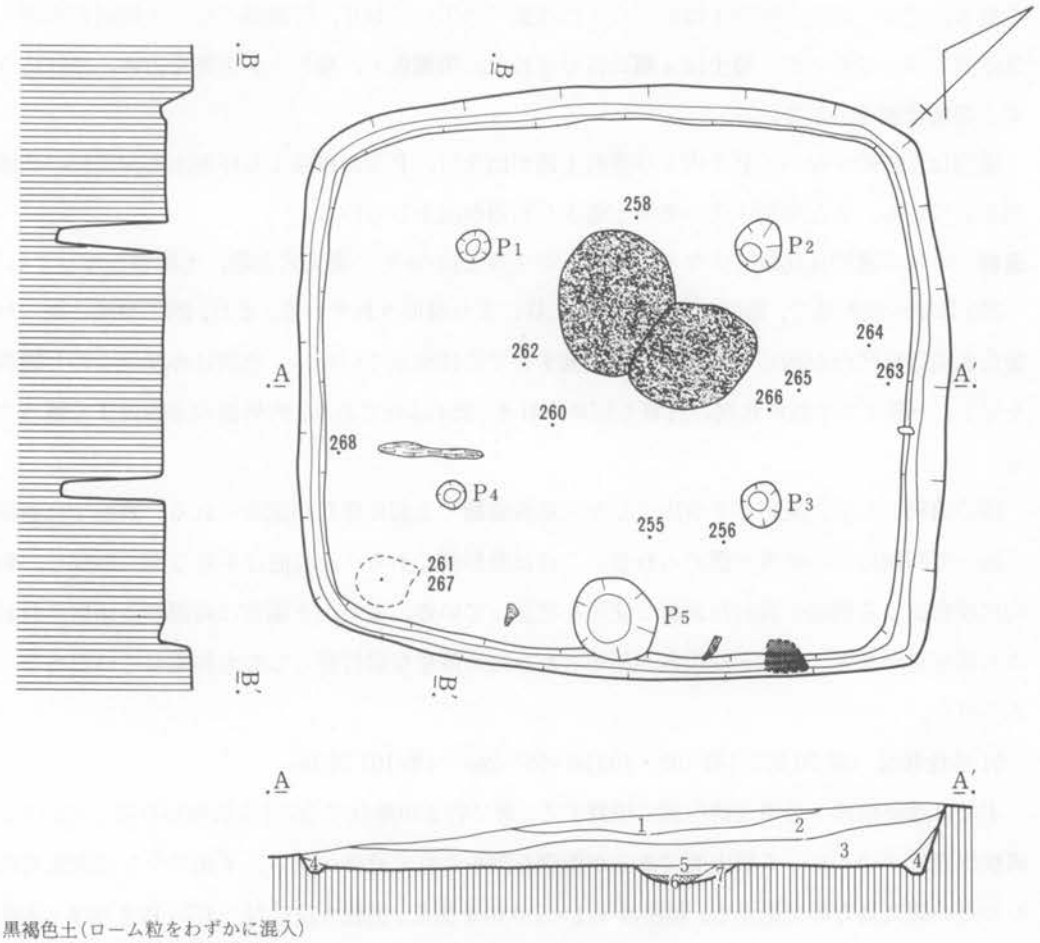
253は甕の完形品で，器内外面は刷毛状工具により整形されている。また，胴下半部に見られる接合面周辺は凹凸が激しく十分な整形を施すまでには至っていない。色調は赤褐色ないし暗褐色を呈し，一部にスス状炭化物の付着も認められる。254は坏であり，内外面の赤彩はよく残っている。

他の遺物として，砥石が1点出土した。粘板岩製で上部に穿孔が認められる。表面では右側縁に沿って利器による削痕が認められる。これは整形痕であろう。表面は平坦な面を形成し，斜方向に研磨による擦痕が表われ顕著な使用を物語っている。また，下端部は両面から研磨され石器の刃部を思わせる。しかも使用痕が認められるため簡単な敲打器としても利用していたものと考えられる。

51号住居址（第70図）（第102・103図255～268）（第107図18）

本址は遺跡南側7号墳周溝内側に位置する。東に約2m離れて36号住居址が存在している。遺構検出面はソフトローム層上面であるが南側を削平されて遺存が悪い。平面プランは南北方向にやや長い隅丸長方形を呈する。規模は4.1×5.0mを測る。主軸方位はN－47°－Wを指す。床面は全体的に堅くしまりがあるが，特に炉周辺が良く踏み固められている。床面上には部分的に炭化材，焼土が認められた。壁は床面よりほぼ垂直に立ち上がる。壁高は確認面より北東壁で40～50cm，西南壁で10～11cmを測る。壁に沿って壁溝が全周する。幅は10～15cm，深さは3～5cmを測り，断面は「U」字形を呈する。炉は住居のほぼ中央に位置する。重複した2個の炉から成り，床面を皿状に掘り込んでいる。長軸方向が住居址の北東壁，西南壁に平行するものをA号炉，やや斜めの炉をB号炉とする。A号炉よりB号炉に焼土，炭化物が多く検出されており，断面の観察からA号炉を利用した後B号炉を掘り込んだものと考えられる。ピットは5か所より検出された。このうち四隅にほぼ等間隔で配されたP1～P4が主柱穴と見做される。径25～40cm，深さ65～85cmを測り，それぞれ床面よりほぼ垂直に掘り込まれる。P5は東南壁中央で壁溝に接して位置する。径62×65cm，深さ66cmを測る。床面から浅鉢状に掘り込まれており床面の凹凸はない。貯蔵用に利用されたものか，出入口の付属施設なのか判断しかねる。覆土は4層に区分された。上方からの流れ込みによる堆積状態を呈しているが，床面直上では焼土粒，炭化粒が認められた。床面上の炭化材，焼土から推察すると，火災に遇った住居址かと考えられる。

遺物は多量に検出された。すべて土器および土製品である。床面上の遺物は炉から西南壁側で



1. 黒褐色土(ローム粒をわずかに混入)
2. 茶褐色土(ローム粒を多量に混入)
3. 褐色土　(ローム粒,焼土粒 炭化粒を混入)
4. 黄褐色土(ロームブロックを混入)
5. 黒色土(焼土粒混入)
6. 焼土
7. 被熱ロームブロック土

第70図　51号住居址実測図　　0　2 m

出土し，炉から東南側に出土した遺物は床面から 30～50 cm 程上面の出土である。後者は高坏形土器が多く，本址に伴う遺物ではないと思われる。

遺物　本址の遺物量は豊富であり，図示できた土器は 14 点を数える。中でも高坏の占める割合が高い。他にも土器片が 150 点ほどあり，壺，高坏などの大形片も存在する。

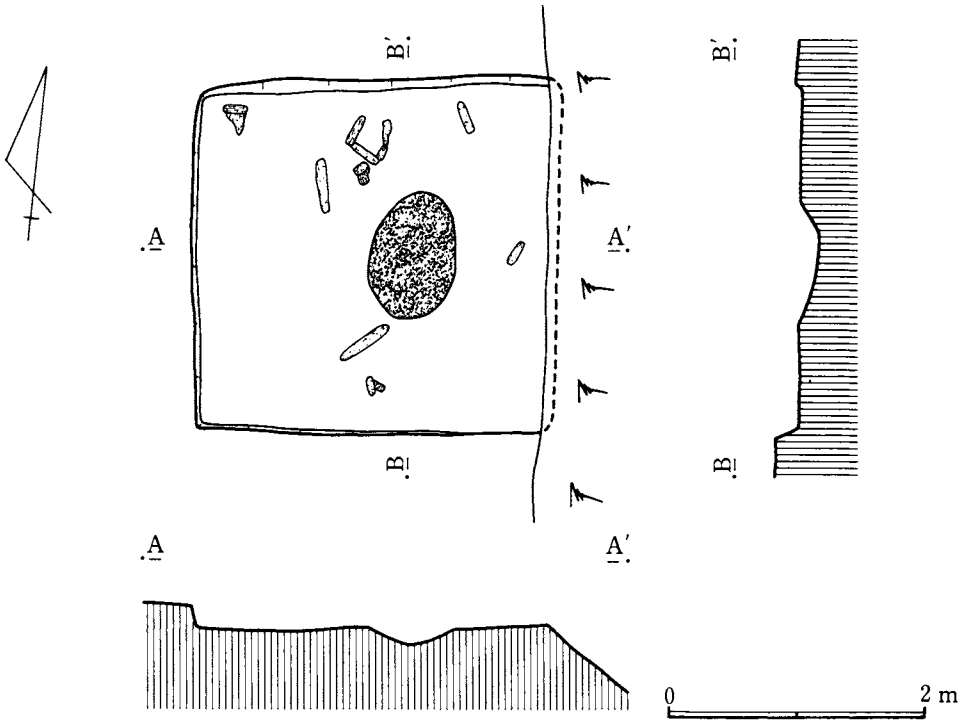
257，258，261は甕となろう。いづれも底部が欠損する。261は大形品の胴部に円形の破損部を有する。破損面には磨耗痕が認められるところから，円形の面を意識的に作出して器を利用していたものであろう。口唇部には細かな刻目を作り，器面は 1 cm 幅ぐらいのヘラで入念に整形している。この整形は粘土がやわらかい時点かあるいは器面に水をかけながら行っているらしく，ヘラ痕が鮮明に残されている。色調は赤褐色を呈す。257，258 は同タイプの甕で，257 の口縁端部には爪形痕が巡る。ともに色調は褐色となる。255 は壺で口縁部だけの遺存となる。器面

は刷毛痕によって覆われ，色調は褐色ないし暗褐色となる。256は小形品で，口縁の一部を欠損する。器面は若干調整されているが，内面では粗い刷毛目によって簡単な整形を施すにすぎない。色調は暗褐色，胎土には小石，砂粒が多く含まれる。259，260，262～268は高坏となる。遺存度においては，259，262～266では欠損部が少なく，器形は把握できる。これら9点の高坏は，その形態で2つのタイプに分類できる。いわゆる典型的な和泉期のもの（262～266）と，古期の様相を受け継いでいるもの（259，260，268）となろう。後者では脚部に穿孔が認められ，13は4孔，他の2点は3孔となっている。一方，住居址には炉址が2か所あるため，二期にわたる居住が考えられるところから，伴出土器について苦慮するところである。

土器以外の遺物として土玉が1点検出された。色調は黒褐色を呈している。

54号住居址（第71図）

本址は遺跡南東側で30号住居址の東約5mに位置する。掘削用重機によって上面をかなり削平されており，東壁は破壊されていた。平面プランは方形を呈する。規模は南北長2.7mを測る。東西の長さは2.8m前後となろう。主軸方位はN－9°－Wを指す。床面は全体に軟質である。壁は北，西，南壁で立ち上がりが確認された。壁高は南壁で17cm，北壁で2cmを測る。壁溝はない。炉はほぼ中央に位置する。径67×97cmの楕円形を呈する。住居の規模に比べ大形の炉である。すり鉢状に掘り込まれており，深さ14cmを測る。底面はよく焼けた痕跡をとどめてい



第71図　54号住居址実測図

る。ピットは検出されていない。覆土は褐色土が主体を占めており分層できなかった。

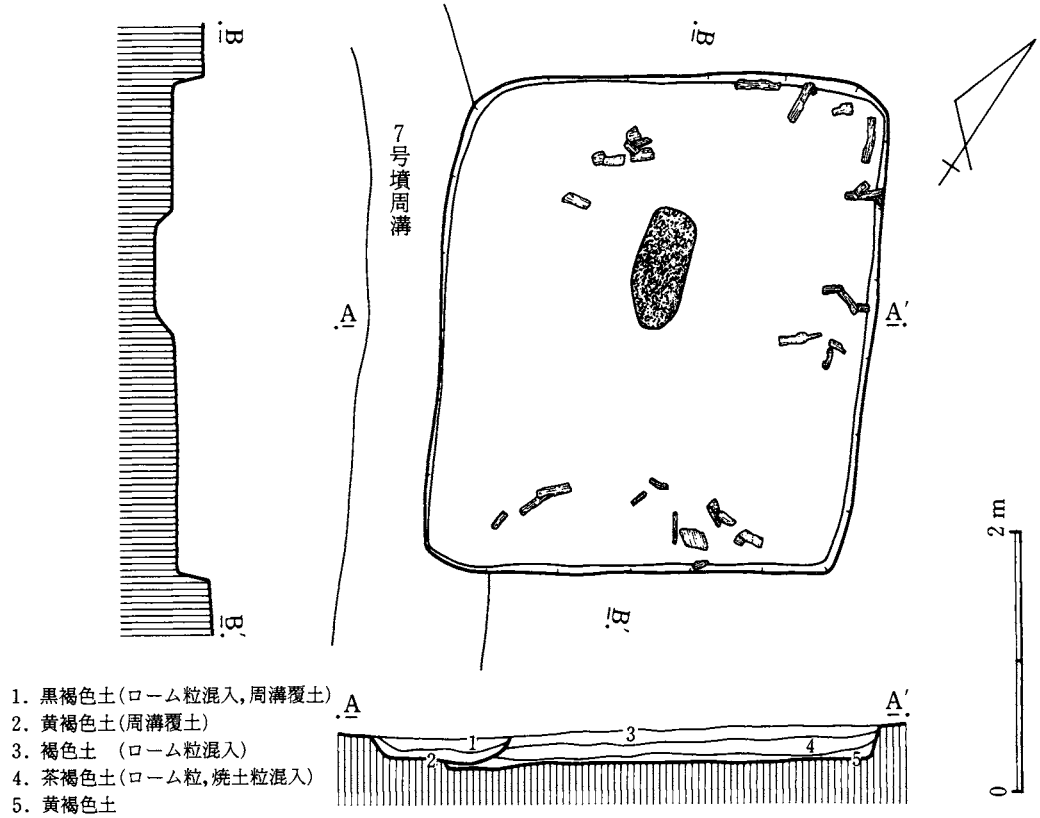
遺物は全て土師器の細片であり，覆土中に散在していた。なお床面上から炭化材が検出されており，本址が火災によって廃絶した可能性が考えられる。

遺物　本址では土器片が20片ほど出土したにとどまり，図示できるような遺物は皆無であった。

55号住居址（第72図）

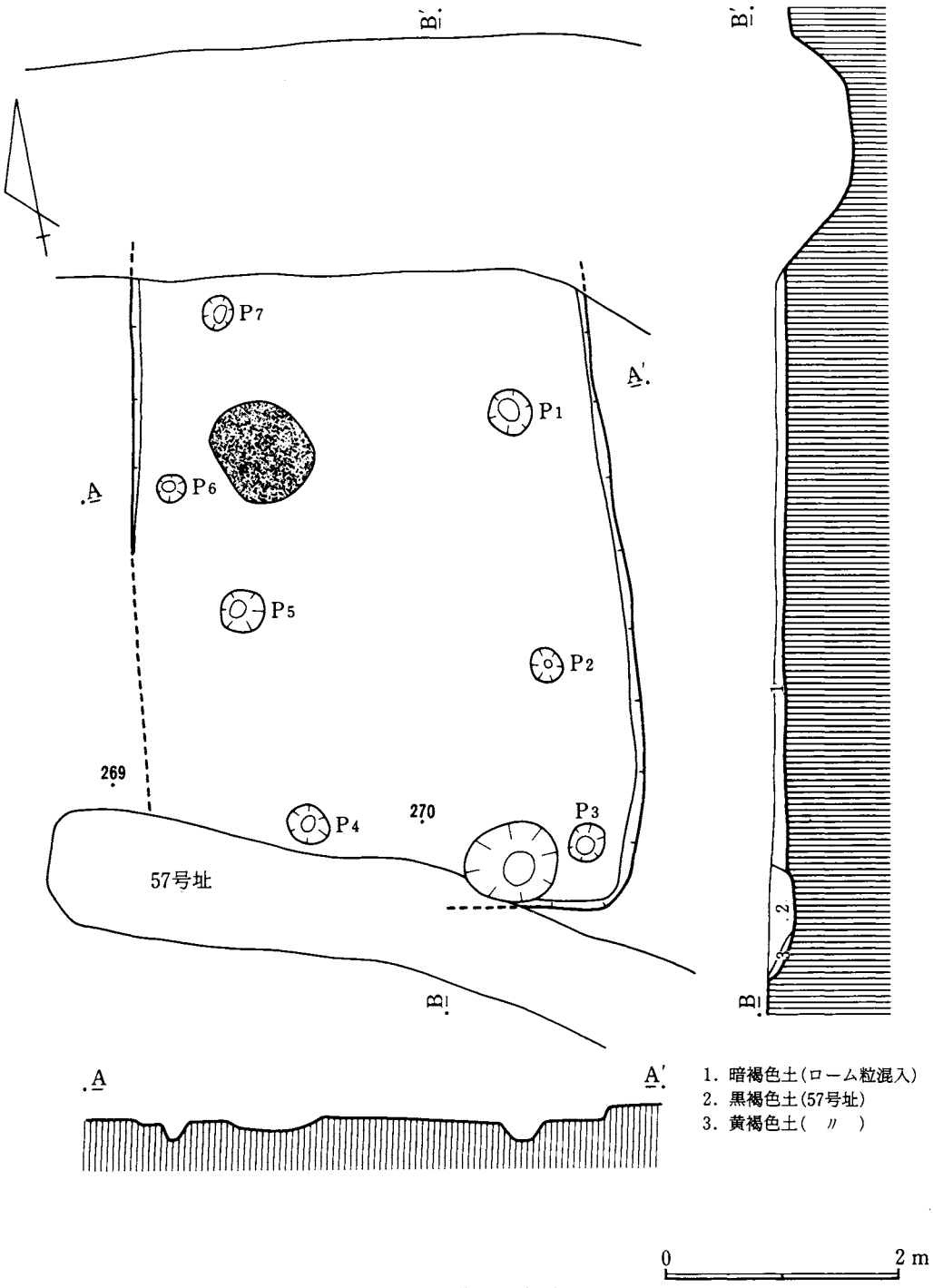
24号住居址の南約1.5mに位置する。南西壁を7号墳周溝によって破壊されている。また上面を掘削用の重機によって削平されていた。平面プランは方形を呈するが，西隅がやや丸みを有している。規模は3.4×3.8mを測る。主軸方位はN−28°−Wを指す。床面は全体に堅くしっかりとしている。南西壁は7号墳周溝と重複しているため，わずかに立ち上がりが検出された。壁高は南東壁で26cm，北西壁で24cmを測る。壁溝はない。炉はほぼ中央に位置する。やや歪んだ長楕円形を呈する。長径95cm，短径42cmを測る。底面は若干凹凸があるものの，平らに掘り込まれている。深さ13cmを測る。ピットは検出されていない。覆土は3層に区分された。黒褐色土，黄褐色土が主体を占めている。

出土遺物はきわめて少ない。全て土器小破片であり，覆土中に散在していた。また，床面上には，炉から東側の壁寄りで炭化材が数か所に分散して検出されている。



第72図　55号住居址実測図

遺物　本址では縄文式土器，土師器の細片が100片ほど出土しているだけで図示できるような遺物は検出されなかった。



第73図　58号住居址実測図

58号住居址（第73図）（第103・104図269～271）

2号墳墳丘下より検出された。2号墳周溝に北側を破壊されている。また，南側は57号址と重複しており，土層断面の観察から本址の方が古いことが明らかになっている。遺構検出面は2号墳墳丘下の旧表土下で，古墳構築の際かなり削平を受けた模様で，検出時のプランは不鮮明であった。平面プランは，遺存した部分から推定して長軸方向を北一南にとる長方形を呈するものと考えられる。規模は短軸4.2mを測る。長軸は，南壁の一部が確認されただけで不明確であるが7mを超えないものと思われる。2号墳周溝の外側に本址のプランが確認されなかったため，約5.5mから7m程になるかと思われる。床面は炉の周辺を除いて軟弱であった。壁は西壁の一部と北隅から東壁にかけて検出された。上面をかなり削平されていたため遺存状態はよくなく，床面からの高さは5～14cm程である。壁溝はない。炉は中央より西壁寄りに位置する。平面形は楕円形を呈し，78×94cmを測る。床面から皿状に掘り込まれており，深さは13cmを測る。ピットは8か所より検出されている。最も南寄りで検出されたP8は，本址および57号址の上から掘り込まれており，攪乱穴と考えてよいだろう。P1～P7は，位置関係から本址の柱穴と考えてよいと思う。径24～40cm，深さ14～18cmを測る。覆土は暗褐色土層1層のみである。

遺物は少ない。炉址上面で台付甕形土器が横倒しの状態で出土している。また甕形土器破片が南側でまとまって出土している。

遺物　本址の出土遺物はそれほど多くない。図示できた土器は3点で，他に数十片の土器が検出されている。

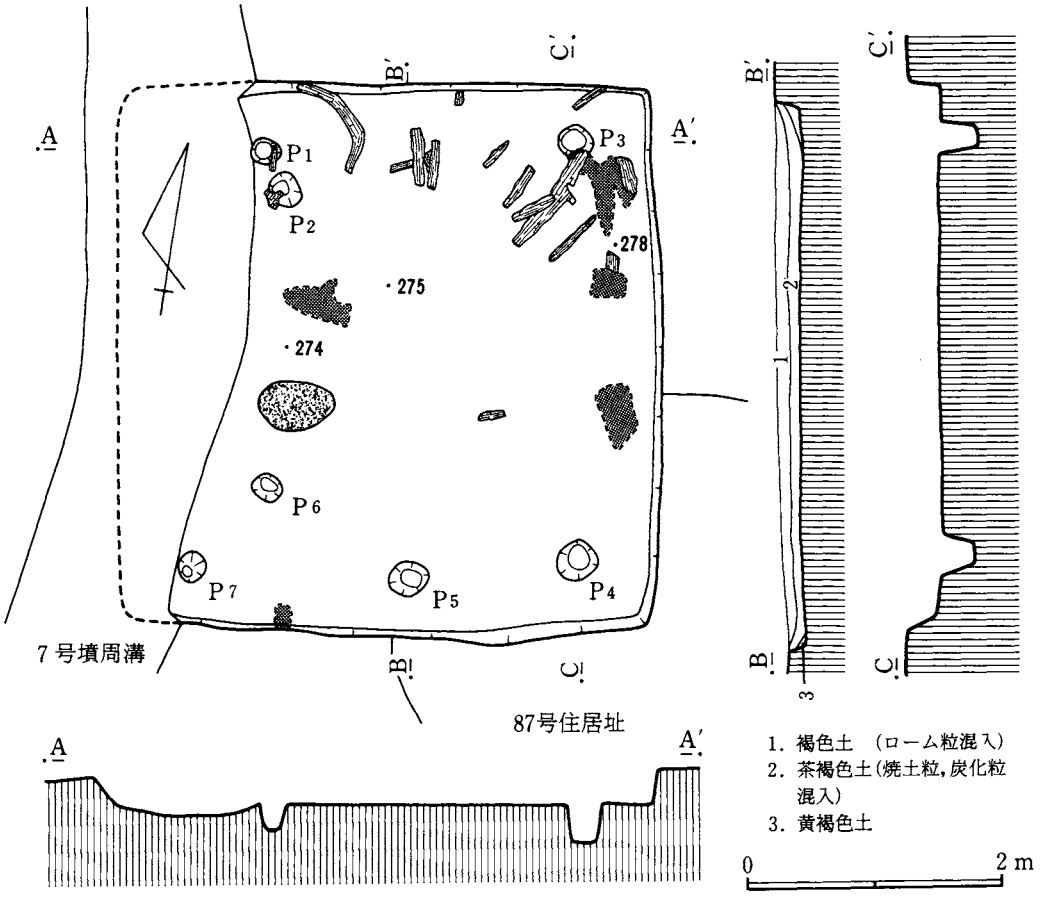
3点の土器はいづれも甕の類となる。271は台付甕で完形品に近い。口縁には2条の輪積痕を残し，口唇部にはほぼ山形を呈する刻目が施されている。色調は褐色ないし暗褐色となる。269は台付甕とすべきか甑とすべきか迷うような土器である。器形としてはもちろん台付甕が想定される。しかし，台付部には1.5cmほどの孔が穿たれており，甑としての機能も有していたにちがいない。加えて，台付部の中間にも2孔が確認され，位置から推定すると3孔となる。このような例は珍しく，完形品でないのが残念である。色調は赤褐色を呈す。270は現存部の上端，つまり頸部付近の立ち上がりから推定すると，口縁は広くなり甕となる可能性が強い。しかも，文様，赤彩等は認められず，底部周辺には火を受けた痕跡もある。器面はよく整形され，胴下半部には軽いヘラ削りが施される。色調は褐色ないし黒褐色となる。

60号住居址（第74図）（第104図272～278）（第107図3）

本址は55号住居址の東南約2mに位置し，西側を7号墳周溝によって破壊されている。また，東南側で87号住居址と重複している。新旧関係は遺構確認面の精査により，87号→60号となる。55号住居址と同様に上面を削平されている。平面プランは方形を呈する。規模は南北長が4.4mを測る。東西長も4.3m前後となろう。主軸方位はN－10°－Wを指す。床面は炉の周辺が堅く，その他は軟質である。西側の7号墳周溝と重複している部分は，床面，壁共に遺存していな

い。壁高は東壁で 26 cm，南壁で 22 cm を測る。壁溝はない。炉は中央よりやや西寄りに位置する。40×60 cm の楕円形を呈する。床面から皿状に掘り込まれており，底面に若干凹凸が認められる。深さ 9 cm を測る。ピットは 7 か所より検出された。主柱穴はＰ１，Ｐ３，Ｐ４，Ｐ７かと思われる。Ｐ２は位置的にみてＰ１との関連性が強く，あるいは建て換えが行なわれた結果と考えられよう。Ｐ５，Ｐ６は他のピットと比較しても，規模，深さともに差がないことから，本址に伴うものと考えられる。径 25～30 cm，深さ 19～29 cm を測る。覆土は 3 層に区分された。褐色土，茶褐色土が主体を占める。

遺物は少ない。炉の北側から，支脚，坩が横倒しの状態で出土している。これよりさらに北側で台付坩が破片で出土している。また，Ｐ３の南側の壁寄りから高坏が出土している。なお，本址北側を中心として焼土，炭化材が床面に密着して検出されていることから，本址が火災によって廃絶したものと考えられる。



第74図　60号住居址実測図

遺物　本址の遺物は，図示できた8点の他縄文式土器，土師器等の小片約100片が検出されている。

272は甕で，図示の約½が遺存する。器面は刷毛目痕で全面が覆われ，内面にも若干及ぶ。しかし，遺存部の器面には凹凸が認められるところから十分な整形とはいえない。色調は褐色を呈す。273は壺の口縁部で，頸部に粘土紐の貼付による隆帯を有する。刷毛目は全面にわたるが，赤彩等は認められない。このような形態の壺は東海地方によく見られるがそれほど良好な作りとは言えない。色調は褐色を呈す。274，275は坩の類となる。とくに275では脚が付され，内外面に赤彩が残る。遺存は約½ほどとなるが，十分器形は窺える。274は完形品となり，口径と胴最大径がほぼ同様な値を示す。赤彩は内外面ともに施されているものの部分的に遺存するにすぎない。276～278は高坏である。276は脚部だけの遺存で，赤彩は認められない。277，278は，赤彩，器面の整形及び色調から同一個体と思われる。とくに色調は赤褐色ないし暗褐色となり，よく類似する。

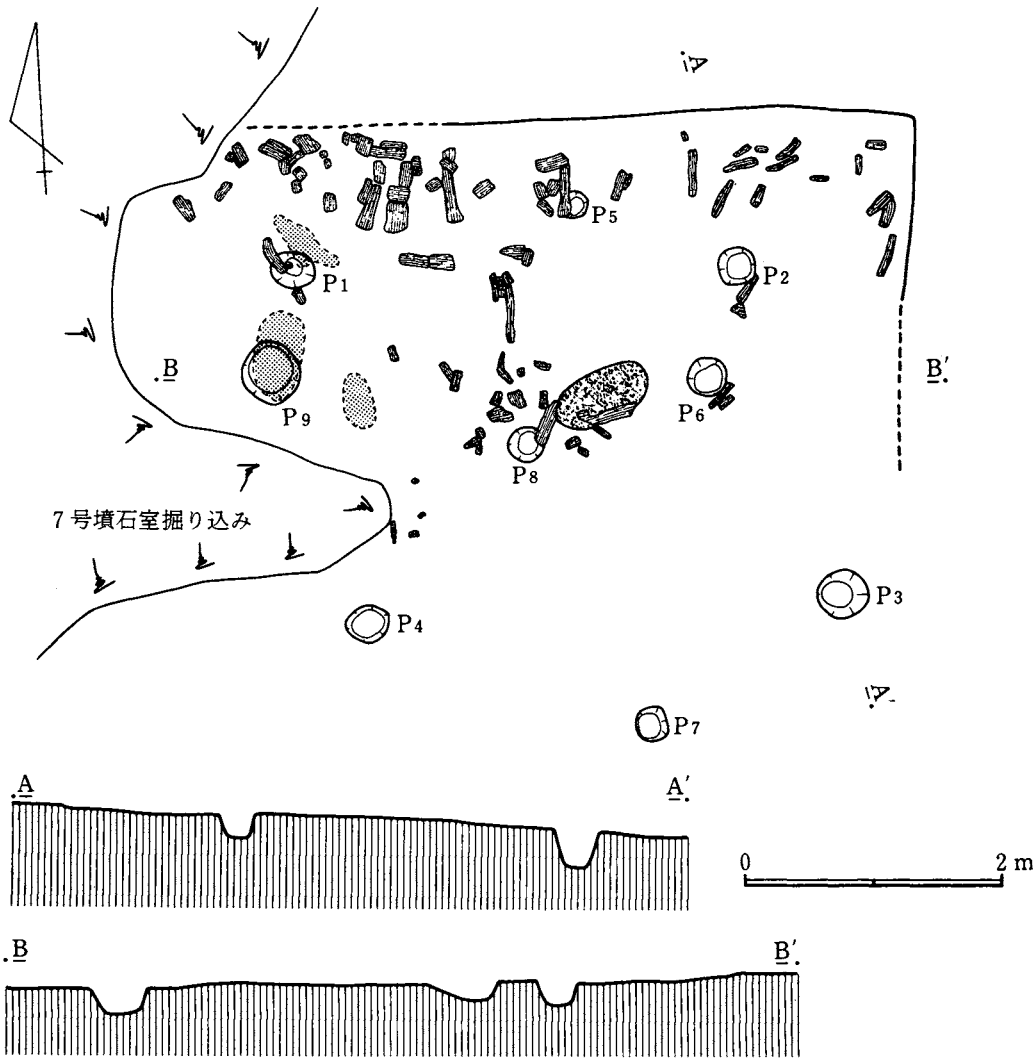
土器以外の遺物として，土製支脚が検出された。完形品であり，保存状態も良好となっている。表面には2か所の凹みがあり，がっしりした感を呈する。加熱された部分が少ないため長期間の使用とは考えられない。色調は赤褐色を呈し，胎土にはスサの混入も認められるところから支脚と考えてよいであろう。

61号住居址（第75図）

本址は台地の南側で，7号墳主体部の東に位置しており，7号墳主体部によって破壊されている。上面を掘削用重機によりかなり削平されており，プランは北側の一部がわずかに確認されただけである。平面プランは残された北東壁から推定すると，方形になるかと考えられる。規模についても詳細は不明である。炭化材遺物の分布範囲から推定して6～7 m の範囲になるであろう。床面は全体に軟質で，堅い面は全く検出されなかった。壁の遺存は非常に悪い。北東から北壁の一部にかけて2～3 cm の高さで確認された程度である。壁溝はない。炉は炭化材の分布範囲の南寄りで検出された。径40×78 cm の楕円形を呈する。深さ16 cm を測る。床面から5 cm 程の厚さで焼土が堆積していた。ピットは9か所より検出された。ピットの配置および規模は一定していない。径28～45 cm，深さ17～37 cm を測る。配置から考えると，住居のプランとやや方向が違うがほぼ等間隔にあるＰ1～Ｐ4を主柱穴とみることができよう。その他のＰ5～Ｐ9は一応Ｐ1～Ｐ4の間に位置しており，本址に伴う柱穴と考えておきたい。覆土は削平のためほとんどが失われており，検出時には炭化材の分布範囲が黒褐色土に覆われていた。

遺物は少ない。床面上には北壁に沿って炭化材，焼土が堆積しており，本址が火災によって廃絶したことが推察できる。

遺物　本址は，縄文式土器，土師器が合わせて30片ほどの出土で図示できるような遺物はない。



第75図　61号住居址実測図

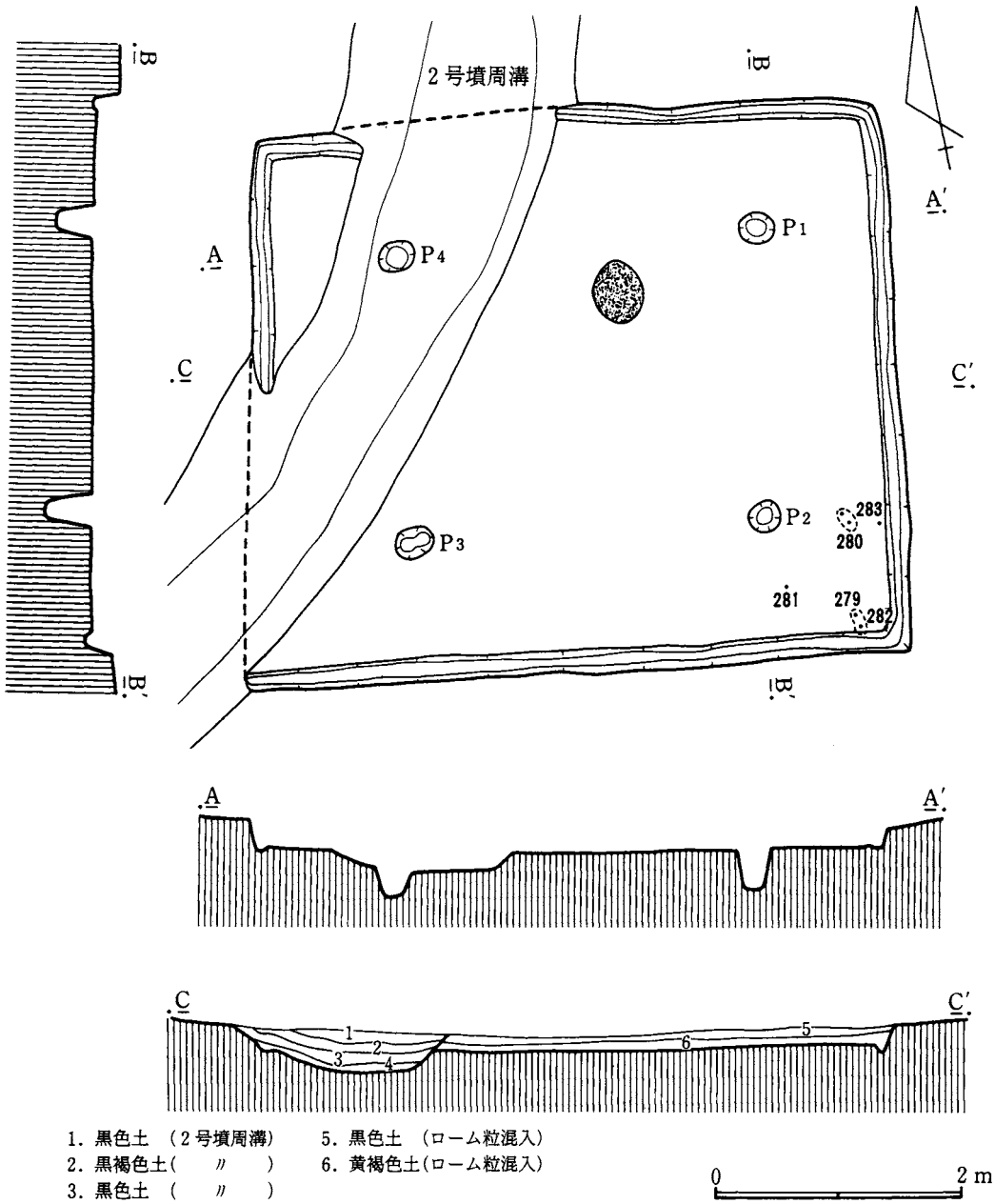
62号住居址（第76図）（第104図279～283）（第107図19）

58号住居址の南東約8mに位置する。2号墳周溝によって北壁と西壁の一部を破壊されている。平面プランは良く整った方形を呈する。規模は6.1×7.0mを測る。主軸方位はN－19°－Eを指す。床面は全体に軟弱である。壁高は西壁で33cm，東壁で21cmを測る。破壊された部分を除いて壁溝が存在する。幅は10～13cmを測りほぼ一定している。深さは南壁下から東，北壁下に次第に浅くなっており，3～13cmを測る。炉は中央より北東寄りに位置する。平面形は楕円形を呈し，41×51cmを測る。床面を皿状に掘り込んでおり，深さ8cmとそれ程深くない。ピットは4か所より検出された。四隅に整然と配されており柱穴と考えられる。径26～33cm，深さ30～50cmを測る。覆土は2層に区分された。黒色土，黄褐色土が主体を占める。

出土遺物は比較的少ない。覆土中では土器片が分散的に出土したが，床面付近では南東隅にまとまって出土している。甕形土器は床面上で押し潰された状態で出土している。坩形土器，高坏脚部，土玉は床面より若干浮いた状態であるが本址に伴うものと判断してよいだろう。

遺物　本址の遺物は，図示した6点の他に約50片の土師器片がある。

279，280は甕であり，胎土，色調の差が認められ異個体となる。279は図示の約½が遺存し，



1．黒色土　（2号墳周溝）　　5．黒色土　（ローム粒混入）
2．黒褐色土（　〃　）　　6．黄褐色土（ローム粒混入）
3．黒色土　（　〃　）
4．黄褐色土（　〃　）

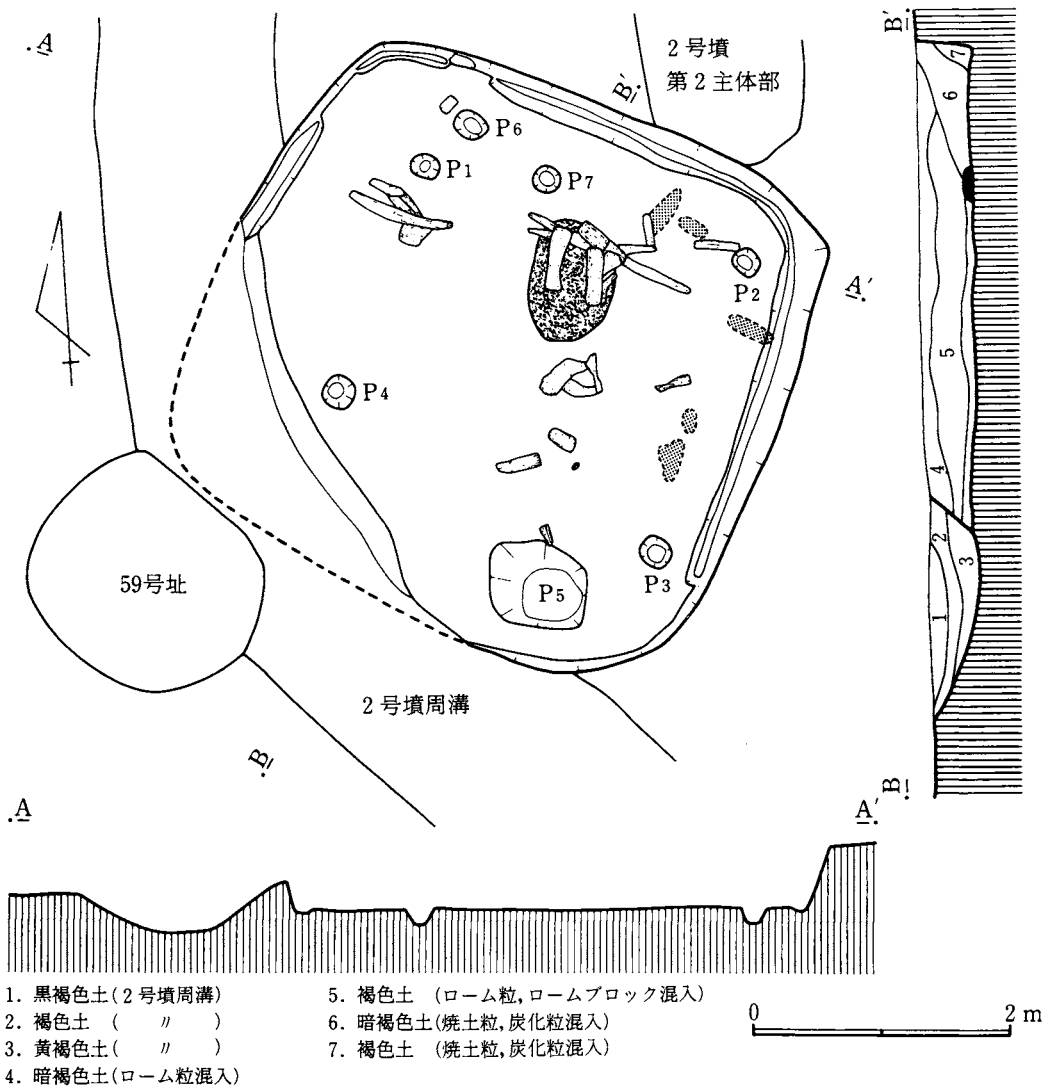
第76図　62号住居址実測図

器面は刷毛状工具によりきれいに整形されている。内面での刷毛整形は口縁部に限られ，胴部では輪積の痕跡が10条以上残る。色調は黒褐色を呈す。280は底部で，器面には刷毛目が若干残る。胎土には小石，砂粒を多く含み，色調は赤褐色を呈す。281，282は小形の坩となろう。底部の作りが異なる。281はほぼ完形となるが，282は口縁を欠損する。283は高坏の脚部で，裾部内面に刷毛目が著しい。器面での刷毛目は調整によりほとんど消されている。色調は褐色を呈す。

他の遺物として，土玉が1点出土した。黒褐色を呈した完形品である。

63号住居址（第77図）（第104図284～286）（第107図10）

2号墳墳丘下より検出された。北東壁の一部を第2主体部に，南西側を周溝に破壊されている。平面プランは隅丸方形を呈する。南東壁がやや張り出している。規模は4.2×4.4mを測る。主軸



1. 黒褐色土(2号墳周溝)
2. 褐色土 (〃)
3. 黄褐色土(〃)
4. 暗褐色土(ローム粒混入)
5. 褐色土 (ローム粒,ロームブロック混入)
6. 暗褐色土(焼土粒,炭化粒混入)
7. 褐色土 (焼土粒,炭化粒混入)

第77図　63号住居址実測図

方位はN－23°－Eを指す。床面は全体に堅くしっかりしているが，特に炉周辺がよく踏み固められている。壁は床面よりほぼ垂直に立ち上がる。壁高は南東壁で45～48 cm，北～西壁で23～33 cmを測る。壁溝は東から北壁直下および北西壁で部分的に検出された。南東隅では検出されていない。幅は10～16 cm，深さは3 cm前後である。炉は中央より北東寄りに位置する。平面形はやや歪んだ楕円形を呈し63×93 cmを測る。床面を皿状に掘り込んでおり，深さ13 cmを測る。ピットは7か所より検出された。このうち柱穴と考えられるものは位置的にみてP 1～P 4が相当するであろう。P 1～P 4，P 6，P 7は，それぞれの規模に大きな差はなくピット内の覆土にも差が認められなかったため，本址に伴う柱穴と考えて良いと思われる。径21～27 cm，深さ11～19 cmを測る。P 5は貯蔵穴であろう。片側が2段に掘り込まれており，底面は平坦である。深さ22 cmを測る。平面形はやや歪んだ方形を呈し，大きさは65×77 cmを測る。覆土は4層に区分された。暗褐色土，褐色土が主体を占め，流れ込みによる堆積状態を示している。

遺物は，炭化材の他は全て覆土中から分散的に出土している。石製有孔円盤は確認面よりわずかに下で2号墳周溝寄りに出土している。

遺物　本址では図示できる遺物は少なく，土師器等の細片が300片を越す。

284は小形の壺となろう。遺存は図示の約⅓となるものの赤彩の残りはよい。器面は縦方向にヘラ調整が著しく円滑な面に仕上げ，内面では刷毛目痕が全面を覆う。刷毛目に差が認められるため，工具は2種類を使用したものと思われる。285，286はともに高坏で，異個体となる。赤彩はともに施される。

土器以外の遺物として，石製模造品の有孔円盤が1点出土した。周囲はよく整形され，石材は滑石である。

64号住居址（第78図）（第105図287～299）（第107図12・20）

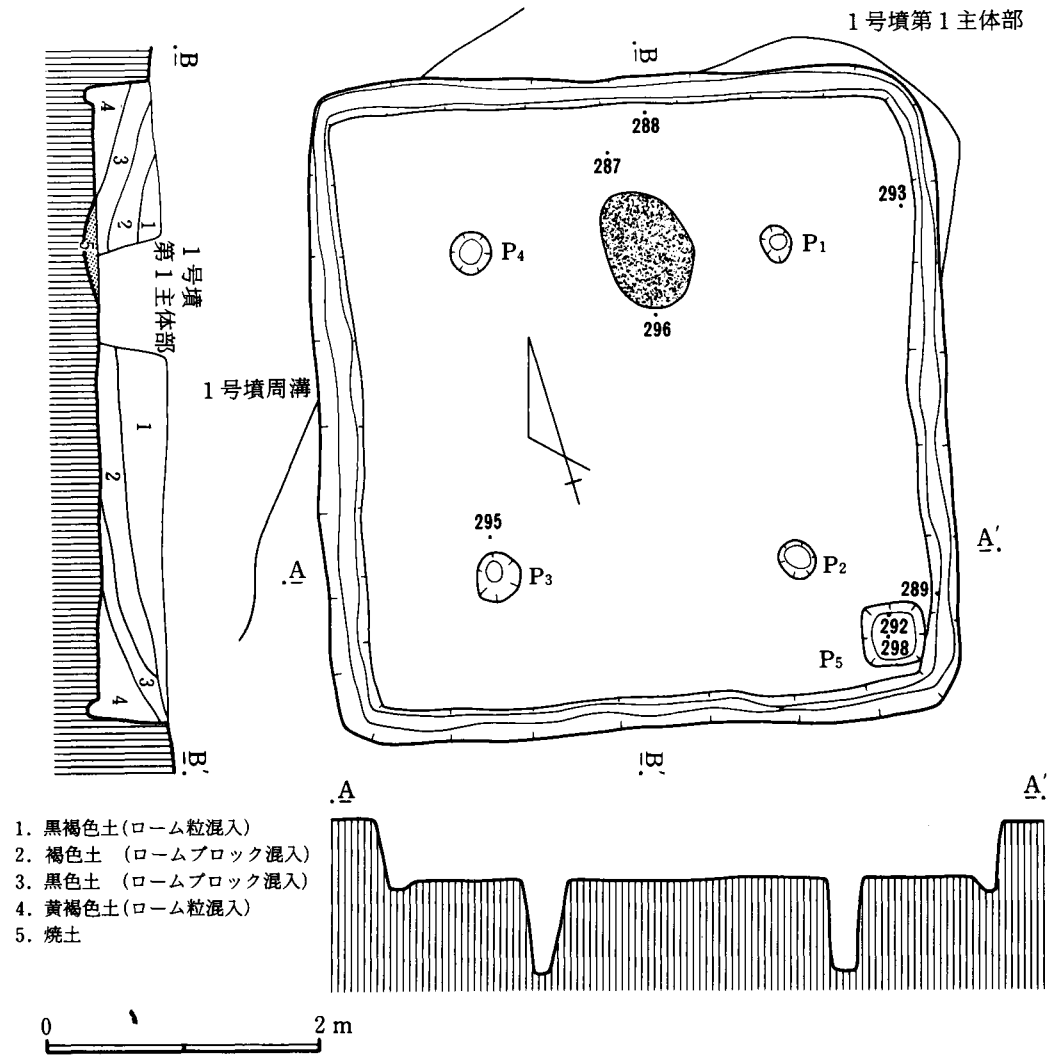
1号墳墳丘下より検出された住居址である。北西隅上部を周溝に，また北東隅上部を第1主体部によって破壊されている。幸い深くしっかりと掘り込んであったため，大きな破壊をまぬがれ全体のプランははっきりと確認された。平面プランはよく整った方形を呈する。規模は4.9×5.0 mを測る。主軸方位はN－17°－Eを指す。床面は全体に堅く，遺存は良好である。若干凹凸が認められる。壁は北西および北東の隅の上部が破壊されているが，その他は遺存はよい。床面からはほぼ垂直に立ち上がる。壁高は北壁で39 cm，南壁で57 cmを測る。壁溝が全周する。幅15～25 cm，深さ4～10 cmを測る。炉は中央より北寄りに位置する。径66×94 cmの楕円形を呈する。床面より皿状に掘り込まれ，深さ10 cmを測る。ピットは5か所より検出された。住居の対角線上に規則的に配されたP 1～P 4が柱穴であろう。径28～33 cm，深さ68～91 cmを測る。南東隅に位置するP 5は貯蔵穴であろう。1辺50 cmの方形を呈し，深さ37 cmを測る。壁，底面ともにしっかり掘り込まれている。底面から10 cm程上で坩形土器，高坏形土器の2点が出土している。覆土は4層に区分された。黒褐色土，褐色土，黒色土，黄褐色土から構成され，

流れ込みによる堆積状態を示している。

遺物は炉の周辺（特に北側）及びＰ５付近の壁際にまとまって出土している。床面直上あるいは若干浮いた状態であり，本址に伴うものであろう。

遺物　本址では甕の出土が多く，図示以外にも大形片が３個体分ほど出土しており実測までには至らない。壺も１個体出土したが，図示までには至らない。他に図示できたのは小形壺，坩，鉢，坏，高坏などの器種は豊富といえよう。破片類は約30片と少ない。

287～291は甕である。289は口縁部が約⅙しか遺存しないが，他は残っている。287，288は底部を欠損する。291は若干刷毛目が認められる。他の４点の整形はすべてヘラ削りによる。概して雑な仕上げとなる。色調はいづれも暗褐色ないし黒褐色を呈する。292，293は小形の壺あるいは坩となろう。赤彩はよく遺存する。293の口縁部はやや外反しながら立ち上がり，端部に至ると



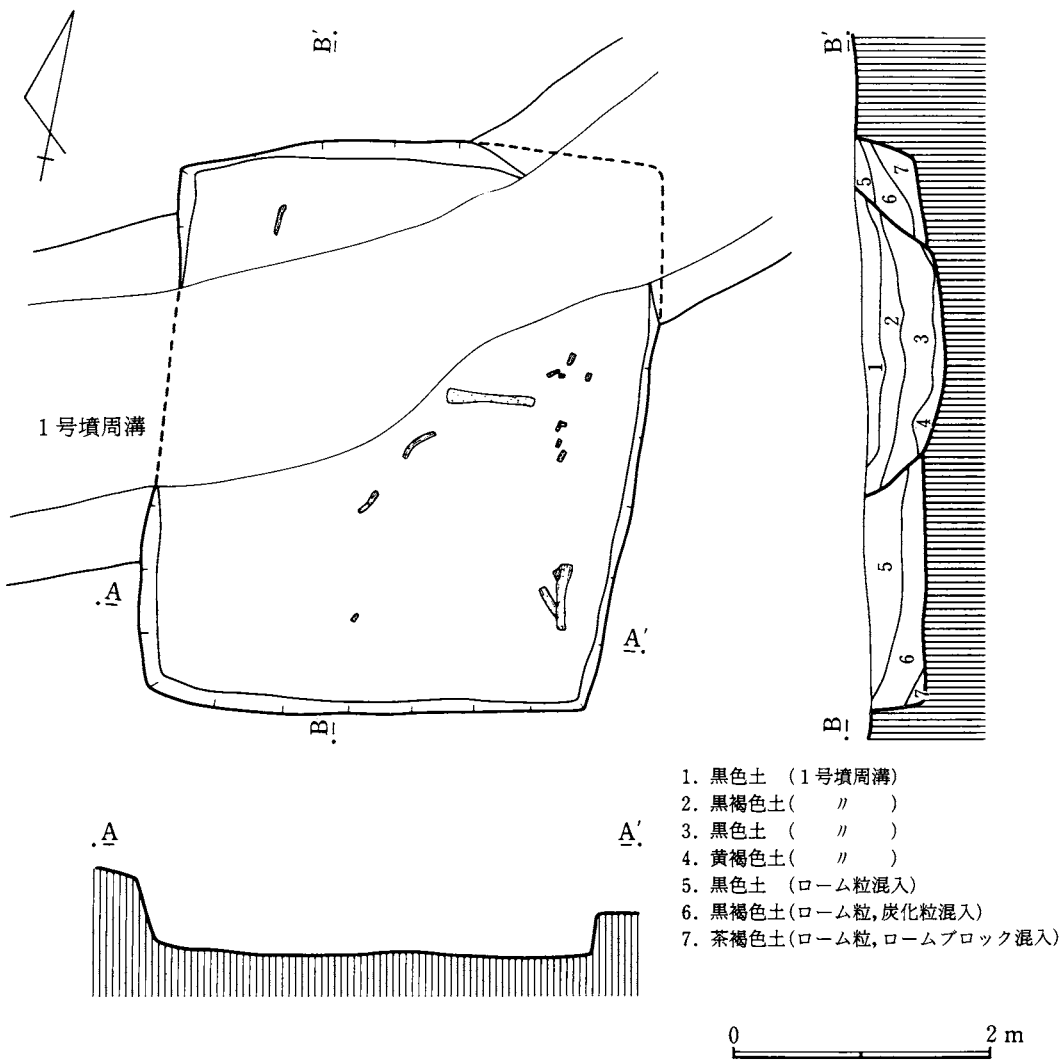
第78図　64号住居址実測図

垂直に近い形となる。7の底部は平底となる。口縁だけが欠損し，底部付近にはスス状炭化物の付着が著しい。294は埦あるいは鉢となろう。器面はヘラによりていねいに調整され，光沢をも有する。色調は暗褐色を呈する。295の器面には輪積も残り，粗雑な作りとなっている。内外面には赤彩が認められる。296はほぼ完形品で，坏としてよいであろう。しかし，明確に底部を形作る。全体として歪んだ形となり，成形の点でも不十分と言えよう。297～299は高坏でいづれも赤彩が施される。とくに299では坏部の稜は明確に表現されている。

土器以外では欠損した砥石と，土玉が検出された。土玉は雑な仕上げとなっている。

65号住居址（第79図）

1号墳墳丘下より検出された。周溝によって北西隅から西壁の一部を壊されている。平面プラ



第79図　65号住居址実測図

ンは長方形を呈する。規模は3.7×4.4mを測る。長軸方位はN－5°－Eを指す。床面は全体に堅緻である。壁は床面よりほぼ垂直に立ち上がり，遺存は良好である。壁溝はない。炉址は検出されなかった。おそらく1号墳周溝によって削平された部分にあったものと考えられる。ピットは床面を綿密に精査したが，わずかな落ち込み程度があったのみで確認するには至らなかった。覆土は3層に区分された。黒色土，黒褐色土が主体を占め，流れ込みによる堆積状態を示している。

出土遺物はきわめて少ない。土器片および炭化材であり，ほとんど覆土中に混在していた。床面上でも炭化材が残っていたが，特に床面に火を受けた箇所は認められなかった。

遺物　本址から出土した遺物は少なく，甕の大形片と約50片の縄文式土器，土師器が検出されたにとどまり，図示できるものではない。

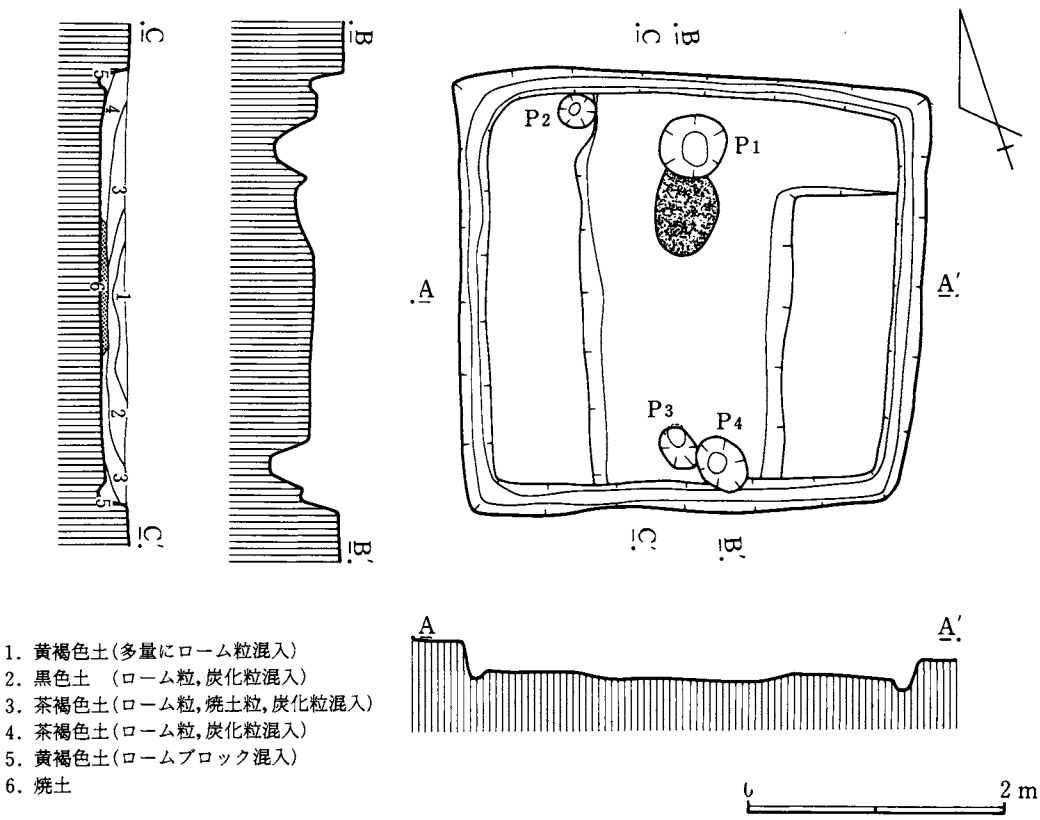
66号住居址（第80図）（第106図300～304）

1号墳下より検出された。64号住居址のすぐ東に位置する。平面プランは方形を呈し，北西隅が外側にやや張り出している。規模は3.4×3.6mを測る。主軸方位はN－24°－Eを指す。床面は西壁側の全体および東壁側の北東隅を除く部分が，70～82cmの幅で中央より5～7cm高く構築されており，いわゆる「ベッド状」を呈している。堅さは一様であり，場所による差は認められなかった。壁の遺存はよく，床面よりほぼ垂直に立ち上がる。壁高は15～23cmを測る。壁直下に壁溝が全周する。幅12～17cm，深さ7～10cmを測る。炉は中央より北寄りに位置する。径51×61cmの楕円形を呈する。床面から皿状に掘り込まれており深さ15cmを測る。底面は良く焼けており，炉内には厚く焼土および灰が堆積していた。ピットは4か所より検出された。いずれも北および南壁寄りに位置する。このうちP2は炉の一部を，P3はP4と壁溝の一部を壊して掘り込まれているため，P1とP4が本来の柱穴であり，ある期間これを利用した後P2，P3を掘り込んだものと考えられる。なおP2覆土中から甕形土器と小形壺形土器が1点ずつ，P3底面付近より坩形土器1点が出土している。ピットの規模は，径29～51cm，深さ30～61cmを測る。P4が最も深くやや斜めに掘り込まれる。覆土は5層に区分された。黒色土，茶褐色土が主体を占め，流れ込みによる堆積状態を示している。

遺物はピット内および炉周辺，南壁寄りで比較的多く出土している。P2内より甕形土器が出土し，P3より坩形土器が出土している。

遺物　本址での遺物は比較的に多い。図示できた土器は5点と少ないが，他に甕の大形片と約200点に及ぶ土器片が検出されている。

300は甕で完形品。胴部から口縁部にかけて土圧のためやや歪みが生じる。器面は刷毛状工具で全面にわたって整形され，その後ヘラによるナデ整形を加えている。また，器面にはわずかに輪積の痕跡が認められる。色調は赤褐色を呈す。301は坩というよりも小形の壺となろう。ほぼ完形品で，器面の一部に火を受けている。赤彩はよく遺存し，ヘラ磨きも全面に施される。302は小形の坩で底部は凹む。赤彩は内外面ともすべて施され，完形品のため一層きれいな赤色に映える。



第80図　66号住居址実測図

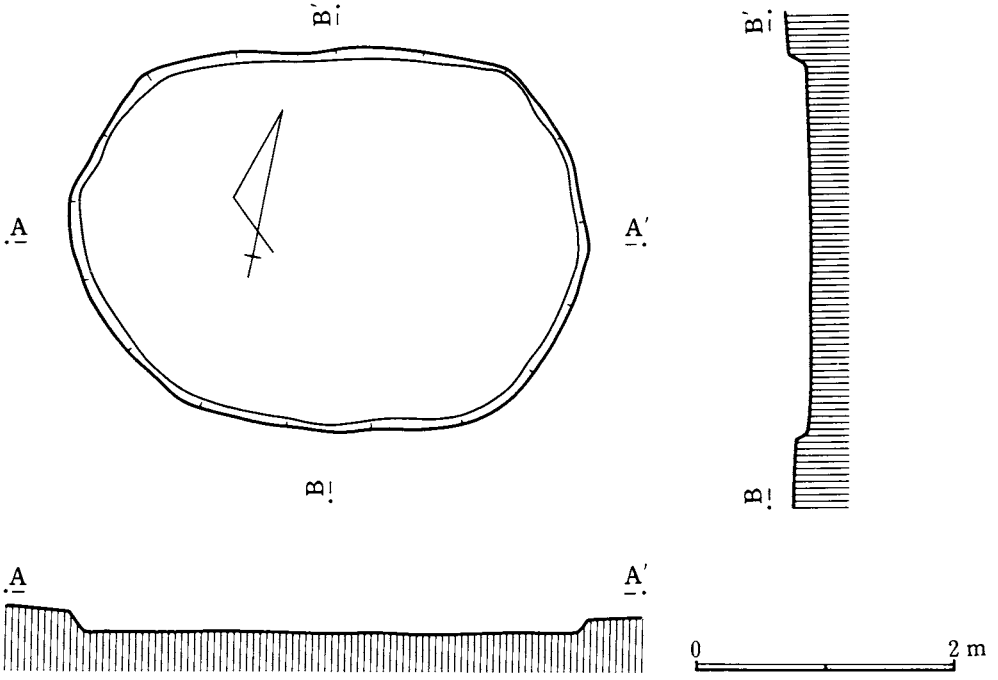
胎土には小石を多く含む。304は高坏の脚部で若干火を受けており，赤彩の遺存も悪い。器面の整形は刷毛状工具で縦方向に施している。303は小形品で，口縁部がわずかに失われ，図示の約½の遺存となる。器面には輪積痕も認められるところから手捏土器となろう。色調は淡褐色ないし暗褐色となる。

67号住居址（第81図）

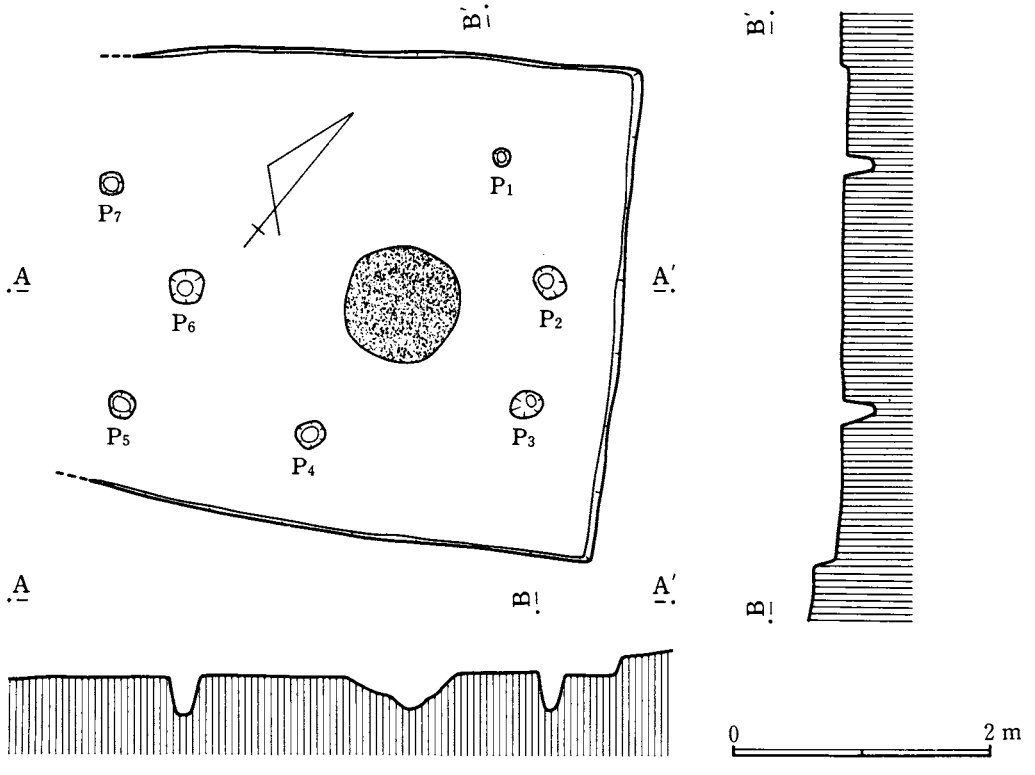
本址は1号墳下より検出された。64・66号住居址の北に位置する。平面プランは長軸を北東一南東方向にもつ楕円形を呈する。規模は3.0×4.1mを測る。床面はソフトローム層に構築されており，全体に軟質である。壁は，確認面からの掘り込みが浅いためわずかに立ち上がりが確認されたにすぎない。壁高は5～8cmを測る。壁溝はない。炉址およびピットは床面の精査を綿密に行なったが検出されなかった。また壁外も精査したがピットは検出されなかった。覆土は黒褐色土が主体を占め，分層はできなかった。

遺物は，住居ほぼ中央の床面上に礫が1点出土したのみである。

遺物　本址では遺物はほとんど出土せず，礫が1点と少ない。図示はしなかった。



第81図　67号住居址実測図



第82図　68号住居址実測図

68号住居址（第82図）

本址は38号址のすぐ北側に位置する。調査前，土木工事用大型掘削機により上面をかなり削平されたため，遺存はきわめて悪い状況であった。床面の広がりおよび壁の残存状態から住居址の規模を推定した。平面プランは長軸方向を北東一南西にとる長方形を呈する。規模は短軸3.8mを測る。長軸は4m前後になろうかと思われる。主軸方位はN－58°－Eを指す。床面は全体に軟弱であり，所々に凹凸が認められる。壁は前述のごとく遺存がきわめて悪く，東南から北西壁で立ち上がりがわずかに確認されたにすぎない。壁高は最も高い東壁で 19 cm を測る。壁溝はない。ピットは7か所より検出された。個々の規模にかなりの差が認められる。径 14～26 cm，深さ 17～51 cm を測り，ピットの配置から考えるとP1～P3とP5～P7が炉をはさんで相対する位置にあり，P4もさほど偏在していないことから7か所のピットとも関連して本住居址に伴うものと思われる。炉址はほぼ中央に位置する。平面形は円形を呈し，円形に大きく掘り込まれており径 88～89 cm を測る。中央が一段と深く掘り込まれており深さ 27 cm を測る。底面より 18 cm 程の厚さで焼土が堆積していた。

遺物はきわめて少ない。全て土器片であり覆土中に散在していた。

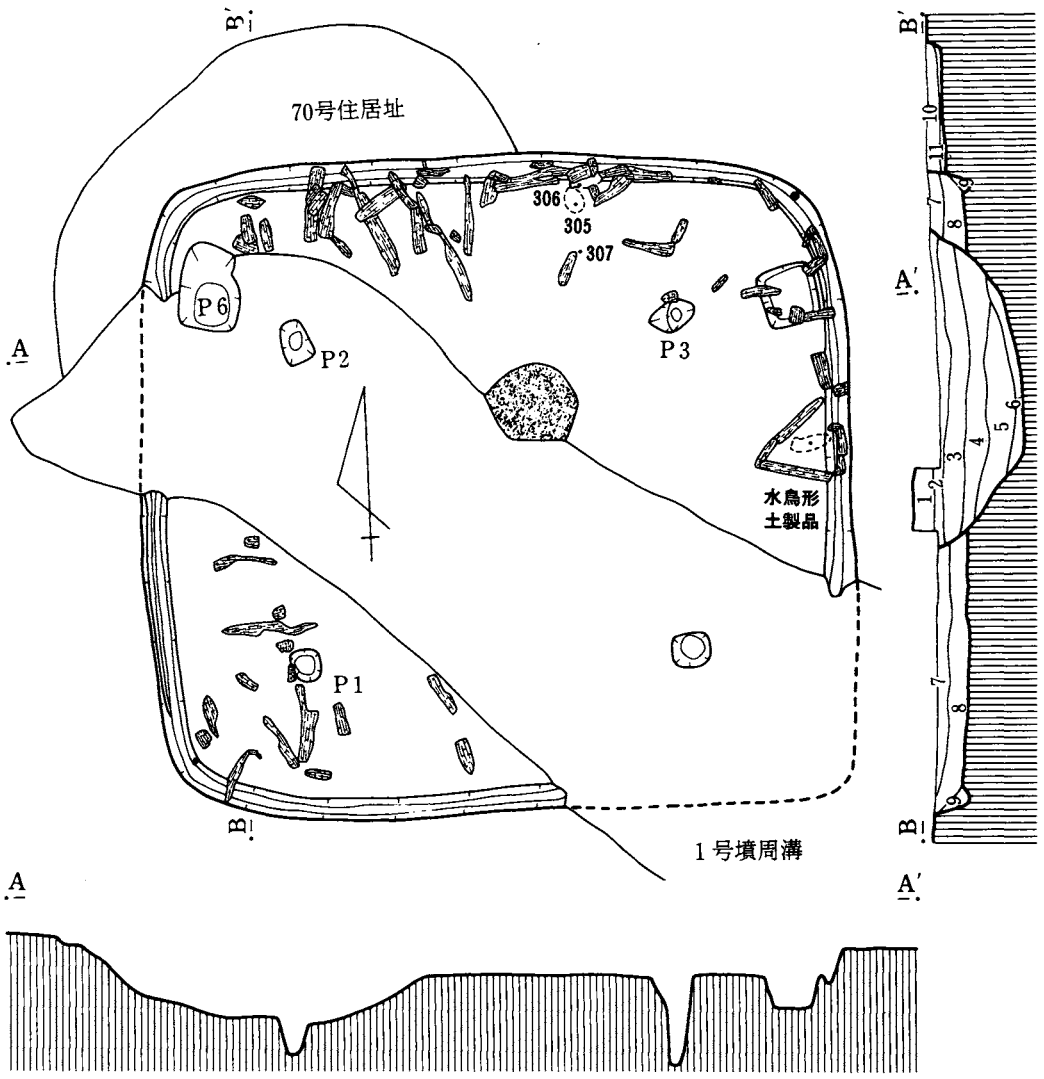
遺物　本址も遺物は少なく，縄文式土器，土師器片が20点ほどで図示できるものはない。

69号住居址（第83図）（第106図305～307）（第107図1）

1号墳墳丘下より検出された。東南隅から西壁にかけて住居中央を1号墳周溝によって破壊されている。70号住居址と重複しているが本址の方が新しい。平面プランは隅丸方形を呈する。規模は 6.8×7.4 m を測り，他の住居址に比べ大きめである。主軸方位はN－2°－Eを指す。床面は全体に良く踏み固められ堅緻である。壁は，1号墳周溝に壊されている部分を除くと遺存状態は良く，床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は33～36 cm を測り，ほとんど一定している。壁溝は各壁直下で検出されており全周するものと思われる。西壁の一部で二重に掘り込まれている。幅 10～16 cm，深さ 5～12 cm を測る。炉はほぼ中央に位置する。周溝によって南半分を欠いている。底面は皿状に掘り込まれており，良く焼けていた。深さ 7 cm を測る。上面より土製支脚の破片が出土している。ピットは6か所より検出された。このうち，住居の対角線にほぼ等間隔で配されているP1～P4が主柱穴と考えられる。4か所とも平面形がほぼ方形に掘り込んであり1辺 24～35 cm を測る。深さは床面より検出されたP2，P4が 93 cm，73 cm を測り，P1，P3もこれらと同程度の深さをもっていたと考えられる。なお，現存はP1が 45 cm，P3が 34 cm を測る。P5，P6は北東隅と北西隅に対置している。平面形はP6がやや歪んではいるが，両者とも方形を呈する。P6は北側が2段に掘り込まれている。両者とも底面は平らでしっかりとしており貯蔵穴と考えられる。覆土は3層に区分された。黒色土，黒褐色土が主体を占め，流れ込みによる堆積状態を示している。

遺物は量的に比較的少ない。水鳥形土製品を含めて床面上の遺物は東～北壁に沿って点在して

いた。甕形土器2点は北壁中央寄りで倒立の状態で出土し，やや離れて器台形土器が横倒しの状態で出土している。またきわめて特殊な遺物である水鳥形土製品は，東壁中央付近で頭部，背を下にして出土している。その周囲には，炭化材が上から見てちょうど三角形状に，あたかもこれを取り囲むように残存していた。なお，床面上には焼土，炭化材が多量に検出されており，本址が火災により廃絶されたものと考えられる。



1. 表土
2. 褐色土　(1号墳周溝)
3. 黒色土　(　〃　)
4. 黒色土　(　〃　)
5. 黒色土　(　〃　)
6. 黄褐色土(　〃　)
7. 黒色土　(ローム粒混入)
8. 黒褐色土(ローム粒,炭化粒混入)
9. 茶褐色土(ローム粒混入)
10. 黒褐色土(70号住居址覆土)
11. 褐色土　(　〃　)

0　2 m

第83図　69号住居址実測図

遺物　本址の遺物の量は，それほど多いわけではない。しかし，きわめて珍しいものが検出された。他の土器片は約50点ほどとなる。

305，306は甕で，2点とも底部を欠損する。305の口縁はわずかに残り，かろうじて粘土帯が認められた。器内外面は粗雑なヘラ削りで覆われ，内面の一部に刷毛目も認められる。306の口唇部には刻目が入り，器面ではヘラナデによる整形が施され，比較的仕上げは良好となる。ともに色調は赤褐色を呈する。307は器台と言えよう。器厚は1cmほどとなり，安定した形態をとる。脚部の孔は正面と両側面とに位置し，裏面には認められない。焼成前の穿孔である。口唇部は磨耗が著しく，赤彩も若干残る程度となっている。器面の整形はヘラ削りで，仕上げは粗雑さが目立つ。

他の遺物として，石製品と土製品が各1点ある。前者は軽石で，後者は鳥形を呈している。おそらく水鳥を模したものであろう。嘴の先端部と尾にあたる部分が一部欠損する。目は竹管状工具により表現され，口については刻線をもってあてる。器面はヘラ削りで整形後，若干調整を加えている。胴部は空洞化しており，色調は褐色ないし赤褐色となる。住居址内出土という点を重視しておきたい。軽石についての図示は省いた。

71号住居址（第84図）

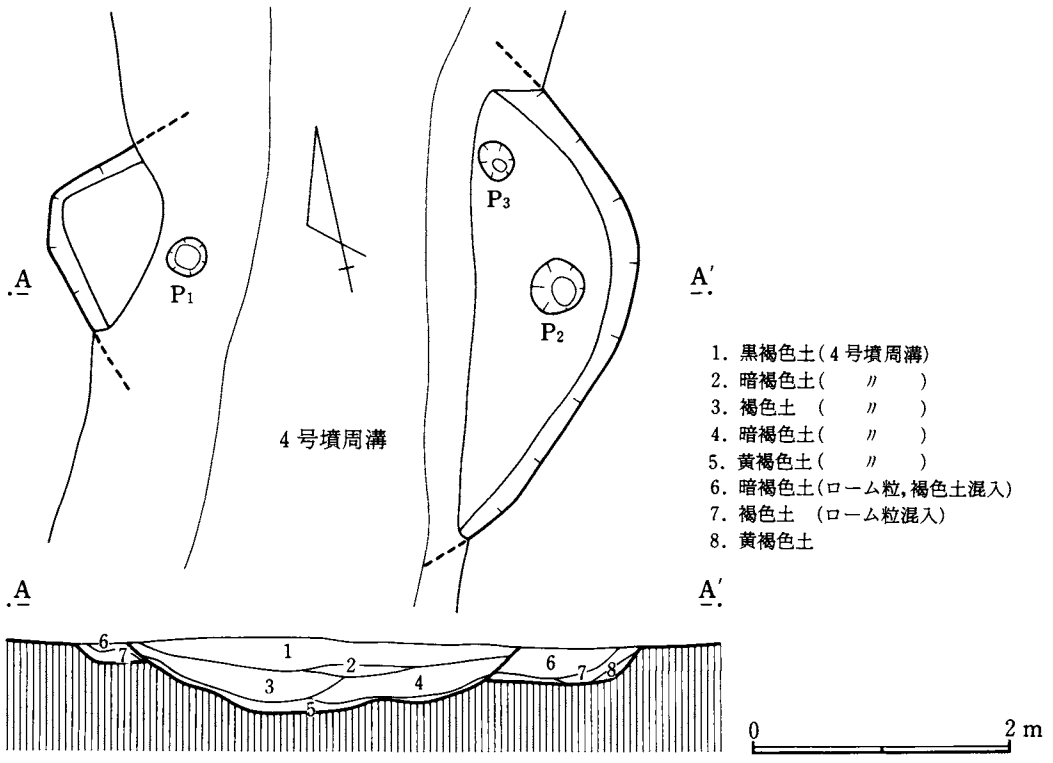
住居の中央を4号墳周溝によって切られており，東・西隅が確認されたにすぎない。またコーナー部の張り具合がやや異なっているが，同一の住居址として考えたい。平面プランおよび規模は約4m前後の方形を呈するものと考えられる。壁は東側で割合残りがよく，高さ20～23cmを測る。壁溝および炉は検出されなかった。ピットは3か所より検出された。径31～40cm，深さ21～69cmを測る。このうちP1は最も浅いが，周溝の壁面で検出されたため，床面からの深さは他のものと同じ程度であろう。3か所のピットとも柱穴と考えられる。覆土は3層に区分された。暗褐色土，褐色土が主体を占め，流れ込みによる堆積状態を示している。

遺物は，まったく出土しなかった。

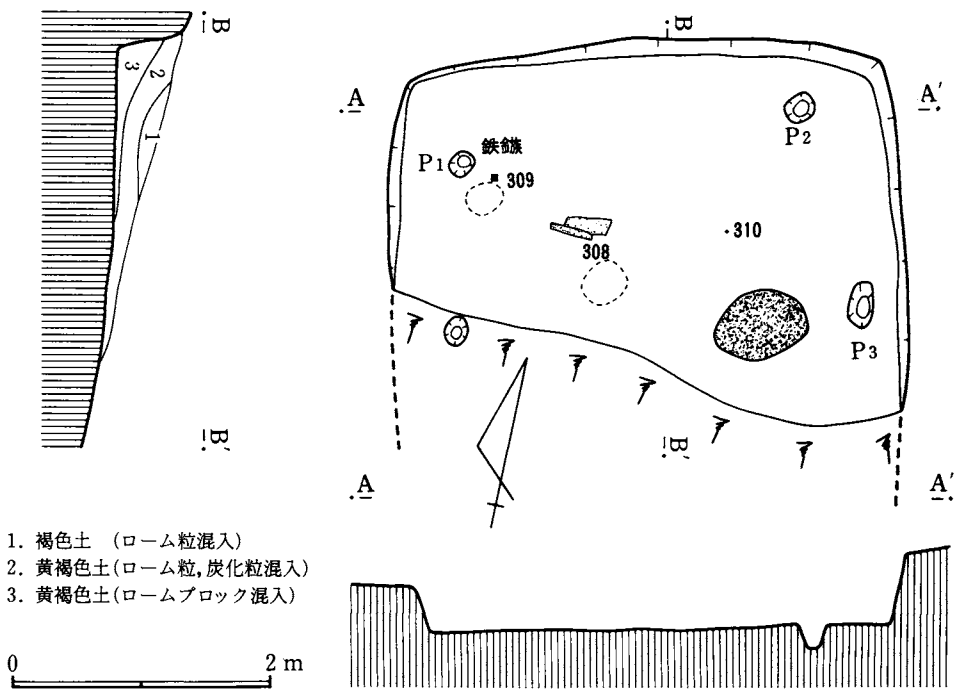
遺物　遺物は検出されなかった。

83号住居址（第85図）（第106図308～310）（第107図7）

本址は，遺跡の南端，台地が南側の谷津に向って傾斜する箇所に位置する。構築面が傾斜面で，かつ上面を掘削用重機によって削平されているため，南側半分を失っている。平面プランはやや胴の張る方形を呈すると考えられる。規模は東西長4.0mを測る。南北の長さは不明であるが，4m前後になると思われる。主軸方位はN－74.5°－Eを指す。床面は全体に軟弱である。壁は北東壁が最も良く遺存している。壁高は35～57cmを測る。壁溝はない。炉は東壁寄りに位置する。径52×74cmの楕円形を呈し深さ12cmを測る。底面は凹凸が少なく，良く焼けた痕跡をとどめている。ピットは4か所より検出された。径20～36cm，深さ18～31cmを測る。P1，P2は浅いが，柱穴として考えたい。覆土は3層に区分された。すべて黄褐色土が主体である。



第84図　71号住居址実測図



第85図　83号住居址実測図

遺物は少ない。すべて床面もしくは2～5 cm 程上面から出土している。炉の北側から高坏形土器が口縁部を下にした状態で出土し，炉の西側P 1付近では壺形土器が破片で出土している。また，鉄製品が壺形土器の脇から出土している。

遺物　本址の遺物は，図示できた4点の他に数十片の土器片があった。

308は壺で，頸部より上を欠損する。文様帯は肩部を中心に構成され，細縄文と4本組の櫛目文で表現する。櫛目状工具は細部の観察から逆時計回りに使用している。縄文は撚りの異なった原体を使い羽状縄文とし，その末端には3～4か所の結節を作っている。色調は暗褐色ないし赤褐色となり，赤彩らしき痕跡は部分的に認められるがはっきりしない。309は広口壺で口縁を若干欠損する。器面は軽いヘラ削りで整形され，胎土には1と同様に小石，砂粒を含む，色調は褐色ないし暗褐色となる。310は大形の高坏であるが脚部を欠損する。器面はヘラ整形後きめ細かな調整が施される。内面でも調整は十分行われているが，風化による剝離が著しい。

他に鉄製品が1点出土した。鉄鏃か釘の一部かはっきりしない。

2．古墳時代初頭の土器（第108図）

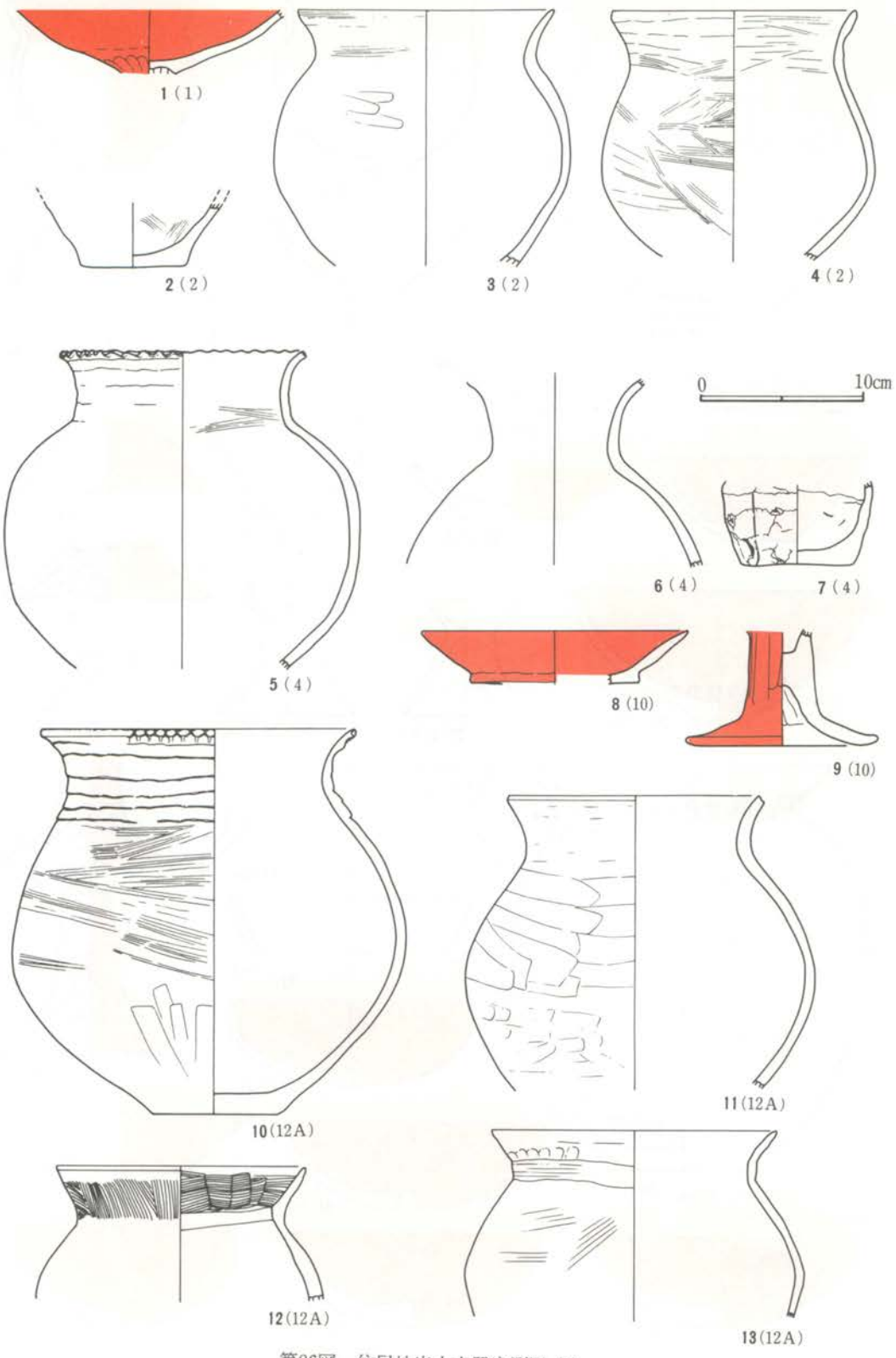
本遺跡における古墳時代の土器は，その初頭に位置づけられるもので，現在までの報告例では類例も少なく，弥生末期から五領期の土器群を理解するうえでも貴重な資料となり得るため少量ではあるが文様を有する壺形土器を中心に図示した。これらには，一部には住居址内出土の土器も含まれるが，遺構外から出土したものが多い。

文様は，縄文，網目状文，櫛描文の3種で構成される。

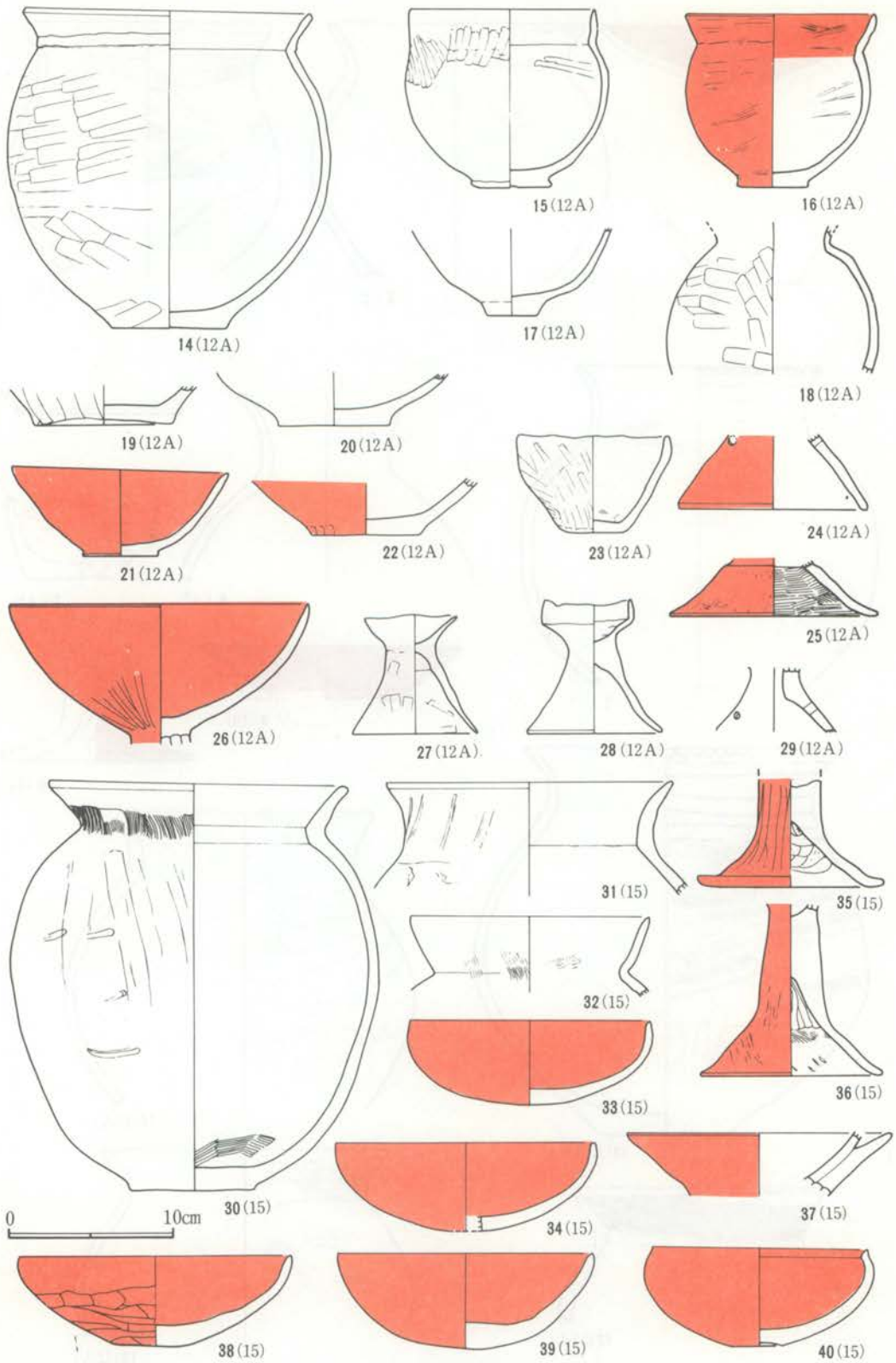
1～4は口縁部片で，1は口縁の折返し部にLRの細縄文が横方向に施される。2は粘土紐の貼付が認められ，右端には2か所の痕跡を残すところから4本以上の貼付が存在したことになろう。また，器内外に赤彩も認められる。3も2と同様に内外面に赤彩が認められ，しかも内面は，口唇部に沿って櫛描文がめぐる。4は刷毛目痕が認められ，五領式に入るかもしれない。

5～19は壺形土器の頸部から胴上半部に至る破片で，櫛描文を主文様とする。櫛歯の単位は4本1組のものから7，8本1組と様々であり，これをまず横方向にめぐらし，次いで縦方向に配置した後に山形文を描く。9の文様には，その施文順序がよく表現されている。17の大形片では左端にボタン状の貼付文が配置され，その表面に刺突を加える。赤彩は10，15，17，18に認められる。10の赤彩はよく遺存し，49号住居址出土の一括土器と接合する。20～23は縄文，網目状文により文様を構成する。22は大形片で，最下段の網目状文帯には細い沈線の横走が認められる。23の羽状縄文は異なった2本の原体を使用する。

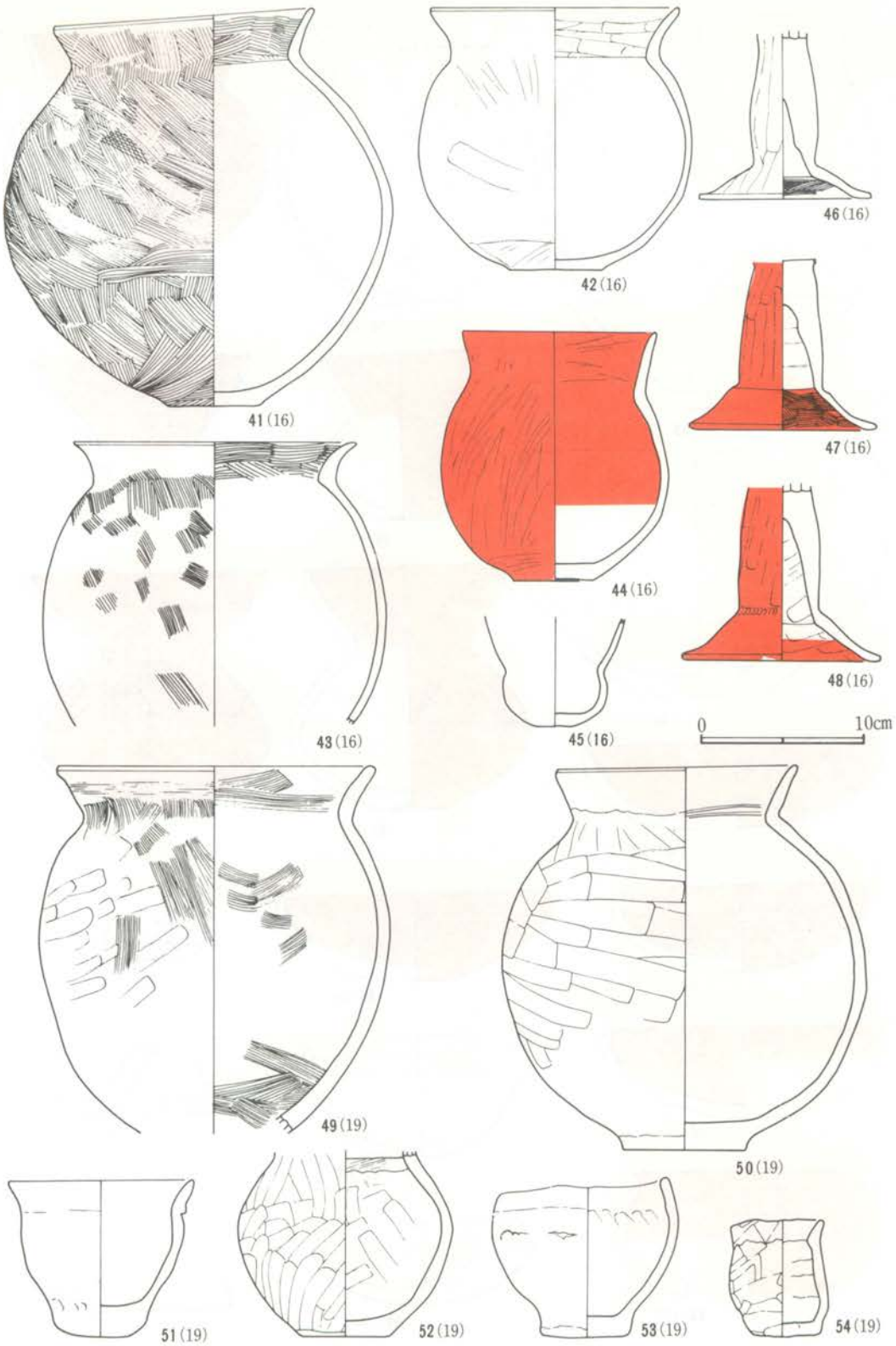
24は底部で，木葉痕が認められる。時期的にははっきりしないが，弥生時代末期から五領期にかけての所産となろう。



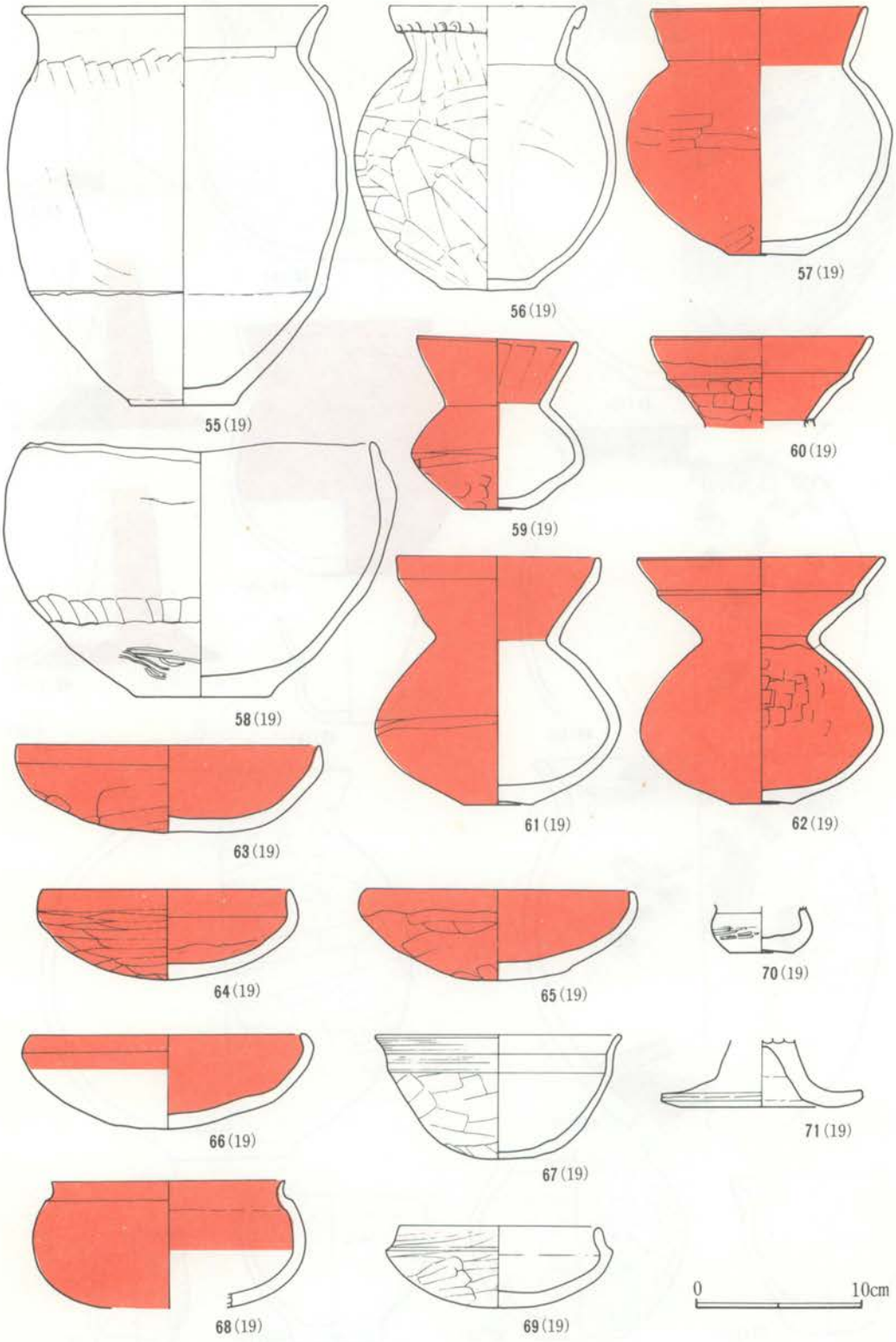
第86図　住居址出土土器実測図 (1)



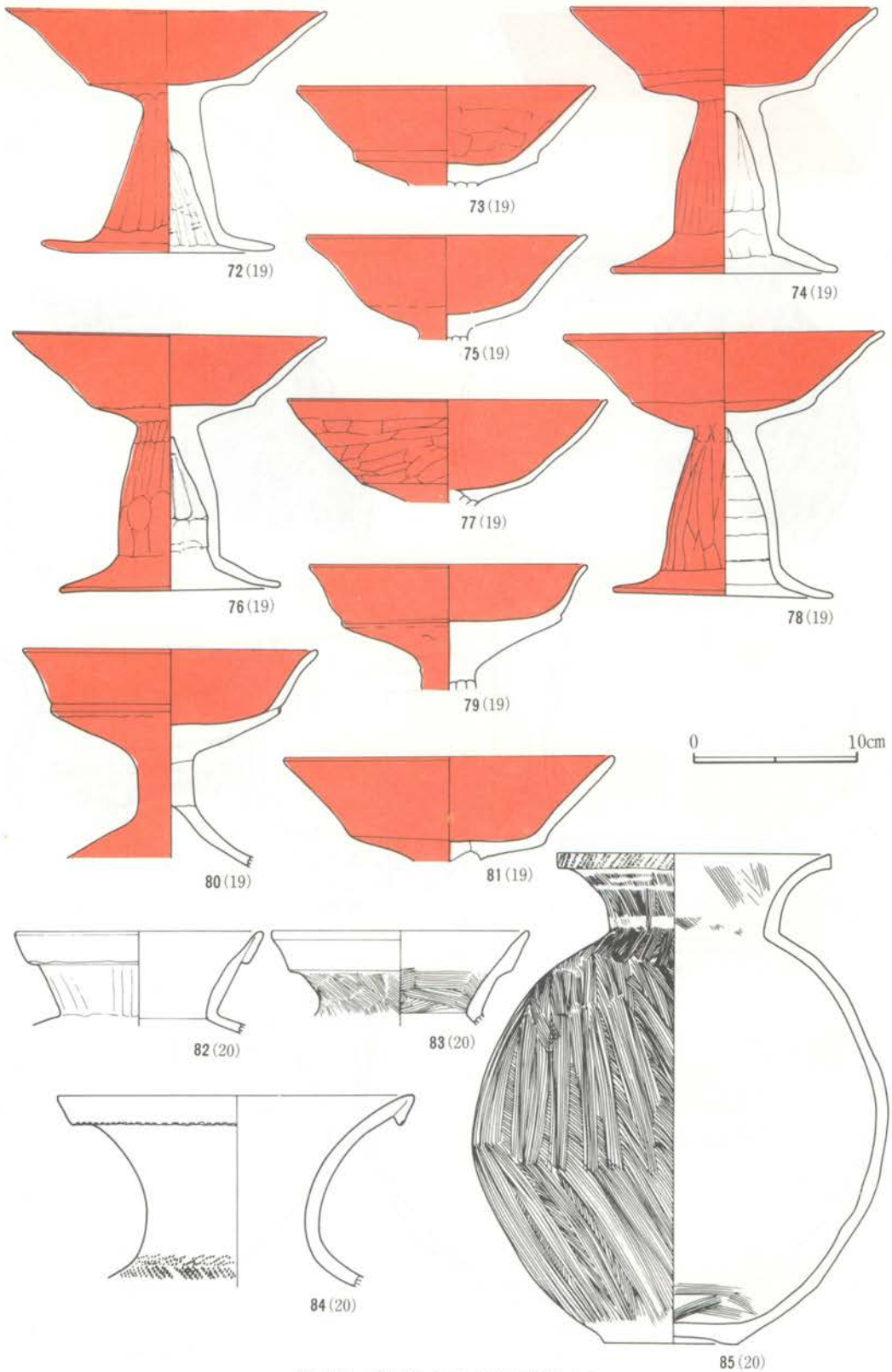
第87図　住居址出土土器実測図 (2)



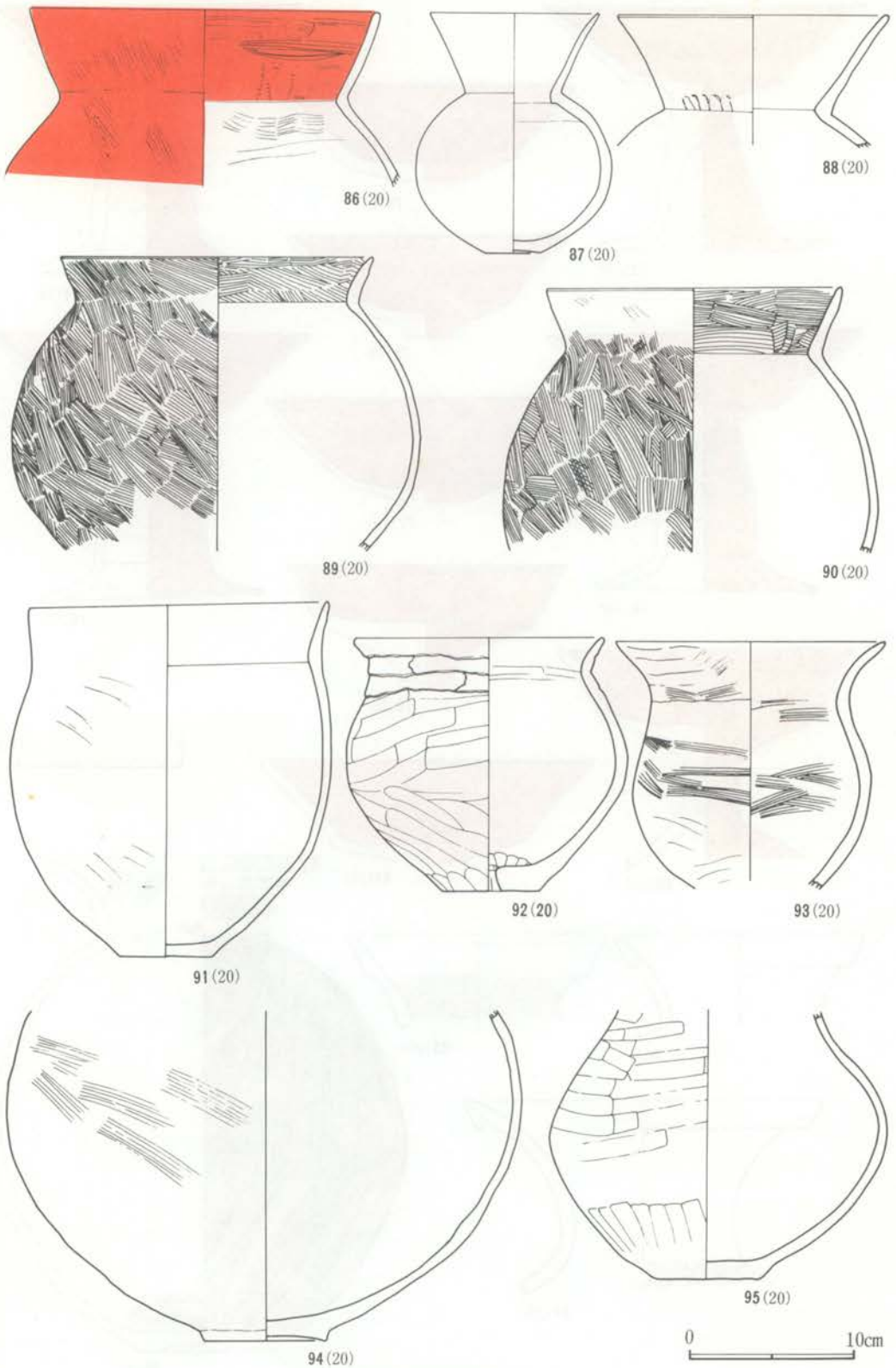
第88図　住居址出土土器実測図 (3)



第89図　住居址出土土器実測図 (4)

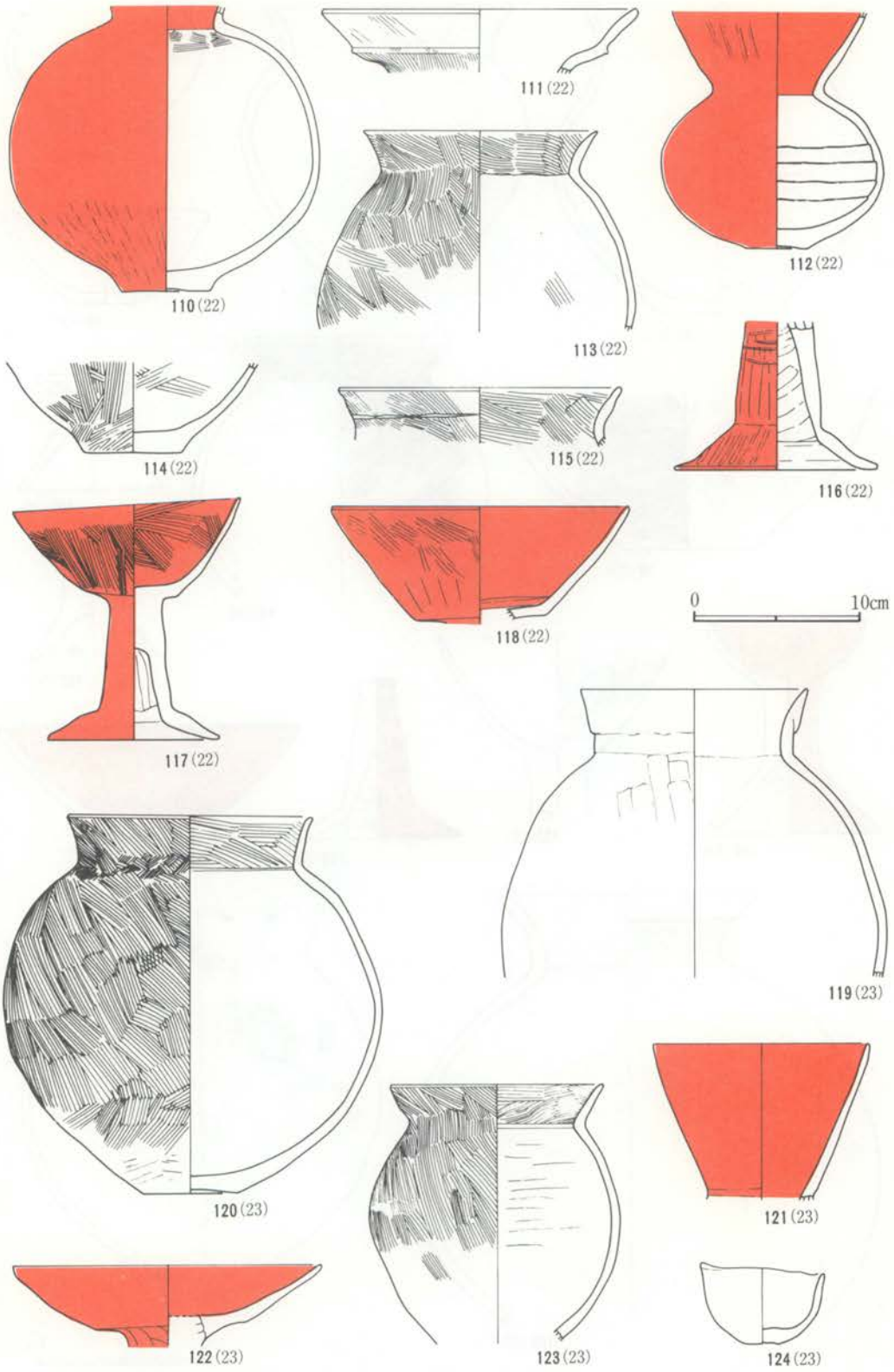


第90図　住居址出土土器実測図 (5)

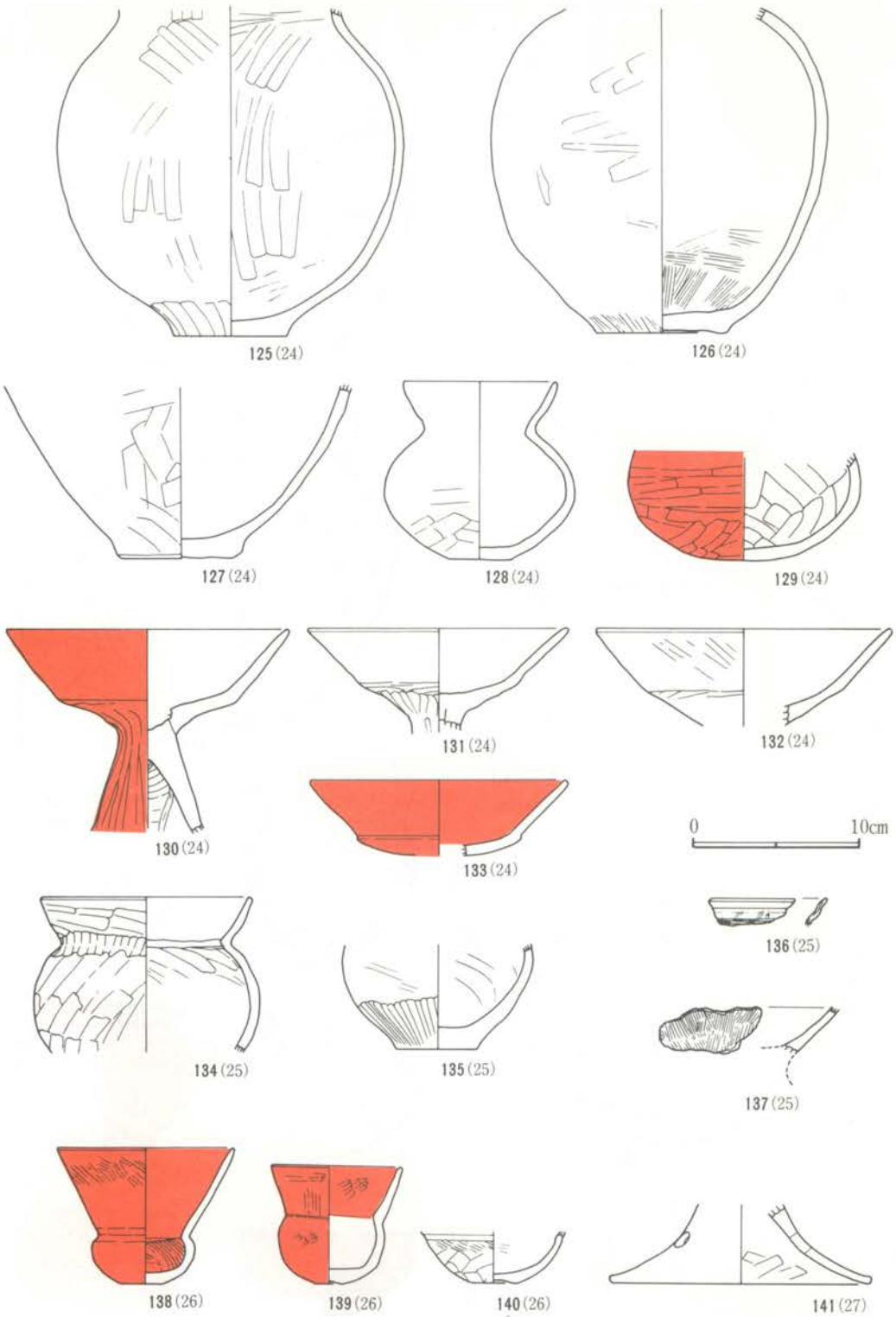


第91図　住居址出土土器実測図 (6)

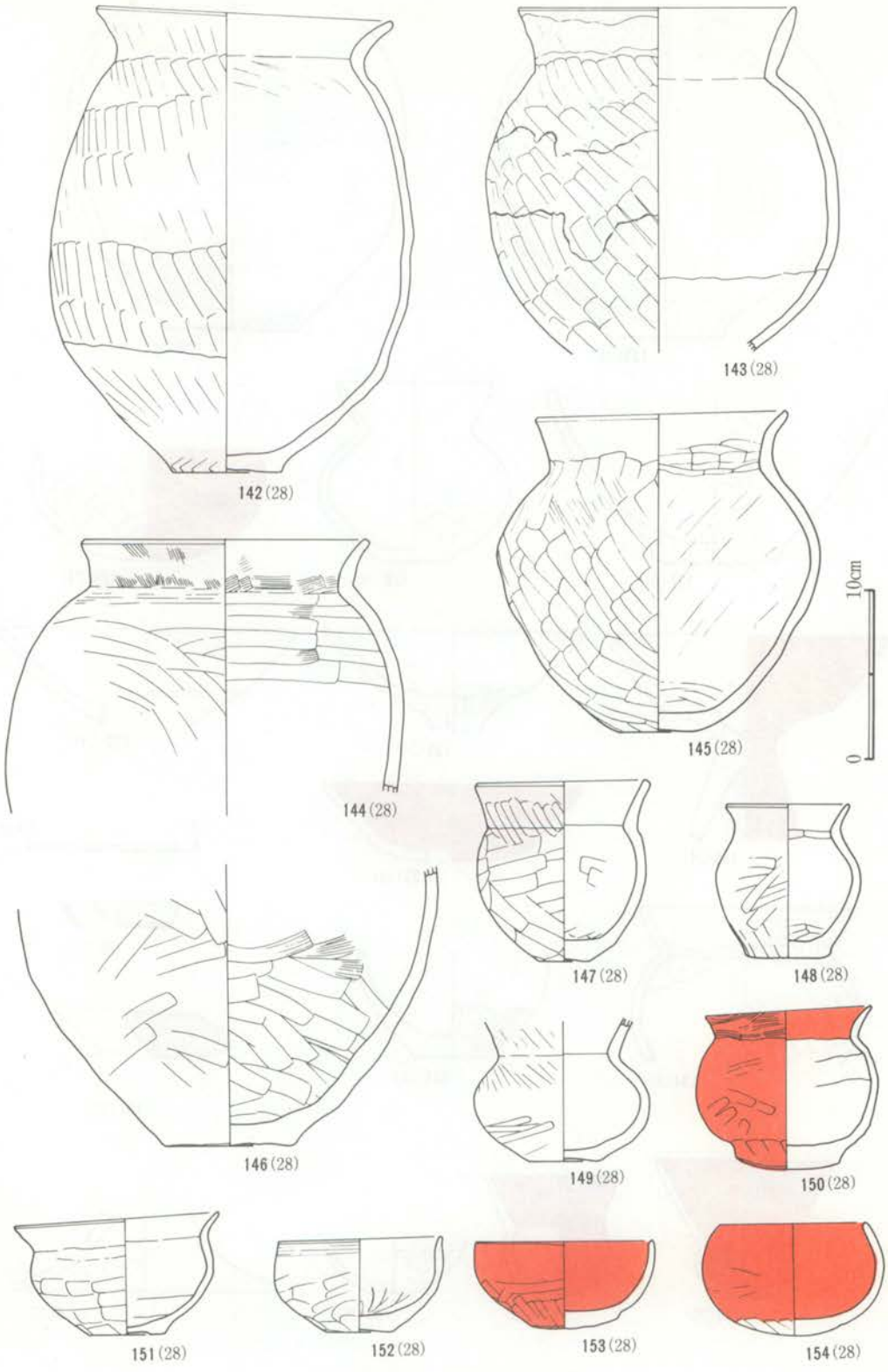
第92図　住居址出土土器実測図 (7)



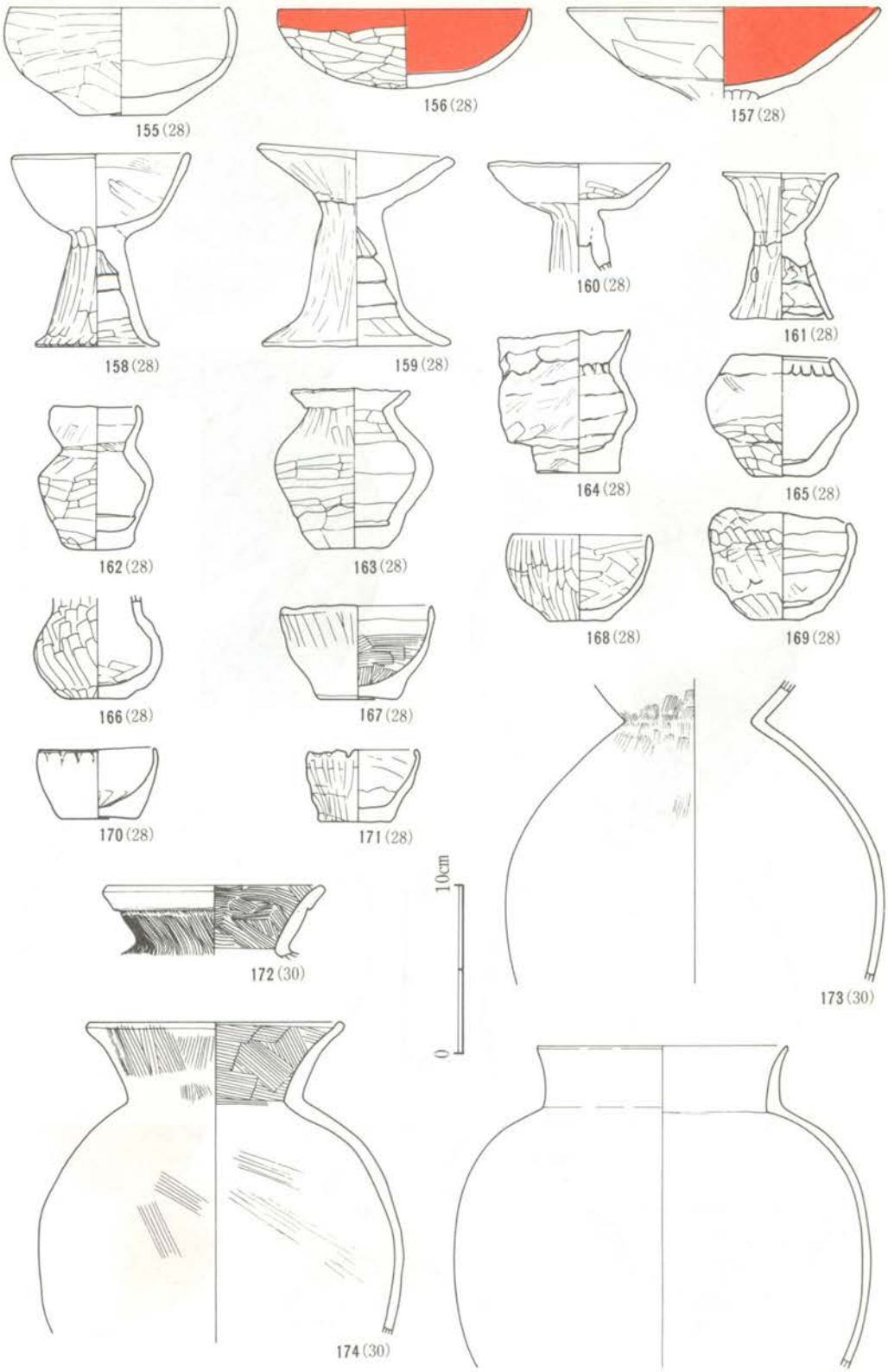
第93図　住居址出土土器実測図 (8)



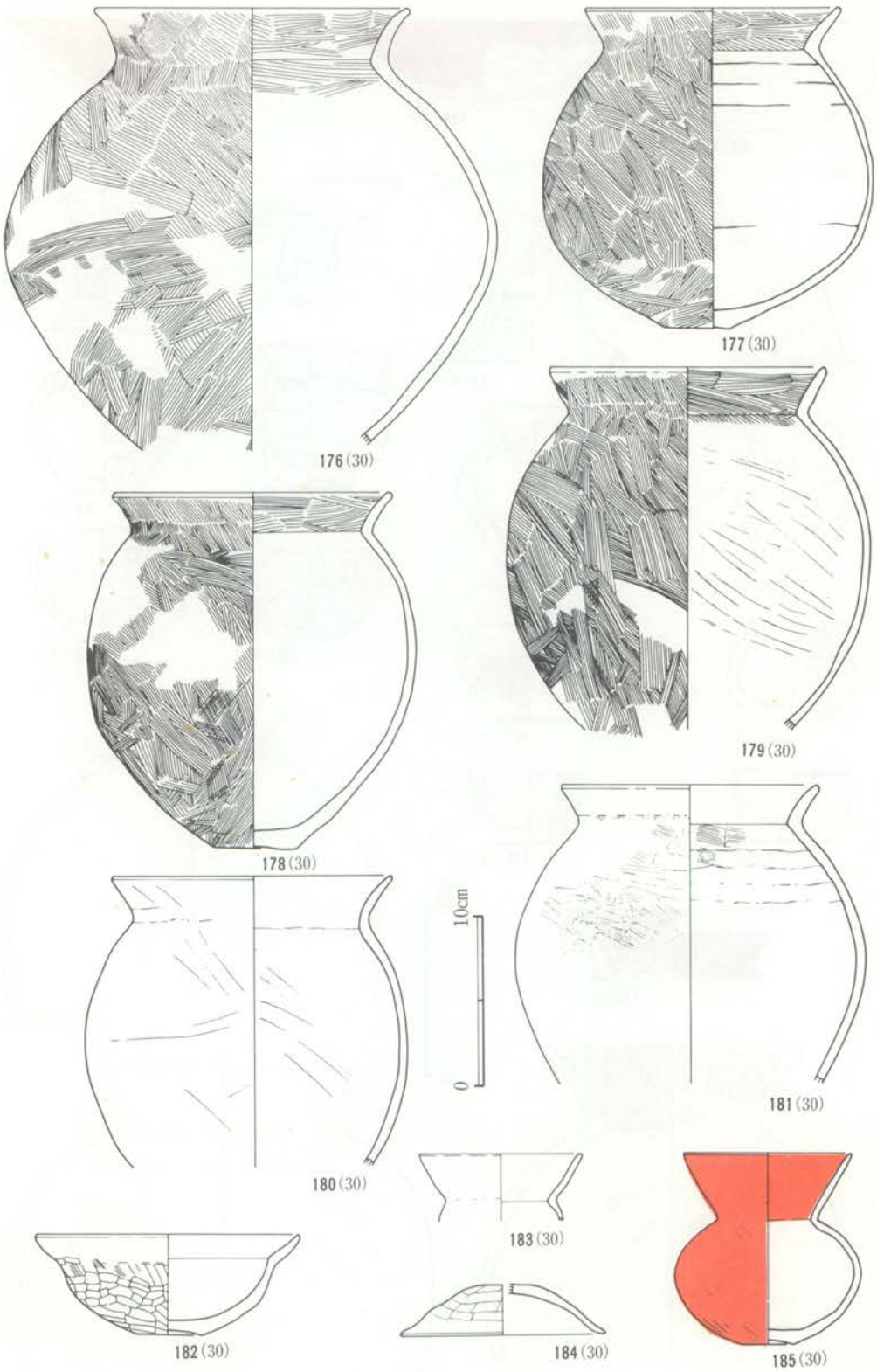
第94図　住居址出土土器実測図 (9)



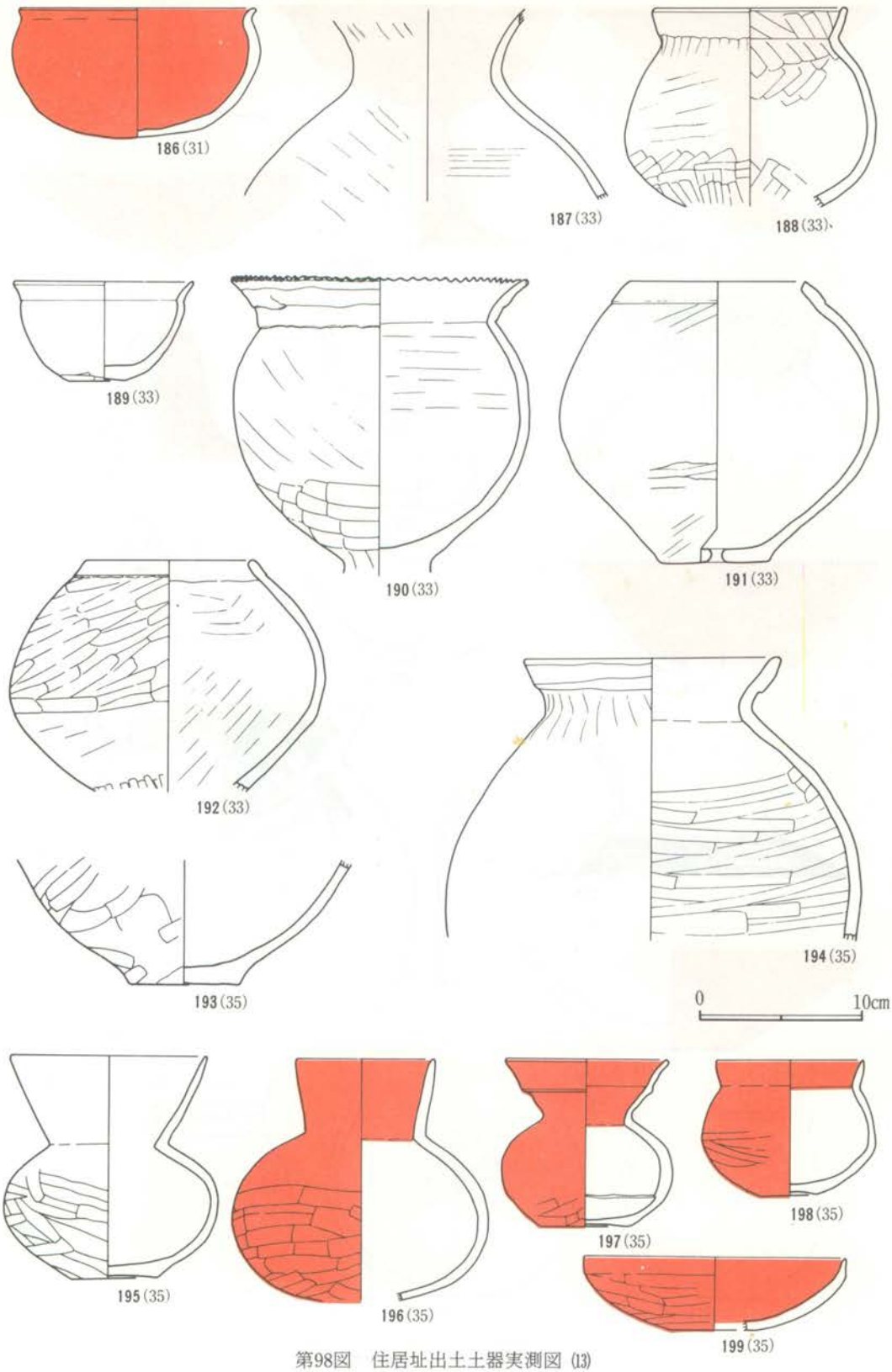
第95図　住居址出土土器実測図 (10)



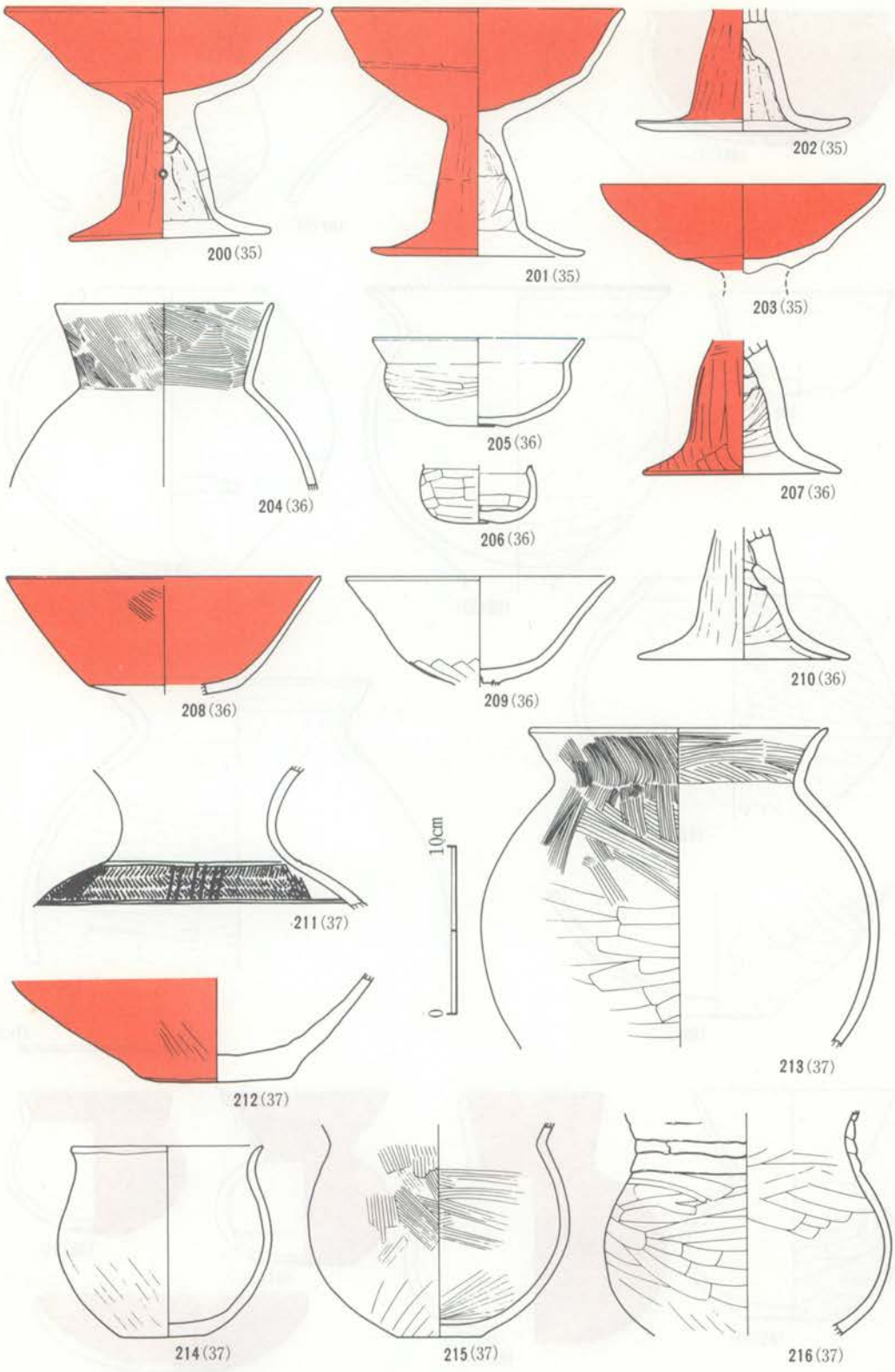
第96図　住居址出土土器実測図 (11)



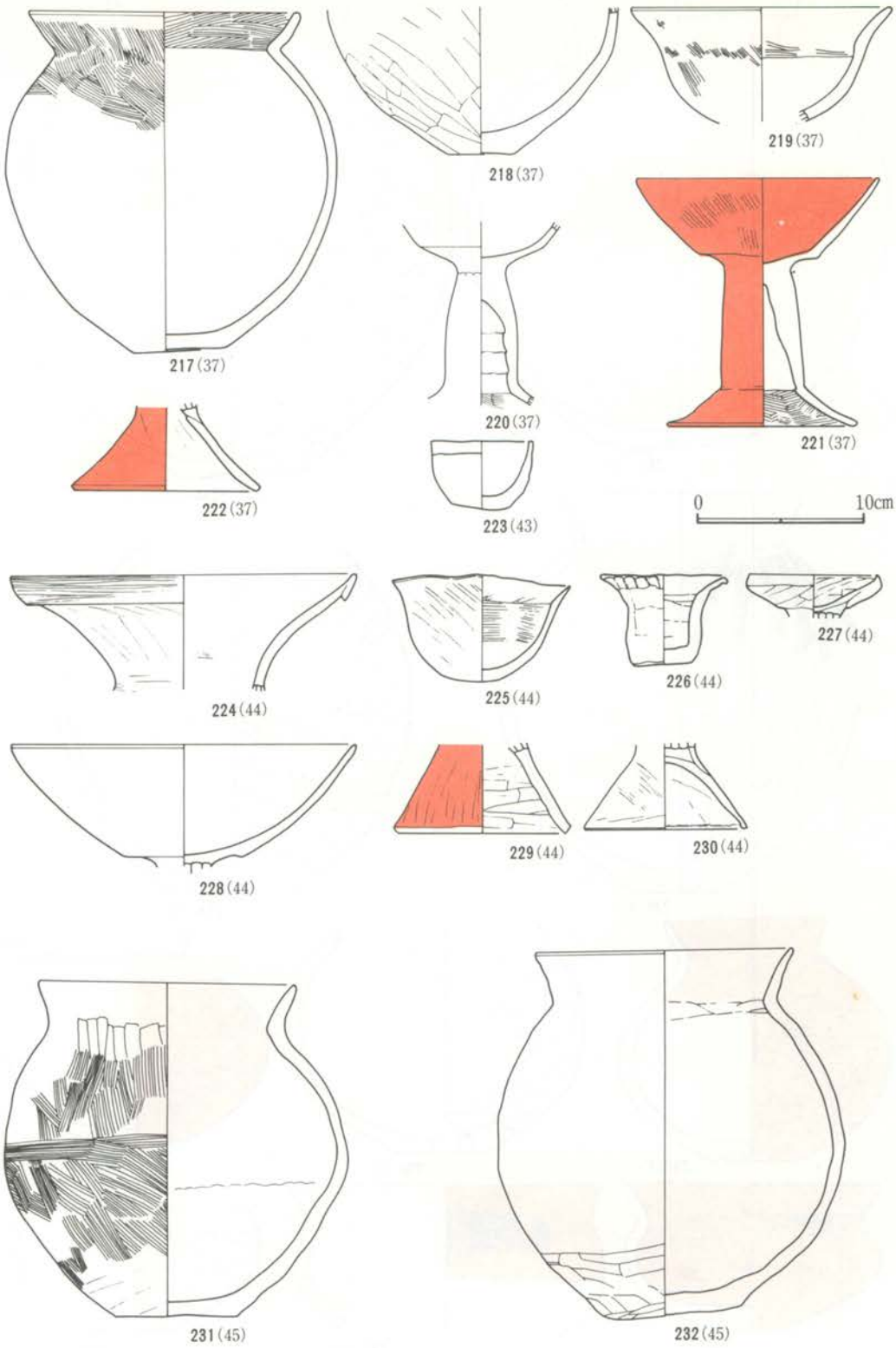
第97図　住居址出土土器実測図 (12)



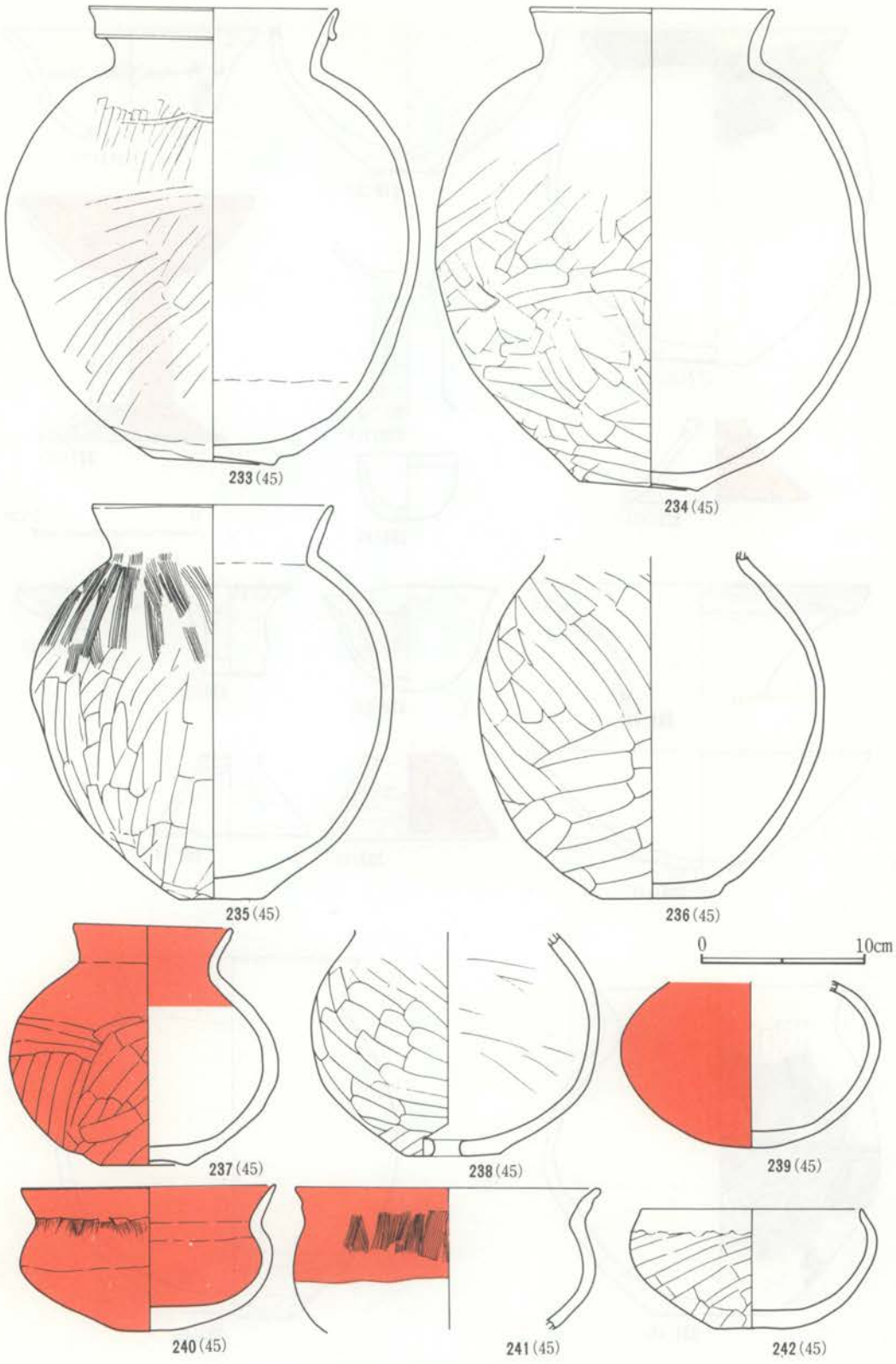
第98図　住居址出土土器実測図 (13)



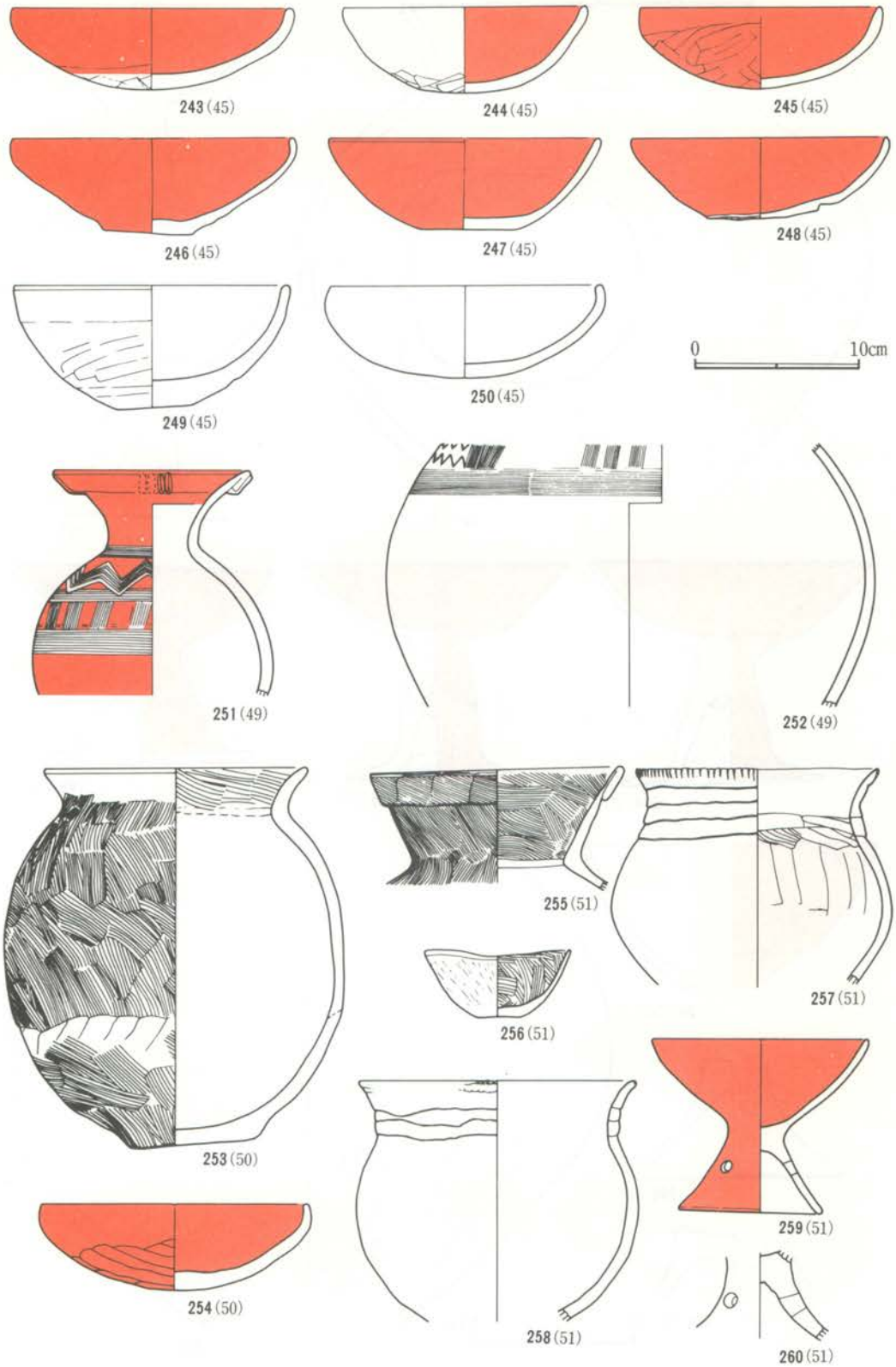
第99図　住居址出土土器実測図 (14)



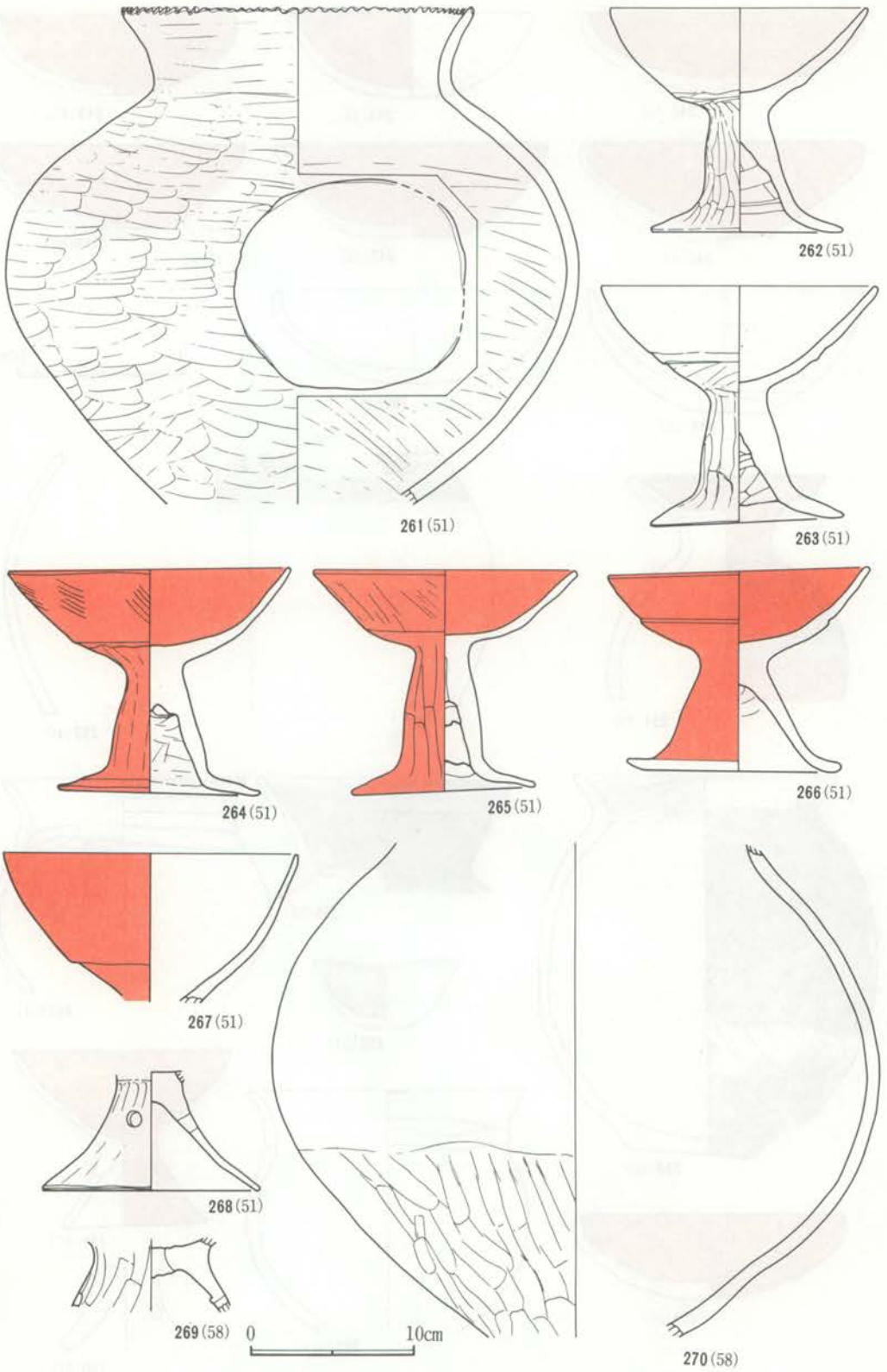
第100図　住居址出土土器実測図 (15)



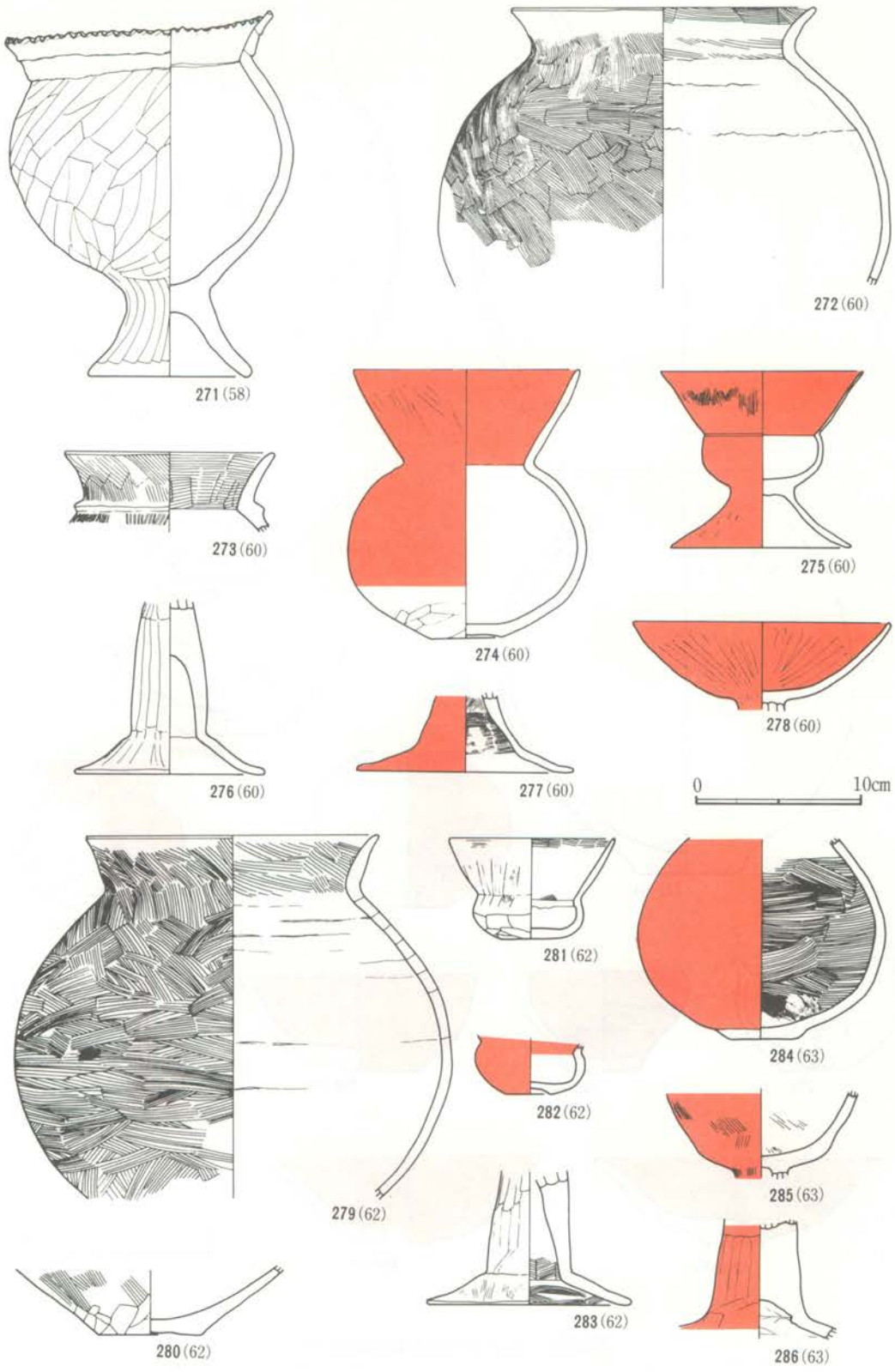
第101図　住居址出土土器実測図 (16)



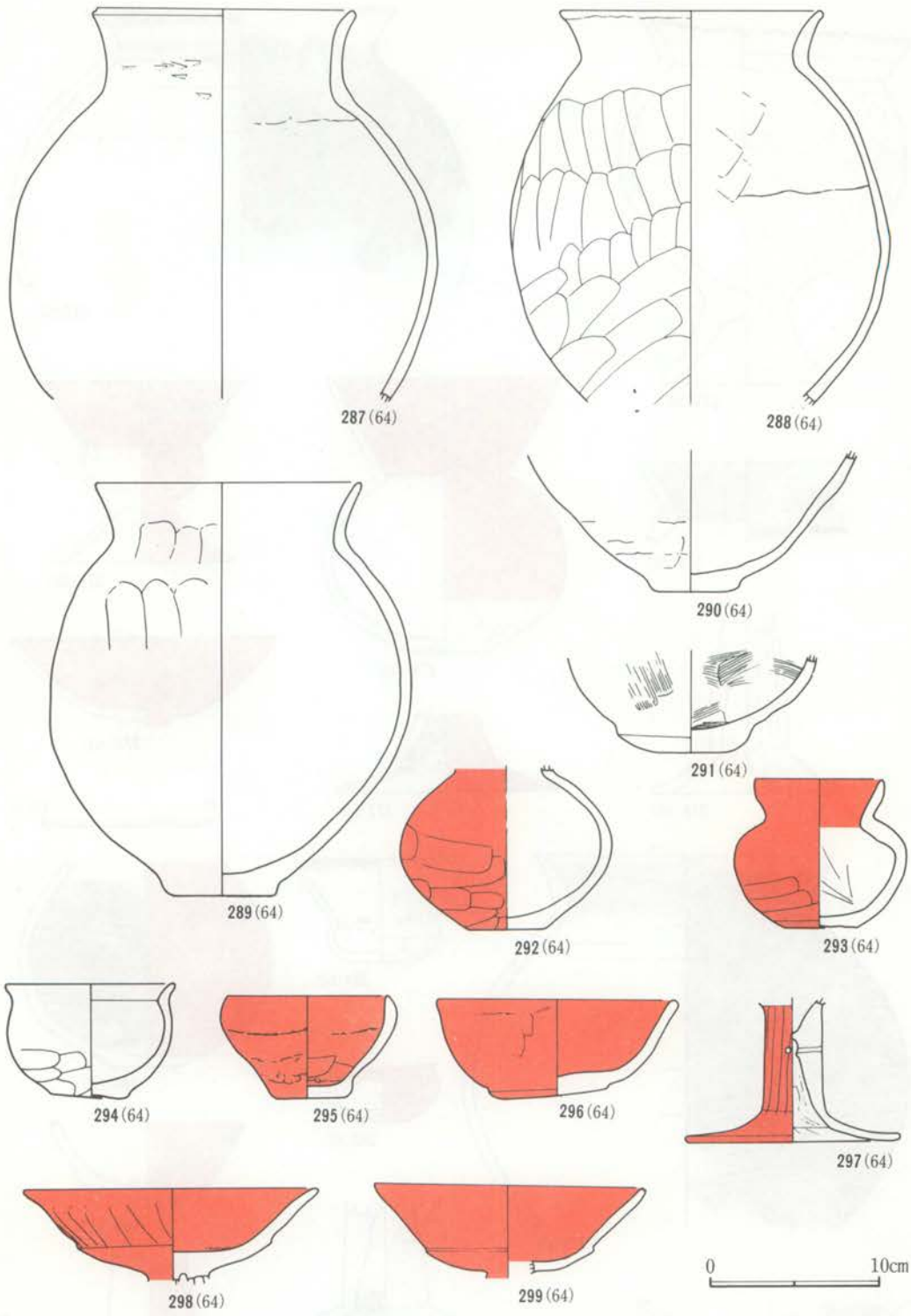
第102図　住居址出土土器実測図 (17)



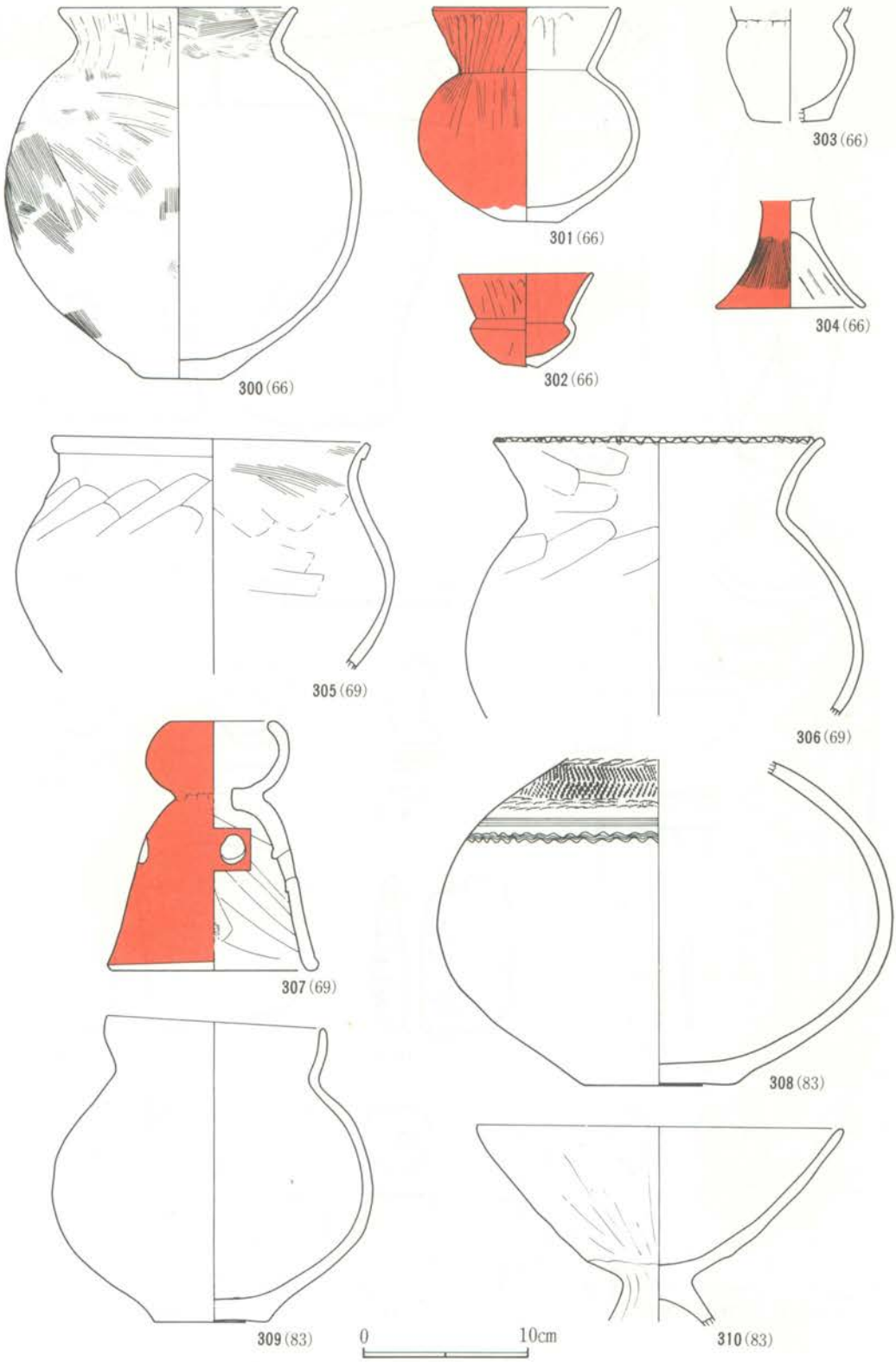
第103図　住居址出土土器実測図 (18)



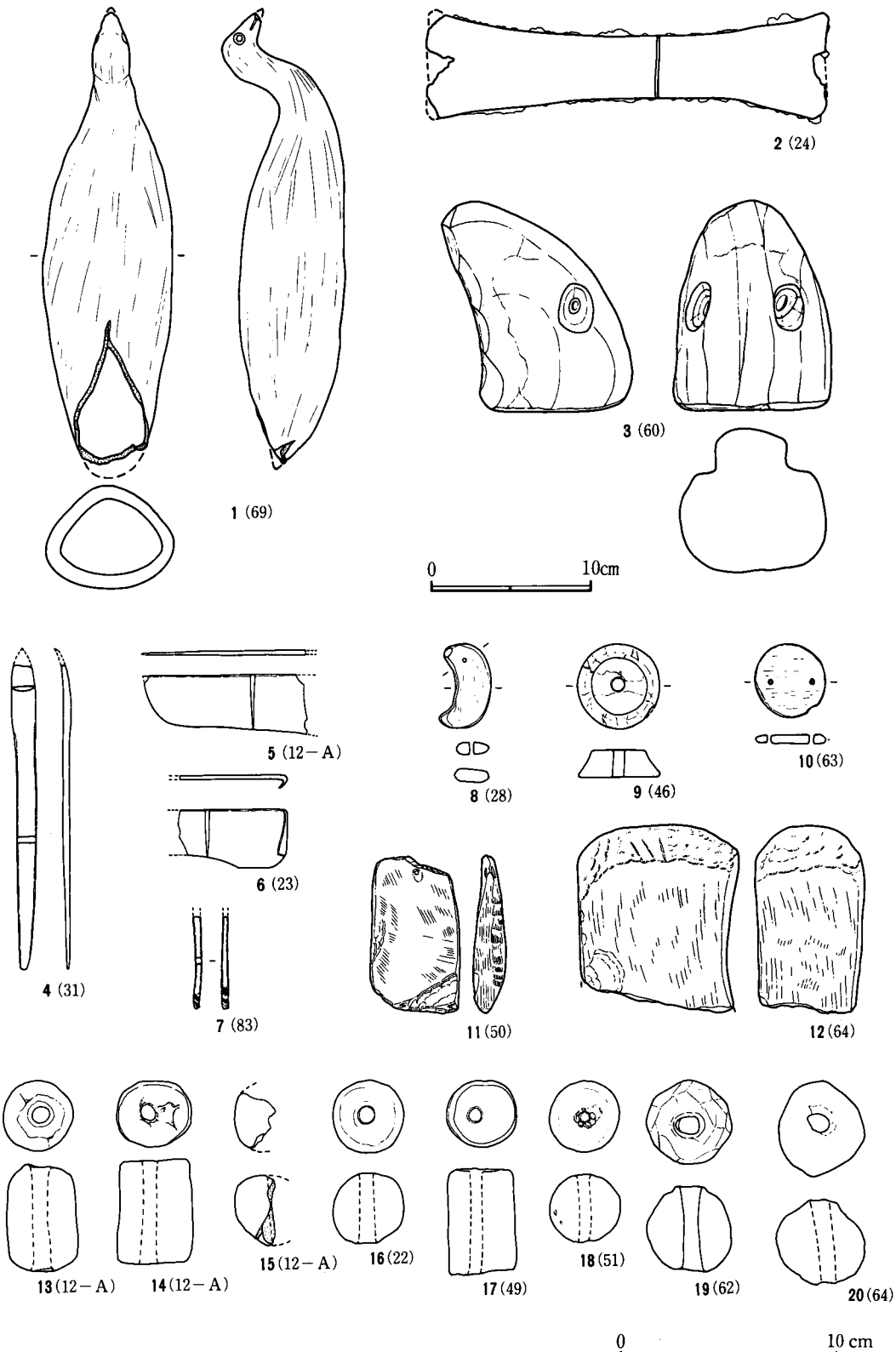
第104図　住居址出土土器実測図 (19)



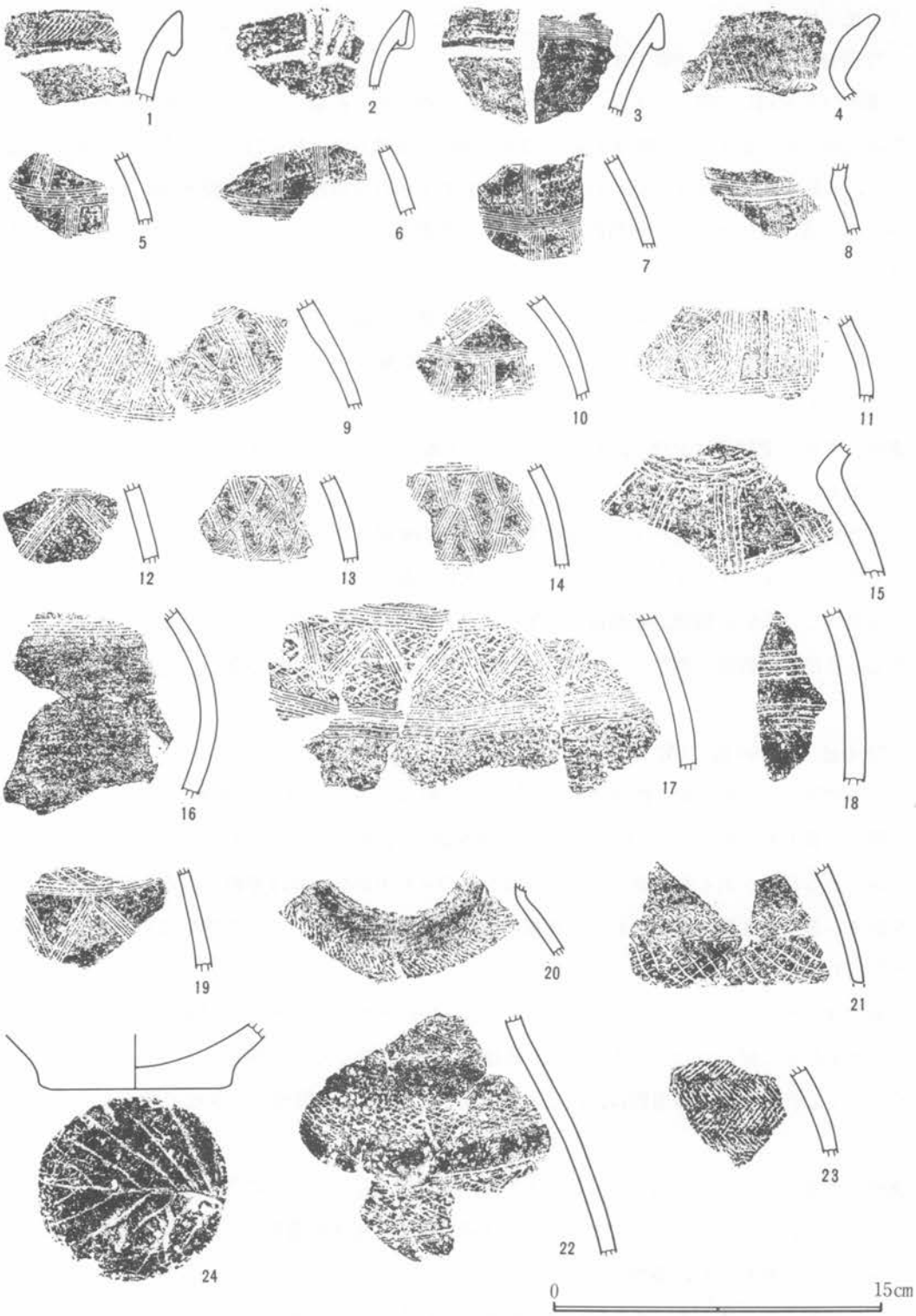
第105図　住居址出土土器実測図 (20)



第106図　住居址出土土器実測図 (21)



第107図　住居址出土遺物実測図



第108図　出土土器拓影図

3．土　坑　墓

72号址（第109図）（第110図1～3）

遺跡の北東隅に位置しており，1号住居址から約5mの距離にある。平面形は北西側がやや歪む隅丸長方形を呈する。規模は1.4×2.5mを測る。長軸方位はN—74°—Wを指す。底面は堅緻であり，東側と西側に起伏が認められる。壁の立ち上がりは垂直に近い。深さ50～56cmを測る。覆土は3層に区分された。暗褐色土，褐色土，黄褐色土が主体である。流れ込みによる堆積状態を示している。

遺物は遺構確認面のほぼ中央で出土している。甕形土器，坏形土器がある。甕形土器は胴部から底部の破片で重なった状態であった。坏形土器は口縁部がわずかに破損しており，斜めに傾いた状態であった。

遺物　本址の遺物量は少なく，3点の図示した土器の他に20点余の甕，高坏の破片が出土したにとどまる。

1は甕で，胴部から底部までが遺存する。器面の整形はヘラ削りによりていねいに仕上げられる。色調は赤褐色を呈す。2は完形の坏で，赤彩は鮮明に残る。しかし，内外面ともに底部までには至っていない。器面の整形はヘラ削りによるが，若干輪積痕を認めることができる。3は小形品の底部で，器面の調整が行き届いているところから壺の可能性が強い。色調は暗褐色を呈する。

73号址（第109図）（第110図4～10）

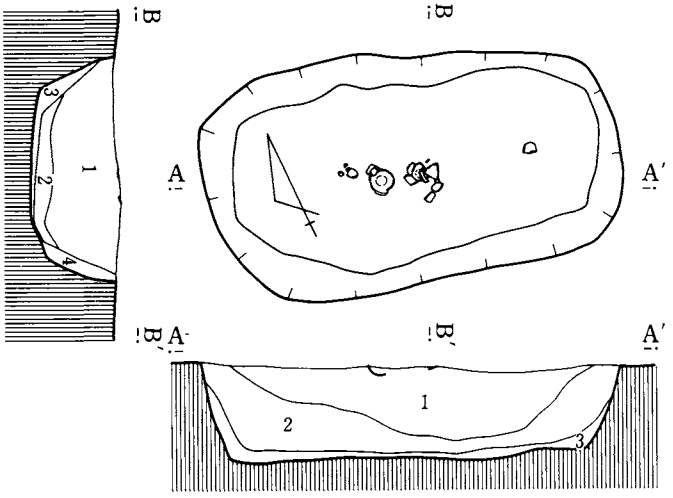
2号住居址の南約3mに位置する。72号址から南へ約16mの距離にある。平面形は北側が丸みを帯びる長方形を呈する。規模は1.3×2.8mを測る。長軸方位はN—27°—Eを指す。底面は全体に緩やかな起伏があるが堅緻である。底面からの立ち上がりはほぼ垂直である。深さ24～40cmを測る。覆土は4層に区分された。黒褐色土，茶褐色土，黄褐色土が主体を占める。第一層が大きく落ち込んでいる。

遺物は坏形土器，鉄鏃，刀子が出土している。坏形土器は，72号址と同様土坑の中央，覆土上面でやや斜めに傾いた状態で出土した。鉄鏃，刀子は中央よりやや南寄りで，底面に密着した状態で出土した。これらの遺物は，出土状況および72号址との関連から本址に伴うものと考えたい。

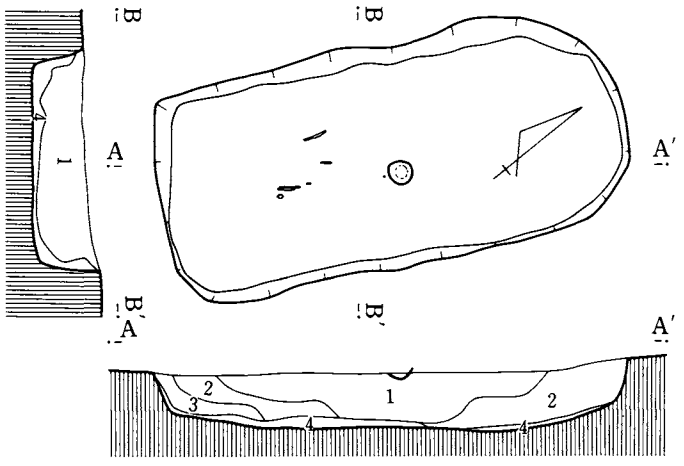
遺物　本址では図示した遺物以外には土器片が2点出土しているだけである。

4は坏で，口縁部をわずかに欠損する。赤彩は両面に施され遺存もよい。器面はほとんどヘラ削りによって整形され，調整も若干加わる。

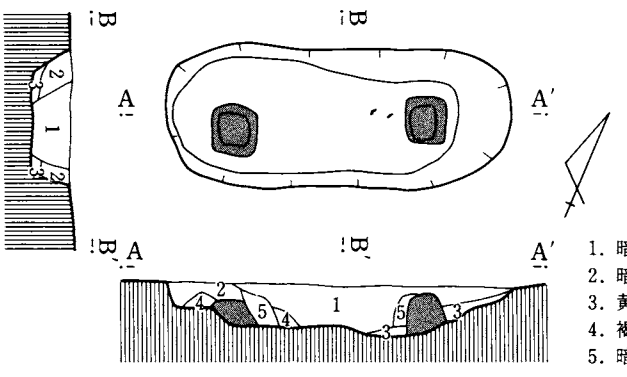
他に鉄製品の出土があった。6～10は鉄鏃でそれぞれ形態が異なる。7の茎部は6か8と同個体となろうが接合はしない。5は幅広の刀子である。刃部と比べてやや茎部が短い。これらの鉄製品は埋葬の際の副葬品となろう。



1. 黒褐色土(褐色土,ローム粒を混入)
2. 茶褐色土(黒褐色土,ローム粒を混入)
3. 褐色土
4. 黄褐色土(ロームブロックを混入)



1. 茶褐色土(ローム粒を混入)
2. 褐色土　(ローム粒を混入)
3. 茶褐色土(ローム粒を混入)
4. 黄褐色土(ロームブロックを若干混入)



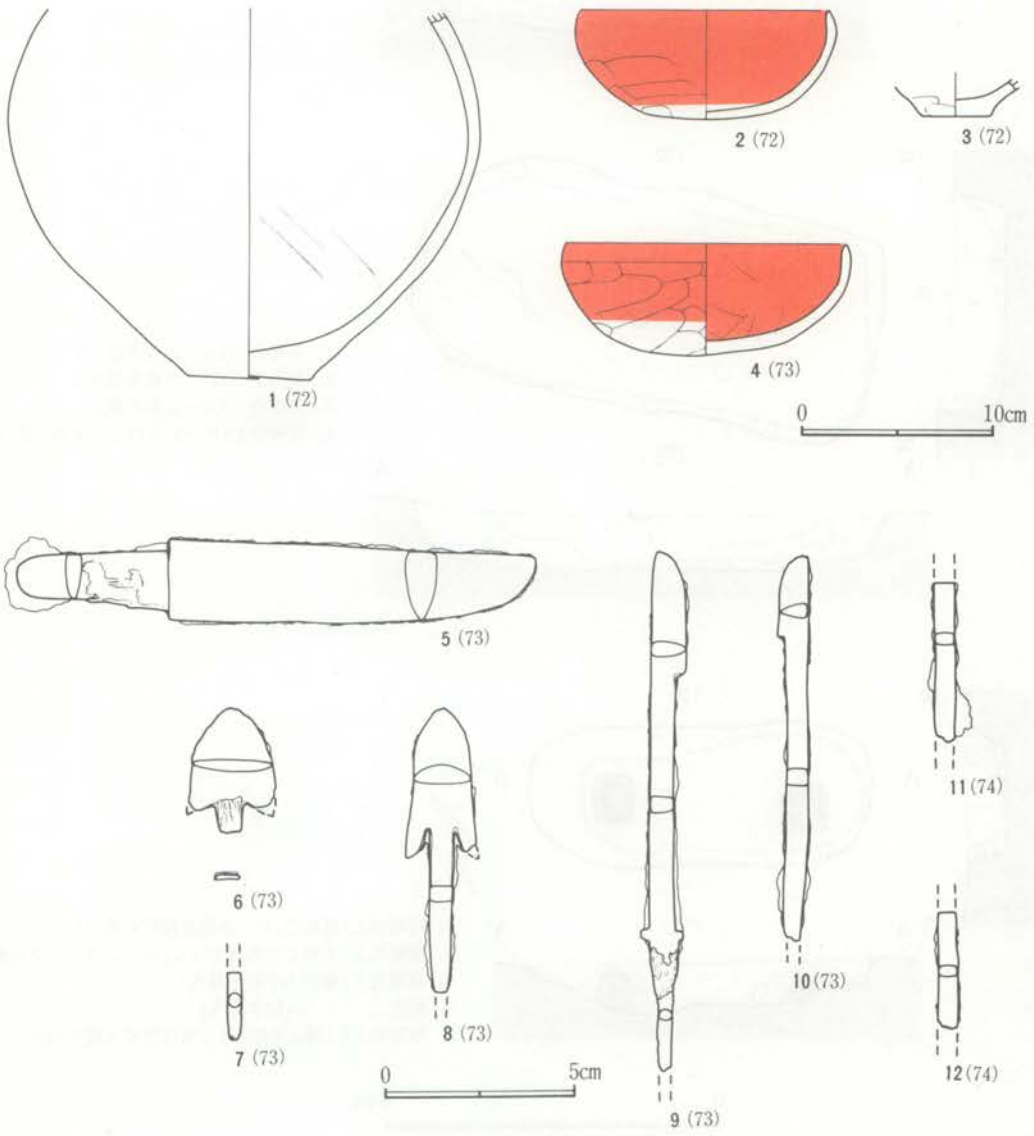
1. 暗褐色土(褐色土,ローム粒を斑状に混入)
2. 暗褐色土(1層より色調明るく,ロームブロックを混入)
3. 黄褐色土(褐色土を若干混入)
4. 褐色土　(ローム粒を混入)
5. 暗褐色土(1層より明るい,灰白色粘土粒を混入)

0　2 m

第109図　72(上)・73(中)・74(下)　号址実測図

74 号址（第 109 図）（第 110 図 11・12）

4 号墳周溝の南東側に位置する。周溝外縁端から約 3 mの距離にある。平面形は長楕円形を呈する。規模は 0.9×2.0 mを測る。長軸方位はN－68.5°－Eを指す。底面は長軸方向の西南から北東側に 3 段階に掘り込まれ，北東端ではやや弱く 2 段整形されている。深さは 30～40 cm を測る。そして，西南側の 2 段目と北東側 2 段目には灰白色粘土塊が充填されている。粘土塊の大きさは西南側が27×30 cm，高さ 5～16 cm，北東側が 23×27 cm，高さ 16～25 cm を測る。土層断面ではこの粘土塊の上部および側面を褐色土，黄褐色土で補強した様子が観察された。これらの結果により本址が単なる土坑ではなく，明らかに木棺を埋置した土坑墓であると考えられる。



第 110 図　72・73・74号址出土遺物実測図

木棺の埋置範囲は粘土塊の位置から推定して，長軸 95 cm 短軸 50 cm 程の小さい範囲になると思われる。覆土は 5 層に区分された。木棺の埋置範囲と考えられる部分は暗褐色土が主体であり，外側は暗褐色土，褐色土，黄褐色土が主体である。

遺物は北東側粘土塊からやや中央寄りで，棒状の鉄片 2 点が出土している。出土レベルは底面から 2～5 cm の厚さで堆積している黄褐色土の上面であり，ちょうど棺床のレベルと一致するものと考えられる。

遺物　本址から出土した遺物は鉄製品が 2 点となり，ともに鉄鏃の一部であろう。

第 4 節　歴史時代

ここで歴史時代の遺構としたものには，後述するように真間期の住居址，方形周溝遺構，ピット群，土坑等がある。これらの中でも時期が判別できるものは住居址だけで，他の遺構については根拠が希薄となる。しかし，52 号址（溝）のように古墳時代の住居址との重複により，古く位置づけられる遺構もあることを付記しておきたい。

1．住居址

21 号住居址（第 111 図）（第 112 図）

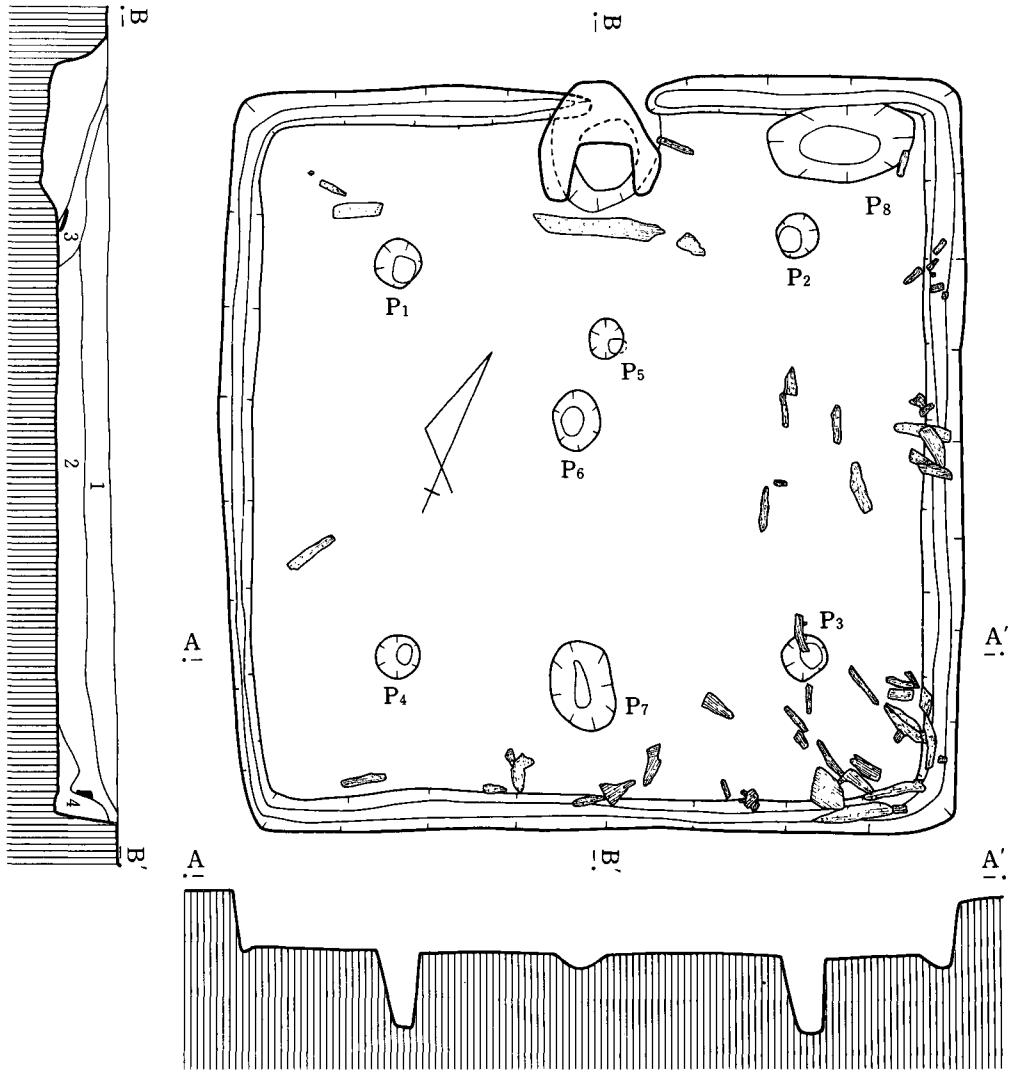
本址は台地の南側に位置する。東側で 39 号住居址および 56 号址と重複している。新旧関係は，遺構確認時の精査，土層断面の観察により，本址が最も新しいことが確認された。本遺跡の住居址群中，唯一のカマドをもつ住居址である。平面プランは方形を呈する。規模は 5.8×5.9 m を測る。主軸方位はN－21°－Wを指す。床面は全体に堅くしまりがあるが，特にカマドから中央付近が堅緻である。壁は床面より垂直に立ち上がり，遺存はよい。壁高は南壁で 51 cm，北壁で 39 cm を測る。壁溝はカマド下部を除いて全周する。幅 18～25 cm，深さ 4～9 cm を測る。ピットは 8 か所より検出された。このうちほぼ等間隔で住居の四隅に配されているＰ１～Ｐ４が主柱穴となろう。径 33～36 cm，深さ 53～61 cm を測る。Ｐ５～Ｐ７は主柱穴の補助的な役割をもつものであろうか。径 33～73 cm，深さ 10～21 cm を測る。Ｐ５はやや斜めに掘り込まれている。Ｐ８は貯蔵穴であろう。長軸方向が北壁と並行する楕円形プランを呈する。径 59×117 cm を測る。底面はほぼ平坦で，掘り込みの深さは 37 cm を測る。カマドは北壁中央に位置する。灰白色砂質土を部材として構築している。遺存状態は比較的良好であり，天井部もわずかに残っていた。全長 115 cm，幅 95 cm，袖部の張り出しは 90～96 cm，袖幅は 23～28 cm を測る。掘り込みは比較的浅く，10 cm 程である。壁外への張り出しは少ない。焚口部は良く焼けており幅 50～52 cm を測る。焚口より甕形土器が破片で出土している。覆土は 4 層に区分された。黒褐色土，黒色土が主体を占めており，全て流れ込みによる堆積状態を示している。

出土遺物は，カマドとその周辺に偏って出土している。このうち，貯蔵穴のやや東で盤が破片で出土している。東壁沿いを中心として，炭化材，焼土などが重なった状態で検出されている。

しかし，出土状態に偏りがあり，かつ床面より上にあるため本址が火災により廃絶されたものとは断定し難い。

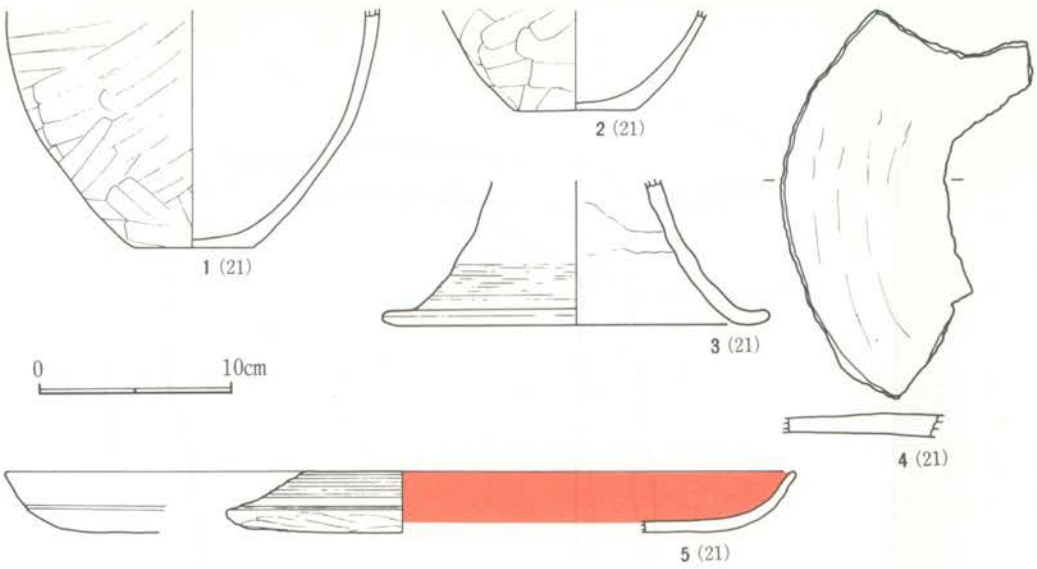
遺物　本址での出土遺物は図示した5点の他縄文式土器から土師器に至る種々な土器が検出されており，これらは約300余点を数える。

5は盤となろうが，10点の破片から推定した。内面は赤彩が施され，ヘラ磨きでよく調整されている。4もおそらく盤の一部となろう。これもていねいにヘラ磨きがかけられている。3は高坏の脚部で，約⅓を遺存する。かなり大形品となろう。色調は黒褐色を呈する。1，2は甕の底部片である。



1. 黒褐色土(ローム粒,炭化粒混入)
2. 黒色土　(ローム粒,炭化粒混入)
3. 黒褐色土(砂質粘土混入)
4. 黒褐色土(ローム粒多量に混入)

第111図　21号住居址実測図



第112図　21号住居址出土土器実測図

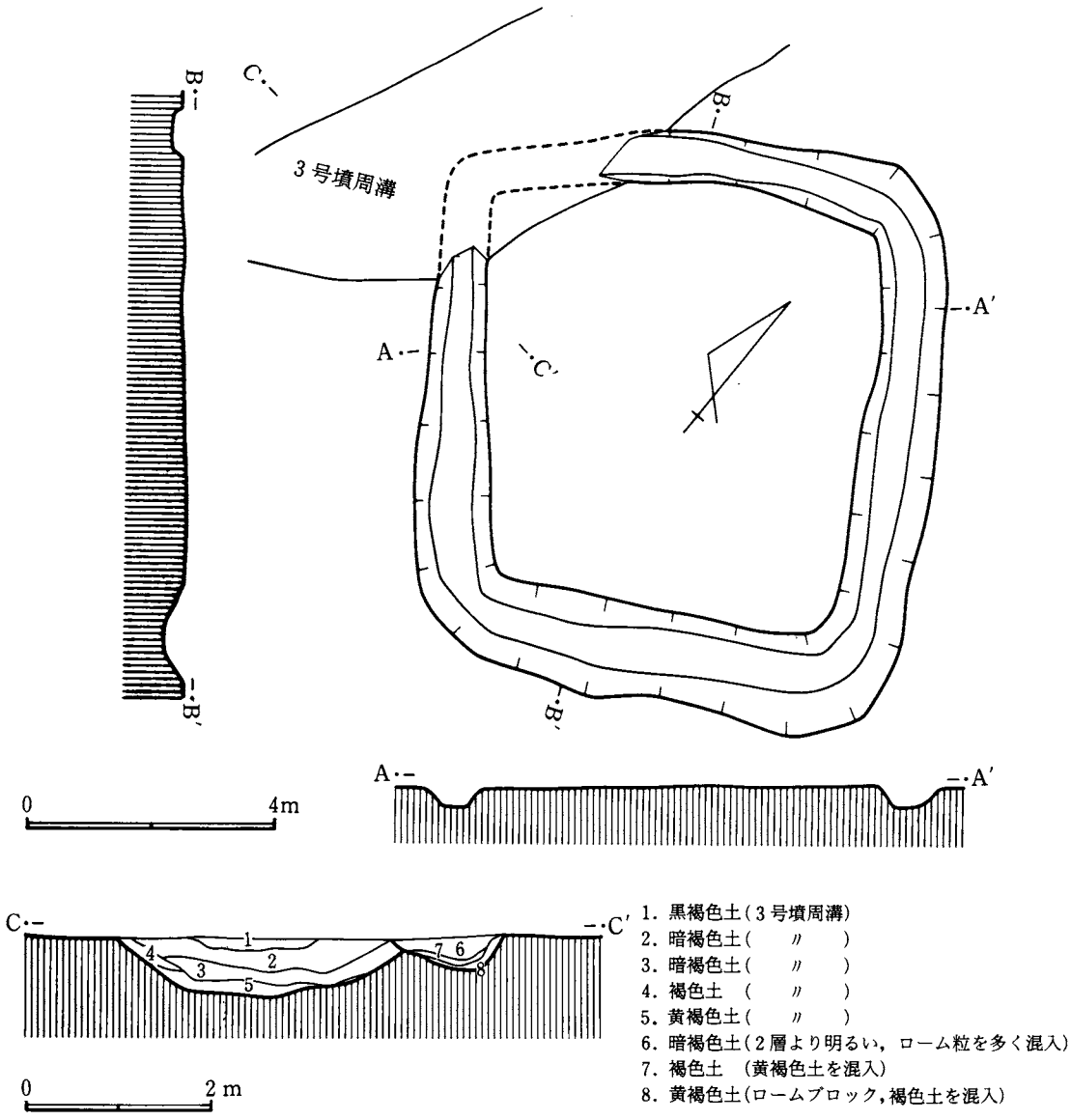
2．方形周溝遺構

本遺跡で検出された方形周溝遺構は計10基にのぼった。比較的まとまった数量であったが，他の遺跡同様ここでもその性格を把握するには至らなかった。

3号址（第113図）

本址は遺跡の北側，3号墳の東に位置する。3号墳周溝と西隅で重複している。新旧関係は，遺構確認面の精査ではやや不明確であったが，土層断面の検討により本址のほうが3号墳より新しいものと判断した。また，上面は掘削用重機により削平されており，遺存状況は全体に良くなかった。平面形は各隅が丸みを帯び，各辺も直線的とは言えず歪みをもつ。また西隅が重複のため不明であるが，全体の形はほぼ方形を呈している。規模は中軸線上で南西～北東方向が8.5 m，北西～南東方向が9.1 mを測る。中軸方位はN－31°－Wを指す。周溝は全周するものと考えられる。周溝内側の上端のラインはほぼ直線的につながっているが，外周，特に南東溝は直線的でなく歪んでいる。おそらく本来は内周に沿った直線に近い状態にあったものと考えられる。溝底は全体に軟質であるが，起伏は少なくほぼ平坦である。立ち上がりは東隅でやや緩やかであるが，その他は急傾斜である。断面は「U」字形を呈する。北西溝は幅0.7～1.1 m，深さ23～25 cm，北東溝は幅1.0～1.3 m，深さ33～37 cm，南東溝は幅1.3～1.6 m，深さ19～36 cm，南西溝は幅0.8～1.2 m，深さ31～37 cmを測る。覆土は各溝とも1～3層に区分できた。暗褐色土，褐色土，黄褐色土が主体である。すべて流れ込みによる堆積状態を示している。

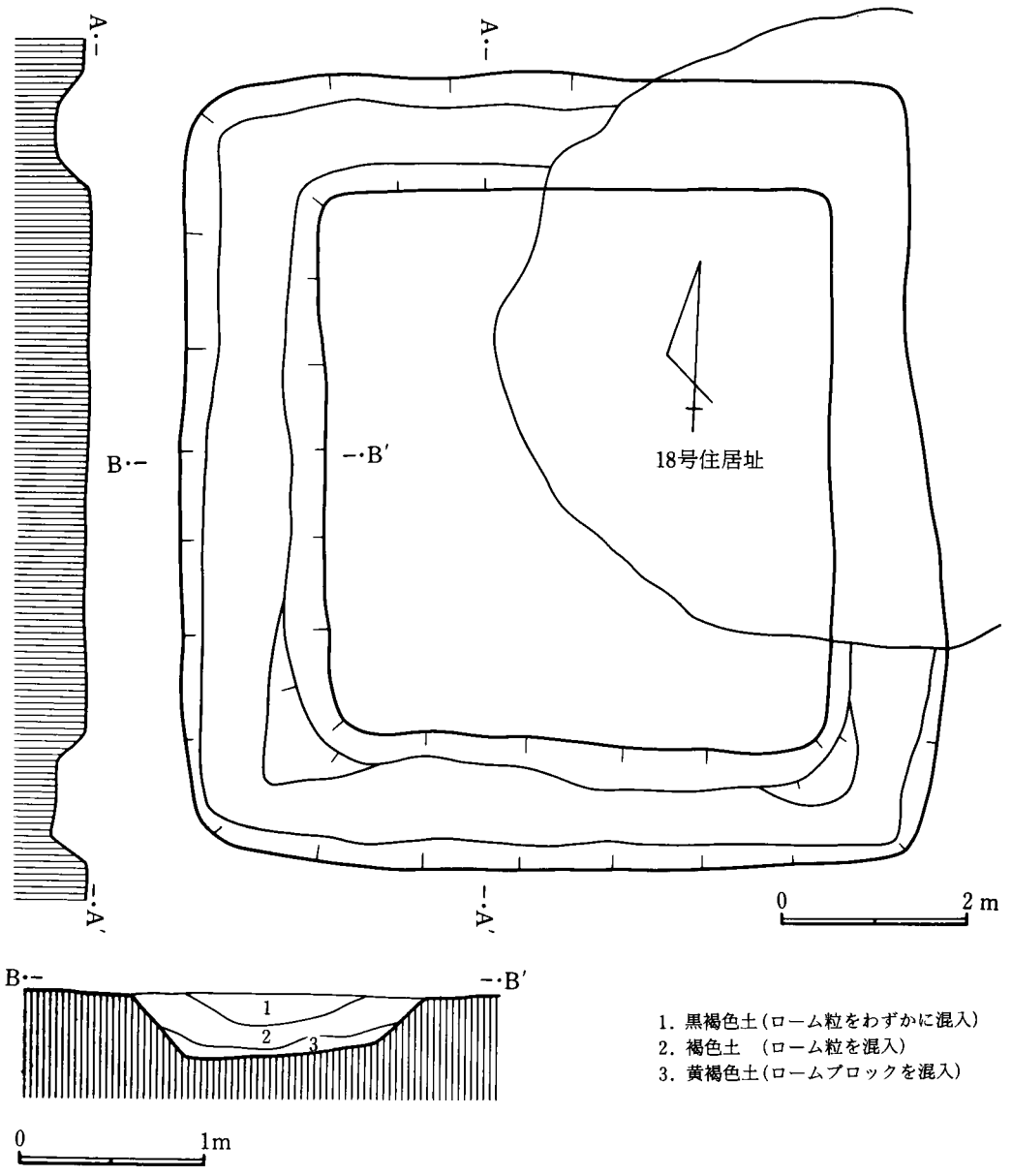
遺物はごく僅かで，いずれも土師器破片であり，覆土中に散在している。図示できるものはない。



第113図　3号址実測図

17号址（第114図）

本址は1号墳の南に位置する。18号住居址と東側で重複している。新旧関係は，遺構確認面での精査及び土層断面の検討により，本址のほうが18号住居址より新しいことが確認されている。平面形は各隅が丸みを帯びるがほぼ方形を呈する。規模は中軸線上で南北8.5m，東西7.8mを測る。中軸方位はN－3°—Wを指す。周溝は全周している。東溝の幅が他に比べやや狭くなっている。溝底は緩やかな起伏があるが，ほぼ平坦といえる。東南隅及び西南隅の内周側底面は，コーナーに沿ってやや盛り上っておりテラス状になっている。壁の立ち上がりは全体に緩やかである。



第114図　17号址実測図

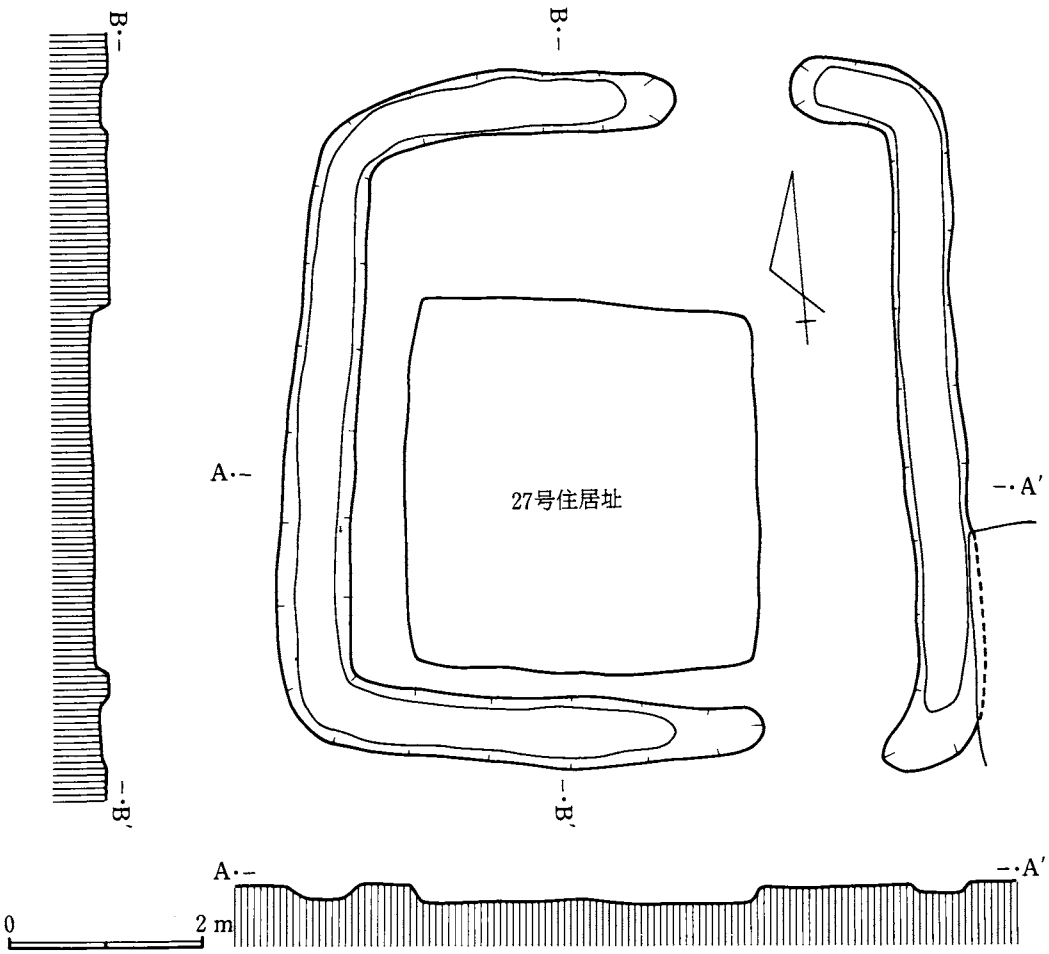
断面は逆台形状を呈する。北溝は幅 1.2～1.3 m，深さ 24～35 cm，東溝は幅 0.9～1.2 m，深さ 21～24 cm，南溝は幅 1.2～1.5 m，深さ 33～35 cm，西溝は幅 1.4～1.6 m，深さ 27～31 cm を測る。主体部と考えられる遺構は検出されていない。覆土は東溝で 2 層，その他では 1～3 層に区分された。黒褐色土，褐色土，黄褐色土が主体であり，すべて流れ込みによる堆積状態を示している。

遺物は僅かしか出土していない。すべて土器小破片であり，覆土中に散在していた。図示でき

る遺物はない。

29 号址（第 115 図）

本址は 34 号址の北東約 1 mに近接しており，32 号址から南東約 5 mの距離に位置する。南東側は 31 号住居址と重複している。本址との新旧関係は，遺構確認面での精査，土層断面の観察において検討を重ねたが，明確な判断はできなかった。また，周溝内側平坦面には 27 号住居址が存在している。なお，本址は上面を削平されている。平面形は，北溝と南溝の東寄りでとぎれて橋状部をなすが，全体としては方形を呈する。規模は中軸線上で南北 7.2 m，東西 7.2 mを測る。中軸方位はN－7.5°－Eを指す。周溝は，北溝と南溝の東寄りで橋状部を有し東溝は独立している。ただ南溝の橋状部に関しては，周溝のとぎれた部分の状態が北溝ほど明確でなく，またこの部分が削平されていることを考慮すれば，本来東溝と南溝とが連続していた可能性も考えられる。周溝の幅は全体に大きな差がない。溝底は軟質でほぼ平坦である。壁の立ち上がりは緩やかである。



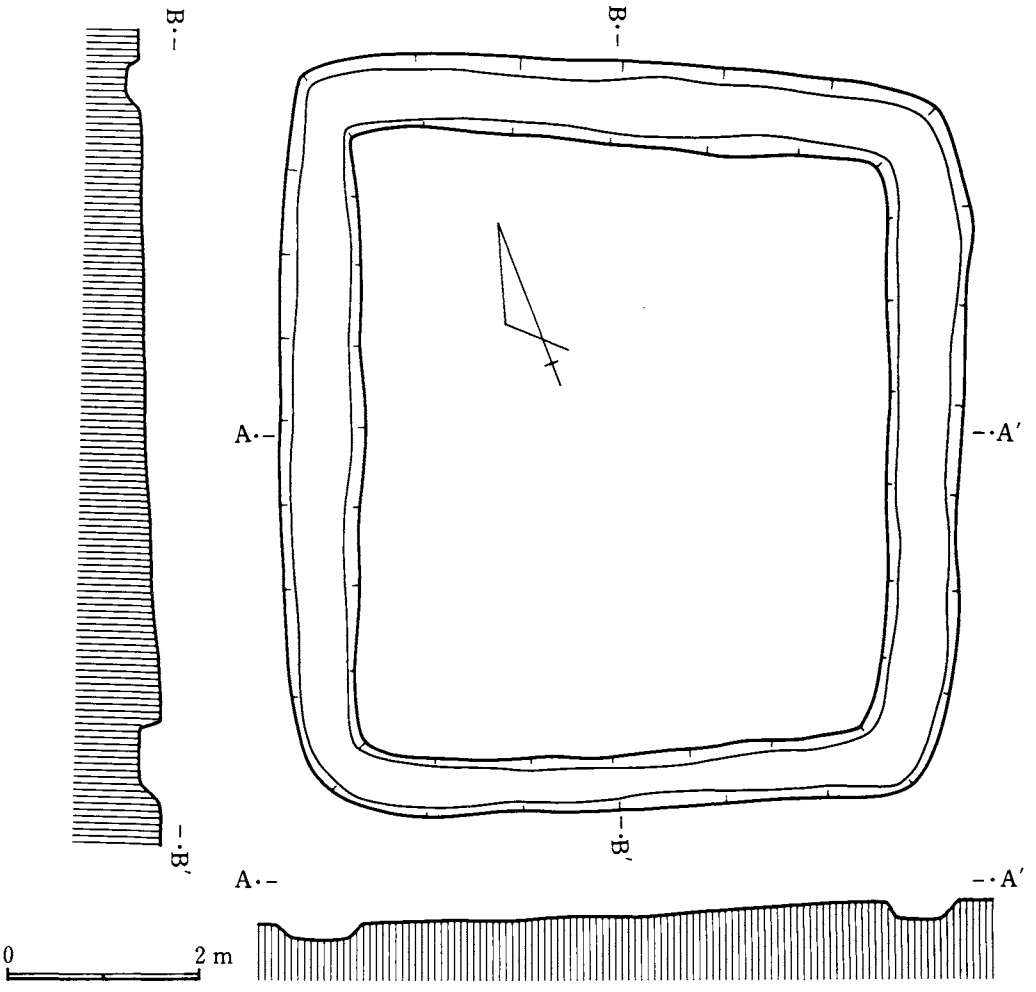
第115図　29 号址実測図

橋状部から西側の周溝は幅 48～77 cm，深さ 9～14 cm，東溝は幅 58～67 cm，深さ 8～13 cm を測る。なお，橋状部の幅は北側が 1.2 m，南側が 1.3 mを測る。方体部（周溝内側平坦面）には主体部と考えられる遺構は検出されなかった。覆土は各溝とも黒褐色土の単層である。ローム粒子を含んでいる。

本址から出土した遺物は，縄文式土器，土師器の破片が 20 点ほどである。縄文式土器は中期の加曽利E式がほとんどで，土師器は五領・和泉期の小破片と思われる。いづれも溝内覆土上層から検出され，本址に伴うものではない。

32 号址（第 116 図）

本址は 2 号墳の南に位置する。17 号址から南西に約 13 m，38 号址から東に約 18 mの距離にある。南東隅で 28 号住居址に接している。平面形は方形を呈する。各隅が丸みを帯び，辺はやや内外に歪みがみられる。規模は中軸線上で南北 7.6 m，東西 7.1 mを測る。中軸方位はN－21°－E



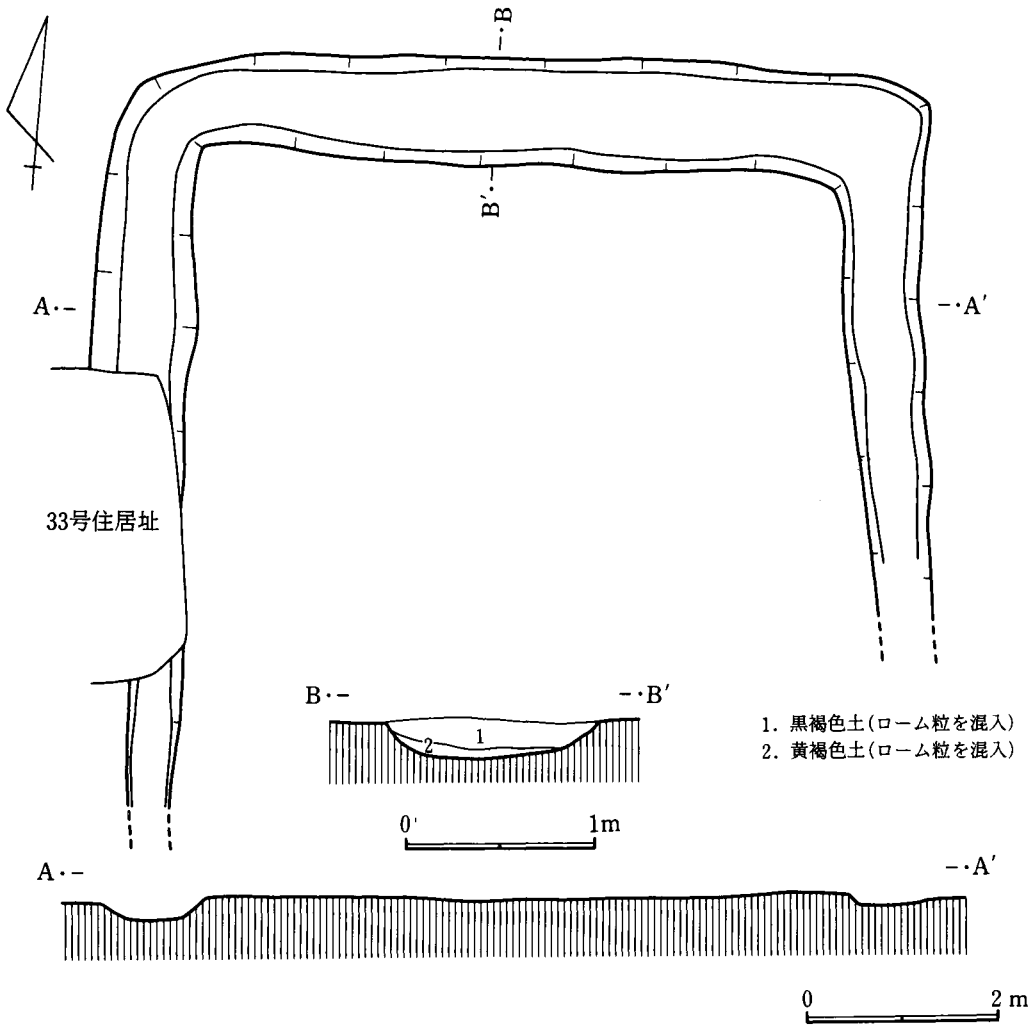
第116図　32号址実測図

を指す。周溝は全周している。溝幅は一定しておらず，南溝および南西隅と北西隅で狭くなっている。溝底はめだった起伏はなく，ほぼ平坦である。壁の立ち上がりは全体に緩やかである。断面は逆台形状を呈する。北溝は幅 0.8～0.9 m，深さ 12～21 cm，東溝は幅 0.7～0.9 m，深さ 10～19 cm，南溝は幅 0.5～0.6 m，深さ 10～13 cm，西溝は幅 0.6～0.9 m，深さ 10～16 cm を測る。周溝内側平坦面は南西側に傾斜している。主体部は入念に精査を行なったが検出されなかった。覆土は各溝とも 2 層に区分された。黒褐色土，黄褐色土が主体である。すべて流れ込みによる堆積状態を示している。

遺物は僅かである。すべて土器細片で，覆土中に散在している。図示できる遺物はない。

34 号址（第 117 図）

本址は台地の南側，7 号墳の東約 8 mに位置する。32 号址からの距離は南東に約 8 mである。



第117図　34号址実測図

西溝で33号住居址と重複している。南側は削平されているため全体の形状は不明確である。平面形は残存部分から方形を呈するものと考えられる。規模は東西8.8mを測る。おそらく南北長も8～9m程になるであろう。中軸方位はN－4°－Wを指す。周溝は東溝の南側から南溝にかけて削平されているため，全周するかどうか不明である。溝底はほぼ平坦で全体に軟質である。断面は逆台形状を呈する。北溝は幅0.9～1.2m，深さ18～22cm，東溝は幅0.6～0.8m，深さ10～22cm，西溝は幅0.4～0.9m，深さ5～21cmを測る。主体部と考えられる遺構は検出されていない。覆土は2層に区分された。黒褐色土，黄褐色土が主体である。ともにローム粒を含み，外側から流れ込んだ状態で堆積していた。

遺物はきわめて僅かである。すべて土器細片で時期決定の資料となるものは出土していない。

38号址（第118図）（第123図1～3）（第36図62）

本址は2号墳と6号墳のほぼ中間に位置する。北側の上面を重機によって削平されていた。平面形は北，南辺が内側にわずかに内湾するが，整った方形を呈する。各コーナーとも丸みを帯びる。規模は中軸線上で南北11.7m，東西11.8mを測る。中軸方位はN－18.5°－Eを指す。周溝は全周する。外側の掘り方は底面から急傾斜をなすが，内側は概して緩やかで，垂直に近いコーナー部では特に溝底への張り出しが大きい。溝底は起伏が少なくほぼ平坦である。断面は逆台形を呈する。北溝は幅1.0～1.5m，深さ26～49cm，東溝は幅1.2～1.5m，深さ52～57cm，南溝は幅1.4～1.7m，深さ39～65cm，西溝は幅1.4～1.5m，深さ39～50cmを測る。周溝内側の平坦面は主体部検出のため細密に精査を行なったが，何ら検出されなかった。また本址確認時においても周溝内側の部分について遺物の検出状況に注意を払ったが，縄文式土器，土師器の破片が散漫に出土したのみで，主体部の存在を確認するに足る遺物は検出されなかった。覆土は各溝とも1～3層に区分された。黒褐色土，褐色土，黄褐色土が主体である。いずれも流れ込みによる堆積状態を示している。

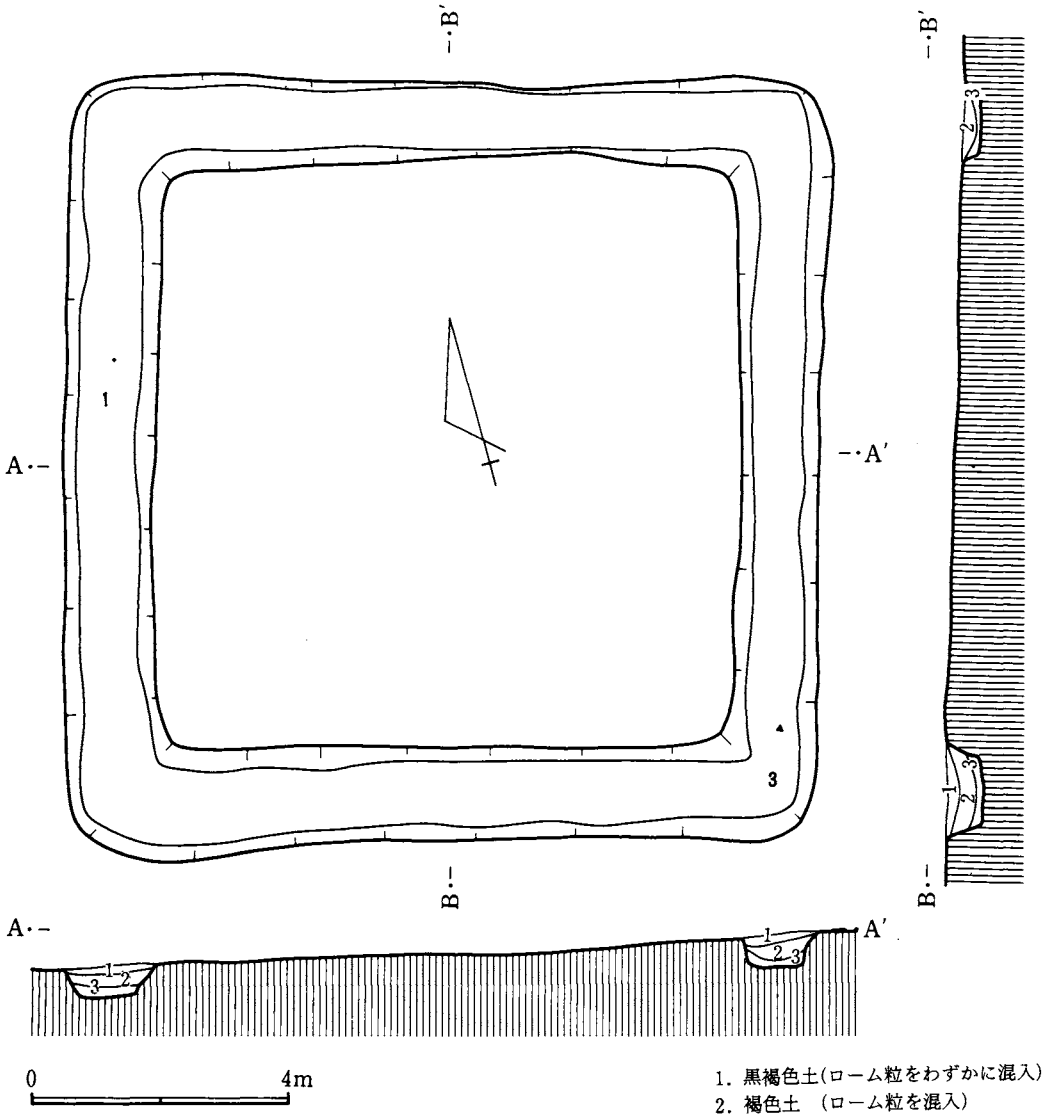
遺物は僅かである。すべて覆土中から出土している。北溝では器台形土器脚部破片，東溝では，ほぼ中央で土製勾玉及び南側で縄文時代の石皿，西溝の中央よりやや北側で高坏形土器の脚部が出土している。この他，縄文式土器細片も混在しており，本址に伴うと考えられる遺物は特に認められない。

遺物　本址での遺物は，図示した他に縄文式土器，土師器の破片が約100片ほど出土している。図示した4点の遺物も本址に伴うものではない。おそらく混入品となろう。

1は小形の台付甕であろう。2は器台であり，脚部には3孔がかろうじて認められる。3は土製の勾玉である。第36図62は縄文時代の石皿の破片で，石材は安山岩。もちろん混入品であろう。

40号址（第119図）（第123図4～7）

本址は遺跡の南西端で，6号墳の南約8mに位置する。遺構検出面はソフトローム層上面である。表土層の観察では特に遺構上面の台状部は検出されなかった。台地は本址西及び南側の先で



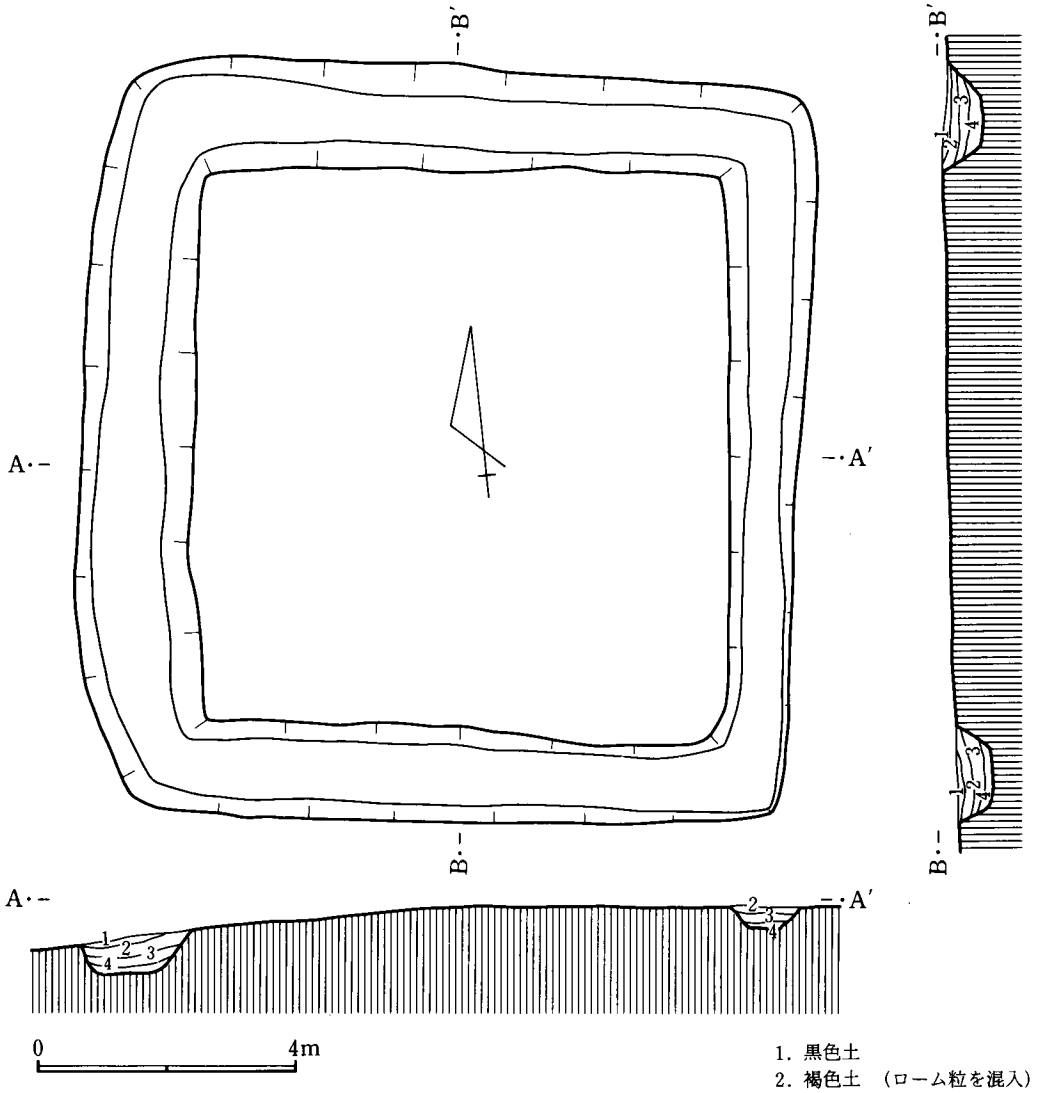
第118図　38号址実測図

谷津に向って急傾斜で入谷津に向っている。平面形は西辺が外側に張りをもち，他は直線的につながる方形を呈する。規模は中軸線上で南北 11.7 m，東西 11.2 mを測る。中軸方位はN－7°－Eを指す。周溝は全周する。周溝幅は西溝の張り出している部分が幅広くふくらみをもつ。また東南隅にかけて幅がせまくなっている。溝底は部分的に緩やかな起伏が認められるがほぼ平坦である。断面は逆台形状を呈する。北溝は幅 1.4～1.8 m，深さ 53～60 m，東溝は幅 0.9～1.4 m，深さ 31～54 cm，南溝は幅 1.2～1.5 m，深さ 32～52 cm，西溝は幅 1.6～1.9 m，深さ 53～67 cmを測る。覆土は各溝とも 1 ～ 4 層に区分された。黒色土，黒褐色土，黄褐色土が主体である。すべて流れ込みによる堆積状態を示している。

遺物はごく僅かである。覆土上層で散漫な出土状況である。北溝ではミニチュア土器，東溝では土錘2点，西溝では甕形土器底部が出土している。

遺物　図示できた遺物は4点となる。他に溝内から縄文，弥生，土師，須恵器等の出土が認められ，それらは50片を越える。しかし，直接本址に伴うと考えられる遺物は検出できなかった。

4はミニチュア品で，口縁の一部を欠損する。口縁部は横ナデ，胴部から底部にかけてはヘラ削りにより整形され，色調は淡暗褐色を呈す。5は甕の底部となろう。雑なヘラ削りが認められる。6，7は円筒形の土錘であり，ともに若干欠損している。



第119図　40号址実測図

41号址（第120図）（第123図8～13）

本址は4号墳の南西，西側に入り込む小谷津に向う緩やかな傾斜面に位置しており，49号住居址と北側で重複している。新旧関係は遺構確認面の精査により，本址が49号住居址より新しいことが確認されている。平面形は西辺が東辺に比べやや長さの短い方形を呈する。各辺は直線的で整っている。規模は溝幅を含めた中軸線上で南北13.9 m，東西14.4 mを測る。中軸方位はN—23°—Eを指す。周溝は全周する。各溝とも幅に大きな差がない。底面はハードローム層に達しており，北溝のほぼ中央部でやや落ち込んだ箇所が認められたが，全体に堅く平坦である。溝の断面は「U」字形，逆台形状を呈しており，しっかりとした掘り方である。北溝は幅1.5～1.7 m，深さ65～95 cm，東溝は幅1.5×1.8 m，深さ74～82 cm，南溝は幅1.7×2.1 m，深さ62～76 cm，西溝は幅1.5×1.6 m，深さ57～65 cmを測る。溝内の覆土は各溝とも1～4層に区分され，黒褐色土，暗褐色土，褐色土，明褐色土が主体である。また堆積状態に差異は認められず，流れ込みによる堆積を示している。

遺物はほとんどが覆土上層からの出土で量的にも少ない。縄文式土器，土師器，須恵器大甕の口縁部などが混入していた。

溝内および方体部からは積極的に主体部と考えられる遺構は検出されなかった。ただ，方体部中央よりやや東側で土坑一基が検出されている。平面形はやや歪んだ楕円形を呈する。径1.6×2.3 m，深さ43～60 cmを測る。掘り込みは整った掘り方ではなく，壁の立ち上がりは緩やかな箇所と垂直に近い箇所がある。底面も平坦でなくかなり高低差がある。覆土は1～4層に区分された。暗褐色土，明褐色土，黄褐色土から成る。流れ込みによる堆積状態を示している。

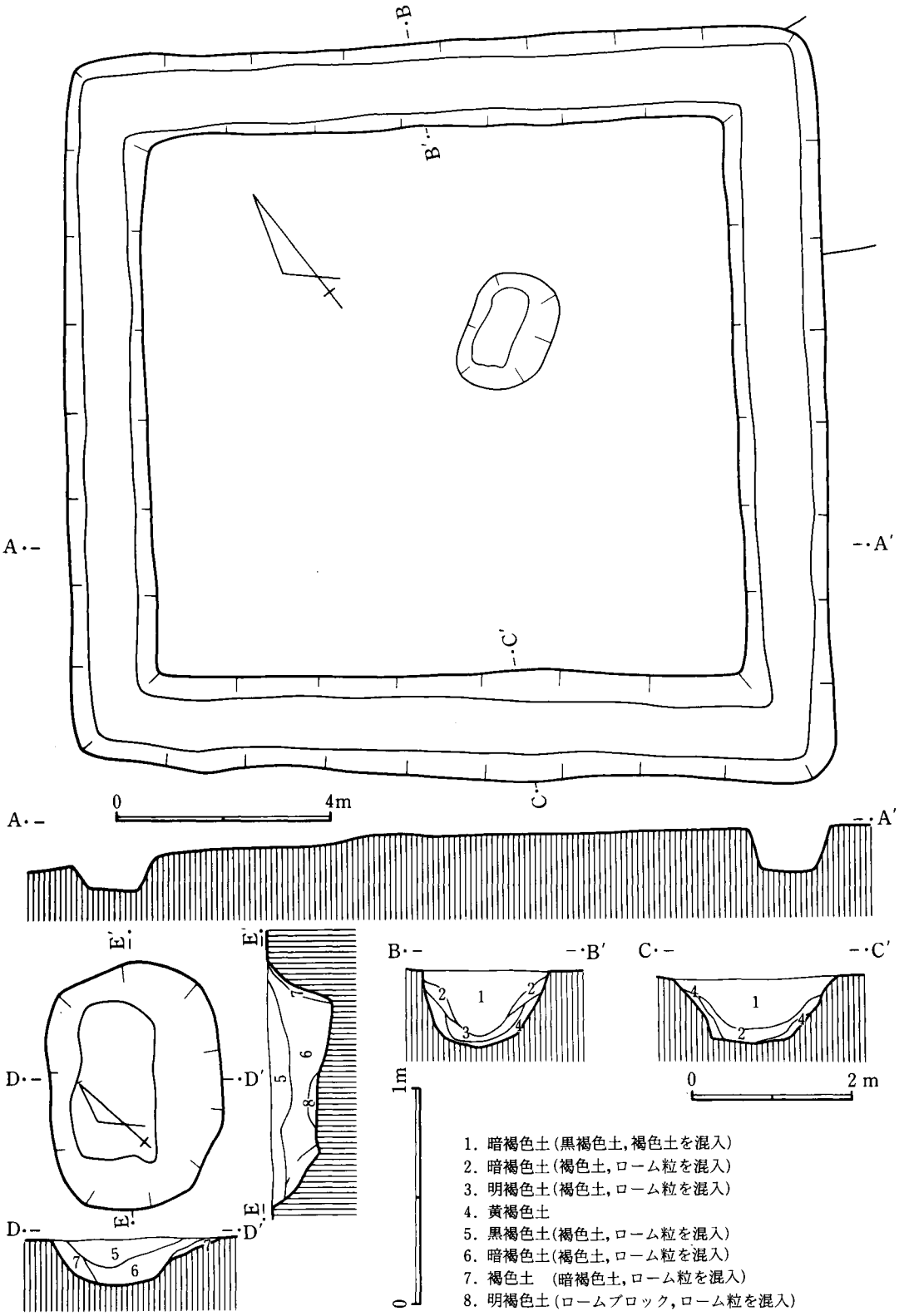
遺物は覆土上層から土器片7点が出土している。甕形土器底部，深鉢形土器底部などである。出土状況から本址に伴うものではないと考えられる。

遺物　本址も溝内から多量の遺物が検出されている。その数は200片を越えるほどとなるがすべて流れ込みによるものであろう。その中でも主な土器6点を図示した。

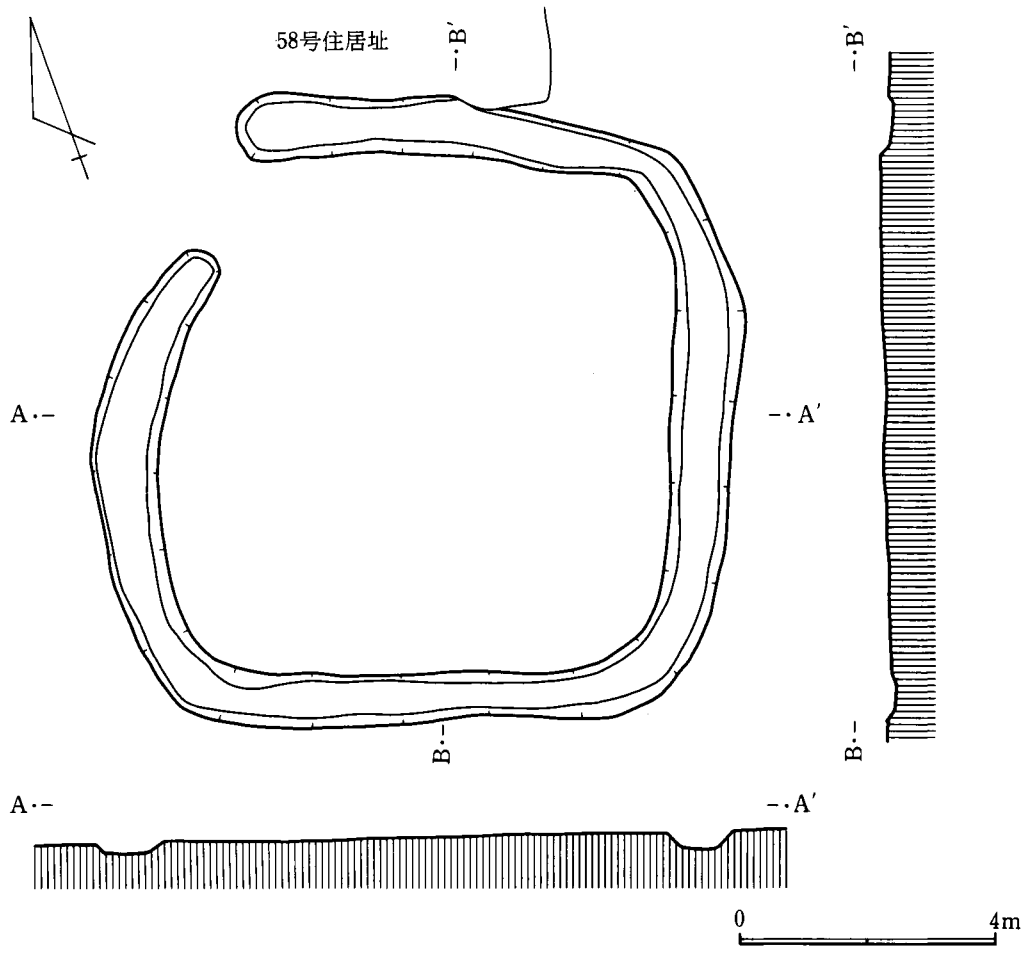
8は小形の壺で胴部以下を欠損する。器面は調整により滑らかな仕上げとなっている。色調は赤褐色を呈す。9は小形の甕となろう。図示の⅔ほどの遺存である。口唇部に刻目を伴う。内面には輪積痕が残る。色調は褐色となる。10は高坏である。坏部の一部と脚部が遺存する。赤彩の痕跡らしきものは認められるがはっきりしない。12，13は壺あるいは甕の底部であり，土坑内から出土しているため図示した。11は須恵器の大甕となろう。口縁内面には自然釉がかかっている。色調は青灰色を呈す。

57号址（第121図）

本址は遺跡のほぼ中央に位置する。2号墳の墳丘下より検出された。2号墳の墳丘断面の観察により，本址の掘り込みは墳丘下の旧表中からなされていることが確認されたが，旧表土面での遺構検出は残念ながらできなかった。また北側で58号住居址を重複しており本址のほうが新しい



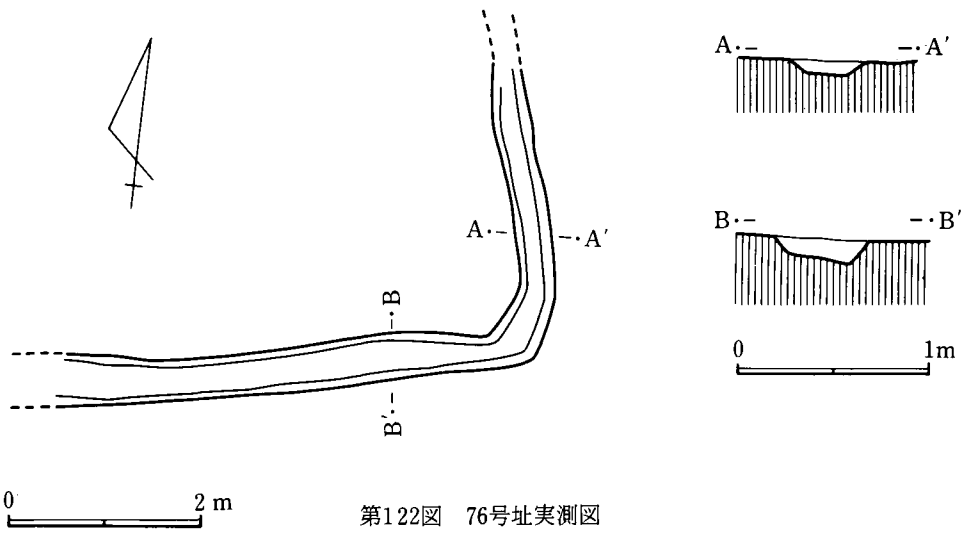
第120図　41号址実測図



第121図　57号址実測図

ことが確認されている。平面形は西溝が内側に湾曲し，各隅が丸みを帯びる隅丸方形を呈する。北西側で溝がとぎれて橋状部を設けている。規模は中軸線上で南北 9.7 m，東西 10.1 mを測る。中軸方位はN—21°—Eを指す。周溝は，北西側で橋状部を有するため全周していない。橋状部の幅は北溝と西溝の間で 1.7 mを測る。周溝の幅に大きな差は認められない。立ち上がりは不明確ではあるが，比較的緩やかである。溝底はほぼ平坦である。断面は逆台形状を呈する。南溝の東寄りで溝底よりピットが 2 か所より検出されているが，特に本址との関連は考えられない。北溝は幅 0.6～1.0 m，深さ 16～23 cm，東溝は幅 0.9～1.1 m，深さ 17～23 cm，南溝は幅 0.7～0.9 m，深さ 12～17 cm，西溝は幅 0.8～1.0 m，深さ 12～14 cm を測る。覆土は各溝とも褐色が主体であり，特に区分できなかった。

遺物は溝中から出土せず，上部で完形品が数点検出された。これらは 2 号墳との関連で把えられ，直接本址に係わる遺物とは考えられなかった。



第122図　76号址実測図

76号址（第122図）

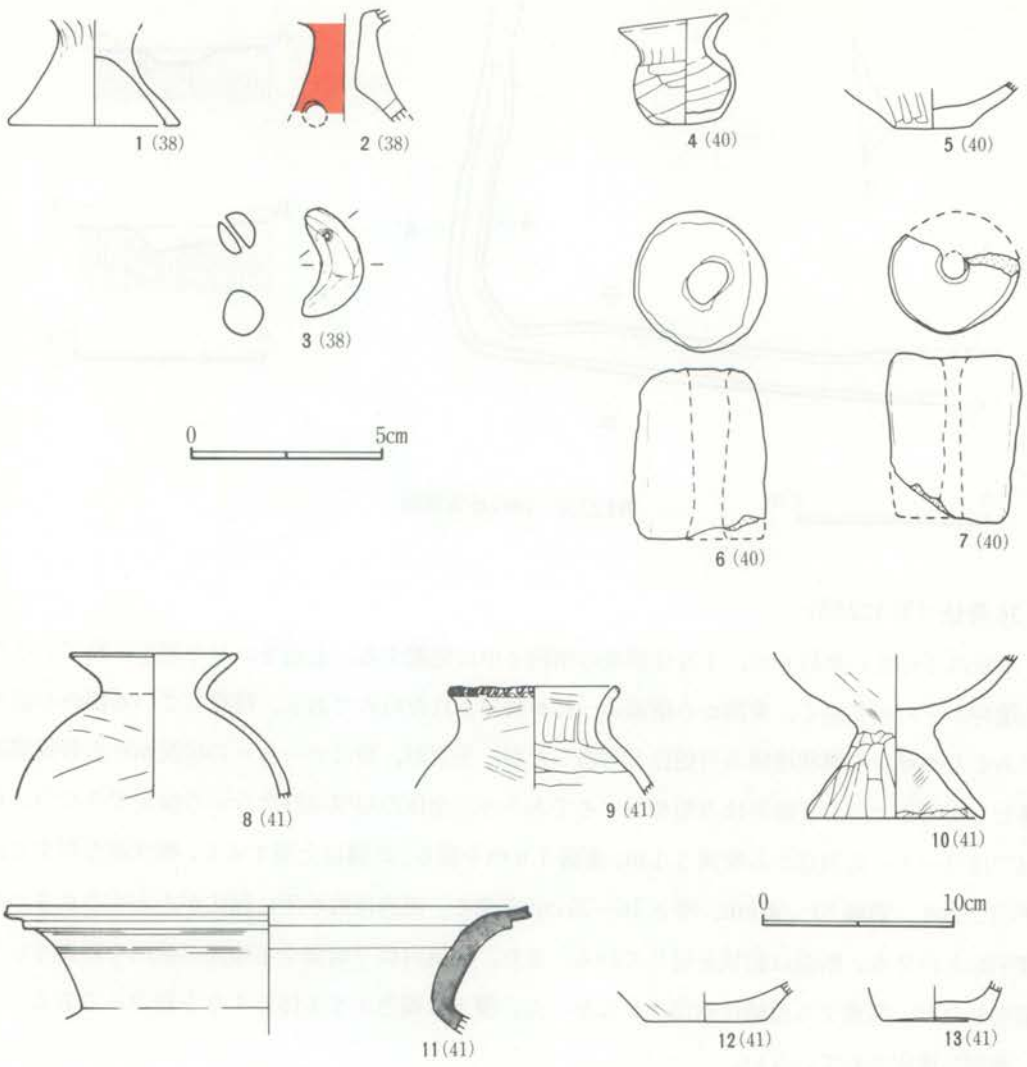
本址は3号址の東約6m，1号住居址の南約2mに位置する。上面をかなり削平されているため遺存がきわめて悪く，東溝から南溝の一部が検出されたのみである。残存している部分が僅かであるため単なる溝状遺構の可能性も考慮したが，平面形，特にコーナーの状況から方形周溝遺構として考えたい。平面形は方形を呈するであろう。全体の規模は残念ながら推定できない。現況ではコーナーの頂点から東溝3.1m，南溝5.0mを測る。周溝は全周するか，橋状部を有するか不明である。溝幅33～56cm，深さ16～25cmを測る。溝底は数か所に起伏がみとめられるがほぼ平坦といえる。断面は皿状を呈している。また，周溝内側平坦面を主体部の検出を前提として精査したが，関連する遺構は検出されなかった。覆土は褐色土を主体とする1層のみである。

遺物は検出されていない。

3．ピット群

77号址（第124図）

3号址と5号址の間で検出されたピット群である。検出面はソフトローム上面であるが，掘削用重機によって表土層はすべて削平されていた。検出されたピットは5個である。ピットは，P1，P2，P4，P5がほぼ等間隔で長方形状に並んでおり，その外側にP3が位置するような配置である。ピット間の距離は，P1～P2間1.9m，P2～P4間2.9m，P4～P5間1.8m，P5～P1間2.9mを測る。また各ピットの規模は，P1一径46cm，深さ42cm，P2一径46cm，深さ42cm，P3一径34cm，深さ38cm，P4一径34cm，深さ48cm，P5一径30cm，深さ36cmを測る。覆土はそれぞれ暗褐色土の単一層である。このような各ピットの関係から住居址の存在を考慮して周囲の精査を行なったが，床面，壁溝，および炉址等関連する遺構は検出されなかった。また遺物の出土もみていない。

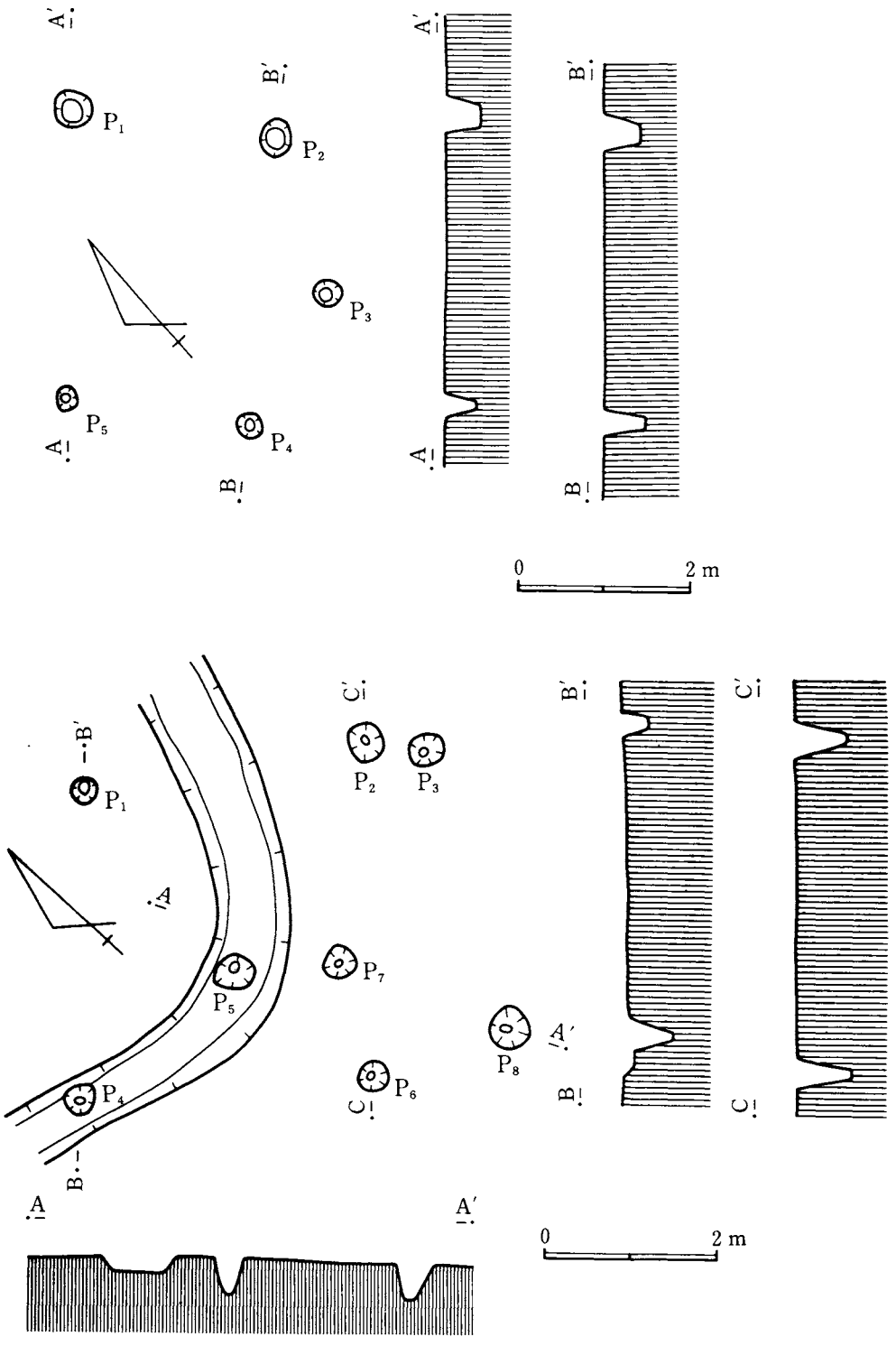


第123図　38・40・41号址出土遺物実測図

89号址（第124図）

2号墳墳丘下，ソフトローム上面で検出されたピット群である。57号址の南隅に位置しており，一部周溝にかかっているが両者の関係は不明である。8個のピットから構成されているが，相互の関連性は認め難く付近に住居址の床面と考えられる痕跡も確認されなかった。このため本ピット群の性格等も不明と言わざるを得ない。各ピットの径および深さは以下の通りである。P1—径29cm，深さ31cm，P2—径42cm，深さ60cm，P3—径42cm，深さ34cm，P4—径39cm，深さ53cm，P5—径45cm，深さ77cm，P6—径35cm，深さ53cm，P7—径36cm，深さ50cm，P8—径45cm，深さ37cm。

遺物は出土していない。



第124図　77(上) ・ 89(下)号址実測図

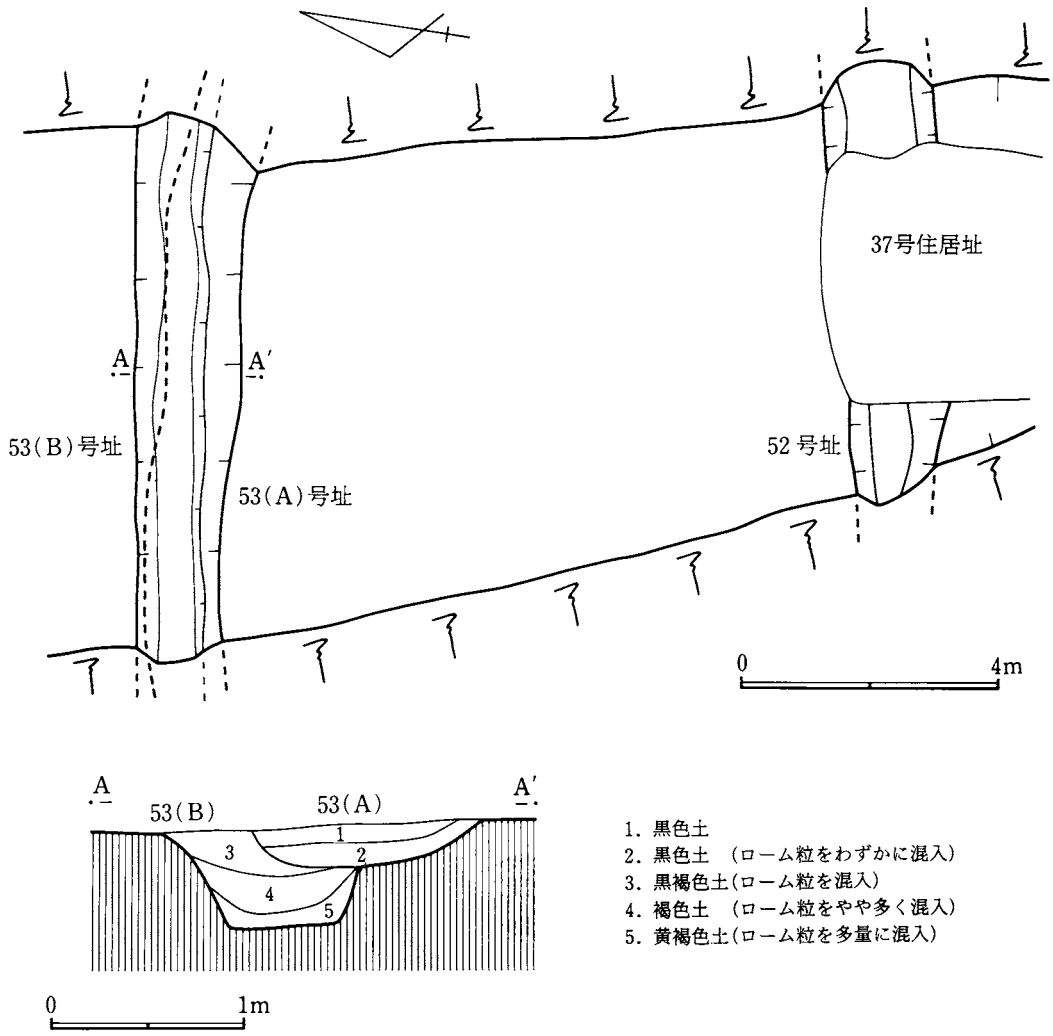
4．溝状遺構

52号址（第125図）

37号住居址と重複している。新旧関係は，土層断面から37号住居址の方が本址より新しいことが明らかとなっている。規模は幅1.1～1.7m，深さ51～56cmを測る。底面はやや起伏が認められるがほぼ平坦である。断面は逆台形状を呈する。なお，53号址と本址の規模，掘り方にかなり共通性が認められることからあるいは，両者が方形周溝遺構の残存したものである可能性も考えられよう。覆土は3層に区分された。黒褐色土，褐色土，黄褐色土が主体である。

53号址（第125図）

検出時は1条のみの遺構と考えられたが，精査が進むにつれ2条が上下に重複していることが確認された。上を53（A）号址，下を53（B）号址とする。53（A）号址は重複する北側が不明



第125図　52・53（A）・53（B）号址実測図

確であったが，土層断面の観察により53（B）号址より新しいことが確認された。幅 1.2 m 前後，深さ 19～22 cm を測る。断面は皿状を呈する。覆土は2層に区分された。黒色土，およびローム粒を含む黒色土である。53（B）号址は，53（A）号址に比べ掘り込みが深く整った掘り方である。幅は推定だが 1.1 m 前後となるであろう。深さ 52 cm を測る。底面は堅く平坦である。断面は逆台形状を呈する。遺物は，縄文式土器と土師器が数十片出土しただけである。

5．土　　坑

5号址（第126図）

遺跡の北側，50号住居址と76号址との中間に位置する。平面形はやや歪んだ長楕円形を呈する。規模は1.2×2.2 mを測る。長軸方位はN－84°－Eを指す。底面は若干の起伏があるが，ほぼ平坦で堅緻である。壁は緩やかに立ち上がり深さ 24～28 cm を測る。覆土は3層に区分された。黒褐色土，暗褐色土，黄褐色土が主体である。遺物は出土しなかった。

6号址（第126図）

4号墳周溝の東側で75号址の南西約1.5 mの距離に位置する。平面形は東壁が歪んだ長楕円形を呈する。規模は1.5×2.7 mを測る。長軸方位はN－38°－Eを指す。底面は全体に北東側に傾斜しており起伏がある。立ち上がりは北から東壁にかけて緩やかである。深さ 20～31 cm を測る。覆土は3層に区分された。黒褐色土，暗褐色土，黄褐色土であり，流れ込みによる堆積であろう。

7号址（第126図）

4号墳周溝の南東，6号址から南へ約13 mの距離に位置する。平面形は東壁にやや張りをもつ楕円形を呈する。規模は1.8×2.7 mを測る。長軸方位はN－30.5°－Eを指す。底面はやや起伏があるがほぼ平坦である。立ち上がりは北側を除いて緩やかである。深さ 47～53 cm を測る。覆土は3層に区分された。黒褐色土，褐色土，黄褐色土が主体を占める。すべて流れ込みによる堆積であろう。遺物は，6号址同様皆無であった。

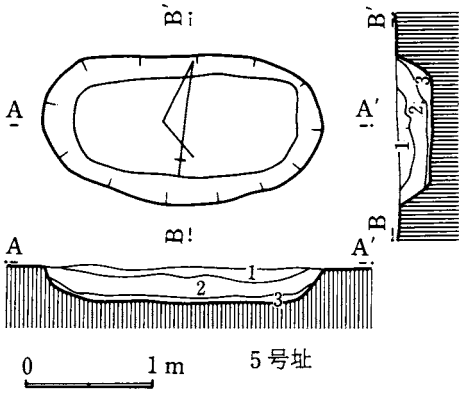
56号址（第126図）

遺跡南側の住居址群中に位置する。21号住居址と重複しており，西側を一部欠いている。新旧関係は本址のほうが古いことが明らかである。平面形はほぼ円形を呈すると思われる。規模は径3.4 mを測る。底面は平坦であるが軟質である。検出面から底面までは浅く 11～13 cm を測る。

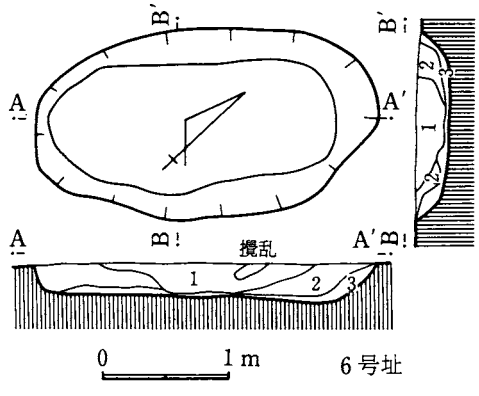
遺物は，縄文式土器の破片が若干出土しているにすぎない。

75号址（第126図）

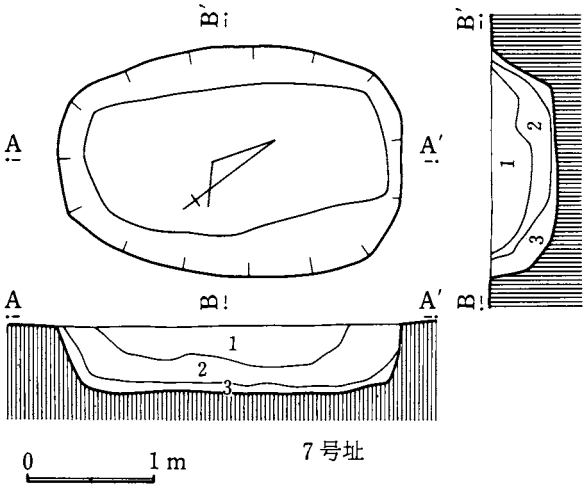
4号墳周溝の北東に位置しており，5号址から南東へ約6 mの距離にある。平面形は北側で張りをもつ長楕円形を呈する。規模は1.0×1.9 mを測る。長軸方位はN－38°－Wを指す。底面は北側へ斜めになっており全体に軟質である。立ち上がりは短軸側では垂直に近いが長軸側は緩やかとなる。特に北側は弓なりになっている。深さ 35～49 cm を測る。覆土は4層に区分された。遺物は検出されなかった。



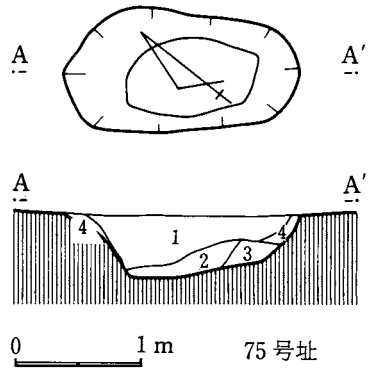
5号址



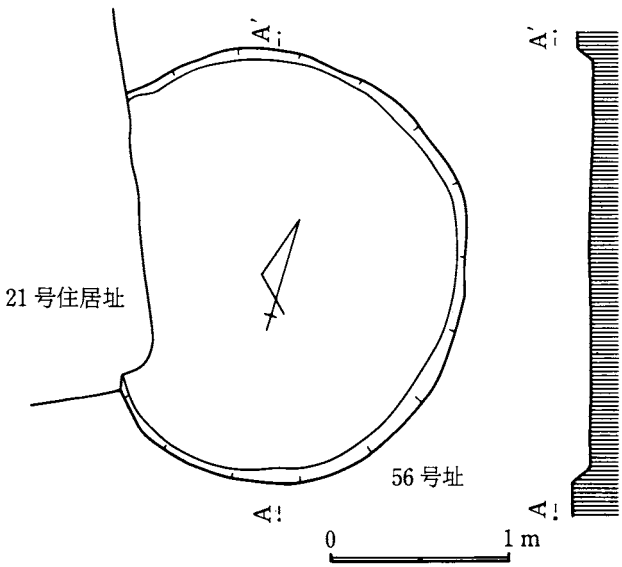
6号址



7号址



75号址



56号址

5号址 1. 黒褐色土(褐色土を若干混入)
2. 暗褐色土(褐色土,若干の焼土を混入)
3. 黄褐色土(褐色土を混入)

6号址 1. 黒褐色土(褐色土を若干混入)
2. 暗褐色土(黄褐色土粒を若干混入)
3. 黄褐色土(褐色土を混入)

7号址 1. 黒褐色土(褐色土,若干の焼土を混入)
2. 褐色土 (黒褐色土,若干の焼土を混入)
3. 黄褐色土(褐色土を混入)

75号址 1. 黒褐色土(褐色土を混入)
2. 暗褐色土(ローム小ブロックを混入)
3. 黄褐色土(褐色土を混入)
4. 暗褐色土(ローム粒,褐色土を若干混入)

第126図　5・6・7・56・75号址実測図

第3章　古　墳

古墳の調査

調査前の現地踏査では円墳2基の所在が確認されていたが，調査の進捗に伴い墳丘の削平された古墳を含めて8基の古墳が存在していることが明らかとなった。古墳はすべて円墳であり，舌状台地上に占地している。

各古墳の呼称は，調査順序に従って1号墳～8号墳とした。

1号墳

位置と現状

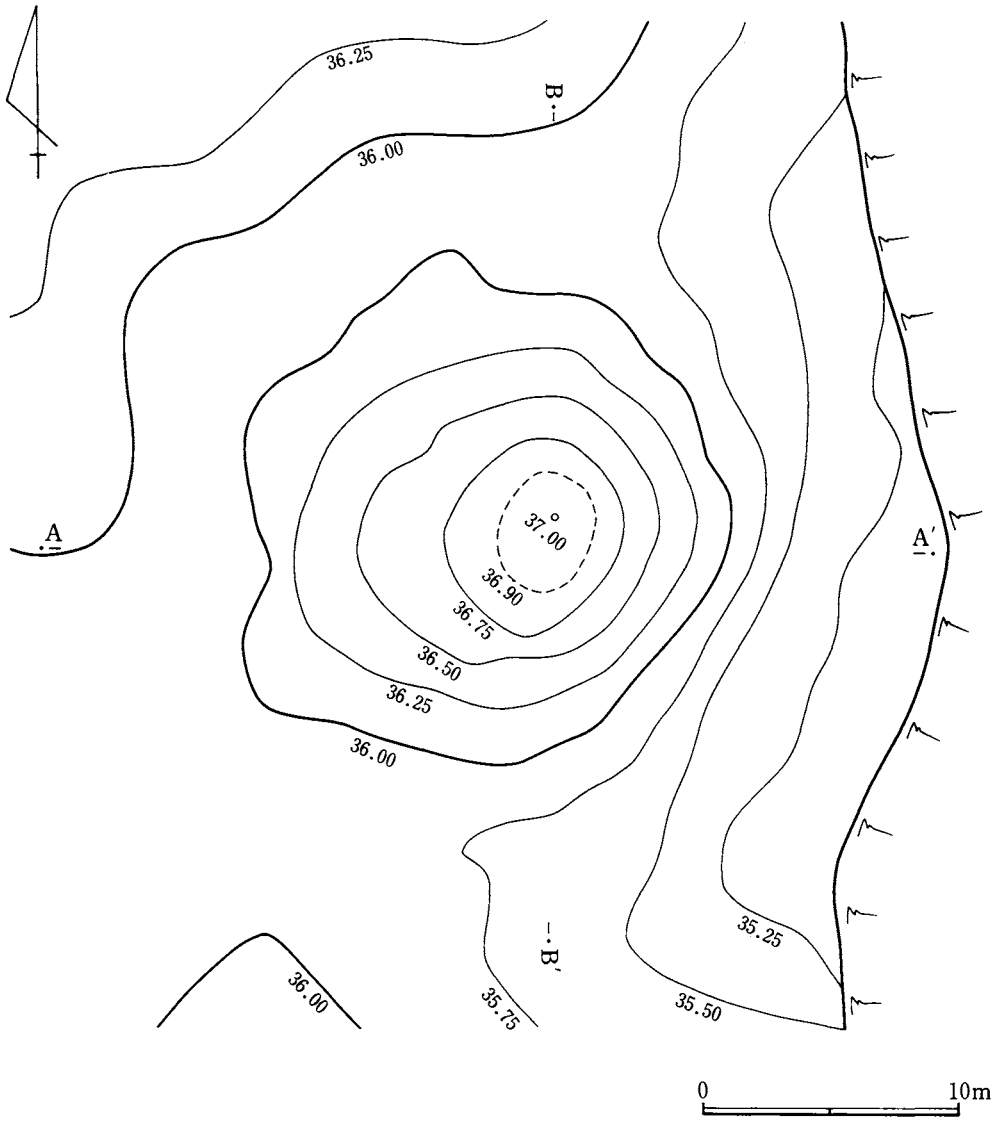
本墳は，台地のほぼ中央で，東側縁辺に位置する円墳である。調査前の現地踏査によって確認されたもので，本遺跡内では唯一墳丘が完存した古墳である。現状は雑草が繁茂していた。古墳の東側の台地縁辺は道路によって切断されていたが，墳丘の遺存状態は良好であった。

墳丘と周溝（第127～129図）

墳丘は旧表土層である黒色土層の上に構築されている。墳頂部での高さは，旧表土層上面から0.8 m とあまり高くない。旧表土は20 cm 前後の厚さで残存している。墳丘裾の周溝側では，旧表土層は削平されてソフトローム層が露呈しており，幅 3～5 m でテラスを形成している。封土は，ロームブロックを混入した土砂が主体であり，混入の度合によって全体に4層に区分できた。構築の方法は，旧表土層をある程度削平した後，一定の厚さで黒褐色土，およびロームブロック混入土を水平に置き，墳丘外側から順次盛土を行なっている。墳丘測量の結果，墳丘の外形は東西にやや歪みのある円形を呈していることが確認された。東側は台地の傾斜に沿って盛土を行っているため，外見では実際の高さより高い墳丘をもつようにみえる。墳丘構築の際には，盛土に必要な土砂の確保を含めて周辺をある程度整形して外見上高い墳丘をもつように見せる工夫がなされていたものと思われる。

周溝は全掘した。北側と西側でとぎれて橋状部を形成している。西側は，北側と南側から廻る幅の広い溝を一坦止め，外側に張り出す位置の幅の狭い溝を掘り込んでいる。そして，西側溝の内縁が北，南側溝の外縁を結ぶ線上に位置するようになり，西側溝内側の墳丘裾部に部分的な空間を造り出している。周溝の規模は北側溝が他に比べ大きく，幅 3.9～5.2 m，深さ 0.3 m～0.8 m を測る。北東側から南西側は，南西側で幅が広くなっている。幅 1.6～3.5 m，深さ 0.3～0.9 m を測る。西側溝は幅 0.8～1.5 m，深さ 0.2～0.3 m を測る。溝底面は緩やかな起伏があり，全体に軟質で丸底状を呈する。周溝内覆土は3層に区分された。上から黒褐色土，ローム粒を含む黒褐色土，ロームブロックを含む黄褐色土が堆積する。

遺物は，縄文土器片，土師器片，須恵器片が混在して出土している。西側溝の南寄り上面から須恵器大甕破片がまとまって出土したが，復原には至らなかった。



第127図　1号墳墳丘実測図

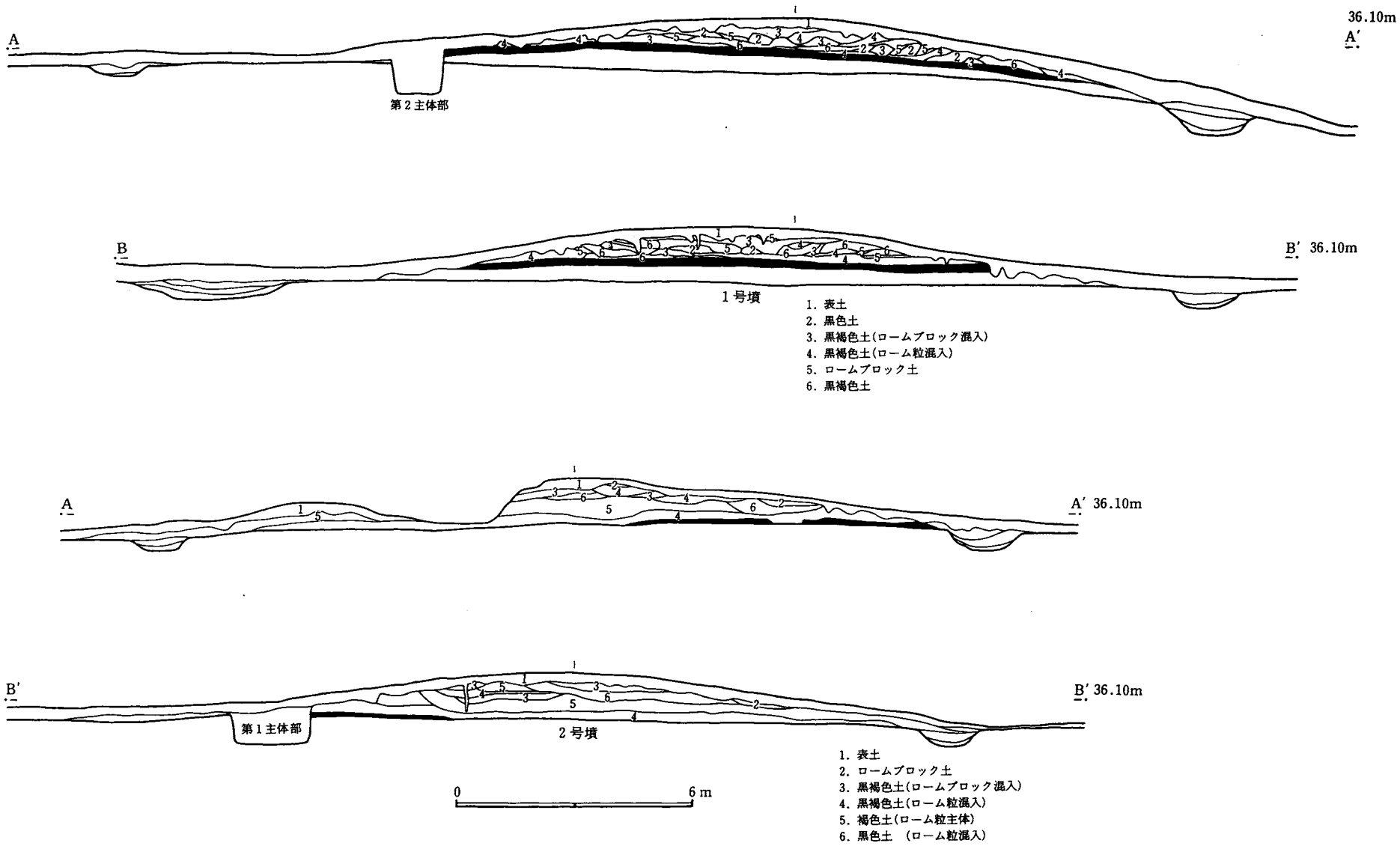
主体部

墳丘裾部，周溝内側に沿って3基の主体部が検出された。墳丘の中心より北西側，西側，南側に位置しており，それぞれ，第1，第2，第3主体部として調査を行なった。

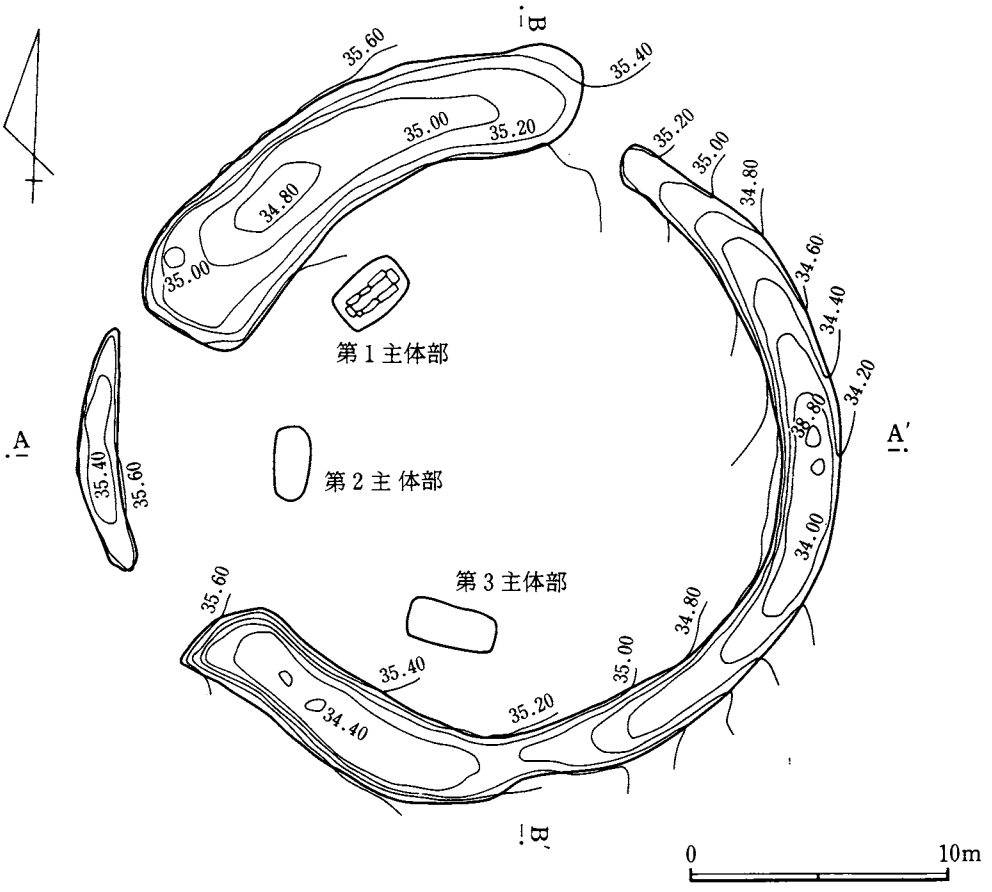
第1主体部（第130図）

墳丘の中心より北西側の裾部に位置する箱式石棺である。検出面は墳丘裾部の表土層直下である。石棺はローム層を掘り込んだ土坑内に埋置されている。

土坑の平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸3.0 m，短軸1.8 m，深さは検出面より54～67



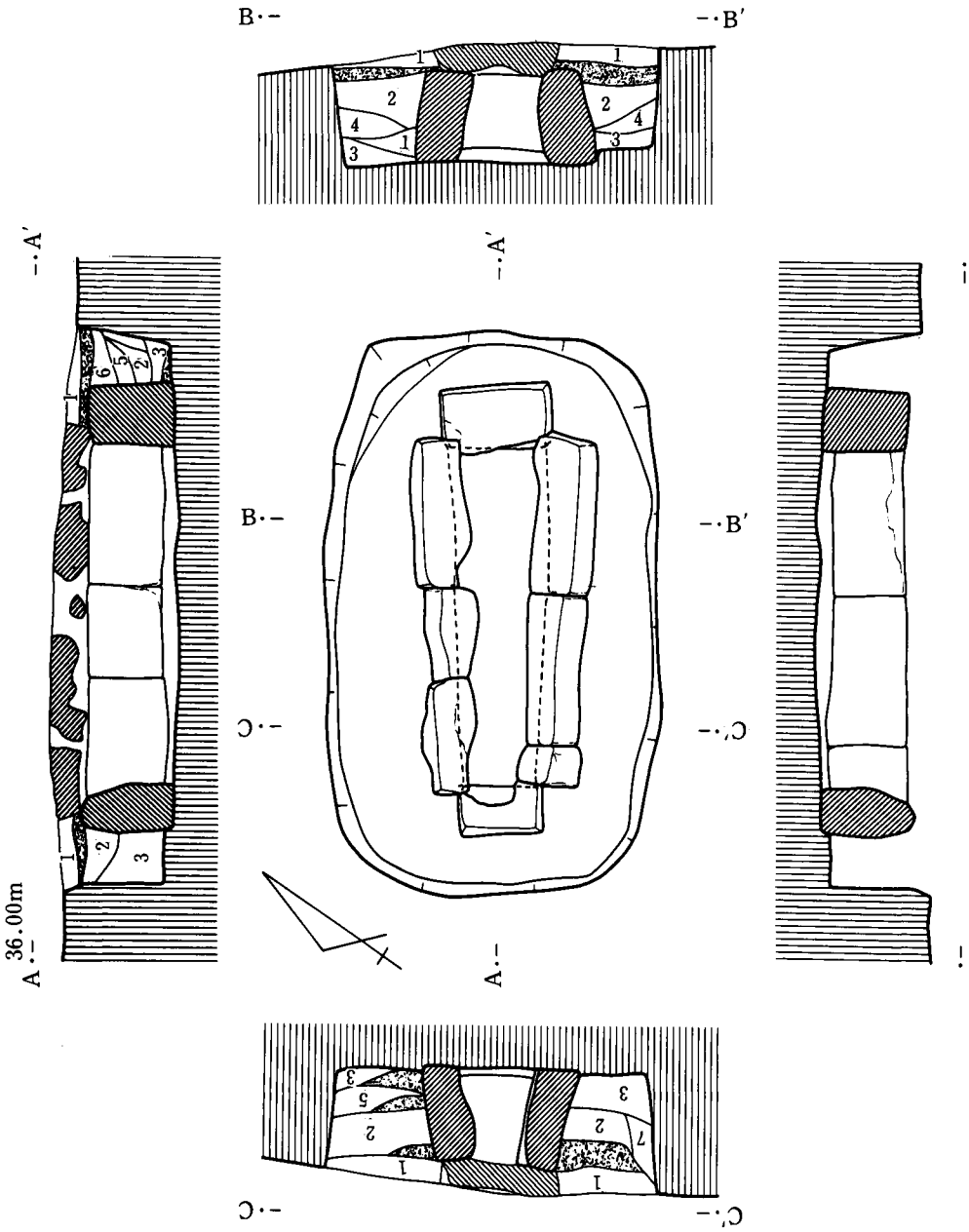
第128図　1・2号墳墳丘断面図



第129図　1号墳周溝実測図

cm を測る。主軸方位はN—56°—Wを指す。底面は堅緻である。石棺の埋置範囲が周囲より一段低く掘り込まれている。壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がる。

石棺は土坑の中央に構築されている。軟砂岩の截石を用いているが，全体に整形が悪く石材には凹凸が多い。石棺の規模は長さ 2.4 m，幅 0.8～1.0 m を測る。側壁は北，南壁共に 3 枚づつ置き，一段ですませている。両側壁共に截石を石室内側に傾けて置いている。北壁は東西の小口側に長めの截石を用い，その間に小形の截石を配している。南壁は西小口側に小形の截石を置き，東側は長めの截石を置く。截石の大きさは幅 20～28 cm，長さ 22～87 cm，高さ 38～40 cm を測る。小口は東西共 1 枚を置く。側壁間に狭まれており，接合部にわずかに切り込みが施される。截石の大きさは幅 44～60 cm，厚さ 25～34 cm，高さ 46～51 cm である。西小口は上辺が一部崩落している。蓋石は，遺存が悪く脆弱で元の形状をとどめていない。西小口部に接する部分で最も遺存がよく，厚さ 20 cm 程の板状の截石を蓋石として用いている。形状が明瞭でないため，全体に何枚の蓋石で構成されていたのかは不明であるが，断面の状態から 4 ～ 5 枚程度に分けて石



1. 黒褐色土(粘土混入)
2. 黒色土　(粘土ブロック混入)
3. 黒色土　(ローム粒混入)
4. 黒色土　(粘土ブロック少量混入)
5. 黒褐色土(ローム粒混入)
6. 黒褐色土(ロームブロック,粘土ブロック混入)
7. 黒色土

第130図　1号墳第1主体部実測図

室を覆っていたものと思われる。石棺底面の平面形は長方形を呈する。西小口側で幅が狭くなっている。長さは主軸上，および側壁側で 1.8 m，幅は東小口部で 0.5 m，西小口部で 0.4 m を測る。土坑底面に厚さ 10 cm 程度で黄褐色土を敷き，石棺底面を平坦に整形している。石棺と土坑との間の裏込めは，黄褐色粘土，ロームブロック，黒褐色土，黒色土から構成され，混入の度合により，8 層に区分された。粘土と他の土砂を交互にほぼ水平になるように充填し，石材の安定を図っている。

遺物出土状態

遺物は，直刀 1 口，刀子 1 点，鉄鏃 4 点，用途不明鉄製品 4 点が出土している。すべて西小口側に偏って出土し，出土レベルはほぼ底面直上である。直刀は鋒を西小口側に，刃部を外側（北側壁）に向けて出土している。鉄鏃，刀子は南壁側に寄って出土している。

第 1 主体部出土遺物（第133 図）

直刀（3）

全長 37.2 cm を測る完形の短刀である。片関の平棟平造りで，刀身は鋒に向かって徐々に細くなり，鋒はややふくらを有するものの先端が鋭く尖る。縁金具・鐔とも遺存している。茎の尻部近くにほぼ円形の目釘孔が 1 個穿たれる。茎部に木質の遺存が認められる。

鉄鏃（4～7）

4 は三角形鏃で，幅の広い篦被と棘状突起を有する。5・6 は柳葉式の鏃でやはり幅の広い篦被を有するものの，5 は外側に張り出す逆刺をもつのに対して，6 は内側に向いている点でやや形を異にする。4～6 とも身は両丸造りであるが，6 はやや平造りに近い。5 の茎部には木質の遺存とともに，鉄心への巻きつけが認められる。7 は篦被部の破片であろう。4～6 より幅は狭い。

刀子（11）

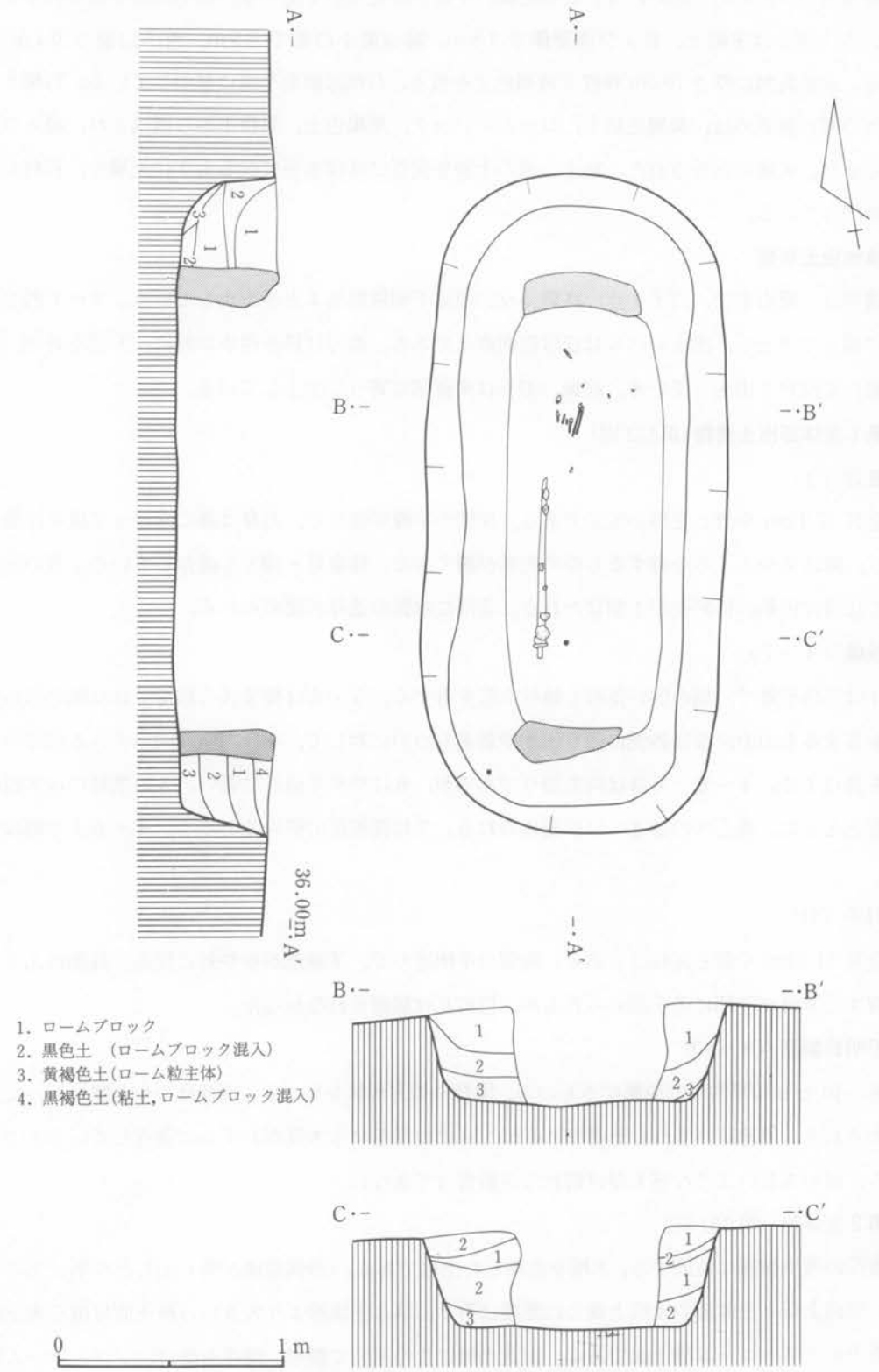
全長 11.2 cm を測る完好品である。両関の平棟造りで，茎端部がやや外に反る。鋒部はふくらを有す。木質が茎部に若干認められるが，目釘孔は観察されなかった。

不明鉄製品（8～10）

8～10 とも形態的にやや異なるものの，横長の長方形状を呈する。端部はやや丸味をもっておさめられる。用途はいずれも不明であるが，10 には斜走する木質がわずかに遺存しているところから，穂つみ具のような感も受け取れるが断言はできない。

第 2 主体部（第 131 図）

墳丘の西側裾部に位置する。木棺を直葬した土坑である。（西側周溝が張り出した位置にあるため，周溝上端と主体部の土坑上端との距離は第 1，第 3 主体部より大きい。）検出面は墳丘表土層の直下のソフトローム層上面である。旧表土層はこの部分で整形，削平を受け，ソフトローム層がテラスを形成している。土坑の掘り込み面はこのソフトローム層上面であり，墳丘構築の途中



第131図　1号墳第2主体部実測図

で土坑が営まれた可能性が強いと思われる。

土坑の平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸 2.9 m，短軸 1.4 m，深さ 39～45 cm を測る。主軸方位はN－10°－Eを指す。底面は中央部が縁辺よりわずかに低くなっている。木棺はこの中央部に埋置され，その範囲は南北両小口部に充填された粘土塊によって知ることができる。粘土塊は厚さ 10～17 cm，幅 49～53 cm，高さ 42～45 cm で木棺の小口部を覆うように土坑底面から垂直に設けられている。木棺の埋置範囲は長軸 1.9 m，短軸 0.7 m と推定される。土坑内の充填土は黒褐色土，黒色土，黄褐色土で構成される。混合の度合によって 4 層に区分された。土坑外縁（粘土塊の外側）ではこれらの土砂を均等な割合で充填しており，土坑中央ではローム粒子を含む黒色土が主体であった。

遺物出土状態

遺物は直刀 1 口，鉄鏃 7 点，耳環 2 点が出土している。直刀は，木棺埋置範囲の中で西壁寄りに置かれている。鋒を北方向に，刃部を西方向（木棺の外側）に向けた状態である。鉄鏃は中央やや北小口側で出土している。鋒を北側に向けた状態である。耳環は，2 点のうち 1 点 20 が直刀の脇，底面より 5 cm 程上で出土し，1 点 19 は木棺埋置範囲より外側，土坑南西寄りで出土している。後者の出土レベルは土坑底面から 16 cm 程上である。この 2 点の耳環の出土位置は原位置を保っているとは当低考え難いが，本来被葬者の身に装飾用として付けられたとすれば，埋納時には南側小口付近に 2 点共存在していたものと思われる。

第 2 主体部出土遺物（第 133 図）

直刀（1）

茎尻を欠損するものの，遺存状態はきわめて良好で，現存長 80 cm，身幅 3.4 cm，棟幅 0.8 cm を測る大形品である。平棟・平造りで，鋒はふくらのないカマス鋒に近い形状を呈す。身は鋒に近い部分で若干内反する。関は両側にある。鐔・縁金具とも遺存し，鐔は，長径 7.6 cm，短径 6.0 cm を測る比較的大形のもので，下端がやや尖る倒卵形を呈す。茎・身ともに木質が付着しており，身の部分は良好な遺存状態である。

鉄鏃（12～17）

12～15 とも無関の片刃箭式で，長い篦被と棘状突起を有す。13 の鋒は肩部で角が張り，15 の身は片丸造りとなる点特徴的である。12・13 の茎部は断面方形で木質が遺存する。16・17 は篦被から茎部にかけての部分で，木質の遺存とともに，鉄心への巻きつけも認められる。いずれも棘状突起を有す。17 の篦被に付着する木質は，その出土位置および木目の方向から棺材の一部と考えられる。18 は篦被の破片で 15 と接合する可能性が強い。

耳環（19，20）

19・20 は銅製の耳環で緑青が激しく，金張の有無は不明である。いずれも断面は略円形であるが，9 は長径 3.2 cm，短径 2.9 cm，厚さ 0.7 cm を測り，8 は長径 2.8 cm，短径 2.6 cm，厚さ 0.

6 cm を測る。9 の方がやや大形である。腐蝕が激しいにせよ，本来大きさの異なったものと考えられる。

第 3 主体部（第 132 図）

墳丘の南側裾部に位置している。第 2 主体部と同様木棺直葬の土坑である。検出面はソフトローム層上面である。

土坑の平面形はやや歪んだ隅丸長方形を呈する。規模は長軸 3.6 m，短軸 1.5～1.7 m を測る。中央部が長軸に沿って縁辺より 1 段低く掘り込まれており，検出面からの深さは 17～35 cm を測る。主軸方位はN—70°—Wを指す。底面は全体に軟質であり，土坑縁辺に起伏が多く，中央部の低く掘り込まれた箇所では平坦である。木棺の埋置範囲は中央の一段低い部分と推定される。東西の小口部に粘土塊を充填している。これは，木棺を小口部で安定させる役割を果すものと思われる。西側で多く利用している。埋置範囲は長軸 2.6 m，短軸 0.6～0.7 m と推定される。土坑内の充填土は黒褐色土，褐色土にロームブロックを混入した土砂で構成される。土坑中央の木棺の範囲では黒褐色土が主体である。

遺物出土状態

遺物は直刀 1 口，刀子 1 点，鉄鏃 39 点が出土している。直刀は木棺埋置範囲の中央，南寄りに出土している。鋒を西方向に，刃部を内側に向けた状態である。刀子は直刀のやや東側で，鋒を東側に向けた状態で出土している。鉄鏃は直刀の真中付近にまとまって出土している。破損しているものも数点あるが，ほとんどは遺存が良好である。身部は直刀の鋒と同じく西方向を向けた状態である。

第 3 主体部出土遺物（第 133 図）（第 134 図）

直刀（2）

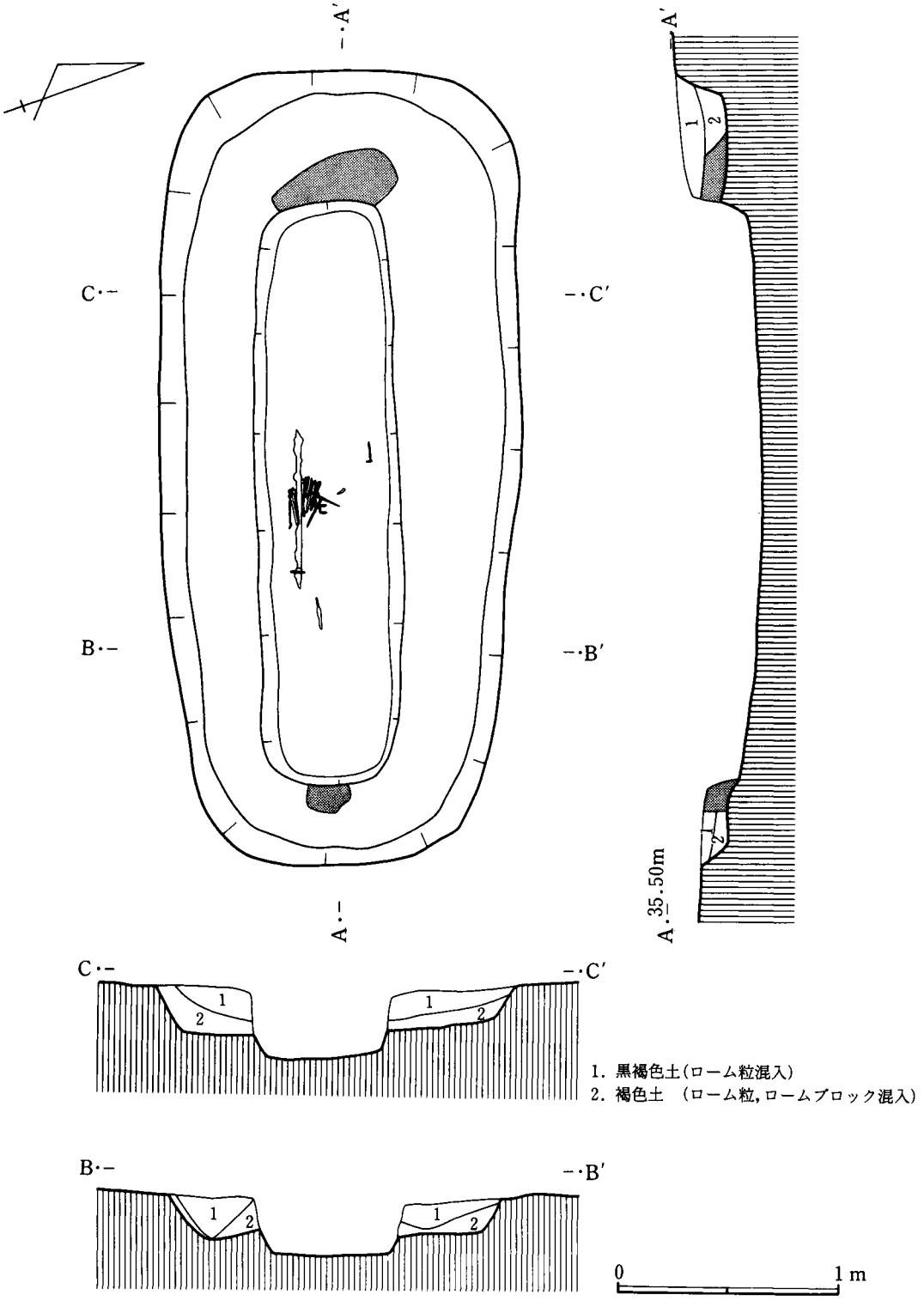
茎尻を若干欠損するものの，ほぼ完形である。全長 71 cm を測り，鋒はややふくらを有する。刀身の断面は中央でややふくらみをもち，刃側で急激に細くなる形を呈す。刃側の関は明確であるが，棟側にも若干切り込まれるものであろう。鐔・縁金具とも遺存する。鐔は下端を欠損するものの，比較的大形で倒卵形を呈す。透孔は 1 個観察されるが，他孔は錆のため不明。茎は全長 7.6 cm で尻側に 2 個の目釘孔を有す他，鐔側に全長 2 cm で断面方形の目釘が遺存する。尻端の孔は方形を呈す。木質は刀身部に若干遺存するのみである。

刀子（31）

全長 14.5 cm を測り，刃部を若干欠損するもののほぼ完形である。平棟造りで刃側に関を有す。鋒は肩より急激に幅を狭め，先端が鋭く尖る。棟はやや外反する形を呈す。縁金具は錆化しながらも棟側に若干遺存する。茎全体に木質が付着するが，目釘孔は認められない。

鉄鏃（1～30）

本主体部より出土した鉄鏃は大別して 6 種類ほどに分けられるが，追葬による混入は主体部の



第132図　1号墳第3主体部実測図

形態および出土位置より考えられず，当初より副葬されていたものであろう。

1～3・12・18は，両関の長三角形式で3には腸抉が認められる。4・28は三角形式であるが，28は鏃身が大形で篦被が短く太い。いずれも篦被と棘状突起を有し，鏃身は両丸造りである。5～7・14は，刃側に関を有す片刃箭式で棘状突起をもつ。6は鏃身を若干欠損するものの，茎は端部まで遺存しており，鉄心への巻きつけ，矢柄への巻きつけ痕が明瞭に認められる。9・10は無関の片刃箭式で，棘状突起を有し木質が遺存している。11～13・15～17・19・26は無関鑿箭式で本主体部の鉄鏃のなかでは最も多く副葬されている。鏃身は両丸造りで棘状突起を有す。8・21は両関鑿箭式で長い篦被と棘状突起をもつ。21の鏃身は錆化のため断面が不明瞭であるが，8は両丸造りである。8の茎には木質が良好に遺存し，矢柄への巻きつけ痕が観察される。29・30は有茎の柳葉式であるが，大きさ，形態とも異なる。30は鏃身の逆刺が欠損するものの，鋭い腸抉が切り込まれるものであろう。短い篦被と茎の間に棘状突起が施される。29は長三角形式に近いもので，きわめて短く薄い篦被を矢柄がはさみ込む装着法を採るものである。鏃身の孔は観察されないが，ほぼ中央に一個穿たれるものであろう。直刀に付着する鉄鏃(第133図2)は12本あるが，錆化のため種別の本数は明確ではない。ただ，片刃箭式と鑿箭式の2種類のみであることは明確である。

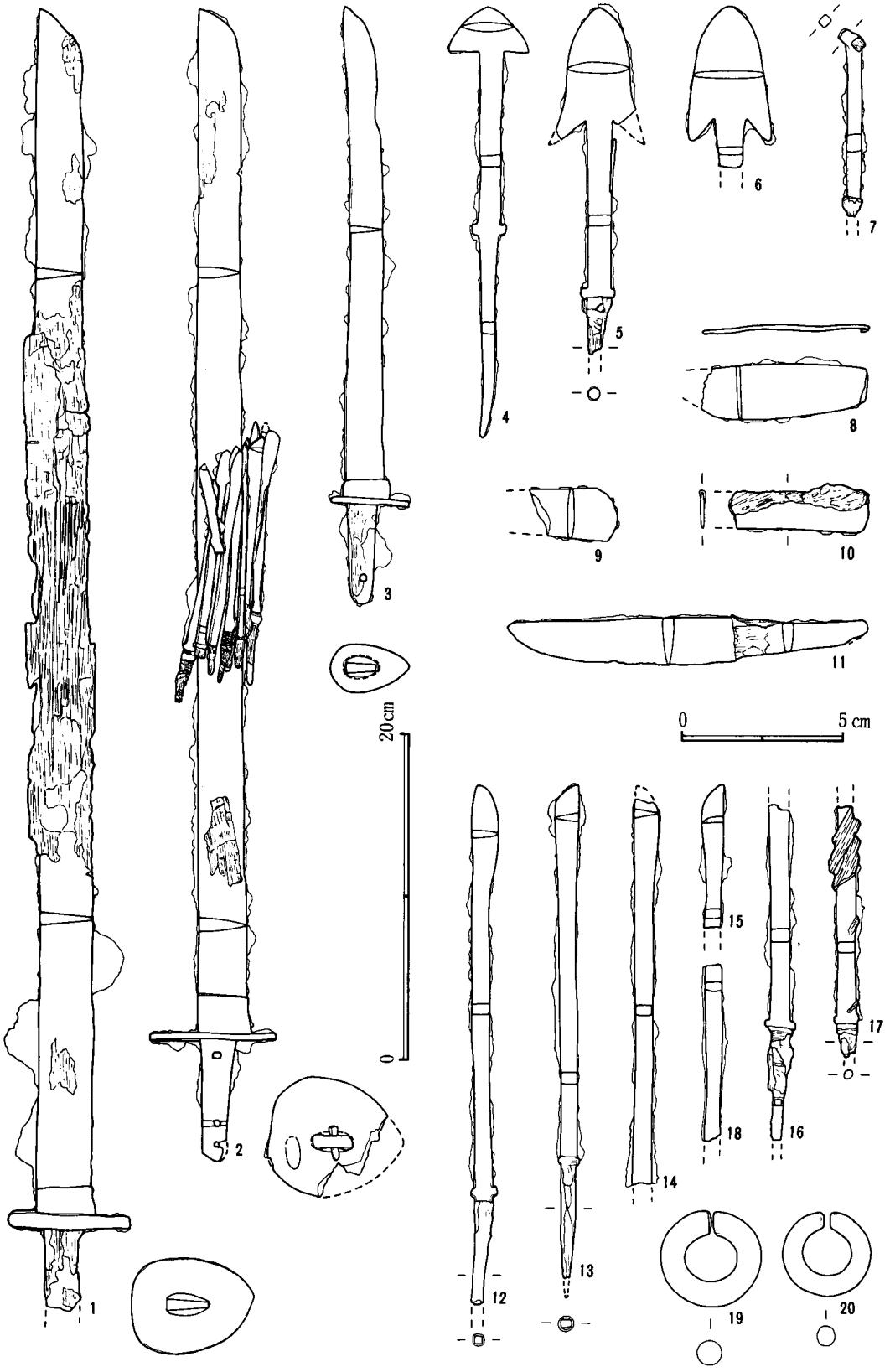
墳丘内出土遺物（第159図1～9）（第160図31）

1は坩で胴下半部を欠損する。口縁部は内彎ぎみに外反し，口唇部はやや丸味をもっておさめられる。胴部は球形を呈し，中央部に最大径が位置するものと思われる。口縁部内外面には横ナデ，くびれ部から胴部にかけてはヘラ削り痕が認められる。胴部内面には輪積みの痕が明瞭に観察される。胎土，焼成ともやや不良で，内外面には赤彩が施される。

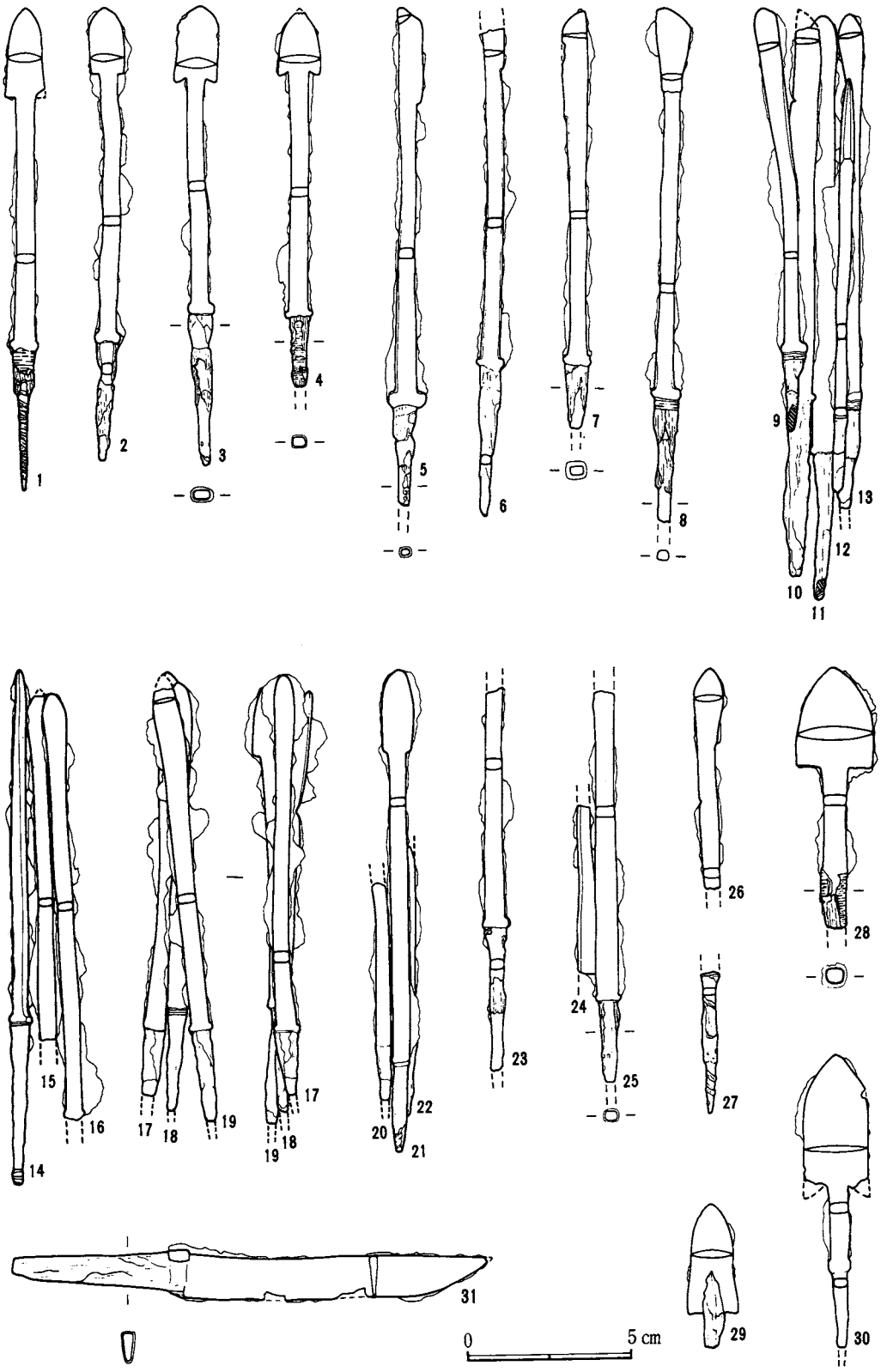
2，3は高坏の坏部および脚部である。2の坏部はやや深く，口縁部は内彎ぎみに大きく開く。口唇部は丸味をもっておさめられ，坏の下方に明瞭な稜を有す。これに続く脚部はかなり細くなるものであろう。器内外面とも丁寧なナデが施され，赤彩が認められる。3の脚部は膨みをほとんど有しない。裾部は脚部との間に明瞭な稜をもたないが大きく開く。内面にはしぼり目が残る。脚部外面に丁寧なヘラ削りが施される以外はナデ調整が加えられる。

5～9は，手捏ね成形による浅い鉢形土器である。体部は6がやや内彎ぎみに開く以外，ほぼ直線的に開くが，5・8の口縁部は直立からやや内傾するのに対して，6，7は体部からそのまま口縁部へ移行している。底部は平底かやや上げ底となり，8以外には木葉痕が認められる。外面には指頭によるナデや押えが残り，内面にはヘラ削り後ヘラナデを施す。

31は用途不明の鉄製品で，部分的に木質が遺存する。第1主体部の10と同様の鉄製品であろう。



第133図　1号墳主体部出土遺物実測図 (1)



第134図　1号墳主体部出土遺物実測図 (2)

2号墳

位置と現状

本墳は台地のほぼ中央に位置する。北東側で1号墳に近接している。1号墳と同様調査前にその所在が明らかとなっていたが，墳丘の西側を掘削用重機によって削平されていた。

墳丘と周溝（第128・135図）

墳丘は，前述したように墳頂部から西側を削平されており，遺存状況はよくない。旧表土の黒色土層の上に構築されており，墳丘の高さは1.2mを測る。旧表土の黒色土層は，封土を盛る前段階として墳丘中央部直下を中心として北西側にかなり削平されており，この付近では封土の直下にソフトローム層の上面が存在している。封土はロームブロック，黒褐色土，褐色土，黄褐色土によって構成され，7層に区分された。構築方法は，旧表土を整形した上に黒褐色土，褐色土の順に均一な高さに積み，その上にロームブロック，黒褐色土，褐色土，黄褐色土を交互に積み重ねている。基本的には均等に同じ厚さで積み重ねており，かなり規則的である。

周溝はほぼ円形に廻るが，南側でとぎれて橋状部をなしている。規模は外縁径 22.5～23.0 m，内縁径 18～19 mを測る。幅は1.2～2.8 m で西側でやや狭くなっている。検出面からの深さは 0.3～0.6 m を測り，全体に大きな偏りはない。底面は緩やかな起伏が認められる。底面からの立ち上がりは緩やかで，断面は皿状を呈している。橋状部は第1主体部の南側に広がっており，幅は7.5 m を測る。周溝内の覆土は2～3層に区分された。墳丘裾部からの流れ込みによる堆積状態を呈しており，ローム粒を混入する黒褐色土，褐色土，黄褐色土から成っている。

主体部

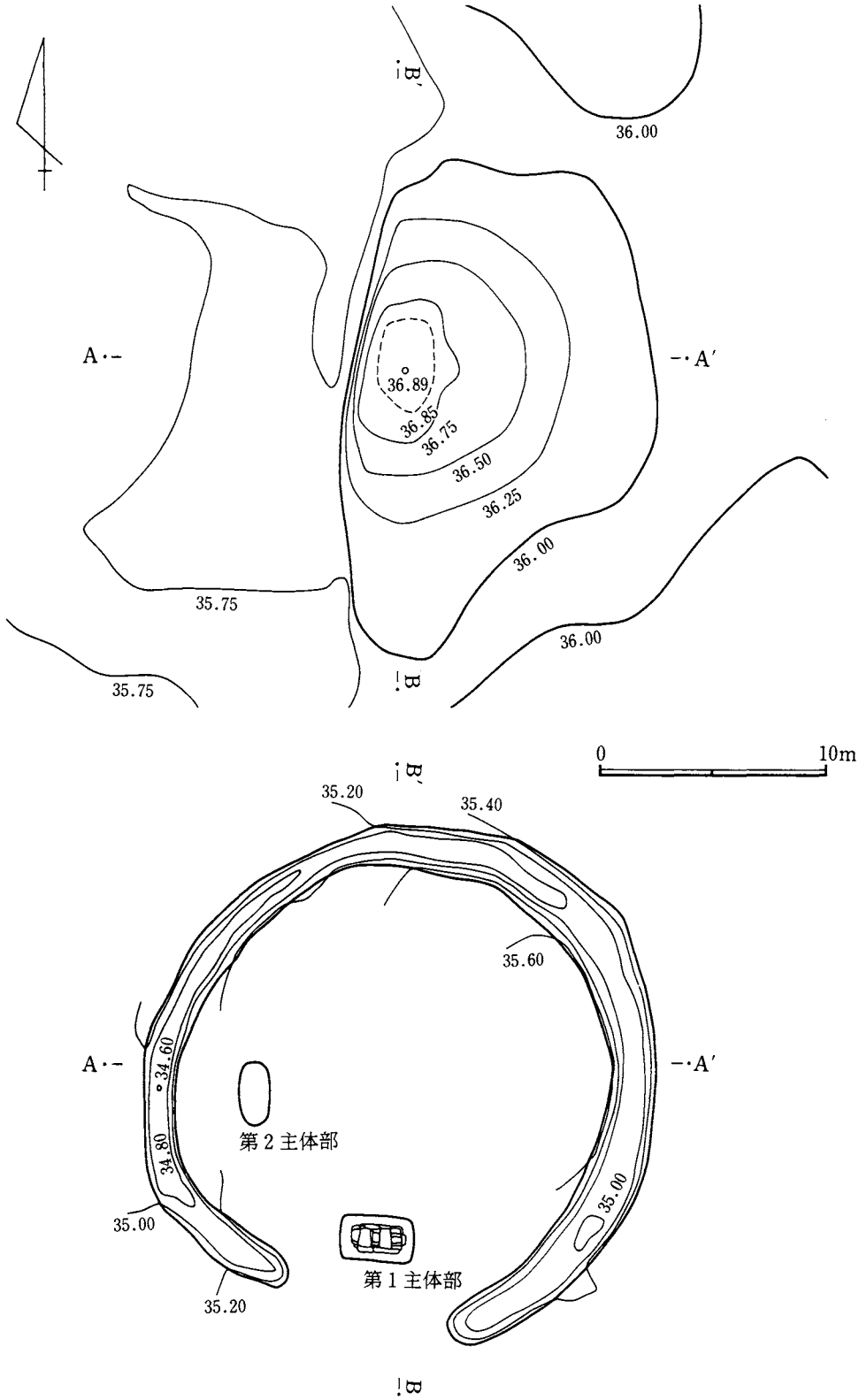
墳丘の裾部，周溝の内側に沿って2基の主体部が検出されている。南側と西側に墳丘の中軸線上に直交するように位置しており，南側を第1主体部，西側を第2主体部として調査を行なった。

第1主体部（第136図）

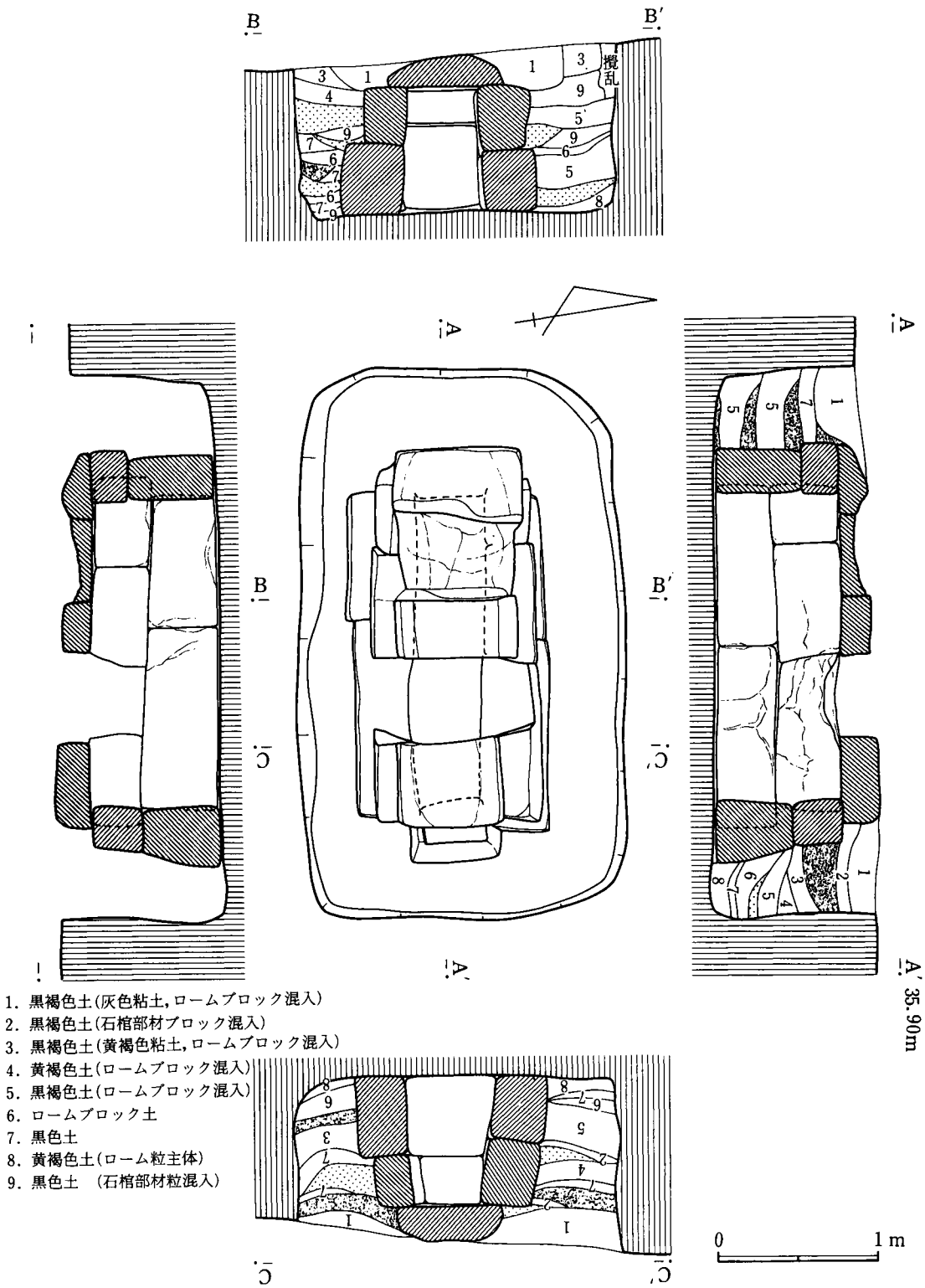
墳丘の南裾部に位置する。箱式石棺を主体部としており，墳丘の表土層を除去した時点で検出されている。墳丘断面の観察の結果，封土の最下層であるローム粒を混入する黒褐色土を盛った後，その上面から土坑が掘り込まれており，石棺はこの土坑内に構築されている。従って，主体部は墳丘の築造過程において営まれたものと理解できよう。

土坑の平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸 3.4 m，短軸 2.1 m を測る。深さは検出面より 0.8～1.1 m を測る。主軸方位はN－81°－Wを指す。底面はハードローム層に達しており，石棺の埋置範囲がわずかに周囲より高くなっている。壁は内湾ぎみに立ち上がっている。

石棺は土坑のほぼ中央に軟砂岩の截石を用いて構築されている。遺存状態は比較的良好であるが，蓋石と側壁の一部は攪乱を受けて欠落している。側壁は2段の石積みから成る。1段目は，南・北壁共直方体の截石を横位に2枚づつ置いている。長さ 82～112 cm，厚さ 31～40 cm，高さ 38～48 cm を測る。2段目は，厚さ 24～33 cm の截石を積み重ねる。南側は一部欠落している。



第135図　2号墳墳丘・周溝実測図



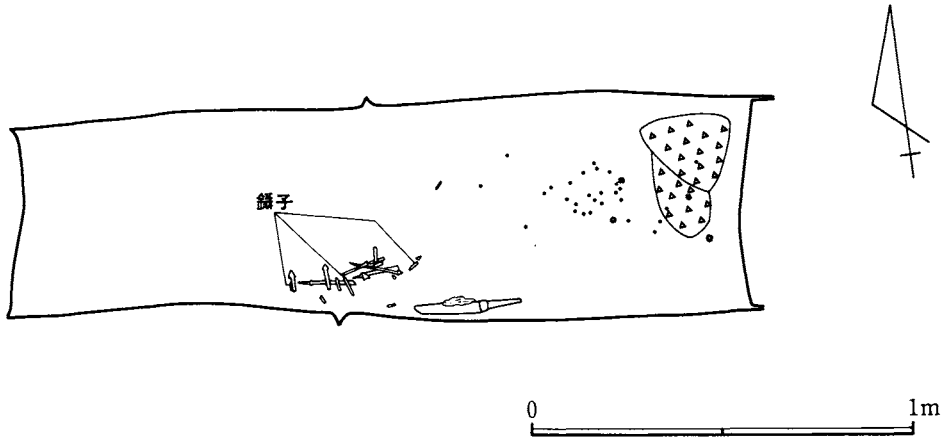
1. 黒褐色土(灰色粘土,ロームブロック混入)
2. 黒褐色土(石棺部材ブロック混入)
3. 黒褐色土(黄褐色粘土,ロームブロック混入)
4. 黄褐色土(ロームブロック混入)
5. 黒褐色土(ロームブロック混入)
6. ロームブロック土
7. 黒色土
8. 黄褐色土(ローム粒主体)
9. 黒色土　(石棺部材粒混入)

第136図　2号墳第1主体部実測図

北壁は3枚置き，東側に長い截石1枚，西側に短い截石を2枚置いている。南壁もおそらく3枚の積み重ねかと思われる。1段目に比べ厚さが薄い截石を利用しており，全体に内側にやや傾むくように積み重ねている。小口は東西共2段に重ねている。側壁に両側から狭まれている。1段目に幅の広い板状の截石を用い，2段目は小さい直方体の截石を用いている。蓋石は，石棺中央にかかる部分で攪乱のため欠落あるいは削平されているが，全体に遺存は良好である。厚さ19～22 cm，幅 67～83 cm の板状の截石を用いている。欠落部分があるため明確な枚数は不明であるが，西側の遺存状態から5枚程度を使用したものと思われる。蓋石の上面は，断面形が左右に稜をもつドーム状に整形されており，特に東西小口部で明瞭である。石棺底面の平面形は長方形を呈する。長さは南壁側 2.9 m，主軸上と北壁側で 2.8 m，幅は東小口で 0.9 m，西小口で 0.8 m を測る。長軸に比べ幅が狭く，複数の遺体の埋葬には限界があるかと思われる。石棺内の埋土は，攪乱を受けていたにもかかわらず全体に充満していない。東側の攪乱坑からの流れ込みによる堆積状態であった。石棺と土坑との間の裏込めは灰色粘土，黄褐色粘土，ロームブロック，黒褐色土，黄褐色土から構成されている。粘土はほとんど単独で使用されており，1段目の下層と2段目の上層に多く認められた。他の土砂は互いに適当な割合で混合して，粘土層の間に充填されている。

遺物出土状態（第137図）

石棺内から出土した遺物は，直刀1口，鉄鏃11点，鑷子1点，耳環4点，ガラス小玉25点である。直刀は底面より 5 cm 程浮いて，南側壁寄りから鋒を西側に，刃部を外側に向けた状態で出土している。鉄鏃は刀子のやや西寄りで出土しているが，鋒は一方向を向いておらず，完存しているものも少ない。鑷子は鉄鏃の一群に混在しており，3点に折れた状態であった。出土レベルは底面より 5～20 cm 程上面である。ガラス小玉・耳環は，中央より東小口側にまとまって出土した。出土レベルは底面直上から 10 cm 前後の範囲である。また，東小口部に沿ってハマグリを主体とする貝類の堆積が検出されている。



第137図　2号墳第1主体部遺物出土状況図

第1主体部出土遺物（第139図）

直刀（1）

鋒を若干欠損するものの，全長29cm程を測る短刀である。平棟平造りで，鋒はふくらの枯れたカマス鋒を呈す。刀身はやや内反する傾向を示し，鋒に近づくにつれて徐々に身幅を減少する。関は両側にほぼ直角に切り込まれる。縁金具が片側のみに遺存する。茎尻に近く断面方形の目釘がやはり片側のみに遺存する。木質は刀身部および茎部に認められる。

鉄鏃（2～12）

2・3は無関の片刃箭式で長い篦被を有す。2は棘状突起が施され，茎部に木質が遺存する。4～7は三角形式で，5・7に若干腸抉が認められる。5・6は鏃身がやや小形で，4は篦被が太い。すべて両丸造りである。8～12は，篦被および茎の部分で間に棘状突起を有す。茎部には木質が遺存し，8・9では矢柄上への巻きつけ痕が明瞭に観察される。

鑷子（13）

全長6.3cmを測る完好品である。幅0.6cm，厚さ0.3cmの鉄板を中央で折り返し，長さ1.5cmのつまみを形成し，1cm程の間隔で2本の脚をつくり出す。脚端部は丸味をもっておさめられる。断面は長方形を呈す。

耳環（14～17）

4点ともほぼ同様の大きさで，すべて銅地金張である。ただし，その形態の差異および出土状況から14と15，16と17がそれぞれ対として副葬されたようである。

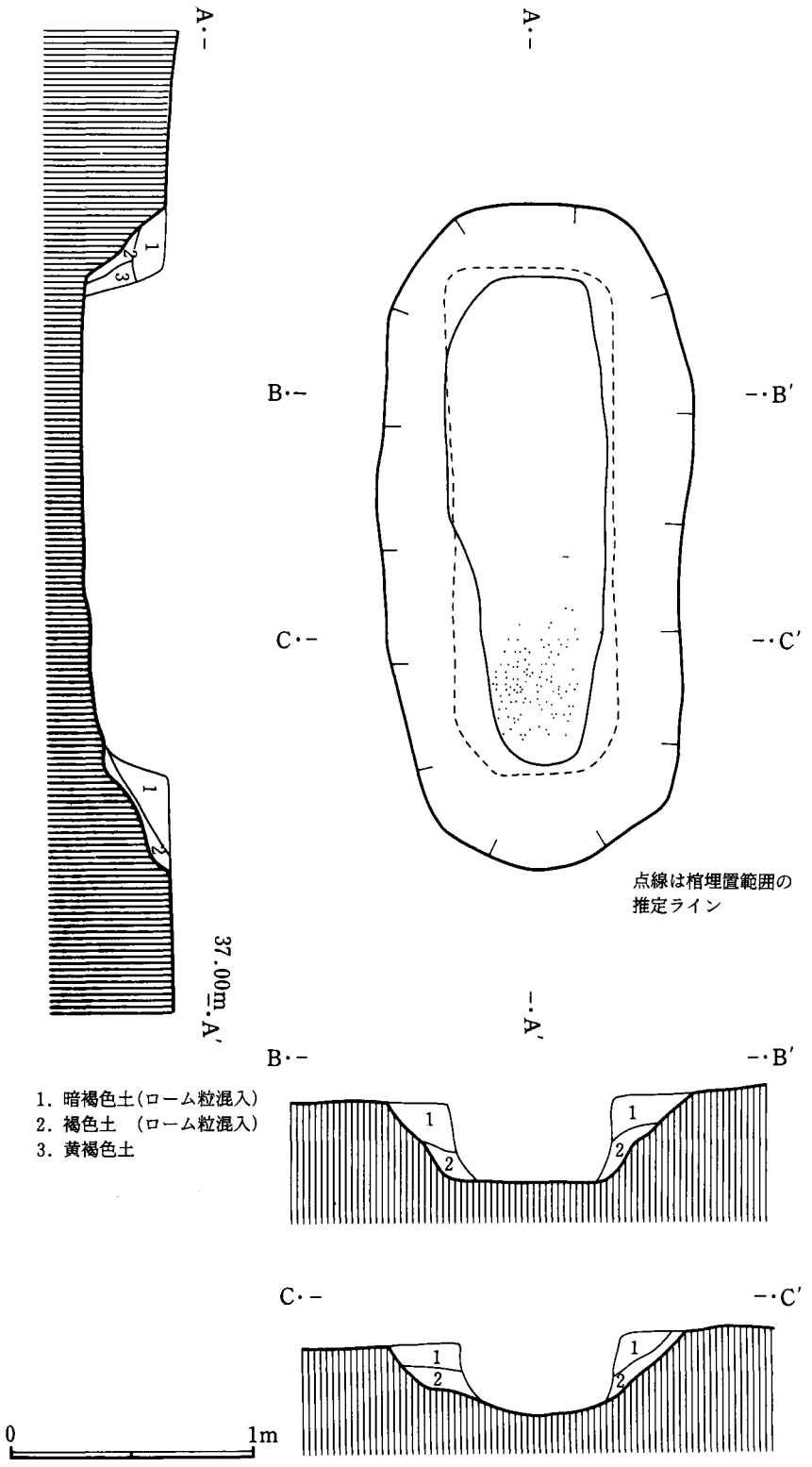
玉類

ガラス小玉のみ25点の出土で，うち3点は欠損する。16･17の耳環付近に集中しており，数的に少ないがほぼ原位置を留めるものであろう。径3.6～4.2mm，厚さ2.3～3.1mmとほぼ均一の大きさを測る。色調は単一でコバルトブルーである。風化が激しく，気泡の観察が困難であるが，成形は巻きつけ法によったものであろう。紙面の都合で図示は省略した。

第2主体部（第138図）

本主体部は墳丘の西裾部に位置する。第1主体部から北西側に約5.4m，周溝内縁上端から2.7mの距離を測る。第1主体部と異なり，土坑となるものである。検出面はソフトローム層上面である。墳丘下の旧表土層は墳丘築造の際かなり削平されており，旧表土層での確認は困難であった。従って墳丘断面との対比も観察しがたく，土坑の掘り込み面については不明である。

平面形はやや歪みのある長楕円形を呈する。規模は長軸2.7m，短軸1.3mを測る。主軸方位はN－3°－Eを指す。掘り込みは長軸側･短軸側共わずかに段をもち，土坑上端と下端の幅に開きがある。底面は全体に平坦であり，横断面は逆台形状を呈する。深さは検出面より0.3～0.4mを測る。坑内には1号墳で認められた粘土塊は全く存在していないが，おそらく木棺直葬の主体部と思われる。土坑検出の際の平面精査では土坑中央部で幅0.7m，長さ2.1mの範囲で黒色土が



第138図　2号墳第2主体部実測図

存在しており，その周囲（土坑外縁に沿って）には暗褐色土が認められていること，遺物の出土範囲が黒色土中にまとまっていること等から，この黒色土の範囲を木棺埋置と考えることができよう。土坑充填土は黒色土，暗褐色土，褐色土，黄褐色土が主体である。黒色土は前述したとおり土坑中央部に存在する。そして，この黒色土を囲むように暗褐色土，褐色土，黄褐色土が充填されている。褐色土中には，ごくわずかであるが第1主体部の裏込めにみられた灰白色粘土が混入していた。

遺物出土状態

遺物はすべてガラス小玉である。総数140個程を数える。出土範囲は南側小口部の底面付近に偏っている。出土レベルは高低の差が21cmであり，かなりの差が認められる。この程度の差は，仮に被葬者の胸部にガラス小玉が飾られて埋葬されたとすれば，腐朽する間の埋没過程を考慮に入れても当然生じてくるかと思われる。遺物の分布範囲から被葬者は頭部を南側に向けて葬られたものと考えられる。

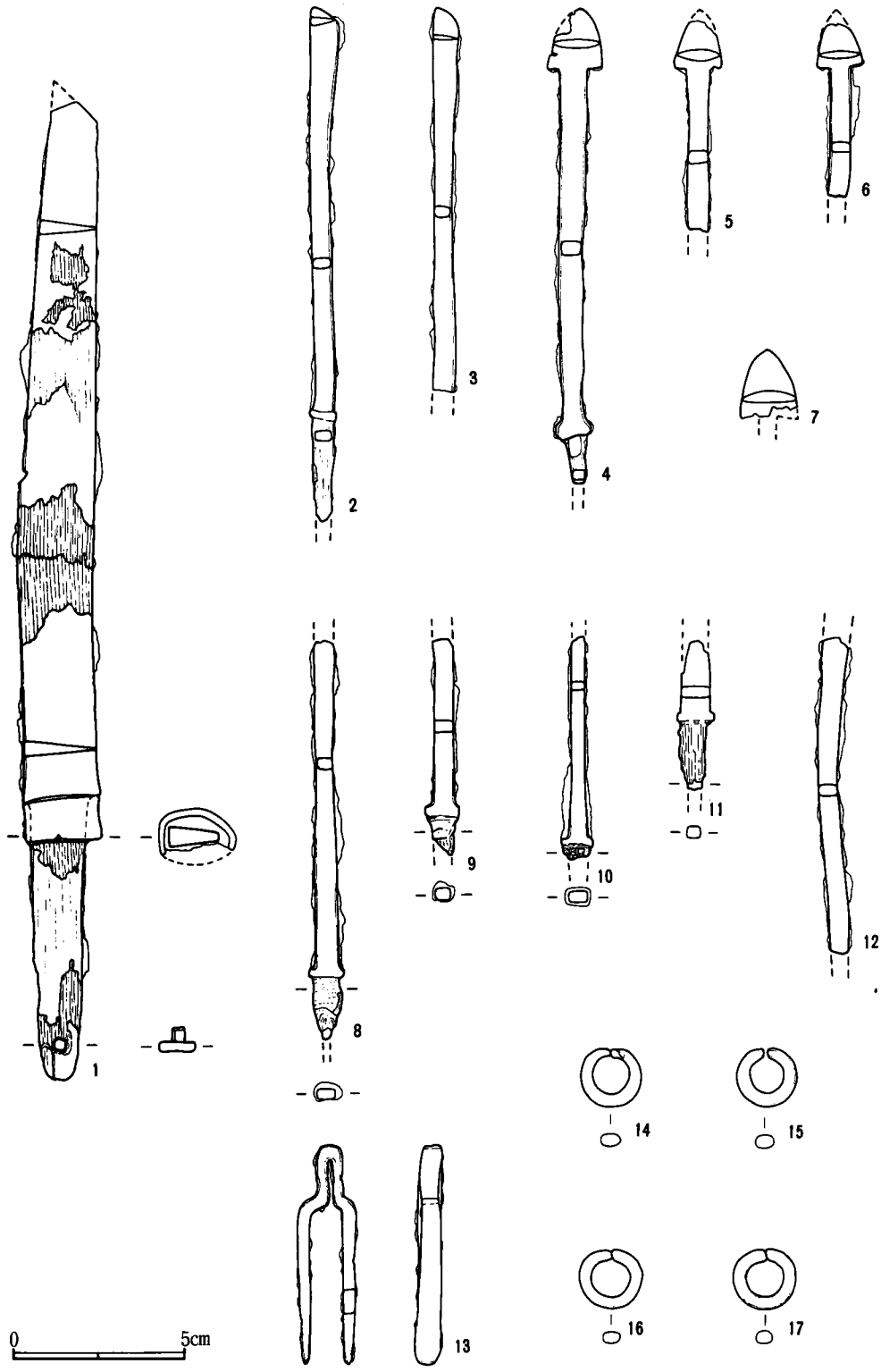
第2主体部出土遺物

玉類

実測可能なもの132点と破損品が10点程出土した。比較的大形で臼玉状を呈するものと，小形のガラス小玉に大別できる。前者は径が7mm前後で，最大のものは8mmを測る。後者は径3～4mmとほぼ一定する。すべてに気泡が認められるが，その観察により，臼玉状のものは引き延し手法を，小玉は巻きつけ手法を採っているようである。色調は単一ですべてコバルトブルーであるが，臼玉状のものは他に比べてやや濃い。玉類についての図示は省略した。

墳丘内出土遺物（第159図10～20）（第160図29・30）

10～12とも甕で胴部から口縁部にかけてである。10・12の口縁部は横ナデ，以下は縦位のヘラ削りが施される。10のくびれ部には比較的強い刷毛目が残る。11は壺で，胴下半を欠損する。口縁部は短く，胴部は球形を呈するものであろう。口縁部には横位の刷毛目が残るが，外面は弱いナデが加えられる。胴部は内外面とも刷毛目が観察される。色調は灰褐色で，砂粒を含む。16は坩でほぼ完形である。口縁部はやや内彎気味に開く。胴部はほぼ球形であるが，中位でやや張り出す。底部は小さく，上げ底を呈す。口縁部は横ナデ，胴部はヘラ削り後ナデが施される。色調は褐色で，焼成は良好である。17も坩で胴部を欠損する。16とは胎土，色調が異なり，11の壺と同様になる。口縁部内外面・胴部外面は横ナデにより刷毛目が消失する。15も坩の類に入るであろうか。口縁部は短く直立する。胴部は上位に最大径を有す。底部は平底であるが，若干凹凸がある。胴部最大径以下と底部にはヘラ削り，他にはナデが施される。口縁部より胴上部にかけて赤彩が認められる。18・19は坏でほぼ同様のつくりである。内外面ともに赤彩が認められる。底部は18が平底，19が丸底となる。18の底部外面には「＋」の刻線が観察される。13・14は台付甕の脚部破片である。13・14とも刷毛目が残るが，脚内面および13の外面はナデにより消失され



第139図　2号墳第1主体部出土遺物実測図

る。胎土・色調とも 11 の壺に似る。20 は小形の埦で⅓程遺存する。体部はナデにより刷毛目が消失される。色調は暗褐色を呈し，砂粒を多く含む。

30 は管状の土錘で，孔は両側から施される。器面の調整はかなり入念で胎土，焼成とも良好である。色調は暗褐色を呈す。29 は双孔円板であるが，形状は隅丸長方形に近い。滑石系の石材で両面とも丁寧に研摩される。孔はいずれも片側穿孔である。

3 号墳

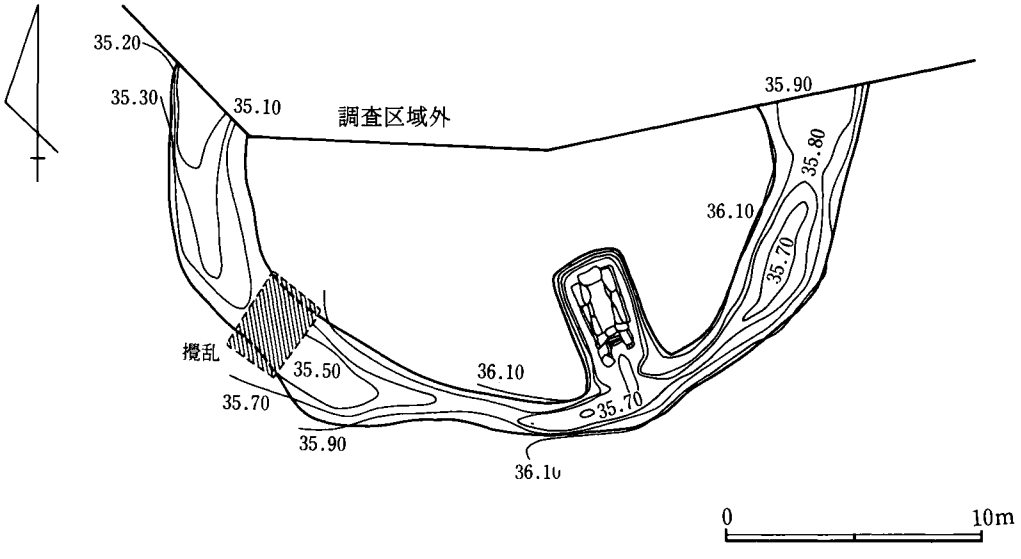
位置と現状

本墳は調査区の北端に位置する。東側で 5 号墳周溝と，南側で 4 号墳周溝に近接している。4 号墳と同様に，調査以前道路建設などに伴う現場詰所等の建設により墳丘のすべてと周溝の約½を削平されてしまっており，調査開始後にその所在が明らかになった古墳である。従って検出された遺構は周溝約½及び横穴式石室をもつ主体部である。

墳丘と周溝（第 140 図）

墳丘は前述のごとく削平のためまったく残存していなかった。

周溝は全体の約½を検出することができた。全体としてほぼ円形を呈するものと思われる。南西側に重機による攪乱を受けている。規模は一定しておらず，4 号墳周溝と近接する部分―主体部の掘り込みと連続する部分―は極端に幅が狭くなっている。4 号墳周溝との関係は，あらかじめ近接する箇所に土層断面を観察するためのベルトを設けて調査を行った。この結果両者に重複関係は認められず，かつ 4 号墳周溝が一定の規模を呈していることから，本古墳築造の際にすで



第140図　3 号墳周溝実測図

に築造されていた4号墳を避けて周溝を掘り下げたものと思われる。周溝の幅は西側で 2.7～3.0 m，東側で 3.6～4.5 m，主体部付近で 1.2～1.5 m を測る。底面は緩やかな起伏が認められる。深さは大きな変化がなく 0.4～0.5 m を測る。周溝の外径は東西方向で 27 m を測る。周溝内の覆土は黒褐色土，暗褐色土，黄褐色土が主体を占めており，流れ込みによる堆積状態であった。

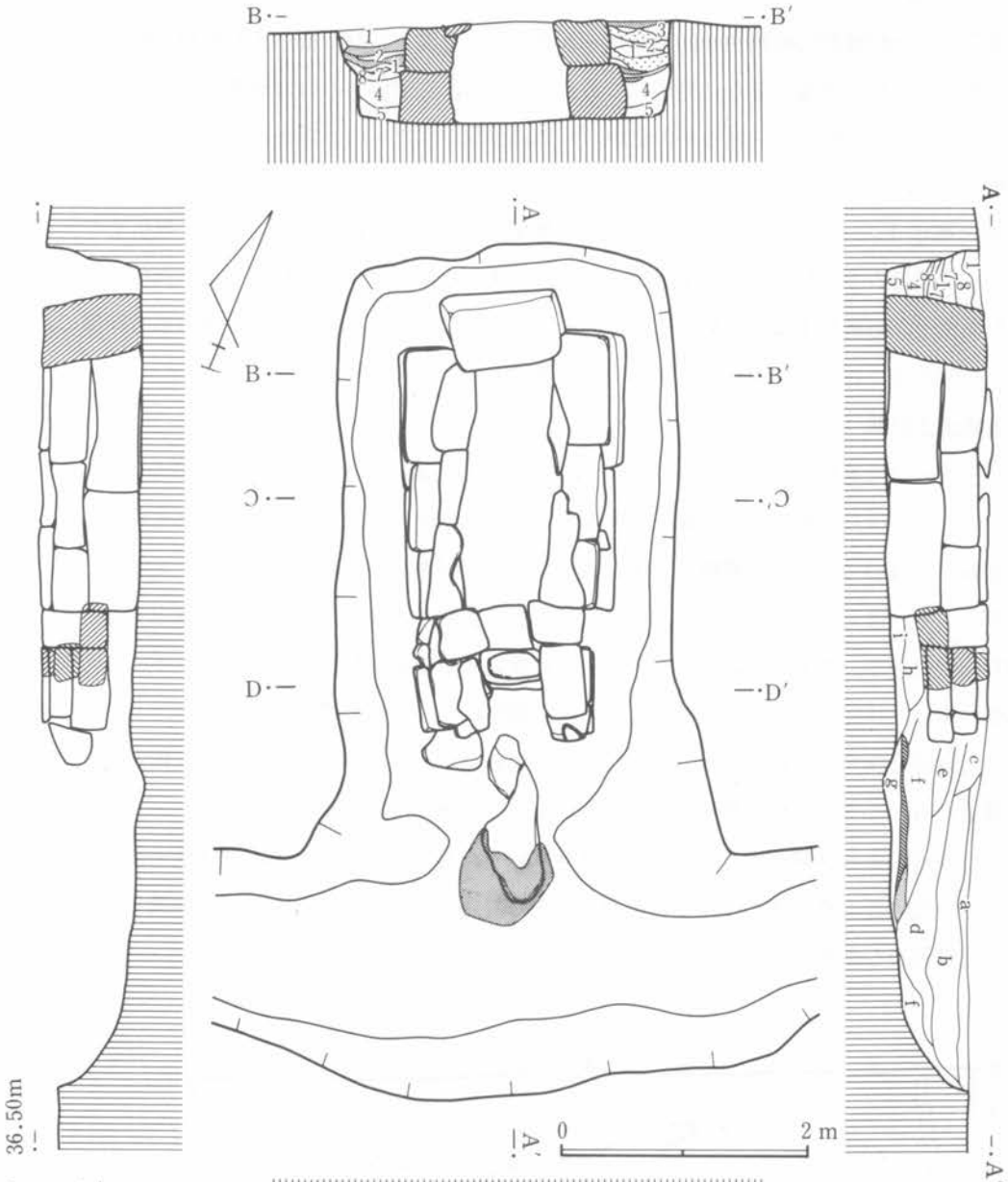
主体部（第 141 図）

主体部は南向きに開口する両袖式の横穴式石室である。古墳の中心よりやや南東寄りに位置している。上面を削平されていたが遺存状態は比較的良好である。

土坑の平面形は隅が丸みをもつ長方形を呈しており，南側は開きぎみに周溝と接している。規模は長さが西側で 4.7 m，東側で 4.8 m，幅が北側で 2.8 m，南側の周溝と接する部分で 3.6 m を測る。底面は全体に平坦である。深さは検出面より 0.7～0.8 m を測る。周溝と接する部分は掘り方の下端が内側に向って張り出しており，周溝との境としている。また，周溝底面とは高低差が少ない。土坑の掘り方の状態から，本墳築造時に周溝の掘り下げと併行して土坑の掘り下げを企画したものと思われる。

石室は軟砂岩の截石を構築材として用いる。検出時においては側壁の3段目がわずかに残存しており，天井石はほとんどが玄室内部に崩落していた。奥壁及び袖石等の遺存状態から，石室は本来側壁3段の石積みで構成されたものと思われる。石室全体の長さは 3.8 m を測る。主軸方位はN－20°－Wである。玄室底面のプランは長方形を呈する。規模は幅が奥壁側で 1.0 m，中央で 0.9 m，玄門側で 0.9 m，長さは右側壁で 2.2 m，左側壁で 2.1 m，主軸上で 2.2 m を測る。奥壁は一枚の截石を使用している。厚さ 50 cm，幅 98 cm，高さ 42 cm を測る。玄室内側に傾斜するように底面を加工している。側壁は直方体の截石を横長に利用している。左・右共に一段目は2枚，2段目を3枚置く。3段目は左側壁が3枚であるのに対し，右側壁は2枚を置く。いずれも布目積みで，玄室内側に持ち送りをしている。奥壁との接合部は側壁の3段目までに切り込みを施している。玄門部は，あらかじめ土坑底面に石室構築材の細粒を含む暗褐色土及び赤褐色土を敷いた後に大きめの框石を置き，その両側に直方体の袖石を配している。玄門部幅は 0.5 m である。羨道部は簡略化されており，袖口から左側 1.0 m，右側 0.8 m 側壁が張り出している。両側壁共3段の石積みで構成されている。左側壁は長さ 57～64 cm の直方体の截石を横長に1枚づつ3段に重ねており，その前部にさらに不整形の截石を置いている。この截石は側壁との接合部を平らに整形していることから，あるいは側壁の押えの役割りを果たしていた可能性が考えられる。右側壁は，長さの異なる截石を1段目と2段目に2枚ずつ重ね，3段目は1枚を置いている。閉塞石は，これらの側壁の間で框石の上に2段重ねられている。横穴式石室本来の閉塞位置とは異なっており，羨道部と同様にかなり簡略化されているものと思われる。

周溝との境の部分では，長さ 1.3 m，幅 0.5 m の範囲で石室構築材と同様の石が厚さ 10 cm で敷かれており，この敷石の周溝側の端は上面を灰白色粘土で覆われている。土層断面でみるとこ



1. ローム土
（褐色土混入）
2. ローム土
（暗褐色土混入）
3. 褐色粘土
（ローム土混入）
4. 黄褐色土
（ロームブロック混入）
5. 黄褐色土
（褐色粘土混入）
6. 暗褐色土
（灰褐色粘土混入）
7. 暗褐色土
（ローム土混入）
8. 黒褐色土
（ローム土混入）
9. 暗褐色土
（ロームブロック混入）

a. 黒色土
b. 暗褐色土
（ローム粒混入）
c. 暗褐色土
（石室部材粒混入）
b. 暗褐色土
e. 暗褐色土
（多量の石室部材粒混入）
f. 黒褐色土
（ローム粒混入）
g. 黄褐色土
（ロームブロック，
砂粒混入）
h. 暗褐色土
（ロームブロック，
石室部材混入）
i. 赤褐色土
（砂粒混入）

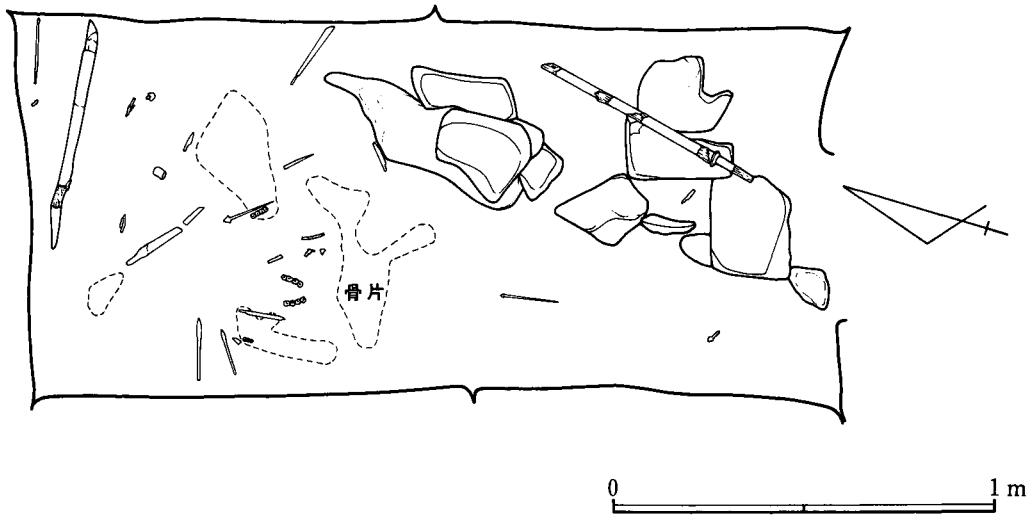
第141図　3号墳第1主体部実測図

の部分は，土坑底面に暗褐色土，及びロームブロックを混入した黄褐色土を平坦に敷いた上面で検出されており，下端が平らに整形してあることから，玄室側あるいは周溝側から偶然流れ込んだものではなく，明らかに何らかの企画のもとに付設されたものと思われる。その具体的な検証は難しいが，あるいは羨道から周溝方向へ向う墓道の役割りを意図したのであろうか。石室の裏込めは褐色土，ロームブロックを混入した黄褐色土及び褐色粘土を混入した黄褐色土で土坑底面から1段目の中位程を固め，1段目と2段目の重なる部分より灰白色粘土及び褐色粘土を混入した褐色土，暗褐色土または粘土そのものを交互に充填している。袖石から羨道部も同様である。粘土の使用は，石と石を重ねた箇所で特に顕著である。

遺物出土状態（第142図）

石室内の出土遺物は直刀2口，刀子3点，鉄鏃22点，鑷子片1点，直刀の把頭1点である。遺物のほとんどは玄室中央より北側で，床面あるいは若干浮いて出土している。出土範囲は北側の玄室幅いっぱいに広がり，鉄鏃，刀子は鋒の方向に規則性がみとめられず，攪乱を受けたような状態である。直刀2口のうち1口は奥壁に平行した状態であり，別の1口は玄室中央よりやや南側右側壁付近で，玄室内に崩落した天井石の残骸の間から出土した。これは鋒を下に，刃部を右側壁に向けた状態であった。おそらく，玄室右側壁に立てかけて埋納されてあったものが天井石崩落と同時に偶然にも斜めにかたむいたものと思われる。なお，これらの他にも床面付近では，被葬者のものと考えられる骨片，歯などが中央より北側で検出されている。

また羨道部より鉄鏃が出土している。鉄鏃はいずれも完存しておらず，遺構検出面よりわずかに下，土坑底面よりはるかに浮いた位置に散在していた。これは，石室前の周溝覆土上層から出土した鉄鏃及び須恵器に関係するものであろう。



第142図　3号墳第1主体部遺物出土状況図

第1主体部出土遺物（第144図）

直刀（1・2）

1は全長69.8cmを測る。鋒はふくらのかれたカマス鋒に近い形を呈す。平棟・平造りで両側に関を有す。鉄製の縁金具・鐔が遺存する。鐔は断片ながらも小さく，典型的な喰出鐔である。鉄製の足金物が2個遺存する。1個は縁金具に近く，他方は鋒より5cm程の位置に装着される。扁平な環状を呈し，上部に帯執の革紐をとおす小環がついている。縁金具近くの足金物の方がやや大形である。茎尻は丸くおさめられ，尻近くに目釘孔が1個穿たれる。孔内には断面方形を呈す目釘が折れて遺存している。木質は刀身部に良好に遺存しており，特に足金物の装着部に遺存する木質からは鞘の大きさが推測できるほどの状態である。2は全長58cmを測り，刀身を一部欠損するもののほぼ完形である。鋒は1と同様ふくらのかれた形態を呈すが，刀身は全体に細身である。平棟・平造りで，関部は錆のため明確ではないが，刃側にのみ関を有するものであろう。鉄製の縁金具・鐔が完存する。鐔には透孔が認められない。茎も全体に細身で関部より尻にかけて徐々に幅を狭める。茎尻より2cm程に断面方形の目釘が遺存する。木質はほとんど認められない。

把頭（26）

単独出土のためどの直刀に帰属するところであるか判断に苦慮するものであるが，その出土位置からみると2に伴う可能性が強い。長さ4.7cm，幅2.8cmを測り，一端がやや尖る長楕円形の断面を呈す。内側に木質が遺存する。筒抜けのものではなく，図の上側が閉じられる形態である。

刀子（29～31）

29は全長27cmを測る大形の刀子であるが，短刀の可能性も否定できない。刀身部は薄く，先端でやや外反する。鋒はふくらのある形態で肩を持たない。関は両側にほぼ直角に切り込まれる。幅0.5cmの縁金具が半分程遺存する。茎部に木質が観察される。30・31とも茎尻を欠損する。31は刃側に関がある小形の刀子である。茎に比して身部がきわめて小さいことより，何度も研ぎ返して使用されたことがうかがえる。30は関部が錆化しているため明確ではないが，両側に関をもつものであろう。茎部には木質が良好に遺存しており，茎本体への巻きつけが明瞭に観察される。これは，柄木と茎との装着をより強固にするためのものと思われる。

鉄鏃（3～13）

いずれも篦被と棘状突起を有するものの，身の形態はいくつかに分けられる。3・4は無関鑿箭式で，3は両丸造り，4は片丸造りとなる。5・6・13は三角形式の鏃身で，5・13は腸抉がはいる。6は鏃身がきわめて小さいものである。いずれも両丸造りとなる。7・8は無関の片刃箭式である。12は身先端および逆刺を欠くものの，残存する形状より柳葉式と推定される。篦被は短く，断面は扁平な長方形を呈す。9～11は篦被から茎にかけての部分である。

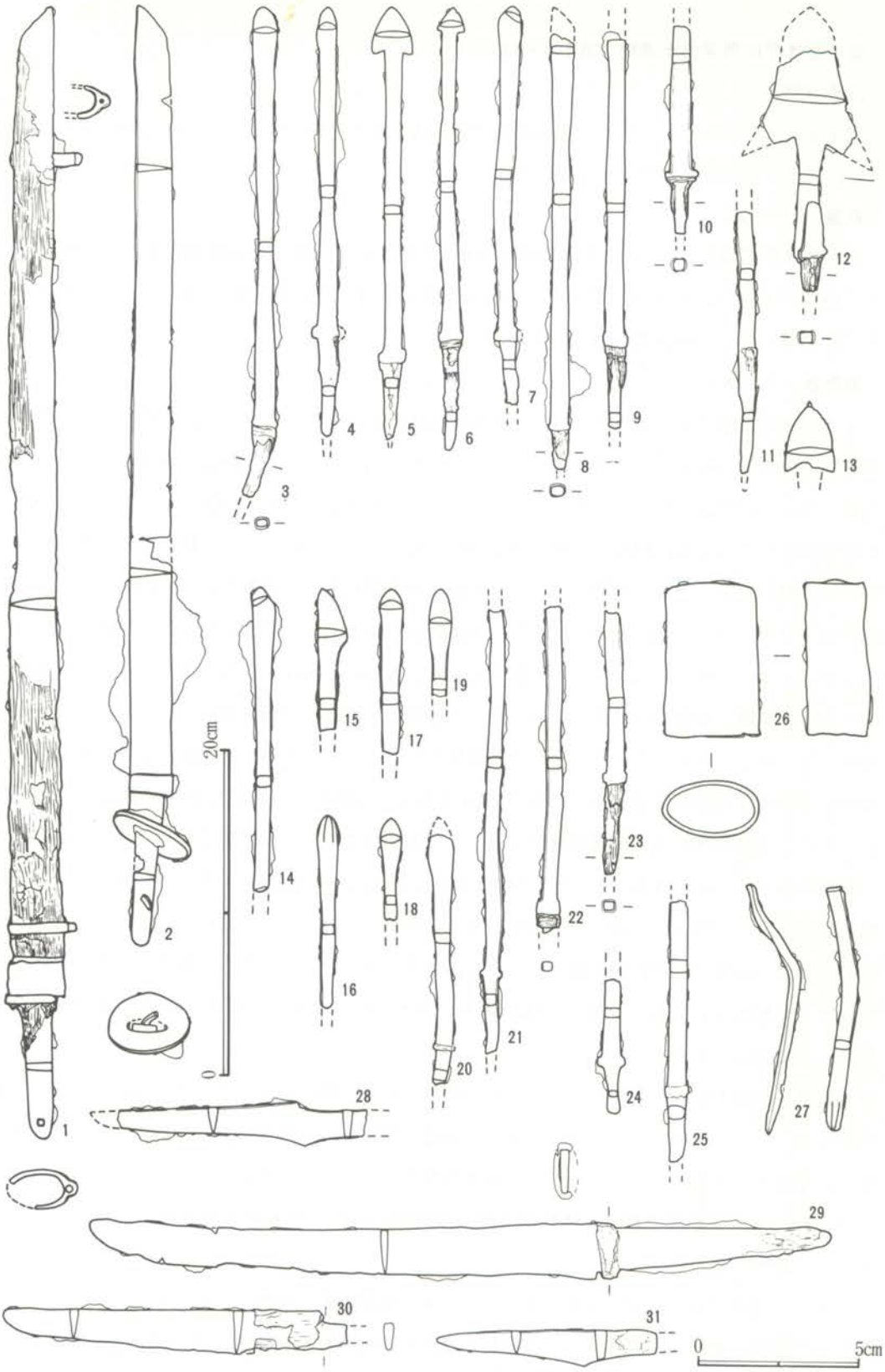
鑷子（27）

片側のみ遺存する。全長は 80 mm 前後で脚端部は丸味をもっておさめられる。2号墳第1主体部出土例とは大きさ，形状で若干異なる。本例の方が一回り大きく，脚の開き方が長く鈍くなり，いわゆる「S字」状を呈するものである。ただし，この方が用途としてはより弾力性を有するものであろう。

周溝遺物出土状態（第143図）

周溝内から出土した遺物は鉄鏃41点，須恵器8点である。出土位置は石室前に集中しており，周溝覆土1・2層の出土である。鉄鏃はいずれも完存しておらず，身，篦被，茎部がバラバラの状態であった。須恵器も完存しているものは少なく，ほとんどが破砕されていた。主体部の土坑から東側の周溝部に多量に出土しており，器種はまとまっている。また周溝土層断面の観察では，覆土は流れ込みによる堆積状態を示しており，遺物に関連するような攪乱は認められていない。このことから，これらの鉄鏃，須恵器は本来墳丘裾部あるいは羨道部における葬送儀礼に伴う遺物であったものと考えたい。そして須恵器の破砕状態から，鉄鏃も故意に破砕されていたものと考えられよう。

第143図　3号墳第1主体部前周溝遺物出土状況図



第144図　3号墳第1主体部・周溝出土遺物実測図

第1主体部前周溝出土遺物（第144・145図）

刀子（28）

先端部および茎尻を欠損する。関は両側に切り込まれる。身部は茎にくらべてかなり細いことから，何度か研ぎ返されたものと思われる。

鉄鏃（14～25）

14・15は片刃箭式であるが，14は無関，15は片関となる。16～20は無関鑿箭式で，16は平造り，18は両丸造り，17・19は片丸造りの鏃身を有す。21～25は篦被から茎にかけての部分である。21はきわめて長い篦被を有す。

須恵器（1～8）

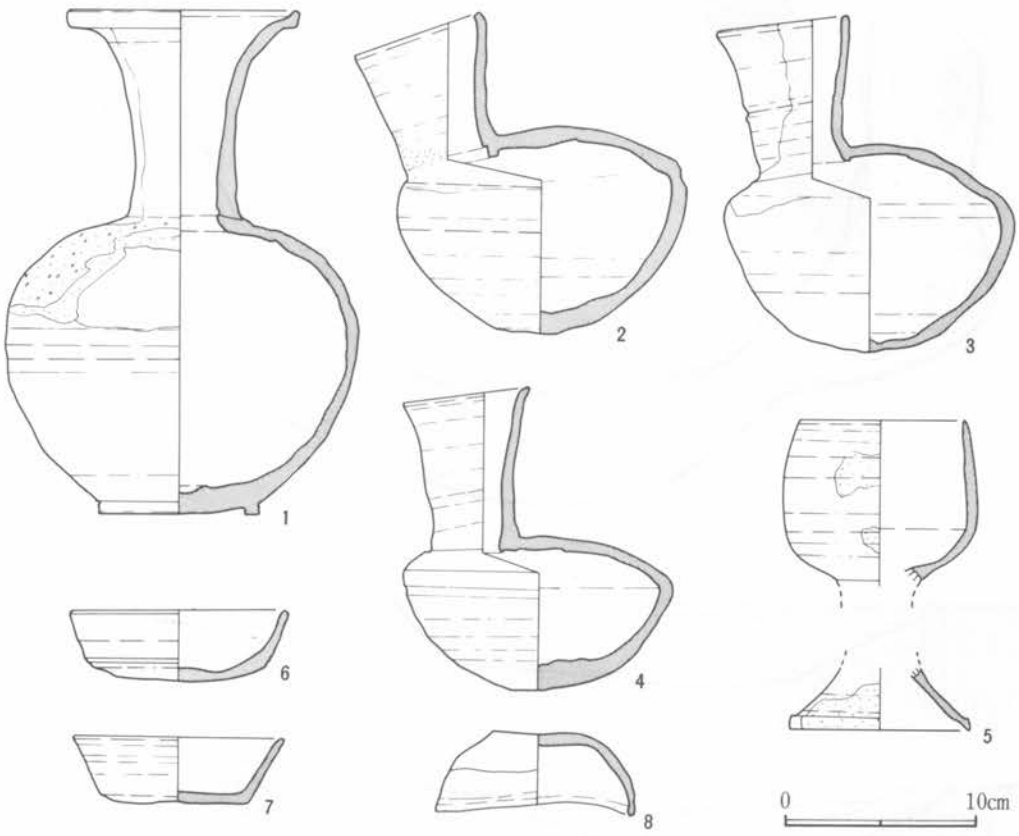
1は台付長頸瓶でほぼ完形である。口頸部はほぼ直立気味に立ち上がり，口唇下で急激に外反する。口唇部の外面端部は突帯状につくられ，やや受け口状を呈す。胴部は球形を呈し，肩に稜をもたない。台脚部は低く若干外へ張り，下端がやや丸味を帯びる。口頸部と胴部は別に製作された後接合しているが，胴部と台脚部は接合痕が見当たらず同時につくられたようである。ロクロによる整形であるが目は顕著ではなく，肩部に若干認められるのみである。肩部以下はロクロの回転を利用したヘラ削りが施される。口縁部から肩部にかけて濃緑色の自然釉がかかる。

2・3・4は平瓶である。3のやや斜位に立ち上がる口頸部は，上方でやや広がり口唇部は丸味をもつ。頸部より肩部へはふくらみをもって移行し，肩部には弱い稜が形成される。体部は丸味をもって移行し丸底となる。ロクロによる整形であるが目は弱い。口頸部のほぼ中央に浅い沈線が一条走る。肩部以下は回転ヘラ削りが施される。口縁部から肩部にかけて深緑色の自然釉がかかる。2の形状も3とほぼ同様であるが，口頸部は3より太目で短くなり，立ち上がりがさらに斜位となる。底部は若干平底状を呈す。肩部には太く浅い沈線が一条廻る。4は2・3と形態が異なる。口頸部はやや細く立ち気味となる。頸部より肩にかけては扁平となりふくらみがきわめて弱い。肩部には比較的明瞭な稜を有し，体部のふくらみが少ない。底部はやや平底状を呈す。ロクロ整形で，回転ヘラ削りは体部下半に施される。頸部より肩部にかけて濃緑色の自然釉が一面に認められる。

5は脚柱部を欠損する台付埦である。埦の体部は若干内傾しながら立ち上がり，口縁部で内傾がやや強くなる。口唇部は丸く成形される。裾部は脚柱部より若干外反しながらもほぼ直線状に開き，裾端部は突帯状に仕上げられる。埦部の整形はロクロによるが目はかなり弱い。体底部にのみ回転ヘラ削りが施される。脚柱部と埦の接合部には粘土の充塡が施され，細い沈線が一条廻るのが観察される。

6・7は坏身であるが形態をやや異にする。6の体部は若干内彎しながらも直線状に開く。底部内面は凹凸が激しい。底部外面には回転ヘラ削りが施される。体部下半にはカキ目が顕著で，上半はナデが加えられる。胎土は緻密で色調は乳白色を示す。7の体部はほぼ直線状に開き，口

唇部でやや受け口状を呈す。底部は粗いつくりで，巻き上げ整形で体部内外面ともナデが施される。底部内面は凹凸が激しい。胎土・色調とも6と同様である。8は全体にゆがみが激しい坏蓋である。天井部は小さくつくりが粗い。全体の成形後に粘土の充塡が行なわれたようである。体部は内傾しながら開き，下半で直線状に立ち上がる。口縁部はやや肥厚し，内側に浅い凹帯が廻る。天井部および体部上端には手持ちヘラ削りが施される。 他は内外面ともナデ調整である。6とは胎土自体異なり，砂粒を多く含む。色調は暗灰色を呈す。

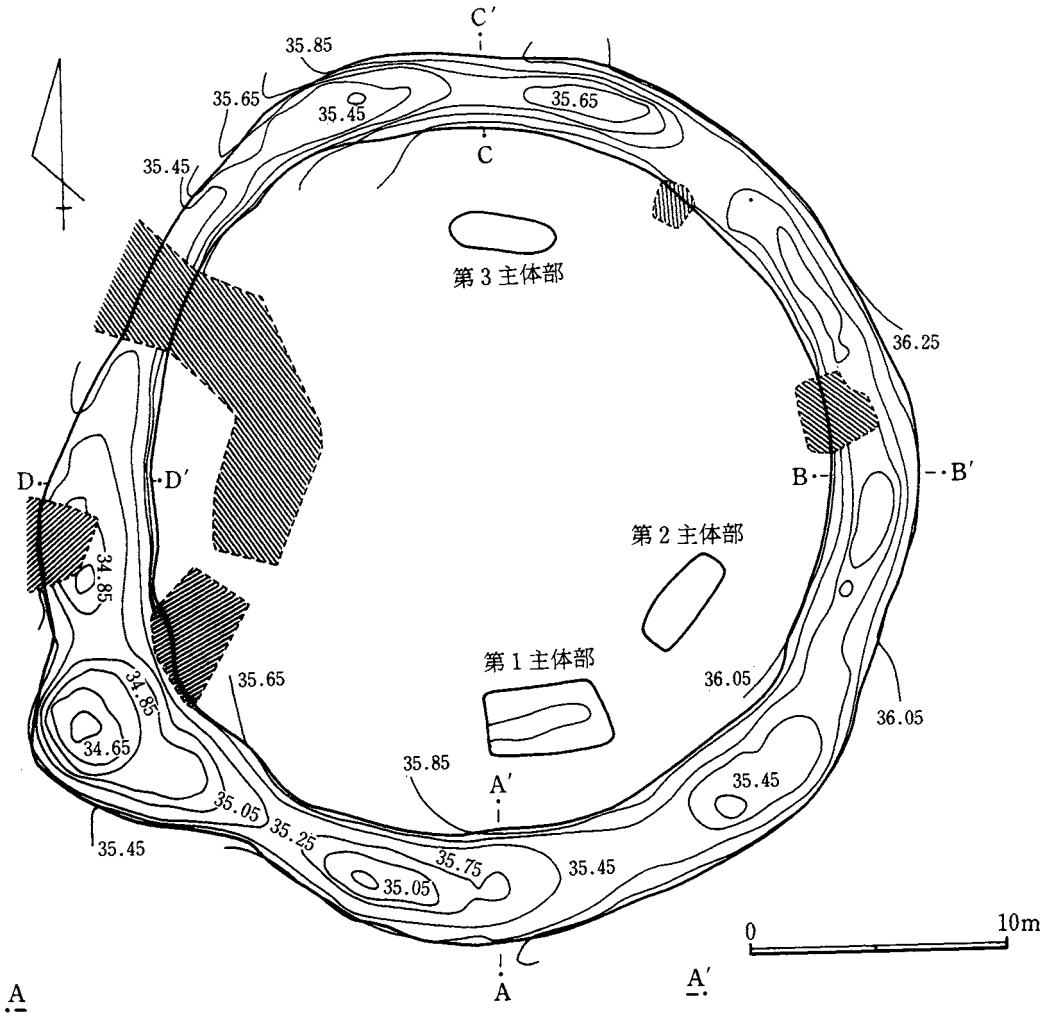


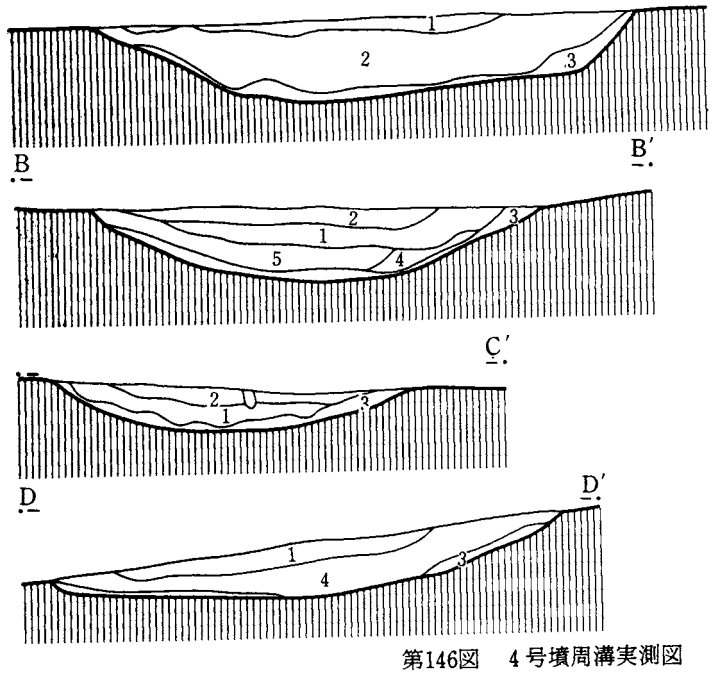
第145図　3号墳周溝出土須恵器実測図

4号墳

位置と現状

3号墳の南側に近接している。古墳群中最大規模をもつ古墳であるが，遺跡周辺の道路整備の際，工事関係者の現場詰所などの建築や重機等の出入のため3号墳，5号墳同様墳丘が全く残存しておらず，当初その存在は知られていなかった。遺跡の調査開始後北側で周溝が検出され，また幸いなことに周溝内縁に沿って3基の主体部を検出することができ，古墳の存在が明らかと





1. 暗褐色土(ローム粒混入)
2. 黒褐色土(ローム粒混入)
3. 黄褐色土(ロームブロック混入)
4. 褐色土　(ローム粒混入)
5. 暗褐色土

第146図　4号墳周溝実測図

なった。

墳丘と周溝（第146図）

墳丘は前述のごとく削平のため全く残存していなかった。

周溝は数か所に攪乱穴があるものの全体を検出することができた。北西側は削平のために底面近くだけが残存していた。平面形はほぼ円形を呈する。南西側に舌状の張り出し部が存在する。南北外縁で34.6 m，内縁27.5 m，東西外縁で34.2 m，内縁25.7 m を測る。底面は全体に7か所の浅い落ち込みがあり，起伏が認められる。立ち上がりは内・外縁側共緩やかであり，断面は丸みをもった浅鉢状を呈する。幅は北西側1.8～3.0 m，北～南側2.8～4.4 m を測る。深さは検出面より35～72 cm を測る。張り出し部は最大幅6.4 m，深さ0.8 m を測る。他の部分より深く掘り込まれているのが特徴であろう。底面は丸底で緩やかに立ち上がっている。周溝内の覆土は西側で3層，その他で5層に区分できた。黒褐色土，暗褐色土，褐色土，黄褐色土が主体であり，全体に流れ込みによる堆積状況を示している。

遺物は少ないが，南側と北東側で坏形土器が出土している。いずれも周溝底面から正位の状態で出土しており，状況から本古墳に伴うものとして考えたい。

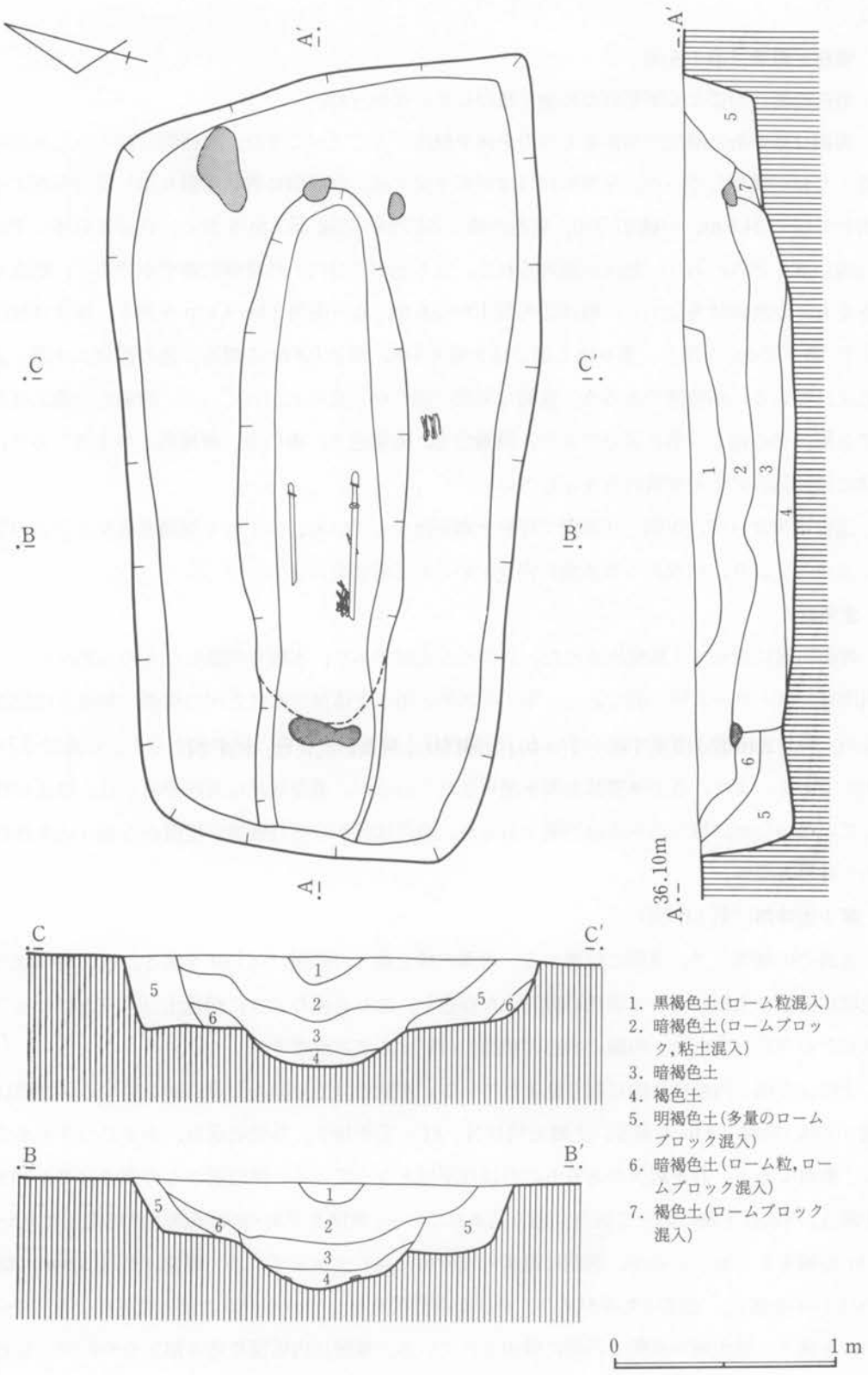
主体部

周溝内縁に沿って3基検出された。いずれも土坑であり，木棺を埋置したものと思われる。検出面はソフトローム層上面である。第1主体部と第3主体部は南北方向の周溝中軸線上に位置するが，第2主体部は南東に偏っている。周溝内縁上端と各主体部の周溝側上端との距離は2.7～3.9 m である。また，各主体部共上面を削平されているが，遺存状況は良好であった。墳丘が残存していないために掘り込み面は不明であるが，遺存状況からそれ程高い位置から掘り込まれたものとは思えない。

第1主体部（第147図）

周溝の中軸線上で，南側に位置する。周溝内縁上端との距離は2.7 m を測る。検出時の状況は土坑中央部に主軸に沿って黒色有機質土が存在し，それを囲むように褐色土（ロームブロックを含む）が存在していた。明瞭に木棺の範囲を確認することができた。

土坑は外坑と内坑の2段に掘り込まれている。平面形はやや歪んだ長方形を呈する。規模は長軸4.7 m，短軸2.4 m を測る。主軸方位はN－81°－E を指す。外坑底面は，あまりつき固めてはなく軟質である。若干起伏があるもののほぼ平坦となっている。確認面からの深さは0.3～0.6 m を測る。内坑は主軸に沿って細長く掘り込まれている。東側及び南・北両側面は外坑底面に0.5～0.6 m の幅をもたせているが，西側は直接外坑壁面に立ち上がっている。規模は長さ3.9 m，幅0.6～1.1 m を測る。底面は丸みがあり，断面が舟底状を呈している。深さは外坑底面より0.1～0.2 m を測る。粘土塊が東側と西側に検出されている。東側は内坑掘り込み部とやや外側に分散している。西側は壁から内側に一塊りとなっている。検出面は外坑底面と同じレベルである。西側



第147図　4号墳第1主体部実測図

の粘土塊断面の観察から原位置を保っているものと思われる。

木棺は内坑底面に埋置され，東・西の小口部を粘土塊で安定させたものと思われる。土坑の埋土は暗褐色土，褐色土が主体である。木棺を埋置したと思われる内坑及びその上面と外坑側とは明らかに土質の差異があり，外坑側には砂質粘土，ロームブロックが多量に混入していた。これは，木棺を土坑中央に埋置した後，その周囲に砂質粘土，ロームブロック等を混ぜ合わせた土を充塡し，木棺の安定を計ったものと理解できるだろう。

遺物は直刀2口，刀子1本，鉄鏃34本である。直刀は内坑の中央で，北側と南側に主軸に沿って出土した。鋒を西に，刃を土坑の内側に向け底面に密着していた。刀子は南側の直刀の下に重なっていた。鉄鏃は，34本の内25本が南側の直刀の鋒部で鏃身を西に向けて出土した。また8本は，外坑底面で内坑のやや南側に鏃身を西に向けて出土した。この鉄鏃は，棺埋置後に棺の南側面に副葬されたものと思われる。また内坑の遺物出土状況から，被葬者は頭を東に向けて埋葬されたものと思われる。

第1主体部出土遺物（第150・151図）

直刀（1・2）

1は全長77.7 cmを測る完形品である。両側に関を有し，平棟・平造りとなる。茎長に比して刀身が長く，鋒はふくらのかれたカマス鋒を呈す。縁金具・鐔とも遺存する。鐔は長径 6.2 cm，短径 4.9 cmを測り，下端が尖る倒卵形を呈す。茎部には，目釘孔が2個穿たれる。鐔側の目釘孔には，2×4 mm程の長方形の目釘が折れて遺存し，尻側の孔には，木質で覆われているものの3×5 mm 程で長さ 21 mm を測るやはり長方形状の目釘が完存する。この目釘の頭部はやや広げてから折り曲げられている。木質は茎に良好に遺存しており，特に鐔側は把木の旧状をうかがえる状況である。他に把頭と締金具が装着されて出土している。把頭ははめ込まれたもので，長さ6.8 cm，長径4.1 cm，短径3.3 cm，厚さ4～5 mmを測る。断面は楕円形を呈し，先端部は丸味をもって閉じられる。締金具は把頭に密着して出土したが，この把木の腐朽によって移動したものであり，本来は鐔に伴うものであろう。長径 4.9 cm，短径 3.8 cm を測り，倒卵形を呈す。内側に遺存する木質を貫通した目釘状の鉄製品が若干認められる。

2は全長60.7 cmを測る。刀身は鋒側でかなり内反する。鋒はややふくらのかれたカマス鋒に近い形を呈すが，1ほど極端ではない。平棟・平造りで関部は錆のため明確ではないが，両関の形を採るものであろう。完存する縁金具は特徴的で，筒抜けものではなく，関部で折り曲げられ刀身に密着する形態である。茎尻には目釘孔が一個穿たれる。他孔の存在の可能性もあるが錆のため不明である。

刀子（3）

1の直刀に付着して刀身部のみ遺存する。先端が鋭く尖がり，全体に細いところから，何度か研ぎ返された可能性が強い。

鉄鏃（1～34）

本主体部より出土した鉄鏃は，棺外と棺内に分けられるものの，形態を異にするような行為は見当たらない。ゆえにここではそれらを一括して記載する。なお，棺外副葬品は20・21・23・24・26・30・33・34である。

1・2・4は刃側に切り込まれる関を有す片関片刃箭式，21～24は無関片刃箭式である。いずれも長い篦被と茎の間に棘状突起を有す。22は先端を若干欠損するものの，全長 17.3 cm を測る。3は片関鏨箭式，25～27は無関鏨箭式である。3が片丸造りで他は両丸造りとなる。25の茎には矢柄上への巻きつけが棘状突起下に認められる。5～11，14～20，32は長三角形式の鏃身を有す。本主体部出土の鉄鏃で主体を占める形態である。すべて両丸造りで，長い篦被と茎の間に棘状突起を有す。5のように鋒上方に肩を有し五角形に近い形を呈すもの，20のように広鋒となるもの等鏃身の形態をやや異にするものが含まれる。茎部の木質は良好に遺存しており，特に20には矢柄に繊維質の紐を巻きつけている状態が観察される。32は端部を若干欠損する 5 cm 程の大形の鏃身に扁平で短い茎を有すもので，弱い腸抉がはいる。ほぼ中央に孔が一個穿たれる。鏃身を両側からはさみ込む矢柄を着装するもので，その痕跡が若干認められる。33・34は有茎の腸抉柳葉式であるが，側縁のカーブはそれ程顕著ではない。いずれも両丸造りである。33には矢柄が装着された状態で遺存しており，はさみ込みが明瞭に観察される。矢柄にはさらに巻きつけが認められる。34の鏃身には孔が一個穿たれており，やはり同様の矢柄装着法を採るものである。33にも孔が一個存在するであろう。

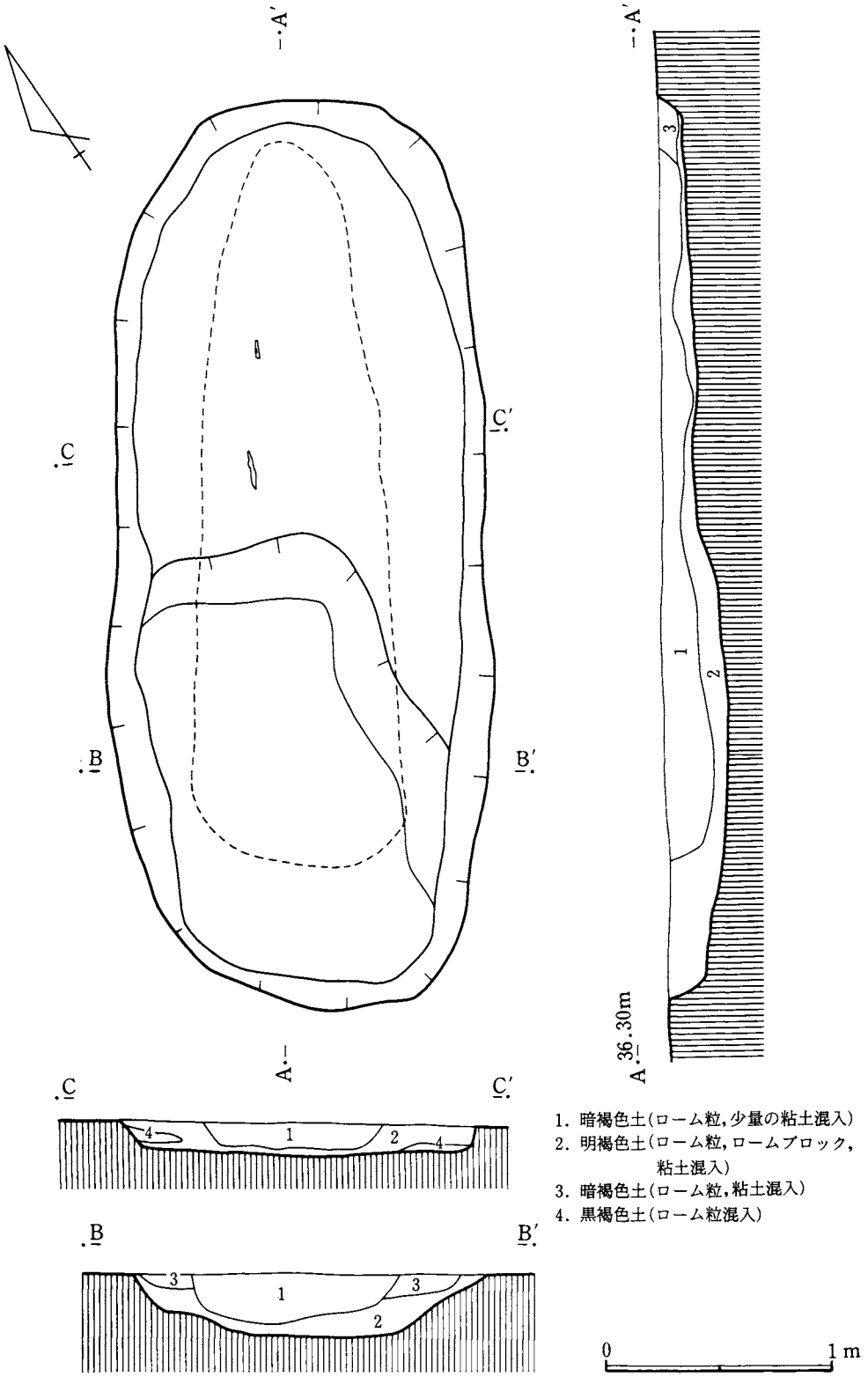
第2主体部（第148図）

周溝の中心部より南東に偏っており，第1主体部から北東へ 3 m の距離に位置する。

平面プランは隅丸長方形を呈する。規模は長軸 4.0 m，短軸 1.7 m を測る。主軸方位はN－34°－Eを指す。底面は踏み固められてはおらず軟質である。中央より南側が一段低くなっており，その高低差は 15～19 cm である。全体にあまり平坦ではない。検出面からの深さは南側で 32 cm，北側で 11～20 cm を測る。土坑断面は起伏があるため不定形であるが，おおむね逆台形状を呈している。

第1主体部と同様に木棺を埋置したものと考えられるが，埋置範囲は明確に知り得なかった。土層断面及び検出面での平面的な精査では，土坑中央部に暗褐色土（ローム粒，褐色土，灰白色粘土を含む）が存在し，その周囲に明褐色土（ローム粒，ロームブロック，灰白色粘土を含む）が認められており，この土坑中央部の暗褐色土の範囲に木棺を埋置したものと推定したい。また粘土塊は検出されなかった。

遺物は刀子2点が出土している。第1主体部，第3主体部に比べ貧弱である。土坑中央よりやや北側にたがいに離れて，鋒を南側に，刃を西側（外側）に向けた状態であった。出土レベルは底面より 4 cm 程上であるが，暗褐色土層下面と一致している。この他，埋土に混在して土器片



第148図　4号墳第2主体部実測図

が7点出土している。

第2主体部出土遺物（第150図）

刀子（10・11）

10は全長17.2cmを測る完形品である。両関造りで，鋒がやや外反する。刀身は茎にくらべかなり細くなっており，何度か研ぎ返された様子をうかがうことができる。11は鋒部および茎尻を欠損する。10にくらべ小形で，関部は錆のため不明である。縁金具が断片ながらも棟側に遺存しており，木質もこの部分に顕著に認められる。

第3主体部（第149図）

周溝の中軸線上で北側に位置する。周溝内縁上端と土坑上端との距離は3.9mを測る。東西の両端が丸みを帯びる長楕円形を呈する。規模は長軸4.1m，短軸1.6mを測る。主軸方位はN－82°－Wを指す。坑底は，東側端と西側端に深さ5～8cm程の落ち込みがあり，かつ全体に起伏が認められる。また全体に軟質である。横断面は舟底形を呈する。検出面からの深さは46～53cmである。粘土塊は東側端と西側端に検出された。それぞれ坑底から10cm程上面に存在しており，特に東側では広範に分布している。おそらく，木棺の木口部を固定するために用いたものであろう。また，土坑粗掘りの後木棺を埋置するために，坑底に黄褐色土，暗褐色土を主体に敷きつめていることが土層断面より確認された。土坑内の埋土は，大別すると暗褐色土，褐色土，黄褐色土に区分されるが，概して外側にロームブロック，灰白色粘土を混入して充塡したことがうかがわれる。

遺物は東側木口の南側面よりまとまって出土している。直刀1口，鉄鏃3本である。直刀は鋒を東小口に，刃部を南側（外側）に向けて出土し，鉄鏃は身を東側に向け，直刀の鋒部から出土している。

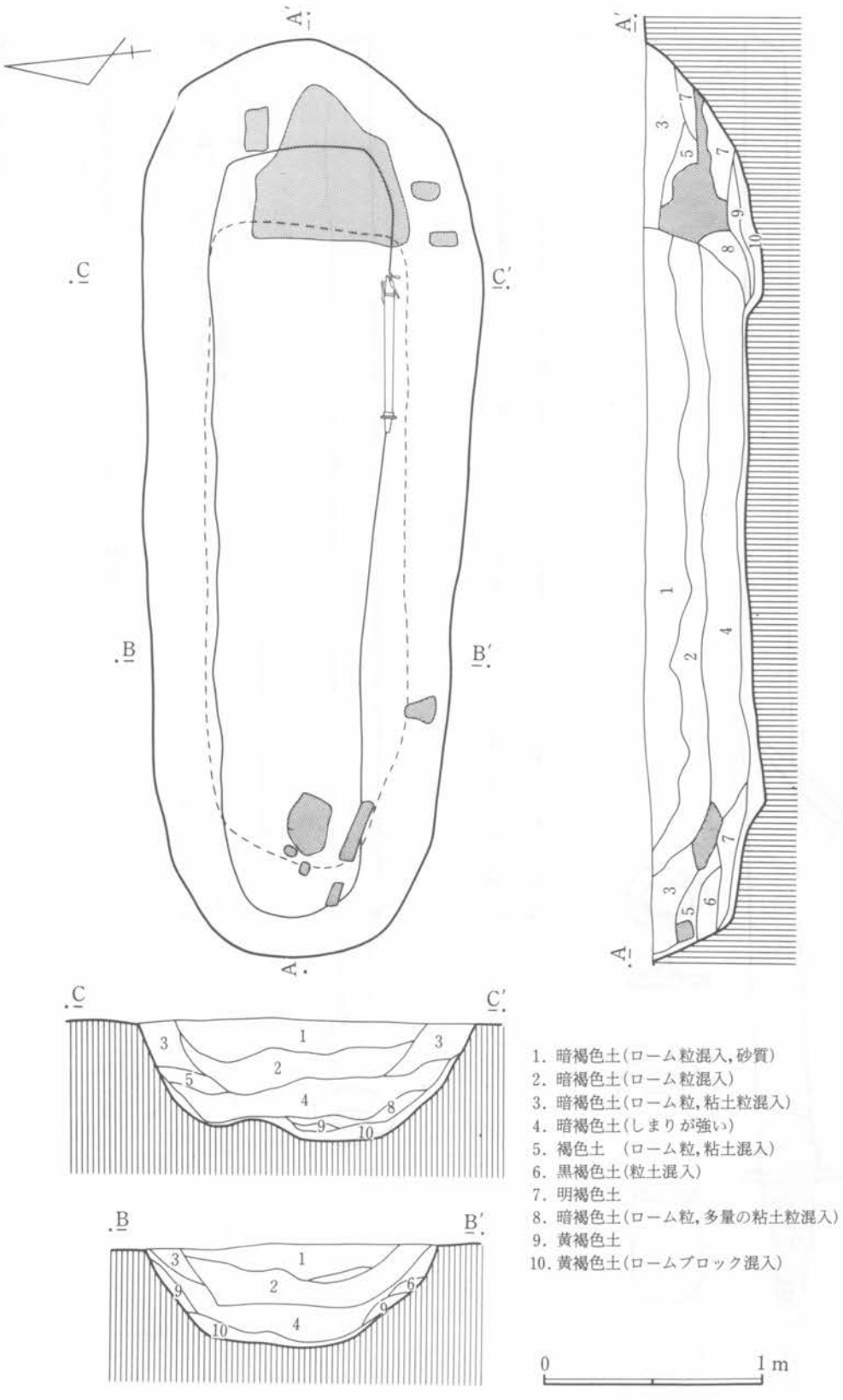
第3主体部出土遺物（150図）

直刀（4）

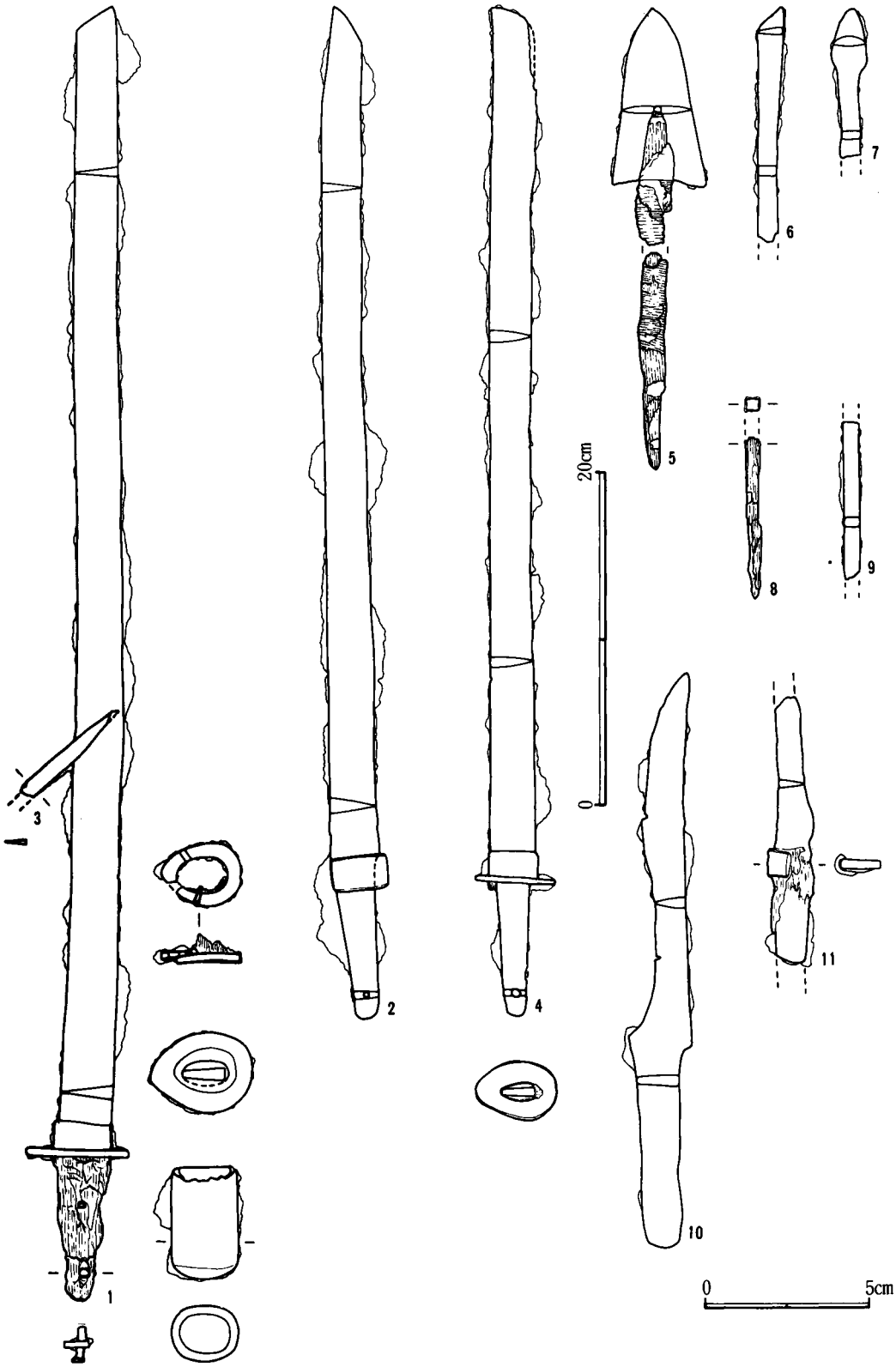
全長60.6cmを測る完形品である。平棟・平造りで，鋒はふくらのかれたカマス鋒を呈す。関は両側に切り込まれ，縁金具・鐔とも完存する。鐔は長径4.9cm，短径3.5cmと小形で，倒卵形を呈すものの喰出鐔に近いものである。茎は8cm程と短く尻側に目釘孔を一個有す。

鉄鏃（5～9）

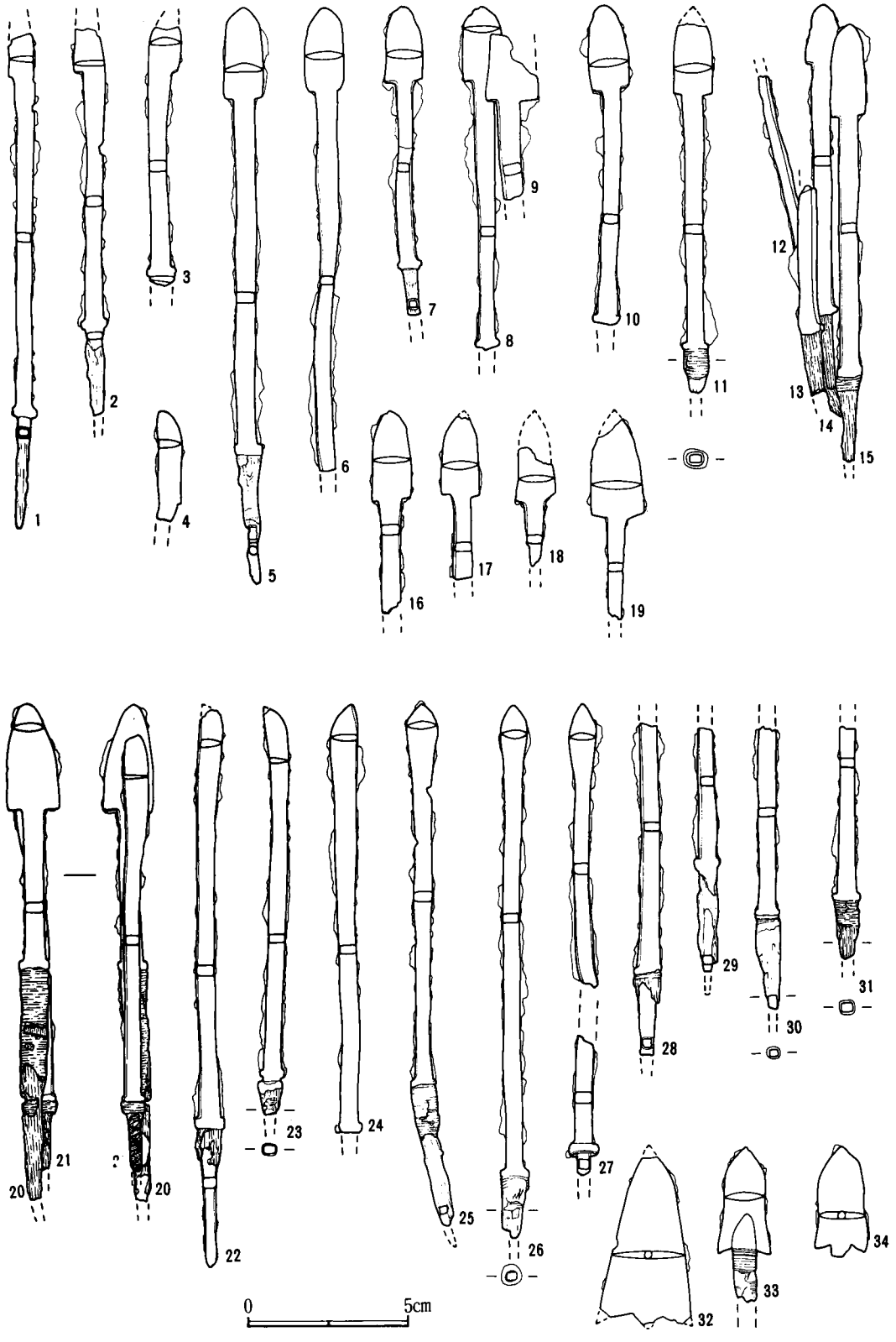
5は，短い茎をもつ広鋒の長三角形鏃で弱い腸抉がはいる。平造りとなるもので，ほぼ中央に孔が一個穿たれる。矢柄がきわめて良好に遺存しており，その装着法をうかがうことが可能である。矢柄を上部のみ半載し，鏃身をはさみ込んでいる。孔の位置にある矢柄には横走する繊維質の紐が若干観察されることにより，孔に紐を通して両側の半載された矢柄を8の字状に結んだことが示唆される。茎下の矢柄には巻きつけの痕跡が顕著に遺存する。6は無関片刃箭式，7は両関鑿箭式で箆被を有す。8・9は箆被および茎の部分である。



第149図　4号墳第3主体部実測図



第150図　4号墳主体部出土遺物実測図 (1)



第151図　4号墳主体部出土遺物実測図 (2)

周溝内出土遺物

土師器（第159図21・22）

21は22より大形の坏で口縁部を⅓程欠損する。体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部で内傾するが，体部と口縁部の境には稜をもたない。底部は明瞭ではないが，削りによって区別され，小さい平底状を呈す。体・底部にはヘラ削り，口縁部には横ナデが施される。内・外面に赤彩が認められるが，胎土・焼成とも不良で，器面には剝落が顕著に観察される。22は小形の坏で，口縁部を若干欠損する。体部は内彎気味に開き，弱い稜を形成して口縁部に移行する。口縁部は内傾する。底部と体部の境は比較的明瞭で平底気味となる。口縁部は横ナデ，体・底部にはヘラ削りが施される。内面は黒色でナデが加えられる。

5号墳

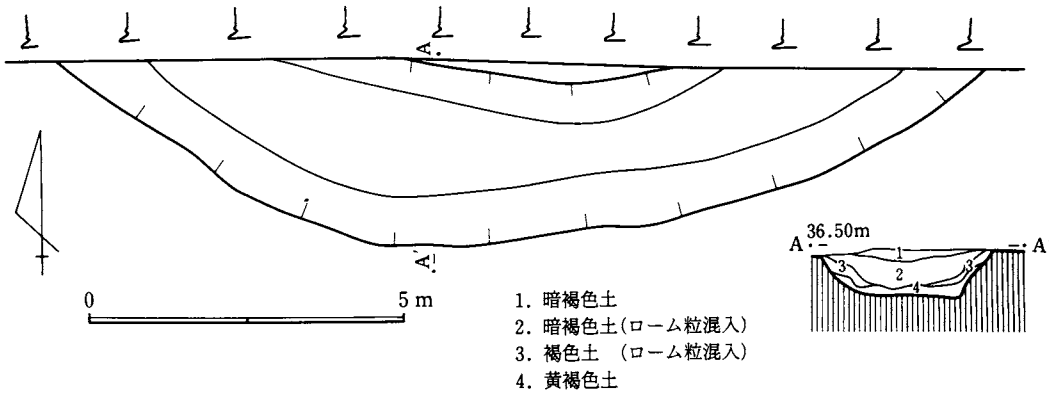
位置と現状

古墳群中最も北に位置し，舌状台地の基部に占地している。西側に3号墳が近接している。調査開始以前に台地の基部付近を削平されたために墳丘，主体部と周溝の大部分が破壊されている。調査においては周溝南側の一部が検出されたのみである。

周　　溝（第152図）

検出された周溝は南側の一部である。このため全体の規模は不明である。幅は上縁で 1.8～2.3 m を測る。底面はわずかに起伏が認められる。立ち上がりは内側，外側共緩やかである。断面は逆台形状を呈する。深さは 47～55 cm を測る。覆土は4層に区分された。暗褐色土，褐色土，黄褐色土が主体である。すべて流れ込みによる堆積状態である。

遺物は少ない。すべて土器片で，覆土上層から出土している。



第152図　5号墳周溝実測図

6号墳

位置と現状

本古墳は2号墳の南西に位置している。台地の西側の小支谷に面した緩やかな傾斜面に占地している。きわめて低い墳丘をもつ古墳であるため，当初その存在は確認し難い状況であった。このため墳丘測量を実施せず，周囲の確認も含めて墳丘の頂部と思われる箇所を中心として東西南北にセクションベルトを設定し，調査を行なった。この結果周溝が確認され円墳の存在が明らかとなった。

墳丘と周溝（第153図）

墳丘は，断面観察の結果旧表土上に盛土して構築されたことが確認された。また，封土のほとんどが存在しておらず，詳細な構築過程を観察するのは困難であった。旧表土は傾斜面に沿って厚さ 10～20 cm で残存している。周溝内縁側は 1.5～3.5 m の幅で削平されており，東側で最も幅が広くなっている。また，削平された部分は 20 cm 前後の高低差でテラスを形成している。封土は前述したようにほとんど残存しておらず，現状では上面に繁茂していた雑木類などの攪乱により，暗褐色土の単層（いわゆる表土層）だけが確認されただけである。なお旧表土層上面と現存する墳頂部との高低差は 38 cm である。

周溝は全体を検出した。やや歪んだ円形を呈する。南北の外縁で 19.8 m，内縁で 15.1 m，東西の外縁で 21.8 m，内縁で 15.3 m を測る。西側は他の部分より 1.5 m 程外側に張り出しており，4号墳の周溝と同様の特徴をもっている。周溝の幅は 1.7～2.7 m，深さ 40～52 cm を測る。張り出し部は幅 3.8 m，深さ 50 cm を測る。立ち上がりは内縁側が比較的急な角度であり，外縁部は緩やかである。断面は浅鉢状で，底面は丸底を呈する。周溝内覆土は3層に区分された。黒褐色土，黒色土，黄褐色土が堆積している。墳丘方向からの流れ込みによる堆積状態を示している。

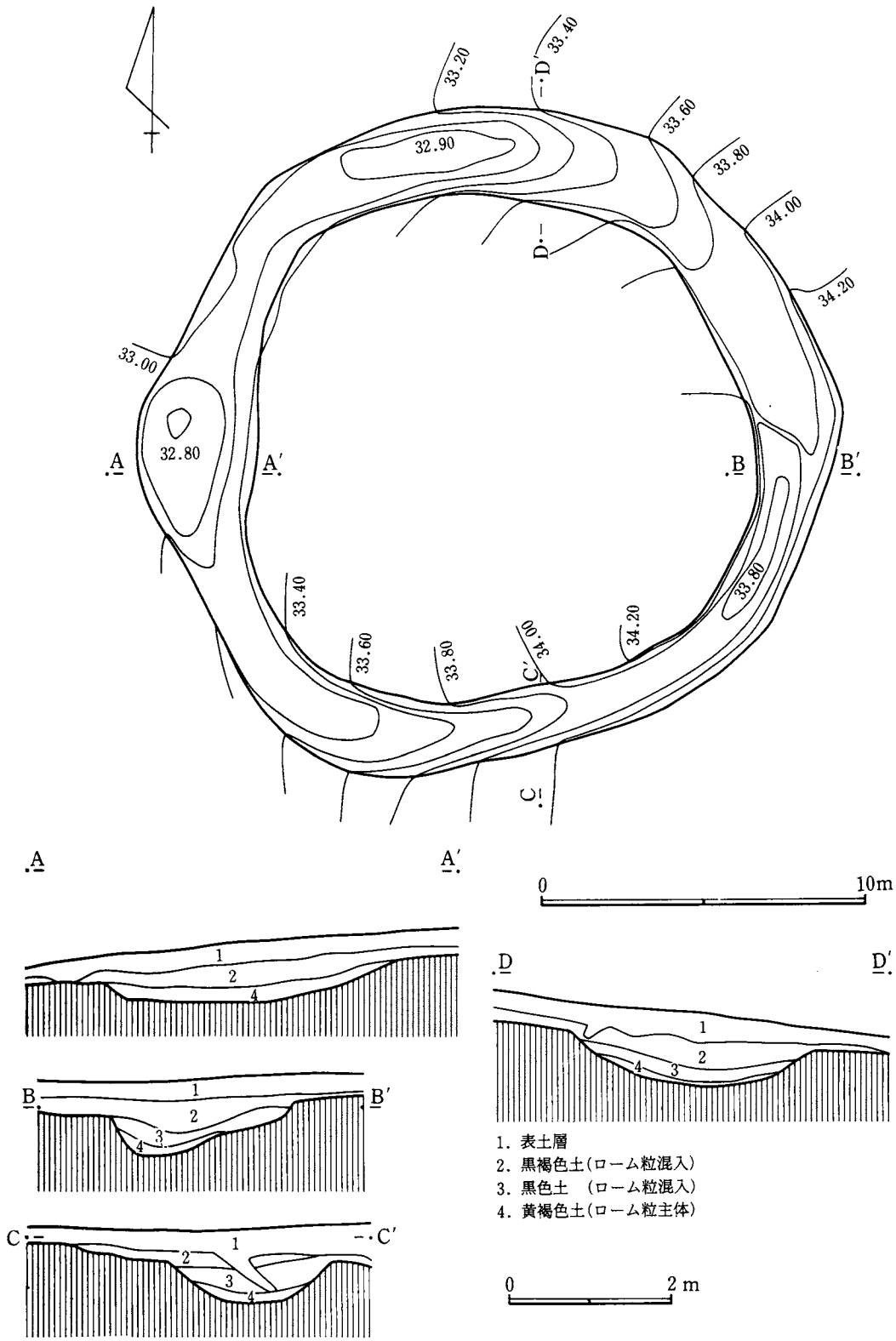
遺物は墳丘，周溝共に少ない出土量である。墳丘内西北側で須恵器が破片で出土している。また旧表土中より高坏，器台が出土している。

主体部

旧表土層上面で主体部の確認を行なったが検出できなかった。さらに1号墳，2号墳と同様にソフトローム層上面まで入念に精査を行なったが，主体部は検出されなかった。

墳丘内出土遺物（第160図23～27）

24，25は高坏である。24は口縁部および脚部を⅔程を欠損する。坏部は口縁部と底部の境界に稜をもつ。口縁部は上半を欠損するものの直線的に外に開くものであろう。脚部も直線的に外へ開き，裾端部はわずかに内彎する。透孔は2個現存するが，本来3個均等に穿たれたものである。穿孔は外側から施され内側に粘土がはみ出す。調整は器面が粗いため明確ではないが，ナデによるものであろう。脚部内面は，横位ヘラ削り後ナデを施す。25は脚部で24よりやや小形であるが，形態はほぼ同様である。透孔は3個認められるものの，他一個穿孔しようとした痕跡が残る。



第153図　6号墳周溝実測図

これからみると，穿孔は器面調整後に行われたようである。外面にも縦位の細かなヘラミガキが施される。

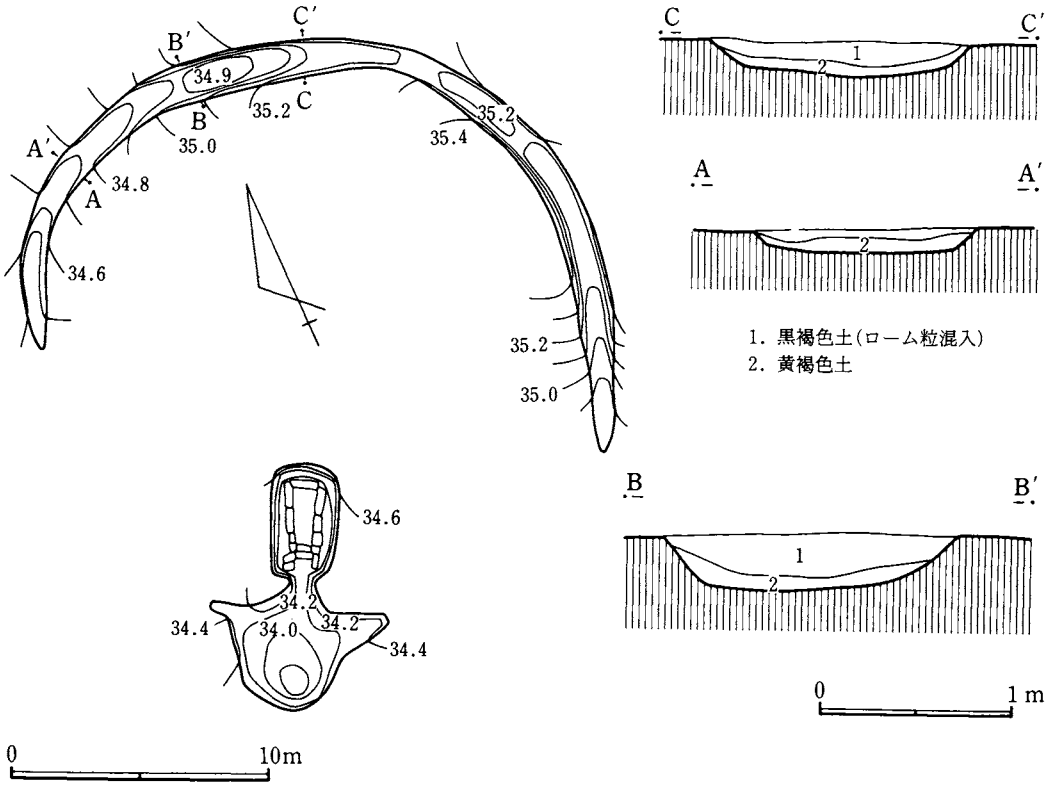
23・26は器台で，23のみ全面に赤彩が施される。23は器受部が⅕程遺存する。器受部はほぼ水平に開き，口縁部でほぼ垂直に短く立ち上がる。脚部は外彎気味に開く。透孔は3個認められるが均等ではない。器受口縁部は横ナデ，他はナデが施される。脚部外面には弱いミガキが縦位に認められる。26は器受部・脚裾部を欠損する。透孔は3個でほぼ均等である。脚部外面は縦位のヘラミガキ，内面上半には横位のヘラ削りが残る。2にくらべ胎土・焼成ともやや雑である。

27は短頸壺で胴上半部を欠損する。底部はやや平底状を呈し，胴部は球形となるものであろう。ロクロ整形で，目は比較的明瞭に残る。胴下部および底部には回転ヘラ削りが施される。胎土・焼成とも良好で，灰白色を呈す。

7号墳

位置と現状

本古墳は台地南端の中央部に位置する。台地はこの先端で急傾斜で谷津に落ち込んでいる。6号墳からは東に約 10 m の距離にある。本墳も掘削用重機等により墳丘を破壊されており，当初



第154図　7号墳周溝実測図

その存在は全く知られていなかった。調査開始後周溝の一部及び主体部を確認するに至り，はじめて古墳の存在が明らかとなった。

墳丘と周溝（第154図）

墳丘は，前述のごとく削平のため全く遺存していない。

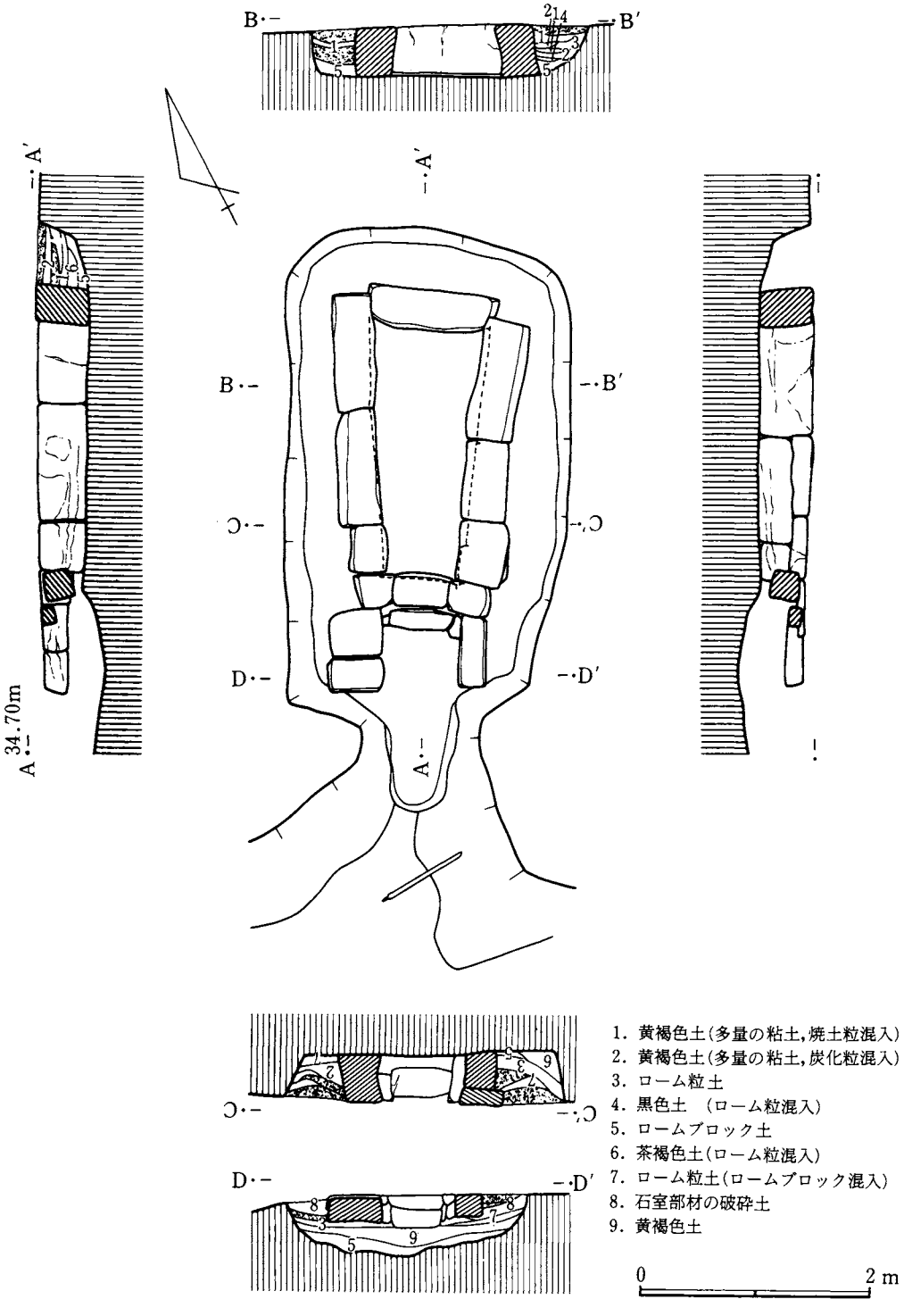
周溝は，主体部に続く一部分と西北側から東側にかかる全体の約½を検出することができた。東北側では55号住居址，60号住居址と重複関係にある。全体ではほぼ円形に廻るものと思われる。主体部南側では外側に張り出しが認められる。規模は東西が外縁径 23.4 m，内縁径 21 m，南北は張り出し部を含めて外縁径 25.8 m，内縁径 22.1 m を測る。幅は最も遺存状態の良い北側で 1.3～1.6 m を測る。検出面からの深さはいずれも浅く 11～27 cm であり，張り出し部では 56 cm を測る。断面は全体に逆台形を呈する。周溝内の覆土は，確認された部分で2層に区分された。黒褐色土，黄褐色土が主体であり，流れ込みによる状態であった。

主体部（第155図）

主体部は南向きに開口する両袖式の横穴式石室である。

土坑は北側の両隅が丸く，南側でわずかにつぼまる羽子板状を呈する。奥壁側幅 2.5 m，羨門側幅 2.1 m，長さ 4.3 m を測る。底面は長さ 4.1 m，幅 1.7～2.3 m を測る。底面はほぼ平坦である。掘り込みの深さは上面を削平されているため不明であるが，現存高は 43～47 cm を測る。

石室は軟砂岩の截石を構築材として用いている。上面を削平されたために天井石，奥壁，側壁共に遺存状態がきわめて悪く，側壁ではわずかに1段目の石の状況が確認できる程度である。石室全体の長さは 3.5 m を測る。玄室床面のプランは玄門側でつぼまる羽子板状を呈する。規模は奥壁側 1.1 m，玄門側 0.7 m，左壁側 2.3 m，右壁側 2.2 m，主軸で 2.2 m を測る。主軸方位はN—25°—Eを指す。奥壁は，上面を削平されているため本来の規模は不明である。おそらく3号墳石室と同様に一枚の截石を使用したものと思われる。現存高 0.5 m，厚さ 0.3 m，幅 1.1 m を測る。主軸に対してやや南寄りに斜めに置かれている。側壁との接合部は切り込みは施されていない。側壁は厚さ 30～35 cm 前後の直方体の截石を用いている。右側壁は奥壁側で1枚，玄門側で2枚を横長に2段に布目積みして高さを調整している。左側壁は3枚を横長に置いている。袖は，底面から 10 cm 程の厚さで黄褐色粘土を敷きつめ，その上に袖石を立て，間に框石を置いている。袖石は右袖石が厚さ 7 cm，左袖石が厚さ 25 cm を測る。右袖石は本来もう少し厚い部材を使用していたものと思われる。框石は本来の規模をとどめており，全体に外側に傾いている。玄門の幅は框石上端で 49 cm を測る。羨道部は簡略化されており，両袖から 60 ～ 72 cm 程側壁が張り出している。側壁の間で，框石の前部には長さ 57 cm，幅 17 cm の截石が底面から 18 cm 程の高さの位置に置かれている。この截石と側壁との間には砂質粘土が充填されている。また，框石上端より高い位置に出ていることからこの截石が閉塞の役割を果たすものと思われる。羨道側壁は底面より高さ 33～41 cm の位置に置かれている。右側壁は長さ 58 cm，幅 24 cm の截石を



第155図　7号墳第1主体部実測図

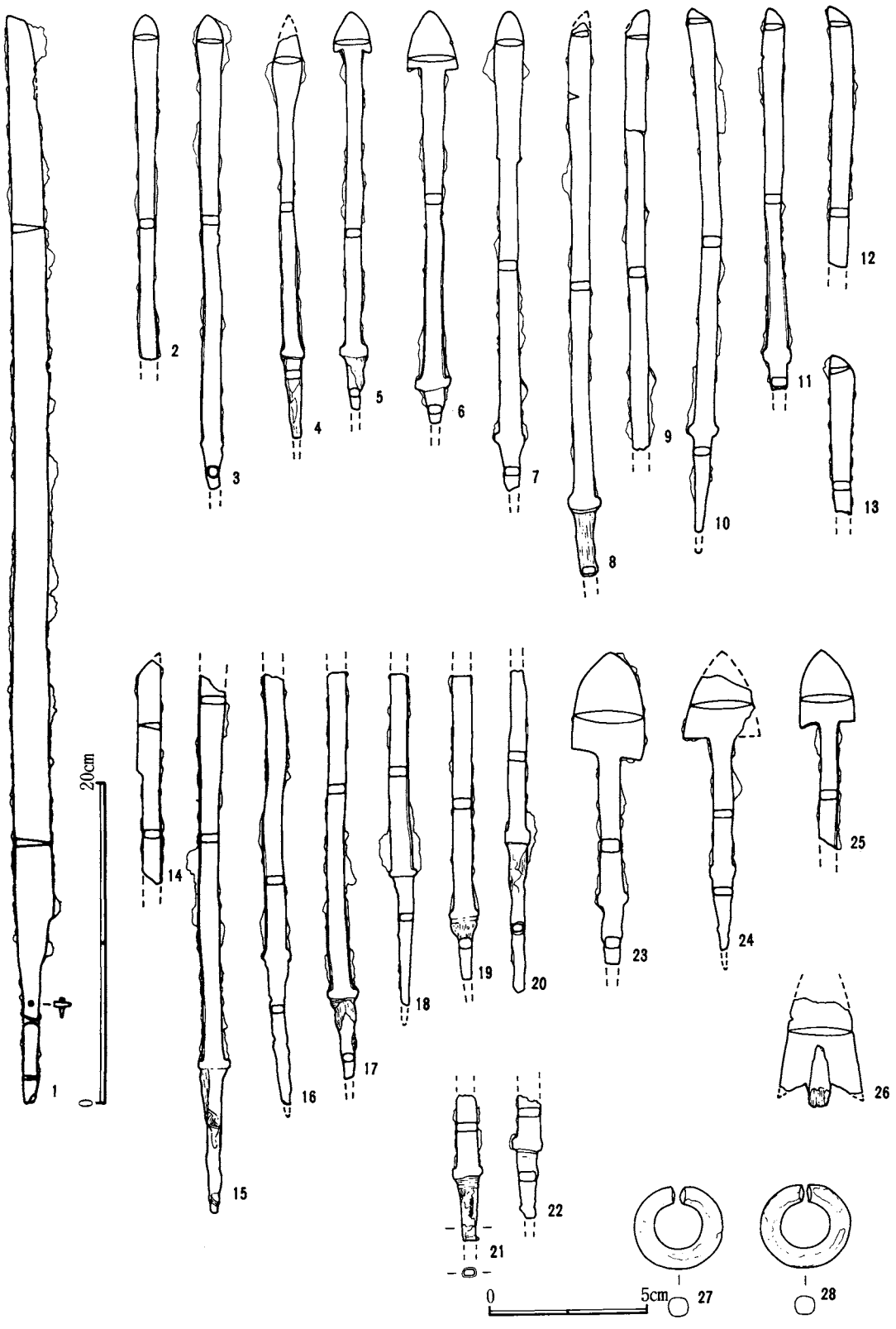
一枚使用している。左側壁は幅 47～50 cm の截石を 2 枚横積みにしている。羨道部幅は最も周溝寄りで 1.1 m を測る。羨道部底面は起伏があり，周溝に向かって緩やかに立ち上がっている。検出面からの深さは 38～53 cm を測る。石室の裏込め土は，底面から 10 cm 程の厚さでロームブロックを充塡した後黄褐色粘土，黒色土，青灰色粘土，褐色土を交互に重ねており，特に奥壁部，側壁中央部でその傾向が著しい。また羨道部はロームブロック，ローム粒を含む茶褐色土，褐色土，黒褐色土を充塡している。石室前面の周溝断面の観察から，玄門から羨道部にかけては早い時期に密封，閉塞を行なったものと思われる。

遺物出土状態（第 156 図）

石室内の出土遺物は鉄鏃 34 点，耳環 2 点である。玄室中央から奥壁に至る範囲で右側壁側に多く出土している。出土レベルは底面から 30 cm 程の範囲である。鉄鏃は石室幅いっぱいに散在しており，どれが原位置を保っているかは判断し難い状況である。おそらく相当の攪乱を受けたものと思われる。耳環は右側壁寄りと中央部で検出された。中央寄りから出土したものは底面直上であった。

前庭部から直刀 1 口，土器片 14 点が検出された。直刀は鋒を東に，刃部を南（周溝側）に向けた状態で，遺構検出面から 10 cm 程下面で出土した。遺存状況は鋒から茎までほぼ完存していた。出土地点の土層状態は，石室方向からの流れ込みによると見られる石室部材片を含む黒褐色土，褐色土が堆積しており，大幅な攪乱を受けてはいない状態であったが，石室内の遺物が相当散在していることから，あるいは盗掘によって石室外に持ち出され，置きざりにされたのかもしれない。

第156図　7 号墳第 1 主体部遺物出土状況図



第157図　7号墳第1主体部出土遺物実測図

石室内出土遺物（第157図）

直刀（1）

全長 85 cm を測る完形品である。平棟・平造りで，刃側に関がある。刀身は長さに比してやや細身である。鋒はふくらのかれたカマス鋒を呈す。茎のほぼ中央部と尻側に2個目釘孔が穿たれる。中央の孔には，頭部を欠損する目釘が遺存している。鐔等は検出されなかった。

鉄鏃（2～26）

26を除いてすべて篦被と棘状突起を有すものである。2～4は無関鑿箭式，7は両関鑿箭式である。7は鏃身が4.7 cm と長いものである。すべて両丸造りとなる。8～14は片刃箭式で14が刃側に関を有す以外は無関である。8は鋒先および茎尻を若干欠損するものの，推定20 cm 前後を測る長いものである。5，6，23～26は三角形式の部類に入るものであるが，後者の方が鏃身が大形で，太く短い篦被をもつ点様相が異なっている。また，23は五角形式に近い形状，24はほぼ正三角形となるように，鋒の形態にも若干バラエティーが存在する。26は腸抉のある長三角形式となるものであろう。矢柄の遺存により孔の確認が困難であるが，1個穿たれていることは間違いない。すべて両丸造りである。15～22は篦被から茎にかけての部分で棘状突起が観察される。

耳環（27・28）

銅地に鍍金したものである。両者ともほぼ同じ大きさで，外径 2.6×2.8 cm を測る。断面はやや角が張る円形で 5×6 mm となる。

周溝内出土遺物（第160図28）

壺の口縁部から胴上半にかけての破片である。頸部は上半で開きが大きくなり，複合口縁をもつ。口唇部には不規則で弱い刻目が認められる。頸部と胴部の接合部以下に櫛状工具による文様帯が施される。この文様帯は，5本を1単位とする平行線と，3～4本を1単位とする鋸歯状文の組み合せによる。内外面とも入念なナデが施され、刷毛目を消失させる。胎土・焼成とも良好で，茶褐色を呈す。赤彩は観察されなかった。

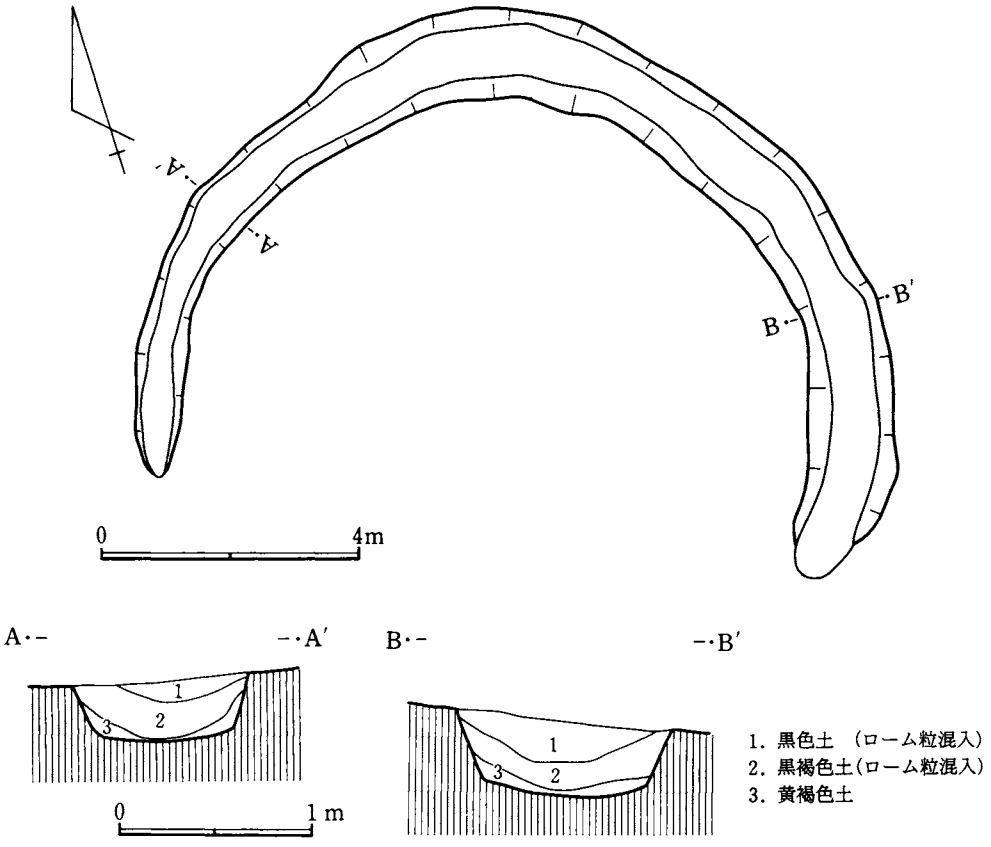
8号墳

位置と現状

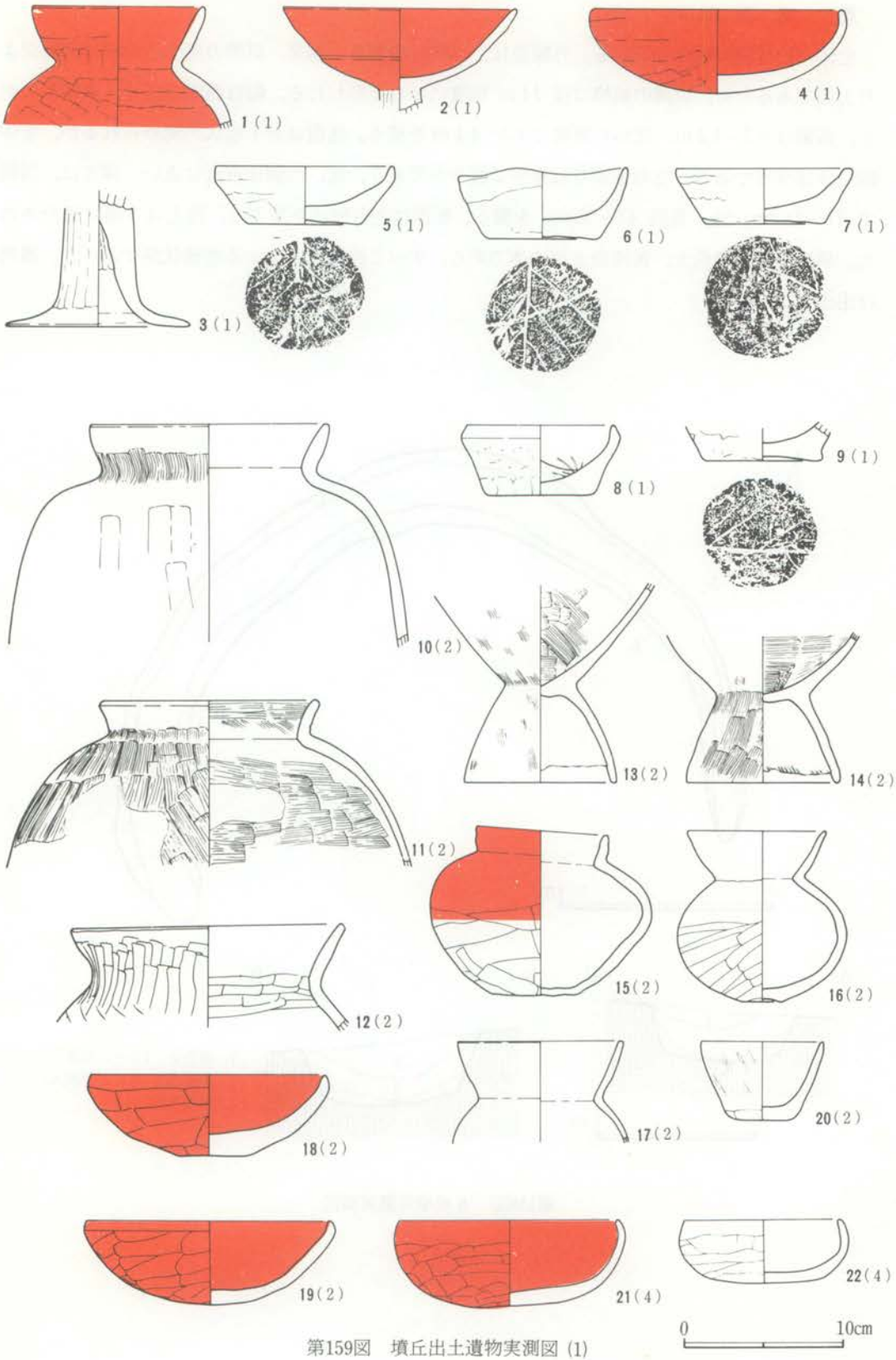
台地の南東端に位置する。南側は台地先端部で急傾斜で谷津に向っており，古墳はこの傾斜面にかかっている。本来は，台地先端部が現状よりさらに南側にのびていたものと思われるが，調査前に大型掘削用重機により上面をかなり削平されたため，地形図でみられるコンタラインより急な傾斜となっている。このため古墳の遺存状態は非常に悪く墳丘と周溝南側は破壊されていた。また主体部は現状では確認されていない。おそらく，3号墳，7号墳のように南側に主体部をもつ古墳の1つであり，削平を受けた際に主体部も同時に破壊されたのであろう。

周　　溝（第 158 図）

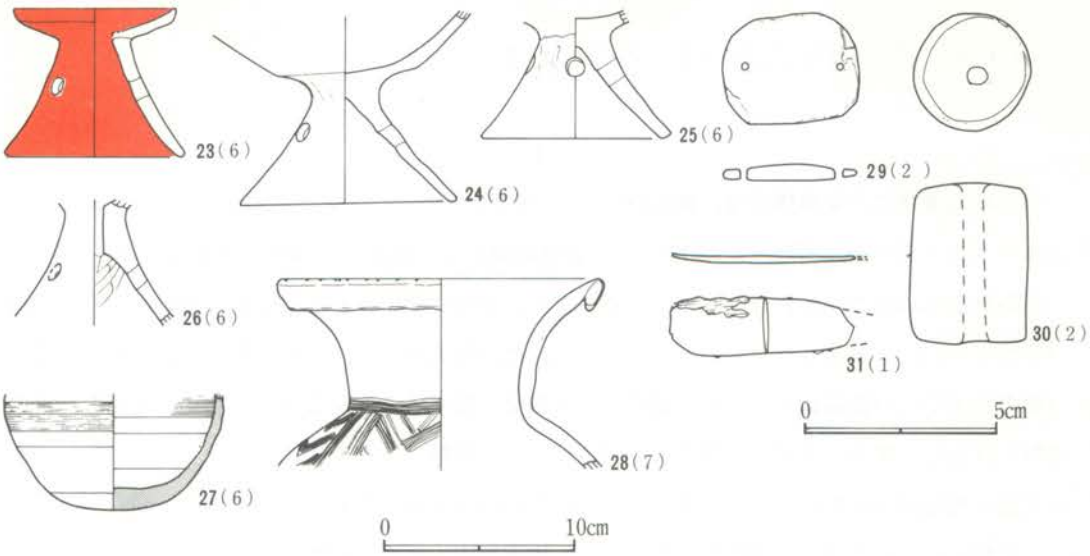
全体の約½程が残存している。外縁径は，12.8 m を測る。本来，周溝の掘り込み面は確認面より上面であるため，周溝の規模は径 14 m 程度になると思われる。幅は西側で狭く，東側で広がる。西側は 0.7～1.2 m，北から東側で 1.3～1.4 m を測る。底面は若干起伏が認められるが，全体的にほぼ平坦である。立ち上がりは東側で緩やかであり，北，西側は垂直に近い。深さは，西側で 11～48 cm，北，東側 43～53 cm を測る。断面は逆台形状を呈する。覆土は 3 層に区分された。黒褐色土，褐色土，黄褐色土が主体である。すべて流れ込みによる堆積状態であった。遺物は出土していない。



第158図　8 号墳周溝実測図



第159図　墳丘出土遺物実測図 (1)



第160図　墳丘出土遺物実測図 (2)

第4章　南二重堀遺跡に係わる問題点について

第1節　南二重堀遺跡の土師器について

1

南二重堀遺跡での集落構成は，縄文時代，古墳時代が中心となっていたことについてはすでに述べたとおりである。当地区での10年近い調査期間をふりかえってみても縄文時代はともかく，古墳時代前半の調査例は皆無となっている。ただ，単独で検出された和泉期の住居址が有吉遺跡（栗本他1975）で確認されたにとどまる。一方，次の鬼高期に至ると先の有吉遺跡，椎名崎遺跡（栗本他1979）の集落はもとより各遺跡でその報文に接することができる。加えて鬼高期では古墳群も存在し，集落と墓域との関連もおぼろげながら理解できるようになった。しかしそれ以前の五領・和泉期の様相はほとんど理解できていないのが現状である。これを機に，同時期の遺跡として知られている周辺の遺跡を参考にして，本遺跡出土の土師器群について考えてみたい。

2

本遺跡で検出された五領・和泉期の住居址は合計で47軒存在した。遺跡の立地する台地を観察しても，いわゆる舌状台地を呈した形状を呈しているところから，その集落構成において47軒を大きく越えることはないと思われた。そのため以後の論は，これを前提として進めることとする。

まず，住居址の形態について見ると，方形あるいは隅丸方形に近いタイプが圧倒的に多く，僅少ながらも長方形を呈したものがこれに加わる。一般的に住居址の形態を考えるうえで，弥生時代から古墳時代では楕円形→隅丸方形→方形と言う図式が認められる。だが，本遺跡の場合，住居址構築時の掘り込みが浅かったり，古墳の造営により一部が破壊されたりして住居址の細部については把握できないこともあり，住居址の形態から集落の推移を考えることは二次的なものとし，もっぱら土器群を重視した。好都合なことに土器群では，五領期から和泉期への変遷がよく理解できるような資料が検出されており，分類の結果，これらは少なくとも五つのタイプ，つまり，Ⅰ～Ⅴ期にわたることが想定できた。

第Ⅰ期　この時期は，49号，83号住居址によって代表される。断片的な資料として一括説明した第110図の土器群もその文様構成から本期の中に入るものが多いと考えられる。しかし，土器の量，器種の貧弱さゆえ多くは語り得ない。

まず，確実な資料として住居址出土土器を考えてみたい。これらの土器は，出土に際し床面に接するか，あるいはこれに近い状態で出土しており住居址に伴うことは確実である。資料数は少ないながらも特徴のある土器群といえよう。壺が中心となるが，両住居址でもその器形，文様構成において若干異なる点が認められる。49号住居址の2点は，胴部が球形に近く，文様は数条の

細い沈線を組合せた櫛描文で占められ，横方向，縦方向，山形等を形成する。これらの文様構成は，従来，在地の弥生式土器の伝統の中に見られないものである。しかし，胎土を見る限り他の土器群と相異するところはない。この種の比較資料として，東寺山石神遺跡（沼沢他 1977）17 号住居址出土例，器種は異なるが市原市小田部古墳（杉山他 1972）出土の高坏に付された文様に共通性が認められる。

一方，これとは別に 83 号住居址では，壺，高坏，広口壺と一応の器種はそろえている。これらは，どれをとっても弥生式土器の伝統を受け継いでいるばかりでなく，終末期に位置づけられている前野町式土器の中に含めても何ら異論のないような感を呈する。とくに壺では 49 号住居址出土例と異なり，偏平な胴部と細縄文の使用とを指摘できる。このため，49 号住居址と 83 号住居址を同時期の所産と見ることは危険かもしれないが，弥生式土器から古式土師器へ移行する短期間の中での事象と考えることはあながち間違いではあるまい。

このような住居址出土土器に対して，20 号住居址，37 号住居址の 2 例は，口縁部の形状あるいは沈線によるところの文様帯の区画を考慮すれば弥生式土器の中に含めても異存のない土器となろう。だが，その出土状態から各住居址に伴う土器とは考えられず，住居址の埋没過程で流れ込んだものと思われた。このため断片的な資料でしかなく明確な集落形態を把握することはできないため参考資料にとどめておきたい。

以上のように本期は，明確に把え得る住居址は 2 軒と少ないが，集落構成を考えれば他に 2 ～ 3 軒の住居址の存在が想定できる。しかも他の住居址の覆土，あるいは古墳の封土から検出されている壺類の小破片をも考え合わせれば居住時間の長短は別として確実に一時期の集落を営んでいたものと推定できる。そこで，この 1 期を土器型式のうえから考えると，弥生式土器から古式土師器へと推移する過程に位置づけることができよう。中でも 49 号住居址出土土器を重視すれば五領式土器の中でも古い時期の所産と考えることが妥当となろう。

第II期　第II期に至ると住居址数も増加し，ようやく集落としての形態を整えることとなる。主な住居址として 30 号，58 号，69 号をあげることができる。ここで出土した土器群について見ると，甕によくその特徴が表現されている。

まず，壺について記すと，文様はすでに消滅しており，刷毛目による整形だけとなる。むろん刷毛目の認められないものもある。口縁の作りは二重となることが多い。総じて検出数が少ないため，分類するまでには至らない。甕は平底型と台付甕に大きく分類できる。相方を量的に比較すれば，その割合は半々程となろう。細部について見れば口縁端部に刻目あるいは小波状の変化をもたせた作りのものが多い。また，頸部のくびれた部分に限り粘土紐の表面を整形せず，いわゆる輪積痕として残していることは注目できよう。この口縁端部の変化と頸部の輪積により第II期の成立を考えたい。

その他の器種として甑の存在も見逃せない。33 号住居址から 2 点出土し，同様な器形となる。

1点は底部が欠損しているが，甑と考えて間違いあるまい。形状は無頸壺を想起させる。口縁部にはわずかながら輪積痕を残す。底部の穿孔は 1 cm 弱と小さく比較的簡単な作りとなり，製作時に甑を意識したかどうか疑問である。いわゆる五領期の甑は，標式遺跡となっている埼玉県五領遺跡（杉原 1971）出土例のような口縁部の外反する浅鉢あるいは椀形に近い形状を有するものが一般的であり，穿孔された径もより大きい。しかし，次の和泉期に認められる甑は，複合口縁のタイプが一般化すると言われている。複合口縁という点だけをとれば本遺跡 33 号住居址出土例はより和泉期に近いと考えられるが，伴出する台付甕等を考慮すればやはり五領期の所産と考えることが妥当となろう。それゆえ本期の甑も概念化された中では把えにくいものとならざるを得ない。

次に高坏，器台の類でも興味ある資料を提供した。51 号住居址出土の高坏は，やや小形ではあるもののゆるやかに立ち上がる坏部と安定感のある裾部とで構成されており，この時期を逸脱するものではない。一方，69 号住居址出土品は特異な器形を呈している。いわゆる器受部として存在する上半部は大きく内湾し，器受部としての機能を放棄したような作りとなる。反面，裾部は大きく開き安定度を増す。この種の器台は，東寺山石神遺跡 56 号住居址，富里村日吉倉遺跡 1 号住居址（滝口他 1975），富津市大堀遺跡（小林 1964），木更津市請西遺跡（種田 1974）等で良好な資料が検出され，当地区でも馬ノ口遺跡で 6 点の出土が認められた。この種の器台では裾部の穿孔が施されていないことが多く，本遺跡例のように整然と 4 孔を有するタイプは類例に乏しい。いづれにしてもこの種の器台は，これまで「特異」な器台との表現も見られるが，資料の増加した現在では五領期を把握するうえで一つのメルクマールともなり得る資料としての位置を保持するに至ったと考えてもよいであろう。

第III期　集落構成を総体的に見れば本期に属する住居址が最も多いように考えられる。12 号，20 号，37 号，60 号の各住居址によって代表される。また，住居址によっては前段階に使用された土器の流れ込み，後出土器の一括投棄も認められ，住居址伴出土器，あるいはそれに近い時期の土器を摘出するのに苦慮するところもあった。

本期における壺，甕類について見ると，甕が卓越し，壺はわずかな点数となってしまい，その内容は把えにくい。しかし，甕には大きな変化が認められる。それは前段階の第II期までは普遍的に存在した台付甕の急激な減少である。確実な資料は出土していないため，あるいは消滅しているかもしれない。この現象を除けば，本期の甕類は第II期のものを基本的に踏襲しているといえよう。特徴的な頸部の輪積痕も少なからず認められる。しかし，その痕跡は次第に減少するか，整形の手が加えられるようになることは事実である。この傾向は 20 号住居址出土例によって説明できる。甕を意識して製作されたと思われる甑には口縁部から頸部にかけて 3 条の明確な輪積痕が認められる程に簡素化されてしまう。

高坏，器台の類にも大きな変化が現れる。これは 20 号，22 号，37 号住居址に好例が認められ

る。それまでの高坏では，脚部が大きく開き裾部へと続く。本期のものは，脚部が柱状に変化し，裾部との差が明確になる。坏部はゆるやかな湾曲を示し，稜はそれほど鮮明ではない。住居址から集中的に出土することはないが，断片的に数軒の住居址から出土しており，この種の高坏が一時期を形成することは間違いない。形式的に見れば，和泉期の高坏の初源とも言えるものであり，いわばその過渡期に位置づけられよう。本遺跡周辺では類似資料を見出すことはできないが，印西町北の台遺跡（中山 1975）では器台，小形丸底壺等と共伴している。このような出土例から推察すれば，20 号住居址出土の器台もその出土状態から同住居址に伴うものではないがきわめて接近した時期の所産として把えることができるかもしれない。

他にこの時期で特筆できるものとして台付坩，甑がある。台付坩は本遺跡でも唯一の資料であり，坩だけを比較すれば同住居址出土のものよりも口縁部が大きく開くところに相違がある。この台付坩は希に出土するが時期的な推移を考えるうえでそれ程重要な位置を占めることはなかろう。また，甑について見ると，II期同様一般的な甑の形態から逸脱している。明らかに小形甕を意識した製作であり，輪積痕も鮮明に残る。底部の孔は，焼成前のものであるところから転用品とは考えられない。これも唯一の出土品であり，本期の甑の形態として把えることは困難となろう。

第IV期　いわゆる和泉期であり，土器群はその特徴をよく表現している。19 号，35 号，45 号住居址によって代表され比較的器種も豊富となる。

壺，甕類について見ると，器面整形に使用される刷毛目痕は減少し，ヘラ状工具による整形が主体を占めるようになる。19 号，35 号の各住居址より出土している壺では刷毛目痕を認めることができない。また，複合口縁を形成する壺は存続する。一方，甕では 19 号住居址で 2 点出土した。これはやや胴長となり，和泉期に普遍的な胴部が球形を呈するタイプとは若干趣を異にする。形式的に見れば後出する鬼高期の甕を想起させる。

だが，本期においてもっとも注目できる器種はやはり坩となろう。口縁部の変化をもとにして分類すると 3 種の異なったタイプとなる。

A類－口縁部に段を有するもの。

B類－頸部が「く」の字状となり，大きく外反する口縁を有するもの。

C類－口縁部が垂直に近い立ち上がりとなるもの。

これらのうち，A類とB類のそれは底部が平底をなし，胴部および口縁部の最大径がほぼ一致する。C類の底部は丸底となることは 35 号址の類例から疑い得ない。そこでもっとも特徴的なA類とした坩の類例を求めると，船橋市外原遺跡（八幡他 1972）第 1 号址，同海神遺跡（小林 1972），千葉市大森第 1 遺跡（栗本他 1973）等で若干出土しているにすぎない。B類としたものは一般的に見られる坩で，些細な点について言えば，器の最大径は僅かの差で胴にあることが多い。この傾向は，時期的には新しい段階での現象とされておりその意味では次のC類は鬼高期に至っ

ても存続しているところから，内容的には新しい要素として理解できよう。

高坏について見ると，第III期に存在したタイプは姿を消し，坏部に稜を有するとともに脚部がややカーブを描くようないわゆる「和泉式」の高坏となる。器台は他遺跡の諸例から消滅しているものと思われる。

次に埦，坏類について見ると，45号住居址では図示できたもので11点存在した。19号住居址の場合と異なり，床面付近から出土したものが多く住居址に伴出するものと理解できた。とくに2点の埦は，この時期の特徴を具備しており，本遺跡においても少ない類例の一つに数えられる。また坏には，平坦な底部と丸味を有しながら体部へと続く二つのタイプが存在するが，その割合はほぼ同率となる。

他の器種として甑が1点存在する。本期の場合，前II，III期のものと比べて異なることは甕の転用品である。底部の孔は約1.5 cm程となるが，明らかに焼成後の穿孔と認められた。このように甑は，量的には少ないものの一般的に認められるような形態を保有することはなく，すべて壺，甕類を代用してきたことになる。このことは少なくとも当時南二重堀遺跡に居住していた人々が甑を甑としてだけではなく他の用途にも使用していたものと考えざるを得ない。

第V期　本期は鬼高期に編年される土器群で，住居址は存在しない。すべて住居址が廃棄された後に投棄されたものであろう。19号住居址はその好例と言える。坏，高坏（脚部）が覆土上部より出土しており，典型的な鬼高期の土器が含まれていた。この点，前述したとおり周囲には鬼高期の遺構を伴う遺跡が数か所所在しており，何ら矛盾することはない。しかも本期では当遺跡に8基の造営が認められるところから，むしろ古墳群との関連で把えられるべきである。つまり，五領期から和泉期にかけて本遺跡に居住していた人々は，鬼高期の到来とともに居住地を変更し，当地を墓域として再利用していたとの推測も十分可能となろう。

3

以上のように住居址出土の土器群を，その特徴をもとに第I～V期に分類した。次に，この分類により住居址を伴う第I～IV期の集落構成について考えてみたい。まず，住居址の形態についてみると，隅丸方形，方形を呈する二者が大半を占め，他に2～3の長方形を呈する住居址が加わることによって集落を構成している。そこで，前記第I～IV期の内わけを記すと以下となる。

第I期は，49号，83号が該当する。集落構成を考えれば2軒の住居址では成立しないであろう。他にも若干の住居址は存在していたものと思われるが検出されなかった。形態はいづれも隅丸方形を呈しており，弥生期の影響は否定できない。いづれにしても本遺跡における集落の「開始期」にあたるため，住居址数の少ないことは事実であろう。

第II期は，12—B号，26号，27号，30号，33号，44号，51号，58号，69号の計9軒の存在が想定される。本期における住居址の形態も前期同様に隅丸方形が主体を占める。方形に近いも

のとして26号，27号があり，長方形を呈するものに30号，58号がある。このように本期では住居址数も増加し，若干ではあるが隅丸方形以外の形態を有した住居址も出現するに至り，集落として，いわば「発展期」として位置づけることが可能となろう。

第III期は，1号，2号，4号，10号，12—A号，16号，20号，22号，37号，46号，50号，55号，60号，62号，63号，66号の計16軒の存在が想定できる。本期では長方形を呈する住居址は認められない。隅丸方形を呈するものとして2号，4号，12—A号，20号，63号とがある。それ以外の11軒の住居址は方形を呈することとなり，第II期とその位置が逆転する。これは土器群についてもその変化が認められるところであり，高坏がそれにあたる。このことは，物質面よりもむしろ精神面において何らかの外的要因が加わったものと推定される。つまりこの時期は，土器型式のうえから見れば五領式から和泉式への移行期にあたり，「変革期」としての位置づけが可能となろう。

第IV期は，15号，19号，23号，24号，25号，28号，31号，35号，36号，45号，64号の各住居址と，72号，73号，74号の土坑墓とによって構成される。住居址は11軒と若干減少するが，他にも存在が想定できる。本期の住居址の形態は，基本的にはすべて方形となる。ただ，19号は台形に近く，28号は長方形を呈する。つまりこの段階では，住居址の形態は方形であるとの概念が確立されたこととなろう。ここで注目できる住居址として長方形を呈する28号がある。ここでは，日常雑器とともに祭祀・儀礼の際に使用されたと思われる小形土器が14点出土した。出土地点は炉址の周辺と，炉址に対面するピットの周囲であるところからこのどちらかに祭壇の存在が考えられる。また，主柱穴の配置も異なり，中央に3個の柱穴址が直線状に並ぶ。これは家屋の構造に起因するものか，あるいは利用する空間を設定するための結果と考えられる。このように本期は若干ながら住居址数が減少するにもかかわらず集落としての機能はもっとも整備された時期となり，いわば「充実期」と規定しても過言ではあるまい。それを物語るように，それまで散漫な形で配置していた住居址が，28号址を中心とした集落構成に変化していく。

以上のような経過で，本遺跡の集落は第IV期を境にして他の場所へ移動することになる。しかし，ここで住居址の形態の変化について考えると，一般に考えられている円形・楕円形→隅丸方形→方形と言う変遷過程から逸脱するものではない。むしろ結果的に見れば，五領期から和泉期への変化は，隅丸方形から方形への変化と考えられなくもない。この点，同様な遺跡として知られる千葉市宮脇遺跡（玉口他1973）ではすべて方形を呈していたり，和泉期の単独遺跡である船橋市外原遺跡では隅丸方形と方形との二者が共存しているところから，地域によって若干の差異は認められるようである。

4

これまでは土器群の変遷，住居址の推移について触れてきたが，ここでは特定土器として生活

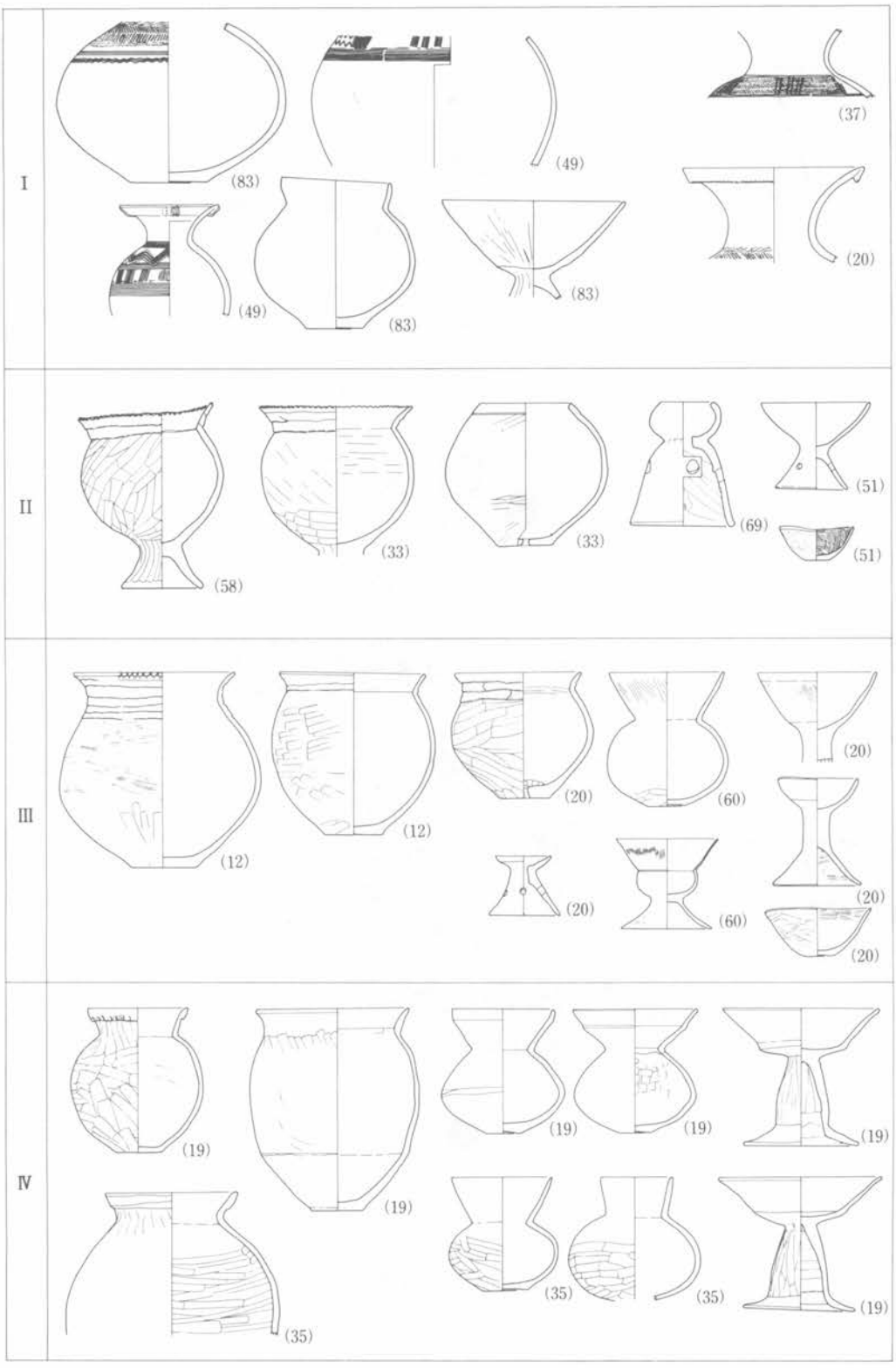
にもっとも密着している甕形土器について取上げてみたい。

本遺跡で出土した甕は，その形態により幾つかに分類が可能となろう。基本的には平底の甕と台付甕とである。量的には平底タイプが多い。この点については，いわば一般的である。だが整形という面をみると，器面とりわけ頸部の中心に輪積痕をそのままの状態で残す甕が少なくない。これは第II～III期にかけて顕著に認められるものであり，型式的には確実に五領式の中に含めてよい。輪積痕の起源は，弥生式土器でも甕の中に求められるもので，とりわけ久ケ原期から弥生町期にかけて盛期を迎えたことは周知の事実となっている。そして前野町期に至ると輪積痕は甕から姿を消すこととなる。この傾向は千葉市周辺の遺跡を例にとっても変わることはない。

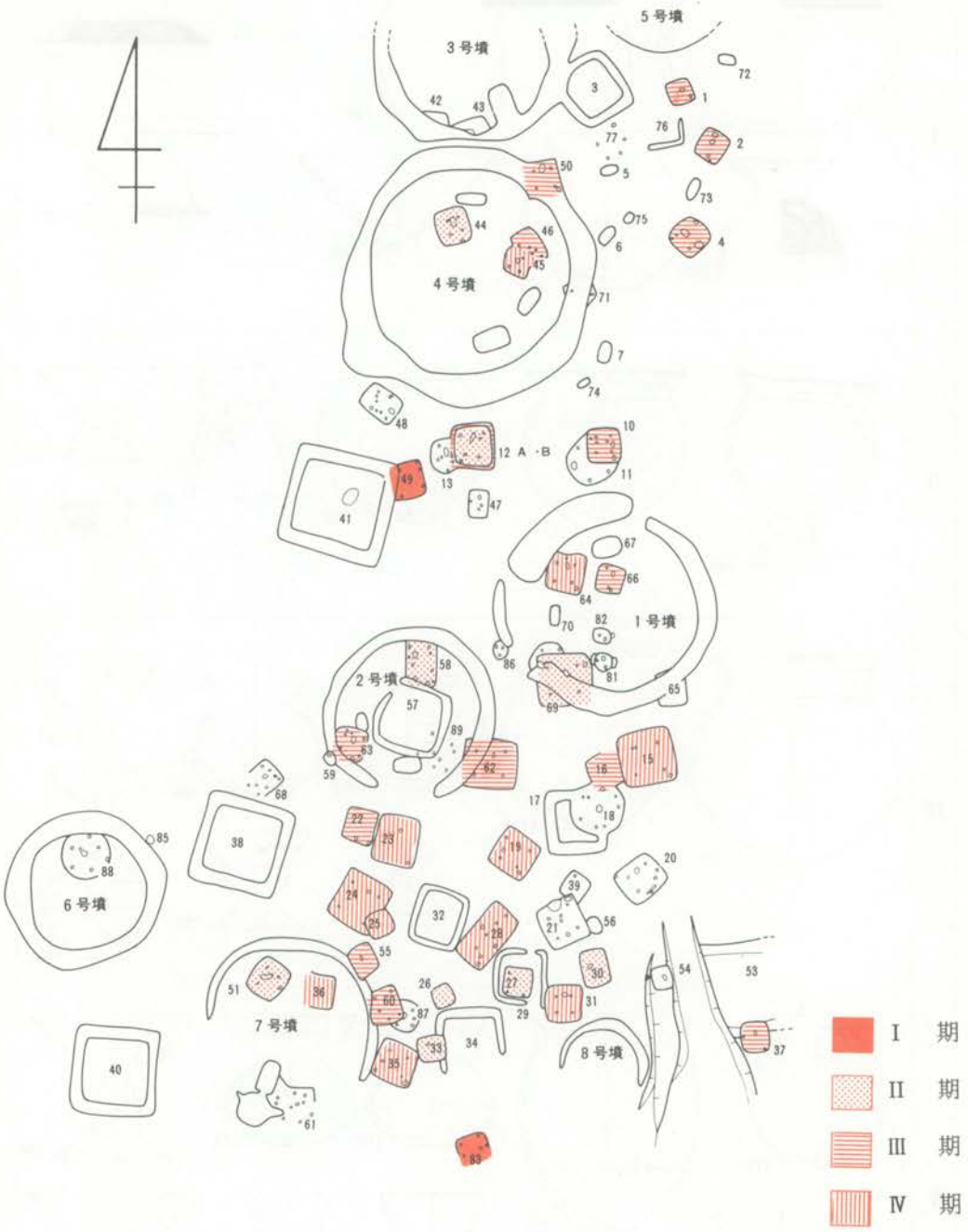
しかし，本遺跡では古式土師器の段階に入ってもなお輪積痕が存続していたという事実は，周辺遺跡の事例とは相反する現象として把えることができる。また，初期の段階すなわち第I期においても当然のごとく輪積痕の存在が推察できる。この点，第I期の土器群は遺構数が少なかったこと，それに伴い土器の出土量が僅少で確認するまでには至らなかった。では具体的に輪積痕を有する土器についてみると，33号，58号出土例のごとく台付甕に認められる場合と12—A号出土例のように平底の甕とがある。他にも底部の欠損する甕が存在するが，台付となる可能性が強い。

この傾向を重視するとすれば，最近報告された印旛郡白井町所在の復山谷遺跡（古内 1982）を想起することができる。ここでの甕類は，そのほとんどが台付によって占められており頸部に数条の輪積痕が認められる。他にも近年の報告例として，茨城県大羽谷津遺跡（寺内 1981）でも若干の類例が知られるようになった。これらの遺跡では，他の伴出土器に縄文，網目状文等の施文が認められるところから弥生式土器末期としての色彩を強く残すものであり，本遺跡の時期よりも古く位置づけられることは間違いあるまい。しかし本遺跡の場合には状況が若干異なり，確実に五領期に含められる土器群の中には旧態然とした形態を保持する甕が使用されている点に問題があろう。しかも甑についてもその事実が指摘できることは注目すべきこととなろう。

つまり，甕，甑といった厨房具に関する限り弥生時代の影響も少なからず容受していたにもかかわらず，集落形成過程をみると水鳥形土製品あるいは鉄鋌といったような当時を象徴するような遺物が検出されていることは容易に理解できることではない。強いて言えば終末期にあたる第IV期の段階で周囲の支配権を確立した結果とも考えられる。このことは本地区において発見された上赤塚1号墳（栗田　1982）との関連で把えることが妥当かもしれない。ここで双方での出土土器を比較すると，本遺跡24号，25号，28号等の住居址で検出された小形壺は，上赤塚1号墳周溝出土のそれと器形あるいは底部の整形という点においてその類似性を指摘できるように思われる。



第161図　土師器変遷図



第162図　集落変遷図

一応本遺跡内の住居址出土土器をⅠ～Ⅴ期までに分類して論を進めてきたが，いわゆる五領期から和泉期にかけての変化が地域的ではあるがよく表われていると考える。特に高坏においてはよく理解できよう。惜しむらくは土器群をセット関係で把えたいところであったが，壺，器台等に資料の欠除が目立った。とりわけ器台の消長については不鮮明であり，もっとも興味の注がれる部分を欠いてしまったようである。

ともあれ本遺跡の土器群の様相から推察すると，遺跡自体は五領期から和泉期にかけて継続的に利用されていたものと考えられた。中でも第Ⅳ期として分類した土器群については，本遺跡から約 1 km 離れて位置する上赤塚 1 号墳との関係が想起される。前述したところがあるが，第Ⅳ期の土器群の使用年代を考えるうえでは上赤塚 1 号墳が参考となることは言うまでもない。報告では古墳の年代を「5 世紀中葉」としているところから，本遺跡の第Ⅳ期は古墳と同年代かまたは若干古く位置づけられることが妥当となろう。しかし，和泉期の年代観には報告により若干の差異が認められ、5 世紀後半，5 世紀後半から 6 世紀初頭との意見もある。だが本遺跡で認められたように土器群の推移に関する限り，第Ⅳ期としたいわゆる和泉式土器の使用期間は五領期と比較するときわめて短期間であったものと思われる。これは他の遺跡の報告でも，和泉期の集落ではそれほど大規模なものは存在しないことや和泉式土器の細分が試みられないことからも明らかとなろう。仮に五領期が 4 世紀から開始されるとすれば和泉式土器の使用期間はせいぜい 40～50 年間となる可能性が強い。本遺跡の土器群は，その事実も如実に物語っているような気がしてならない。

第 2 節　古墳群の性格について

南二重堀遺跡における古墳は，すべて円墳で 8 基検出された。これらの古墳は，南側に突出する舌状を呈す台地上に散在するものの，西側に存在する生浜古墳群（種田・谷 1977）との関係が注目されるところである。そこでまず，生浜古墳群の概略を呈示しておく。

検出された古墳は，墳丘を有するものが 5 基，墳丘の削平されたもの 1 基の計 6 基でいずれも円墳の形態を呈す。墳丘の構築は，外側から内側へと盛土を充塡する方法を基本としているが，それほど顕著な状況ではなく，全体として水平積みに近いものである。墳丘と周溝の間は，一定の規模ではないがいわゆるテラスが介在する。主体部の確認された古墳は 2 基で，いずれも簡略化した横穴式石室の形態を採る。周溝は全周させることを基本としているようである。以上のような状況と，副葬品および周溝内よりの伴出土器から，生浜古墳群は 7 世紀末あるいはそれ以降に位置づけられると報文では述べている。

生浜古墳群において以上のような状況が認められることを考慮して，南二重堀遺跡における古

墳群の様相を把握してみたい。

まず墳丘形態としては，墳丘の遺存する古墳は2基（1・2号墳）のみで全体を述べることは不可能であるが，1号墳は外側から順次盛土を行っており，2号墳は水平積みの状況を呈し，若干異なった様相を呈す。また，墳丘の確認された1・2号墳と旧表土の確認された6号墳は，規模が異なるものの周溝と墳丘の間に環状のテラスが存在している。

主体部は，8基の古墳中5基で確認された。各古墳間における主体部のあり方には特徴的なものがみられ，形態により3つのタイプに分けられそうである。第1のタイプとして，3・7号墳の横穴式石室があげられる。いずれも周溝から続く掘り方を有し，規模，構築法ともほぼ同様である。両袖式で玄室と羨道部は明確に区別されるものの，簡略化された構造であり，横穴式石室としてはやや退化した形態を採るものである。第2のタイプとしては，箱式石棺と木棺直葬の土坑との組み合せによる1・2号墳があげられる。土坑による主体部は1号墳で2基，2号墳で1基検出された。箱式石棺の構築は，1号墳で1段積みであるのに対して2号墳では2段積みとなり，裏込めの方法も2号墳側の方が丁寧である。石棺の位置も，1号墳が北側に存在するのに対して，2号墳は南側の周溝開口部に位置する。これからすると，2号墳の箱式石棺の構築時期がやや先行するものと考えられそうである。第3として木棺直葬の土坑のみによる4号墳が認められる。3基の土坑を有し，第2タイプの主体部が墳丘西半分に位置するのに対し，本例は東半分に存在する。また，主体部の主軸は第2タイプと同様に周溝と水平となる。

以上のように，各古墳間における主体部のあり方は小範囲の占地でありながら，かなり異なった様相を有している。第1タイプ以外は複数の主体部を有し，いずれも周溝に沿うように構築され，しかも，墳丘外のテラス部分に設けられることが共通の要素として指摘される。茨城県南部から千葉県北部にかけて存在するいわゆる「変則的古墳」と形態的に相似するが「変則的」という扱い方にまだ不明確な現在では，これらとの関係を言及することは困難であり，しかもかなり地域性の強い葬制という観点から検討しなければならないので，この点は別の機会にゆだねたい。。

さて次に副葬品に触れてみる。主体部の検出された古墳における副葬品の様相はほぼ同様であり，直刀・鉄鏃・刀子の3種を基本的なセットとしている。また，2号墳を除き，玉類の検出は認められなかった。このような傾向は，先述した生浜古墳群においても認められ，検出された主体部は2基のみであるが，副葬品は武器類および耳環に限られ，玉類は1点も検出されなかった。このように，後期古墳に通有の遺物が認められるなかで，注目される副葬品として，2号墳第1主体部および3号墳石室で検出された鑣子があげられる。古墳時代出土の鑣子については，佐藤正則氏により全国的な集成および考察が加えられている(佐藤 1979)。これによると，全国から出土した鑣子は6点で，内5点が群馬県，1点が大分県に認められる。さらに古墳出土例となると，群馬県で1，大分県で1ということになる。千葉県においては皆無となっているが，管見する限

りでは，本遺跡に近いムコアラク遺跡7号墳（田坂・相京 1979）で1点，佐倉市江原台遺跡（高田 1977）で1点，市原市根田130号墳（滝口宏他 1981）で1点，南二重堀遺跡での2点を加えて計5点出土している。しかしながら，数的にはそれほど多いものではなく，古墳出土例に限ればさらに僅少なものとならざるを得ない。ただ，不明鉄製品としたもののなかにも破片等が含まれている可能性もあり，詳細に検討すれば若干増加するかもしれない。形態的にみると，佐藤氏集成の6点はいずれも同様の形態を呈しており，根付近でS字状に曲げられたピンセット形を示す。ムコアラク例と本遺跡における3号墳主体部出土例は，これらに近いものであるが，2号墳第1主体部例と江原台例は根の部分で若干形態が異なる。両例とも肩の部分がほぼ直角に曲がり，根のつまみ部が2号墳例が平行を呈するのに対して，江原台例は球形を示している。以上のように形態的にはある程度相似するものの，細部においてはかなり様相が異なってくる。時期的にみてもかなり幅があり，大分県例のものは，5C末～6C初頭という年代が与えられており，根田例は6C後半，江原台例は平安時代末葉とされる。本例のものは後述する須恵器から7C後半頃の年代に適合される。このようにしてみると，時代的な変遷とともに，形態的に変化するようであるが，資料数があまりにも少ないために可能性のあることだけを提示しておく。

本古墳群中で年代を決定できる資料は，3号墳の周溝内で検出された須恵器があげられる。1の長頸瓶は胴部に明瞭な稜をもたず，口縁部が大きく外反し外面に平坦な面を形成することより，7世紀後半の所産と考えられる。2～4の平瓶は4がやや後出の様相をもつものの，やはり7世紀後半の範疇で把えられるものであろう。3号墳主体部に伴う遺物に関しては，追葬の可能性もあるが，玄室内がかなり攪乱されており，須恵器も原位置を留めるものが皆無なため断言はできない。ただ，追葬があったとしてもごく短期間の間に行われたものと考えられよう。また，3号墳の占地場所をみてみると，舌状に伸びる台地の付け根の部分すなわち，台地の幅が最も短い部分に構築されており，3号墳構築の後さらに台地の先端部に古墳群を形成することは考えられず，調査区内での他の古墳は，詳細の不明な5号墳を除き，3号墳より以前に構築されたと考えた方がより自然である。実際，3号墳の周溝南側，4号墳と隣接する部分は，4号墳周溝を意識して周溝幅を狭めた状況が認められることは，このことを証明するものと考えられる。すなわち，3・5号墳以外は7世紀後半以前に構築されたものと推定される。一方，台地の南端に位置する7号墳の横穴式石室は3号墳と同形態のものでそれ程後出的とは思えないし，年代を決定するものはないが，鉄鏃の形態からみても時期的にそれ程差異の生じる可能性は少ないと言えよう。ただ，3号墳の鉄鏃がほとんど尖根鏃に含まれるのに対して，7号墳では主体は尖根鏃であるが，篦被の短い三角形鏃の割合が多い点ではやや時期的に先行するものとも言えよう。

次に，箱式石棺を有す1・2号墳はどのように把えられるだろうか。石棺自体の構築法は，先述した通り1号墳例の方が簡略化した傾向が認められており，2号墳例が先行するものと考えられる。一方，遺物相からみると，1号墳例には尖根鏃が含まれず，断定できないものの農具と思

われる鉄製品が混在する傾向は，2号墳例の尖根鏃を主とするものより，やや先行すると考えておきたい。このようにしてみると，前後関係に矛盾が生じてくるが，ここでは出土遺物を年代比定の基準に置くことが望ましいと思われるので，2号墳例を1号墳例より後出のものと把えてみたい。4号墳第1主体部は，長三角形鏃が主体を占めており，尖根鏃を主とする古墳よりやや先行するものであろう。

主体部が検出されなかった5・6・8号墳は不明であるが，各古墳に共通して副葬される鉄鏃からあえて前後関係をまとめてみると，箱式石棺を主体部とする1・2号墳のグループが最も古く，そのなかでも1号墳がより先行する。次に構築される古墳は，木棺直葬のみを主体部とする4号墳であり，最後に横穴式石室を単独の主体部とする3・7号墳が構築され，そのなかでは3号墳が最も後出となる。このように，鉄鏃からみた古墳の構築順序と最初に呈示した主体部による古墳群のグループ分類がほぼ一致することにより，時期的な変遷過程において，異なった主体部を内在する古墳が形成されていったものと考えられるようである。ただし，本古墳群の形成時期が長期間に及ぶものではなく，きわめて短期間に形成されたことは想像に難くない。すなわち，3号墳にみられる7世紀後半代に比定される須恵器を下限としながらも，ほぼ同様の時期に前述のような順序で古墳群が形成されていくのである。以上から，本古墳群における主体部の多様性は，時期的な流行に伴う変化よりも，本古墳群の立地する台地を墓域として選定した集落内における被葬者集団の多様化の影響下で具現したものと理解しておきたい。

第3節　水鳥形土製品とその出土例について

69号住居址から出土した鳥形の土製品は，嘴と尾部の先端を僅かに失っているとはいえ，全体に均整がとれ，リアルで表情豊かな姿をしている。側面からみると，丸く突き出した頭部から頸部，背，胴部へと続く線は曲線を帯び，腹部は扁平で丁度水鳥が羽を休めて水辺に漂う姿を思わせる。目は竹管状の工具によって付けられ，嘴には上下の合せ目がはっきりと描き出されている。欠損した嘴の先端は，この合せ目の状態，および角度からおそらく鋭く尖るものと考えられる。なおこの鳥の種を全体の形状から推定した場合，鵜の一種である可能性が強いと思われる。ただしこの場合カワウであるか，ウミウであるかの判断は困難である。尾の先端は上方に立ち上がって，背を接する部分で末広がりの開口部を造り出している。この開口部から胸部までの胴内部は空洞となっている。この胴部を空洞化した原因については，本資料の用途に関連する問題を含んでいると思われるため，それについては後でふれることにする。

本資料がその特徴から水鳥を模したものであることは以上の通りである。鳥に関する類例は数少なく，第2表にあげた土製品，木製品がその主なものである。中でも，奈良県纒向遺跡石塚古墳，同辻地区（石野他 1978）出土の鵜形木製品，鳥舟形木製品，大阪府池上遺跡（小野他 1978）

出土の鳥形木製品などがよく知られている。しかし，土製品では特に例が少なく，鳥取県秋里遺跡（1976），滋賀県服部遺跡（大橋 1976），千葉県東寺山遺跡（沼沢他 1977）のわずか3遺跡と，報告はないが岡山県さくらい遺跡（亀井 1981）が知られるにすぎない。いずれも完存しておらず頭部から胸部を残すだけである。秋里，服部両遺跡の例は，嘴，頭部，目などが写実的につくり出され，明らかに水鳥形を呈している。また東寺山遺跡の例は，扁平な頭部に鶏冠を形どった土製品で，側面から見ることでその性格を表現している。以上3例のうち，全体の形態を比較することは困難であるが，秋里，服部遺跡出土例が，形態の上では本例に近いものと思われる。

これらの土製品とは別に，容器として利用された鳥形土器もある。静岡県蔵平遺跡（柴田 1980）出土の鳥形土器と群馬県藤岡市白石（井上 1979）出土の水鳥形土器である。蔵平例は，脚台を付した鳥形の胴部から直接口縁部が立ち上がる土器で，須恵器の鳥形瓶と共通した特徴をもっている。白石出土例は2点であり，脚台が付き，鳥は頭部～尾部まで写実的な形態を整えている。背部に口縁部をもつ土器である。この2遺跡の例については容器としての特徴を充分に備えており，本遺跡出土の水鳥とは明らかに異なっている。本例の場合，尾部は急な角度で立ち上がり，先端がわずかに丸みを帯びて土器の口唇部を思わせるが，側面からみると背の頂部より低い位置で開口しており，容器としての機能は不十分であると言わざるを得ない。このことは，この水鳥製品が容器としての機能より，あくまでも鳥の姿を忠実に具象化しようとした結果であると考えられよう。つまり，容器としての用途を第一の目的として製作したのではなく，鳥の姿を忠実に表現することによって初めて意味を持つものであったと考えたい。

かって、古代人は，鳥について祖霊を象徴するもの，神の国と地上を往来するものとして崇めていたと言われている。先にあげた池上遺跡の鳥形木製品について，報告者は宗教的なものに関連した遺物として推定しており，また立平進氏は，この鳥形製品を韓国や対馬の民俗例と比較して，葬送に関係した用途，性格を示唆（立平 1979）しておられる。さらに，金関恕氏は，山口県土井ケ浜遺跡から出土した鳥を抱いた被葬者の例やシベリアにおける民俗例などをもとに，鳥とシャーマニズムの関連について言及している（金関 1975）。奈良県纒向遺跡辻地区出土の鳥舟形木製品について報告者は，舟と鳥との関係をあげ，「鳥は神の国と地上を往来する動物であり，その形代を木材で作り，それに供物を乗せ神に捧げることを願ったのであろうか」とし，「農耕社会とより強い紐帯を持つもの」との考えを提示している。一方，同遺跡石塚古墳より出土した鶏形木製品については，辻地区出土例と異なり，葬送祭祀に関連した用途，性格を推定している。この他，宮ケ久保遺跡（中村 1979），蔵平遺跡，白石出土例などの諸例についても各報告者は，葬送あるいはその他の共同体祭祀に関連した性格をもつものとして鳥形製品を位置付けている。

以上，各種の鳥形製品に関する考えは，いずれも儀礼的，祭祀的色彩を色濃く反映した遺物として把えられているが，その具体的な用途，性格についてはまだ不明の点が多く残されている。ここで本遺跡出土の水鳥形土製品について，一概にその性格，用途について論及できる根拠をも

たないが，住居址内より出土した点から考えると，他の出土例の多くが古墳の周濠や集落の環濠，あるいは旧河道など明確な使用状態を推定し難い場所※であるのに対して，より限定された意味を含んでいると言えよう。すなわち，住居址内＝集落内という解釈が許されるならば，そして，鳥に対する古代の人々の想いが，この土製品という特殊な物へ集約され，表現されていると考えるならば，一つの集落共同体の祭祀を包括する象徴として把えることも可能かと考えられる。そして，それは，纒向遺跡辻地区出土例と同様，集落内の連帯を意識した紐帯としての性格を有していたものと考えておきたい。

表2　鳥形製品出土遺跡一覧表※※

No.	遺跡名	所在地	時期	種類	出土位置
1.	秋里遺跡	鳥取県鳥取市秋里	古墳前～中5世紀	土製品(水鳥)頭部から胸部	土器溜遺構
2.	服部遺跡	滋賀県守山市服部町	古墳前期	土製品(水鳥)頭部から頸部	旧河道
3.	東寺山遺跡	千葉県千葉市東寺山町	古墳前期	土製品(鶏)頭部	住居址
4.	深草遺跡	京都府京都市伏見区深草	弥生中期	木製品	
5.	宮ケ久保遺跡	山口県阿武郡阿東町徳佐字宮ケ久保	弥生中期	木製品	環濠
6.	池上遺跡	大阪府和泉市池上	弥生後期	木製品　6点	溝
7.	纒向遺跡	奈良県桜井市辻	古墳前期	木製品　2点	古墳周濠，土坑
8.	さくらい遺跡	岡山県山陽町さくらい	弥生	鳥形土製品	
9.	長越遺跡	兵庫県姫路市飯田字長越	古墳前期	木製品	
10.	石見遺跡	奈良県磯城郡三宅町石見	古墳後期	木製品	
11.	蔵平遺跡	静岡県磐田郡豊岡村	弥生後期	鳥形土器	特殊遺構ピット列
12.	白石古墳群	群馬県藤岡市白石	5世紀中葉	水鳥形注口土器　2点	耕作土中古墳墳丘内か

※　出土位置については表中に記載したが，不明なものについては省略した。

※※　本表は池上遺跡（第4分冊の2）木器編を参考に追加，修正を加えたものである。

参考文献

1．石野博信他　1978　『纒向』　奈良県立橿原考古学研究所

2．井上　太　1979　「郡馬県藤岡市白石出土の水鳥形注口土器」考古学雑誌 65— 3
3．大橋信弥　1979　『服部遺跡発掘調査概報』滋賀県文化財保護協会
4．小野久隆他　1978　「木器編」『池上遺跡』第 4 分冊の 2 大阪文化財センター
5．亀井正道　1981　「土製模造品」『神道考古学講座』第三巻　原始神道期二　雄山閣
6．金関　恕　1975　「鳥とシカへの信仰」『古代史発掘 4 』
7．栗田則久　1982　『千葉東南部ニュータウン 13』—上赤塚 1 号墳・狐塚古墳群—　千葉県文化財センター
8．栗本佳弘他　1973　「大森第 1 遺跡」『京葉』千葉県都市公社
9．栗本佳弘他　1975　『千葉東南部ニュータウン 3 』—有吉遺跡（第 1 次）—　千葉県都市公社
10．栗本佳弘・上村淳一　1979　『千葉東南部ニュータウン 6 』—椎名崎遺跡—　千葉県文化財センター
11．小林三郎　1964　「千葉県君津郡富津町大堀出土の土師式土器」考古学集刊 3 — 1
12．小林三郎　1972　「海神遺跡出土の土器」『土師式土器集成本編』 2　東京堂出版
13．佐藤正則　1979　「古墳時代の釵子・鐺子について」『河内太平寺古墳群』　河内考古刊行会
14．柴田　稔　1980　「静岡県蔵平遺跡発見の鳥形土器」考古学雑誌 66—1
15．杉原荘介　1971　「五領遺跡出土の土器」『土師式土器集成本編』 1　東京堂出版
16．杉山晋作他　1972　『古墳時代研究 I 』—千葉県市原市小田部古墳の調査—　古墳時代研究会
17．高田　博　1977　『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書 I 』　千葉県文化財センター
18．滝口　宏他　1975　『遺跡日吉倉』　日吉倉遺跡調査団
19．滝口　宏他　1981　『上総国分寺台発掘調査概報』　上総国分寺台遺跡調査団
20．田坂浩・相京邦彦　1979　『千葉東南部ニュータウン 8 』—ムコアラク遺跡・小金沢古墳群—　千葉県文化財センター
21．立平　進　1979　「死者の鳥」考古学ジャーナル　166
22．種田斉吾・菊池真太郎　1974　『木更津市請西遺跡群』—予備調査概報—　千葉県教育委員会
23．種田斉吾・谷旬　1977　『千葉東南部ニュータウン 4 』—生浜古墳群—　千葉県文化財センター
24．玉口時雄他　1973　『宮脇』　宮脇遺跡調査団
25．寺内　寛他　1981　「大羽谷津遺跡」『竜ケ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 5 』　茨城県教育財団
26．中村徹也　1979　「木製動物群と土器に陽飾された動物文—山口県宮ケ久保遺跡—」考古学雑誌 65— 3
27．中山吉秀　1975　「北の台遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』IV　千葉県都市公社
28．沼沢　豊他　1977　『東寺山石神遺跡』　千葉県文化財センター
29．古内　茂　1982　「復山谷遺跡」　『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』VII　千葉県文化財センター
30．八幡一郎他　1972　『外原』船橋市教育委員会
31．鳥取市教育委員会　1976　『鳥取・秋里遺跡 I 』鳥取市文化財調査報告書IV

表3　南二重堀遺跡検出遺構一覧表

遺構番号	遺構名	時代	備考
1	住居址	古墳時代	
2	住居址	古墳時代	
3	方形周溝遺構	歴史時代	3号墳周溝と重複
4	住居址	古墳時代	
5	土坑	——	
6	土坑	——	
7	土坑	——	
8	——	——	欠番
9	——	——	欠番
10	住居址	古墳時代	11号住居址と重複
11	住居址	縄文時代	
12—A	住居址	古墳時代	12・13号住居址と重複
12—B	住居址	古墳時代	
13	住居址	縄文時代	
14	——	——	欠番
15	住居址	古墳時代	16号住居址と重複
16	住居址	古墳時代	18号住居址と重複
17	方形周溝遺構	歴史時代	18号住居址と重複
18	住居址	縄文時代	
19	住居址	古墳時代	
20	住居址	古墳時代	
21	住居址	歴史時代	39号住居址と重複
22	住居址	古墳時代	
23	住居址	古墳時代	
24	住居址	古墳時代	25号住居址と重複
25	住居址	古墳時代	
26	住居址	古墳時代	
27	住居址	古墳時代	

遺構番号	遺構名	時代	備考
28	住居址	古墳時代	
29	方形周溝遺構	歴史時代	31号住居址と重複
30	住居址	古墳時代	
31	住居址	古墳時代	
32	方形周溝遺構	歴史時代	
33	住居址	古墳時代	34号住居址と重複
34	方形周溝遺構	歴史時代	
35	住居址	古墳時代	
36	住居址	古墳時代	7号墳内
37	住居址	古墳時代	52号址と重複
38	方形周溝遺構	歴史時代	
39	住居址	古墳時代	
40	方形周溝遺構	歴史時代	
41	方形周溝遺構	歴史時代	
42	住居址	古墳時代	3号墳周溝，43号住居址と重複
43	住居址	古墳時代	
44	住居址	古墳時代	4号墳内
45	住居址	古墳時代	46号住居址と重複
46	住居址	古墳時代	4号墳内
47	住居址	縄文時代	
48	住居址	縄文時代	
49	住居址	古墳時代	41号址と重複
50	住居址	古墳時代	4号墳周溝と重複
51	住居址	古墳時代	7号墳内
52	溝状遺構	歴史時代	
53	溝状遺構	歴史時代	
54	住居址	古墳時代	
55	住居址	古墳時代	7号墳周溝と重複
56	土坑	——	21号住居址と重複
57	方形周溝遺構	歴史時代	2号墳内

遺構番号	遺構名	時代	備考
58	住居址	古墳時代	57号址と重複
59	土坑	縄文時代	
60	住居址	古墳時代	7号墳周溝と重複
61	住居址	古墳時代	7号墳主体部と重複
62	住居址	古墳時代	2号墳周溝と重複
63	住居址	古墳時代	2号墳内
64	住居址	古墳時代	1号墳内
65	住居址	古墳時代	1号墳周溝と重複
66	住居址	古墳時代	1号墳内
67	住居址	古墳時代	1号墳内
68	住居址	古墳時代	
69	住居址	古墳時代	1号墳周溝，70号住居址と重複
70	住居址	縄文時代	
71	住居址	古墳時代	4号墳周溝と重複
72	土坑墓	古墳時代	
73	土坑墓	古墳時代	
74	土坑墓	古墳時代	
75	土坑	——	
76	方形周溝遺構	歴史時代	
77	ピット群	——	住居址の柱穴の可能性あり
78～80	——	——	欠番
81	土坑	縄文時代	1号墳第3主体部と重複
82	土坑	縄文時代	1号墳内
83	住居址	古墳時代	
84	土坑	縄文時代	1号墳内
85	土坑	縄文時代	
86	土坑	縄文時代	1号墳周溝と重複
87	住居址	縄文時代	60号住居址と重複
88	住居址	縄文時代	6号墳内
89	ピット群	——	2号墳内，57号址と一部重複 住居址の柱穴の可能性あり

終章　結　　語

前述したように，本遺跡は先土器時代から歴史時代に至る長期間，人間生活の場として利用されてきた。遺跡の位置する小台地は，南に向って広がる良好な舌状台地となり，調査前から多数の遺構の存在が予想できた。調査の結果を見れば明らかなように,豊富な遺構・遺物の検出となって我々の目前に晒された。中でも古墳時代初頭の遺構・遺物は，貴重な資料と考えられ今後の調査におおいに参考となるべきものと言える。

先土器時代の調査では，若干の石器群が検出されたにとどまった。すべてのユニットは時間的な隔りはないようであった。彫器など石器の一部には良好な資料もあったが，多くは語れないため本文中でも簡単な記載にとどめた。

縄文時代は，中期の遺構・遺物が中心となり，集落を形成していたことは事実であり，前期の黒浜式土器を出土する住居址も検出された。他に草創期の撚糸文系土器群に混入して，一片ではあるが押型文土器が検出された。撚糸文系土器の主体は稲荷台式に比定されるところから，稲荷台期に近い所産となろう。

本遺跡の中心は，古墳時代となり，集落では五領・和泉期，古墳では鬼高期の人々によって営まれた。集落は，47軒の住居址によって構成されていたが，出土土器の様相によって5期に分類し，それぞれを述べてみた。とりわけ五領期の土器群では周辺の遺跡で認められない形態の甕，甑が注目された。土器以外の遺物でも水鳥形土製品，鉄鋌と言ったような全国的にも珍しい遺物が，しかも集落跡において発見されたと言うところに意義を見出せる。古墳群は，計8基の円墳で構成されていたものの，当地区調査報告書4（生浜古墳群）で既に報告された後期古墳群の一環となろう。これらの古墳群は，国鉄外房線の北側山林にも若干所在しており，かなり大規模な古墳群を形成するようであり，その数は20基を下るまい。

歴史時代の遺構としては，住居址，方形周溝遺構，溝状遺構が確認された。住居址は1軒だけであり，盤形土器の伴出からいわゆる真間式となった。次の国分期では単独で所在する住居址はしばしば確認されるが，真間期では類例は少ない。方形周溝遺構も10基検出され，興味を引く。本遺跡での例でも理解できるとおり，付帯施設を有するものはない。このため方形周溝遺構は，その性格を規定するうえで消極的な見解にならざるを得ない。また遺物の共伴関係も明確な形で把えることができないため，時期決定に際しても困難さを伴う。この点，新期テフラの存在などは有効な手掛となるかもしれない。溝状遺構は遺跡の東南隅において重複した状態で検出された。方形周溝遺構同様，遺物は僅少しか出土しなかった。地形の形状から推察すれば，より後世の排水施設等に利用されていたものと考えるのが妥当であろう。

MINAMI-FUTAEBORI SITE

CONTENTS

Preface

Explanatory Notes

Chapter I Introduction

Section 1 Site and Background

Section 2 Outline

Chapter II Features and Artifacts

Section 1 Preceramic Age

Section 2 Jōmon Period

Section 3 Kofun Period

Section 4 Nara Period

Chapter III Tumuli

Investigation of Tumuli

Chapter IV Specific Questions

Section 1 Problems about Haji Pottery in the Site

Section 2 Character of Tumuli

Conclusions

English Summary

The present report concerns an archaeological investigation of the Minami-futaebori Site. The site is situated at Oyumi, Chiba city. The excavation was undertaken between October 25, 1979, and June 28, 1980, in advance of the construction of the Tōnanbu New Town,

Many other sites including tomb mounds or shell mounds are known around the site. We assume that the ancient people living there got water from several streams that drain into the Murata River.

As detected features and artifacts cover Preceramic, Jōmon, Kofun, and Nara periods, it is supposed that the site was a fertile land for the ancient people.

Preceramic stone tools unearthed from the upper layer of the Tachikawa Loam Formation were not so old for the age and rather poorly formed. They are assumed to belong to the point industry.

Potsherds of Earliest, Early, Middle, and Late Jōmon period were found in the site. A

village was formed during Middle Jōmon period, when seven pit dwellings and several pits were built. The Kasori E type potsherds were used in those days.

Kofun period is the best days of the site. From the 4th century to the middle of the 5th century the site was a living district, and then about the beginning of the 6th century it turned to be a graveyard. All the tumuli, some of them damaged by later farming, were circular in shape.

As for the artifacts of Kofun period, jars and steamers are worthy of notice; they were produced by different technique from other earthenwares. Other precious artifacts are ironwares. Above all an iron ingot which is rarely found in the eastern Japan will help us to illustrate the spread of iron in Japan.

Features of Nara period in the site were no more than a pit dwelling and several ditches, so we don't make further commentary on them.

写真図版

航空写真

航空写真

航空写真

1. 遺跡近景

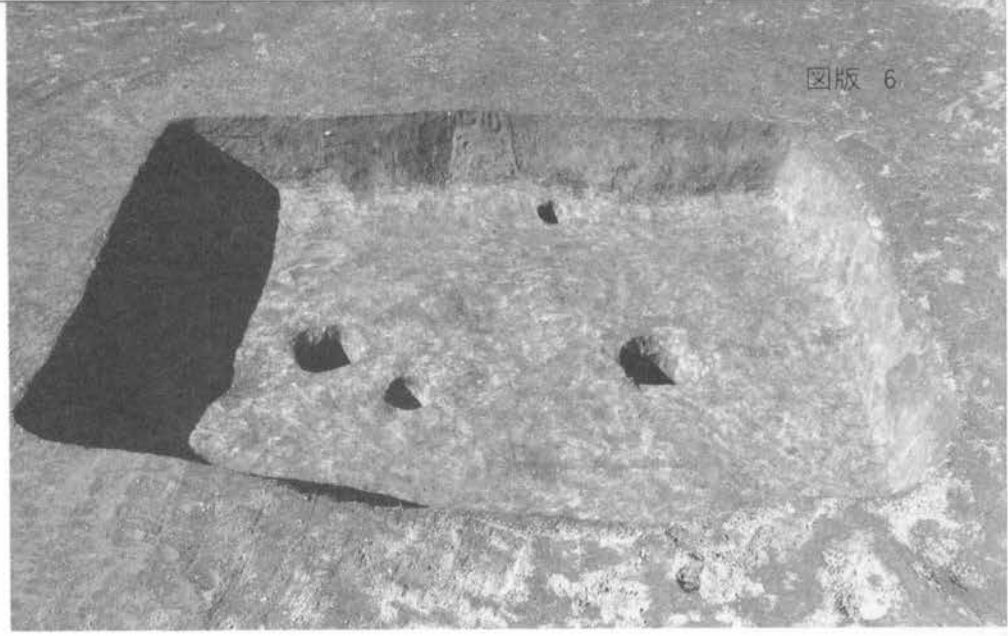
2. 遺跡近景

3. 遺跡近景

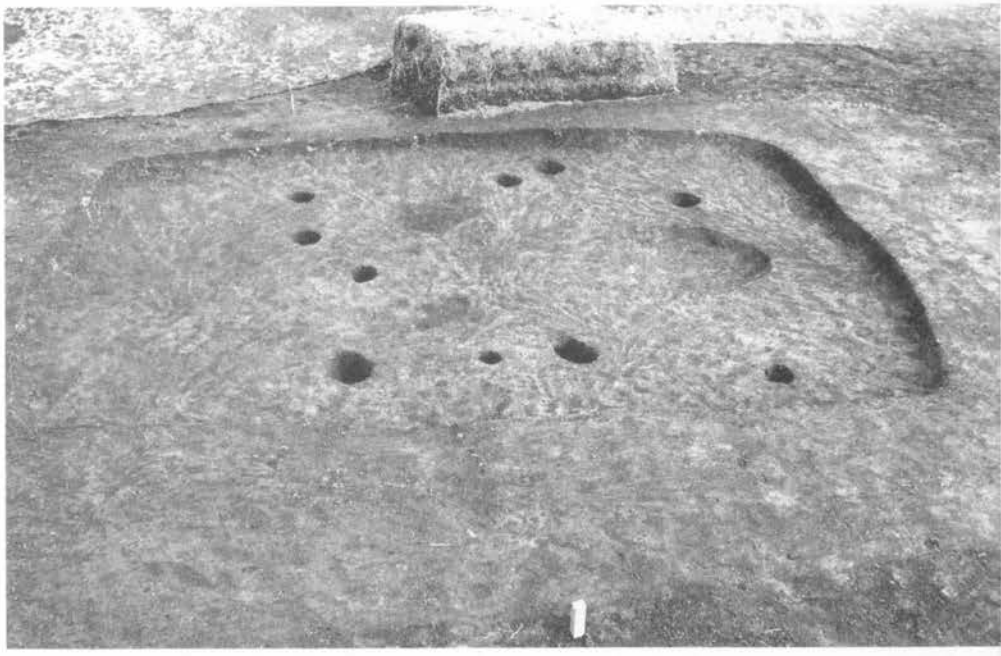
1. 第2ユニット石器出土状況

2. 13号住居址全景

3. 17号址・18号住居址全景

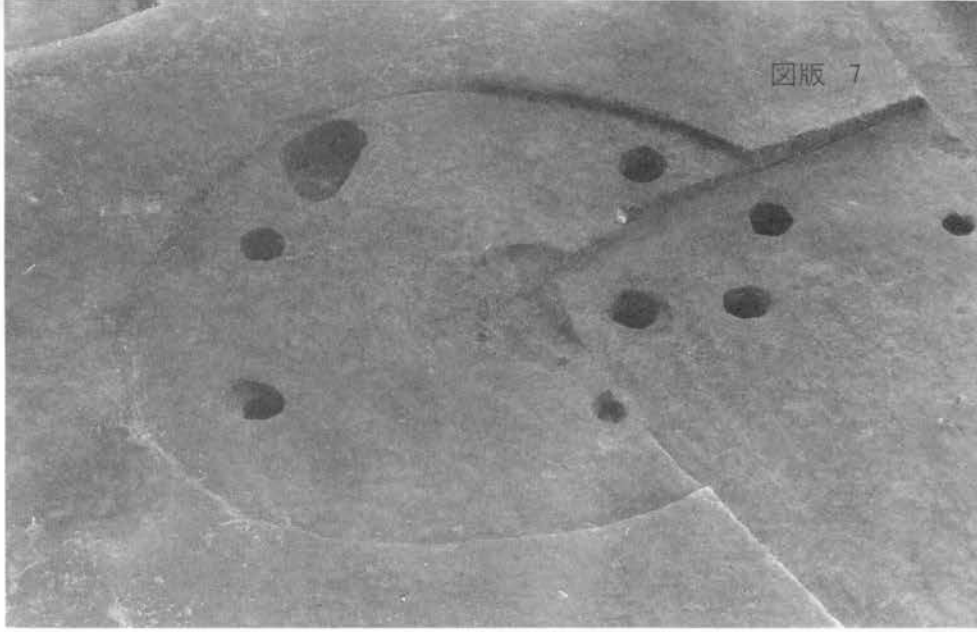


1. 47号住居址全景

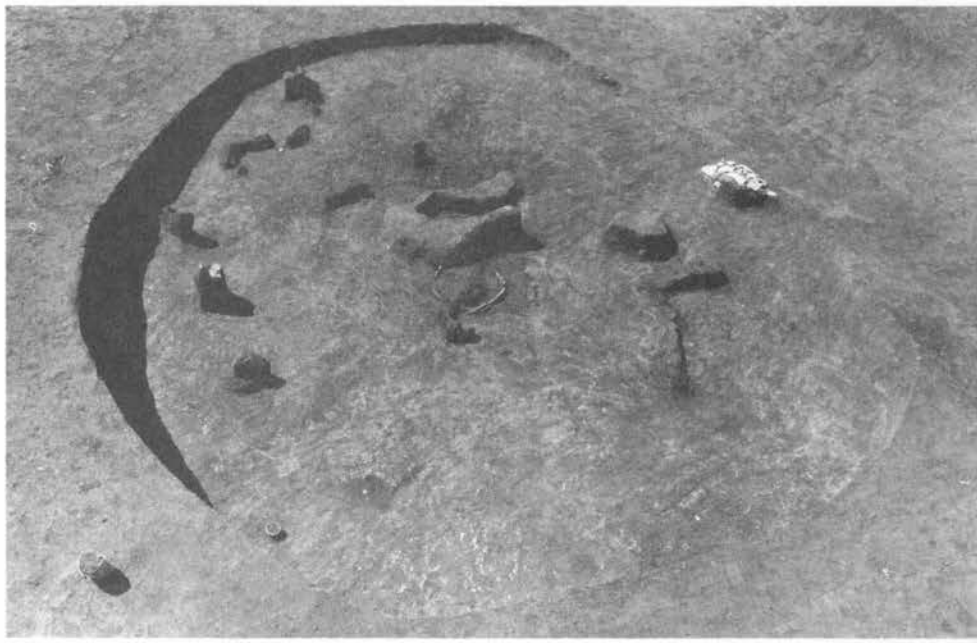


2. 48号住居址全景

3. 70号住居址全景



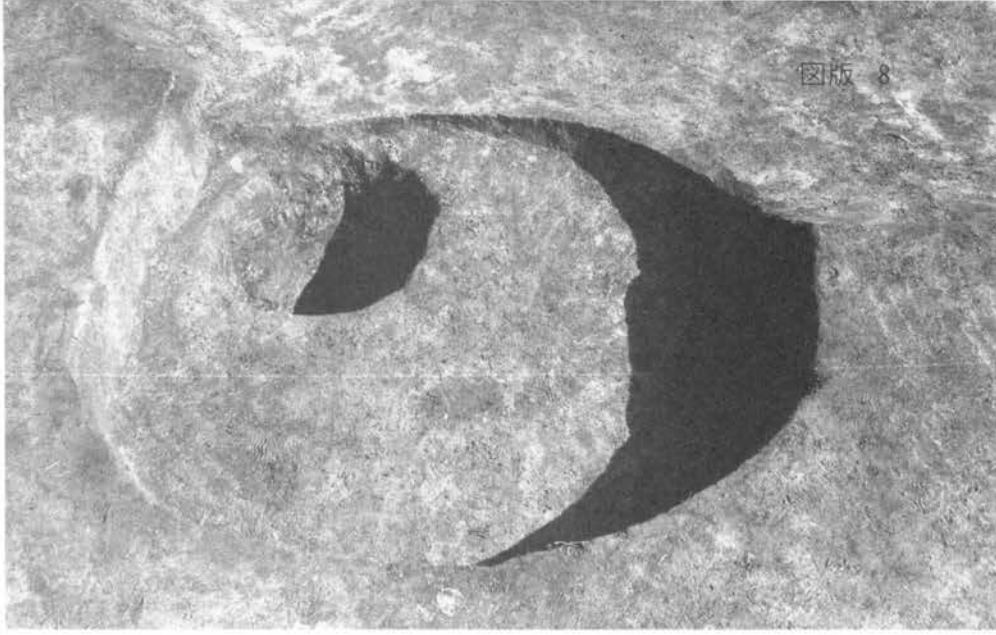
1. 87号住居址全景



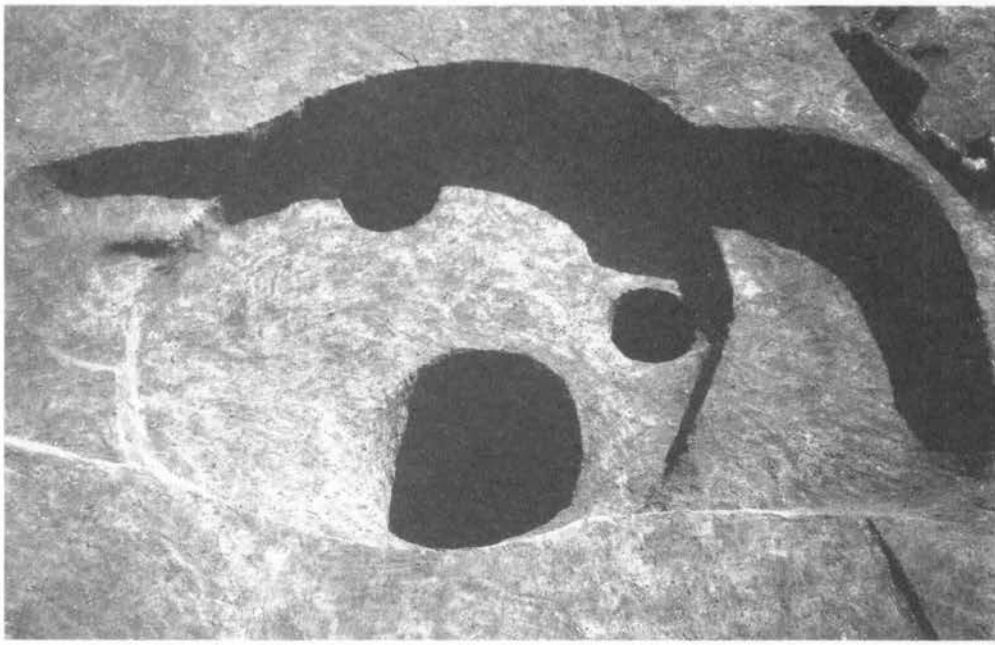
2. 88号住居址全景

3. 87号住居址埋設土器出土状況（左）

4. 88号住居址埋設土器出土状況（右）



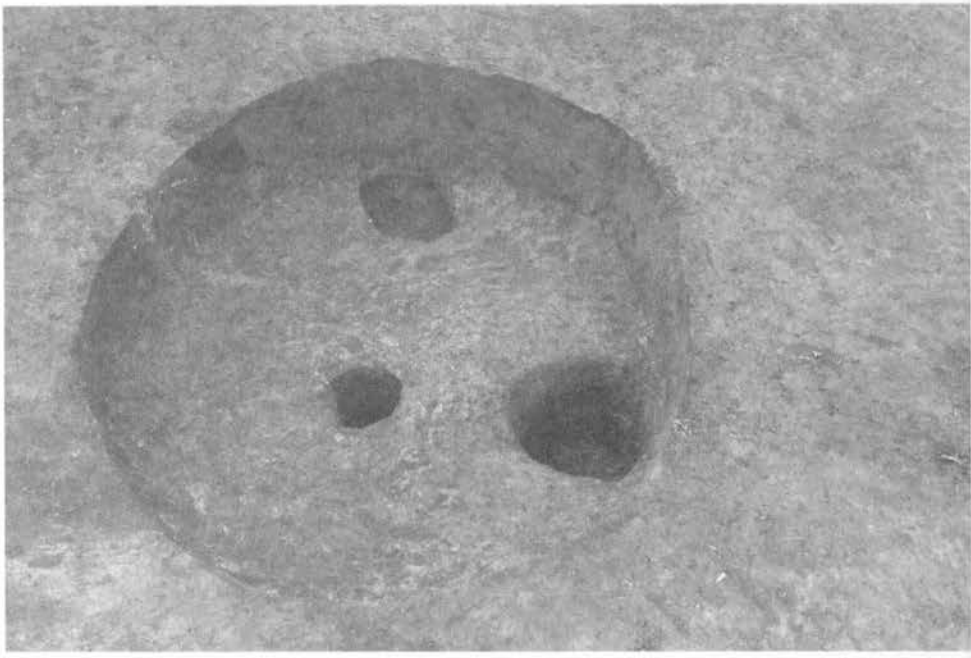
1. 59号址全景



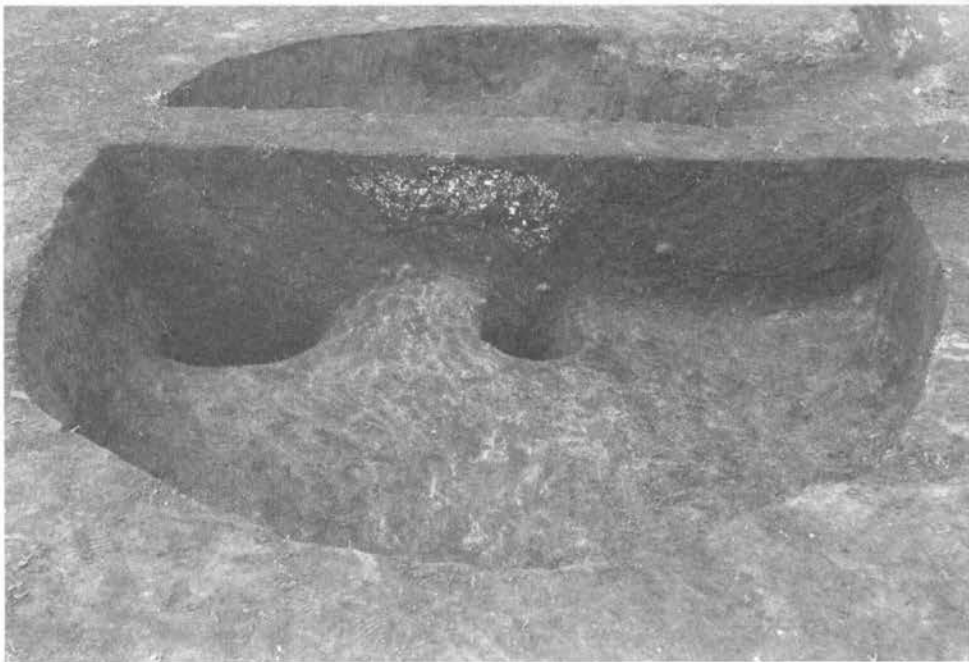
2. 81号址全景

3. 81号址遺物出土状況

1. 82号址・84号址（右）全景

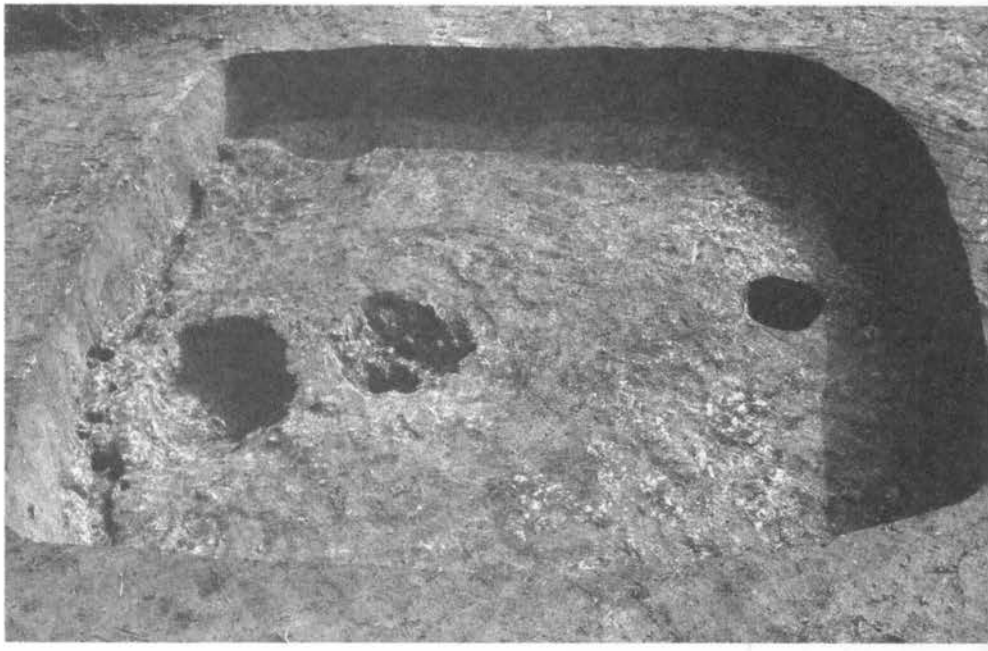


2. 86号址全景

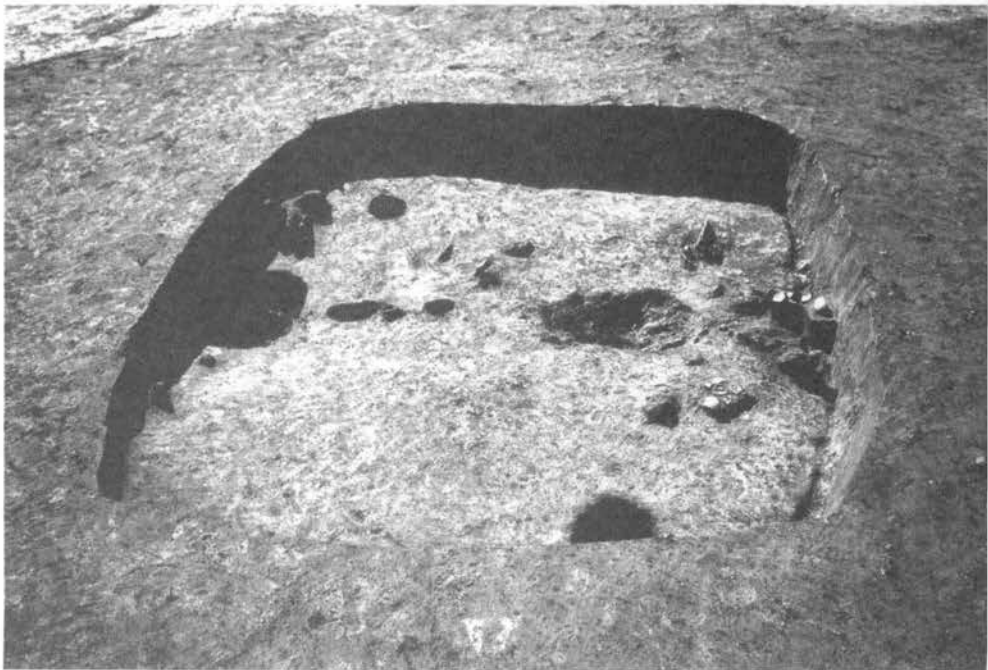


3. 86号址土層断面

1. 1号住居址全景



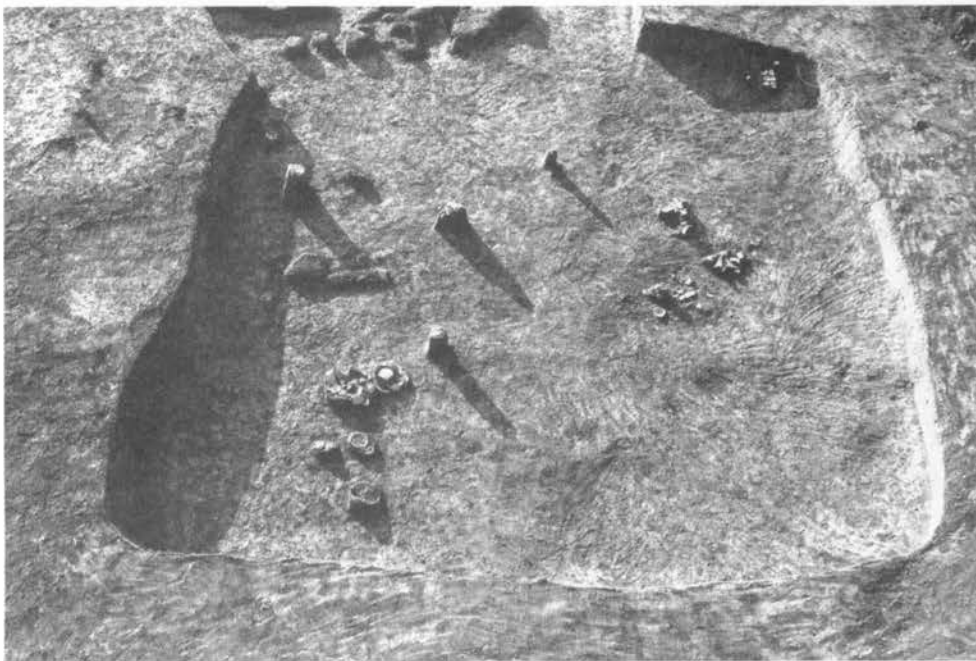
2. 2号住居址全景



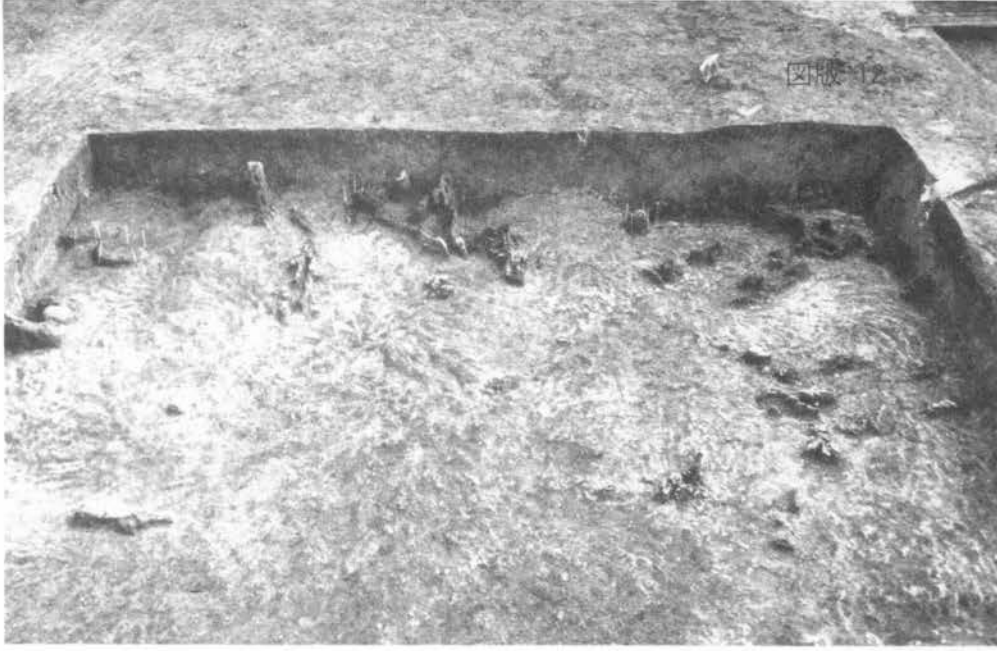
3. 4号住居址全景

1. 10号住居址・11号住居址（上）全景

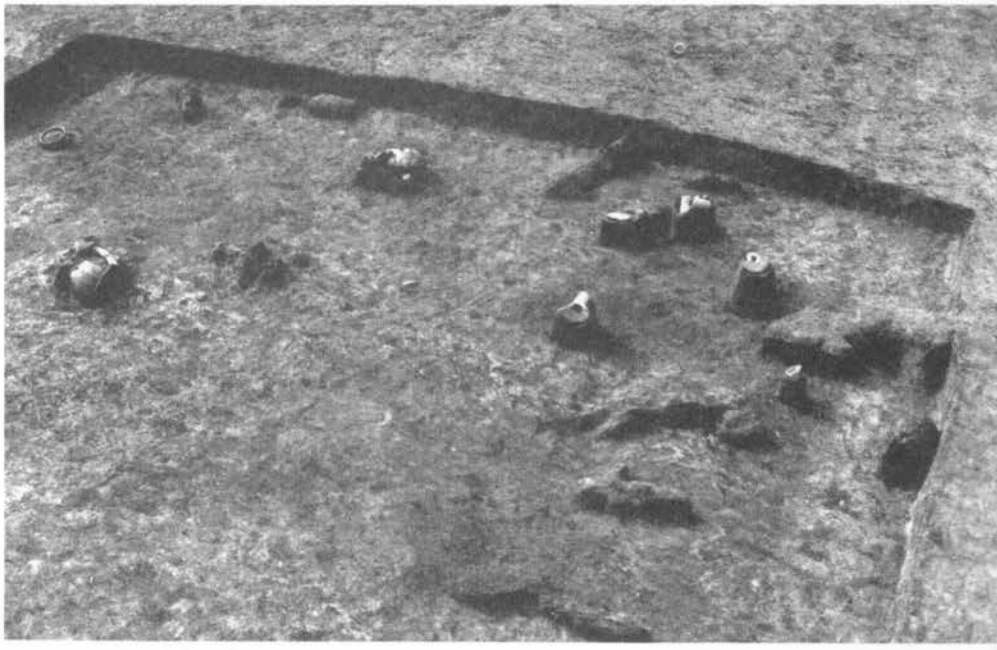
2. 12号住居址全景



3. 12－A号住居址全景



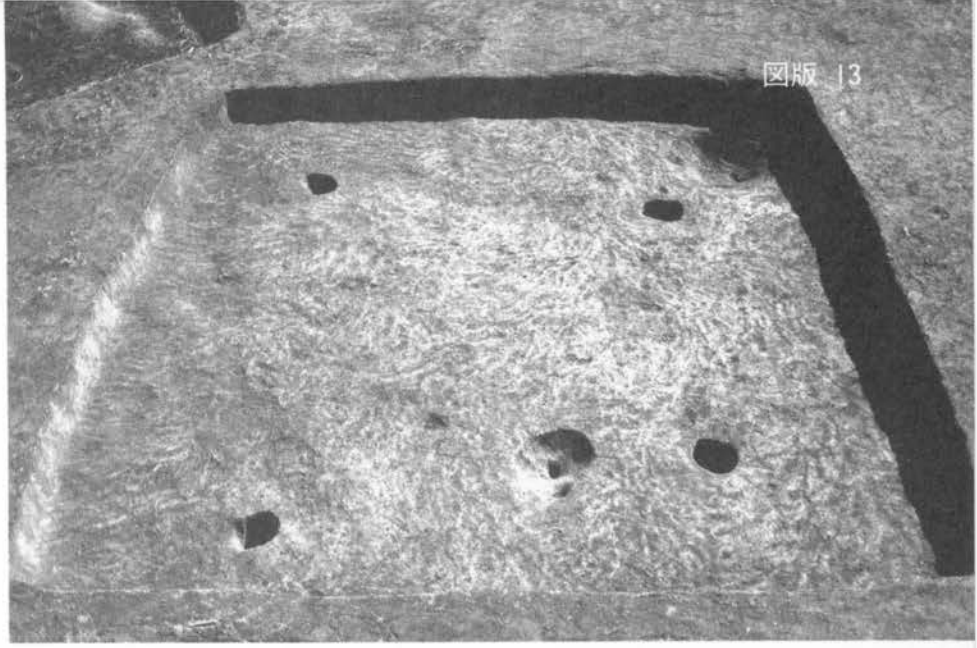
1. 15号住居址遺物出土状況



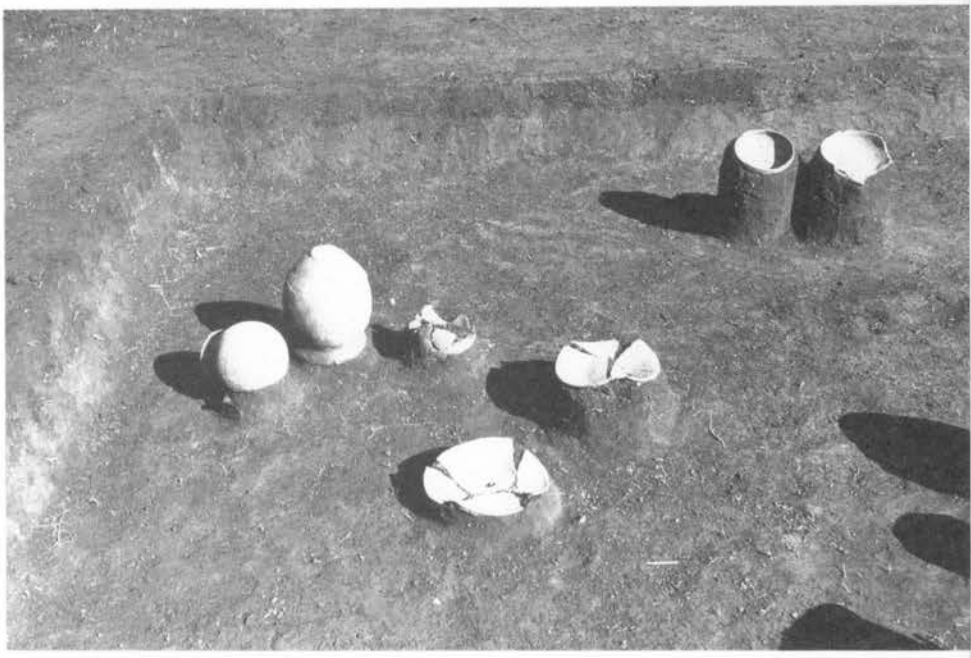
2. 16号住居址遺物出土状況

3. 15号住居址遺物出土状況（左）

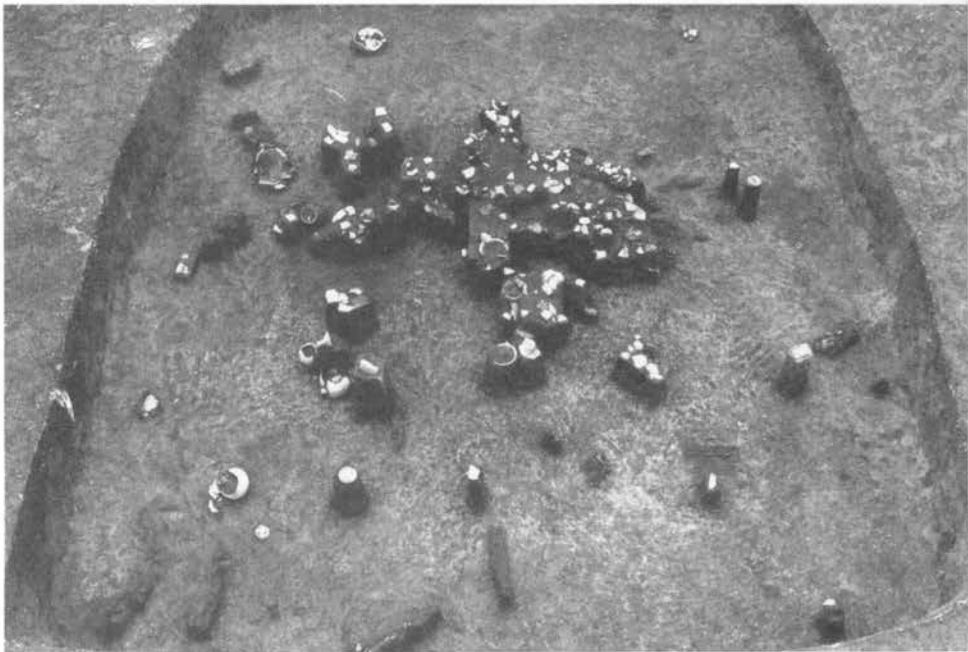
4. 16号住居址遺物出土状況（右）



1. 19号住居址全景

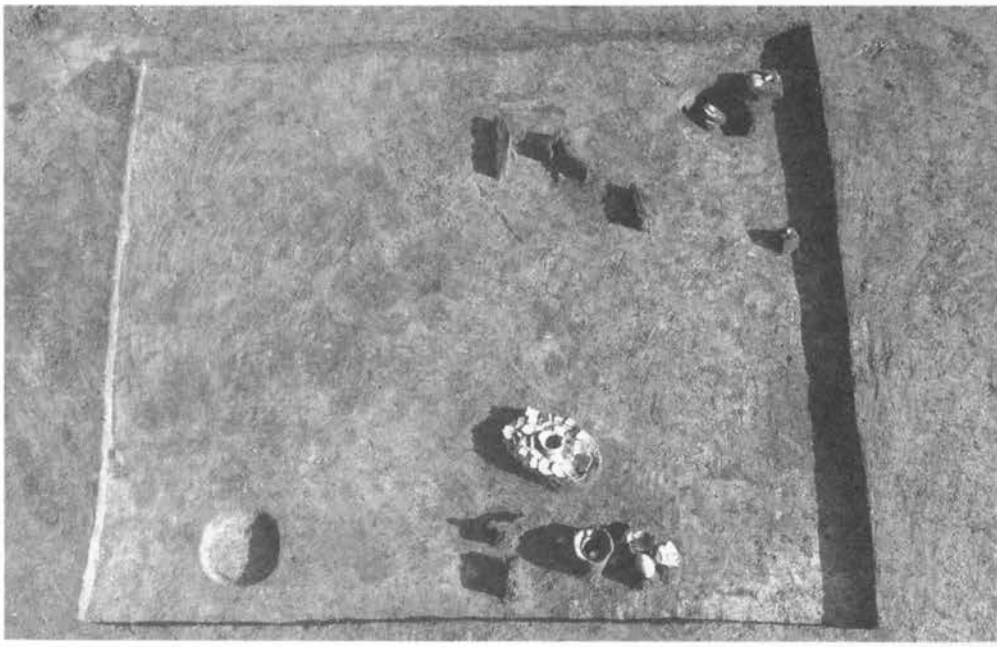


2. 19号住居址遺物出土状況

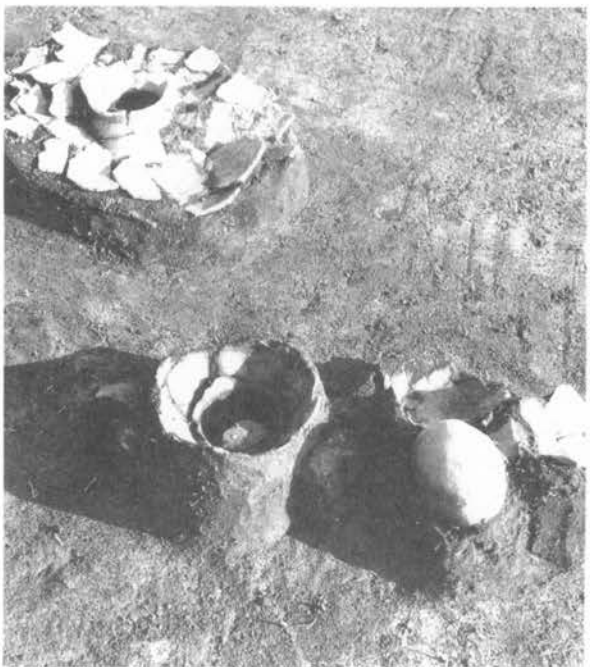


3. 20号住居址遺物出土状況

1. 22号住居址・23号住居址（下）全景

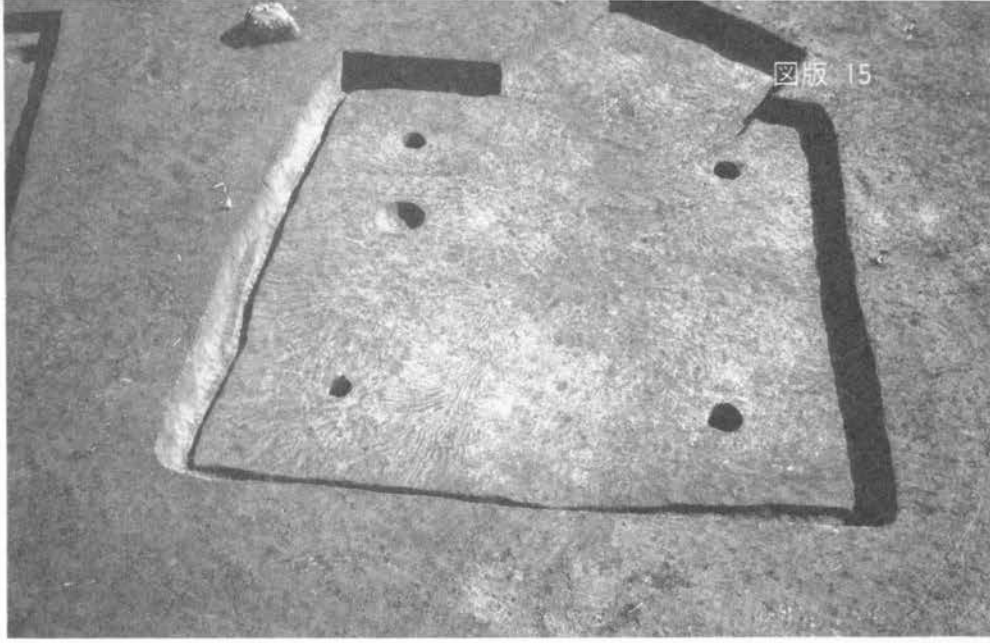


2. 22号住居址全景

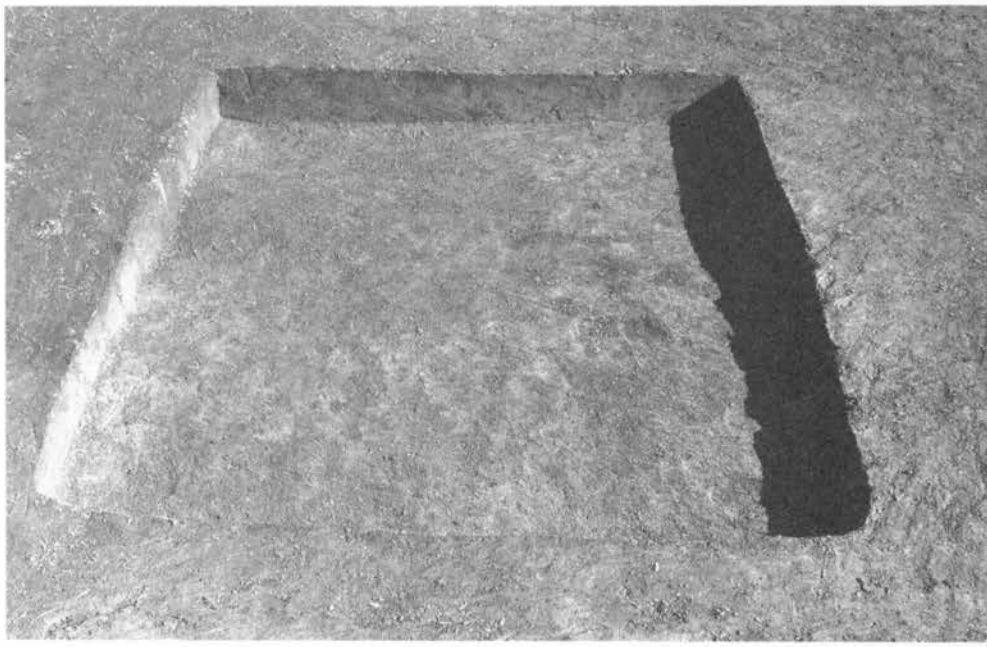


3. 22号住居址遺物出土状況（左）

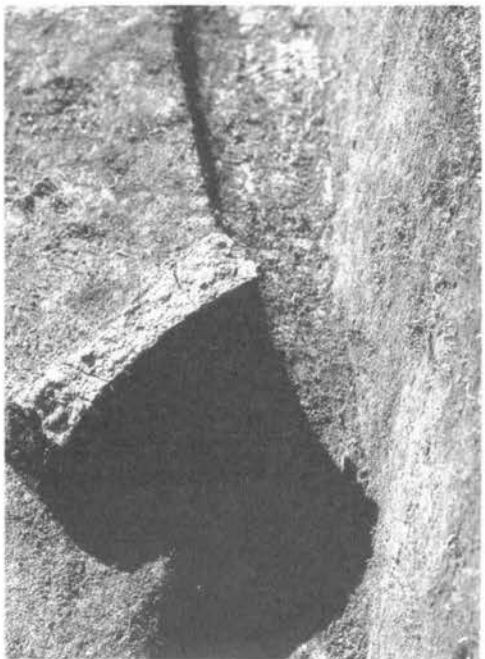
4. 22号住居址遺物出土状況（右）



1. 24号住居址・25号住居址（上）全景

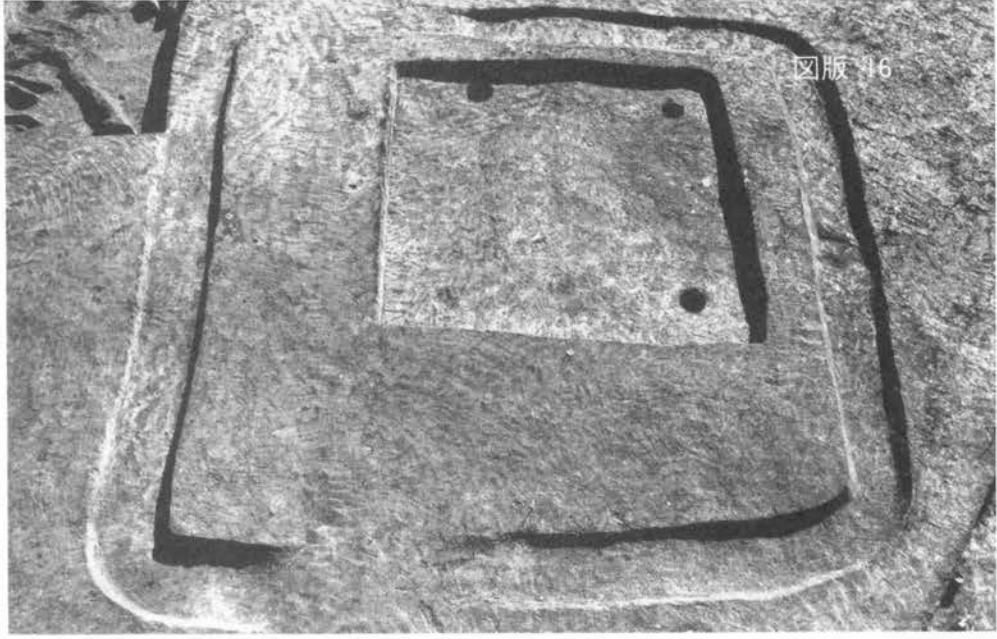


2. 26号住居址全景



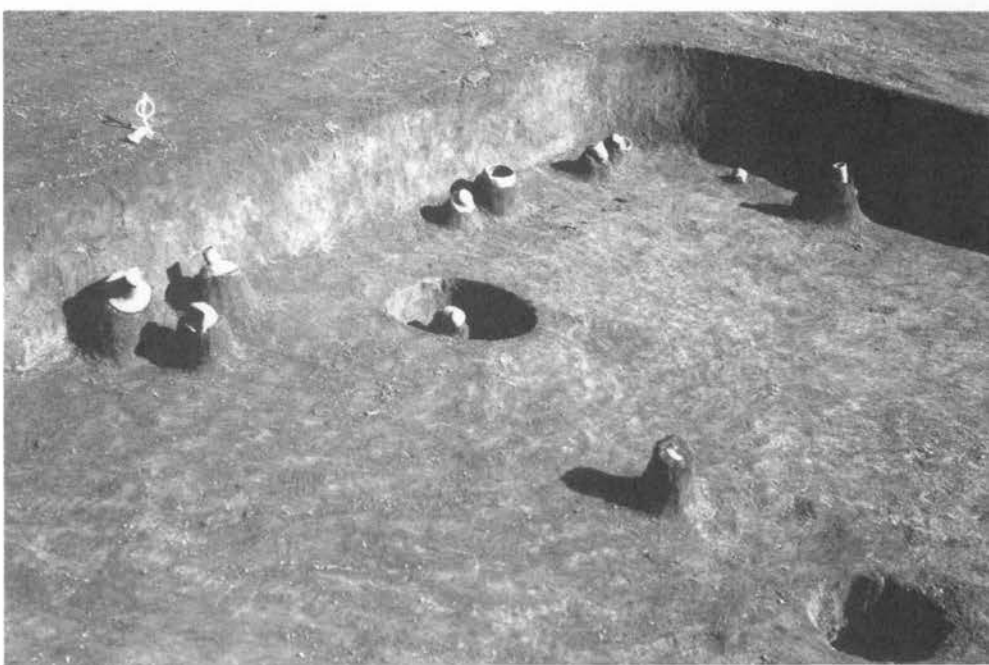
3. 24号住居址鉄鋌出土状況

4. 26号住居址遺物出土状況



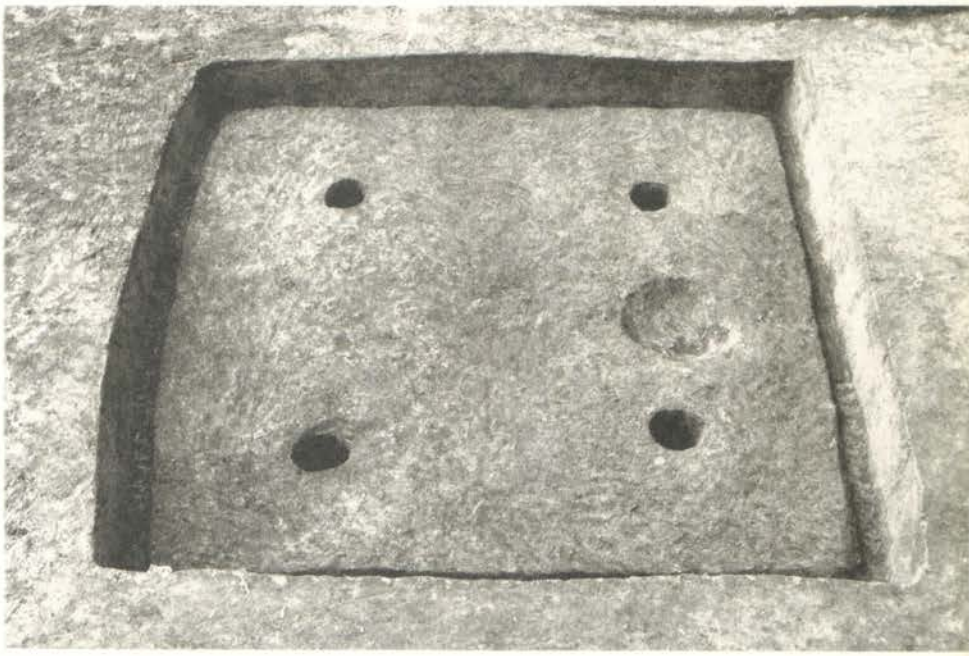
1. 27号住居址・29号址（外）全景

2. 28号住居址全景



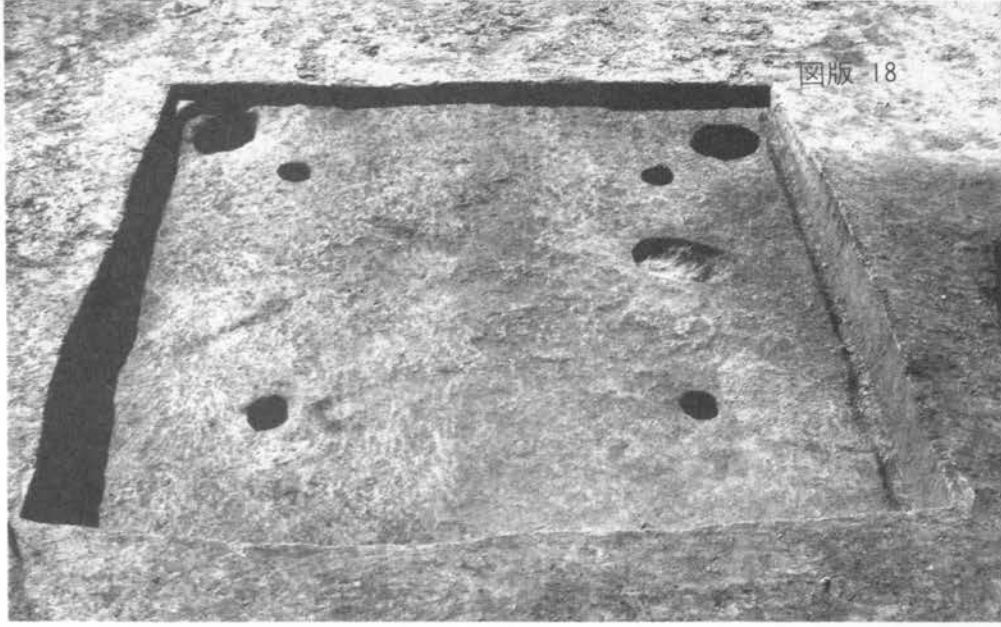
3. 28号住居址遺物出土状況

1. 30号住居址全景



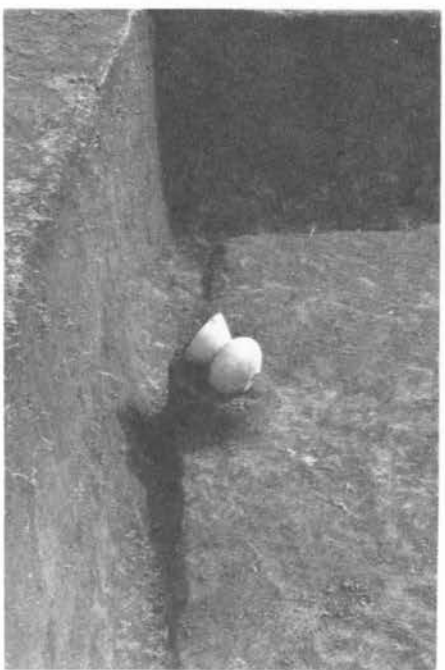
2. 31号住居址全景

3. 33号住居址全景

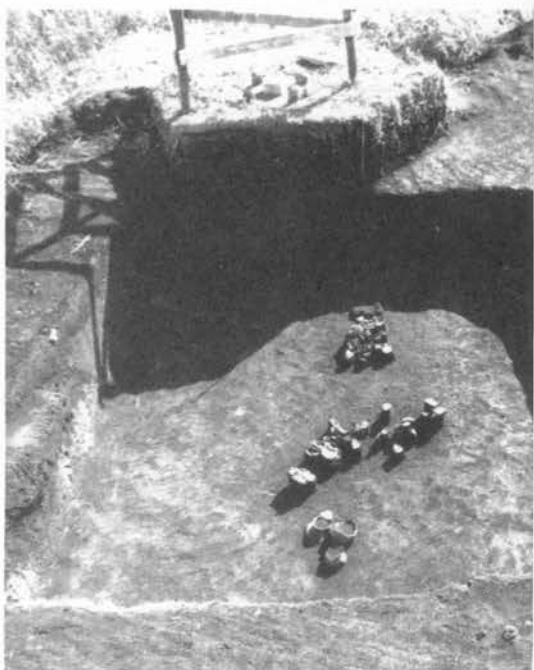


1. 35号住居址全景

2. 37号住居址全景

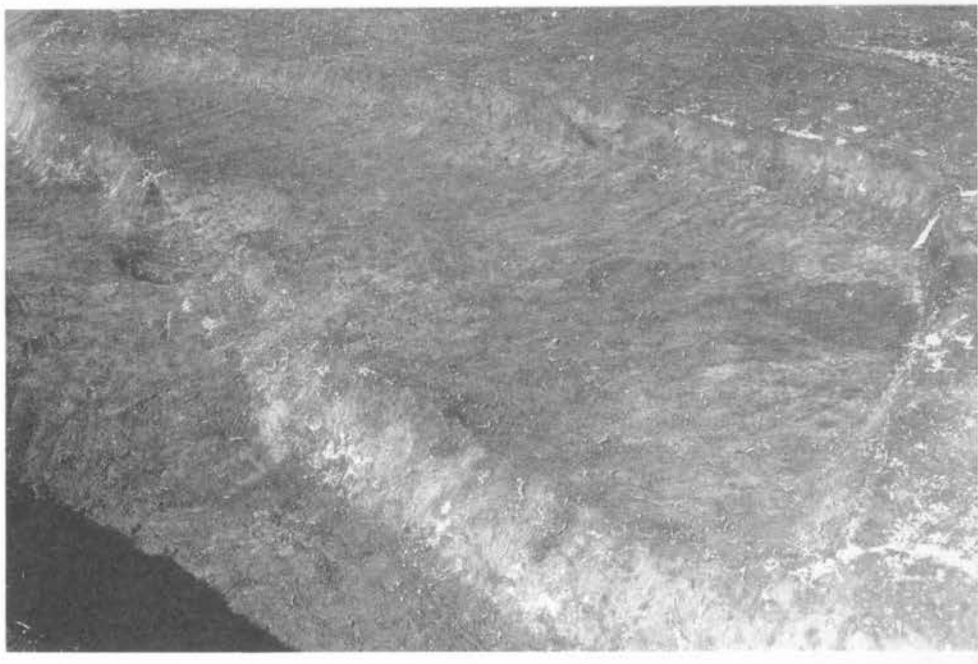


3. 35号住居址遺物出土状況（左）

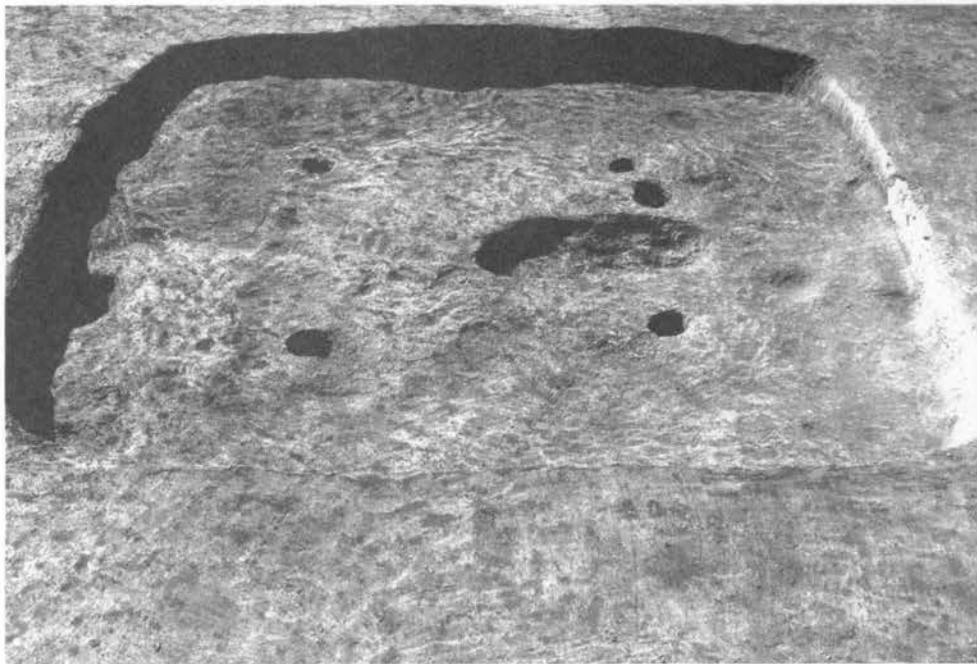


4. 37号住居址遺物出土状況（右）

1. 39号住居址全景

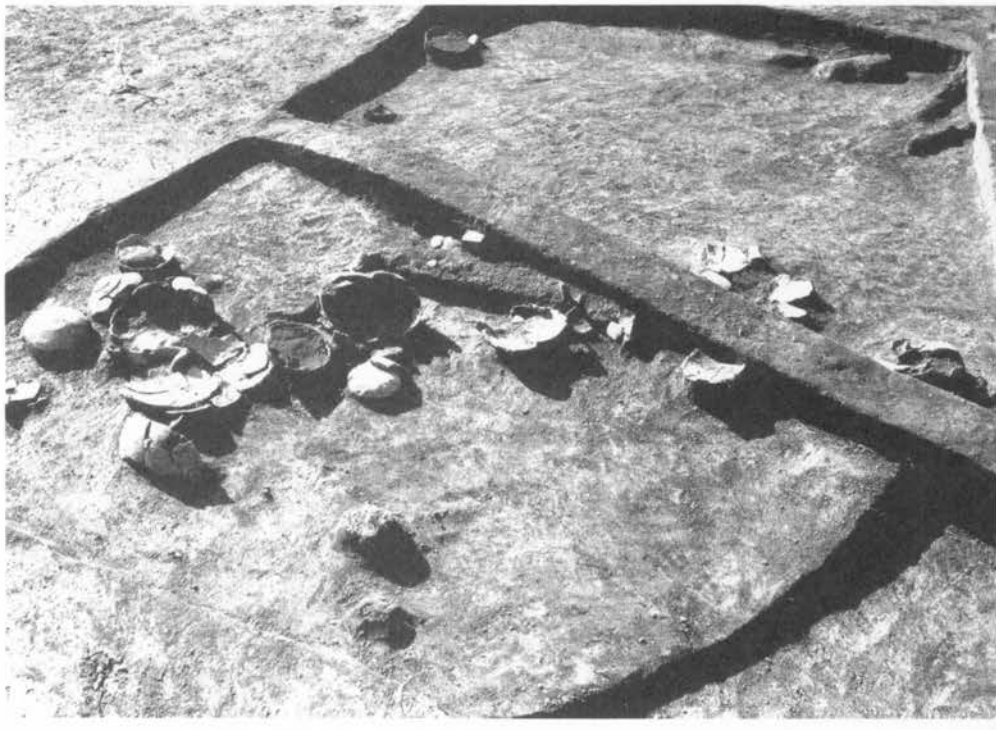


2. 43号住居址全景



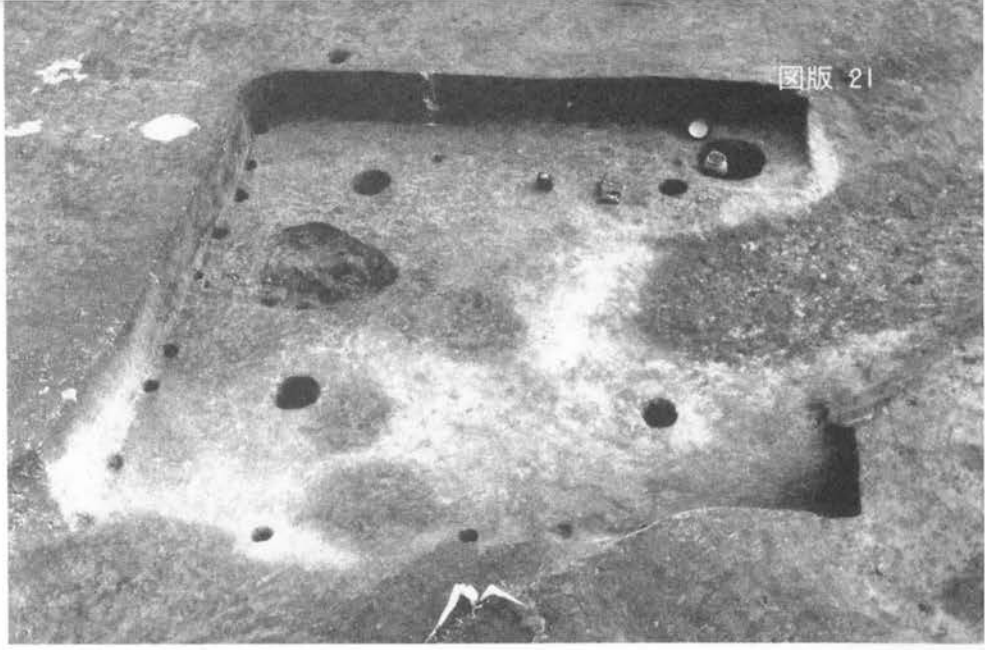
3. 44号住居址全景

1. 45号住居址・46号住居址（上）全景



2. 45号住居址遺物出土状況

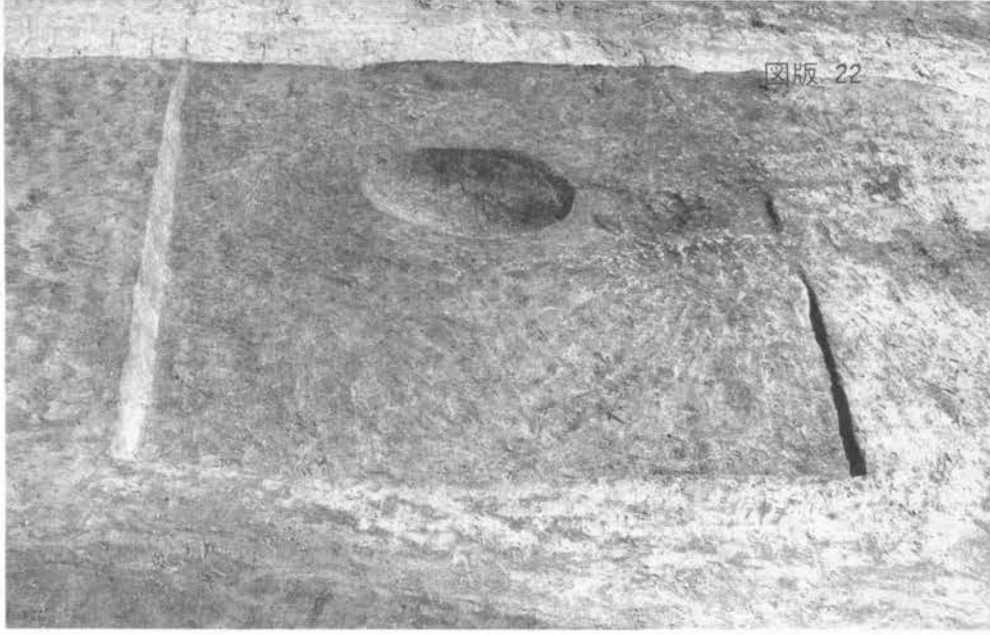
3. 49号住居址全景



1. 50号住居址全景

2. 50号住居址遺物出土状況

3. 51号住居址全景

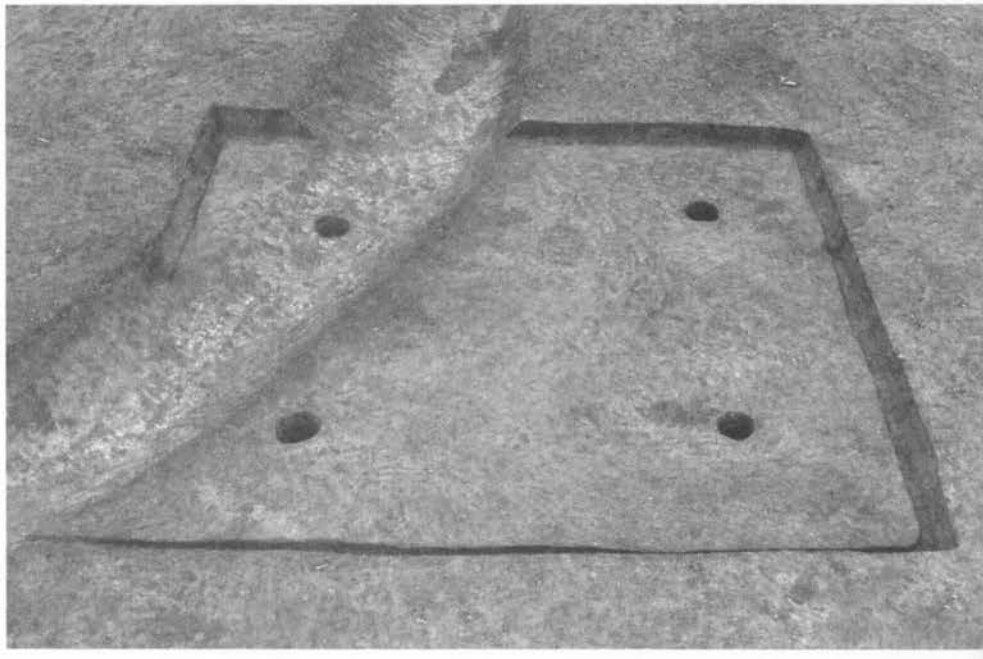


1. 54号住居址全景

2. 55号住居址全景

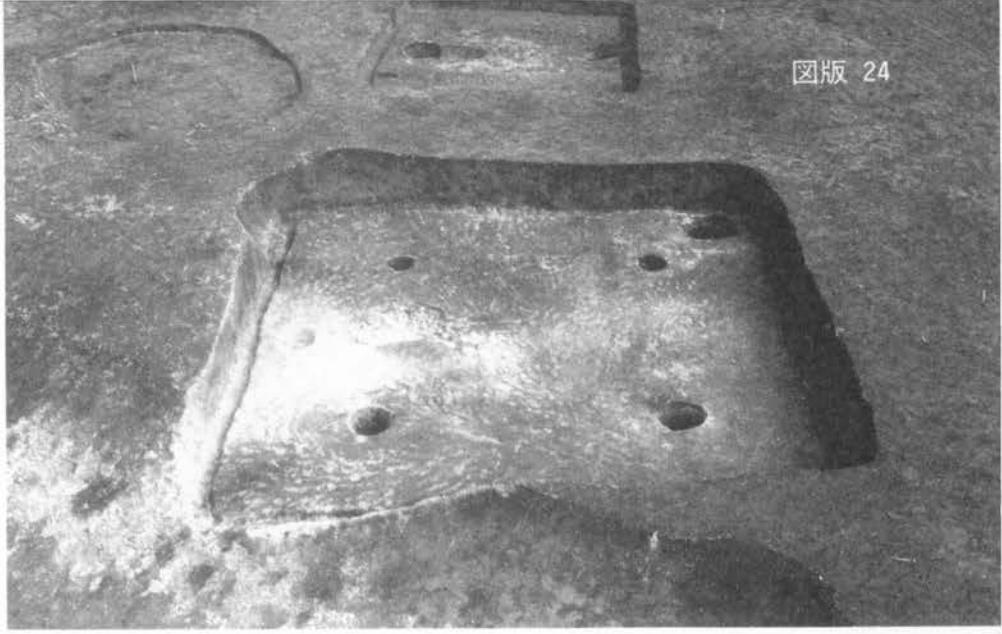
3. 58号住居址全景

1. 60号住居址全景



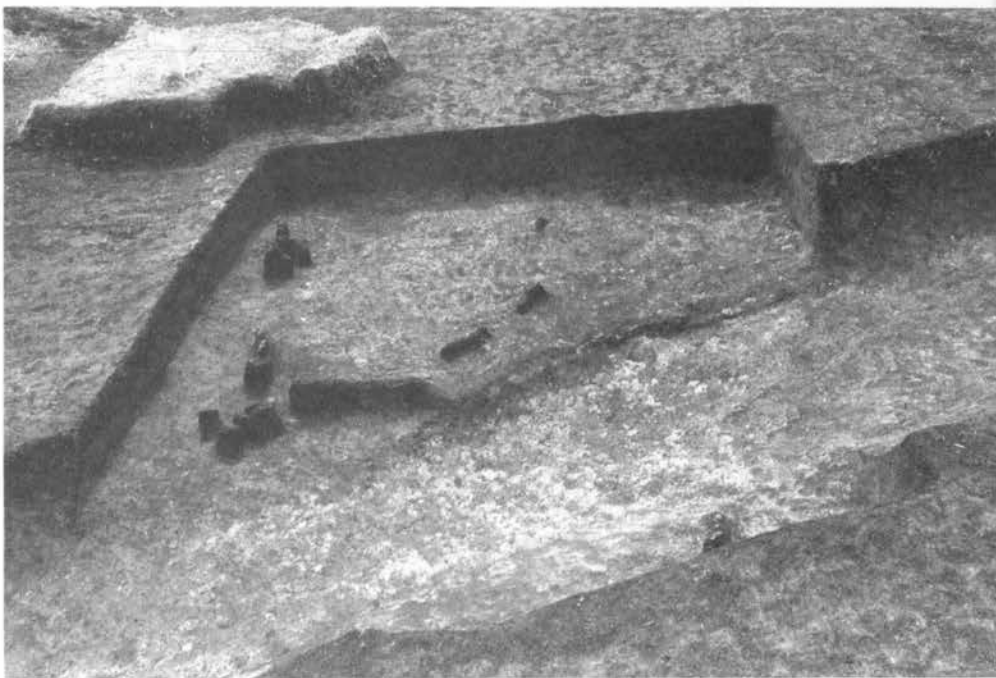
2. 62号住居址全景

3. 63号住居址全景

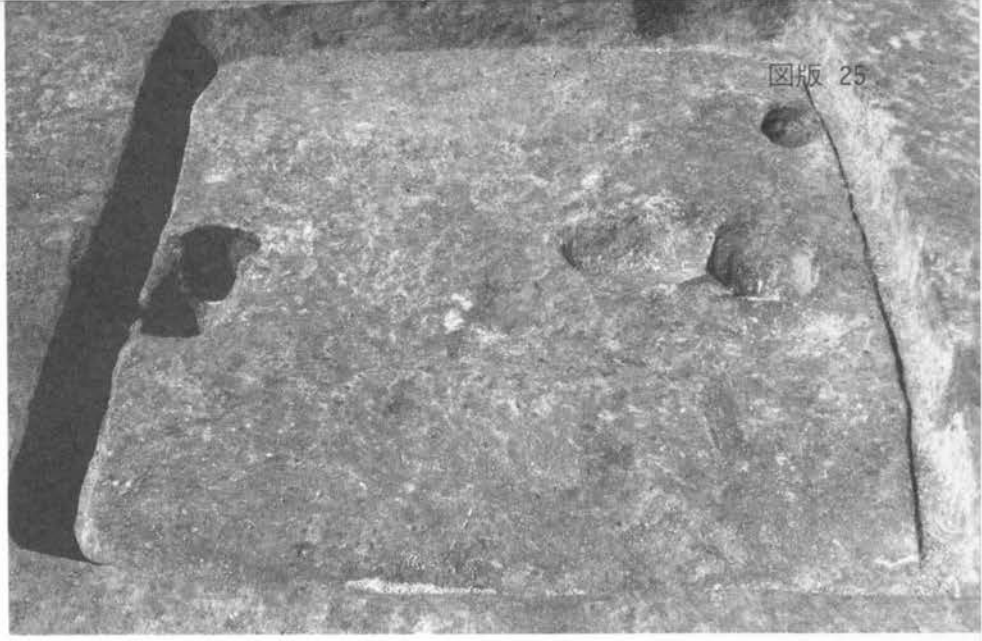


1. 64号住居址全景

2. 64号住居址遺物出土状況

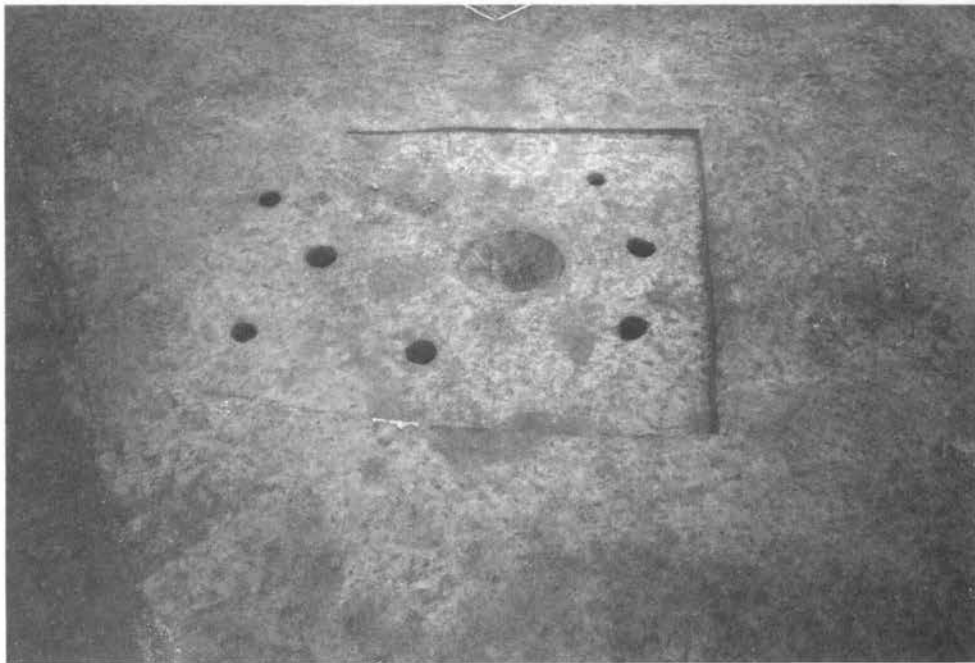


3. 65号住居址全景

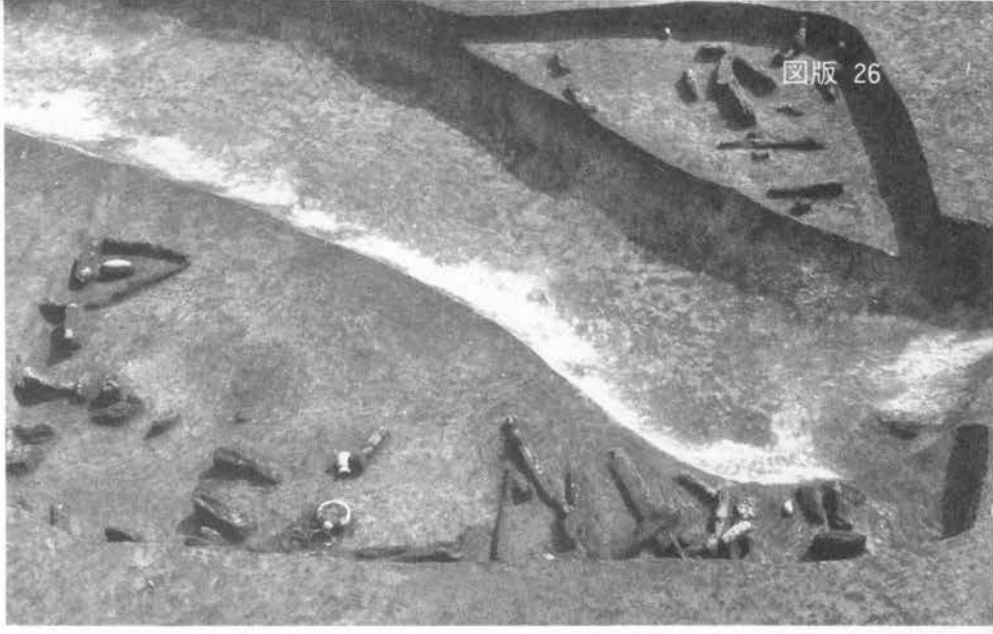


1. 66号住居址全景

2. 66号住居址遺物出土状況



3. 68号住居址全景



1. 69号住居址全景

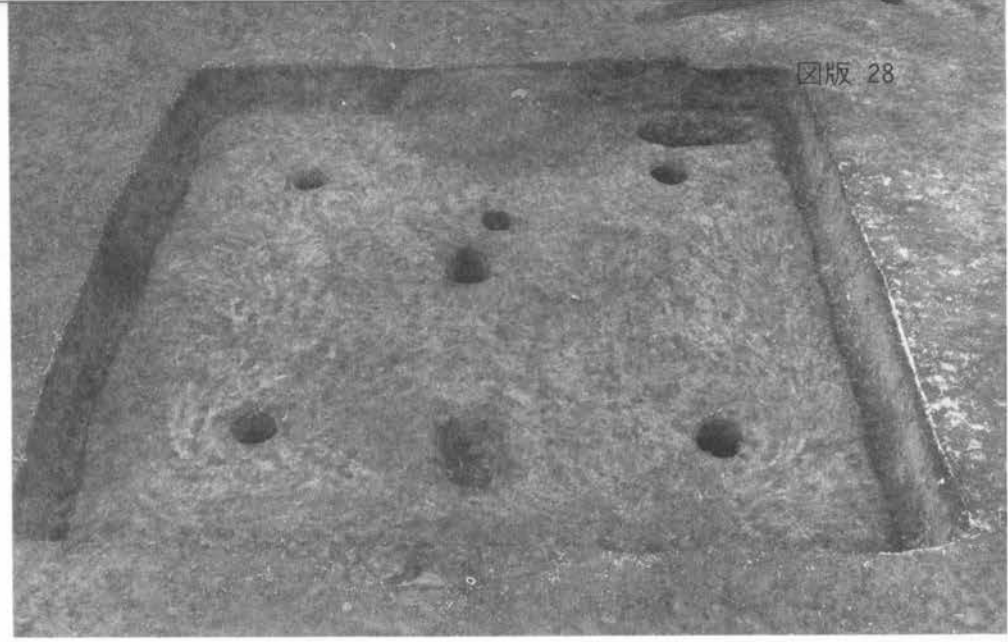
2. 69号住居址遺物出土状況

3. 69号住居址遺物出土状況

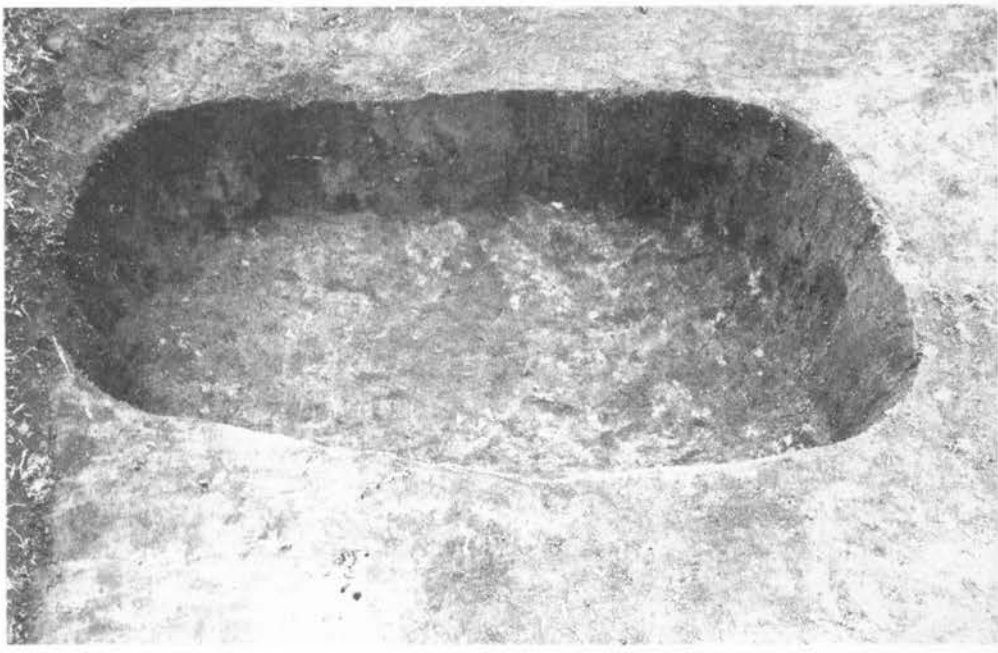
1. 71号住居址全景

2. 83号住居址全景

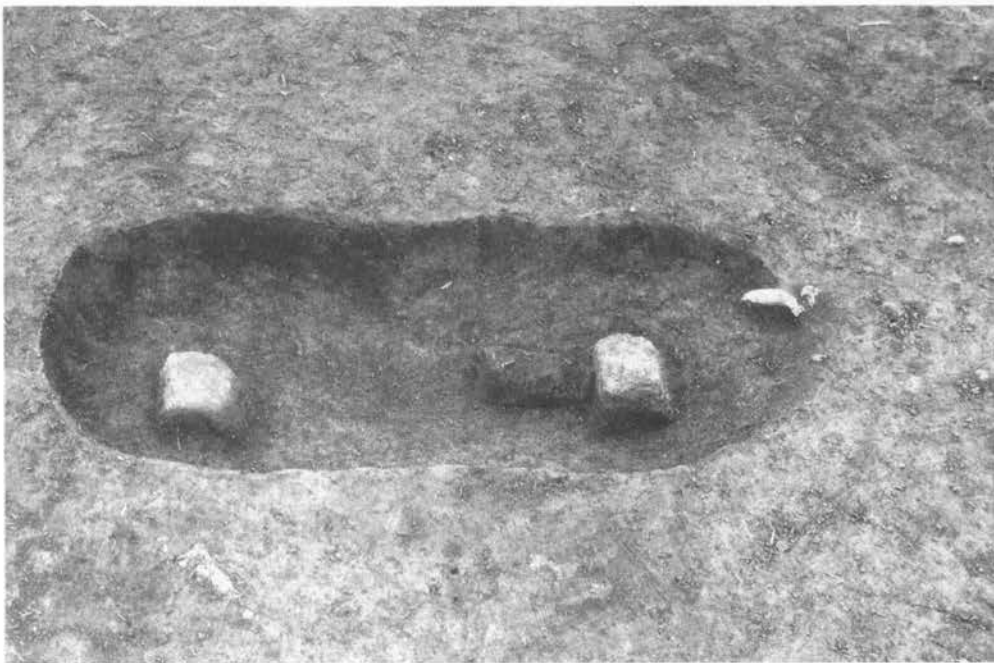
3. 83号住居址遺物出土状況



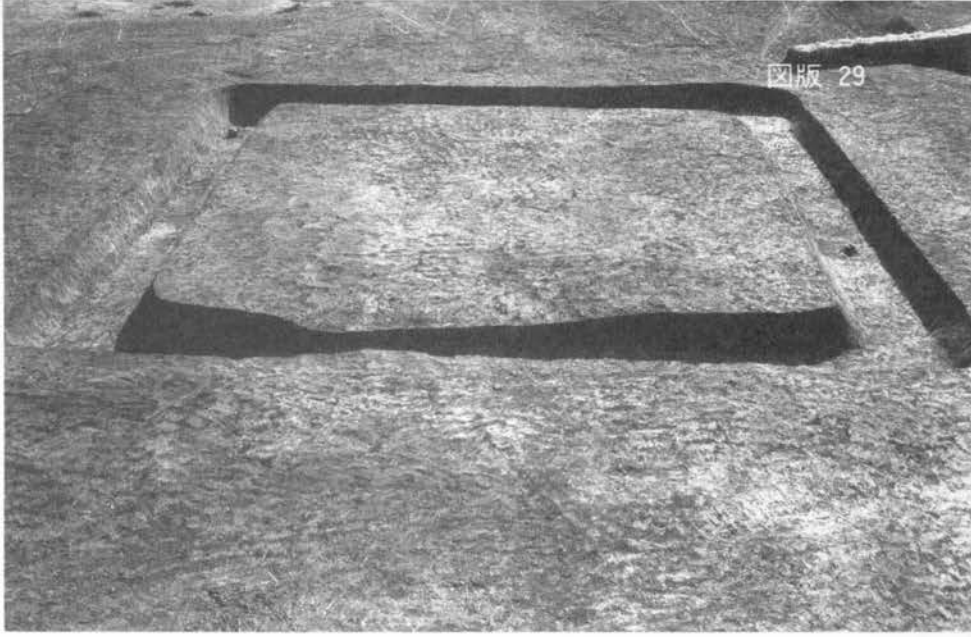
1. 21号住居址全景



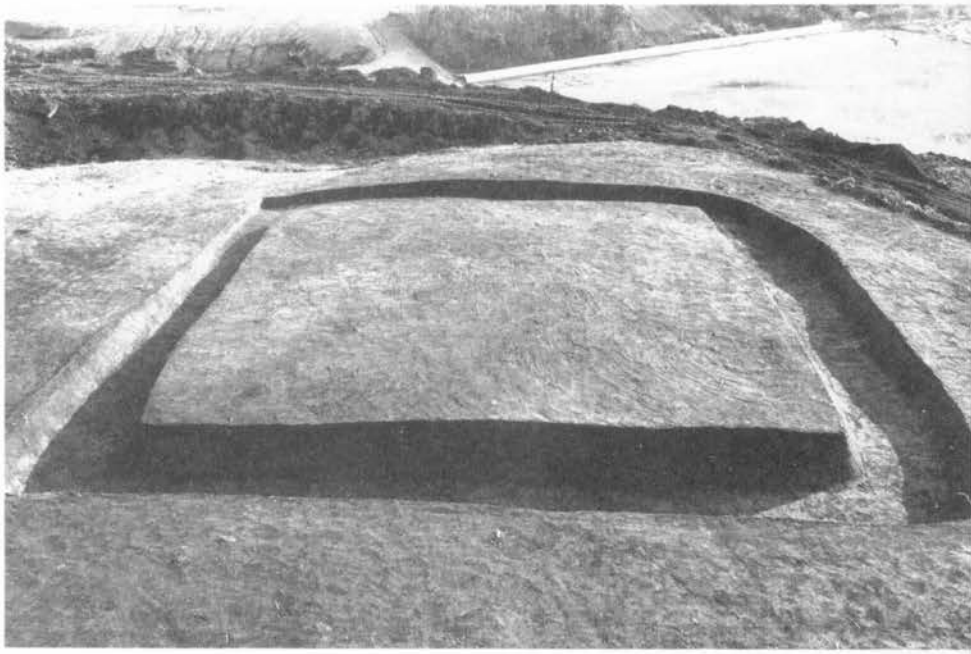
2. 72号址全景



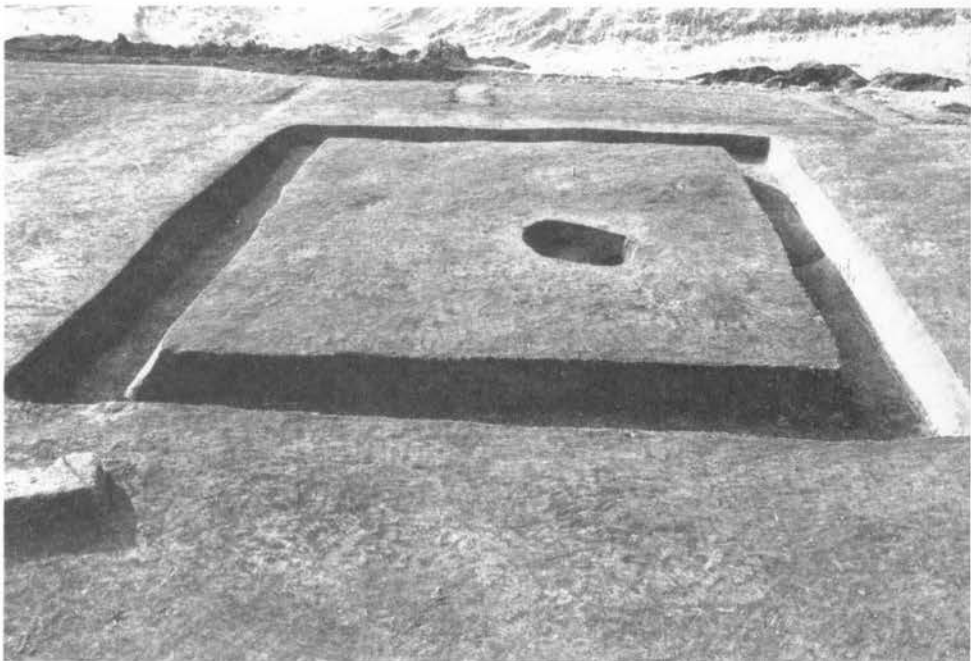
3. 74号址全景



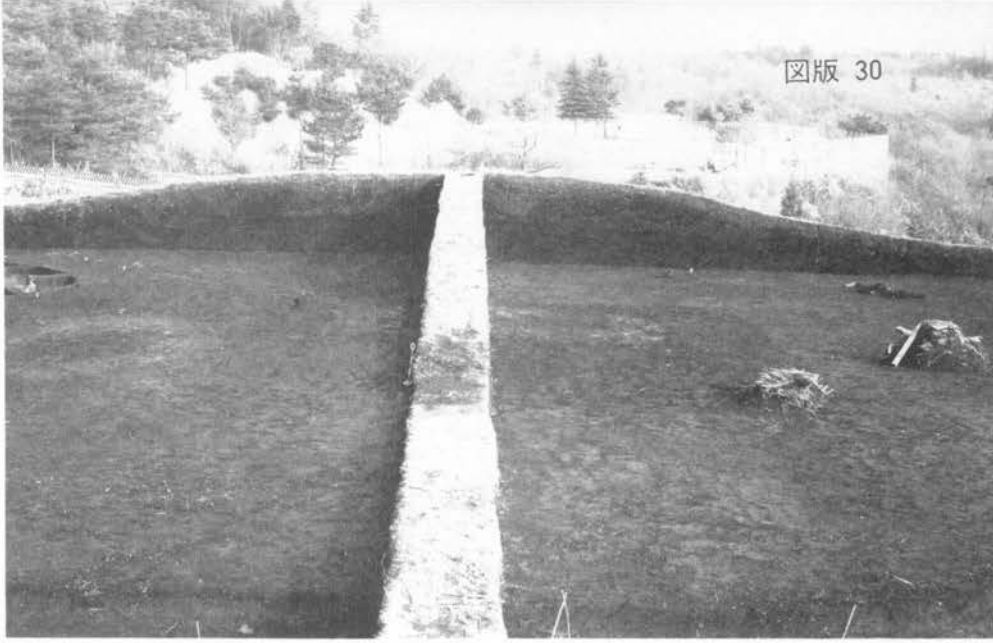
1. 38号址全景



2. 40号址全景

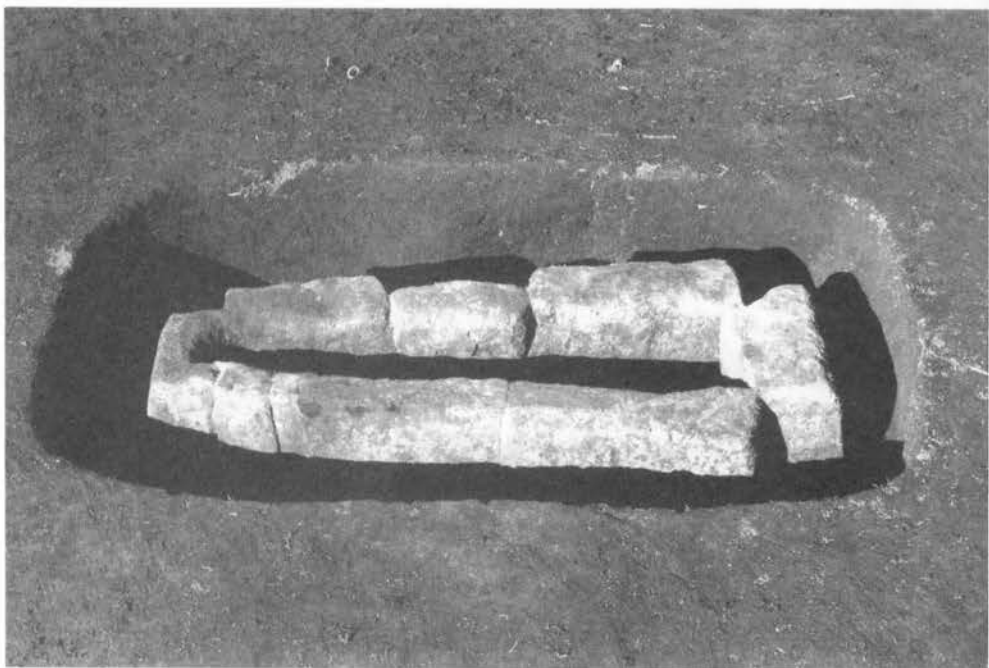


3. 41号址全景



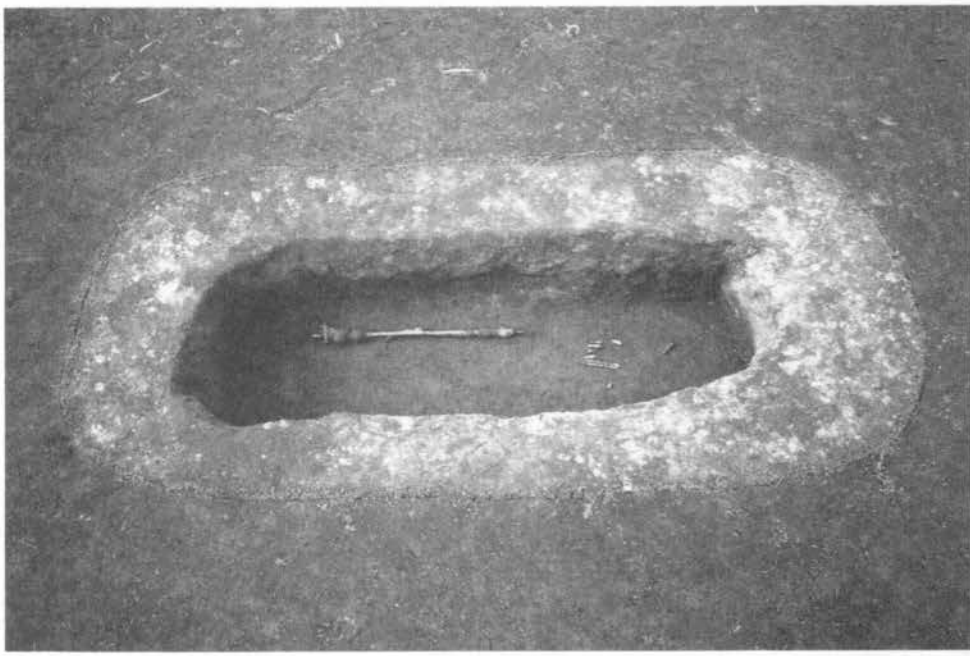
1. 1号墳墳丘断面
（B～B'）

2. 1号墳全景

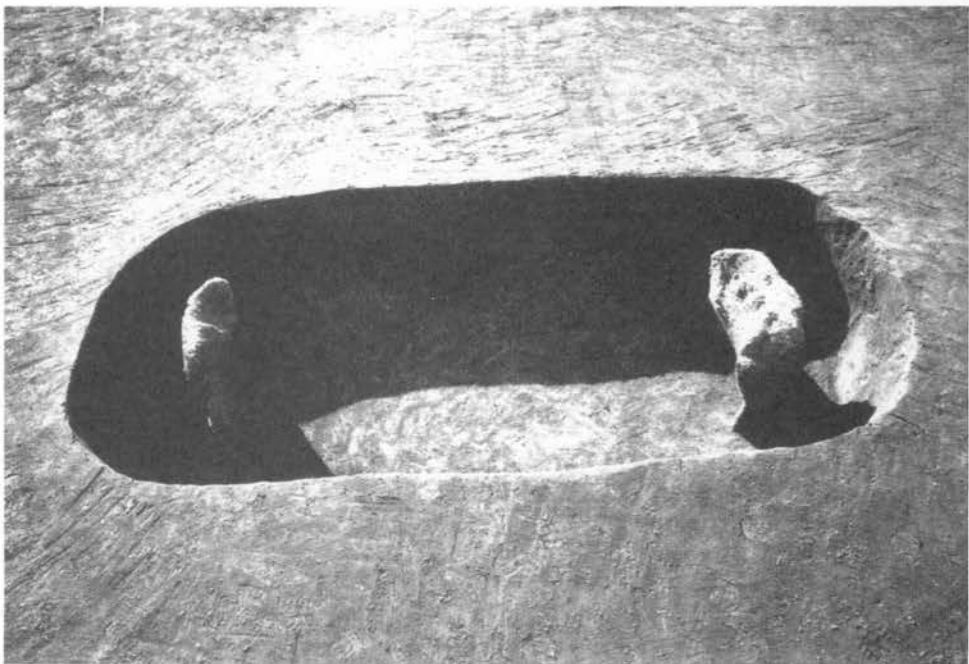


3. 1号墳第1主体部全景

1. 1号墳第2主体部確認状況

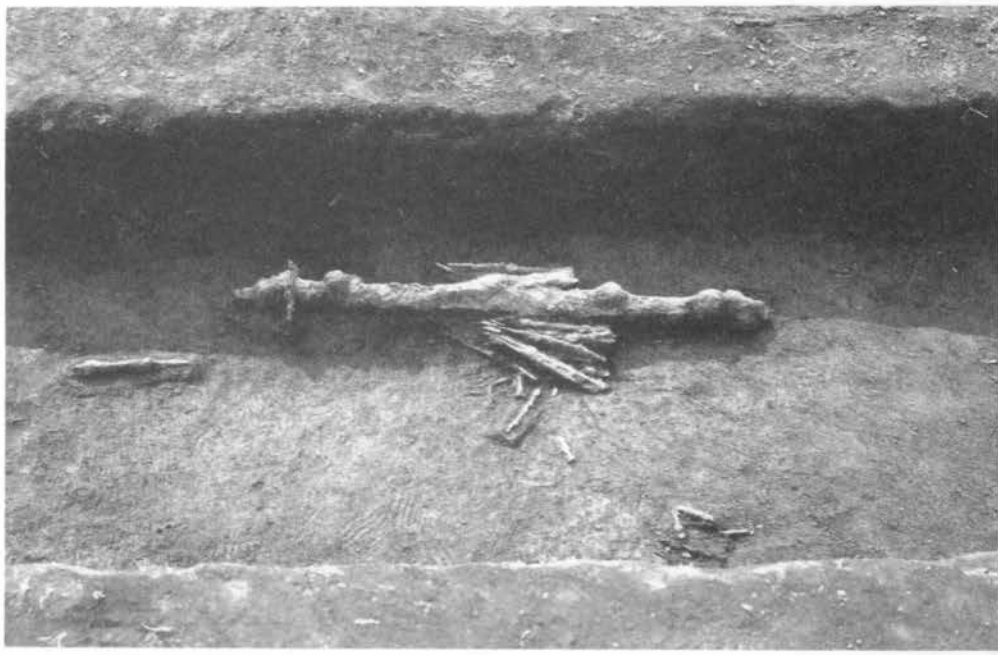


2. 1号墳第2主体部遺物出土状況



3. 1号墳第2主体部全景

1. 1号墳第3主体部遺物出土状況



2. 1号墳第3主体部遺物出土状況

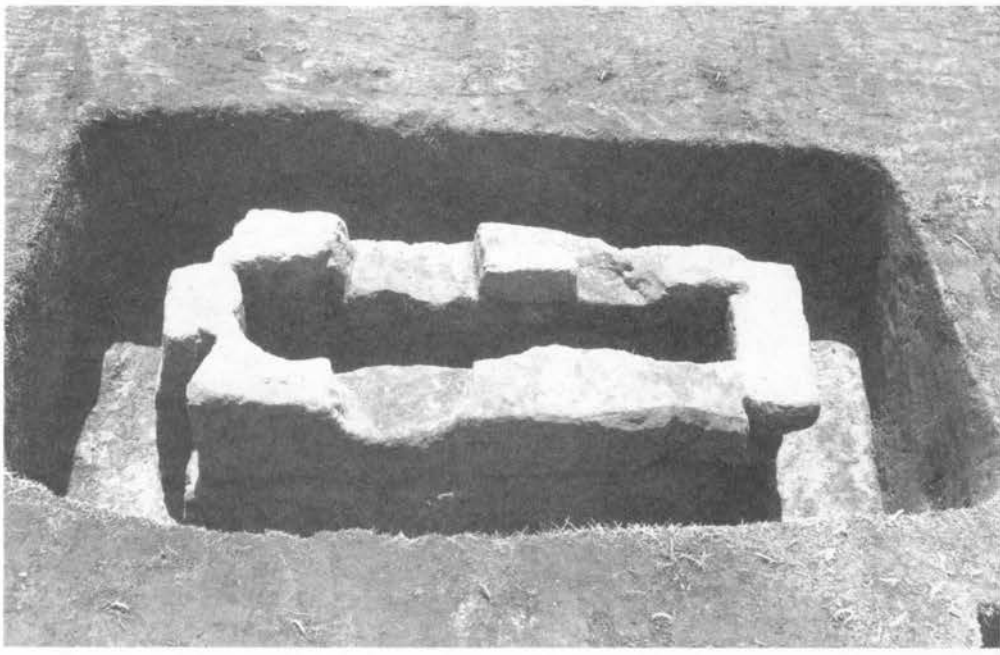
3. 1号墳第3主体部全景

1. 2号墳調査前全景

2. 2号墳墳丘断面
（B～B'）

3. 2号墳周溝状況

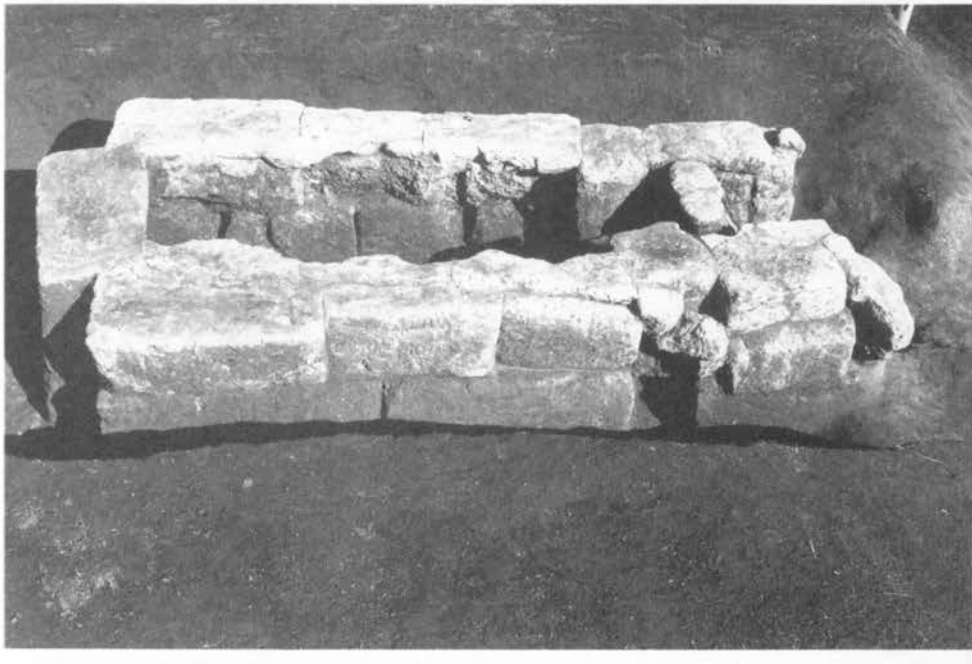
1. 2号墳第1主体部裏込め状況



2. 2号墳第1主体部石棺全景

3. 2号墳第1主体部土坑全景

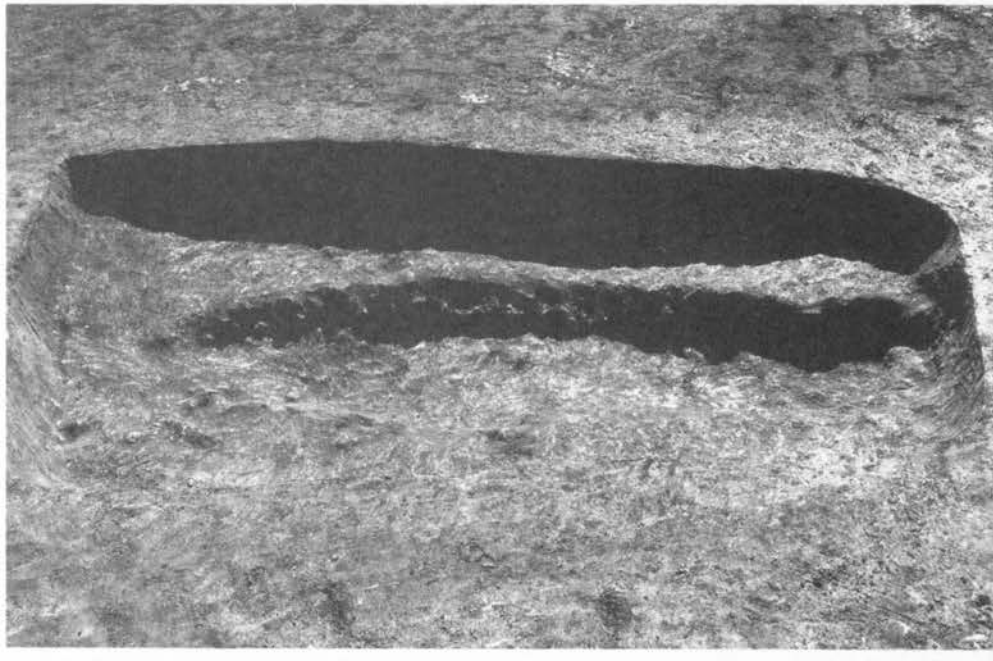
1. 3号墳第1主体部確認状況



2. 3号墳第1主体部全景

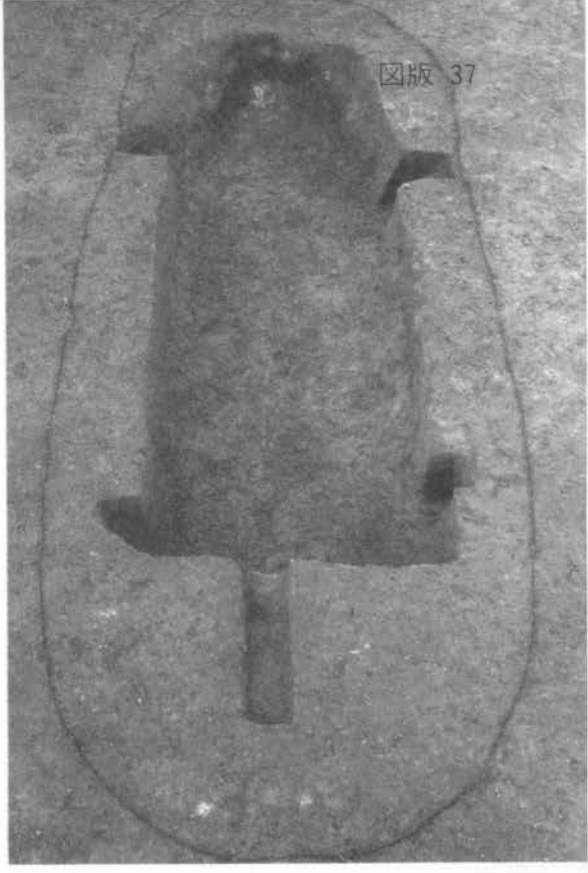
3. 3号墳第1主体部前周溝内遺物出土状況

1. 4号墳周溝状況

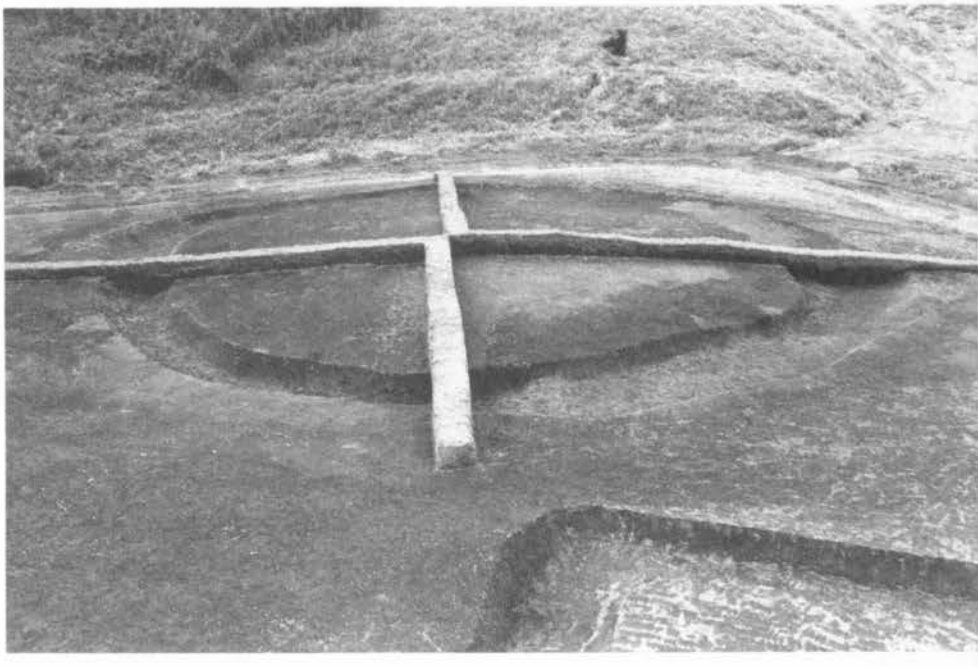


2. 4号墳第1主体部全景

3. 4号墳第1主体部遺物出土状況



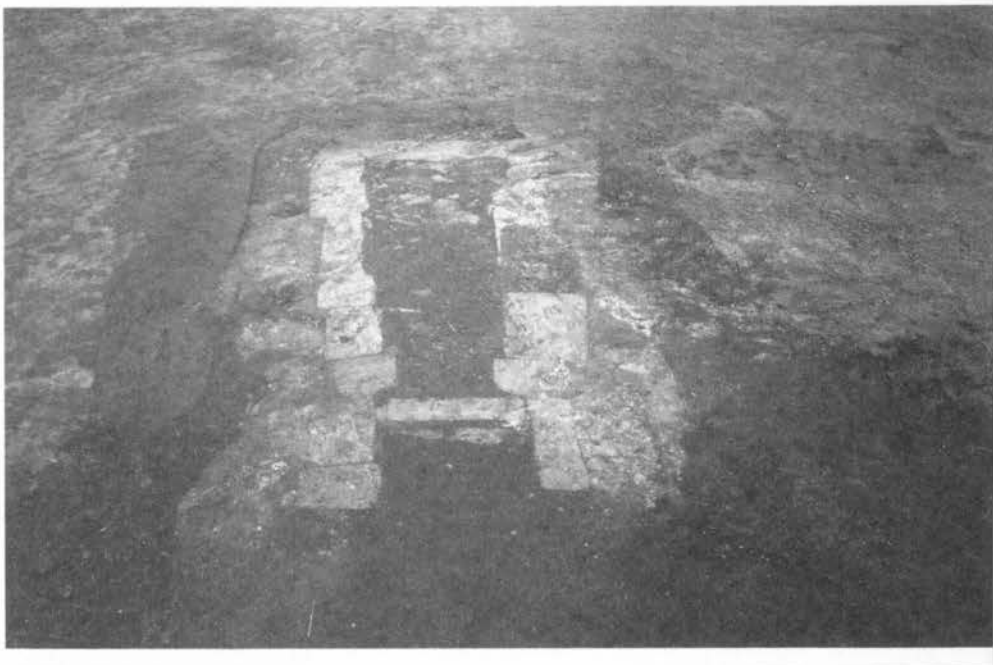
1. 4号墳第2主体部全景（左）
2. 4号墳第3主体部全景（右）



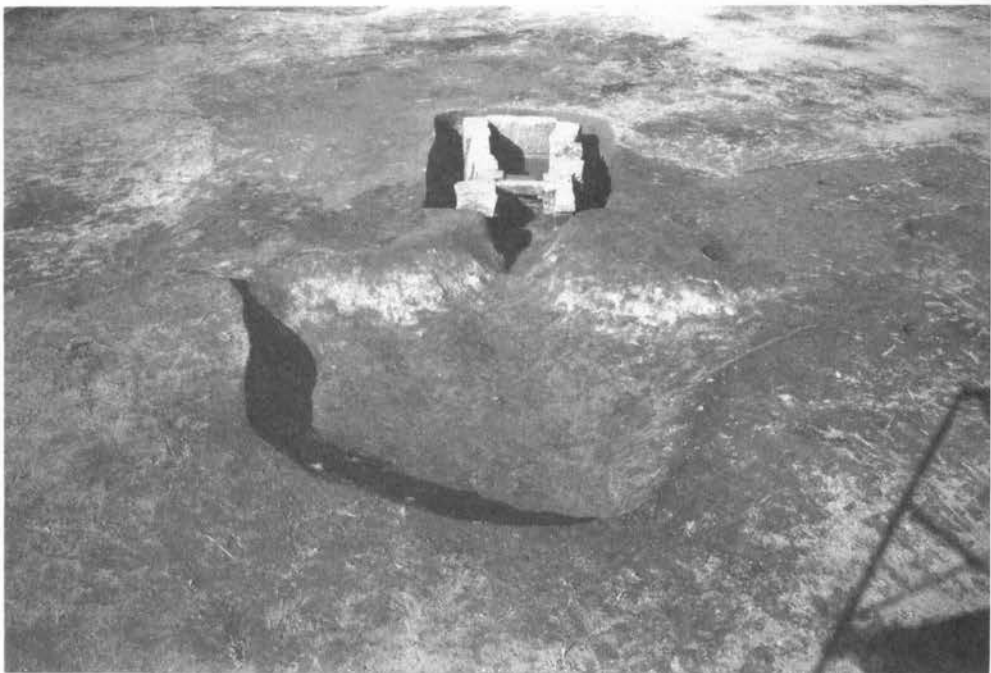
3. 6号墳全景

4. 6号墳墳丘断面

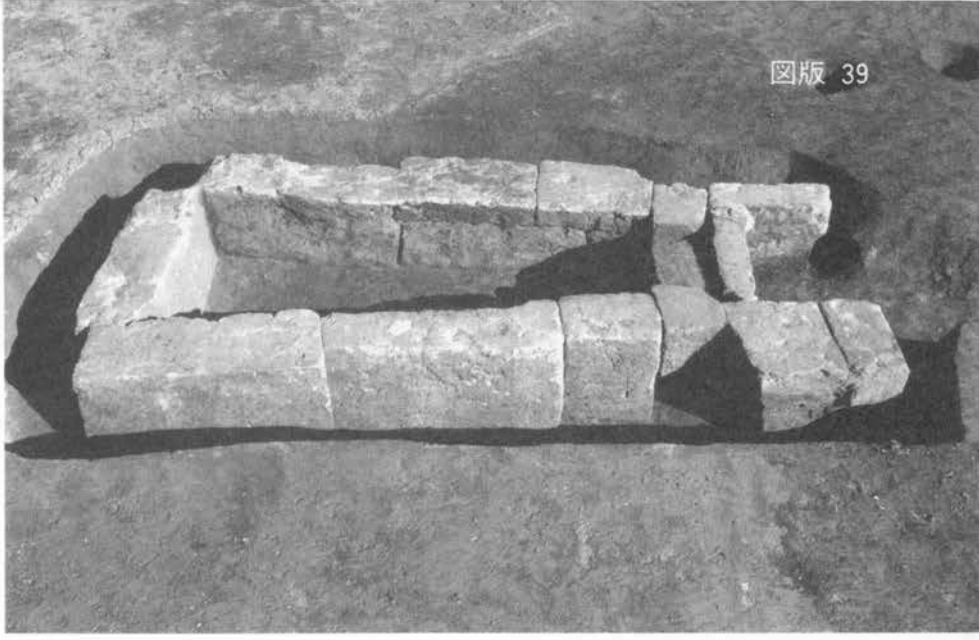
1. 7号墳全景



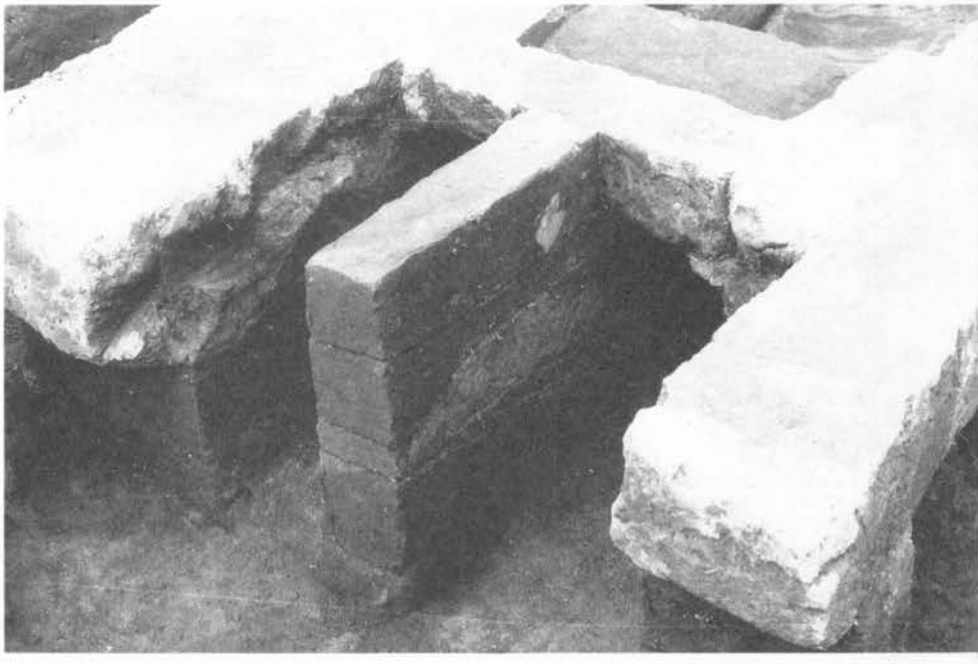
2. 7号墳第1主体部確認状況



3. 7号墳周溝状況



1. 7号墳第1主体部全景



2. 7号墳第1主体部羨道部状況

3. 8号墳全景

1（13）

2（13）

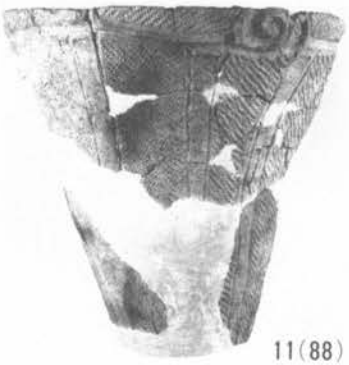
3（18）

8（82）

7（81）

9（87）

10（88）


11（88）

1（69）

2（24）

住居址・土坑出土遺物（13・18・24・69・87・88号住居址、81・82号址）

3（2）

4（2）

6（4）

10(12A)

18(12A)

14(12A)

23(12A)

11(12A)

15(12A)

13(12A)

16(12A)

28(12A)

27(12A)

21(12A)

住居址出土土器（2・4・12－A号住居址）

30(15)

32(15)

39(15)

40(15)

38(15)

42(16)

44(16)

41(16)

43(16)

57(19)

45(16)

49(19)

56(19)

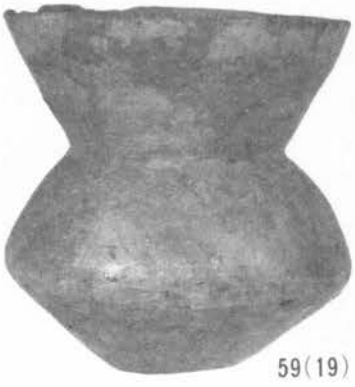
55(19)

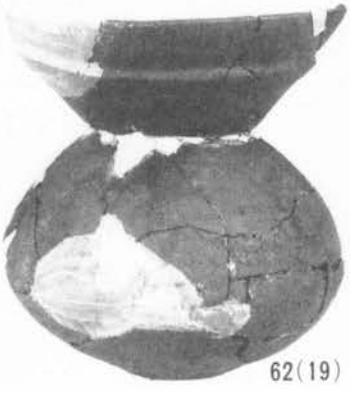
住居址出土土器（15・16・19号住居址）

50(19)

53(19)

58(19)


59(19)


62(19)

61(19)

67(19)

74(19)

72(19)

65(19)

66(19)

78(19)

76(19)

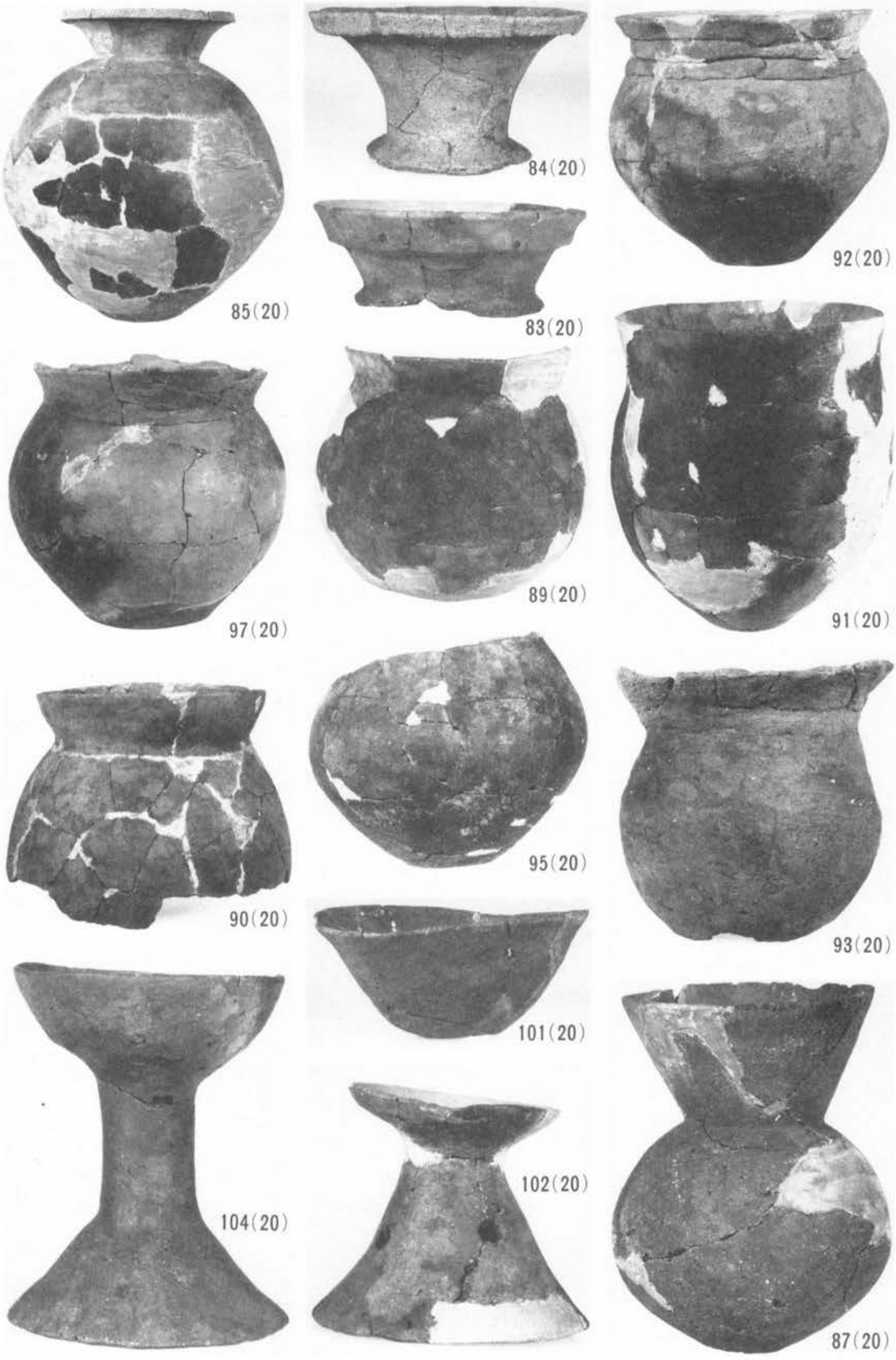
63(19)

69(19)

64(19)

80(19)

住居址出土土器（19号住居址）



住居址出土土器（20号住居址）

110(22)

108(22)

112(22)

109(22)

113(22)

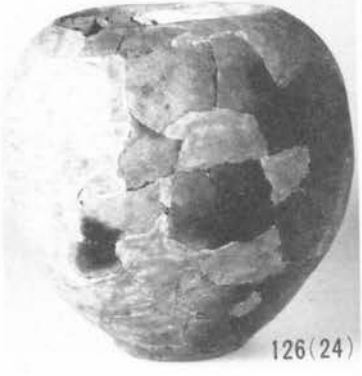
117(22)

123(23)

120(23)

(23)
191(33)

124(23)


126(24)

131(24)

128(24)

住居址出土土器（22・23・24・33号住居址）

142(28)

143(28)

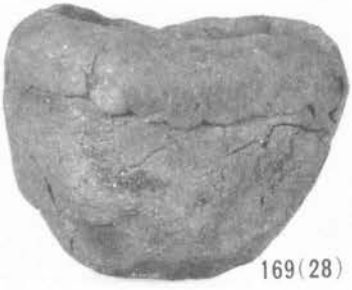
147(28)

145(28)

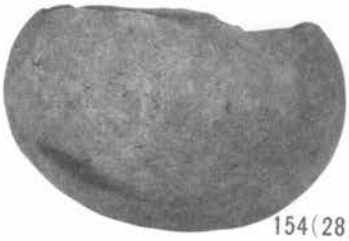
162(28)

150(28)

163(28)


169(28)

138(26)


154(28)

151(28)

139(26)

156(28)

152(28)

170(28)

住居址出土土器（26・28号住居址）

159(28)

158(28)

161(28)

174(30)

83(20)

172(30)

185(30)

180(30)

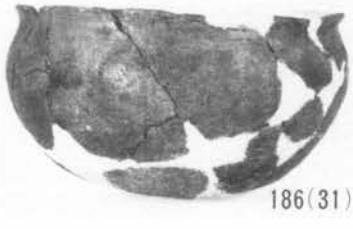
177(30)

179(30)

178(30)

184(30)

182(30)


186(31)

住居址出土土器（20・28・30・31号住居址）

188(33)

187(33)

190(33)

192(33)

189(33)

198(35)

201(35)

194(35)

196(35)

200(35)

197(35)

199(35)

193(35)

195(35)

204(36)

住居址出土土器（33・35・36号住居址）

234(45)

232(45)

231(45)

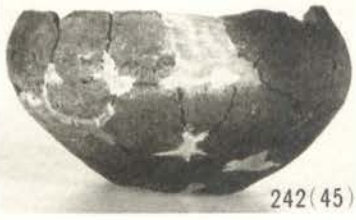
236(45)

237(45)

240(45)

244(45)

241(45)


242(45)

245(45)

251(49)

249(45)

250(45)

248(45)

246(45)

252(49)

247(45)

243(45)

住居址出土土器（45・49号住居址）

211(37)

213(37)

216(37)

217(37)

214(37)

221(37)

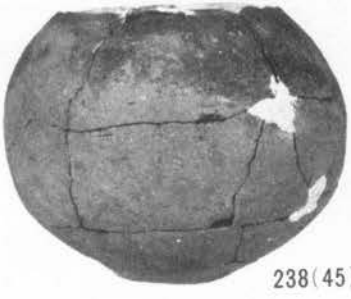
219(37)

—(37)

224(44)

226(44)

225(44)


238(45)

233(45)

235(45)

238(45)

住居址出土土器（37・44・45号住居址）

253(50)

254(50)

257(51)

273(60)

281(62)

292(64)

261(51)

262(51)

259(51)

266(51)

294(64)

261(51)

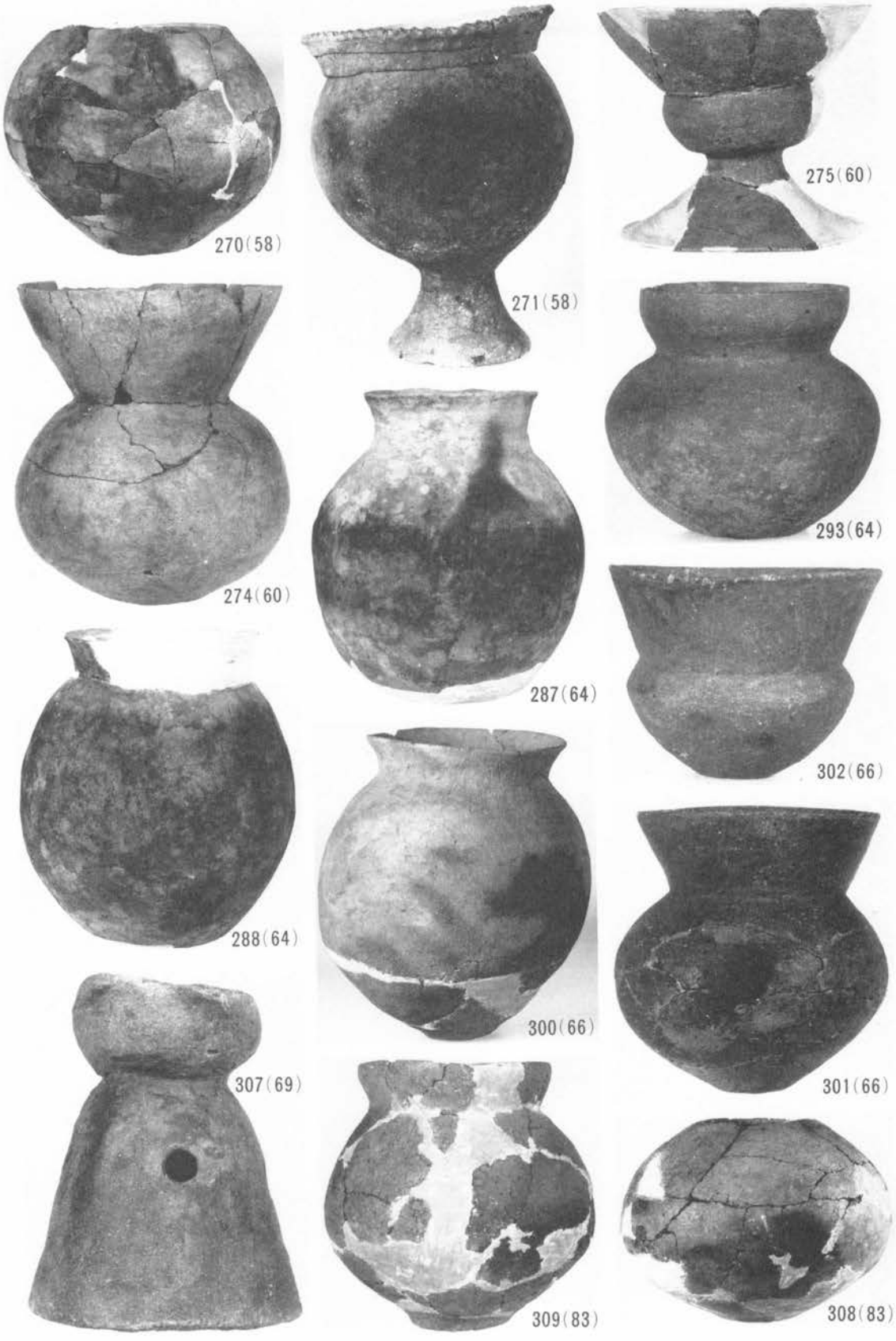
264(51)

265(51)

263(51)

256(51)

住居址出土土器（50・51・60・62・64号住居址）



住居址出土土器（58・60・64・66・69・83号住居址）

1（3）

2（3）

3（3）

4（3）

5（3）

5（3）

8（3）

7（3）

6（3）

16（2）

25（6）

18（2）

15（2）

21（4）

19（2）

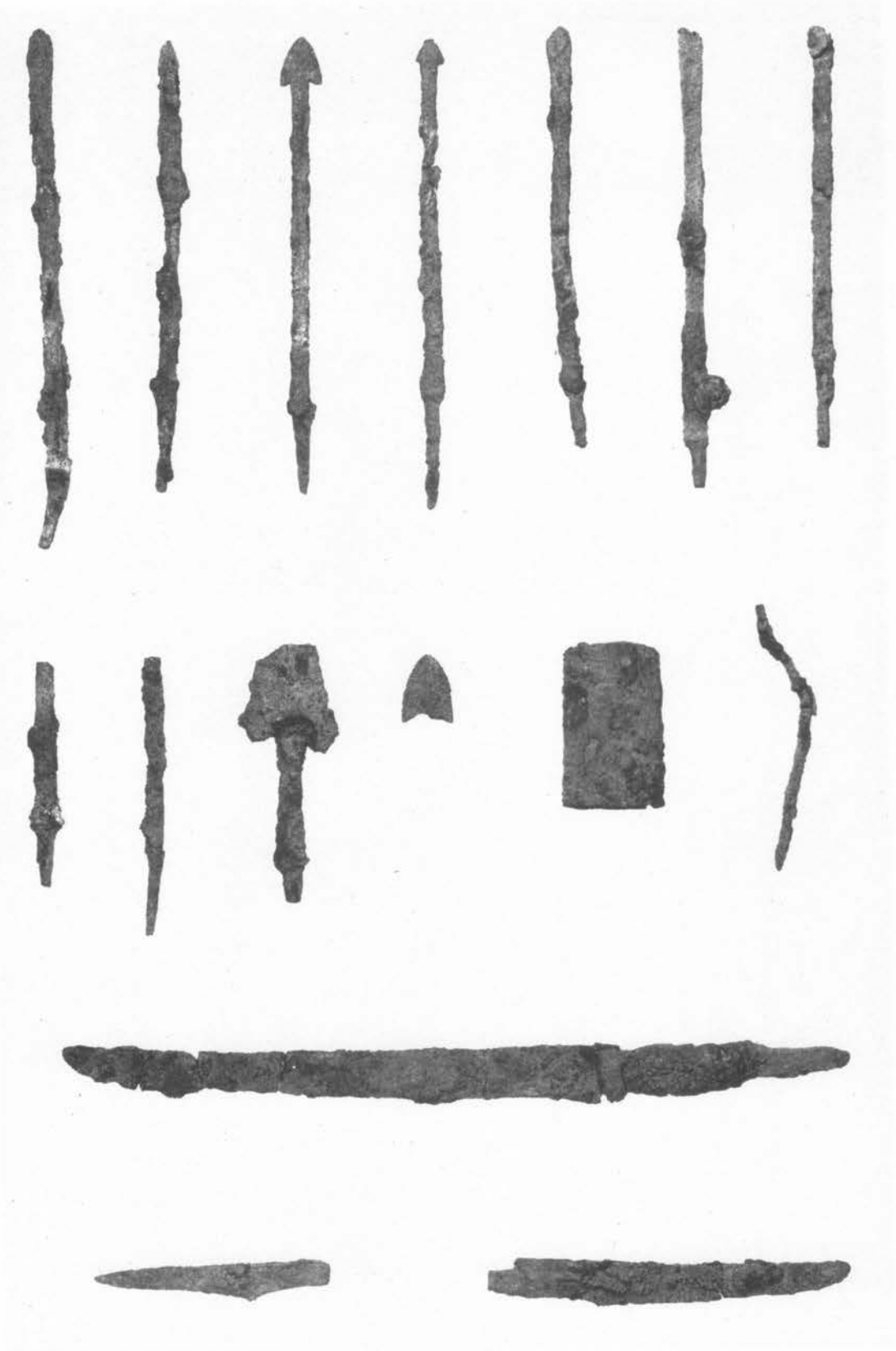
22（4）

古墳出土土器

1 号墳第 1 主体部出土遺物（上）、第 2 主体部出土遺物（下）

1 号墳第 3 主体部出土遺物

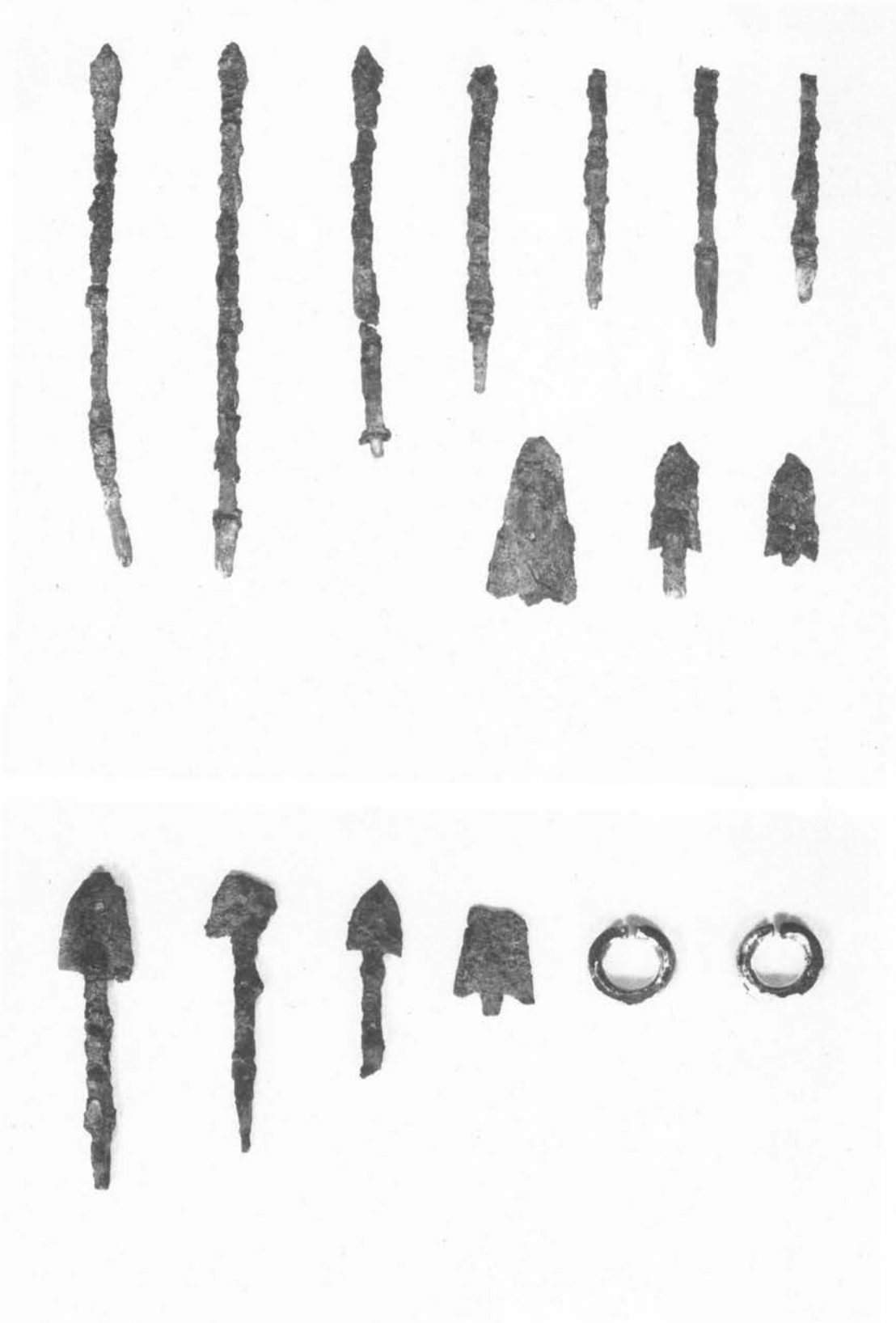
2 号墳第 1 主体部出土遺物



3 号墳第 1 主体部出土遺物

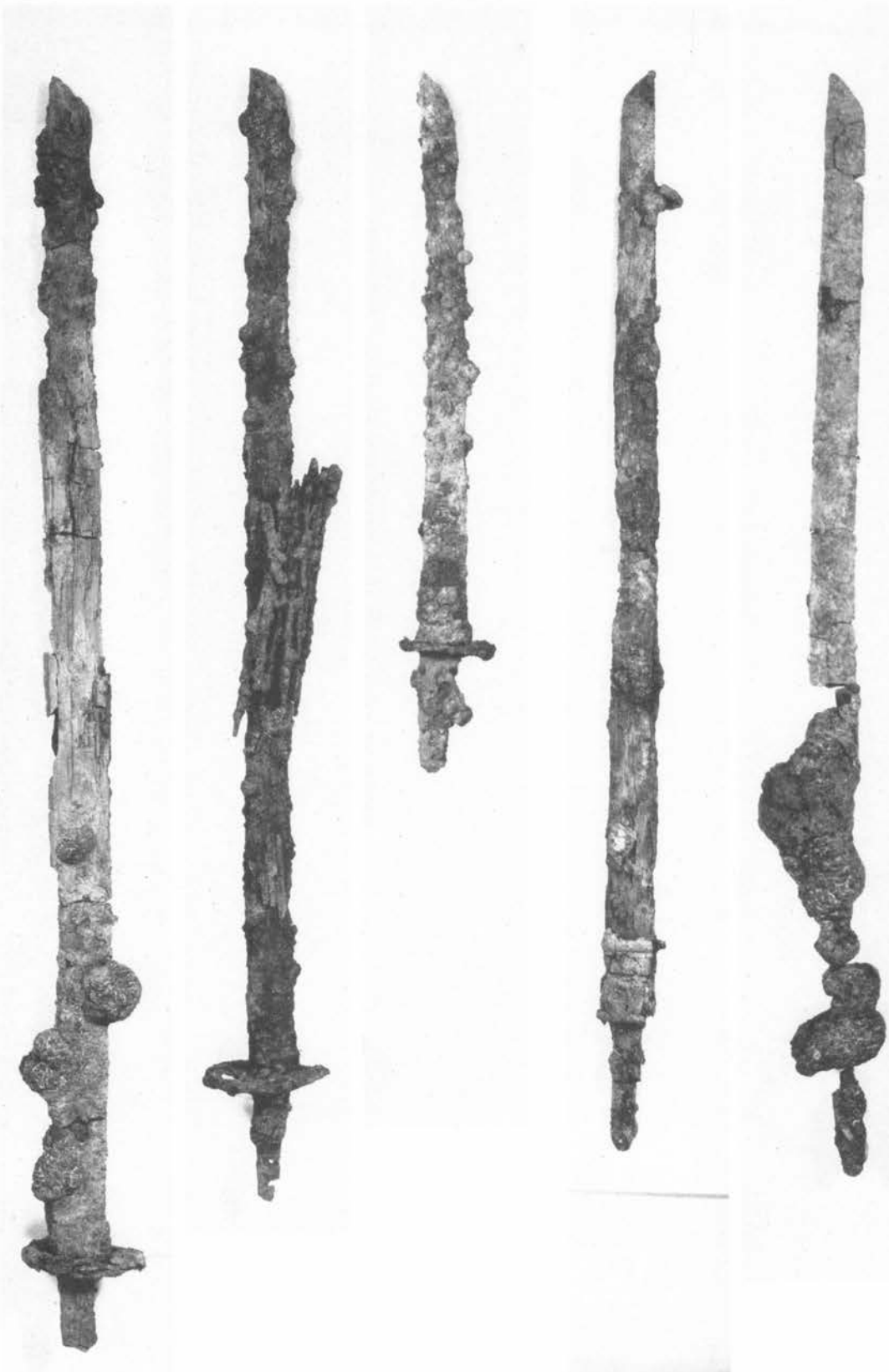
3 号墳周溝内出土遺物（上）、4 号墳第 2 ・第 3 主体部出土遺物（下）

4 号墳第 1 主体部出土遺物



4 号墳第 1 主体部出土遺物（上）、7 号墳第 1 主体部出土遺物（下）

7号墳第1主体部出土遺物



1号墳主体部出土直刀（左）（左より第2、第3、第1主体部）、3号墳第1主体部出土直刀（右）

4号墳主体部出土直刀(左)(左より第1、第2、第3主体部)、7号墳第1主体部出土直刀(右)

付図　南二重堀遺跡全測図

昭和58年３月25日　印刷
昭和58年３月31日　発行

千葉東南部ニュータウン　12
－ 南二重堀遺跡 －

発行　住宅・都市整備公団　首都圏都市開発本部
東京都千代田区九段北１－14－６
財団法人　千葉県文化財センター
千葉県千葉市亥鼻１－３－13
ＴＥＬ　0472(25)6478
印刷　株式会社　太陽堂印刷所
千葉県千葉市末広１－４－27
ＴＥＬ　0472(22)1121㈹

千葉東南部ニュータウン12　正誤表

頁	行	誤	正
4	5	対峠する	対峙する
11	17	第8図	第7図
13	1	本址	10号住居址
15	1	18号住居址（第18図3）	18号住居址（第10図）（第18図3）
17	第11図	$P_2 \rightarrow P_3$, $P_3 \rightarrow P_2$	
58	第43図	5，褐色土（炭化粒，焼土粒混入）	トル
69	23・24	坩で…及ぶ。	坩となろう。
71	25	他には	他は
81	15	鉢	埦
82	26	深57	深さ57
84	4	～67 cm	×67 cm
85	12	主軸方向位	主軸方位
86	第60図	$P_5 \rightarrow P_6$, $P_6 \rightarrow P_5$	
89	13	鉢形土器	埦形土器
〃	24	211は	221は
92	第66図	$P_5 \rightarrow P_6$, $P_6 \rightarrow P_5$	
93	7	P_1	P_4
93	11	小形鉢形土器	埦形土器
94	10	鉢	埦
99	29	床面の	底面の
114	第80図	$P_1 \rightarrow P_2$, $P_2 \rightarrow P_1$, $P_3 \rightarrow P_4$, $P_4 \rightarrow P_3$	
117	第83図	$P_1 \rightarrow P_2$, $P_2 \rightarrow P_1$, $P_3 \rightarrow P_4$, $P_4 \rightarrow P_3$	
158	13	量的にも少ない。	量的には多い。
175	33	9は	19は
〃	〃	8は	20は
176	1	9の	19の
184	19	力子の	直力の
204	30・31	半載	半截
209	28	⅔程を	⅔程
224	19	8基の	8基の古墳の